仏教経典成立史論

望月信亨著

法蔵館

序

佛敎の經典は大小乘を簡ばず、すべて佛陀說法の實錄であつて、卽ち佛滅直後に摩訶迦葉、阿難等の諸大弟子に依つて結集されたものと傳へ、古來之を至上權威として尊重頂戴して來たのである。然るに小乘聲聞の徒が早い時代から大乘經典を佛陀の直說に非ずとなし、之を排擊したので、爲に大乘敎徒との間に激越なる應酬の行はれたことは隱れもない事實である。支那に於ては此種の軋轢は起らず、諸家皆敎判を主唱し、佛陀四十餘年の說法を五時等に區分して大小乘經典を之に類攝し、我國に於ても亦此の說を繼承し、あらゆる經典を悉く佛說として信奉したのであるが、江戶時代に至つて一儒は敎判の說から示唆を得て、新たに大乘非佛說論を唱道し、般若、法華、華嚴等の諸大乘經は、漸次時代を逐うて加上せられたものとしたので、敎界に一大波紋を生じ、佛敎徒との間に往復論難が行はれ、一時騷然たるものがあつたのである。ついで明治時代に及んで、一般史學の勃興と共に佛敎史硏究の必要も叫ばれ、徐々にその步が進められるに隨つて、端なくも大乘經典成立の問題に逢著し、遂に佛敎史上最も重大なる案件としてそれが取扱は

れることになつた。最初は一般に本問題に觸れることを忌み、之に對して關心を寄することすら、時には異端を以て目せられたものであるが、然るに研究が進むと共に獨り大乘經典のみでなく、所謂小乘阿含等も一時に結集されたものでないことが確められるやうになり、玆にすべての經典に對する從來の見方が根本的に更正されねばならぬことになつたのである。

予も亦夙に本問題に就いては深き關心を持ち、竊かに意をその研究を潜めたのであるが、そは元と無量壽經に數本の異譯があり、各譯出沒異同洵に多く、特に彌陀本願の數及びその內容が各皆同一でないのを見て疑を生じたことに發端するのである。ついで又法華、涅槃、般若、華嚴等の諸大乘經を讀み、前後譯本の間に各亦章品等の不同があるのみならず、その所說の敎旨も多岐多樣に亙り、中には互に相乖反するものもあるのを見、佛陀の說法そのまゝの筆錄とすれば、斯かる事實は到底解釋し得らるべきでないことを思ひ、これは滅後に輩出した諸大論師が己の悟解せし所を佛說の形式を以て記述し、後又之に對して更に諸論師が改訂補修を加へた爲に外ならぬことを想察するに至つたのである。斯くて眞の佛敎史を編成せんとするには、經典成立の史實を詳かにし、同時に亦その內容を檢討して敎理發達の徑路を明かにせなければならぬことを痛感し、爾來その研究を志としたわけである。

偶ま明治三十年頃、大乘起信論を講ずるの傍ら、その註釋書たる釋摩訶衍論を讀み、その書が龍樹に假托せる僞論なることを覺え、かゝる明白なる僞論が藏經中に編入され、又空海等に依つてそれが重用せられたのを見て、古來の學者は多く經論の眞僞に關して意を留めなかつたことを遺憾とし、當時一文を草して之を誌上に發表したことがあつた。その後起信論も亦龍樹已前の馬鳴の作に非ざるべきことを疑ふに至り、ついで又仁王般若經、梵網經、菩薩瓔珞本業經、灌頂經等の中に支那思想が多分に現はれてゐるのを見、それ等の諸經に就いても檢討を始め、支那關係の史料は印度に比して豐富であり、且つ涉獵し易きまゝに、予の研究は一時支那撰述の僞經僞論問題に移行したのである。大正六七年の交に至り、起信論支那撰述論が學界の大問題となり、諸學者の間にその是非が盛んに討議せらるゝに及んで、予は更に本問題について幾多の研究を試み、同十一年それ等の論稿を取り纒め、兼ねて亦支那撰述の觀點から講解せし本論の講述をも併せ、「大乘起信論之研究」と題して之を刊行した。斯くて當時は支那撰述の疑僞經論を專ら檢討したが、後亦印度に於ける經典成立の研究を繼續し、昭和五年「淨土敎の起原及び發達」を印行するに當り、その第一編を經典論となし、主として大乘經典編纂の行はれたる地域、幷にその年代及び編者等に就いて之を概論し、特に彌陀淨土の經典に關しては、比較的詳細にその成立及び先後

等を考證し、又支那撰述の疑僞經論に關する論文も合せてその中に收載したのである。その後予は佛敎大辭典の編纂に沒頭し、殆んど他を顧みる暇もなかつたのであるが、近時少閑を得たので、更に大般涅槃經、無量壽莊嚴經、觀普賢經、幷に四十二章經、千臂千鉢曼殊室利經、菩提心論等に就いて研究を加へ、又起信論問題に關しても別に檢討を試み、大に前論を補强するに足るものあるを覺え、仍て今亦此等の論稿を取り纏め、且つ彼の既刊の經典論を整理按排し、一括して「佛敎經典成立史論」と題し、之を予の經典研究の終結として印刷に附することゝしたのである。

　蓋し經典は佛敎の至上權威として古來尊重頂戴されて來たのであるが、然るに今その多くが佛陀說法の實錄でなく、後世諸大論師によつて隨時に編纂されたものとすれば、至上權威の失墜と共に、その敎說に對する信念は動搖し、好ましからざる結果を生ずることにもなるのである。これは佛敎として悲むべき事柄であるけれど、實際の事實がそれであつたとすれば、亦如何ともし難い所である。さりながら經典中には佛陀の直說そのまゝを傳へたものが勿論少くない。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三個の命題の如きは、古くから三法印と稱せられ、佛陀の親しく敎示せられたものであることは疑を容れぬ。佛陀は實踐躬行を主とし、多く理論を用ひられなかつた

やうであるけれど、その敎示はいづれも含蓄に富み、その進止はすべて典型的であつて、所謂之を仰げば彌ゝ高く、之を鑽れば彌ゝ堅きものがあつたのである。隨つて在世中にも行はれたことであらうが、滅後に至つては特にその敎示を翫味して種種に悟解し、その芳躅を欽仰して様様に讃揚したことは事實であつて、彼の十八部等が夙に分派したのも、全く此の所由に基くものと認められる。維摩經には一音異解の説を傳へてゐるが、これは必ずしも在世諸弟子の同聽異聞を意味するのでなく、滅後に於ける大小二乘等の分派が、皆佛陀の説法に對する悟解の不同に由來することを言ひあらはしたものと見なければならぬ。又經典がすべて佛説の形式に記述してあるのも、一往異樣に感ぜられる所であるけれど、これは最初その敎旨を權威附けんが爲に事情止むを得ず取られた形式であるのを、その後も襲用したのであらう。或は般舟三昧等に入つて見佛聞法し、それをそのまゝ記述したことに起因するのかも知れぬ。法華は無量義處三昧に入つて説き、華嚴は海印定中の所説と稱せられ、その敎主は所謂神通自在の報身佛であり、聽衆は多く超人的大菩薩であるのを見ると、これ等は皆その敎説を以て釋迦應身の説法とせず、即ち三昧定中に於ける報佛の開示として記述するの意を顯はしたものと解し得られるからである。兎に角、大乘の敎旨が阿含等に比して頗る幽玄であるのは、滅後の諸大論師が深觀に入つて佛陀の敎示を思索し、之

を深解したことに基くものと見るべきである。涅槃經には五味相生の譬喩を擧げ、乳より酪を出じ、乃至熟酥より醍醐を出すと言つてゐるが、これは阿含の敎旨が次第に煉成せられて、遂に如來常住悉有佛性の醍醐味になつたことを明かにしたのである。要するに大乘の敎旨なるものは佛陀の眞精神を把握し、佛陀說法の眞髓を發揮したものと認むべきであつて、功を本に歸すれば、之を佛說と稱するも敢て不可なることはない。龍樹、無著等の諸大論師が、般若、深密等の諸大乘經を佛說として信受したのも、おそらく此の事由があるからであり、又世親が毘婆沙の敎權を批判し、理長を宗としたのも、眞理を探ぐることをその志としたからである。佛敎の史的研究の建前からすれば、印度に於ける經典成立の問題は勿論、支那及び西域等に於ける疑僞經論の由來に就いても大に檢討を試み、その史實を明かにすべきは固より言を俟たぬが、しかしそれは單に編纂等の形式に關する考證に止まるべきでなく、その中に現はれたる人生觀宇宙觀の何物たるかを考察し、而してそれを佛陀敎說の究極の歸趣、若しくは開展として仰信し、以て自ら眞諦第一義を體得することをその要諦とせなければならぬ。世親が理長を宗としたのは、佛敎の敎旨は不磨の眞理なることを確認したゝめであるから、吾等も亦宜しく眞理の結晶を如來の法寶として信受し、之を尊重頂戴すべきである。況んや禪家に於て不立文字を唱道し、法然が一文不知を以て

淨土往生の對機としたのは、言詮名字に囚はれて、法寶の眞精神を喪失するものゝ多きを痛感した結果であつて、吾等の取つて以て誡とすべき所である。

本書の編纂に關しては金山正好君の助力を藉ること多く、又香月乘光、服部英淳、千賀眞順、藤堂恭俊君等は校正及び索引等を擔任せられた。併せて謝意を表す。

昭和十八年九月

佛教文化研究所に於て　望　月　信　亨　識

佛教經典成立史論

目次

前編　大乘經典の成立に關する研究

第一章　緒論

佛教の聖典として今日傳はつてゐるものは非常に多い。その中には梵語 Sanskrit を以て書かれたものもあり、巴利語 Pali を以て書かれたものもあり、漢語、西藏語、蒙古語、滿洲語等を以て書かれたものもあり、近時は亦龜茲 Kucha, 于闐 Khotan, 栗特 Sugd, 回鶻 Uigur 等の所謂胡語を以て書かれた斷片的經典も發見されつゝあるのである。就中、梵語を以て書かれたものは、十九世紀の初め已來、主として尼波羅 Nepal, 又は西藏 Tibet 等に於て發見されたもので、其數も決して少くない。その中には八千偈般若、法華經、普賢行願品、金光明經、無量壽經、楞伽經、悲華經、佛所行讃等の如き、漢譯大藏經中に譯本の存するものもあるが、安慧 Sthitamati の二十頌釋、三十頌釋、稱友 Yaśomitra の倶舍釋、月稱 Candrakīrti の中觀頌釋、訶梨跋陀羅 Haribhadra の八千頌般若釋等の如き、未だ漢譯されなかつたものもある。巴利語を以て書かれたものは、錫蘭を中心とし、緬甸、泰、柬埔寨等の諸國に於て現に奉持されつゝある聖典であつて、卽ち律 Vinaya,

經 Sutta, 論 Abhidhamma の三藏に分類され、更に律藏の中に於て修多毘崩伽 Sutta-Vibhaṅga, 犍度 Khandhaka, 波利婆羅 Parivāra の三種の別を立て、經藏の中に於て長部、中部、雜部、增一部、及び小部の五部を分ち、論藏の中には、法僧伽 Dhamma-saṅgaṇi, 毘崩伽 Vibhaṅga, 乃至迦他跋偸 Kathā-vatthu 等の七種があり、又この三藏の各註釋も含まれてゐる。此等は所謂小乘三藏であつて、その中には大乘の經論は收めてない。西藏語の聖典は主として梵本より譯出し、又漢譯より重譯したものも少くない。全藏を甘珠爾 Bkah-ḥgyur, 丹珠爾 Bstan-ḥgyur の二大部に分ち、前者を佛部、後者を祖師部と名ける。佛部は因乘般若部、果乘祕密部の二種に分類され、般若部中には戒律、般若、華嚴、寶積、雜經、及び涅槃の諸經、祕密部中には無上瑜伽等の諸經が藏されてある。祖師部は印度及び西藏に於て撰述した諸書を含むもので、その中には祕密供養法、注釋、記傳、讚頌等が收めてある。蒙古及び滿洲藏は、西藏藏經より重譯したものであつて、共に喇嘛教の聖典として尊重されつゝあるのである。

漢譯藏經は支那後漢已來元代に至る凡そ一千餘年間に支那に傳譯せられた聖典を指すので、その數は重單譯合して無慮一千六百餘部、六千數十卷の多きに上るのである。此等のものは主として梵語より譯されたやうであるが、然し中には胡語又は巴利語等から譯されたものもあり、量に

於ても、質に於ても、現在諸國語の佛敎聖典中、最も完備せるものと稱せられてゐるのである。

蓋し現存の漢譯大藏經は唐開元十八年(西紀七三〇)智昇が撰した開元入藏錄に基いて編成されたのである。此の目錄中には漢譯聖敎を大乘經律論、小乘經律論、聖賢集傳の三大部門に分類し、大乘經藏中に於て先づ大乘經重單合譯として、般若部、寶積部、大集部、華嚴部及び涅槃部の經合計四百三十二部を擧げ、次に五大部外諸重譯經として法華等の重譯經二百七十三部、次に大乘經單譯として大法炬陀羅尼經已下一百三十一部を列ねてゐる。大乘律藏中には別に分類を立てず、たゞ菩薩地持經已下二十六部の經を擧げ、大乘論藏には釋經論、集義論の二種を分ち、大智度論已下二十部を釋經論、瑜伽師地論已下七十六部を集義論としてゐる。又小乘三藏中、經藏は之を小乘經重單合譯及び單譯の二種に區別し、四阿含、及びその別譯一百五十三部を重單合譯、正法念處經已下八十七部を單譯とし、又律藏には摩訶僧祇律已下五十四部、論藏には阿毘曇八犍度論已下三十六部を收めてゐる。次に聖賢集傳は之を梵本翻譯及び支那撰集の二種となし、梵本翻譯として佛所行讚已下六十八部、支那撰集として釋迦譜已下四十部を入藏してゐる。これで合計一千七十六部五千四十八卷になるのである。貞元釋敎目錄、幷に宋元明三藏及び高麗藏の分類は皆之に依つたのであるが、但だ此等の諸藏には、別に續入藏を附して開元已後の譯經を漸次追增し、又

支那撰集中に更に數多の著述を加へた點が異なるのみである。大日本縮冊大藏經の編成は明智旭の閱藏知津に依つたもので、上の開元錄の分類とは全く異なつてゐる。即ち全藏を經藏、律藏、論藏、祕密藏、雜藏の五大部門に類別し、更に經律論三藏に就いて大小二乘の別を立て、又雜藏の中に印度撰述、支那撰述、日本撰述の三種を分別してゐる。今一一に就いて述べて見ると、經藏中、大乘經は之を華嚴部、方等部、般若部、法華部、涅槃部の五部に分類し、華嚴經已下二十八部を華嚴部、大寶積經已下三百六十三部を方等部、大般若經已下二十九部を般若部、無量義經已下十四部を法華部、大般涅槃經已下十六部を涅槃部となし、合計四百五十一部二千二百九十一卷を收めてゐる。この分類は天台五時の敎判に依つたもので、開元已來の五大部幷に重單譯等の別を廢したのは新しい試みといふべきである。小乘經には別に分類を立てず、增一阿含已下三百二十部を收めてゐる。次に律藏中、大乘律として梵網經已下三十部、小乘律として四分律已下七十一部を擧げ、次に論藏中、大乘宗經論として瑜伽師地論已下九十二部、同釋經論として十住毘婆沙論已下二十五部、小乘論として立世阿毘曇論已下四十六部を收めてゐる。次に祕密部は之を錄內錄外、及び知津所出の三種に分ち、受菩提心戒儀已下一百八十七部を錄內、八字陀羅尼儀軌已下一百三十三部を錄外、大佛頂首楞嚴經已下二百五十部を知津所出としてゐる。これは經藏中

に於て顯密二敎を類別したので、即ち空海已來の主張を採用したのである。同時に亦八家請來の祕密經軌を悉く網羅し入藏したのは、藏經編成史上、一新紀元を作つたものと謂はなければならぬ。次に雜藏中、印度撰述として四十二章經已下六十二部を擧げ、支那撰述中に於て經疏部、論疏部、懺悔部、諸宗部、傳記部、纂集部、護敎部、目錄部、音義部、序歌詩讃部の十部を立て、華嚴經疏已下すべて一百九十七部を收め、又日本撰述中には、天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、黃檗、眞宗、日蓮、時宗及び融通念佛の十宗の祖書凡そ二十八部を入藏してゐる。總計一千九百八十六部、八千五百三十四卷となるので、開元入藏錄に對比して見ると、七百四十部、三千四百八十六卷の增加を示すのである。

斯樣に佛敎の聖典は實に浩瀚なもので、全く汗牛充棟も啻ならぬのである。今その中の注釋并に論部等は後世の人の作であるから之を除き、又同本異譯はすべて一本として數へて見ても尙その數は數百千卷の多きに上るのである。蓋し此等多數の經及び律は、古來悉く之を敎祖釋迦牟尼の直說に係るものとし、佛陀の滅後幾くもなく阿難等の諸大弟子は之を結集して以て後代に傳へたものと信ぜられて來たのであるが、しかし如何に卓越した大聖世尊にしても、その短き生涯中に斯かる多數の聖典を一一宣說し得べきものでもなからう。況やそれ等の經律中には後世の思想

學說、又は出來事等を記載するものも多く、且つその敎旨が多種多樣に亙り、矛盾衝突も少くないのであるから、到底之を一時に一人の口から演出したとは考へることが出來ぬ。いづれの宗敎、又は學術も時代と共に進步發達を遂げてゐるのを見ると、佛敎の敎旨も佛陀の滅後に於て種種に發展し、之を記錄せる聖典も時を逐うて漸次に加增したものなることを認めなければならぬ。各經の初にいづれも如是我聞の語を置き、又說法の場處及び聽聞の弟子等を列ねて、悉く之を佛說の形式に形造つてゐるけれど、果してその內の幾許が事實であるか、大に惑ひなきを得ないのである。經典に就いて大小二乘の別を立てゝ來たのは早い時代のことであるが、その所謂小乘經典と稱せられる諸部の阿含を以て大乘經典たる般若、法華等に比較して見ると、その體裁は非常に異なつてゐる。卽ち阿含は概して實錄風で、且つ斷片的小品が多いのに反し、大乘は論議的又は衍義的で、その部帙も率ね廣汎であり、且つ文學的色彩が濃厚である。又阿含はその敎旨が一貫せるに反し、大乘は多岐多端にして、中には氷炭相容れないものもある。又阿含には大乘の敎旨に關して何等言及する所がないのに、大乘經典中には阿含が豫想され、且つ阿含の受持者たる聲聞の人に對して指斥彈呵を加へてゐるものが多い。その他、いづれの點から見ても、阿含は大體に於て原始的であり、大乘經典と稱せられるものは阿含の後を承けたものと認められるのである。

とはいへ阿含といへども佛陀の說法そのまゝの實錄ではなく、佛滅後に至つて種種に類從編纂されたもので、その中には後代の加筆に係るものも少くないのであり、又大乘經典は阿含の後に起つたといつても皆佛說に基いたもので、卽ち佛說の法義を深解深觀してその眞諦第一義を發揮し、又佛陀の卓絕せる人格と衆生濟度の大悲行を顯揚して之を諸人にも學ばしめ、以て從來の消極的小乘佛敎を革新せんと企てたのであるから、むしろこれこそ眞の佛敎と稱せられねばならぬ所のものである。世人動もすれば、大乘經典は後代の編纂に係るとして之を輕視せんとするのは甚だ不可といはなければならぬ。

大乘經典の編纂は何年代頃より起つたものかといふと、おそらく佛滅四五百年、卽ち西曆紀元前に在るであらうと思はれる。蓋し佛滅四五百年頃には多數の小乘部派が旣に分裂して、佛敎の敎義は可なり發展したのであるけれど、尙ほ一般に阿含を以て唯一の證權となし、之を尊重頂戴したのである。然るに此時に當り大乘經典が出現して六波羅蜜等の新說を唱道し、その敎旨が多く阿含に異なる所から、阿含の信奉者たる小乘敎徒は深甚の驚きと不安とを感じ、之を惡魔の說として誹謗した。卽ち佛敎の革新運動に對して保守派が一齊に反抗したのである。彼の後漢支讖の譯した道行般若經第六に、弊魔ありて菩薩の所に到つてこの詭詏の言を作す魔この經を作る。

云何ぞ中に於て作佛を得んと欲するや。是れ佛の所説に非ずと。菩薩は此の魔語を聞くも心動轉せずといひ、又大品般若經第十六に、惡魔化して比丘となり、服を被つて菩薩の所に來至し、語りて言はく、汝先きに六波羅蜜を淨修すべしと聞きたらんも、この事は汝疾く悔捨せよ。若し汝疾く捨てば我れ當に汝に眞の佛法を語るべし。汝が先きに聞く所は皆佛法に非ず、佛敎に非ず、皆是れ文飾合集の作なり。我が所説は是れ眞の佛法なりと。若し菩薩この説を聞きて心驚いて疑悔せば、當に知るべし、この菩薩は未だ諸佛の授記を得ず、未だ阿惟越致性の中に定住せずといひ、又般舟三昧經に、この三昧を聞いて肯て受持せざる者はこれを無知となす。乃至、其の人この三昧を持する者の所より去り、兩兩三三相與に語つて言ふ、是れ何等の説ぞ、何に從つてこの語を得たる。自ら合會してこの經を作れるのみ、佛の所説には非ずといひ、又大般涅槃經第七に、佛般涅槃してより七百歲の後に魔波旬あり、正法を沮壞せんとして當にこの言をなすべし、汝の有する所の律は是れ魔の所説なり、我等の經律は是れ佛の所制なり。如來は先きに九部の法印を説く、是の如きの九印は我が經律を印す。初より方等經典の一句一字だも如來の所説あるを聞かず。若しそれあらば當に知るべし、必定して調達の所作なることを。調達は惡人にして、善法を滅せんと欲して方等經を造る。我等は是の如き等の經を信せず、是れ魔の所説なりと言ふといひ、

又大法鼓經卷下に、彼れ隨つて學する時、此の如來藏如來常住の究竟の深經を聞き、心に疑惑を生じて是の如き說を作す、此れ文筆魔の所說ならんといひ、又大寶積經第九十二發勝志樂會に、魔波旬は誑惑の爲の故に比丘の像を作し、その所に來到して是の如きの言を作す、この諸經典は皆是れ世俗の文詞を善くする者の製造する所にして、如來の宣說する所に非ずといひ、又同第一百十四寶梁聚會にも、惡比丘ありて深法を解せず、之を誹謗して佛說に非ず、是れ論師の作、或は魔の所說なりと說くといつてゐるが、此等は皆阿含の受持者たる小乘敎徒が新興の大乘經典に對する批判の口吻を擧げたのであらうと思はれる。若し然りとすれば大乘經典は從來の敎徒から佛陀の眞說でないとして、大に反對されたことを知るべきである。之に對し大乘敎徒は一面に自己の部黨に向つて斯かる惡宣傳に動かされず、自ら阿惟越致 Avinivartanīya に安住して、その信から退轉してはならぬと警告し、他面には從來の小乘敎徒に對して、斯かる妄說を宣傳するのは誹謗正法の大罪であつて、卽ち墮獄を免れることが出來ないとし、大に威嚇的態度を取つたやうである。道行般若經第三に、若し衆中に於て般若波羅蜜を聞くも棄捨し去り、爲に菩薩摩訶薩の法を敬せず、乃至復た他人を止めて之を說かしめず。般若波羅蜜を止めば薩芸若 Sarvajña を止むとなす、薩芸若を止めば過去當來今現在の佛を止むとなす。この斷法の罪をもつて死して大泥

穽の中に入るといひ、法華經第二に若し人此經を信せず、毀謗せば則ち一切世間の佛種を斷ず。乃至その人命終して阿鼻地獄に入るといひ、大般涅槃經第十六に、菩薩は護法の爲の故に大乘を謗する者を鞭撻し、或はその命を奪ふも罪なし。譬へば地を掘り草を刈り樹を斫り、死尸を斬截するも罪なきが如しといひ、入楞伽經第二には一闡提に二種あり、一には一切の善根を焚燒す、二には一切の衆生を憐愍して盡一切衆生界の願を作す。一切の善根を焚燒すとは、菩薩藏を謗して彼は修多羅毗尼解脫の說に隨順せずといふ時、諸の善根を捨す。この故に涅槃を得ずといつてゐるのは、皆卽ち大乘敎徒が聲聞の人の攻擊に對して應酬した說と認められるのである。

大乘敎徒は此の如く聲聞の人に對して大に威嚇的態度を取つたと同時に、亦一音異解等の說をなして、大乘が眞の佛說たることを論證せんと試みたやうである。一音異解の說とは、維摩詰所說經卷上に「佛以一音演說法、衆生隨類各得解、皆謂世尊同其語、斯則神力不共法」の偈を揭げてゐるのをいふので、卽ち佛陀は唯だ一音を以て說法されると、衆生はその機類に隨つて各それを聞き込み、各自別別の領解を起すのだとするのである。蓋し一音說法の說は恐らく大衆部の主張で、元とは唯だ佛陀の神力不共の德をあらはさんとしたものであらうが、それを今維摩經に於て特に聽者に約して同聽異聞の義があることを明かして來たのは、之に依つて大乘が佛陀の

眞説たることを論證せんとするの意に出でたのである。卽ち佛陀は一音中に能く一切の法を演説されるのであるから、若し小乘聲聞の人がその説法を聽けば、佛陀はたゞ我が爲に我に適する小乘の敎義を説かれると聞き込み、若し大乘の菩薩がそれを聽けば、佛陀は亦我が爲に唯だ大乘の敎義を説かれると聞き込む。おなじ佛陀の説法であつても、聽者が異なる所から大小二乘の別が生じたのだといふのである。なる程これは一往道理のあることで、同じ説法を聞きながらも、或る者は皮相な聞き方をし、或る者は甚深の領解を生ずることも有勝のことではあるが、然し今の場合の如く、聲聞は常にそれを小乘として聞き、菩薩は常に大乘として解し、何時も懸け離れた、否な寧ろ反對の領解を生ずることは、あり得べきこととも思はれない。且つ又之を佛陀の神力不共の德とするのも、理想化された佛陀を豫想するからであつて、おそらく生身の釋迦牟尼のなし能ふ所ではなからう。龍樹も亦佛陀は大小二乘を併せ説いたものとなし、大智度論第一百に、摩訶迦葉は諸の比丘を將ゐて耆闍崛山中に在りて三藏を集め、又佛滅度の後に文殊尸利、彌勒の諸大菩薩は亦阿難を將ゐてこの摩訶衍を集むといひ、又摩訶衍は甚深にして信じ難く解し難く行じ難い。佛在世の時ですら諸の比丘は摩訶衍を聞くも信せず、解せざるが故に座より去つた。何に況や佛般涅槃の後に於てをやといつてゐる。これは佛陀が自ら大小二乘を併せ説かれたとするの

で、維摩經の同聽異聞とは聊か趣旨が異なるのである。又大智度論等には經の說人に多種の別があることを說いてゐるが、これも聲聞の人に對する一種の應酬と見ることが出來る。卽ち大智度論第二に佛法は但だ佛自らの說のみでなく、佛弟子の說もあり、仙人の說もあり、諸天の說もあり、化人の說もあるといひ、同第四十六に摩訶衍經の中には或は佛の說、或は化佛の說、或は大菩薩の說、或は聲聞の說、或は諸の得道せる天の說もあるといひ、又分別功德論第一に、雜藏は一人の說に非ず、或は佛の所說、或は弟子の說、或は諸天の讃頌等もありといひ、難提蜜多羅所說法住記にも、是の如き等の正法藏の中に於て、或は佛の說、或は菩薩の說、或は聲聞の說、或は諸仙の說、或は諸天の說、或は智者の說もあるといつてゐる。これ等は般若等の經中に佛自ら說かれた部分もあり、佛弟子又は諸天等の說いた部分もあることをいひあらはしたものと見ることも出來るが、然し亦獨立に化佛、又は大菩薩等が說いた經典のあることも認めたものといひ得るのである。

無著時代に至つて始めて大乘佛說の論證が公にされた。無著の大乘莊嚴經論第一に依ると、八因を擧げて大乘が眞の佛說なることを論證してゐる。八因とは一には不記、二には同行、三には不行、四には成就、五には體、六には非體、七には能治、八には文異である。初に不記とは、若し

大乘は佛說でなく、卽ち如來の滅後に或る者が佛陀の正法を破壞する目的を以て僞作したものならば、如來は斯かる大なる非法が將來に起るべきことを豫言さるべき筈である。然るに斯かる豫言がない限り大乘は決して後人の作でなく、卽ち佛說であらねばならぬ。二に同行とは、小乘大乘の二敎は古くより並べ行はれて、いづれが先き、いづれが後といふこともない。されば小乘のみを佛說となし、獨り大乘を非佛說に歸すべき理由を見出すことが出來ぬ。三に不行とは、大乘は甚深廣大の法門であつて外道等の忖度思量すべき所でない。故に彼種の經說中には曾て之を說かず、隨つて彼等の間に其法が行はれなかつたのであるが、それが爲に直に大乘を非佛說とすることは出來ない。否な却て彼等の間に行はれなかつたことに依つて其法が甚深であり、且つ佛說たることを反證し得る。四に成就とは、若し大乘は今の釋迦佛の說でなく、別に他に菩提を得たものがあつて、それを說いたとすれば、大乘佛說の理は却て極成する。何となれば他に菩提を得たものがあつたとすれば、その人は卽ち佛と名けられねばならぬ。若しもそれが佛と名けられるとすれば、卽ち大乘は自ら佛說たるの理が成立つからである。五に體とは、若し大乘は餘の菩提を得たものゝ說で、卽ちそのものには大乘の體があるとすれば、釋迦佛にも亦大乘の體がなくてはならぬ。何となれば大乘の體は唯だ卽ち一體であらねばならぬからである。六に非體とは、若

し釋迦佛に大乘の體がなかつたとすれば、聲聞乘にも亦體がないことになる。若しも聲聞乘は佛說であるから體があり、大乘は佛說でないから體がないとするなら、卽ち大過の失がある。何となれば若し大乘卽ち佛乘がなかつたならば、決定して成佛を得べきでない。隨つて成佛を得るものがなかつたならば、聲聞乘を說くものも亦無いことになるからである。故に釋迦佛にも大乘の體があり、同時に亦彼の大乘佛說の理も成立たなくてはならぬ。七に能治とは、大乘の法に依つて修行すれば、無分別智を得て能く諸の煩惱を破すことが出來る。斯かる效驗のある驚くべき法門は佛陀の直說でなくてはならぬ。八に文異とは、大乘は甚深の法門であるから文のまゝに義を取るべきでない。されば大乘經中、多少異とすべき說があつても、只だ文句に拘泥し、それによつて非佛說などと斷じてはならぬといふのである。惟ふに此の論證は無著の唱道にかゝり、當時の教界に於ては多分一般に之を是認したことであらうが、然し今日としては斯かる抽象的論議に滿足すべくもないのである。就中、第二の同行、第三の不行は上に擧げた龍樹の說とほゞ同義であつて、卽ち大乘は甚深の法門であるから、小乘の經論中に曾てその義を述べて居らぬけれど、この二乘は古くより並べ行はれて、決して先後はないといふのであるが、さりながら果して大小二乘が古くから並べ行はれて、その先後がないか否か。これは史實の問題で、輓近の研究はいづれ

も皆之を否認せんとしてゐる。又第六の非體は、若し大乘がなければ成佛するものがない、成佛するものがなければ聲聞乘を說くものもないことになるといふので、これは大に道理のあることとせなければならぬ。大智度論第一にも、佛は三藏の中に於て廣く種種の譬喩を引き、聲聞の爲に說法されたけれど、未だ菩薩道を說かぬ。中阿含本末經の中に彌勒の授記を說かれたが、未だ種種の菩薩行を說かぬ。今佛は彌勒等の爲に廣く諸の菩薩行を示さんと欲して此の摩訶般若經を說かれるのだといつてゐる。いかにも釋尊の如き成佛した佛陀がある已上は成佛の道も亦無くてはならぬ。成佛の道が卽ち大乘であるとすれば、大乘も亦釋尊に淵源することは明かとすべきである。さりながら單に此の理由があるからといつて、大乘經典を直に佛說と論斷し得べきものではない。第四の成就及び第五の體は、餘の菩提を得たものが大乘を說いたとするの說に答へたのであるが、これは反對論者としては餘程讓步した說で、前の魔波旬若しくは調達等を以て大乘經典の作者とするのとは餘程の徑庭がある。之に對し餘の菩提を得たものが、若しも大乘を說いたとすれば、其人は卽ち佛と名けられねばならぬ。故に大乘佛說の理は反つて極成するといふのであるが、これは釋尊の後に第二の佛陀があつたといふのではないけれど、その意味を推してゆくと、第二第三の佛陀があつて大乘經典を說いたとしても宜いわけになるやうである。第一の不記

幷に第七第八等の諸由は別に批判すべきほどの價値も認められない。

その他、無著の顯揚聖敎論第二十に十因を列ね、成唯識論第三に七因を出し、又無性の攝大乘論釋第三、及び成唯識論述記第四本に各一の量をかゝげてゐるけれど、それ等も皆抽象的論議で、毫も史實に言及して居らぬ。のみならずそれ等の論說は概して唯だ大乘の敎理が佛說たることを立證せんとするに止まるもので、たとひそれが立證されたとしても、それによつて今日傳つてゐる大乘經典の悉くが佛陀說法の實錄たることを證據立て得るわけでもないのである。宗敎も人文史上の一現象であつて、世態と共に變遷し發達すべきものとすれば、佛敎もその例に洩れず、小乘より大乘へ、又空敎より中道敎へと漸次發達し、それと同時に經典も亦逐次編纂せられて以て今日の大をなすに至つたものと認めなければならぬ。

第二章　經典編纂の地域及び編者

第一節　印度各地に於ける經典の編纂

大乘經典が佛陀說法の實錄でなく、時代を追うて漸次編纂されたものとすれば、ここに如何なる人々に依りて、又如何なる時代に、如何なる地域に於て、その編纂が行はれたものかの問題が當然起つて來る。然るに此等の問題に關しては文獻の徵すべきものが極めて乏しいので、到底滿足なる解答を提示することが出來ぬ。これは今日に於て止むを得ざることとせなければならぬ。

善見律毘婆沙第二には、阿育王の時、諸國に傳教師を派遣したことを記錄してゐるが、それに依ると、末闡提 Majjhantika を罽賓犍陀羅吒國 Kasmīra-Gandhāra に、摩訶提婆 Mahādeva を摩醯娑末陀羅國 Mahisakamaṇḍala に、勒棄多 Rakkhita を婆那婆私國 Vanavāsī に、曇無德 Dhammarakkhita を阿波蘭多迦國 Aparantaka に、摩訶曇無德 Mahādhammarakkhita を摩訶勒吒國 Mahāraṭṭha に、摩訶勒棄多 Mahārakkhita を臾那世界 Yonaka-loka に、末示摩 Majjhima を雪山邊國

Himavantapadesabhāga に、須那迦 Sonaka 及び鬱多羅 Uttara を金地國 Suvaṇṇabhūmi に、摩哂陀 Mahinda 等を師子國 Sīhaḷa に遣はしたとしてゐる。この中、罽賓犍陀羅吒は即ち迦濕彌羅及び健駄羅地方にして北方に屬し、摩醯娑末陀羅はゴーダーヴァリー Godāvarī 河南の地で、案達羅 Andhra 地方に當り、婆那婆私は印度河下流の東方、阿波蘭多迦はパンジャブ Panjab の西方、摩訶勒咤は孟買の東北、ゴーダーヴァリー河源であつて、南印度摩訶剌佗國 Mahāraṭṭha がそれであり、臾那世界はバクトリア Bactria, 雪山邊國は比馬剌耶山の中部地方、金地國は緬甸地方、師子國は錫蘭であるといはれるのであるから、當時印度國內は勿論、國外の邊地にも佛敎が傳道されたことを知るのである。就中、摩醯娑末陀羅即ち南印度大案達羅地方に派遣せられた摩訶提婆が異部宗輪論等に傳ふる大天であるとすれば、彼は大衆部の祖と稱せらるゝ人であるから、かの大案達羅地方は即ち大衆部の根據地となつたものと見なければならぬ。摩訶提婆は異部宗輪論等に三逆罪を犯し、五事の妄言を吐いた大惡見の人としてゐるけれど、分別功德論第一には、唯だ大天一人のみ是れ大士にして、その餘は皆小節なりと歎じてゐる。されば宗輪論等の記事は上座部の徒が宗我心を以て加へた誹謗といふべきである 案達羅國は阿育王の時摩揭陀國に服屬せしも、王の沒後獨立して北部及び中央印度を攻略し、更に西海岸を併合して大に國威を輝かし、且つ佛

敎を保護し、西暦一二世紀の頃に洞窟等を開鑿して僧侶に寄與したことが、ナーシク Nāsik 刻銘中に記載されてあるといはれてゐる。又大案達羅國の舊都と稱せられる馱那羯磔迦國 Dhanakaṭak に弗婆勢羅 Pūrvaśīlā（東山）、阿伐羅勢羅 Avaraśīlā（西山）の兩大伽藍があつたことは玄奘の傳ふる所であつて、これは大衆部の一派なる東山住部、西山住部の本山であつたのであらうとおもはれる。又アマラーヴチー Amarāvatī の大塔がその地方に建設されたことも近代の踏査によりて明かであり、龍樹が此地方を中心として大乘を光顯したことも有名な事實である。のみならず大唐西域記第十馱那羯磔迦國の條には、伽藍鱗次するも荒蕪已に甚し。存するもの二十餘所、僧徒千餘人、並に多く大衆部の法を習學すと記してゐる。之に依ると玄奘旅行の時に至るも尚ほ大衆部が盛んであつたことを知るのである。蓋し大衆部の敎義は進歩的で、頗る自由の思想に富み、その中には大乘に近接した說も少くない。若し大乘の敎義が佛陀の滅後に於て新たに勃興したものとすれば、彼の大衆部に負ふ所の甚だ多大であつたことが想定される。三論玄義には佛滅二百年中に至つて大衆部より又三部を出す。時に大衆部は摩訶提婆の移度によりて央崛多羅國に住す。此國は王舍城の北に在り。此部は華嚴、般若等の大乘經をとつて三藏中に雜へて之を說く。時人信ずるものあり、信せざるものありといつてゐるが、この說は眞諦の部執異論疏に依つたもので

あつて、印度已來の傳說たることは言を俟たぬ。但し央崛多羅の地點が判然せず、且つ佛滅二百年中に華嚴、般若等の諸大乘經が既に存したとするのは事實ともおもへぬけれど、斯かる說の傳へられてゐるのは、兎も角大乘の教義が大衆部と淺からざる關係を有することを語るものとすべきである。

道行般若經第四、大明度經第三等に依ると、般若波羅蜜は當に南天竺に在るべし、それに學し已りて南天竺より當に轉じて西天竺に至るべし、それに學し已りて當に西天竺より轉じて北天竺に至るべし。それに學者ありて當に之を學し、却後經法斷絕すべしと記してゐるが、これは般若が南印度に於て始めて編纂されたことを語るものではないかとおもはれる。富永仲基の出定後語には文殊の徒、般若を作るといつてゐる。蓋し頗るおもしろい示唆である。文殊師利 Mañjuśrī は道行般若經の初に既に彌勒と共に菩薩の代表として掲げられ、又內藏百寶經、阿闍世王經、文殊師利問菩薩署經、首楞嚴三昧經、維摩詰經、寶積三昧文殊師利菩薩問法身經、慧印三昧經、法華經、魔逆經、須眞天子經、文殊師利佛土嚴淨經、無極寶三昧經、如幻三昧經、放鉢經等の古大乘經にも皆文殊の活躍を叙し、その他、文殊般若經を始め、般若系統の諸經に彼がいつも登場するのを見ると、文殊と般若との間に緊密の關係のあつたことが察せられる。のみならず阿闍世王經卷

上に、文殊師利は是れ菩薩の父母なり、是れ則ち迦羅蜜たりといひ、伅眞陀羅所問寶如來三昧經卷下に、仁者は二の迦羅蜜を得たり、一は是れ佛、二は是れ文殊師利なりといひ、又阿闍世王經卷上に文殊師利は化して如來となり、衆會の中に在りて坐す。その形狀被服は釋迦文佛の如しともいひ、又大智度論第一に、慈氏、妙德菩薩等は出家の菩薩、觀世音菩薩等は他方佛土より來るといつて、妙德卽ち文殊師利を彌勒に同じく此土の菩薩となし、又同論第一百に佛滅度の後、文殊尸利、彌勒の諸大菩薩は阿難を將ゐてこの摩訶衍を集むともいつてゐる。之に依ると文殊は必ずしも理想の菩薩でなく、佛滅後に實に印度に出現して般若皆空の說を唱へ、第二の佛陀として一部の間に崇敬されたものとも見られるやうである。又文殊師利般涅槃經には、文殊は舍衞國多羅聚落梵德婆羅門の家に生れ、佛涅槃の後四百五十歲にして雪山に至り、五百の仙人の爲に十二部經を宣暢し、遂に本生地に歸りて涅槃したことを記してゐるが、これで見ると、彼れは佛滅四百五十年頃に印度に出現した實在の人とすべきである。但し文殊を舍衞國の人となし、且つ雪山に至つて說法したとするのは、今の般若南方編纂の想定に合しないやうであるけれど、首楞嚴三昧經卷下、法華經第四、文殊師利佛土嚴淨經卷下等に皆文殊の淨土を南方に在りとし、又舊華嚴經入法界品に、文殊自ら南方に漸遊して覺城の東に至り、更に善財童子に南方遊行を勸めたとい

ふのに依ると、文殊は特に南方に關係があつたことを見るべきである。ターラ・ナータ Tāranātha の印度佛敎史には大乘の起原に關し、マハーパドマ Mahāpadma 王と殆んど同時代より少し後れて、オディギシャ Oḍiviśa 國に旃陀羅羅克什達 Candrarakṣta なるものがあり、彼の家中に聖文殊師利は比丘の姿にて入り來り、大乘法の品類を敎へ、尙ほ經卷を創作せりといへる傳說を掲げてゐる。オディギシャは案達羅國であるから、これ亦文殊が南方案達羅地方に於て經典製作に關係したことを語るのである。

また大法鼓經卷下には、正法滅せんと欲するの餘八十年に一切世間樂見離車童子あり、南方文茶羅國（善見律の謂ゆる摩醯娑末陀羅 Mahisaka-maṇḍala, 卽ち大案達羅國ならん）大波利村善方便河の邊、迦耶梨姓中に生れ、俗を離れて出家し、四攝法を以て衆を攝し、此の深經を得て誦讀通利し、僧をして淸淨ならしめ、さきに受くる所の本不淨物を捨てしめんとして爲に大法鼓經を說き、第二に爲に大乘空經を說き、第三に爲に衆生界如來常住大法鼓經を說き、大法鼓を擊ち、大法螺を吹き、大法會を設け、大法幢を建て、弘誓の鎧を被つて百年の壽を盡くし、大神力を現じて般涅槃を示したといひ、又同卷上にはその本生を說き、燈光如來（卽ち燃燈佛）の時に國王あり、地自在と名く。彼の童子は王の第一長子に生れ、燈光如來より當來釋迦牟尼佛涅槃の

後、正法滅せんと欲するの餘八十年に比丘となり、此經を宣揚して身命を顧みず、百年壽終つて安樂國に生じ、大神力を得て第八地に住し、一身は兜率に住し、一身は安樂國に住すべしとの記別を受けたことを記述してゐる。これは佛滅五百年頃に一切世間樂見と名ける離車 Licchavi 族の童子が出現し、比丘となつて大に如來常住の大法鼓經を宣揚したことを傳へるのである。又大方等無想經第五增長健度にも同じく此の童子のことを記し、南天竺に須賴吒と名ける小國土があり、その土の善方便河華聚村の婆羅門は一子を產む。これ卽ち一切衆生樂見梨車童子にして、彼は年二十に及んで出家修道し、多くの徒衆を領し、淨戒を修持して諸佛の大乘經典を稱詠し、正法を護らんが爲に身命を惜まなかつたといひ、且つ同第四如來涅槃健度にも亦その本生を說き、過去同性燈如來の時、寶聚城(卽ち王舍城)の王を大精進龍王と名けた。その王は卽ち今の一切衆生樂見梨車童子であり、又彼王の大臣法林聚は阿叔迦王の前身であつた等といつてゐる。此等の本生譚は增一阿含經第十三、四分律第三十一、佛本行集經第三等にかゝぐる地主王本生から來たものと思はれるが、それは兎も角、此等の經に彼の梨車童子が佛滅後南印度に出世し、大に大乘涅槃の教旨を光顯したとなし、特に大方等無想經に此の童子は自ら經を造つて大雲經と名けた等と記してゐるのに依ると、彼れも亦實在の人にして、而も大乘經典の編纂に關係があつたものとい

はなければならぬ。又彼の法華經第六藥王菩薩本事品に、藥王菩薩の前身として掲ぐる一切衆生憙見菩薩 Sarva-rattva-priga-darśana, 幷に菩薩處胎經第二三世等品に出せる喜見菩薩も亦同一人と見るを得べく、且つ一切衆生喜見の名は當時彼れが大乘の鼓吹者として大に衆望があり、時人が彼を見んことを希ふたことを意味するものといふべく、若し然りとすれば彼れも亦文殊に同じく大乘敎宣傳者の一人であつたとすべきである。

又南印地方は後世に至つて密敎が傳播し、從つて密部の經典とも淺からざる關係を生じたものの如く、金剛頂經義決には所謂南天鐵塔の說を載し、龍樹が南天竺界の鐵塔を開いて金剛頂經を得たことを記述してゐる。これは固より一種の浮說たるに過ぎぬが、しかし龍智が南印に住し、金剛智が往いて之に師事したことが傳へられ、又不空羂索等の數多の密部の經典を齎らした菩提流志も南印の人であり、金剛智の弟子で、百數十部の經軌を傳譯し、大に密敎を宣揚した不空は錫蘭の產であるから、西紀七八世紀の頃には可なり南印地方に密敎が行はれたことを知るのである。のみならず不空羂索神變眞言經を始め、不空羂索呪經、不空羂索神呪心經、十一面觀自在儀軌經、大悲心陀羅尼經、聖觀自在菩薩不空王祕密心陀羅尼經、大乘八曼拏羅經、莊嚴陀羅尼呪經等は皆南印補陀落 Potalaka 山中をその說法の會處としてゐる。經の說處が編纂の地方を示すもの

とは限らぬにしても、金剛智が補陀落山に詣でて觀音の靈告を蒙つたといひ、當時補陀落信仰が盛んであつたのであるから、その地方に於て觀音關係の經典の編纂されたものもあつたであらうことが想像される。

迦濕彌羅及び健馱羅は末闡提の傳道した地方で、說一切有部の中心地として有名である。長阿含經第三、幷に增一阿含第三十六に佛陀の懸記として、吾が滅度の後、佛法は當に北天竺にあるべしといひ、又道行般若經第四に、般若波羅蜜は南天竺より次第に轉じて北天竺に至るべしといつてゐるが、これは卽ち此の地方を指したものと見られる。大悲經第二に北天竺得叉尸羅城 Takṣaśilā に長者あり、闍知迦(Dhitika ?)と名く。深く我れ及び諸の聲聞を恭敬供養し、次第に菩提の善根を積集して未來世に於て成佛し、普光如來と號すべしといひ、又北天竺に祁婆迦比丘あり、多く菩薩藏を聞持して大乘を稱揚し顯發し、無量種種の最勝菩提の善根を修集し、命終して無量壽國に生じ、後成佛して無垢光如來と名くべしといつてゐるが、之に依ると闍知迦及び祁婆迦は共に大乘に關係があつたと見るべきやうである。さりながら此中の祁婆迦を以て阿毘曇毘婆沙論第十にかゝぐる大德阿羅漢耆那婆數 Śāṇavāsa の弟子なる耆婆迦 Jivaka と同人とすれば、彼は恐らく阿育王同代であるから、大乘の關係者としては時代が早や過ぎる感がある。摩訶僧祇律第三

十二に二十七律師の相承次第を列ぬる中、第十九に尊者耆婆伽といふのを揭げてゐるが、これも今の祁婆迦と同人であるかも知れぬ。蓋し說一切有部は保守主義で、頗る敎權を重んじた上座部の一派であるから、その根據地なる迦濕彌羅地方に於て自發的に大乘が發生したとは考へられぬ。この理由によつて彼の般若波羅蜜は南天竺より轉じて次第に北天竺に至つたといふ傳說が事實であらうと思はれる。道行般若經第九薩陀波倫菩薩品には、薩陀波倫 Sadāprarudita 菩薩は般若波羅蜜を求めんが爲に東行二萬里、遂に犍陀越國に至つて曇無竭 Dharmodgata 菩薩に面し、その法を得たことを委しく記述してゐる。こゝに犍陀越國といふのは、健駄羅 Gandhāra を指したと見るべきであるから、道行般若の編纂已前に既に般若は北天竺に傳へられてゐたとせなければならぬ。大智度論第一にこの般若波羅蜜は當に南方に至り、南方より西方に至り、後五百歲中當に北方に至るべしといつてゐるのは、ほゞ其の年代を言ひ顯はしたものと見ることが出來る。大毘婆沙論第一百二十六に脇尊者の言をあげて、十二部經中の方廣は卽ち般若を指すといひ、又同第一百七十八には、迦濕彌羅國の諸論師は四波羅蜜多の說を立て、外國師は六波羅蜜多の說を立てると記してゐる。こゝに外國師といふのは卽ち健駄羅地方に住した論師を指すのであるから、この記事に依つて脇尊者已前に既に般若は北印に傳へられてゐたことを知るべきである。

又婆須蜜 Vasumitra, 僧伽羅刹 Saṅgharakṣa 等も大乘に關係があつたと思はれる。婆須蜜は說一切有部の有名な論師で、現にその著述として品類足論、界身足論、異部宗輪論、尊婆須蜜菩薩所集論等が藏中に收めてゐる。僧伽羅刹は迦膩色迦王の師といはれてゐる人で、その著述として道地經、修行道地經、及び僧伽羅刹所集佛行經等が現存してゐる。此等の著書中には大乘思想は含まれて居らぬけれど、出三藏記集第十所載の婆須蜜集序に、婆須蜜、彌妬路尸利及び僧伽羅刹は共に兜率天宮に昇り、婆須蜜は彌勒に次いで作佛して師子如來と號し、彌妬路尸利は光炎如來、僧伽羅刹は柔仁佛と號すべしと記してゐるのを見ると、此等の諸師は兜率に上生して當來作佛すべき菩薩根性の人として崇信されたことがわかる。又出三藏記集第十二所載の薩婆多部記目錄に說一切有部の五十三祖を列ぬる中、他は多く羅漢の稱呼を用ひてゐるのに、婆須蜜、僧伽羅刹等には特に菩薩の稱號を附し、又尊婆須蜜所集論幷に異部宗輪論にも、婆須蜜を以て菩薩又は大菩薩となし、師子月佛本生經には佛の豫言として、婆須蜜は當來作佛して師子月佛 Siṃhacandra と號すべきことを說き、又西域記第三にも諸天は婆須蜜に對し、方に佛果を證し、次いで慈氏に補すべしと讚じたことを傳へてゐる。ターラ・ナータの印度佛敎史には、迦膩色迦王の死と殆んど同時に、北方アシュマーパラーンタ Aśmāparānta 國の長者闍提 Jati は、西方マル Maru 國より毘

婆沙師の大德婆須蜜と、覩貨邏 Tukhāra の大德瞿沙 Ghoṣa とを請じ、三十萬の比丘を十二年の、間供養し、遂に無上菩提の誓願を起したと記してゐる。これは婆沙會の世友及び妙音が大乘を演說したとするので、今の說の助證として多少の興味が感ぜられるのであるが、然し素より後世に至つて附加された傳說であり、且つ婆須蜜が婆沙會に參加したといふことも頗る疑はしいのである。若しも今それを事實とすれば、品類足論等の作者と同名異人でなくてはならず、隨つて孰れの婆須蜜が、菩薩として崇敬されたかも問題となるわけである。さりながら菩薩の名稱は單なる小乘論師には附せられぬ筈であり、且つ婆須蜜成佛に關する經文までも出來てゐるのを見ると、婆須蜜等の二三師は後人に依りて非常に崇敬されたことを知ると同時に、亦大乘の勃興に關しても何等か關係を有したのではないかと想像される。又馬鳴 Aśvaghoṣa は迦膩色迦王同代の出と傳へられる人で、馬鳴菩薩傳には大師あり、馬鳴菩薩と名く、長老脇の弟子なり。北天竺に於て佛法を廣宣し、羣生を導利し、善く方便を能くして人の功德を成す。四輩敬重して咸く功德日と稱したといひ、又付法藏因緣傳第五等にも、彼れは頗る大名があつたことを記傳してゐる。著述としては現藏中に佛所行讚の外に、大莊嚴論、大乘起信論、大宗地玄文本論、尼乾子問無我義經、十不善業道經等の數部を收めてゐるが、佛所行讚の外は皆その眞撰でない。佛所行讚は彼の著作とし

て有名であるけれど、その中には大乘思想はあらはれて居らぬ。されば馬鳴が果して大乘の宣傳に關係があつたか否かも明かでないが、然し雜寶藏經第七幷に付法藏傳等に皆馬鳴を呼ぶに菩薩の名を以てし、又僧叡の大智度論序に、天竺に傳へ云ふ、像正の末に馬鳴龍樹なかりせば、道學の門それ淪胥溺喪したらんと。乃至、是を以て天竺諸國は之が爲に廟を立て、之を宗とすること佛の如しといつてゐるのを見ると、馬鳴は大乘の勃興に關係がなかつたとすべきでもない。又當時般若は既に北天竺に傳はり、馬鳴の師なる脅尊者が般若を知つてゐたことも明かであるから、聰明にして文藻に富める彼は之を翫味し、新たに經典の形式に於て大乘の敎理を闡明しないとも限らぬのである。又雜寶藏經第七に依ると、迦膩色迦王の時、罽賓に祇夜多 Jeyata と名ける大阿羅漢があり、神力を具して惡龍を降伏し、その名聲が頗る高かつたので、迦膩色迦王は自ら罽賓に至りて祇夜多を訪問し、その敎を受けたことを記載してゐる。此の祇夜多は付法藏因緣傳第五に揭ぐる達摩蜜多 Dharmamitra と異名同人で、即ち馬鳴の先輩であつたやうである。雜寶藏經等の記事中には、祇夜多が大乘と關係があつたやうなことを傳へて居らぬけれど、付法藏傳第五に迦膩色迦王が曾て泥圖を以て塔上に置き、若し吾れ來世に千佛の數中に正覺を成ずることを得ば、此泥圖をして變じて佛像とならしめんと誓つたとき、その泥圖は果して忽ち佛像に變じたといふ

物語を記載してゐる。若し之に依つて迦膩色迦王に大乘的信仰があつたとすれば、それは祇夜多若しくは馬鳴等の勸化に基くものとせなければならぬ。兎に角、支讖、支謙等が後漢三國時代に多數の大乘經典を支那に齎したことを見ると、迦膩色迦王已前、若しくは其の同代に於て北方健陀羅地方等にそれ等の經典が存してゐたことを認めなければならぬ。出三藏記集第七等に依ると、竺法護は罽賓の沙門より賢劫經を受得し、法勇は觀世音受記經を獲、佛陀耶舍は亦彼地に於て大小乘經二百餘萬言を誦し、且つ虛空藏經を尋ね得たことを記してゐる。されば或る時代の後、此等の諸經は迦濕彌羅地方に於て編纂されたものかも知れぬとおもはれるのである。

中印度地方は阿育王時代に於て佛敎の中心地であつたが、王の崩後、弗沙蜜多羅王 Puṣyamitra が破佛を行つて已來頓に衰微し、その後兵亂相次ぎ、殆んど見るべき活動もなかつたやうである。阿育王傳第五、付法藏因緣傳第三等には、阿育王の時、摩偸羅 Mathurā 國の優樓蔓茶 Urumaṇḍa 山に優波毱多 Upagupta が出世して大に佛事を興顯したことを記し、大悲經第二には亦同山に毘提奢、提知迦、優婆毱多等があり、又波離弗 Pāṭaliputra 城の跋多尼僧伽藍に阿輸婆毱多があり、鳩鳩吒 Kukkuṭa 僧伽藍に鬱多羅 Uttara があり、鴦伽 Aṅga 國に設陀沙茶と名くる上座等があつて各正法を流布したことを傳へてゐるが、これ等は多く破佛已前のことに係るのであらう。ター

ラ・ナータの印度佛敎史に依ると、波吒釐子 Pāṭaliputra 城に於て阿輸婆瞿多 Aśvagupta なるものが出世し、三昧を修して說法したので、難陀蜜多羅 Nandamitra 等の阿羅漢が輩出して眞諦を見得するものが多かつた。西南のサウラーシュトラ Saurāṣṭra 國に婆羅門鳩梨迦 Kulika なるものがあり、鴦伽國の產なる長老難陀が大乘法を憶持せることを傳聞し、その法を聞かんが爲に彼れを招聘した。その時代に諸の異國には大乘敎の善知識が一齊に輩出し、彼等すべてのものは尙ほ觀世音と祕密主と文殊と彌勒等のおの〳〵に從つて法を聞き、すべての法流の三昧を得たといひ、又法顯傳に摩頭羅 Mathurā 國を敍する中、摩訶衍の人は年年日を定めて般若波羅蜜、文殊師利、觀世音等を供養すといひ、西域記第四秣菟羅國の條にも、その都城に文殊師利等の窣堵波があつたことを傳へてゐる。此等の記事を綜合すると、中印地方にも或る時代の後には般若大乘等の行はれたことを知るべきである。又尼波羅 Nepāla は比馬剌亞山中の一王國であつて、西域記第七には玄奘の當時僧徒二千餘人あり、大小二乘並べ行はれてゐたことを敍してゐる。近代ホヂソン B. H. Hodgson は西紀一八二八年より二十一年の間に其地に於て多數の梵本を發見し、且つ彼國には現に法華、華嚴等の九部の大乘經が尊重されつゝあるのである。阿育王の時、末示摩の派遣された雪山邊國は或は此地方を指すのではないかとおもはれる。又龍樹が雪山に入り、塔中の一

老比丘に逢うて摩訶衍經を受けたといふのも、此地方であつたかも知れぬ。又出三藏記集第八所載の六卷泥洹記に依ると、法顯は摩竭提國巴連弗 Pāṭaliputra 邑阿育王塔天王精舍優婆塞伽羅の處より六卷泥洹經を得たといひ、又同第十四智猛傳に依ると、華氏城 Pāṭaliputra に大智婆羅門あり、羅閱宗と名く。純銀の塔縱廣八尺、高さ三丈なるものを造り、その中に多くの大乘經を收めた。又同法顯は先きに其家に於て六卷泥洹を得、智猛も亦その家に就いて二十卷泥洹を得たといひ、後大曇無讖傳に依ると、讖は中天竺に於て白頭禪師に遇ひ、樹皮の涅槃經本を得て大乘に歸し、後大涅槃經前分十二卷、幷に菩薩戒經、菩薩戒本を齎らして龜茲に奔つたことを記してゐる。此等の中に揭ぐる優婆塞伽羅、羅閱宗及び白頭禪師は恐らく皆同一人の異稱であつて、法顯も智猛も曇無讖も共に一人の優婆塞から涅槃經を受けたのであらうとおもはれる。若し然りとすれば涅槃經は彼の優婆塞の自ら撰集したものかも知れぬ。且つ又法顯が彼家を訪ふた時唯だ六卷を得、智猛が尋ねた時二十卷を得、曇無讖が前分十二卷を得たといふのは、或はその當時此經は編纂最中であつて、未だ全編の脫稿を終らなかつた爲ではないかと思はれる。兎に角、此經及び菩薩戒經等は中印地方の產物であらうかと想定されるのである。

又楞伽經は四卷楞伽經の初に、佛は一時南海の濱なる楞伽山頂に住して之を說くといひ、入楞

伽經の初には、大海の畔摩羅耶山頂上の楞伽城中に住して說くといつてゐる。摩羅耶 Malaya 山は南印度秣羅矩吒 Malakūṭa 國に在る一山脈であるから、若しその說處が編纂の地方を示すとすれば、此經は南印の產物とすべきであり、又西域記第十一には、楞伽山は錫蘭の東南隅に聳ゆる一山を指すとし、佛昔し此地に於て楞伽經を說かれたと記してゐるが、然るに高桑駒吉氏の東南印度諸國の研究には、楞伽 Laṅkā はマハーバーラタ Mahābhārata にも記載され、特にラーマーヤナ Rāmāyaṇa の敍事詩已來、錫蘭の一名となつたといひ、今の楞伽經に此地を說處としたのは、彼のラーマーヤナの所謂神話的地名を背景として、大乘の妙理を文學的に說きあらはしたものに過ぎぬとなし、經の本文に就いても種種の考證を加へてゐる。いかにも此經には三性二無我八識三身等の說をなし、解深密經の所謂第三時中道敎の理を闡明してゐるのであるから、南印の思想とするよりも、寧ろ中印に於ける佛滅七八百年代の產物と見るべきものであらう。隨つて楞伽を以て南印若しくは錫蘭の事實的地名となし、更に之に因つて彼經の南方編纂を證せんとするのは不可とせなければならぬ。又楞伽經中には勝鬘經を豫想したと見るべき記事がある。此二經は共に中印の求那跋陀羅によつて支那に飜傳され、又解深密經は楞伽の系統を承けたと認められるのであるから、此等の諸經は恐らく皆中印に於て相前後して編纂されたのであらう。西域記第五に

依ると、無著は阿輸陀 Ayodhyā 國に於て兜率天宮に昇り、慈氏菩薩より瑜伽師地論、莊嚴大乘經論等を受け、之を大衆のために廣宣したと傳へてゐるが、從來は此の說話を以て無著の學說を權威あらしめんが爲に、兜率天宮の彌勒を借り來つて之に假托したものと解したけれど、近時宇井伯壽氏は種種の考證を擧げて、彼の慈氏を無著の師なる實在の人となし、之を當來下生の理想的彌勒と區別すべきものなることを論斷された。これは頗る妥當の說であつて、彼の薩婆多部記目錄所載の五十三祖中に摩帝麗 Maitreya を第四十二、訶梨跋暮 Harivarman を第四十三、婆秀槃頭 Vasubandhu を第四十四祖とし、婆秀槃頭卽ち世親の一祖前に摩帝麗、卽ち慈氏を置いてゐるのも亦此事實を表明したものと見ることが出來る。されば彼の慈氏は瑜伽派の聖典なる深密等の經、幷に菩薩戒經等の編纂に關係があつたのではないかと疑はれる。解深密經は五卷八品の經であるが、その中の序品を除き、他の七品の全文が慈氏の說なる瑜伽師地論攝決擇分中の菩薩地の中に引載されてゐるのを見ても、慈氏と深密との間に深い交涉があつたことを知るべきである。又曇無讖の譯した菩薩地持經十卷は、瑜伽師地論第三十五卷已下第五十に至る十六卷に載する本地分中菩薩地の異譯であり、求那跋摩の譯した菩薩善戒經も亦之と同本である。之に依ると本地分中の菩薩地は夙に別行したことを知るのであるが、然るに此中の菩薩善戒經には卷首に序品があつ

て、「如是我聞一時佛在舍衞國須達多精舍祇陀林中」云云と記し、又最後の畢竟地住品の終りに、「爾時優波離白佛言、世尊此經當名何經、乃至聞佛所說歡喜禮拜右遶而去」の語を置き、全く經典の體裁にしてゐる。これは慈氏の說を後人が佛說として加筆したのである。曇無讖と求那跋摩は殆んど同代の人であるのに、跋摩の譯本が此の如く佛說に改められてゐるのを見ると、當時この調子で他の慈氏等の說も經典の形式に改修されたものが少くなからうと想像される。

又密部の經典も中印に於て編纂されたものが少くないやうである。彼の大日經、蘇悉地羯羅經等を譯した善無畏三藏は、中印度摩揭陀國の王子で那爛陀寺に入り、達磨鞠多を本師として總持瑜伽の敎を學し、ついで陸路迦濕彌羅等を經て支那に來朝した人である。唐李華の撰した善無畏三藏行狀碑に、達摩鞠多は定門の祕鑰を掌り、如來の密印を佩ぎ、顏は四十の如くにして已に八百年なりと記してゐるが、斯かる長壽が保たれ得るものでないことは言を俟たぬけれど、兎に角之に依つて當時密敎の長老が那爛陀寺に住してゐたことを知るべきである。開元錄第九に依ると、善無畏の譯した大日經の梵本は元と無行が印度に於て得たもので、彼れは歸途北天竺に於て不幸にして歿したので、勅によつてその梵本を迎へ、長安華嚴寺に安置してあつたものだといつてゐる。之に關し大村西崖氏の密敎發達志第二には、無行も那爛陀寺に受學した人であるから、かの

梵本は恐らく彼寺に於て得たものなるべく、而してその經は或は達磨鞠多の手に成つたものかも知れぬといつてゐる。なるほど那爛陀寺は西曆六七世紀已來佛敎の中心地として繁榮し、特に瑜伽派の諸大論師相次で輩出してその學を宣揚し、密敎の習學も行はれ、長老も亦之に止住したのであるから、此地に於て密部の經典が編纂されたとするのも、至極道理のあることゝいはなければならぬ。義淨の大唐西域求法高僧傳卷下の道琳傳に

夫明呪者、梵云毗睇陀羅必得家。毗睇譯爲明呪、陀羅是持、必得家是藏、應云持明呪藏。然相承云、此呪藏梵本有十萬頌、唐譯可成三百卷。現今求覓、多失少全。而大聖沒後、阿離野那伽曷樹那、卽龍樹菩薩特精斯要。時彼弟子厥號難陀。聰明博識漬意斯典、在西印度經十二年、專心持呪、遂便感應。每至食時食從空下。又誦呪求如意瓶不久便獲。乃於瓶中得經歡喜、不以呪結其瓶遂去。於是難陀法師恐明呪散失、遂便撮集可十二千頌、成一家之言。每於一頌之內、離合呪印之文。雖復言同字同、實乃義別用別。自非口相傳授、而實解悟無因。……斯之呪藏、東夏未流。所以道琳、意存斯妙。故呪藏云、升天乘龍役使百神。利生之道唯呪是親。淨於那爛陀亦屢入壇場、希心此要、而爲功不並就、遂泯斯懷。爲異聽。

と記してゐるが、これは毗陀羅必得家 Vidyādharapiṭaka 即ち持明呪藏と名くる書が元と印度に存し、その梵本は十萬頌あり、支那に譯すれば三百卷にも上るべく、龍樹は特にその書の要に精しかつたが、その弟子に難陀あり、此書を攻究し、西印度に在りて十二年間專心その呪を持し、遂に即ち感應して奇瑞を感じ、後その書の散佚を恐れ、之を撮集して一萬二千頌としたといふのである。彼の阿地瞿多譯の陀羅尼集經序に、「此經出金剛大道場經。大明呪藏分之少分也」といひ、大佛頂首楞嚴經の題下に「一名中印度那爛陀大道場經」と記し、又同第七に四百三十九句の大神呪を出し、之を中印度那爛陀曼荼羅灌頂金剛大道場神呪と名けてゐるのも、皆此の所謂持明呪藏を指したのである。之に依ると持明呪藏と稱する大本の書が古く印度に存し、而してそれを龍樹の弟子難陀が撮集して一萬二千頌となし、その本が西曆七八世紀の頃密敎の祕密藏として尊重されたことを知るのである。金剛頂經の大本が十萬頌、大日經の大本が同じく十萬頌あつたといはれるのも、共にこの傳說から起つたのであつて、即ち此等の諸經はすべて皆持明呪藏と關係があるのであらう。金剛頂瑜伽三十七尊出生義には密敎の相承次第を說き、釋師子は毘盧舍那如來の方授を得て誓約して金剛薩埵に傳ふ。金剛薩埵は之を得て數百年にして龍猛菩薩に傳ふ。龍猛菩薩は之を受けて、數百年にして龍智阿闍梨に傳ふ。又住持すること數百年にして金剛智阿闍

梨に傳ふといひ、貞元釋敎目錄第十四にも、金剛智は三十一歲の時、南天竺に往き、龍樹菩薩の弟子龍智に逢うて七年承事供養し、金剛頂瑜伽經及び毘盧遮那總持陀羅尼法門等を受學したと記し、當時龍智は年七百歲であつたといつてゐる。これは密敎の付法は大日、金剛薩埵、龍樹、龍智、金剛智と次第相承したとするのであるが、この中、龍樹を密敎の祖とするのは、多分彼が持明呪藏を傳持したといふ傳說に基いたのであらう。それにしても難陀を除き、別に龍智を擧げて來たのは如何なる理由か明かでない。龍智は南印度に生れ、龍樹の上足にして法を金剛智に付したといはれるけれど、その事蹟は何等傳つて居らぬ。特に彼の壽を七百歲としたのは、龍樹から付法し、之を金剛智に傳授したとする時、その年代が餘りに隔絕し、彼をして方外の長壽を保たしめなければ聯絡が付かないからである。蓋し龍智七百歲の說は大慈恩寺三藏法師傳第二に、北印度磔迦國大菴羅林中に七百歲の婆羅門があり、形質魁梧にして之を觀るに三十許り。その人は龍猛の弟子にして中百諸論に明かに、且つ吠陀等の書を善くしたので、玄奘は一ケ月停留して百論等を學んだといふの記事から來たものと認められる。上に擧げた達摩鞠多八百年說も亦之に基いたもので、卽ち一百年を增して八百年としたのは、玄奘の曾過した貞觀の初より善無畏が師事した開元の初に至るまで約八九十年の歲月があるからであらう。宋高僧傳第二に、達磨鞠多は昔

し嘗て玄奘も之を見たと言つてゐるが、之は達磨毱多を彼の長命婆羅門と同人としたのである。之に依ると龍智の傳說も、達磨毱多の傳說も、共に長命婆羅門の記事から來たものとすべきである。玄奘が果して彼の婆羅門は龍樹の弟子で、壽命七百歳だといふ話を聞いたとすれば、そは遠來の客を驚かすべく串戯を言つたに過ぎぬ。付法傳授を尙ぶところから、斯かる串戯も正直に受取られたのかも知れぬが、龍樹の弟子が玄奘時代まで生存し得らるべきでないことは固より言ふまでもない。就中、金剛頂經等を龍樹に結び付けんとするが如きは敎理發達の史實を無視したもので、彼の金剛界五智五佛の說が瑜伽派の四智說より轉じ、特に親光の佛地經論第三に、大覺地中の無邊の功德に有爲無爲の二種あり、無爲の功德は淨法界の攝、有爲の功德は四智の攝なりと說いてゐるのに基いたものであることは明かであり、又毘盧遮那蓮華胎藏の說も華嚴百千經から來たものであることは疑ひを容れぬ。されば金胎兩部の說は龍樹より數百年の後、始めて中印に於て釀成された思想であるといふべく、隨つて金剛頂經等は瑜伽派の敎旨を骨子とし、之に彼の持明呪藏の說を雜糅して、以て編成したものなることを認めなければならぬ。

又錫蘭は善見律の所謂師子國 Sihaja にして、阿育王の王子摩哂陀 Mahinda 等の派遣された一島國である。大唐西域記第十一に依ると、摩哂陀傳敎の後、二百年にして錫蘭の佛敎は摩訶毘訶

羅 Mahāvihāra 住部、阿跋耶祇釐 Abhayagiri 住部の二部となり、前者は大乘を斥けて唯だ小敎を習ひ、後者は大小二乘を兼學し、弘く三藏を演べたといつてゐる。之に依ると錫蘭には佛滅三百餘年（阿育王と佛滅との間を一百年とする玄奘の說に從つて）頃に既に大乘が起つたと見なければならぬやうであるが、しかし大史 Mahāvaṃsa には摩訶毘訶羅即ち大寺と、阿跋耶祇釐毘訶羅 Abhayagirivihāra 即ち無畏山寺との間に論爭の生じたのは、ボーハーラカテッサ Vohārakatissa 王（二一五—二三七）の時であるとし、且つ勝軍 Mahāsena 王（二七七—三〇四）の世に至り、王は無畏山寺に加擔し、大寺の僧侶に飮食を送らざること九年の久しきに及んだといつてゐる。此の論爭は多分大乘の採否に關する問題から起つたのであらうと思はれるが、若し然りとすれば錫蘭に於ける大乘は西曆三世紀の初頃、即ち佛滅七八百年頃に始めて勃興したものとせなければならぬ。玄奘譯の難提蜜多羅所說法住記に佛涅槃の後八百年中、執師子國勝軍王の都に難提蜜多羅 Nandimitra といふ大阿羅漢があり、滅度せんとする時、般若波羅蜜、妙法芬陀利迦、金光明等の五十部の大乘經、及び五阿含等を讀誦し解說すれば、當來彌勒下生の世に再生することが出來る等と說いたことを記述してゐる。難提蜜多羅は恐らく無畏山寺派に屬する一僧で、大小二乘を併せ弘傳したのであらう。玄奘の當時には彼地の僧徒二萬餘人あり、大乘及び上座部の法を遵行しつゝあつたと

傳へられ、又大乘本生心地觀經序に、その經は唐高宗代に師子國王の獻ずる所であるといひ、又金剛智の弟子で、一百餘部の祕密經軌を傳譯した大廣智不空も師子國の産であるのを見ると、彼地にも古くは大乘佛敎が傳播し、又密敎とも關係のあつたことを知るのである。

緬甸、泰、柬埔寨及び南海諸島にも佛敎は早い時代から弘傳し、劉宋求那跋摩、求那跋陀羅、蕭齊僧伽跋陀羅、梁僧伽婆羅、曼陀羅仙、須菩提、眞諦等は皆南海を經て支那廣州に達し、特にその中、僧伽婆羅、曼陀羅仙及び須菩提は共に扶南國卽ち柬埔寨の人で、梵莢を齎らして揚都に來り、寶雲經、孔雀王陀羅尼、文殊問經、文殊般若、解脱道論等の十餘部の經を譯出した。現にその地方にアンコール・ワット Angkor-Vat と稱する規模廣大なる佛敎の古伽藍がある。又訶陵國卽ち爪哇は、劉宋の初め罽賓國の僧求那跋摩が此地に開敎し、後唐麟德年中（六六四—六六五）成都の會寧は渡印の途次此地に寄留して、南天竺僧若那跋陀羅に會ひ、涅槃經後分を譯出したと傳へ、ついで唐開元の初め金剛智は亦此地に入り、同六年（七一八）不空は錫蘭より來つて金剛智に謁し、相携へて遂に支那に來朝したのである。此地にも佛敎の古寺塔の存するもの多く、就中、ボロ・ブドル Buro-Budur は最も壯大であつて、現に東西洋に喧傳せられつゝあるのである。大乘經典に關しては文獻の傳はるものが極めて少いのであるが、出三藏記集第五所載の安公疑經錄に、南海胡作

として寶如來三昧經二卷を擧げてゐる。これは多分南海地方に於て製作されたのであらう。若し然りとすれば苻秦已前に既に彼の地方に疑經の行はれたことを知るべきである。又成都の沙門會寧が若那跋陀羅と共に訶陵國に於て大般涅槃經後分二卷を譯したことは、義淨の大唐西域求法高僧傳卷上に記する所であるが、これは別章に論ずるが如く梵莢の翻譯ではなく、おそらく彼等二師の新たに編集したものであらうとおもはれる。

第二節　西域地方に於ける經典の編纂

佛教が阿育王時代に印度國外にも傳播されたことは上に一言した通りである。その中、摩訶勒棄多 Mahārakkhita の派遣された臾那世界 Yonakaloka は、當時希臘の東方に於ける殖民地であつて、支那史の所謂大夏、卽ちバクトリア Bactria を指すのである。此地方には元と希臘の文化が打建てられ、同時にイラン Iran との交渉もあり、又印度文明は勿論取り入れられたのであるから、こゝに東西文化が接觸し、思想上、又は藝術上にも特殊の發達を遂げたものと認められる。その地の佛教に關しては何等文獻の徵すべきものがないけれど、西曆紀元前一世紀頃に彼國に君

臨した彌蘭陀王 Milinda が北印度に侵入し、奢竭羅 Sākala 城にゐた時、那伽斯那 Nāgasēna の教によりて歸佛した事實が傳へられ、現にその時の問答を記錄した那先比丘經が、漢譯藏經にも巴利藏中にも收められてある。又此王のことは阿毘曇毘婆沙論第十四、及び雜寶藏經第九にも揭げられてゐるが、大乘關係の事實は傳つて居らぬ。安息國は西曆紀元前三世紀頃、アルサケス Arsakes に依つて打建てられた王國であつて、波斯の北方、裏海の南岸に當るのであるが、此地方にも早い時代から佛敎が傳つたやうで、後漢桓帝の初(西紀一四七)には、既に其國の太子安世高が支那に來り、安般守意、陰持入經を始め、僧伽羅刹の大道地經等、凡そ三十餘部の經を譯出した。出三藏記集第十三に依ると、世高は出家の後、博く經藏を綜べ、最も阿毘曇に精しく、且つ禪經を諷誦してほゞ其妙を盡したといひ、又遊方弘化して諸國を遍歷したとも記してゐる。されば當時安息國に行はれたものは恐らく小乘學であつたのであらうとおもはれる。ついで彼國の安玄は後漢靈帝の末(西紀一八八)を以て洛陽に達し、嚴佛調と共に法鏡經等を譯し、曇無諦は亦曹魏正元年中(二五四—二五六)洛陽に來りて曇無德羯磨を出し、又安法欽は西晉太康二年(二八一)洛陽に於て道神足無極等の數部の經を譯したと傳へられる。此等の中には大乘經典も含まれてゐるけれど、果してそれが彼の本國から齎したものか詳にすることが難い。康居國は今の撒馬兒干 Samarkand の地にして、隋唐

代には康國と呼ばれた。此地にも早くから佛敎が傳つたやうで、後漢獻帝の時、その國の沙門康孟詳は支那に來りて中本起經を譯し、ついで康僧鎧は曹魏嘉平の末(二五三)を以て洛陽に達し、郁伽長者等の四部の經を出し、又彼國の裔なる康僧會は吳赤烏十年(二四七)建業に來つて六度集經等を飜じ、東晉成帝の時亦康法邃あり、譬喩經を譯した。此等の經典中には彼の地方に於て編集されたものがあつたかも知れぬが、今は何等の消息も傳つて居らぬ。

大月支は西紀前一世紀頃バクトリアを征服したが、ついで貴霜翕侯カドフィセス Kadphises 一世が他の諸翕侯及び安息國を攻滅し、健馱羅を中心として一王國を建設せし以來、頓に强大となり、迦膩色迦 Kaniska 王に至つて更に領土を擴大し、布路沙布羅 Purusapura に都して大にその勢威を張つたことは著名な事實である。(支那史にては此の貴霜王朝をも大月支と稱す)迦膩色迦王は佛敎を保護し、婆沙結集の業を成さしめたと傳へられ、又馬鳴を中印より迎へてその敎を受けたといひ、僧伽羅刹に師事したといひ、祇夜多を崇敬して之を罽賓に訪うたといひ、又菩薩像を造立した等といはれてゐる。蓋し馬鳴及び僧伽羅刹の著書幷に祇夜多の說法中には、大乘に關する敎義は含まれて居らぬけれど、迦膩色迦王と餘り時代が隔らない後漢桓帝の末(一六七)に、洛陽に來た月支の沙門支讖が、道行般若、首楞嚴、般舟三昧等の大乘經典を譯出し、又同じ國人と

思はるゝ支曜も、後漢靈帝の時、成具光明經を傳譯した事實を考へて見ると、當時大月氏には大乘經典が既に存したことを認めなければならぬ。特に前にも述べた如く、支讖の譯した道行般若經には、般若が南印より次第に北印に至ることを傳へ、且つ薩陀波倫菩薩が東行二萬里にして犍陀越國に來り、曇無竭菩薩に面して般若を受けたことを記載してゐるのであるから、支讖以前に般若が健駄羅地方に傳はつてゐたことは明かとすべきである。のみならず彼の薩陀波倫品及び曇無竭品等の數品が、道行般若經三十品中の第二十五累敎品の後に置かれてあるのは、此等の數品が健駄羅地方に於て編纂され、ついで本經に添加せられたことを證するものと認めることが出來る。若し然りとすれば此の調子で迦膩色迦王前後に、健駄羅を中心として大乘經典が少からず編纂されたのではないかと想像される。

于闐 Khotan は西域交通の要衝に當り、夙に大乘佛敎流行の地として有名である。曹魏甘露五年（西紀二六〇）穎川の朱士行は、彼地に於て放光般若九十品六十餘萬言を得、ついで西晉泰康七年（二八六）彼國の沙門祇多蜜は本國より光讚般若二十七品（或は二十一品）を齎らし、放光は同國沙門無羅叉之を譯し、光讚は竺法護が之を翻じた。東晉の世に及び、支法領は彼國に於て華嚴經三十四品六十卷を得、後又唐證聖元年（六九五）同國沙門實叉難陀は、彼地より華嚴經三十七品八十卷を齎らし、

同國沙門提雲般若も亦同時に華嚴支派の經を傳譯した。されば華嚴大經は新舊兩本とも于闐より將來され、于闐と華嚴とは淺からざる關係の存することを知るのである。のみならず舊華嚴經第二十九菩薩住處品には、東北方淸涼山に文殊の住することを說き、及び眞丹國那羅延山、邊夷國(新譯には疏勒國)牛頭山等の二十三處（新華嚴經第四十五には二十二處）に各菩薩の住處があることを說いてゐる。この中、東北方淸涼山は古來支那山西省の五臺山を指したものといはれ、唐菩提流志譯の文殊師利法寶藏陀羅尼經にも、瞻部洲の東北方に國あり大振那と名く。その國中に山あり、號して五頂といふ。文殊師利童子遊行居住し、諸の衆生の爲に中に於て說法すといつてゐる。又邊夷國牛頭山といふのは于闐の瞿室餕伽 Gośriṅga 山を指すので、西域記第十二瞿薩旦那 Kustana 國の條に、王城の西南二十餘里にして牛角山あり、山峯兩起し巖隒四絕すと記してゐるのがそれである。斯の如く此經に于闐及び支那の地名を揭げてゐるのを見ると、支那內地の情況がほゞ知れ渡つた地方に於てその經は追集されたものとせなければならぬ。又大智度論の中に屢引用せる不思議解脫經は、恐らく今の華嚴の入法界品を指すのであらう。此品の異譯なる入不思議解脫境界普賢行願品(卽ち四十華嚴)は、その奧書に依つて見ると、唐貞元十一年（七九五）南印度烏荼 Uḍra 國王より德宗の朝に獻じたものであり、又尼波羅 Nepāla 國に今日現に崇重されつゝあ

る九部大乘經中にも之に相當する華嚴經があり、又大智度論には處處に十地經若しくは漸備經と、不思議解脫經とを別出してゐる。之に依ると印度に行はれた華嚴經なるものは、六十若しくは八十華嚴でなく、所謂四十華嚴卽ち入法界品であつたことが推知し得られるやうである。旣に彼の經中に于闐及び支那の地名を擧げ、又その大本が前後兩囘とも于闐から將來された事實等を綜合して見ると、六十卷等の華嚴は多分彼の地方に於て纂輯されたものであらうと想定される。又大集經日藏分及び月藏分には處處に于闐の國名を出し、特に月藏分布閻浮提品には波羅奈國を始め、乾陀羅、波斯、罽賓、伽賒（佉沙）、遮居迦（斫句迦）、沙勒、于塡、龜茲、婆樓迦、鄯善、震旦等の五十餘國の名を擧げ、世尊は天龍夜叉等に各それ等の國を付屬し、之が守護を命ぜられたことを說き、又日藏分護塔品には、王舍城、摩偸羅、乾陀羅、罽賓、震旦、于闐等に於ける二十一處の牟尼聖人住處を各龍王に付屬することを說いてゐる。就中、護塔品の二十一處は、之を舊華嚴經菩薩住處品所出の二十三處に對照すると、約十二處の一致を見るのみならず、震旦卽ち支那に於ける聖人住處として那羅延山を擧げ、于闐に於て牛頭山を擧げてゐるのは二者全く同一である。又護塔品の連文には于闐國草創のことを記し、且つ佛が我れ今久しからずして牛頭山邊瞿摩娑羅牟尼住所に往き、結跏七日、解脫の樂を受けんと語られたことを記してゐる。これは西域記第十

二に牛頭山は如來が曾て諸の天人の爲に略して法要を說かれた處だと傳へてゐるのに合するやうである。されば大集經日藏月藏の兩分は華嚴大經とも關係があつたと見なければならぬ。又歷代三寶紀第十二に崛多三藏の傳說を載し、于闐の東南二千餘里に遮拘迦國（此國の位置に就ては諸說あり、スタイン等は于闐の西北約二百哩にして今のカルグハリック Karghalik の地なるべしとす）あり、彼王は大乘を敬重し、摩訶衍の人を停めて供養す。その王宮に摩訶般若、大集、華嚴の三部の大經あり。王は躬ら受持して親しく鍵鑰を執るといひ、又此國の東南二十餘里に山あり、その內に大集、華嚴、方等、寶積、楞伽、方等、舍利弗陀羅尼、華聚陀羅尼、都薩羅藏、摩訶般若　八部般若　大雲經等の凡そ十二部を安置す。皆十萬偈ありと記してゐるが、此の傳說は大唐西域記第十二斫句迦國の條に、その國中に大乘經典部數最も多く、十萬頌、部をなすもの凡そ十數ありといふの記事にも合するのであるから、それはほゞ事實を傳へたものと見るべきである。若し然りとすれば、摩訶般若、大集、華嚴の三部は、于闐若しくはその附近の地方に於て增廣又は追集されたものと推定し得べきやうである。又出三藏記集第十四曇無讖傳に依ると、曇無讖は于闐に於て大般涅槃經を得たといひ、同第二に齊法獻は亦彼の地に於て觀世音懺悔除罪呪經を得たといひ、又大唐內典錄第五には、勝天王般若經は于闐の婆羅門僧求那跋陀の齎らしたものとし

てゐる。されば此等諸經の編纂も亦彼の地方と關係があつたかも知れぬ。佛祖統紀第四十三には、宋太宗淳化五年（九九四）于闐國僧吉祥なるものが僞經大乘祕藏經を獻じたことを傳へてゐる。輓近スタイン M. A. Stein 等は于闐地方を踏査し、般若、法華等の多くの斷片を發見し、その結果は Ancient Khotan 中に報告されてゐるが、將來此種の研究の進展と共に大乘經典の成立に關する眞相が更に一層明かならんことを期待して已まぬのである。

龜茲 Kucina は早い時代より支那と交通があり、その國運は三國時代に於て最も隆昌であつて、大乘佛敎も其頃から既に行はれてゐた地方である。出三藏記集第十三に依ると、彼地の沙門白延は曹魏正始の末（二四九）に首楞嚴、須賴及び除災患の三部の經を譯出したことを記し、梁高僧傳第一には、帛延は魏甘露年中（二五六—二五九）を以て無量清淨平等覺經等、凡そ六部の經を翻じたと傳へてゐる。又出三藏記集第七所載の阿維越致遮經記には、西晉太康五年（二八四）竺法護は龜茲の副使羌子侯より阿維越致遮經を得たことを記し、同第八所載の正法華經記には、太康七年竺法護が正法華經を譯した時、龜茲の居士帛元信はその譯場に在りて參校の任に當つたといひ、又同第十四鳩摩羅什傳には、羅什は龜茲の帛純王新寺に於て放光經を得たといつてゐる。されば此國にも西暦三世紀の初頃より大乘經典の存したことが察せられる。又添品妙法蓮華經序に依ると、竺法護の

正法華經は梵本(隋代存在)と符會し、羅什の妙法華經は龜茲本と允同することを記述してゐる。これは羅什の用ひた原本が龜茲語で書かれてあつたことを證するものともいへる。然るに羅什の經は下に述ぶる如く、法護の經幷に現存の梵本とも一致しないのであるから、或は龜茲地方に於て多少の改修が加へられたものかも知れぬ。又慧琳の一切經音義第二十五には、涅槃經第八に悉曇字義として十四音が揭げてあるのを評し、此經は北涼玄始四年(四一五)曇無讖が姑臧に於て龜茲國の胡本文字に依つて譯したから、遂に中天の音旨と同じくないのであるとし、十四音といふは錯りの甚しきもので、暗惡の兩聲を除き、魯留盧婁を取つて數となしたのだといつてゐる。之に闘し荻原雲來氏は既に詳論を試み、涅槃經の說が印度語典家の字母配列法と全然同一なることを明かにし、又彼經は曇無讖が中印の白頭禪師より受けたものであり、且つ法顯の大般泥洹經第五にも同說が揭げてあるから、決して龜茲の胡本に依つて誤謬を傳へたものでないと斷じてゐる。これは蓋し氏の言はれる通りであらうが、しかし涅槃經はその品數が足らなかつたので、曇無讖は再び中印に還つて之を尋求し、後于闐に於て更にその經本を得たといひ、或は又六品已下は久しく燉煌に藏せられてあつたとも傳へられてゐるのであるから、龜茲語を以て書かれた本が必ずしも無かつたとはいへないのであらう。それは兎に角近時グルュンウェーデル Grünwedel は彼の

地方を踏査發掘して、Alt-kutscha; と題する一書を公にし、その中に多數の有益なる壁畫壁文等を收め、又ペリヨ P. Pelliot 等も中央亞細亞を探險し、多くの遺物を蒐集し、その中には龜茲語を以て書かれた大光明王本生もあつたといふことであつて、漸次彼の地方の佛敎に關する事情が明かならんとしつゝあるのは喜ばしい次第である。

高昌は漢書の所謂車師前部であつて、西域交涉の通路に當る一地方であるが、此國にも比較的早い時代から大乘經典が存したやうである。出三藏記集第八所載の摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序に、苻秦建元十八年（三八二）正車師前部王彌帝が來朝し、般若胡本一部を獻じたといひ、又東晉安帝の時、法衆は此地に於て方等檀特陀羅尼經を得、宋武帝の時、沮渠安陽侯は觀彌勒上生兜率天經及び觀世音觀經を得、齊武帝の時、法獻は亦此地に於て提婆達多品を得たと傳へられ、又近時グリユンウェーデルは彼の地方を踏査し、佛敎に關する幾多の遺跡及び遺品を發見し、その結果は既に報告されてゐるのである。又凉州は今の甘肅省の西北部地方に當るのであるが、此地にも早い時代から譯經が行はれ、出三藏記集第七所載の首楞嚴後記には、東晉咸安三年癸酉（三七五）月支優婆塞支施崙は、龜茲王世子帛延と共に凉州に於て首楞嚴經等を譯出したといひ、又その州人竺佛念は同時に菩薩瓔珞經、菩薩處胎經等を出し、北凉代に及んで曇無讖、道泰、道龔、智猛等は相

次いでその地に於て、涅槃經、大集經、悲華經、泥洹經等を譯出してゐる。又出三藏記集第三に掲ぐる安公涼土異經錄には、大忍辱經已下凡そ五十九部七十九卷を列ねて之を涼土失譯經となし、阿難爲蠱道呪經已下二十四部二十四卷を列ねて、之を關中異經としてゐる。その中には現藏中に存するものもあるけれど、大部分は傳つて居らぬ。既に苻秦道安（三八五寂）已前に斯かる多數の異經が涼土及び關中に存したことは甚だ驚くべきことで、その中には彼の地方に於て編集したものも少くなからうとおもはれるのである。

之を要するに佛敎の經典が始めて支那に傳譯されたのは後漢桓帝代であつて、夙に安息、月支、康居國等の沙門がその經典を齎らして來朝したのである。隨つて此等の三藏が通過した地方にも佛敎が傳播し、又それ等の諸國に止まつて布敎したものも少くなかつたことと思はれる。竺法護譯の密迹金剛力士經には、安息、月支、大秦、劍浮、擾動、丘慈、于闐、沙勒、禪善、烏耆、前後諸國、匈奴、鮮卑、吳蜀秦地等の名を擧げ、斯の如き千國は言語各異に、志操不同にして音聲各別なり。如來至眞はその言音に隨つてその中に入り、因て之を開化して正眞を立てしむといひ、又同譯と傳ふる申日經にも、秦土及び諸の邊國、鄯善、烏長、歸玆、疏勒、大宛、于塡及び諸の羌虜夷狄は、皆當に佛を奉じ法を尊ぶべしと記してゐる。これは恐らく竺法護が親しく跋涉した諸

國の名を擧げたのであらうが、之に依ると西晉代頃に如上の諸國に於て多少とも佛敎が傳播したことを知るのであり、後漸次興隆するに及んで、それ等諸國の國語にも經典が飜譯され、而してその飜譯に際して原本を添削改竄し、又は新經を編纂することも有り得べき事實とせなければならぬ。現に支那撰述の僞經僞論が多數に存するのであるから、西域地方に於ても亦此種の擧の行はれたことが想像され得るのである。

第三節　經典の改修幷に增廣

經典が印度を始め西域諸國等に於て漸次編纂されたものであることは疑を容るべくもない。然るに經典編纂といつても、その中には獨創的製作もあり、又舊典に就いて增廣布衍を企てたものもあり、或は又多少の改修を加へたに過ぎないものもある。現藏中には多數の重譯經が收めてあるが、それを檢して見ると、いづれの經も他の譯本と全然同一なるものはなく、且つ前譯よりも後譯の方が常に增廣されてゐる。これは主なる經典が一たび製作されると、それに對して必ず布衍增廣が企てられ、又展轉傳寫、若しくは諸國語に飜譯されるに際して、その本文が多少とも添削

改竄されないものはないことを證するのである。總じていへば印度內地には獨創的製作が多く、西域地方等にはおもに增廣又は改修が行はれたと見るべきであるけれど、必ずしも皆然りとはなし得ないやうである。

試みに今重譯經に就いて增廣布衍の跡を尋ねて見ると、般若經の如きは、後漢竺佛朔の齎らしたものは單に道行經一卷であつたが、西晉竺法護の齎らした光讚般若經は十卷二十七品（或は二十一品）、後漢支讖の譯した般若道行品經は十卷三十品、西晉無羅叉の譯した放光般若經は二十卷九十品、姚秦鳩摩羅什の譯した摩訶般若經は二十七卷九十品あつて、その內容及び分量等が各異なつてゐる。苻秦道安の撰した道行序に、外國の高士が九十章を抄して道行品としたのだといひ、支讖の道行般若を以て放光般若九十品中より抄出したものとしてゐるけれど、これは恐らく事實相違で、放光般若の九十品が却て彼の道行般若の三十品を增廣したのであらうと思はれる。又道行般若三十品に就いて之を見ると、その第二十五に累教品を置き、更に最後の第三十品に囑累品が置いてあるが、一經中に二種の囑累品があるのは殆んど他に例のないことで、これは初の二十五品が最初に成立し、後の五品が後時に至つて追加されたことを語るものと見なければならぬ。又西晉衞士度の譯した道行經が二卷であつたことは諸錄に記する所で、僧祐等は亦之を以て

略出としてゐるけれど、既に竺佛朔が一卷の道行經を齎らし、又支讖の三十品經が後世の追加を含むことに併せ考へて見ると、般若の原形は元と單なる一兩卷に過ぎなかつたのではないかと想像される。又般舟三昧經の如き、失譯の拔陂菩薩經は一卷の經で章品を立てず、たゞ初の四品だけを略說するに過ぎぬが、然るに一卷般舟三昧經には更に四品を增して八品とし、三卷般舟三昧經には更に倍加して十六品となし、隋闍那崛多の大集賢護分には更に一品を增して十七品としてゐる。又大乘涅槃經の如き、西晉竺法護の譯した方等般泥洹經は二卷九品あり、東晉法顯の齎らした大般泥洹經は六卷十八品あり、劉宋智猛の傳へた泥洹經は二十卷、北凉曇無讖の譯した大般涅槃經は四十卷十三品あつて、漸次その分量が增加してゐる。又義淨の大唐西域求法高僧傳卷上に依ると、大乘涅槃は西國に於て淨（卽ち義淨）親しく目を覩るに云く、その大數二十五千頌あり、翻譯すれば六十餘卷となるべし。その全部を檢せんとするも竟に獲ず。但だ初の大衆問品一夾四千餘頌を得たといひ、當時曇無讖本の前分五品が尙ほ印度に存したことを傳へてゐる。後又此の曇無讖本に後分經が追編されたことは、唐灌頂の大般涅槃經疏第三十三に居士請僧經を引いて、涅槃後分に更に燒身品、起塔品、囑累品の三品ありといひ、又現藏中に若那跋陀羅、會寧共譯の大般涅槃經後分二卷、卽ち憍陳若品之餘、遺敎品等の五品を有するものを收めてゐることに

よつて知られる。されば大般涅槃經は後世に至るまで追補が繼續したものといふべきである。

又華嚴經は摩訶般若、大集、寶積等に同じく、多種の同類の經を系統的に纂輯したものであるが、その中、東晉佛陀跋陀羅の譯した經は所謂七處八會で、六十卷三十四品あり、唐實叉難陀の傳へた經は七處九會で、すべて八十卷三十九品になつてゐる。又此中の最後の入法界品は、六十華嚴では第四十四卷已下十七卷に亙り、八十華嚴では第六十卷已下二十一卷に亙り、唐般若の譯した梵經では廣く四十卷に亙つてゐる。是亦後代になるに隨つて其本が漸次增廣されたことを證するのである。又金光明經の如き、北凉曇無讖の譯したものは唯だ四卷十八品に過ぎぬが、北周耶舍崛多の譯した金光明更廣大辯才陀羅尼經は五卷二十品あり、梁眞諦の金光明經には曇無讖の十八品の外に、別に三身分別、業障滅、陀羅尼最淨地、依空滿願の四品が加つて七卷二十二品あり、ついで隋闍那崛多は更に銀主陀羅尼及び付囑の兩品を出し、隋寶貴は此等諸本を合糅して合部八卷二十四品とした。此經には現に梵本もあるが、その本は二十一品になつて居つて、曇無讖本と內容がほゞ同一である。之に依ると今の梵本は早い時代の形を保つてゐることを知るのである。唐代になつて義淨の傳へた金光明最勝王經は十卷三十品あつて、その中には密敎的說述が非常に增大されてゐる。又此の中の三身分別品は、眞諦の譯本に於て始めてあらはれて來たので、

即ち無著時代に追補せられたものと認めなければならぬ。又楞伽經の如き、劉宋求那跋陀羅の譯した楞伽阿跋多羅寶經は唯だ四卷一品であるが、然るに唐實叉難陀の大乘入楞伽經は七卷十品あり、後魏菩提流支の入楞伽經は十卷十八品ある。菩提流支は實叉難陀より約二百年も前の人であるけれど、その品數幷に分量が增加してゐる點から見ると、彼の齎らした原本は多分實叉難陀の傳へたものよりも新らしかつたのであらうとおもはれる。

斯樣に一面に於て經典の增廣布衍が行はれたと同時に、他面に於ては亦受持傳寫の間に經の本文を修正し添削し、之に由りてその文義を整理し、若しくは新なる主張を附け加へんとすることも斷えず起つたやうである。彼の無量壽經の諸譯の如き、大阿彌陀經幷に平等覺經には彌陀の本願として唯だ二十四願を擧げてゐるのに、大乘無量壽莊嚴經には三十六願とし、無量壽經、大寶積經無量壽如來會には四十八願となし、梵文無量壽經及び西藏譯、幷に悲華經等には四十六願乃至五十餘願を列ねてゐる。のみならず同じ二十四願にしても、大阿彌陀經と平等覺經とはその順序も內容も異なつて居り、四十八願にしても無量壽經と他の諸本とは必ずしも同一でない。又これ等の諸本には過去の古佛を列ねてゐるが、その中、大阿彌陀經には定光佛以下三十四佛、平等覺經には三十七佛、莊嚴經には三十八佛、無量壽經には五十三佛、無量壽如來會には四十三佛、

梵文には八十一佛としてゐる。これ等は皆時代を經るに隨つて、漸次その本文に對して刪補が加へられたことを語るのである。又阿彌陀經の如き、羅什の本には諸佛證讃の條下に六方三十八佛の名を擧げ、梵本には六方四十佛、玄奘の經には十方四十二佛を列ねてゐる。これ亦展轉傳寫等の間に改修されたのであらうとおもはれる。又法華經の如き、竺法護の譯した正法華經は十卷二十七品、羅什の傳へた妙法蓮華經幷に闍那崛多の譯した添品妙法蓮華經は共に七卷二十七品、梵文法華經も亦二十七品であつて、品數は各本皆同一であるけれど、その配列の順序は二十一品已下に於て互に異なつてゐる。即ち羅什本では第二十一品に囑累品を置いてゐるのに、他の法護等の諸本では之を最後の第二十七品としてゐる。世親の妙法蓮華經優波提舍卷下にも普賢菩薩品及後品示現と書いてあるから、これも囑累品が最後に在つたものと見るべきである。ケルン H. Kern の英譯法華經序には、何れの經にも囑累品は最後に置かれてある事實に基き、法華經は最初唯だ二十一品（卽ち初の二十品と囑累品）の編成であつたと推定し、後の六品は後代に至つて附加されたものであるから、その順序が各本皆異なつてゐるのだといつてゐる。良に妥當の論斷と稱すべきものである。蓋し法護の譯本は羅什の本よりも其の記事が增加されて居つて、卽ち藥草喩品の中に迦葉の問答及び生盲の喩を出し、五百弟子品の初に海に入りて寶を取るの喩を擧げ、法師

品の初に寶蓋王及び其千子と善蓋太子との法供養のことを記し、又寶塔品の終りに提婆の授記作佛を說いてゐるのであり、且つ囑累品が最後に置かれてあるのでもあるから、これは翻譯は古いにしても、却て羅什本に就いて增廣を企てたものと認めなければならぬ。その後蕭齊の法獻が提婆達多品を傳へ、隋闍那崛多が普門品の重頌を譯出し、而して之を彼の本經に添加したから、今の妙法蓮華經はすべて二十八品になつてゐるので、此等は卽ち支那に於て增廣したものといふべきである。その他いづれの重譯經を檢して見ても、必ず章句の出沒異同幷に增廣布衍があつて、決して全編同一のものはない。譯者によりて多少譯語等の相違を生ずることは免れ得ないにしても、その程度に止まつてゐるものは極めて少い。されば主なる經典は到る處に於て常に删補が加へられたものと認めなければならぬ。佛陀の直說と信ぜられた金言に對し、競うて斯かる改竄を企てたことは甚だ驚くべき事實である。世親の俱舍論第八に、無上法王は久しく巳に滅度し、諸大法將も亦般涅槃し、聖敎支離して巳に多部となり、その文義に於て異執交々馳せて取捨情に任かす。今に於て轉た盛なり。傷むべきの甚しきであると嘆じてゐる。これは小乘諸部の確執について批難したのであるが、今の大乘經典の場合は更に之よりも甚しきものがあり、世親が若し之を見聞したら一層深き傷嘆を發するであらうと思はれる。さりながら之に依つて佛敎の敎義が進

展發達し、又各國各地方の情勢に順應して人心を指導することも出來たのであるから、和光同塵の見地に立つて大乘經典の含蓄せる眞價を是認し、之を體得せなければならぬのである。

第三章　經典成立の先後と其年代

第一節　經典の內容に就ての檢討

經典が佛陀の滅後、印度及び西域地方等に於て逐次編纂されたとする時、如何なる經典が先づ最初に編纂され、ついで如何なる經等がそれに續いたものか。その間に亦何等かの聯絡、何等かの系統があつたか否か。乃至それ等諸經典の成立年代等の諸問題も當然起つて來るわけである。然るに長い歲月の間に、廣汎なる地域に於て起つた出來事であるから、到底今日よりその眞相を明かにすることは出來ぬが、經中に說示せる敎旨に依つてその經の系統を推定し得べきものもあり、又その中の記事に依つて他經との先後及び聯絡關係を見出し得るものもあり、特に支那譯經史を檢討することに依つて諸經の成立年代も大體想定し得られるやうであるから、今左に之に就いて少しく論述することにしたのである。

先づ經中に說示せる敎旨に就いていはゞ、五道六道論の如き、大毘婆沙論第一百七十二に、有

餘部は阿素洛を立てゝ第六趣となすも、契經には唯だ五趣のみありと說くといひ、大智度論第十にも佛は亦分明に五道と說かず、五道と說くは說一切有部の僧の所說なり。婆蹉弗妬路 Vatsīputrīya 部の僧は六道ありと說くといつてゐるが、若し此說に依らば、增一阿含經第十八、正法念處經第十八を始め、四自侵經、分別善惡所起經、無量壽經卷下、無量義經、楞伽阿跋多羅寶經第三、大方等大集經第二十九、涅槃經第三十、同第三十九、菩薩本行經卷中、地藏十輪經第八等に五道の說を揭げてゐるのは、卽ち說一切有部の所傳を承けたものといふべく、法華經第一、同第六、大般泥洹經第一、金光明經第一、十卷楞伽經第七、菩薩處胎經第五、大寶積經第七十四菩薩見實會、同第八十八摩訶迦葉會、僧伽吒經、顯識經卷下等に六趣の說を擧げてゐるのは、犢子部の所傳に從つたものと見るべきである。

又佛身論の如き、維摩、法華、涅槃等の諸經には、說一切有部等に同じく唯だ生法二身を分別し、楞伽、金光明、無上依等の諸經には法報化三身の別を立てゝゐるが、若し三身の說は二身論の後に起つたとすれば、楞伽等は卽ち維摩、法華の後に編纂されたことを知ると同時に、亦此等諸經の間に各その聯絡のあつたことも想像される。又心識論の如き、般若、法華等には小乘諸部に同じく單に六識を擧げ、深密、楞伽、佛地、密嚴等の諸經には阿賴耶等の八識を說いてゐる。

八識の說が六識の後に至つて唱道されたことは疑を容るべくもないのであるから、深密等は卽ち般若の後に編纂されたことを知ると同時に、亦その系統が互に異なつてゐることも察せられるのである。又般若等には布施等の六波羅蜜を以て菩薩修道の規範としてゐるのに對し、華嚴經第三十八、解深密經第四、金光明最勝王經第四、大乘寶雲經第一、菩薩善戒經第九等には十波羅蜜の說を揭げてゐる。十波羅蜜は六波羅蜜の後に智等の四波羅蜜を加へたのであるから、華嚴等の諸經は卽ち般若の後出なることを認めなければならぬ。又大乘菩薩戒の如き、優婆塞戒經第三には波羅夷罪として、殺盜婬妄及び說四衆過、酤酒の六種を說き、菩薩地持經第五等には自讚毀他、慳惜財法、愼不受悔、謗亂正法の四種を擧げ、菩薩善戒經には殺盜婬妄に自讚毀他等の四種を加へて八波羅夷となし、梵網經には此の八波羅夷に更に說四衆過及び酤酒の二を加へてすべて十波羅夷としてゐる。これ亦此等諸經の間に聯絡があり、先後があることを示すのである。

又大阿彌陀經卷下、諸菩薩求佛本業經には六波羅蜜經の名を擧げ、優婆塞戒經第一に法華、大城、摩男優婆塞、智印等の諸經の名を出し、觀普賢菩薩行法經に法華經を指し、大般涅槃經には法句、瞿師羅、摩訶般若、首楞嚴、法華、雜華及び城經等の諸經の名を擧げ、大般泥洹經第四には如來藏經の名を出し、法滅盡經に首楞嚴、般舟三昧の經名を出し、大方便佛報恩經第六には毘沙

門經を擧げ、大方等無想經第五に大雲及び涅槃の經名を出し、無量義經には摩訶般若、華嚴海空の名を揭げ、入楞伽經第七には勝鬘經を指し、文殊師利問經卷上には象龜、大雲、指鬘、楞伽等の諸經の名を列ね、菩薩善戒經第六には善生經を指し、觀虛空藏菩薩經には決定毘尼經を引き、相續解脫地波羅蜜了義經に相續解脫經を引き、觀藥王藥上經には觀佛三昧海經を出し、一切智光明仙人慈心因緣不食肉經幷に彌勒上生兜率天經等には彌勒下生經を指し、仁王般若經卷上には摩訶般若、金剛般若、天王問般若、光讚般若等の名を列ね、大乘密嚴經卷上には十地、華嚴、大樹、神通、勝鬘等の經名を揭げてゐるが、これは此等の諸經が各々所引の經の後に編纂されたことを證するのである。又雜阿含經第二十三幷に同第二十五には、阿育王及び優波掘多 Upagupta の事蹟幷に沸沙蜜多羅 Pusyamitra 王、及び拘睒彌國に於ける破佛の事を敍し、增一阿含經第二十四に文荼 Muṇḍa 王の事を記するを始めとし、大方等大集經第二十二、佛藏經卷中、舍利弗問經、大比丘三千威儀卷下等には、曇無德等の五部律のことを記し、文殊師利問經卷下幷に舍利弗問經には上座大衆十八部分裂の記事を載し、大悲經第二に毘提奢、提知迦、優波毱多、阿輸婆毱多、鬱多羅、設陀沙荼、大精進、末田提、迦葉、闍知迦、祁婆迦等の諸論師の事蹟を擧げ、大方等無想經第五には南印度娑多婆呵那 Sātavāhana 王の興法、同第六には同增長女王等の歸佛の事を記し、

蓮華面經卷下には罽吱曷羅倶邏 Mihirakula 王の罽賓に於ける佛敎破滅の事を敍し、又入楞伽經第九には龍樹、摩訶摩耶經卷下には優波掬多、尸羅難陀、馬鳴及び龍樹の出世を記し、その他、諸經に尙ほ此種の記事が少くない。此等はたとひ懸記の形式になつてゐるにしても、卽ちその事實が發生した已後に於て記述されたものであることは言を俟たぬ。

然るに從來の學者は大小乘經のすべてを以て悉く佛陀の直說となし、敢てその眞否を疑はなかつた結果、佛陀は無方針に斯かる多數の經典を演說される筈もなく、必ずや何等かのプランの下に秩序的にそれを開示されたに相違ないとし、玆にその所謂プランなるものを考究し、佛陀の說法に三時五時等の次第前後があることを唱道するに至つた。卽ち解深密經第二無自性相品には有空中の三時の說を出し、世尊は初め一時に婆羅痆斯仙人墮處施鹿林中に在りて、唯だ聲聞乘に發趣するものゝ爲に四諦の相を以て正法輪を轉ぜられたが、これは甚だ奇、甚だ希有であつて、一切世間の諸天人等が曾て能く如法に轉じたものはないけれど、而も彼の法輪は有上有容にして未了義であり、諸の諍論安足の處所である。世尊は昔し第二時の中に在りて唯だ大乘に發趣するものゝ爲に、一切法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃に依り、隱密の相を以て正法輪を轉ぜられた。これは更に甚だ奇、甚だ希有であるけれど、彼の法輪も亦有上有容にして猶ほ未了義であり、

諸の諍論安足の處所である。世尊は今第三時の中に於て普く一切乘に發趣するもの丶爲に、一切法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃無自性性に依りて、顯了の相を以て正法輪を轉ぜられる。これは第一甚だ奇にして最も希有であり、無上無容にして眞の了義であり、諸の諍論安足の處所でないと說いてゐるが、この記述は佛陀は初時に阿含有敎を說き、第二時に般若空敎を說き、第三時に中道解深密經を說いたとするのであつて、卽ち佛陀一代の施化の本意は深密中道の敎旨を開顯せんとするに在るものとしたのである。大品般若經第十二無作品に第二法輪轉の記事が揭げてあるが、今の三時法輪の說は多分彼經からヒントを得たのであらう。蓋し佛陀四十五年の說法に斯かる三期の區別があるとするが如きは、今日に於て到底認め得られないことであるけれど、若し之を佛滅後に於ける敎理發達の先後次第を示したものとすれば、頗る興味があり、且つ又史實にも善く合することを見るのである。卽ち佛滅四五百年間は專ら阿含の尊重された初期有敎時代であり、その後三四百年間は大乘勃興し、主として般若空觀の說が行はれたから、之を第二期空敎時代と稱すべきであり、而して佛滅八九百年頃に至つて彌勒、無著等の諸大論師が出世し、深密、瑜伽の敎旨を唱道して大に敎界を風靡したのは、正しく第三期中道敎時代と名け得られるからである。支那に於ても南北朝時代に敎相判釋の說が盛んに行はれ、江南に三家、江北に七家

があつて各其所見を發表し、後亦隋唐代の諸家も之に倣うて敎相を判じ、凡べて二十五家の説があつたといはれてゐる。就中、劉宋慧観は佛陀一代の說法に五時の別があるとし、第一時には聲聞等の爲に阿含を說き、見有得道の理を示して、三乘各別にその法を學せしめたものとなし、之を有相敎又は三乘別敎と名け、第二時には菩薩等の爲に般若を說き、見空得道の法を示して、三乘をして同じく皆之を學せしめたとし、之を無相敎又は三乘同敎と名け、第三時には維摩、思益等の經を說き、二乘をして小執を捨てしめんが爲に、特に小乘を貶して大乘を褒揚したとなし、之を褒貶敎と名け、第四時には會三歸一の旨を說き、三乘をして同じく一佛乘に歸せしめんが爲に法華を說いたとし、之を同歸敎と名け、最後の第五時には涅槃を說き、以て如來常住悉有佛性の極致を示されたものとなし、之を常住敎と名けてゐる。これは佛陀四十五年の說法の次第を五期としたのであるが、しかしその說も亦滅後に於ける佛敎の敎理發達の歷程に大體善く合するやうである。卽ち阿含有相敎が第一期に於て專ら行はれ、般若無相敎がついで第二期に成立したことは解深密經にも說く所であり、又般若の本文から見ても、支那譯經史から見ても、その事實なることが立證される。蓋し般若は緣起の敎旨に基いて諸法皆空を鼓吹すると同時に、亦慈悲攝化の方面から淨佛國土成就衆生を志願せなければならぬことを敎へたのである。その中、諸法皆空の

說は、彼の小乘聲聞の人が五蘊十二處等の煩瑣なる名數に囚はれて、眞の解脫に遠ざかりつゝあるのに對し、驀直に法空を拈提して向上の一路に進むべきことを示したのであり、また淨佛國土の敎義は、聲聞の徒が山林に隱栖し、唯だ己れを潔うして涅槃に入らんことをのみ期待し、毫も社會敎化を企てないのに對し、自ら成佛の可能を覺悟し、現實世界の改造淨化を圖らねばならぬことを主張したのであるから、般若は卽ち阿含初時敎に對する改革運動であつたとすべきである。又維摩が般若の後に至つて編纂されたことも事實で、そのことは彼經に六度無極の說を擧げ、且つ淨佛國土の敎旨を委說するのに見ても明かである。法華は主として聲聞の授記作佛を說き、唯有一乘の旨を明かにした經であるが、これは般若の菩薩成佛の說を承け、更に之を强調したのであるから、當然般若の後に唱へられたものとすべきである。勿論般若の敎旨も聲聞の人に反省を促がし、同じく大乘に歸して成佛を期待せしめんとするに在つたのであるけれど、三乘共敎の建前を取つた爲にその趣旨が充分徹底せず、故に一方に於て維摩の如き褒貶敎が起り、他方に於て亦法華の如き同歸敎が起つたものと解せられる。隨つて維摩と法華との先後は之を確定することは難いが、然し法華壽量品の說は維摩の佛身論よりも進んでゐるやうであり、又靈山淨土の說は維摩の心淨土淨論を具體化したものと見るべく、且つ支那譯經史からいつても、法華を第四時と

することが妥當かと思はれる。涅槃が法華の役に編纂されたことは、啻にその譯出が後時に在るのみでなく、彼の經中に法華の名を擧げてゐるのに見ても明かである。されば此の五時の敎判は偶然にも滅後に於ける敎理發達の次第に合するものといふべきである。

本邦江戸時代に於て富永仲基は大乘非佛說論を唱道し、その著出定後語中に敎起の前後と題し、所謂加上說を提唱してゐる。今その要旨を擧げて見ると、釋迦文既に沒して僧祇結集し、迦葉始めて三藏を集む。而も大衆も亦三藏を集めて分れて兩部となり、而して後復分れて十八部となる。その述ぶる所は有を以て宗となし、事皆名數に在りて全く方等微妙の義なし。これ所謂小乘なり。是に於て文殊の徒、般若を作りて以て之に上す。その言ふ所は空を以て相となし、而も事皆方廣なり。これ所謂大乘なり。此の時大小二乘未だ年數前後の說あらず、其の大乘を張るものは則ち曰く、得道の夜より涅槃の夜に至るまで常に般若を說くと。その小乘を張るものは則ち曰く、轉法輪經より大涅槃に至るまでを集めて四阿含となすと。乃至、是に於て法華氏の言興る。その言に云く、成正覺より以來四十餘年を過ぐ、無數の方便をもて衆生を引導す。我が所說の諸經中に法華最第一たり。但だ菩薩の爲にして小乘の爲にせず。諸法實相を觀ずる是を菩薩行と名くと。乃至、これを四十餘年の後に託して從前の諸家を愚法にし、亦これを實相に託して從前の有空を

破す。これ法華氏は乃ち大乘中の別部にして、從前の二乘を幷せて之を斥く。乃至、是に於て華嚴氏の言與る。乃ち之を二七日の前に託して以て從前の小乘を斥け、又之を日輪の先づ諸大山王を照らすに譬へて以て從前の大乘を斥け、而して特り一家の經王となす。誠に加上の魁なるものなり。乃至、是に於て大集泥洹兼部氏の言與る。乃ちその二經を作爲して以て大小二乘を合せ、且つ重きを涅槃に歸す。十六年始めて大集を說くといふが如き、これ暗に般若の前に託して二乘の中間に出づとするなり。乃至、涅槃も亦同手の作なり、故に言語多く相類す。これ則ち之を佛滅に託して以て此經の出の年數の最後に在るを證し、又之を譬ふるに醍醐を以てして、此經の義の最も純粹なるを明かにし、又毘尼幷に戒乘緩急を擧げて、以て大小二乘の幷に遠ざけ難きことを說く。後世捃拾敎と名くる如きは兼部氏たるを知らざればなり。是に於て頓部氏の說與る。その契經凡そ二十あり、楞伽はその最なり。從前の諸經は言皆煩重、その趣牛毛にして迂遠なるを以て、更に激切の語を立てゝいふ、一切煩惱本來自ら離る、斷と不斷とを說くべからず。一念不生卽ち是れ佛にして、一地より一地に至らずと。その言直切にして復環同の說なく、以て從前の因陀羅を破す。乃至、是に於て祕密曼陀羅金剛手氏の敎與る。その敎に云く、世尊は一切智智を以て無量の衆生の爲に廣演分布し、種種の趣、種種の欲性、種種の方便道に隨

つて一切智智を宣說すと。又云く契經は乳の如く、調伏は酪の如く、對法は生蘇の如く、般若は熟蘇の如く、總持門は醍醐の如しと。これ此敎は諸家を攝するに一切智智を以てし、乃ち之をその所謂曼陀羅に合し、遂に以て重きをその所謂毘盧遮那阿字門に歸するを見るべきなり。おもふに此經王は最後に出づ。乃至、是れ諸敎興起の分なり。皆本とその相加上するに出づ、その相加上するにあらずんば則ち道法何ぞ張らん。乃ち古今道法の自然なるものなり。然るに後世の學者皆徒らにおもへらく、諸敎は皆金口の親しく說く所にして、多聞の親しく傳ふる所なりと。殊に知らず、その中却て許多の開合あることを。亦惜からずやと記してゐるのがそれである。これは蓋し最初に小乘三藏が結集され、次に之に加上して般若空宗が興り、次に法華が興つて大小有空の二乘を斥けて諸法實相の說を唱へ、次に華嚴が起つて更に亦從前の大乘を斥け、次に大集及び涅槃が起り、前に反して大小二乘を兼ね學すべきことを主張し、次に楞伽が起り、從前の煩重迂遠を排して頓悟直入の說を唱へ、最後に祕密曼荼羅宗が起つて諸家の說を綜合攝取し、之を毘盧遮那阿字門に歸したのだといふのである。主として支那已來の敎相判釋を參照したので、その說の盡きない所もあり、見方の正しくない點もあるが、しかし大體に於てその考案は大乘經典發達の歷程に合するものがあるといはなければならぬ。ひたすら傳統を重んじ、文句の解釋にのみ沒

頭して、些の新味の見るべきものがなかつた江戸時代に、一儒士によりて斯かる破天荒の説が唱道されたことは、實に空谷跫音の感なきを得ないのである。

第二節　支那譯經史に就ての檢討

敎理發達の方面から考察すると、主なる經典の成立は之を三期若しくは五期等に分類することが出來るやうである。然るに佛敎の經典は頗る多數であり、その中の說義も亦甚だ多岐に亙り、實に蘭菊美を競ふといふ有樣であるから、たとひ敎理發達の大系から之を三期若しくは五期等に分類するにしても、決して斯かる範疇の下にすべての經典を類從し得べきものでなく、況やそれに依つて諸經の成立年代等を考定せんとするが如きは實に思ひも寄らぬことである。のみならず佛敎の母國たる印度は有名な非歷史國であり、又西域地方等にも此種の史的文獻は存しないのであるから、この方面より本問題の史料を得ることは殆んど絕望である。さりながら支那には譯經に關する諸種の記錄が備つて居つて、何の時代に何人が何經を傳譯したといふ事實が判明してゐるから、それに依つて大體諸經成立の年代、若しくはその先後を想察することが出來るのである。

これが今日に殘された唯一の史料であつて、甚だ貴重すべきものであるから、今之に就いて檢討を加へることにしたのである。

支那の譯經は後漢明帝代（五八―七五）に始まつたと稱せられ、現に竺摩騰の譯として四十二章經一卷を傳へてゐるが、然るに此經は別章に論ずるが如く梵莢の譯出ではなく、支那に於て撰集されたものと認められるのである。後漢桓帝の初（一四七）に至りて安世高は支那に渡來し、安般守意經等の三十餘部の經を譯し、ついで竺佛朔及び支讖は桓帝の末（一六七）を以て洛陽に來り、道行般若經、首楞嚴經、般舟三昧經、伅眞陀羅經、幷に文殊問菩薩署經、兜沙經、阿閦佛國經、內藏百寶經等の諸經を翻傳し、靈帝の時、支曜、安玄、嚴佛調等があり、成具光明三昧經、法鏡經等を出し、三國時代に及んで吳支謙は大明度經、維摩詰經、本業經、慧印三昧經、須賴經、大阿彌陀經等の諸經、同康僧會は六度集經、曹魏白延は首楞嚴經等を譯出した。此の中、安世高の齎したものは殆んど皆小乘關係のものであるけれど、支讖及び支謙等の傳へたものは多く大乘經典であつて、その數二十餘部に上るのである。之に依ると西曆紀元二世紀頃までに般若、首楞嚴已下二十餘部の大乘經典が既に編纂されたことを推知し得るのである。

西晉代になると、竺法護は光讚般若經、正法華經、普曜經、大哀經、漸備一切智經、無量清淨

平等覺經、文殊師利佛土嚴淨經等の數十部の大乘經典を翻傳し、ついで無羅叉は放光般若經、竺叔蘭、帛法祖、法炬、衞士度、支敏度等は維摩詰經、首楞嚴經、如來藏經等を譯出した。この中には重譯經もあるが、しかし正法華經、漸備一切智經を始め、新經の齎されたものも亦少くない。蓋し龍樹は佛滅七百餘年、卽ち西曆三世紀頃に印度に出現した大論師であつて、その年代は支謙、竺法護等と殆んど同時と認められる。今試みに龍樹の著書中に引載せられたる大乘經典と、支讖已下竺法護に至る諸三藏が支那に齎した大乘經典とを對照して見ると、般若波羅蜜經を始め、般舟三昧經、慧印三昧經（大智度論には智印經。已下括弧內は龍樹所引の經名）、法華經、賢劫經、密迹力士經、持心梵天所問經（持心經）、漸備一切智經、維摩詰經、首楞嚴經、阿彌陀經、諸佛要集經、佛昇忉利天品經（三十三天品經）、阿耨達龍王經（龍王問經）、無盡意經、彌勒菩薩所問本願經（彌勒問經）、大善權經（方便經）、龍王兄弟陀達誠王經（降難陀婆難陀龍王兄弟經）、十地經、大哀經（大悲經？）、文殊師利淨律經（大乘淨毘尼）、梵女首意經（德女經）、阿述達經（無畏王子經）、華積陀羅尼（華聚經）、郁伽長者經等の二十餘部が彼此一致し、尙ほこの外に龍樹の大智度論、十住毘婆沙論等には不思議解脫經、雲經、大雲經、寶雲經、華首經、華手經（一名斷一切衆生疑經）、網明菩薩經、四天王經、富樓那彌帝隸耶尼子經、寶頂經、無行經、阿修羅王問經、菩薩本生經、

諸佛本起經、文殊師利本緣經、大乘寶月童子所問經、大乘決定王經、大智經、大神通經等の十數部の大乘經名を擧げ、若しくは其文を引用してゐる。龍樹菩薩傳に依ると、龍樹は雪山塔中に於て老比丘より摩訶衍經を受け、ついで諸國を周遊して餘經を求めたが、閻浮提中に於ては得る所がなかつた。時に大龍菩薩が現はれて彼れを接して龍宮に入り、七寶藏を開いて諸の方等深奧の經典を授けたことを記述してゐる。此中の龍宮とは何の地點を指すのか明かならぬけれど、當時龍樹が印度及びその附近の地方に於て探訪し得た大乘經典は、ほゞ上述の四十餘部に過ぎなかつたのではないかと思はれる。然るに支那には此等諸經の外に尙ほ伅眞陀羅經、阿閦佛國經、微密持經、阿惟越致遮經、文殊師利寶藏經、濟諸方等學經、觀世音受記經、文殊師利佛土嚴淨經、須眞天子經、德光太子經、如來藏經等の數十部の經が傳譯されてゐたのである。之に依ると龍樹所引の經中にも當時支那に傳はらなかつたものがあると同時に、亦彼の所引以外に更に多くの大乘經典が法護等によりて支那に翻傳されたことを知るのである。竺法護は燉煌の產で、出三藏記集第十三に依ると、西晉武帝の時西域諸國を遊歷し、三十六國の語に通じ、到る處經文を搜索して大に胡本を得、遂に長安に來つて翻譯に從事したことを傳へてゐる。されば法護の齎らしたものの中には、西域地方に於て編纂されたものもあつて、それ等が龍樹の手に入らなかつたのではな

いかと想像される。又玄奘譯の大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記に依ると、佛涅槃の後八百年中に執師子國勝軍 Mahāsena 王の都に難提蜜多羅 Nandimitra と名くる大阿羅漢があり、將に涅槃せんとする時、衆の問に對して種種の事を答ふる中、般若波羅蜜多經已下凡そ五十部の大乘經名及び五阿含等を擧げ、此等の三藏を誦持し、解說するものは、當來彌勒下生の時、人身を受けて解脫すべきことを說いたといつてゐる。勝軍王は大史 Mahāvaṃsa に、即位の後、大小兼學の阿跋耶祇釐 Abhayagiri 住部を保護し、小乘專攻の摩訶毘訶羅 Mahāvihāra 住部を壓迫したことを記し、又ケルン H. Kern の印度佛敎史には、彼王は西紀二九〇年に錫蘭祇洹精舍の基礎を打建てたことを傳へてゐる。之に依ると彼の難提蜜多羅は竺法護とほゞ同代であつたことを知ると同時に、當時錫蘭の地にも多くの大乘經典が藏されてゐたとすべきである。今試みに彼の法住記所載の五十部の經と、竺法護等の所譯とを對照して見ると、般若波羅蜜多經を始め、妙法芬陀利迦經（正法華經。括弧內は法護等の譯名）、金剛手藏經（密迹金剛力士經？）、首楞伽摩三摩地經（首楞嚴三昧經）、幻喩三摩地經（如幻三昧經）、集諸功德三摩地經（等集衆德三昧經）、逮如來智印三摩地經（慧印三昧經）、具諸威光三摩地經（成具光明三昧經）、梵王問經（持心梵天所問經）、海龍王問經（海龍王經）、無熱惱龍王問經（阿耨達龍王經）、寶髻問經（寶結經）、寶女問經（寶女問慧經）、猛授問經

（猛施經、說無盡辯經（無盡意經）、說無垢稱經（維摩詰經）、未生怨王經（普超三昧經）、佛花嚴經（漸備一切智經）、十佛名經（十方佛名經）、無量光衆經（大阿彌陀經）、極樂衆經（阿彌陀經）、寶篋經（文殊師利寶藏經）、高頂王經（頂王經）等の二十餘部は彼此一致するやうである。されば此等の諸經は西暦三世紀頃迄に既に印度等に於て行はれてゐたことを知るべきである。

東晉時代になると、帛尸梨蜜多羅は大孔雀王神呪等を出し、竺佛念は菩薩瓔珞經、十住斷結經、菩薩處胎經等を翻じ、姚秦鳩摩羅什は大品及び小品般若經、華首經、法華經、首楞嚴經、自在王經、佛藏經、菩薩藏經（一名富樓那問）、金剛般若經、諸法無行經、稱揚諸佛功德經、阿彌陀經、幷に中論等の諸論を譯し、北凉曇無讖は涅槃經、大集經、大雲經、悲華經、金光明經、菩薩地持經、優婆塞戒經等を出し、又佛陀跋陀羅は華嚴經、觀佛三昧經、文殊師利發願經等を譯出した。此等の中には龍樹時代に既に存したものもあるけれど、多くは龍樹以後始めて現はれたものゝやうである。就中、涅槃經、金光明經の如きはその最も主なる經典であつて、即ち如來藏幷に菩薩本業思想の發展と認められる。劉宋已後、曇摩蜜多、畺良耶舍等は觀普賢經、觀虛空藏經、觀無量壽經、觀彌勒上生經等を譯出したが、これは觀佛三昧經と同種の觀經であつて、此の時代に現はれた特殊の經典である。ついで求那跋陀羅は勝鬘、楞伽、相續解脫等の諸經を出し、北魏菩提流支は深

密解脱及び入楞伽等を傳へ、陳眞諦は金光明、無上依經等を始め、攝大乘等の諸論を譯出した。これ等は概ね瑜伽派の聖典であつて、當時印度に於て八識三性等の説が新に勃興したことを知るのである。降つて隋那連提黎耶舍は大集月藏經及び日藏經等を出し、闍那崛多は不空羂索呪經、大法炬陀羅尼經、大威德陀羅尼經等を譯し、唐波羅頗は寶星陀羅尼經、阿地瞿多は陀羅尼集經、杜行顗は佛頂尊勝陀羅尼、阿儞眞那は隨求陀羅尼、菩提流志は不空羂索神變眞言經等を翻傳した。此等は陀羅尼宗の漸次擡頭したることを語るのである。玄奘は七十餘部一千數百卷の翻譯を完成したが、その主なるものは論部であつて、經典は密部を除く外、重譯に係るものが多い。實叉難陀は八十華嚴を出し、地婆訶羅、提雲般若及び般若等も亦華嚴の諸經を傳譯したが、それ等も亦概ね重譯又は支派に過ぎぬ。菩提流志の大寶積經は四十九會の經を合集したもので、その中、二十三會八十一卷は古譯を收め、餘の二十六會三十九卷は新譯にかゝるのである。但し新譯といつても概ね皆重譯であつて、新經は甚だ少い。義淨も五十餘部の梵莢を齎らしたが、その大部分は律部又は重譯であつて、新經は密部の外、僅に二三を出でぬやうである。されば此時代に印度等に於て新たに編纂されたものは主として密部の經典であつて、他は改修若しくは增廣に過ぎなかつたことを察せなければならぬ。開元已後は金剛智、善無畏、不空等が來朝して更に金剛頂經、

大日經等の多數の祕密經軌を翻傳し、宋代に又法天、法賢、施護等は多數の梵夾を譯出し、こゝに支那譯經史は掉尾の盛觀を以てその終りを告ぐるに至つたのである。

蓋し譯經の年時が必ずしも經典成立の年代を意味するものでないことは言を俟たぬが、しかしその年時が經の編纂年代の最下限を示すものであることは明かである。但し菩薩地持經の如き、涅槃經の如き、又無著、世親等の著書の如き、編纂後幾くもなくして支那に齎らされたものも亦少くない。特に東晉已後西域地方より來朝するもの相踵ぎ、又支那より渡印するものも續出した結果、當時印度等に存在せし經本は殆んど殘りなく採訪されたかの觀がある。されば西曆五世紀已後は、譯經の年代がほゞその經典編纂の年代を示すものと見ることが出來る。五世紀已前も上に述べた如く、西晉竺法護を中心としてその前後を區畫すれば、大體に於て主なる經典の成立年代を推定することも出來るやうである。兎に角、現存の文獻に於ては、支那の譯經史が經典の成立及びその先後を考定すべき殆んど唯一の資料として貴重せられねばならぬのである。

第三節　支那譯經表

支那の譯經は至元法寶勘同總錄第一に依ると、後漢明帝永平十年（西紀六七）攝摩騰が始めて四十二章經を傳へて已來、元世宗至元二十二年（一二八五）に至るまで、凡そ二十二朝一千二百十九年繼續し、その間翻譯に從事した道俗は一百九十四人、譯出された經律論は一千四百四十部、五千五百八十六卷に上ることを記してゐる。その後明治十八年本邦に於て新たに編成印刻せる縮刷大藏經には、更に此外に密部の諸經軌を追加し、大小乘三藏幷に印度撰述雜部等、總計一千六百七十九部六千八十八卷を收めた。この中には固より多數の重譯があり、又支那撰述の僞經僞論も含まれてゐるのではあるけれど、兎に角驚くべき大數といはなければならぬ。蓋し此等聖典の傳譯に關しては、出三藏記集已下諸目錄に一一その譯者及び年代等を記錄してゐるが、然るにその記事は目錄に依つて異同があり、甲に於て失譯に編したものを乙には翻譯有源となし、又乙に於て疑惑若しくは僞妄に編したものを丙には眞經眞論となし、又前錄に記載せられなかつた譯經が、後錄に至つて追補されたものも少くないので、いづれを事實として認むべきか、研究を要すべきものが多多あるのである。譯經目錄は頗る早い時代から製作され、現に出三藏記集には苻秦道安の經錄を引載し、又舊錄及び別錄と稱するものも屢引用してゐる。歷代三寶紀第十五には作者未詳の衆經別錄二卷（似宋時述）、蕭齊僧祐の出三藏集記錄、北魏李廓の魏世衆經目錄、北齊法上の齊世衆經目錄、

梁寶唱の梁世衆經目錄、及び隋法經等の大隋衆經目錄を擧げて、一一その中の分類等を說示し、又その終りに漢時佛敎目錄、朱士行漢錄、舊錄、道安錄、聶道眞錄、竺道祖衆經錄等の二十四家の錄名を列ね、それ等は未だ檢せざる所であるといつてゐる。縮刷大藏經中には出三藏記集巳下二十二種の目錄を收め、此他にも大中祥符法寶錄等の二十一種がある。今左に之を列擧する。

一	出三藏記集十五卷	僧祐撰	梁天監十四年(五一五)
二	衆經目錄七卷	法經等撰	隋開皇十四年(五九四)
三	歷代三寶紀十五卷	費長房撰	隋開皇十七年(五九七)
四	衆經目錄五卷	彥琮等撰	隋仁壽二年(六〇二)
五	大唐東京大敬愛寺一切經論目五卷	靜泰撰	唐龍朔三年(六六三)
六	大唐內典錄十卷	道宣撰	唐麟德元年(六六四)
七	續大唐內典錄一卷	同上	同上
八	古今譯經圖紀四卷	靖邁撰	唐麟德頃?
九	大周刊定衆經目錄十五卷	明佺等撰	武周天册萬歲元年(六九五)
一〇	續古今譯經圖紀一卷	智昇撰	唐開元十八年(七三〇)
一一	開元釋敎錄二十卷	同上	同上

一二	開元釋教錄略出四卷	同上	同上
一三	大唐貞元續開元釋教錄三卷	圓照撰	唐貞元十年(七九四)
一四	貞元新定釋教目錄三十卷	同上	唐貞元十六年(八〇〇)
一五	續貞元釋教錄一卷	恆安撰	南唐保大三年(九四五)
一六	大中祥符法寶錄二十二卷(內五・九・一九の三卷闕 六・二〇の二卷殘缺)	楊億等撰	北宋大中祥符八年(一〇一五)
一七	天聖釋教總錄三卷(內上中二卷闕 下卷首部闕)	惟淨等撰	北宋天聖五年(一〇二七)
一八	景祐新修法寶錄二十一卷(內三・五・七・一一・一五・一九の六卷闕、八・二〇の二卷殘缺)	呂夷簡等撰	北宋景祐四年(一〇三七)
一九	福州東禪大藏經目錄一卷		北宋崇寧二年(一一〇三)
二〇	大藏經綱目指要錄八卷	惟白撰	北宋崇寧三年(一一〇四)
二一	湖州思溪圓覺禪院新雕大藏經律論等目錄二卷		南宋紹興二年(一一三二)已後
二二	唐本一切經目錄三卷(福州本藏)		南宋紹興二十一年(一一五一)頃
二三	平江府磧砂延聖院新雕藏經律論等目錄二卷		南宋端平元年(一二三四)
二四	安吉州思溪法寶資福禪寺大藏經目錄二卷		南宋淳祐十年(一二五〇)頃
二五	大藏目錄三卷(高麗再雕)		高麗高宗三十八年(一二五一)
二六	至元法寶勘同總錄十卷	慶吉祥等撰	元至元二十四年(一二八七)
二七	杭州路餘杭縣白雲宗南山大普寧寺大藏經目錄四卷		元大德三年(一二九九)

二八	大藏聖教法寶標目十卷	王古撰	元大德十年(一三〇六)
二九	大明三藏聖教南藏目錄一卷		明永樂元年(一四〇三)
三〇	大明三藏聖教北藏目錄四卷		明正統五年(一四四〇)
三一	大明重刊三藏聖教目錄一卷		明崇禎十五年(一六四二)頃
三二	閱藏知津四十四卷總目四卷	智旭撰	明永曆八年(一六五四)
三三	如來大藏經總目錄一卷(西藏譯大藏經漢字目錄)		清康熙二十二年(一六八三)
三四	如來大藏經總目錄一卷(蒙古譯大藏經漢字目錄)		清康熙二十二年(一六八三)頃
三五	大清三藏聖教目錄五卷		清乾隆三年(一七三八)
三六	御譯大藏經目錄一卷(滿洲譯大藏經漢字目錄)		清乾隆五十五年(一七九〇)頃
三七	御譯大藏經目錄一卷(衞藏通志第十六所收)		?
三八	東叡山寬永寺一切經目錄五卷		慶安元年(一六四八)
三九	黃檗藏目錄一卷(內容三〇に同じ)		延寶六年(一六七八)頃
四〇	緣山三大藏目錄三卷	隨天撰	延享五年(一七四八)
四一	大日本校訂縮刷大藏經目錄一卷		明治十八年(一八八五)
四二	大日本校訂藏經目錄一卷(卍藏經目錄)		明治三十八年(一九〇五)
四三	大正新脩大藏經總目錄(昭和法寶總目錄第一所收)		昭和四年(一九二九)

支那譯經表

世代	譯者	生國	經名	縮藏	正藏	三藏記	法經錄	三寶紀	彥琮錄	內典錄	武周錄	開元錄
後漢	迦葉摩騰	中印度	四十二章經	藏五	一七	二	六	四	二	一	八	一
後漢	支婁迦讖	月支	雜譬喩經	暑七	四	四（失譯）		四		一	八	一
後漢	支婁迦讖	月支	道行般若經	月六	八	二	一	四	二	一	二	一
後漢	支婁迦讖	月支	兜沙經	天一〇	一〇	二	一	四	五（闕本）	一	二	一
後漢	支婁迦讖	月支	阿閦佛國經	地八	一一	二	一	四	一	一	四	一
後漢	支婁迦讖	月支	遺日摩尼寶經	地一二	一二	二	一	四	二	一	二（法護）	一
後漢	支婁迦讖	月支	無量淸淨平等覺經	地八	一二	二（法護）	一（白延）	四	二（白延）	一	三（白延）	一
後漢	支婁迦讖	月支	般舟三昧經（一卷）	玄九	一三	二	一	四	五（闕本）	一	三	一
後漢	支婁迦讖	月支	般舟三昧經（三卷）	玄九	一三				一（法護）		三	一
後漢	支婁迦讖	月支	文殊師利問菩薩署經	宙八	一四	二	一	四	一	一	一	一
後漢	支婁迦讖	月支	伅眞陀羅所問三昧經	宇九	一五	二	一	四	二	一	四	一
後漢	支婁迦讖	月支	阿闍世王經	宇八	一五	二	一	四	二	一	四	一
後漢	支婁迦讖	月支	內藏百寶經	宙八	一七	二	一	四	一	一	四	一

安世高（安息）								
長阿含十報法經	昃一〇	一	二	三	四	二(失譯)	一	八	一
人本欲生經	昃一〇	一	二	一	四	一	一	一	一
尸迦羅越六方禮經	昃八	一	四(失譯)	三(法護)	四	二(法護)	一	八	一
一切流攝守因經	昃八	一	二	三	四	二	一	八	一
四諦經	昃八	一	二	三(康孟詳)	四	二(康孟詳)	一	八	一
本相猗致經	昃八	一	二	三	四	二	一	八	一
是法非法經	昃八	一	二	三	四	二	一	八	一
漏分布經	昃八	一	二	三	四	二	一	八	一
婆羅門子命終愛念不離經	昃八	一	四(失譯)		四		一	八	一
十支居士八城人經	昃八	一	四(失譯)	三	四	二(失譯)	一	八	一
普法義經	宿七	一	二	三	四	二	一	八	一
五陰譬喩經	辰六	二	二	三	四	二	一	九	一
九横經	宿七	二	二	三	四	二	一	九	一
轉法輪經	辰六	二	二	三	四	二	一	九	一
八正道經	辰六	二	二	三	四	二	一	九	一
婆羅門避死經	昃四	二	四(失譯)	四(別生)	四	三(別生)	一	八	一

安　世

阿那邠邸化七子經	民四	二	四(失譯)	三	四	二(失譯)	一	八	一
阿難同學經	宿八	二	四(失譯)	三	四	二(失譯)	一	八	一
七處三觀經	辰六	二	二	三	四	二	一	九	一
阿含正行經	宿八	二	四(失譯)	三(失譯)	四	一(失譯)	一	七	一
太子慕魄經	宙五	三		六(撰集)	四	三(別生抄)		五	一
大乘方等要慧經	地一二	一二	四(失譯)	一	四	二(失譯)	一	一	一
寶積三昧文殊師利菩薩問法身經	地一二	一二	四(失譯)	一(失譯)	四	一(失譯)	一	一	一
明度五十校計經	玄四	一三	二	一	四	一	一	一	一
阿難問事佛吉凶經	宿六	一四	四(失譯)	三(法堅)	四	二(法堅)	一	八	一
犍陀國王經	宿七	一四	四(失譯)	三(失譯)	四	一(失譯)	一	七	一
長者子懊惱三處經	宿七	一四	四(失譯)	三(失譯)	四	一(失譯)	一	七	一
長者子制經	宙七	一四	四(失譯)	一	四	二(失譯)	一	四	一
摩鄧女經	宿六	一四	四(失譯)	三(失譯)	四	二(失譯)	一	八	一
奈女祇域因緣經	宿六	一四	二(法護)	三(法護)	四	一(法護)	二(法護)	八	一
奈女耆婆經	宿六	一四							
大安般守意經	宿五	一五	二	三	四	一	一	七	一

高

佛印三昧經	宙八	一五	四(失譯)	一(失譯)	四	三(別生抄)	一	一	一
自誓三昧經	宙八	一五	四(失譯)		四		一	五	一
父母恩難報經	宿八	一六	四(失譯)	四(別生)	四	三(別生)	一	八	一
溫室洗浴衆僧經	宿八	一六	二(法護)	一(法護)	四	一(法護)	二(法護)	九	一
罪業應報教化地獄經	宙八	一七	四(失譯)	三(失譯)	四	一(失譯)	一	八	一
分別善惡所起經	宿六	一七	四(失譯)	三(失譯)	四	三(別生抄)	一	九	一
處處經	宿六	一七	四(失譯)	四(別生)	四	一(失譯)	一	七	一
十八泥犁經	宿六	一七	四(失譯)	四(別生)	四	一(失譯)	一	七	一
罵意經	宙八	一七	四(失譯)	六(撰集)	四	三(別生抄)	一	八	一
堅意經	宿八	一七		三(失譯)	四	一(失譯)	一	七	一
鬼問目連經	宿六	一七	四(失譯)	三	四	二(失譯)	一	八	一
八大人覺經	藏五	一七		三(失譯)		五(闕本)	六(失譯)	七	一
出家緣經	宿八	一七	四(失譯)	三(失譯)	四	一(失譯)	一	七	一
法受塵經	宿八	一七	二	三	四	一	一	七	一
犯戒罪報輕重經	寒一〇	二四	四(失譯)	五(失譯)	四	一(失譯)	一	一〇	一
大比丘三千威儀	寒一〇	二四	四(失譯)	五(失譯)	四	一(失譯)	一	一〇	一

		舍利弗悔過經	列二	二四	二(法護)	五(法護)	四	一(法護)	一	六	一
		阿毘曇五法行經	藏一	二八	二	六	四	二	一	七	一
		迦葉結經	藏八	四九	二(法護)	六(法護)	四	二(法護)	二(法護)	一	一
安玄	安息	法鏡經（嚴佛調共譯）	地一一	一二	二	一	四	二(安公)	一	四	一
		阿含口解十二因緣經（嚴佛調共譯）	藏四	二五		六(世高)	四	二(世高)	一	七	一
支曜	西域	阿那律八念經	昃八	一	三(失譯)	三	四	二(失譯)	一	八	一
		馬有三相經	辰六	二	三(古異)	三	四	二(失譯)	一	九	一
		馬有八態譬人經	辰六	二	三(古異)	三	四	二(失譯)	一	九	一
		小道地經	暑六	一五	三(古異)	四(別生)	四	三(別生抄)	一	七	一
		成具光明定意經	宙二	一五	二	一	四	一	一	五	一
嚴佛調	臨淮郡	菩薩內習六波羅蜜經	藏五	一七	三(失譯)	二(別生)	四	三(別生抄)	一	一	一
康	康)	舍利弗摩訶目連遊四衢經	昃四	二	二(法護)	三(法護)	四	五(法護闕本)	二(法護)	五	一

	孟詳	居（	修行本起經（竺大力共譯）	辰一〇	三	三（失譯）	三	四	二（曇果竺大力）	一	八	一
			中本起經（曇果共譯）	辰一〇	四	二	三	四	一	一	八	一
			興起行經	辰一〇	四	四（失譯）	三（失譯）	四	一	一	八	一
曹魏	康僧鎧	印度	郁伽羅越問菩薩經	地五	一一		一（法護）	五	二	二	四（白遠）	一
			無量壽經	地八	一二		一（法護）	五	二（法護）	二	三	一
			曇無德律部雑羯磨	列七	二二							一
	曇諦	安息	羯磨	列七	二二		五	五	一	二	一〇	一
	白延	西域	須頼經	地一一	一二	二	一	五	五（副本）	二	五	一
呉	維祇難	印度	法句經	藏六	四	二	六	五	二（支謙）	二	五	二
	竺律炎	印度	三摩竭經	昃四	二	四（失譯）	三	五	二	二	八	二
			佛醫經（支謙共譯）	宿八	一七	四（失譯）	六	五	二	二	七	二
			摩登伽經（支謙共譯）	宿六	二一		三		二（失譯）		八	二

支

大月支

佛開解梵志阿颰經	昃一〇	一	四(失譯)	三(失譯)	五	二(失譯)	二	八(法勇)	二
梵網六十二見經	昃一〇	一	二(法護)	三(法護)	五	一(世高)	二	八	二
七知經	昃八	一	三(涼異)	四(別生)	五	三(別生)	二	八	二
釋魔男本四子經	昃八	一	二	三	五	二	二	八	二
諸法本經	昃八	一	三(失譯)	三	五	二(失譯)	二	八	二
弊魔試目蓮經	昃八	一	三(古異)	三	五	二(失譯)	二	七	二
賴吒和羅經	昃八	一	二	三	五	二	二	八(支曜)	二
梵摩渝經	昃八	一	二	三	五	二	二	八	二
齋經	昃八	一	二	三	五	二	二	八	二
不自守意經	辰六	二	三(古異)	三	五	二(失譯)	二	九	二
須摩提女經	昃四	二	三(失譯)		五		二	八	二
菩薩本緣經	藏七	三		六	五	二	二	一〇	二
月明菩薩經	宙六	三	二	一	五	一	二	四	二
九色鹿經	宙五	三	三(失譯)	六(撰集)		三(別生抄)		一	二
太子瑞應本起經	辰一〇	三	二	三	五	二	二	八	二
義足經	宿五	四	二	三	五	一	二	八	二

謙

撰集百縁經	宿一〇	四		六		二	二		二
猘狗經	宿八	四	四(失譯)	四(別生)	五	三(別生)	二	八	二
大明度經	月八	八	二	一	五	二	二	二	二
菩薩本業經	天一〇	一〇	二	一	五	二	二	二	二
阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經	地八	一二	二	一	五	二	二	三(康僧鎧)	二
八吉祥神呪經	黃四	一四	四(失譯)	一(失譯)	五	一(失譯)	二	三	二
維摩詰經	黃七	一四	二	一	五	二	二	三	二
阿難四事經	宿八	一四	二	三	五	一	二	七	二
未生寃經	宿七	一四	三(失譯)	三(失譯)	五	一(失譯)	二	七	二
蓱沙王五願經	宿七	一四	三(失譯)	三	五	二(失譯)	二	八(嵩公)	二
須摩提長者經	宿七	一四		三(失譯)	五	一(失譯)	二	七	二
長者音悅經	宿七	一四	三(失譯)	一(失譯)	五	一(失譯)	二	三	二
私呵昧經	宙七	一四	二	一	五	一	二	五	二
菩薩生地經	宙七	一四	四(失譯)	一	五	一	二	一	二
五母子經	宿七	一四	三(失譯)	三(失譯)	五	二(失譯)	二	八	一
七女經	宙八	一四	二	三	五	一	二	八	二

支謙									
龍施女經	宙七	一四	二	一	五	二	二	三	二
老女人經	黃五	一四	二	一	五	二	二	三	二
八師經	宿七	一四	二	三	五	一	二	八	二
孫多耶致經	宿七	一四	三(失譯)	三	五	二(失譯)	二	八	二
黑氏梵志經	宿七	一四	三(失譯)	三(失譯)	五	三(別生抄)	二	七	二
龍王兄弟經	宿七	一五		三(失譯)		一(失譯)	七(失譯)	八	二
法律三昧經	列二	一五	三(失譯)	二(僞妄)	五	一(失譯)	二	六	二
慧印三昧經	宙一	一五	二	一	五	二	二	五	二
了本生死經	宙七	一六	二	一	五	二	二	三	二
貝多樹下思惟十二因緣經	宙七	一六	三(古異)	一(法護)	五	二(法護)	二	四	二
四願經	宿八	一七	二	三	五	一	二	七	二
惟日雜難經	暑五	一七	四(失譯)	五(論抄)	五	三(別生抄)	二	七	二
三品弟子經	宙八	一七	四(失譯)	三(失譯)	五	一(失譯)	二	五	二
孛經抄	宿八	一七	二	六	五	二	二	五	二
犢子經	宙七	一七	四(失譯)	一		二(失譯)	六	四	二
無量門微密持經	成九	一九	二	一	五	二	二	四	二

時代	譯者	出身	經名									
			持句神呪經	成七	二一	四(失譯)		五		二	一([illegible])	二
			華積陀羅尼神呪經	成七	二一	四(失譯)	二(別生)	五	二(失譯)	二	一	二
			戒消災經	寒一〇	二四	四(失譯)	五(失譯)	五	一(失譯)	二	一〇	二
	康僧會	印度	六度集經	宙五	三	二	六	五	二	二	五	二
			舊雜譬喩經	暑七	四	四(失譯)	六	五	二	二	八(別生)	二
西晉	竺法護	敦煌郡	離睡經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			受歲經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			樂想經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			受新歲經	昃八	一							
			尊上經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			意經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			應法經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	八	二
			聖法印經	辰六	二	二	三	六	二	二	九	二
			鶖掘摩經	昃四	二	二	三	六	二	二	五	二
			力士移山經	昃四	二	二	三	六	二	二	八	二

竺法

四未曾有法經	昃四	二	四(失譯)	三	六	二(失譯)	二	八	二
生經	宿五	三	二	三	六	一	二	八	二
太子慕魄經	宙五	三	二	一	六	一	二	五	二
德光太子經	宙六	三	二	一	六	一		五	二
過去世佛分衞經	宙六	三	二	一	六	一	二	七	二
鹿母經	宙六	三	二	一	六	一	二	一	二
普曜經	宙四	三	二	三	六	一	二	四	二
佛五百弟子自說本起經	宿六	四	二	三	六	一	二	七	二
光讚經	月五	八	二	一	六	二	二	二	二
正法華經	盈二	九	二	一	六	二	二	二	二
阿惟越致遮經	盈三	九	二	一	六	二	二	一	二
濟諸方等學經	盈九	九	二	一	六	一	二	一	二
菩薩十住行道品	天一〇	一〇	二	一	六	一	二	二	二
漸備一切智德經	天一〇	一〇	二	一	六	二	二	二	二
等目菩薩所問三昧經	天一〇	一〇	二	一	六	一	二	一	二
如來興顯經	天一〇	一〇	二	一	六	二	二	二	二

護

度世品經	天一〇	一〇	二	一	六	二	二	二	二
密迹金剛力士經	地一	一一	二	一	六	一	二	一	二
菩薩說夢經	地一	一一							二
寶髻菩薩所問經	地六	一一	二	一	六	二	二	二	二
普門品經	地八	一一	二	一	六	一	二	二	二
胞胎經	地一〇	一一	二	三	六	一	二	七	二
文殊師利佛土嚴淨經	地一〇	一一	二	一	六	一	二	四	二
郁迦羅越問菩薩行經	地一〇	一二	二	一	六	二	二	四	二
幻士仁賢經	地一一	一二	二	一	六	一（失譯）	二	一	二
須摩提菩薩經	地一一	一二	二	一	六	一	二	三	二
阿闍貰王女阿術達菩薩經	地一一	一二	二	一	六	二	二	三	二
離垢施女經	地一一	一二	二	一	六	二	二	三	二
如幻三昧經	地一一	一二	二	一	六	二	二	三	二
太子刷護經	地一二	一二	四（失譯）	一（失譯）		二（失譯）	六（失譯）	五	二
慧上菩薩問大善權經	地一二	一二	二	一	六	二	二	四	二
彌勒菩薩所問本願經	地一二	一二	二	一	六	一	二	一	二

竺法	方等般泥洹經	盈九	一二	二	三(佛陀跋陀羅)	六	二(佛陀跋陀羅)	二	二	二
	等集衆德三昧經	盈一〇	一二	二	一	六	二	二	四	二
	般泥洹後灌臘經	辰一〇	一二	四(失譯)	三(失譯)	六	二(失譯)	二	九	二
	當來變經	辰一〇	一二	二	三	六	一	二	七	二
	大哀經	玄五	一三	二	一	六	二	二	二	二
	寶女所問經	玄五	一三	二	一	六	二	二	二	二
	無言童子經	玄六	一三	二	一	六	二	二	二	二
	阿差末菩薩經	玄五	一三	二	一	六	二	二	二	二
	賢劫經	黄四	一四	二	一	六	一	二	四	二
	八陽神呪經	黄四	一四	四(失譯)	一(失譯)	六	一(失譯)	二	一	二
	寶網經	黄四	一四	二	一	六	一	二	四	二
	滅十方冥經	黄四	一四	二	一	六	一	二	一	二
	彌勒下生經	黄五	一四							
	文殊悔過經	列二	一四	二	五	六	一	二	六	二
	文殊師利淨律經	列二	一四	二	五	六	二	二	六	二
	文殊師利現寶藏經	宇一〇	一四	二	一	六	二	二	四	二

護

大方等頂王經	黄八	一四	二	一	六	二(失譯)	二	三	二
持人菩薩經	宇一〇	一四	二	一	六	二	二	四	二
大迦葉本經	宿七	一四	二	三	六	一	二	七	二
琉璃王經	宿七	一四	二	三	六	二	二	八	二
月光童子經	宙六	一四	二	一	六	二	二	四	二
申日經	宙六	一四	三(失譯)		五(支讖)	二(失譯)	二(支讖)	八(支讖)	二(抄出)
龍施菩薩本起經	宙七	一四	二	一	六	二(失譯)	二	三	二
無垢賢女經	宇九	一四	二	一		二(失譯)	六(失譯)	四	二
順權方便經	宇一〇	一四	二	一	六	二	二	四	二
梵志女首意經	宙一	一四	二	一	六	一	二	五	二
心明經	宙七	一四	二	一	六	一	二	一	二
持心梵天所問經	宇一	一五	二	一	六	二	二	三	二
須眞天子經	宙二	一五	二	一	六	一	二	五	二
魔逆經	宙二	一五	二	一	六	一	二	一	二
海龍王經	宇九	一五	二	一	六	一(竺無蘭)	二	四	二
修行道地經	暑六	一五	二	三	六	一(世高)	二	九	二

竺　法

法觀經	藏七	一五	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生抄)	二	七	二
身觀經	宿八	一五	四(失譯)	四(別生)	六	三(別生)	二	九	二
如來獨證自誓三昧經	宙六	一五	二	一	六	一	二	五	二
文殊支利普超三昧經	宇八	一五	二	一	六	二	二	四	二
弘道廣顯三昧經	宇九	一五	二	一	六	二	二	四	二
無極寶三昧經	宙一	一五	二	一	六	二	二	三	二
盂蘭盆經	宙六	一六	四(失譯)	三(失譯)	六	二(失譯)	二	九	二
四自侵經	宿八	一七	二	三	六	一	二	七	二
所欲致患經	宿八	一七	二	三	六	一	二	七	二
分別經	宿八	一七	四(失譯)	三(失譯)	六	二(失譯)	二	八	二
四輩經	宙八	一七	四(失譯)	三(失譯)	五(失譯)	一(失譯)	七(失譯)	七	二
四不可得經	宙八	一七	二	一	六	一	二	五	二
乳光佛經	宙七	一七	二	一	六	二	二	四	二
諸佛要集經	黃一〇	一七	二	一	六	一	二	四	二
決定總持經	宙八	一七	二	一	六	二	二	一	二
菩薩行五十緣身經	宙八	一七	二	一	六	一	二	五	二

譯者	出身	經名									
護		無希望經	宙八	一七	二	一	六	二	二	三	二
		佛昇忉利天爲母說法經	宙六	一七	二	一	六	二	二	三	二
		大淨法門經	宙一	一七	二	一	六	二	二	五	二
		舍頭諫太子二十八宿經	宿六	二一	二	三	六	二	二	八	二
安法欽	安息	道神足無極變化經	宙六	一七	四(失譯)	一	六	二	二	三	二
		阿育王傳	藏一〇	五〇			六		二	五	二
無羅叉	于闐	放光般若經	月一・二	八	二	一	六	二	二	二	二
白遠(法祖)	河内	佛般泥洹經	昃一〇	一			六	二(法護)	二		二
		大愛道般泥洹經	昃四	二	三(失譯)	三(京隆)	六	二(京隆)	二	八	二
		菩薩修行經	地一一	一二		一(失譯)	六	一(失譯)	二	五	二
		菩薩逝經	宙七	一四	三(失譯)	一	六	二(失譯)	二	四	二
		賢者五福德經	宿八	一七	三(失譯)	一(失譯)	六	一(失譯)	二	一	二
法		大樓炭經(法炬共譯)	辰一	一	二	三	六	二	二	八	二

立	法句譬喩經（法炬共譯）	藏六	四	二	六	六	二	二	五	二
	諸德福田經（法炬共譯）	宿八	一六	二	一	六	一	二	五	二
法	恒水經	昃八	一	四（失譯）		六		二	八	二
	法海經	宿七	一	三（失譯）	三	六	二（失譯）	二	八	二
	頂生王故事經	昃八	一	四（失譯）	三	六	二（失譯）	二	八	二
	求欲經	昃八	一	四（失譯）	三	六	二（失譯）	二	八	二
	苦陰因事經	昃八	一	四（失譯）	四（別生）	六	三（別生）	二	八	二
	瞻婆比丘經	昃八	一	四（失譯）	三（失譯）	六	二（失譯）	二	八	二
	伏婬經	昃八	一	四（失譯）	四（別生）	六	三（別生）	二	八	二
	數經	昃八	一	四（失譯）	四（別生）	六	三（別生）	二	九	二
	相應相可經	辰六	二	四（失譯）	四（別生）	六	三（別生）	二	九	二
	雜提釋經	辰六	二	四（失譯）	三（失譯）	六	一（失譯）	二	七	二
	鴦崛髻經	昃四	二	四（失譯）		六		二	八	二
	波斯匿王太后崩塵土坌身經	昃四	二	四（失譯）	三	六	二（失譯）	二	八	二
	頻毘娑羅王詣佛供養經	昃四	二	四（失譯）	一（失譯）	六	一（失譯）	二	三	二

炬		前世三轉經	宙六	一三	四(失譯)	一(失譯)	六二(失譯)	二	一	二
		群牛譬經	宿八	四	四(失譯)	三	六二(失譯)	二	八	二
		優塡王經	地一一	一二	四(失譯)	三(失譯)	六一(失譯)	二	一	二
		維云忍辱經	宿七	一四	三(失譯)	三(失譯)	六一(失譯)	二	七	二
		沙曷比丘功德經	宿七	一四	四(失譯)	三(失譯)	六一(失譯)	二	七	二
		佛爲年少比丘說正事經	宿八	一四	四(失譯)	三(失譯)	六五(闕本)	二	七	二
		比丘避女惡名欲自殺經	宿八	一四	四(失譯)	三	六二(失譯)	二	九	二
		阿闍世王問五逆經	宿七	一四	四(失譯)	三(支讖)	六	二	七	二
		阿闍世王授決經	宙七	一四	四(失譯)	一(失譯)	六二(失譯)	二	一	二
		灌洗佛形像經	宙八	一四			六		五	二
		慢法經	宿六	一七	四(失譯)	四(別生)	六三(別生抄)	二	七	二
聶承遠	支	越難經	宿八	一四	四(失譯)	三(失譯)	六一(失譯)	二	八	二
	那	超日明三昧經	宙二	一五	二	一	六一(法護)	二	五	二
聶	支	異出菩薩本起經	辰一〇	三	四(失譯)		六三(別生抄)	二	一	二
		諸菩薩求佛本業經	天一〇	一〇	四(失譯)	一	六二(失譯)	二	二	二

	道眞	那	無垢施菩薩分別應辯經	地五	一一	四(失譯)	一(法護)	六	二(法護)	二	三	二
			文殊師利般涅槃經	黄五	一四	四(失譯)	一(失譯)	六	一(失譯)	二		二
			三曼陀跋陀羅菩薩經	列二	一四	四(失譯)	五(失譯)	六	一(失譯)	三	一	二
			菩薩受齋經	列二	二四	四(失譯)	五(失譯)	六	一(失譯)	二	六	二
	支法度		善生子經	昃八	一	四(失譯)		六	三(別生抄)	二	八	二
			逝童子經	宙七	一四	四(失譯)	一	六	二	二	四	二
	若羅嚴	外國	時非時經	宿八	一七	四(失譯)	三(失譯)	六(法炬)	一(失譯)	二(法炬)	七(法炬)	二
東晉	帛尸梨蜜多羅	西域	九色灌頂經	成六	二一	四(失譯)	二(失譯)	七	一	三	四	三
			梵天神策經			四(失譯)	四(僞妄)	七(失譯)	四(疑僞)	三(失譯)		
			隨願往生十方淨土經			四(失譯)	二(疑惑)	七(失譯)	四(疑僞)			
			藥師瑠璃光經			五(慧簡)	四(慧簡)	七(失譯)	四(慧簡)	六(慧簡)		
	竺	西	寂志果經	昃一〇	一	四(失譯)	三	七	二(失譯)	三	八	三
			鐵城泥犁經	昃八	一	四(失譯)		七		三	七	三

曇無蘭

域

阿耨風經	㝵	八	一	四(失譯)	四(別生)	七	三(別生)	三	八	三
新歲經	宿	八	一	三(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	八	三
梵志頞波羅延問種尊經	㝵	八	一	三(古異)		七	二(失譯)	三	八	三
泥犁經	㝵	八	一	四(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	八	三
水沫所漂經	辰	六	二	三(古異)	四(別生)	七	三(別生)	三	九	三
戒德香經	辰	六	二	三(失譯)	三	七	二(失譯)	三	九	三
四泥犁經	㝵	四	二	四(失譯)	四(別生)	七	三(別生)	三	八(別生)	三
玉耶經	㝵	四	二	三(失譯)	三(失譯)	七	二(失譯)	三	九	三
國王不梨先泥十夢經	㝵	四	二	三(失譯)	三	七	二(失譯)	三	八	三
大魚事經	宿	八	四	四(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	七	三
迦葉赴佛般涅槃經	辰	六	一二	四(失譯)	三(失譯)	四(失譯)	一(失譯)	七(失譯)	七	三
呵雕阿那鋡經	宿	七	一二	三(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	七	三
阿難七夢經	宿	八	一四	三(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	七	三
比丘聽施經	宿	八	一四	三(古異)	三	七	二(失譯)	三	九	三
採花違王上佛授決號妙花經	宙	七	一四	四(失譯)	一(失譯)	七	二(失譯)	三	一	三
五苦章句經	宿	八	一七	三(失譯)	四(疑惑)	七	四(疑僞)	三	七	三

竺曇無蘭	自愛經	宿八	一七	三(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	七	三
	忠心經	宿八	一七	四(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	五	三
	見正經	宿八	一七	三(失譯)	三(失譯)	七	一(失譯)	三	七	三
	呪時氣病經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
	呪齒經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
	呪目經	成一二	二一							
	呪小兒經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
	陀隣尼鉢經	成七	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
	玄師颰陀所說神呪經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七		三		三
	玄師颰陀神呪經(別本)		二一	四(失譯)			三(別生抄)		一	
	檀特羅麻油述經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
	摩尼羅亶經	成一二	二一	四(失譯)	二(別生)	七	三(別生)	三	一	三
僧伽[illegible]	中阿含經	昃五-七	一	二	三	七	一	三	八	三
	増一阿含經	昃一-三	二	二(曇摩難提)	三(曇摩難提)	七	一(曇摩難提…)	三	八	三
	三法度論	藏四	二五	二	五	七	一	三	一〇	三

提婆	賓	阿毘曇八犍度論（竺佛念共譯）	秋六	二六	二	五	八	一	三	一〇	三三
		阿毘曇心論（慧遠等共譯）	冬一一	二八	二	五	七	一	三	一〇	三三
迦陀留伽	西域	十二遊經	藏八	四	四（失譯）		七	二（失譯）	三	九	三三
佛陀跋陀羅	迦維羅衛	大方廣佛華嚴經	天七-九	九	二	一	七	一	三	二	三三
		文殊師利發願經	天一一	一〇	二	六	七	五（闕本）	三	一	三三
		達磨多羅禪經	藏八	一五	二	三	七	一	三	七	三三
		觀佛三昧海經	黃五	一五	二	一	七	一	三	四	三三
		大方等如來藏經	宇三	一六	二	一	七	一	三	五	三三
		出生無量門持經	成九	一九	二	一	七	二	三	四	三三
		摩訶僧祇律（法顯共譯）	列八-一〇	二三	二	五	七	一	三	一〇	三三
		摩訶僧祇律大比丘戒本	列一〇	二三	二	五	七	一（[illegible]）	三	一〇	三三
		摩訶僧祇比丘尼戒本（法顯共譯）	列一〇	二三			七	一（失譯）	七（失譯）	一〇	三三
法	平	大般涅槃經	辰一〇	一							三三
		大般泥洹經	盈九	一二	二	一	七	二	三	二	三三

	題	陽	雜藏經	宿六	一七	二	三	七	二	三	八	三
	祇多蜜	西域	菩薩十住經	天一〇	一〇	二（佛陀跋陀羅）	一（佛陀跋陀羅）	七		三	二	三
			寶如來三昧經	宙一	一五	三（失譯）	一	七	二（失譯）	六（失譯）	三	三
	竺難提	西域	大乘方便經	地六	一一	四（失譯）	一	七	二	三	四	三
			請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經	成一〇	二〇	四（失譯）	一	七	一	三	五	三
	鳩摩羅佛提	西域	四阿鋡暮抄解	藏四	二五	二	六	八	五（闕本）	三	（一四）	三
前秦	僧伽跋澄	罽賓	僧伽羅刹所集經	藏七	四	二	六（曇摩難提）	八	二（曇摩難提）	三	七	三
			鞞婆沙論	收九	二八	二		八	一（僧伽提婆）	三	一〇（僧伽提婆）	三
			尊婆須蜜菩薩所集論	藏一	二八	二	五	八	一	三	一〇	三
	曇摩蜱	印度	摩訶般若鈔經（竺佛念共譯）	月八	八	二	六	八	二	三	二	三
	曇摩難提	兜佉勒	阿育王息壞目因緣經	藏一〇	五〇	二（佛念）	六	八	二	三	四	三

時代	譯者	地	經名									
後秦	竺佛念	涼州	長阿含經(佛陀耶舍共譯)	昃九	一	二	三	八	一	三	八	四
			出曜經	藏五六	四	二	五	八	一	三	九	四
			最勝問菩薩十住除垢斷結經	宇三	一〇	二	一	八	一	三	四	四
			菩薩從兜術天降神母胎說廣普經	盈一〇	一二	二	一	八	一	三	一	四
			中陰經	盈一〇	一二	二	一	八	一	三	一	四
			大雲無想經卷第九		一二							
			菩薩瓔珞經	宇四	一六	二	一	八	一	三	四	四
			四分律(佛陀耶舍共譯)	列三－六	二三	二	五	八	一	三	一〇	四
			鼻奈耶	寒九	二四		五	八	一	三	一〇	四
			菩薩瓔珞本業經	列一	二四	四(失譯)	一	八	一	三	四	四
	鳩摩羅什	龜茲	海八德經	宿七	一	四(失譯)	三(失譯)	四(失譯)	二(失譯)		八	四
			放牛經	昃四	二	四(失譯)	三	八	二(失譯)	三	八	四
			大莊嚴論經	暑四	四		五	八	一	三	六	四
			摩訶般若波羅蜜經	月三・四	八	二	一	八	一	三	二	四
			小品般若波羅蜜經	月六	八	二	一	八	二	三	二	四

鳩摩

金剛般若波羅蜜經	月九	八	二	一	八	二	三	二	四
仁王般若波羅蜜經	月九	八	四(失譯)	二(疑惑)	八	一(失譯)	三	二	四
摩訶般若波羅蜜大明呪經	閏八	八							四
妙法蓮華經	盈一	九	二	一	八	二	三	二	四
十住經	天一〇	一〇	二	一	八	二	三	二	四
莊嚴菩提心經	黄一〇	一〇		一	八	二	三	二	四
富樓那問經	地四	一一	二	一	八	一	三	五	四
善臂菩薩經	地五	一一		一(失譯)		一(失譯)	六(失譯)	四	四
須摩提菩薩經	地一一	一二			八		三	三	四
阿彌陀經	地一二	一二	二	一	八	二	三	三	四
集一切福德三昧經	盈一〇	一二		一		二(失譯)		四	四
佛垂般涅槃略說教誡經	辰一〇	一二	二	三	八	一	三	七	四
自在王菩薩經	玄九	一三	二	一	八	二	三	二	四
千佛因緣經	黄三	一四	四(失譯)	一(失譯)	四(失譯)	一(失譯)	六(失譯)	一	四
彌勒下生成佛經	閏九	一四	二	一	八	二	三	四	四
彌勒大成佛經	黄五	一四	二	一	八		三	四	四

羅什									
文殊師利問菩提經	宙二	一四	二	一	八	二	三	四	四
維摩詰所說經	黃七	一四	二	一	八	二	三	三	四
持世經	宇一〇	一四	二	一	八	二	三	四	四
不思議光菩薩所說經	黃一〇	一四		一(法護)	八	一(法護)	三	三(法護)	四
思益梵天所問經	宇一	一五	二	一	八	二	三	三	四
禪祕要法經	宿五	一五	二	六	八	二	三	七	四
坐禪三昧經	暑六	一五	二	三	八	二(失譯)	三	九	四
菩薩訶色欲法經	暑六	一五	二	一	八	一	三	三	四
禪法要解	暑六	一五	二	六	八	二	三	一〇	四
思惟略要法	暑六	一五	二(世高)		八	二(世高)	三	七	四
大樹緊那羅王所問經	宇九	一五		一	八	二	三	四	四
首楞嚴三昧經	黃七	一五	二	一	八	一	三	五	四
諸法無行經	宇二	一五	二	一	八	一	三	三	四
佛藏經	列二	一五	二	五	八	一	三	六	四
華手經	宇五	一六	二	一	八	一	三	一	四
燈指因緣經	宿七	一六		四(別生)	八	一(失譯)	三	七	四

鳩摩羅什

孔雀王呪經	成八	一九			八		三	五	四
十誦律（弗若多羅共譯）	張三—七	二三	二	五	八	一（卑摩羅叉）	三	一〇	四
十誦比丘波羅提木叉戒本	張七	二三	二		八	一（失譯）	三		四
梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十	列一	二四		五（疑惑）	八	一	三	六	四
清淨毘尼方廣經	列二	二四		五（法護）		二（法護）	六（法護）	六	四
大智度論	往一—五	二五	二	五	八	一	三	六	四
十住毘婆沙論	暑八	二六	二	五	八	一	三	六	四
中論	暑一	三〇	二	五	八	一	三	六	四
十二門論	來一〇	三〇	二	五	八	一	三	六	四
百論	暑二	三〇	二	五	八	一	三	六	四
成實論	藏二	三二	二	五	八	一	三	一〇	四
發菩提心經論	來一〇	三二			八	一		六	四
馬鳴菩薩傳	藏九	五〇		六	八	二	三	一〇	四
龍樹菩薩傳	藏九	五〇		六	八	二	三	一〇	四
提婆菩薩傳	藏九	五〇		六	八	二	三	一〇	四

朝代	譯者	國	經名									
西秦	佛陀耶舍	罽賓	虛空藏菩薩經	玄八	一三	二	一	八	二	三	二	四
			四分僧戒本	列七	一二	二	五	八	一	三	一〇	四
	曇摩耶舍	罽賓	樂瓔珞莊嚴方便品經	宇一〇	一四	四(失譯)	一(法海)	一〇(法海)	二(法海)	四(法海)	四(法海)	四
			舍利弗阿毘曇論(曇摩崛多等共譯)	秋三·三	二八	二	五	八	一	三	一〇	四
	聖堅	支那	太子須大拏經	宙五	一三	三(失譯)	一	九	一	三	一	四
			睒子經	宙五	一三		一	九	二	三	五	四
			羅摩伽經	天一一	一〇	四(失譯)	一	九	二	三	二	四
			阿難分別經	宿六	一四		三	九	二(失譯)	三	八	四
			賢首經	宙七	一四	三(失譯)	三(失譯)	九	一(失譯)	三	一	四
			婦人遇辜經	宿七	一四	三(失譯)	三	九	一	三	七	四
			摩訶刹頭經	宙八	一六	四(失譯)		九	一(失譯)	三	五	四
			除恐災患經	宿八	一七		一(白延)	九	一(白延)	三	五	四
			演道俗業經	宙七	一七	三(失譯)	一	九	一	三	四	四
			無崖際總持法門經	宙一〇	二一	四(失譯)	一	九	二	三	三	四

時代	譯者	出身	經名									
前涼	支施崙	月支	須賴經	地一一	一二	二(支謙)	一(支謙)	五(支謙)	一(支謙)	二(支謙)	五(支謙)	四
北涼	道龔		寶梁經	地六	一一	二	五	九	一	三	六	四
北涼	法衆	高昌	大方等陀羅尼經	成五	二一	二	一	九	一	三	一	四
北涼	曇無	中印度	文陀竭王經	昃八	一	三(失譯)		九		三	八	四
			悲華經	宙三	三	二	一	九	二	三	三	四
			佛所行讚	職七	四		六(寳雲)	九	二(寳雲)	三	一〇(寳雲)	四
			大方廣三戒經	地七	一一		五(失譯)		一(失譯)	六(失譯)	六	四
			大般涅槃經	盈五・六	一二	二	一	九	一	三	二	四
			大方等無想經	盈一〇	一二	二	一(佛念)	九	一(佛念)	三	三	四
			大方等大集經(十二品二十九卷)	玄一・二	一三	二	一	九	一	三	二	四
			腹中女聽經	宇九	一四	三(失譯)	一	九	二(法化師出)	三	四	四
			金光明經	黃九	一六	二	一	九	一	三	三	四
			優婆塞戒經	列二	二四	二	五	九	一	三	六	四

	識		菩薩戒本	列二	二四	二	五	九	五(闕本)	三	六	四
			菩薩地持經	來六	三〇	二	五	九	二	三	六	四
	浮陀跋摩	西域	阿毘曇毘婆沙論(道泰共譯)	秋七-一〇	二八	二	五	九	一	三	一〇	四
	道泰	支那	大丈夫論	暑五	三〇		五	一	一	六	六	四
			入大乘論	暑二	三二		五	一	一	三	六	四
	法盛	高昌	菩薩投身飴餓虎起塔因緣經	黄一〇	三	三(失譯)	一(失譯)		一(失譯)	六(失譯)	二(失譯)	四
劉宋	佛陀什	罽賓	彌沙塞部和醯五分律(竺道生等共譯)	張一-二	二三	二	五	一〇	一	四	一〇	五
			彌沙塞五分戒本	張二	二三	二	五	一〇	五(闕本)	四	一〇	五
	畺良耶舍	西域	觀無量壽佛經	地一二	一二	四(失譯)	一	一〇	一	四	三	五
			觀藥王藥上二菩薩經	閏一〇	二〇	四(失譯)	一	一〇	一	四	三	五
	曇摩	罽	觀普賢菩薩行法經	盈四	九	二	一	一〇	一	四	三	五
			虛空藏菩薩神呪經	玄八	一三			一〇		四	二	五
			觀虛空藏菩薩經	玄八	一三	二	一	一〇	二	四	二	五

蜜多	賓	轉女身經	宇九	一四		一	一〇		四	四	五
		五門禪經要用法	暑六	一五	二	六(求那跋摩)	一〇	五(求那跋摩闕本)	四	一〇	五
		象腋經	宙八	一七		一	一〇	二(失譯)	四	三	五
		諸法勇王經	宙八	一七		一	一〇	二(失譯)	四	四	五
智嚴	西涼州	廣博嚴淨不退轉輪經	盈三	九	二	一	一〇	二	四	三	五
		法華三昧經	盈二	九	四(失譯)	一(失譯)	一〇	一(失譯)	四	二	五
		無盡意菩薩經(寶雲共譯)	玄二	一三			一〇		四	二	五
		四天王經(寶雲共譯)	宿八	一五	二	三	一〇	一	四	七	五
寶雲	涼州	佛本行經	藏七	四	二	六	一〇	二	四	五	五
求那	罽	四分比丘尼羯磨法	列七	二二	二	五	一〇	一	四	一〇	五
		優波離問佛經	寒一〇	二四	四(失譯)	五(失譯)	四(失譯)	一(失譯)	七(失譯)	一〇(支派)	三(失譯)
		沙彌威儀	寒一〇	二四	四(失譯)	五	一〇	一	四	一〇	五
		優婆塞五戒相經	寒一〇	二四	二	五	一〇	一	四	一〇	五
		菩薩內戒經	列一	二四	四(失譯)	五(失譯)		一(失譯)	六(失譯)	六	五

跋摩	賓	優婆塞五戒威儀經	列二	二四	四(失譯)	五(失譯)		一(失譯)	七(失譯)	一〇	五
		菩薩善戒經(九卷)	列一	三〇	二	五	一〇	二	四	六	五
		菩薩善戒經(一卷)	列一	三〇							五
		龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈	藏八	三二		六		二	七	一〇	五
僧伽跋摩	印度	分別業報略經	藏八	一七	二	六	一〇	二	四	一〇	五
		薩婆多部毘尼摩得勒伽	寒七	二三	二	五	一〇	一	四	一〇	五
		雜阿毘曇心論	冬一二	二八	二	五	一〇	一	四(伊葉波羅)	一〇	五
		勸發諸王要偈	藏八	三二	二		一〇		四	一〇	五
求那跋陀羅	中印度	鴦掘髻經	昃八	一	四(失譯)	三	一〇	二(失譯)	四	八	五
		鞞摩肅經	昃八	一	四(失譯)	四(別生)	一〇	三(別生)	四	八	五
		雜阿含經	辰二—四	二	二	三	一〇	一	四	九	五
		央掘魔羅經	黄一〇	二	二	一	一〇	一	四	五	五
		四人出現世間經	昃四	二	四(失譯)	四(別生)	一〇	三(別生)	四	九	五
		十一想思念如來經	昃四	二	四(失譯)	四(別生)	一〇	三(別生)	四	九	五
		阿遬達經	昃四	二	四(失譯)	三(失譯)	一〇	二(失譯)	四	九	五

求　那　跋

大意經	宙六	一三	四（失譯）	一（失譯）	一〇	一（失譯）	四	一	五
過去現在因果經	辰一〇	一三	二	三	一〇	二	四	八	五
大法鼓經	盈四	九	二	一	一〇	一（求那跋摩）	四	一	五
菩薩行方便境界神通變化經	盈四	九		一	一〇	二（失譯）	四	四	五
勝鬘師子吼一乘大方便方廣經	地一二	一二	二	一	一〇	一	四	三	五
拔一切業障根本得生淨土神呪	地一二	一二							
大方廣寶篋經	宇一〇	一四		一	一〇	二（失譯）	四	四	五
摩訶迦葉度貧母經	宿八	一四	四（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
申日兒本經	宙六	一四	四（失譯）	一	一〇	五（失譯闕本）	四	四	五
樹提伽經	宙七	一四	四（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
老母女六英經	黃五	一四	四（失譯）	一	一〇	二	四	三	五
楞伽阿跋多羅寶經	黃六	一六	二	一	一〇	二	四	三	五
相續解脫地波羅蜜了義經	黃八	一六	二	一	一〇	二	四	三	五
相續解脫如來所作隨順處了義經	黃八	一六							
罪福報應經	宿六	一七		三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	九	五
十二品生死經	宿六	一七	四（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五

譯者	地	經名									
陀羅		四品學法經	藏五	一七	四（失譯）		一〇	五（闕本）	四	七	五
		十二頭陀經	宙八	一七	四（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		阿難陀目佉尼呵離陀經	成九	一九	四（失譯）		一〇		四	四	五
		衆事分阿毘曇論（菩提耶舍共譯）	冬一一	二六		五（失譯）	一〇	一（失譯）	四	一〇	五
		賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經	宿八	三二		六（撰集）	一〇	二（失譯）	四	一〇	五
曇無竭	幽州	觀世音菩薩授記經	地一二	一二	二	一	一〇	一	四	五	五
沮渠	河	八關齋經	昃八	一	三（失譯）	三（支謙）	一〇	二（支謙）	四	八	五
		淨飯王般涅槃經	宿八	一四		三	一〇	一	四	七	五
		諫王經	宇六	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		末羅王經	宿七	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		旃陀越國王經	宿七	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		摩達國王經	宿七	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		佛大僧大經	宿七	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五
		耶祇經	宿七	一四	三（失譯）	三（失譯）	一〇	一（失譯）	四	七	五

譯者	地	經名									
京聲	西	觀彌勒菩薩上生兜率天經	閏九	一四	二	一	一〇	一	四	四	五
		治禪病祕要法	宿五	一五	二	六	一〇	二	四	一〇	五
		五無反復經(別本共)	宿七	一七	三(失譯)	三(失譯)	一〇	一(失譯)	四	七	五
		進學經	宿八	一七	三(失譯)	三(失譯)	一〇	三(別生抄)	四	八	五
		弟子死復生經	宙八	一七	四(失譯)	三(失譯)	一〇	三(別生抄)	四	七	五
		迦葉禁戒經	婁一〇	二四	三(失譯)	五(失譯)	一〇	一(失譯)	四	一〇	五
		五恐怖世經	婁一〇	二四	三(失譯)	三(失譯)	一〇	一(失譯)	四	七	五
慧簡	支那	閻羅王五天使者經	昃八	一	四(失譯)	三(失譯)	一〇	三(失譯)	四	七	五
		瞿曇彌記果經	昃八	一	四(失譯)	三	一〇	三(失譯)	四	八	五
		長者子六過出家經	昃四	二	四(失譯)	三	一〇	三(失譯)	四	八	五
		佛母般泥洹經	昃四	二	四(失譯)	三(安陽)	一〇	二(安陽)	四	八	五
		貧窮老公經	宿七	一七	四(失譯)	三(失譯)	一〇	一(失譯)	四	八	五
		懈怠耕者經	宙八	一七	四(失譯)	三(失譯)	一〇	一(失譯)	四	七	五
		請賓頭盧法	藏八	三二	四(失譯)	六(世高)	一〇	二(世高)	四	一〇	五
功德	西	菩薩念佛三昧經	玄八	一三	二	一	一〇	一	四	四	五

時代	譯者	出身	經名	函號							
	直	域	無量門破魔陀羅尼經	成九	一九 二	一	一〇	二	四	四	五
	翔公	支那	濡首菩薩無上清淨分衛經	月九	八 四(失譯)	一	一〇	一	四	五	五
	法海		寂調音所問經	列二	二四 四(失譯)	五	一〇	二	四	六	五
	先公	支那	月燈三昧經(別本共)	玄一〇	一五	一	一〇	一	四	五	五
南齊	曇摩伽陀耶舍	中印度	無量義經	盈一	九 二	一	一一	一	四	五	六
	僧伽跋陀羅	西域	善見律毘婆沙	寒八	二四 二	五	一一	一	四	一〇	六
	達摩摩提	西域	妙法蓮華經提婆達多品第十二	(盈二)	(九) 二	二(別生)	一一	二(別生)	四	二	六
	求那毘地	中印度	須達經	昃八	一 二	三	一一	二	四	八	六
			百喩經	藏八	四 二	六	一一	二	四	一〇	六
	曇		摩訶摩耶經	盈一〇	一二 四(失譯)	一	一一	一	四	五	六

時代	譯者		經名									
	景		未曾有因緣經	宿八	一七	四(失譯)	一	一二	一	四	五	六
	曼陀羅仙	扶南	文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經	月九	八		一	一二	一	四	二	六
			法界體性無差別經	地二	一一		一(失譯)	一二	一(失譯)	四	五	六
			寶雲經	宇六	一六		一(失譯)	一二	一	四	四	六
			大乘寶雲經(僧伽婆羅共譯)		一六						四(須菩提)	七(須菩提)
梁	僧伽婆羅	扶南	文殊師利所說般若波羅蜜經	月九	八			一二		四	二	六
			大乘十法經	地八	一一		一	一二	一	四	四	六
			度一切諸佛境界智嚴經	宇三	一一		一	一二	二	四	四	六
			八吉祥經	黃四	一四		一(求那跋陀羅)	一二	二	四	三	六
			文殊師利問經	列一	一四		一(失譯)	一二	一(失譯)	四	一	六
			孔雀王呪經	成七	一九		一	一二	一	四	五	六
			舍利弗陀羅尼經	成九	一九		一	一二	二(失譯)	四	四	六
			菩薩藏經	列二	二四		五	一二	一	四	六	六
			解脫道論	藏三	三二		五	一二	一	四	一〇	六

		阿育王經	藏一〇	五〇		六	一一	二	四	五	六
梁及陳	月婆首那（優禪尼）	勝天王般若波羅蜜經	月八	八			九	一	五	二	七
		大迦葉經	地五	一一		一	九	一	四	六	六
		僧伽吒經	玄九	一三		一	九	一	四	一	六
		大乘頂王經	黃八	一四		一	一一	二（失譯）	四	三	六
	眞諦（優禪尼）	廣義法門經	宿七	一		一	九	五（闕本）	五	一	七
		金剛般若波羅蜜經	月九	八			九	二	五	二	七
		無上依經	宙七	一六		一	九	一	五	一	六
		解節經	黃八	一六		一	九	二	五	三	七
		律二十二明了論	寒九	二四		五	九	一	五	一〇	七
		佛阿毘曇經出家相品	寒一〇	二四		五	九	一	五	七	七
		涅槃經本有今無偈論	往六	二六		五	一一	一	四	六	六
		遺教經論	往六	二六		五（疑惑）	九	四（疑僞）	五	一〇	七
		阿毘達磨倶舍釋論	冬一・二	二九		五	九	一	五	一〇	七
		決定藏論	來六	三〇						六	六

頁

轉識論	來一〇	三一						七
大乘唯識論	來九	三一	五	九	二	五	六	七
攝大乘論	來九	三一	五	九	二	五	六	七
攝大乘論釋	往八	三一	五	九	二	五	六	七
中邊分別論	來九	三一	五	九	一	五	六	七
佛性論	暑二	三一	五	九	一	五	六	七
十八空論	暑二	三一		九	一	五	六	七
三無性論	來一〇	三一	五	九	一	五	六	七
顯識論	來一〇	三一					六	七
無相思塵論	來一〇	三一			一	五	六	七
解捲論	暑二	三一			一	五	六	七
如實論	暑五	三二	五	一一	一	四	六	六
隨相論	藏三	三二	五	九	一	五	六	七
立世阿毘曇論	秋一	三二	五	九	一	五	一〇	七
四諦論	藏三	三二	五	九	一	五	一〇	七
寶行王正論	暑五	三二	五	九	五（闕本）	五	六	七

	諦		大乘起信論	來一〇	三二		五（疑惑）	一一	一	四	六	六
			大宗地玄文本論	來一〇	三二							
			十八部論	藏四	四九			一一	一	四	一〇	四（失譯）
			部執異論	藏四	四九			九	一	五	一〇	七
			婆藪槃豆法師傳	藏九	五〇		六	九	二	五	一〇	七
			金七十論	藏一〇	五四			九	一	五	（一四）	七
元魏	慧覺	涼州	賢愚經	宿九	四	二	三	九	一	三	七	六
	曇曜	支那	雜寶藏經（吉迦夜共譯）	宿一〇	四	二	三	九	一	四	七	六
			大吉義神呪經	成八	二一		一（失譯）		一（失譯）		一	六
			付法藏因緣傳（吉迦夜共譯）	藏九	五〇	二	六	九	二	四	一〇	六
	吉迦夜	西域	大方廣菩薩十地經	黄一〇	一〇	四（失譯）	一（法護）	九	二（法護）	四	二	六
			稱揚諸佛功德經	黄四	一四	二（羅什）	一（羅什）	九	一（羅什）	四	五	六
			方便心論	暑一	三二	二	五	九	一	四	六	六
	曇摩	南印	信力入印法門經	天一一	一〇		一（菩提留支）	九	一（菩提留支）	四	二	六

流支	度	如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經	宇	三	一二		一（菩提留支）	九	二（菩提留支）	四	四	六
法場		辯意長者子經	宙	八	一四			九	一	四	七	六
勒那摩提	中印度	妙法蓮華經論優波提舍（僧朗等共譯）	往	六	二六			九		四	六	六
		究竟一乘寶性論	暑	二	三一		五	九	一（菩提留支）	四	六	六
菩提	北	金剛般若波羅蜜經	月	九	八		一	九	二	四	二	六
		大薩遮尼乾子所說經	盈	四	九		一	九	二	四	四	六
		彌勒菩薩所問經	地	六	一一		一	九	二	四	三	六
		佛名經	黃	一	一四		一	九	一	四	一	六
		伽耶山頂經	宙	二	一四		一	九	二	四	四	六
		文殊師利巡行經	宙	二	一四		一	九	二	四	三	六
		差摩婆帝授記經	宙	七	一四		一	九	一	四	一	六
		大方等修多羅王經	宙	一	一四		一	九	二	四	四	六
		勝思惟梵天所問經	宇	一	一五		一	九	二	四	三	六
		不增不減經	宙	一	一六		一	九	一	四	一	六

留支 印度								
入楞伽經	黄六	一六	一	九	二	四	三	六
深密解脱經	黄八	一六	一	九	一	四	三	六
法集經	宇七	一七	一	九	一	四	一	六
無字寶篋經	宇三	一七	一	九	一	四	四	六
謗佛經	宙八	一七	一	九	二	四	一	六
佛語經	宙八	一七	一	九	一	四	三	六
護諸童子陀羅尼經	餘五	一九		九	三(別生抄)	四	一	六
金剛般若波羅蜜經論	往六	二五	五	九	一	四	六	六
金剛仙論		二五				四		一二
妙法蓮華經優波提舍	往六	二六	五	九	一	四	六	六
十地經論	暑九	二六	五	九	一	四	六	六
大寶積經論	暑一〇	二六	五	九	一	四	六	六
無量壽經優波提舍願生偈	暑一一	二六	五	九	一	四	六	六
彌勒菩薩所問經論	暑一〇	二六	五	九	一	四	六	六
文殊師利菩薩問菩提經論	暑一一	二六	五	九	一	四	六	六
勝思惟梵天所問經論	暑一一	二六	五	九	一	四	六	六

菩提留支		百字論	暑二	三〇		五	九	一	四	六	六
		提婆菩薩破楞伽經中外道小乘四宗論	暑五	三二		五	九	一	四	六	六
		提婆菩薩釋楞伽經中外道小乘涅槃論	暑五	三二		五	九	一	四	六	六
		十二因緣論	藏三	三二		五	九	一	四	六	六
佛陀扇多	北印度	銀色女經	宙六	三		一(失譯)	九	二(失譯)	四	一	六
		十法經	地二	一一			九		四	四	六
		無畏德女經	地五	一一		一	九	二	四	一	六
		轉有經	宙一	一四		一	九	二	四	四	六
		如來師子吼經	宙二	一七		一	九	一	四	一	六
		阿難陀目佉尼訶離陀隣尼經	成九	一九		一	九	二	四	四	六
		金剛上味陀羅尼經	宙一〇	二一		一	九	二	六	三	六
		正恭敬經	列二	二四		一	九	二	四	三	六
		攝大乘論	來九	三一		五	九	二	四	六	六
瞿曇	波	金色王經	宙五	三		一	九	一	四	三	六
		得無垢女經	地一一	一二		一	九	二	四	三	六
		聖善住意天子所問經(毘目智仙共譯)	地一一	一二		一	九	二	四	三	六

般若流支	羅捺	毘耶娑問經	地一二	一二		三(菩提留支)	九(勒那摩提)	一(菩提留支)	四(勒那摩提)	七(勒那摩提)	六
般若流支	羅捺	奮迅王問經	玄九	一三		一	九(菩提留支)	二	四(菩提留支)	二(菩提留支)	六
般若流支	羅捺	八部佛名經	黄四	一四		一(失譯)	九	一(失譯)	四	三	六
般若流支	羅捺	無垢優婆夷問經	宿六	一四		三(失譯)	九	一(失譯)	四	七	六
般若流支	羅捺	不必定入定入印經	宿八	一五		一	九(菩提留支)	一	四(菩提留支)	一(菩提留支)	六
般若流支	羅捺	正法念處經	宿一—四	一七		三	九	一	四	八	六
般若流支	羅捺	一切法高王經	宙八	一七		一	九(菩提留支)	二	四(菩提留支)	一(菩提留支)	六
般若流支	羅捺	第一義法勝經	宙一	一七		一	九(菩提留支)	二	四(菩提留支)	一(菩提留支)	六
般若流支	羅捺	解脫戒經	寒一〇	二四		五	九	一	四	一〇	六
般若流支	羅捺	順中論	暑二	三〇		五(菩提留支)	九(菩提留支)	一(菩提留支)	四(菩提留支)	六(菩提留支)	六
般若流支	羅捺	壹輸盧迦論	暑一	三〇		五	九	一(菩提留支)	四	六	六
般若流支	羅捺	唯識論	來九	三一		五	九	二	四	六	六
般若流支	羅捺	廻諍論(毘目智仙共譯)	暑一	三二		五	九	一	四	六	六
毘目智仙	烏萇	寶髻經四法優波提舍	暑一一	二六		五(菩提留支)	九(菩提留支)	一(菩提留支)	四(菩提留支)	六(菩提留支)	六
毘目智仙	烏萇	轉法輪經優波提舍	暑一一	二六		五(菩提留支)	九(菩提留支)	一(菩提留支)	四(菩提留支)	六(菩提留支)	六
毘目智仙	烏萇	三具足經優波提舍	暑一一	二六		五(菩提留支)	九(菩提留支)	一(菩提留支)	四(菩提留支)	六(菩提留支)	六

			業成就論	來九	三一		五（瞿曇流支）	九（瞿曇流支）	一（瞿曇流支）	四（瞿曇流支）	六（瞿曇流支）	六
	達磨菩提		涅槃論	往六	二六				一	四	六（達磨流支）	六
北齊	那連提黎耶舍	烏場	菩薩見實經	地四	一一		一	九	一	四	一	六
			大悲經	盈、九	一二		一	九	一	四	二	六
			蓮華面經	盈一〇	一二			一二	一	五	一	七
			大方等大集日藏經	玄三	一三			一二	一	五	二	七
			大方等大集月藏經	玄四	一三		一	九	一	四	二	六
			大乘大集須彌藏經	玄四	一三		一	九	一	四	二	六
			百佛名經	黄三	一四			一二	一	五	三	七
			德護長者經	宙六	一四			一二	二	五	四	七
			堅固女經	宙七	一四			一二	一	五	一	七
			月燈三昧經	玄一〇	一五		一	九	一	四	五	六
			力莊嚴三昧經	宙一	一五			一二	一	五	一	七
			施燈功德經	宙八	一六		一	九	一	四	一	六
			大莊嚴法門經	宙一	一七			一二	二（崛多）	五	五	七

	舍		大雲輪請雨經	成六	一九			一二	二	五	三	七
	舍		阿毘曇心論經	冬二-三	二八		五	九	一	四	一〇	六
	萬天懿	河南	尊勝菩薩所問一切諸法入無量門陀羅尼經,	宙一〇	二一		一	九	二	四	三	六
北周	闍那耶舍	摩伽陀	大乘同性經	宇二	一六		一	一一	一	五	四	七
北周	闍那耶舍	摩伽陀	大方等大雲經請雨品第六十四	成六	一九			一一	二	五	三	七
北周	闍那耶舍	摩伽陀	大雲經請雨品第六十四	成六	一九							
北周	耶舍崛多	優婆	十一面觀世音神呪經	成一二	二〇			一一	一	五	四	七
北周	闍那崛多	揵達	起世經	辰一	一					八		七
北周	闍那崛多	揵達	佛本行集經	辰七-九	三			一二	二	五	五	七
北周	闍那崛多	揵達	添品妙法蓮華經（達磨笈多等共譯）	盈二	九					六	二	七
北周	闍那崛多	揵達	佛華嚴入如來德智不思議境界經	天一一	一〇					五	二	七
北周	闍那崛多	揵達	護國菩薩經	地四五	一一					五	一	七
北周	闍那崛多	揵達	移識經	地六	一一			一三		五	四	七
北周	闍那崛多	揵達	發覺淨心經	地一一	一二			一二		五	一	七

闇　那

入法界體性經	地一二	一二	一二		五	一	七
四童子三昧經	盈九	一二	一二	二	五	二	七
虚空孕菩薩經	玄八	一三	一二	二	五	二	七
大方等大集經賢護分	玄九	一三	一二		五	二	七
大集譬喩王經	玄九	一三	一二		五	一	七
八佛名號經	黄四	一四	一二	二	五	三	七
五千五百佛名神呪除障滅罪經	黄三	一四	一二		五	一	七
文殊師利行經	宙二	一四		二	五	三	七
善思童子經	黄八	一四	一二	二	五	一	七
月上女經	黄八	一四	一二	一	五	一	七
無所有菩薩經	黄一〇	一四			五	一	七
商主天子所問經	宙二	一五	一二		五	一	七
觀察諸法行經	宇八	一五	一二		五	一	七
諸法本無經	宇二	一五	一二		五	三	七
希有校量功德經	宙八	一六	一二	一	五	一	七
諸法最上王經	宙八	一七	一二		五	一	七

			大威燈光仙人問疑經	宙一	一七			三	二	五	三	七
			出生菩提心經	宙二	一七			三		五	一	七
			一向出生菩薩經	成九	一九			三	二	五	四	七
	崛		不空羂索呪經	成一〇	二〇			三	一	五	三	七
			如來方便善巧呪經	成八	二一			三	一	五	一	七
			種種雜呪經	餘九	二一			二		五	一	七
			大法炬陀羅尼經	宙九	二一			三		五	一	七
			大威德陀羅尼經	宙一〇	二一			三		五	一	七
			金剛場陀羅尼經	宙一〇	二一			三	二	五	三	七
			十二佛名神呪校量功德除障滅罪經	成七	二一			三	一	五	一	七
	多		東方最勝燈王陀羅尼經	成七	二一					五		
			東方最勝燈王如來經	成七	二一						一	七
			大乘三聚懺悔經（達磨笈多等共譯）	列二	二四					五	六	七
			善恭敬經	列二	二四			三	二	五	三	七
	瞿曇法智	婆羅痆斯	佛爲首迦長者説業報差別經	宿六	一			三	二	五	九	七

隋

毘尼多流支	烏萇	大乘方廣總持經	盈九	九			一二	一	五	一	七
毘尼多流支	烏萇	象頭精舍經	宙二	一四			一三	二	五	四	七
寶貴	支那	合部金光明經	黄九	一六			一三		五	三	七
菩提燈	外國	占察善惡業報經	玄一〇	一七		一二（疑惑）	一三	四（疑僞）	五	一	七
達摩笈多	羅囉	起世因本經	辰一	一					五	七	七
達摩笈多	羅囉	金剛能斷般若波羅蜜經	月九	八							七
達摩笈多	羅囉	大方等善住意天子所問經	地六	一一					五	三	七
達摩笈多	羅囉	大方等大集經菩薩念佛三昧分	玄八	一三					五	四	七
達摩笈多	羅囉	藥師如來本願經	黄四	一四					五	四	七
達摩笈多	羅囉	緣生初勝分法本經	宙七	一六					五	三	七
達摩笈多	羅囉	金剛般若論	往六	二五					五	六	七
達摩笈多	羅囉	攝大乘論釋論（行矩等共譯）	往九	三一					五	六	七
達摩笈多	羅囉	緣生論	藏三	三二					五	六	七
達摩笈多	羅囉	菩提資糧論	來一〇	三二					五	六	七

已上は現藏中に編入され、而も譯者の署名ある隋代までの譯經を表出したのであつて、玄奘已後を新譯と稱するのに對すれば、すべて舊譯といはるゝものである。梁代已後の譯經は近く隋唐代の經錄に相次いで收載され、その記事は概ね信憑するに足るのであるが、梁代已前は確たる經錄も傳はらず、且つ後漢已來年代悠久なるが爲にその事實を詳かにし難く、隨つて譯者の不明なものが甚だ多い。出三藏記集第二には後漢より南齊に至る間に於ける譯者の判明せる經論等凡そ四百五十部を擧げ、之に對し、同第四には失譯雜經一千三百六部(闕本を含む)を列名してゐる。之に依ると當時譯者の判明せるものは、失譯の約三分の一に過ぎなかつたことを知るのである。然るに歷代三寶紀、開元錄等に於ては、此等の失譯經に就いて力めてその事實を明かにせんとし、古記等に依つて多くそれに譯者名を附した。卽ち安世高、支曜、支謙、白遠、法炬、聶道眞、帛尸梨蜜多羅、竺曇無蘭、聖堅、求那跋陀羅、沮渠京聲、慧簡等がその譯者に擬せられた主なるものである。この中には眞の史實の見出されたものもあらうが、しかし概ね何等の調査も加へず、輕々に判斷したので、全く當らざるものが多く、又支那撰述を梵夾の譯出に歸したものも少くない。隨つて此の期間に於ける譯經の史實を究明することは、經典成立史上に於ては勿論、支那佛敎史硏究の上からも頗る必要であり、且つ興味ある事柄とせなければならぬ。唐代已後の譯經は譯者について多く異說はないが、經典傳來の次順を見易からしめんが爲に、今左に之を表示することにしたのである。

世代	譯者	生國	經名＼出典	縮藏	正藏	內典錄	武周錄	開元錄	貞元錄	至元錄
唐	波羅頻迦羅蜜多羅	中印度	寶星陀羅尼經	玄六	一三	五	一	八	一一	二
			般若燈論釋	暑一	三〇	五	六	八	一一	八
			大乘莊嚴經論	暑四	三一	五	六	八	一一	九
	玄	陳	緣起經	辰六	二			八	一一	七
			大般若波羅蜜多經	洪・荒・日	五―七	五	二	八	一一	一
			般若波羅蜜多心經	月九	八	五	一	八	一一	一
			顯無邊佛土功德經	天一〇	一〇	五	一	八	一一	二
			大菩薩藏經	地二・三	一一	五	五	八	一一	一
			稱讚淨土佛攝受經	地一二	一二	五	三	八	一一	三
			佛臨涅槃記法住經	辰一〇	一二		一	八	一一	四
			大乘大集地藏十輪經	玄七	一三	五	二	八	一一	二
			受持七佛名號所生功德經	黄四	一四	五	一	八	一一	四
			藥師琉璃光如來本願功德經	閏五	一四	五	四	八	一一	二
			說無垢稱經	黄七	一四	五	三	八	一一	二

奘							
留							
如來示教勝軍王經	宙六	一四	五	一	八	一一	三
天請問經	宿六	一五	五	一	八	一一	七
寂照神變三摩地經	宙二	一五		一	八	一一	四
解深密經	黄八	一六	五	三	八	一一	二
佛地經	黄八	一六	五	一	八	一一	
甚希有經	宙七	一六	五	一	八	一一	三
最無比經	宙八	一六	五	一	八	一一	三
緣起聖道經	宙七	一六	五	一	八	一一	三
分別緣起初勝法門經	宙七	一六	五	三	八	一一	二
本事經	辰六	一七	五	七	八	一一	七
稱讚大乘功德經	宙七	一七	五	一	八	一一	三
諸佛心陀羅尼經	閏五	一九	五	一	八	一一	五
呪五首	閏一〇	二〇		二	八	一一	四
十一面神呪心經	餘五	二〇	五	四	八	一一	四
不空羂索神呪心經	成一〇	二〇	五	三	八	一一	四
持世陀羅尼經	成八	二〇	五	一	八	一一	五

玄

六門陀羅尼經	成八	二一	五	一	八	一一	五
勝幢臂印陀羅尼經	成八	二一	五	一	八	一一	五
八名普密陀羅尼經	成八	二一	五	一	八	一一	五
拔濟苦難陀羅尼經	成七	二一	五	一	八	一一	五
菩薩戒羯磨文	列二	二四	五	六	八	一一	八
菩薩戒本	列二	二四	五	六	八	一一	八
佛地經論	暑一一	二六	五	六	八	一一	八
阿毘達磨集異門足論	秋一	二六	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨法蘊足論	秋四	二六	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨識身足論	冬九	二六	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨界身足論	冬一〇	二六		一〇	八	一一	九
阿毘達磨品類足論	冬一〇	二六	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨發智論	秋五	二六	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨大毘婆沙論	收一-八	二七	五	一〇	八	一一	九
入阿毘達磨論	藏一	二八	五	一〇	八	一一	九
五事毘婆沙論	藏一	二八		一〇	八	一一	九

奘

阿毘達磨倶舍論	收九-一〇	二九	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨倶舍論本頌	冬一	二九	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨順正理論	冬三-六	二九	五	一〇	八	一一	九
阿毘達磨藏顯宗論	冬七・八	二九	五	一〇	八	一一	九
廣百論本	暑二	三〇	五	六	八	一一	八
大乘廣百論釋論	往一〇	三〇	五	六	八	一一	九
大乘掌珍論	暑五	三〇	五	六	八	一一	九
瑜伽師地論	來一-五	三〇	五	六	八	一一	八
瑜伽師地論釋	往七	三〇		六	八	一一	八
成唯識論	往一〇	三一	五	六	八	一一	九
唯識三十論頌	來九	三一	五	六	八	一一	九
唯識二十論	來九	三一		六	八	一一	九
攝大乘論本	來九	三一	五	六	八	一一	九
攝大乘論釋（世親）	往七	三一	五	六	八	一一	九
攝大乘論釋（無性）	往九	三一	五	六	八	一一	九
辯中邊論	來九	三一	五	六	八	一一	九

譯者	經論名	1	2	3	4	5	6	7
玄奘	辯中邊論頌	來九	三一	五	六	八	一一	九
玄奘	顯揚聖教論	來七	三一	五	六	八	一一	八
玄奘	顯揚聖教論頌	來七	三一	五	六	八	一一	八
玄奘	大乘阿毘達磨集論	來八	三一	五	六	八	一一	八
玄奘	大乘阿毘達磨雜集論	來八	三一	五	六	八	一一	八
玄奘	大乘成業論	來九	三一	五	六	八	一一	九
玄奘	大乘五蘊論	來九	三一	五	六	八	一一	九
玄奘	大乘百法明門論	來一〇	三一	五	六	八	一一	九
玄奘	王法正理論	來六	三一	五	六	八	一一	八
玄奘	觀所緣緣論	來一〇	三一	五	六	八	一一	九
玄奘	因明正理門論本	來一〇	三二	五	六	八	一一	九
玄奘	因明入正理論	來一〇	三二	五	六	八	一一	九
玄奘	大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記	藏八	四九	五	一〇	八	一一	一〇
玄奘	異部宗輪論	藏四	四九		一〇	八	一一	九
玄奘	勝宗十句義論	藏一〇	五四			八	一一	一〇
	千轉陀羅尼觀世音菩薩呪	成一二	一〇		一（玄奘）	八	一二	四

智通	陝州	清淨觀世音普賢陀羅尼經	成一〇	二〇		一	八	一二	五
		千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經	餘五	二〇			八	一二	四
		觀自在菩薩隨心呪經	餘五	二〇		一（玄奘）	八	一二	四
伽梵達摩	西印度	千手千眼觀世音菩薩治病合藥經	餘二	二〇			八	一二	四（不空）
		千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經	成一〇	二〇					
		日光菩薩月光菩薩陀羅尼	閏一〇	二〇					
阿地瞿多	中印度	陀羅尼集經	閏四五	一八		一	八	一二	四
那提	中印度	師子莊嚴王菩薩請問經	黃五	一四		一	九	一二	四
		離垢慧菩薩所問禮佛法經	黃五	一四		一	九	一二	四
若那跋陀羅	訶陵	大般涅槃經後分	盈九	一二		二	九	一二	二
地婆訶羅		方廣大莊嚴經	宙四	三		一	九	一二	二
		大方廣佛華嚴經入法界品	天一一	一〇		二	九	一二	二
		大乘顯識經	地一二	一二		四	九	一二	一

地婆訶羅	中印度	大乘百福相經	宙七	一六		一	九	一三	三
		大乘百福莊嚴相經	宙七	一六			九	一三	三
		證契大乘經	宇二	一六		四	九	一三	二
		大乘密嚴經	黃八	一六		一	九	一三	三(失名)
		造塔功德經	宙七	一六		一	九	一三	四
		大乘四法經	宙七	一七		一	九	一三	三
		菩薩修行四法經	宙七	一七			九	一三	三
		大乘離文字普光明藏經	宇三	一七		四	九	一三	三
		大乘遍照光明藏無字法門經	宇三	一七			九	一三	三
		大方廣師子吼經	宙二	一七		一	九	一三	三
		最勝佛頂陀羅尼淨除業障呪經	閏六	一九			九	一三	四
		佛頂最勝陀羅尼經	成五	二〇		四	九	一三	四
		七俱胝佛母心大准提陀羅尼經	餘三	二〇		一	九	一三	四
		呪三首經	成一二	二二					
		金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論	往六	二五		六	九	一二	八
		大乘廣五蘊論	往一〇	三一		六	九	一二	九

譯者	國	經名							
杜行顗	長安	佛頂尊勝陀羅尼經	成五	一九			九	一二	四
佛陀多羅	罽賓	大方廣圓覺修多羅了義經	天一一	一七			九	一二	三
佛陀波利	罽賓	佛頂尊勝陀羅尼經	閏六	一九		四	九	一二	四
提雲般若	于闐	大方廣佛華嚴經不思議佛境界分	天一一	一〇		二	九	一三	二
		大方廣佛華嚴經修慈分	天一一	一〇		二	九	一三	二
		大乘造像功德經	宙七	一六		五	九	一三	
		諸佛集會陀羅尼經	成七	二一		一	九	一三	五
		智炬陀羅尼經	成七	二一		一	九	一三	五
		大乘法界無差別論	暑一	三一		六	九	一三	九
		大乘法界無差別論（別本）	暑一	三一					
慧智	（印度）	讚觀世音菩薩頌	藏九	二〇		一〇	九	一三	一〇
		大方廣佛華嚴經	天一―五	一〇			九	一三	二
		大方廣普賢所說經	天一一	一〇			九	一三	二

實叉難陀

于闐

大方廣如來不思議境界經	天 一一	一〇			九	一三	二
大方廣入如來智德不思議經	天 一一	一〇			九	一三	二
文殊師利授記經	地 三	一一			九	一三	一
地藏菩薩本願經	閏 一〇	一三					
十善業道經	列 一	一五			九	一三	八
大乘入楞伽經	黄 六	一六			九	一三	二
右遶佛塔功德經	宙 七	一六			九	一三	四
大乘四法經	宙 七	一七			九	一三	四
華嚴經心陀羅尼	閏 八	一九					
觀世音菩薩祕密藏如意輪陀羅尼神呪經	成 一〇	二〇			九	一三	四
救面然餓鬼陀羅尼神呪經	成 八	二一			九	一三	五
甘露經陀羅尼呪	成 八	二一					
甘露陀羅尼呪	成 八	二一					
妙臂印幢陀羅尼經	成 八	二一			九	一三	五
百千印陀羅尼經	成 八	二一			九	一三	五
大乘起信論	來 一〇	三二			九	一三	九

李無諂	嵐波	不空羂索陀羅尼經	餘　五	二〇			九	一三	四
彌陀山	覩貨邏	無垢淨光大陀羅尼經	餘　五	一九			九	一三	五
達摩流支	南印度	寶雨經	宇　六	一六		四（梵摩）			二
寶思惟	迦濕蜜羅	浴像功德經	宙　八	一四			九	一三	三
		校量數珠功德經	成　一三	一七			九	一三	三
		大陀羅尼末法中一字心呪經	閏　六	一九			九	一三	五
		觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經	成　一〇	二〇			九	一三	四
		觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼念誦法		二〇					
		不空羂索陀羅尼自在王呪經	成　一三	二〇			九	一三	四
		隨求即得大自在陀羅尼神呪經	成　一五	二〇			九	一三	五
		大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼經	閏　一三	二〇			九	一三	四
		那羅延天共阿修羅王鬪戰法		二一					
義淨		五蘊皆空經	辰　六	二二			九	一三	七
		三轉法輪經	辰　六	二二			九	一三	七

義

齊

妙色王因緣經	宙六	一三	九	一三	四
譬喩經	宿八	一四	九	一三	七
能斷金剛般若波羅蜜多經	月九	八	九	一三	一
佛爲難陀說出家入胎經	地三	一一	九	一三	一
藥師琉璃光七佛本願功德經	餘五	一四	九	一三	二
彌勒下生成佛經	黃五	一四	九	一三	三
大乘流轉諸有經	宙一	一四	九	一三	四
長爪梵志請問經	宿七	一四	九	一三	七
佛，爲勝光天子說王法經	宙六	一五	九	一三	三
佛爲海龍王說法印經	宿八	一五	九	一三	四
入定不定印經	宙八	一五	九	一三	二
金光明最勝王經	黃九	一六	九	一三	二
浴佛功德經	宙八	一六	九	一三	三
八無暇有暇經	宿八	一七	九	一三	七
曼殊室利呪藏中校量數珠功德經	成一三	一七	九	一三	三
略敎誡經	宿八	一七	九	一三	七

淨

州

無常經	宿七	一七	九	一三	七
佛頂尊勝陀羅尼經	成五	一九	九	一三	四
大孔雀王呪經	成七	一九	九	一三	四
觀自在菩薩如意心陀羅尼呪經	成一〇	二〇	九	一三	四
香王菩薩陀羅尼呪經	閏一〇	二〇	九	一三	五
曼殊室利菩薩呪藏中一字呪王經	成一〇	二〇	九	一三	四
療痔病經	成八	二一	九	一三	七
稱讚如來功德神呪經	成七	二一	九	一三	四
善夜經	成八	二一	九	一三	
一切功德莊嚴王經	成八	二一	九	一三	
莊嚴王陀羅尼呪經	成八	二一	九	一三	五
拔除罪障呪王經	成八	二一	九	一三	五
根本說一切有部毘奈耶	張八・九	二三	九	一三	八
根本說一切有部苾芻尼毘奈耶	張一〇	二三	九	一三	八
根本說一切有部毘奈耶出家事	寒四	二三		一三	八
根本說一切有部毘奈耶安居事	寒四	二三		一三	八

義

根本說一切有部毘奈耶隨意事	寒四	一三			一三	八
根本說一切有部毘奈耶皮革事	寒四	一三			一三	八
根本說一切有部毘奈耶藥事	寒四	一四			一三	八
根本說一切有部毘奈耶羯恥那衣事	寒四	一四			一三	八
根本說一切有部毘奈耶破僧事	寒三	一四			一三	八
根本說一切有部毘奈耶雜事	寒一・二	一四		九	一三	八
根本說一切有部尼陀那目得迦	寒五	一四		九	一三	八
根本說一切有部百一羯磨	寒五	一四		九	一三	八
根本說一切有部戒經	寒五	一四		九	一三	八
根本說一切有部苾芻尼戒經	寒五	一四		九	一三	八
根本說一切有部毘奈耶尼陀那目得迦攝頌	寒五	一四		九	一三	八
根本說一切有部略毘奈耶雜事攝頌	寒五	一四		九	一三	八
根本薩婆多部律攝	寒六	一四		九	一三	八
根本說一切有部毘奈耶頌	寒六	一四		九	一三	八
能斷金剛般若波羅蜜多經論釋	往六	一五		九	一三	八
能斷金剛般若波羅蜜多經論頌	往六	一五		九	一三	八（不空）

淨		成唯識寶生論	來一〇	三一			九	一三	九
		六門敎授習定論	暑三	三一			九	一三	九
		掌中論	暑二	三一			九	一三	九
		取因假設論	暑二	三一			九	一三	九
		觀總相論頌	暑二	三一			九	一三	九
		觀所緣論釋	往一〇	三一			九	一三	九
		因明正理門論	來一〇	三二			九	一三	九
		止觀門論頌	藏四	三二			九	一三	九
		手杖論	暑五	三二			九	一三	九
		龍樹菩薩勸誡王頌	藏八	三二			九	一三	一〇(失譯)
		一百五十讚佛頌	藏九	三二			九	一三	一〇
菩提流志	南印度	實相般若波羅蜜經	成三	九		二	九	一四	一
		大寶積經(四十九會百二十卷中二十六會三十九卷新譯)	(地一一六)	一一			九	一四	一
		須摩提經	地一一	一二			九	一四	
		文殊師利所說不思議佛境界經	地一一	一二		一	九	一四	一
		大乘伽耶山頂經	宙二	一四		四	九	一四	三

菩提流志							
有德女所問大乘經	宙一	一四		一	九	一四	四
寶雨經	宇六	一六			九	一四	
佛心經	餘三	一九					
一字佛頂輪王經	閏六	一九			九	一四	五
五佛頂三昧陀羅尼經	成四	一九					
廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經	成五	一九			九	一四	五
金剛光焰止風雨陀羅尼經	閏八	一九			九	一四	五
千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經	餘五	二〇			九	一四	四
如意輪陀羅尼經	餘五	二〇			九	一四	四
不空羂索神變眞言經	閏二・三	二〇			九	一四	四
不空羂索呪心經	成一〇	二〇		三	九	一四	
大乘金剛髻珠菩薩修行分	成二	二〇		一	九	一四	二
護命法門神呪經	餘五	二〇		一	九	一四	五
六字神呪經	餘五	二〇			九	一四	四
文殊師利法寶藏陀羅尼經	餘五	二〇			九	一四	五
使呪法經	閏一四	二二					
大使呪法經	餘二	二二					

智嚴	于闐	師子素馱王斷肉經	藏	八	三	九	一四	四
		說妙法決定業障經	宙	七	一七	九	一四	三
		大乘修行菩薩行門諸經要集	藏	五	一七	九	一四	九
		出生無邊門陀羅尼經	成	九	一九	九	一四	四
金剛智	摩賴邪	金剛頂瑜伽理趣般若經	闕	八	八			六
		金剛頂瑜伽中略出念誦經	闕	一	一八	九	一四	六
		金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經	闕	二	一八			六
		金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法	闕	二	一八		一四	六
		藥師如來觀行儀軌法	餘	三	一九			
		金剛頂經瑜伽觀自在王如來修行法	闕	五	一九			六
		大勝金剛佛頂念誦儀軌			一九			
		千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼呪本	成	一〇	二〇		一四	
		千手千眼觀世音菩薩大身呪本	成	一〇	二〇		一四	四(不空)
		七倶胝佛母准提大明陀羅尼經	闕	一〇	二〇	九	一四	四
		觀自在如意輪菩薩瑜伽法要	成	一三	二〇	九	一四	五
		金剛頂瑜伽靑頸大悲王觀自在念誦儀軌	餘	二	二〇			

譯者	經名					
金剛智	五大虛空藏菩薩速疾大神驗祕密式經	餘 三	二〇			
金剛智	馬鳴菩薩大神力無比驗法念誦儀軌	餘 二	二〇			
金剛智	金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品	閏 一三	二〇	九	一四	五
金剛智	不動使者陀羅尼祕密法	閏 一三	二〇		一四	六
金剛智	聖無動尊安鎭國家等法	餘 四	二一			
金剛智	倶力迦羅龍王儀軌		二一			
金剛智	金剛藥叉瞋怒王息災大威神驗念誦儀軌	餘 二	二一			
金剛智	無量壽佛化身大忿迅倶摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法	餘 一	二一			
金剛智	吽迦陀野儀軌		二一			
金剛智	金色迦那鉢底陀羅尼經	餘 一	二一			
金剛智	般若守護十六善神王形體	餘 四	二一			
金剛智	北斗七星念誦儀軌	餘 一	二一			
懷迪（循州）	大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經	成 一	一九	九	一四	五
	大毘盧遮那成佛神變加持經（一行共譯）	閏 一	一八	九	一四	五

善無畏	中印度	攝大毘盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼攞廣大念誦儀軌供養方便會	餘	六	一八			
		大毘盧遮那經廣大儀軌	餘	六	一八			
		金剛頂經毘盧遮那一百八尊法身契印	闕	二	一八			
		蘇悉地羯羅經	闕	三	一八	九	一四	五
		蘇悉地羯羅供養法	闕	三	一八			六
		蘇婆呼童子請問經	闕	三	一八	九	一四	五
		三種悉地破地獄轉業障出三界祕密陀羅尼法	餘	一	一八			
		佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界祕密三身佛果三種悉地眞言儀軌	餘	三	一八			
		佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界祕密陀羅尼	餘	三	一八			
		火吽供養儀軌	餘	一	一八			
		釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌品	餘	一	一九			
		尊勝佛頂修瑜伽法儀軌	餘	一	一九			六
		童子經念誦法			一九			
		千手觀音造次第法儀軌	餘	四	二〇			

譯者	地域	經典							
善無畏		七佛倶胝佛母心大准提陀羅尼法	餘三	二〇					
		七倶胝獨部法	餘三	二〇					
		慈氏菩薩略修瑜伽念誦法	餘一	二〇					
		虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法	閏九	二〇			九	一四	五
		地藏菩薩儀軌	餘一	二〇					
		阿吒薄倶元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌	閏一四	二一					
		大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法	餘四	二一					
		堅牢地天儀軌	餘一	二一					
阿質達霰	北印度	大威力烏樞瑟摩明王經	閏一三	二一				一四	五(不空)
		穢跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門	閏一三	二一				一四	
		穢跡金剛禁百變法經	閏一三	二一				一四	
法月	東印度	普遍智藏般若波羅蜜多心經	月九	八				一四	[illegible]

不空				
北印度				
緣起經	辰六	一二		
大樂金剛不空眞實三摩耶經	閏八	一八	一五	六
仁王護國般若波羅蜜多經	閏七	一八	一五	一
普賢菩薩行願讃	閏一五	一〇	一五	六
大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴經	閏一二	一一	一五	一
三十五佛名禮懺文	閏一五	一二	一五	四
大集大虛空藏菩薩所問經	閏九	一三	一五	二
百千頌大集經地藏菩薩請問法身讃	閏一五	一三	一五	二・六
文殊問經字母品第十四	閏一五	一四	一五	四
佛爲優塡王說王法政論經	閏一五	一四	一五	四
大方廣如來藏經	成六	一六	一五	四
大乘密嚴經	閏一五	一六	一五	四
慈氏菩薩所說大乘緣生稻𦼮喩經	閏一五	一六	一五	四
金剛頂瑜伽念珠經	閏一五	一七	一五	五
大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法	閏一	一八	一五	六
大日經略攝念誦隨行法	閏一	一八	一五	六

不				
毘盧遮那五字眞言修習儀軌	餘 一	一八		
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經	闕 二	一八	一五	五
金剛頂經瑜伽十八會指歸	闕 二	一八	一五	六
略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門	闕 二	一八	一五	六
金剛頂瑜伽三十七尊出生義	闕 二	一八		
金剛頂蓮華部心念誦儀軌	闕 二	一八	一五	六
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經	闕 二	一八		六
金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身內證智眷屬法身異名佛最上乘祕密三摩地禮懺文	闕 一五	一八	(一五)	
金剛頂瑜伽三十七尊禮	闕 一五	一八	一五	六
瑜伽金剛頂經釋字母品	闕 一五	一八	一五	六
蕤呬耶經	闕 四	一八		
總釋陀羅尼義讚	餘 一	一八		
都部陀羅尼目	闕 三	一八	一五	六
金剛頂瑜伽護摩儀軌	闕 五	一八	一五	六
金剛頂瑜伽護摩儀軌	餘 三	一八		

空					
受菩提心戒儀	闕	一	一八	一五	六
阿閦如來念誦供養法	闕	五	一九	一五	六
藥師如來念誦儀軌	餘	三	一九		
無量壽如來觀行供養儀軌	闕	五	一九	一五	六
金剛頂經觀自在王如來修行法	闕	五	一九	一五	六
九品往生阿彌陀三摩地集陀羅尼經	餘	三	一九		
大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼	闕	六	一九		
金輪王佛頂要略念誦法	闕	六	一九	一五	六
菩提場所說一字頂輪王經	闕	六	一九	一五	五
一字奇特佛頂經	闕	五	一九	一五	五
一字頂輪王念誦儀軌	闕	五	一九	一五	六
一字頂輪王瑜伽觀行儀軌	闕	六	一九	一五	五
金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌	闕	六	一九	一五	六
如意寶珠轉輪祕密現身成佛金輪呪王經	餘	二	一九		
寶悉地成佛陀羅尼經	餘	二	一九		
熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經	闕	六	一九		

不

佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法	開 六	一九	一五	六
佛頂尊勝陀羅尼注義		一九		
佛母大金曜孔雀明王經	開 六	一九	一五	四
大孔雀明王畫像壇場儀軌	開 六	一九	一五	六
大雲輪請雨經	開 六	一九	一五	二
大雲經祈雨壇法		一九		六
仁王護國般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌	開 七	一九	一五	六
仁王般若念誦法	開 七	一九	一五	六
仁王般若陀羅尼釋	開 七	一九	一五	六
成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌	開 七	一九	一五	六
法華曼荼羅威儀形色法經		一九		
不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光眞言	開 七	一九	一五	五
大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋	開 八	一九	一五	六
般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述	開 八	一九	一五	六
大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經	開 七	一九	一五	五

	空					
菩提場莊嚴陀羅尼經	閏	八	一九		一五	五
出生無邊門陀羅尼經	閏	八	一九		一五	四
出生無邊門陀羅尼儀軌	閏	八	一九			
大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門	閏	八	一九		一五	二
一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼經	閏	八	一九		一五	五
觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門	閏	一〇	二〇		一五	六
聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌	閏	一〇	二〇		一五	六
瑜伽蓮華部念誦法	閏	一〇	二〇		一五	
金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經	閏	一〇	二〇		一五	五
觀自在菩薩說普賢陀羅尼經	閏	一〇	二〇		一五	五
阿唎多羅陀羅尼阿嚕力經	閏	一〇	二〇		一五	五
金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮華大曼拏攞品	閏	一〇	二〇		一五	
觀自在菩薩心眞言一印念誦法	餘	一一	二〇			
觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生熏眞如法	餘	一一	二〇			
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經	閏	一〇	二〇		一五	六

不

千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼	餘	四	二〇		四
大悲心陀羅尼修行念誦略儀	成	一〇	二〇		六
攝無礙大悲心大陀羅尼經計一法中出無量義南方滿願補陀落海會五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持三摩耶幖幟曼荼羅儀軌	餘	二	二〇		
十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經	闕	一〇	二〇	一五	六
聖賀野紇哩嚩大威怒王立大神驗供養念誦儀軌法品	餘	二	二〇		
七倶胝佛母所說准提陀羅尼經	闕	一〇	二〇	一五	
觀自在菩薩如意輪念誦儀軌	闕	一〇	二〇	一五	六
觀自在菩薩如意輪瑜伽	闕	一〇	二〇	一五	六
七星如意輪祕密要經	成	一三	二〇		
不空羂索陀羅尼儀軌經	餘	三	二〇		
葉衣觀自在菩薩經	闕	一二	二〇	一五	五
大方廣曼殊室利經	闕	一一	二〇	一五	四
金剛頂經多羅菩薩念誦法	闕	一二	二〇	一五	六
一髻尊陀羅尼經	闕	一二	二〇	一五	五

空

靑頸觀自在菩薩心陀羅尼經	餘	二	二〇		
大慈大悲救苦觀世音菩薩廣大圓滿無礙自在靑頸大悲心陀羅尼	餘	二	二〇		
大樂金剛薩埵修行成就儀軌	閏	九	二〇	一五	六
金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀	閏	九	二〇	一五	六
金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌	閏	九	二〇	一五	六
金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法	閏	九	二〇	一五	六
普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌	閏	九	二〇	一五	六
金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌	閏	九	二〇	一五	六
金剛王菩薩祕密念誦儀軌	閏	一四	二〇	一五	六
金剛壽命陀羅尼念誦法	閏	九	二〇	一五	六
金剛壽命陀羅尼經法	餘	三	二〇		
金剛壽命陀羅尼經	餘	三	二〇	一五	
一切如來金剛壽命陀羅尼經	閏	九	二〇	(一五)	五
一切諸如來心光明加持普賢菩薩延命金剛最勝陀羅尼經			二〇		
大虛空藏菩薩念誦法	閏	九	二〇	一五	六

不

轉法輪菩薩摧魔怨敵法	闕	九	二〇		
修習般若波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌	闕	九	二〇	一五	六
普遍光明淸淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經	闕	九	二〇	一五	五
金剛頂瑜伽最勝祕密成佛隨求即得神變加持成就陀羅尼儀軌			二〇		
雨寶陀羅尼經	闕	八	二〇	一五	五
八大菩薩曼荼羅經	闕	九	二〇	一五	五
金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法一品	闕	一一	二〇	一五	六
金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相	闕	一二	二〇	一五	六
五字陀羅尼頌	闕	一二	二〇	一五	六
金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌	闕	一二	二〇	一五	六
曼殊室利童子菩薩五字瑜伽法	闕	一二	二〇	一五	六
大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經	成	一三	二〇		六
大聖文殊師利菩薩讚法身禮	闕	一五	二〇	一五	六
金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品	闕	一三	二一	一五	六
底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法	闕	一三	二一	一五	六

空					
底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法	餘一	二一			
金剛頂瑜伽降三世成就極深密門	閏一三	二一		一五	六
降三世忿怒明王念誦儀軌	餘四	二一			
甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌	閏一三	二一		一五	六
聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法	閏一三	二一		一五	六
聖迦抳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經	閏一四	二一		一五	六
大威怒烏芻澁摩儀軌經	閏一三	二一		一五	六
毘沙門天王經	閏一四	二一		一五	六
北方毘沙門天王隨軍護法儀軌	餘二	二一			
北方毘沙門天王隨軍護法眞言	餘四	二一			
毘沙門儀軌	餘四	二一			
北方毘沙門多聞寶藏天王神妙陀羅尼別行儀軌		二一			
大吉祥天女十二名號經	閏一四	二一		一五	五
大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經	閏一四	二一		一五	五
末利支提婆華鬘經	閏一四	二一		一五	四

不

摩利支天菩薩陀羅尼經	閏一五	二一		
摩利支天經(別本)		二一	一五	五
摩利支菩薩略念誦法	餘二	二一		
大藥叉女歡喜母幷愛子成就法	閏一四	二一	一五	六
訶利帝母眞言經	閏一四	二一	一五	五
氷揭羅天童子經	閏一四	二一		
觀自在菩薩化身蘘麌哩曳童女銷伏毒害陀羅尼經	閏一四	二一		
蘘麌梨童女經(別本)		二一	一五	四
大聖天歡喜雙身毘那夜迦法	閏一四	二一	一五	六
摩訶毘盧遮那如來定惠均等入三昧耶身雙身大聖歡喜天菩薩修行祕密法儀軌		二一		
文殊師利菩薩根本大敎王經金翅鳥王品	閏一四	二一	一五	六
速疾立驗魔醯首羅天說阿尾奢法	閏一四	二一	一五	六
金毘羅童子威德經	餘二	二一		
深沙大將儀軌	餘二	二一		
供養十二大威德天報恩品	餘二	二一		

空		文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經	閏一四	二一			一五	四
		救拔焰口餓鬼陀羅尼經	閏一四	二一			一五	五
		施諸餓鬼飲食及水法并手印	閏一四	二一				
		瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經	成八	二一				
		瑜伽集要焰口施食起致阿難陀緣由	成一三	二一				
		除一切疾病陀羅尼經	閏一五	二一			一五	五
		能淨一切眼疾病陀羅尼經	閏一五	二一			一五	五
		大乘緣生論	閏一五	三二			一五	九
		金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論	閏一	三二			一五	九
尸羅達摩	(于闐)	十地經	閏八	一〇			一七	二
		迴向輪經	閏五	一九			一七	二
勿提提犀魚	屈支	十力經	閏一五	一七			一七	二
牟尼室利	北印度	守護國界主陀羅尼經(般若共譯)	閏七	一九			一七	六

般若	迦畢試	大乘本生心地觀經	宇 二	一三		一七	四
		般若波羅蜜多心經(利言共譯)	月 九	八		一七	一
		大乘理趣六波羅蜜多經	閏 一五	八		一七	一
		大方廣佛華嚴經	天 五・六	一〇		一七	二
		大花嚴長者問佛那羅延力經(利言共譯)	宇 三	一四		一七	四
		諸佛境界攝眞實經	閏 二	一八			
		造塔延命功德經	閏 一五	一九			
若那	龜玆	佛頂尊勝陀羅尼別法		一九			
達磨栖那		大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經	餘 一	一九			
菩提金剛		大毘盧遮那佛說要略念誦經	閏 一	一八			
菩提仙		大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法	餘 一	二〇			
法	西	般若波羅蜜多心經		八			
		大乘無量壽經		一九			

成	蕃	諸星母陀羅尼經		二一
		薩婆多宗五事論		二八
		釋迦牟尼如來像法滅盡之記		五一
瞿多		常瞿利毒女陀羅尼呪經		二一
跋木馱阿		施餓鬼甘露味大陀羅尼經		二一
金剛吒俱	西印度	七曜攘災決	餘四	二一
智慧輪	西域	般若波羅蜜多心經		八
		摩訶吠室囉末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀軌	闕一四	二一
解脫師子		都表如意摩尼轉輪聖王次第念誦祕密最要略法	餘二	二〇
三昧蘇嚩羅		千光眼觀自在菩薩祕密法經	餘四	二〇
般若力		迦樓羅及諸天密言經		二一

世代	譯者	生國	經名／出典	縮藏	正藏	祥符錄	天聖錄	景祐錄	至元錄	明藏
宋	法	中印	七佛經	昃一〇	一	七	下		八	有
			毘婆尸佛經	昃一〇	一	七	下		八	有
			大三摩惹經	昃一〇	一	七	下		七	有
			長者施報經	昃八	一	七	下		七	有
			大方廣總持寶光明經	天一一	一〇	三	下		五	有
			大乘日子王所問經	地一一	一二	四	下		四	有
			嗟韈曩法天子受三歸獲免惡道經	宿七	一五	四（施護）	下（施護）		八	有
			未曾有正法經	宇八	一五	一一	下		四	有
			分別緣生經	宿七	一六	一一	下		七（法賢）	有
			妙法聖念處經	宙五	一七	四	下		四	有
			六道伽陀經	藏九	一七	四（施護）	下（施護）		一〇	有
			諸行有爲經	宿八	一七	四	下		八	有
			解憂經	宿七	一七	七	下		八	有
			外道問聖大乘法無我義經	宙一	一七	五	下		四	有

天

度

妙臂菩薩所問經	成一一	一八	(六)	下	五	有
諸佛心印陀羅尼經	成八	一九	(五)	下	六	有
大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經	成八	一九	六	下	五	有
最勝佛頂陀羅尼經	成一二	一九	六	下	四(法賢)	有
一切如來烏瑟膩沙最勝總持經	成六	一九	八	下	五	有
大護明大陀羅尼經	成八	二〇	四	下	五	有
聖多羅菩薩一百八名陀羅尼經	成一一	二〇	(五)	下	五(施護)	有
毘俱胝菩薩一百八名經	成八	二〇	(五)	下	五	有
普賢菩薩陀羅尼經	成八	二〇	六	下	五	有
最上大乘金剛大敎寶王經	成一一	二〇	八	下	五	有
金剛手菩薩降伏一切部多大敎王經	成一一	二〇	八	下	五(法賢)	有
聖虛空藏菩薩陀羅尼經	成八	二〇	四	下	五	有
大乘聖吉祥持世陀羅尼經	成八	二〇	三	下	六	有
文殊師利一百八名梵讚	藏九	二〇	七	下	一〇(施護)	有
無能勝大明王陀羅尼經	成一三	二一	四(施護)		五	
無能勝大明陀羅尼經	成一三	二一	(五)	下	五	有

法	無能勝大明心陀羅尼經	成	一三	二一	(五)	下		五	有
	聖無能勝金剛火陀羅尼經	成	七	二一	六	下		五	有
	毘沙門天王經	成	一二	二一	七	下		五	有
	寶藏神大明曼拏羅儀軌經	成	一二	二一	六	下		六	有
	聖寶藏神儀軌經	成	一三	二一	六	下		六	有
	聖曜母陀羅尼經	成	七	二一	七	下		六	有
	大寒林聖難拏陀羅尼經	成	一二	二一	四	下		五	有
天	目連所問經	寒	一〇	二四	(五)	下		八	有
	苾芻五法經	寒	一〇	二四	(五)	下		八	有
	苾芻迦尸迦十法經	寒	一〇	二四	(五)	下		八	有
	金剛針論	藏	四	三二	(五)	下		九	有
	菩提心觀釋	來	一〇	三二	八	下		一〇	有
	佛一百八名讚	藏	九	三二	七	下		一〇	有
	七佛讚唄伽他	成	一三	三二	六	下		一〇	有
	人仙經	昃	一〇	一		下		八	有
	帝釋所問經	昃	八	一	一〇	下		八	有

譯者	經名						
天息災（法賢）迦濕彌羅	信佛功德經	昃 一〇	一	一〇	下	七	有
	薩鉢多酥哩踰捺野經	昃 八	一	八	下	八	有
	頻婆沙羅王經	昃 八	一	一〇	下	八	有
	大正句王經	昃 八	一	一〇	下	八	有
	解夏經	宿 八	一	一〇	下	八	有
	護國經	昃 八	一	一一	下	八	有
	分別善惡報應經	昃 八	一	三	下	七	有
	戒香經	辰 六	二	一〇	下	八	有
	阿羅漢具德經	昃 四	二	（二〇）	下	八	有
	月光菩薩經	宙 八	三	七	下	四	有
	衆許摩訶帝經	辰 一〇	三	七	下	七	有
	法集要頌經	藏 六	四	四	下	一〇	有
	佛母寶德藏般若波羅蜜經	月 八	八	八	下	一	有
	最上根本大樂金剛不空三昧大教王經	成 三	八	一一	下	五	有
	聖佛母小字般若波羅蜜多經	月 八	八	三	下	一	有
	觀想佛母般若波羅蜜多菩薩經	成 一二	八	（五）	下	一	有

天息災

校量一切佛刹功德經	天一〇	一〇	(九)	下	四	有
大乘無量壽莊嚴經	地八	一一	八	下	四	有
大乘善見變化文殊師利問法經	宙二	一四	三	下	四	有
妙吉祥菩薩所問大乘法螺經	宙七	一四	(九)	下	四	有
寶授菩薩菩提行經	宙七	一四	(一〇)	下	四	有
八大菩薩經	黄五	一四	(九)	下	四	有
金曜童子經	宙七	一四	三	下	四	有
金光王童子經	昃一〇	一四	七	下	八	
樓閣正法甘露鼓經	宙七	一六	三	下	五	有
布施經	宿八	一六	七	下	四	有
舊城喩經	宙七	一六	一〇	下	八	有
較量壽命經	宿六	一七	三	下	八	有
決定義經	宿七	一七	一〇	下	七	有
法身經	宙七	一七	一〇	下	四	有
四品法門經	宿七	一七	一〇	下	七	有
十號經	宙七	一七	(五)	下(施護)	四	有

（賢　　法）

信解智力經	宿	七	一七	一〇	下	七	有
尊那經	宙	八	一七	（一〇）	下	四	有
一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅經	成	二	一八	六	下	五	有
瑜伽大教王經	成	四	一八	（九）	下	五	有
幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明觀想儀軌經	成	三	一八	（九）	下	六	有
無量功德陀羅尼經	成	八	一九	（九）	下	五	有
大乘觀想曼拏羅淨諸惡趣經	成	一二	一九	（九）	下	五	有
大乘莊嚴寶王經	成	一〇	二〇	三	下	五	有
一切佛攝相應大教王經聖觀自在菩薩念誦儀軌	成	一三	二〇	（九）	下	六	有
聖觀自在菩薩一百八名經	成	八	二〇	四	下	五	有
聖觀自在菩薩梵讚	成	一三	二〇	七（法天）	下（法天）	一〇	有
聖多羅菩薩經	成	八	二〇	一〇	下	五	有
讚揚聖多羅菩薩一百八名經	成	一三	二〇	四	下	五	有
觀自在菩薩母陀羅尼經	成	一〇	二〇	一〇	下	六	有
十八臂陀羅尼經	成	八	二〇	（九）	下	五	有
聖金剛手菩薩一百八名梵讚	成	一三	二〇	（九）	下	六	有

天息災							
延壽妙門陀羅尼經	成	八	二〇	一〇	下	六	有
慈氏菩薩陀羅尼	成	八	二〇	（一〇）	下	五	有
慈氏菩薩誓願陀羅尼經	成	八	二〇	（九）	下	五	有
虛空藏菩薩陀羅尼	成	一二	二〇	（一〇）	下	五	有
大乘八大曼拏羅經	成	八	二〇	（九）	下	五	有
持明藏瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經	成	一二	二〇	（九）	下	六	有
妙吉祥菩薩陀羅尼	成	一二	二〇	（一〇）	下	六	有
大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經	戌	九	二〇	（五）	下	五	有
曼殊室利菩薩吉祥伽陀	成	一三	二〇	一〇			有
妙吉祥最勝根本大教經	成	一三	二一	（九）	下	五	有
妙吉祥瑜伽大教金剛陪囉嚩輪觀想成就儀軌經	成	一一	二一	（九）	下	六	有
大摩里支菩薩經	成	一一	二一	六	下	五	有
金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經	成	一一	二一	（九）	（下）	六	有
寶賢陀羅尼經	成	一二	二一	一〇	下	六	有
最上祕密拏天經	成	一二	二一	一〇	下	五	有
難儞計濕嚩囉天說支輪經	咸	一〇	二一	（九）	下	八	

（法賢）

囉嚩拏說救療小兒疾病經	成一三	二一	（九）	下	五	有
一切如來名號陀羅尼經	成一〇	二一	一〇	下	六	有
祕密八名陀羅尼經	成八	二一	一〇	下	六	有
大愛陀羅尼經	成一三	二一	（一〇）	下	五	有
善樂長者經	成八	二一	一〇	下	五	有
大吉祥陀羅尼經	成八	二一	一〇	下	五	有
宿命智陀羅尼	成一二	二一	（一〇）	下	五	有
宿命智陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
鉢蘭那賒嚩哩大陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
俱枳羅陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
妙色陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
栴檀香身陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
無畏陀羅尼經	成八	二一	（一〇）	下	五	有
無量壽大智陀羅尼	成一二	二一	（一〇）	下	五	有
洛叉陀羅尼經	成八	二一	（九）	下	五	有
滅除五逆罪大陀羅尼經	成一二	二一	（九）	下	五	有

天息災(法賢)	消除一切災障寶髻陀羅尼經	成	一二	二一	(九)	下		五	有
	息除賊難陀羅尼經	成	一二	二一	一〇	下		六	有
	辟除諸惡陀羅尼經	成	一二	二一	(九)	下		五	有
	菩提行經	暑	七	三一	四	下		一〇	有
	三身梵讚	藏	九	三一	一〇	下		一〇	有
	佛三身讚	成	一三	三一	一〇	下		一〇	有
	犍稚梵讚	成	一三	三一	七	下		一〇	有
	八大靈塔梵讚	成	一三	三一	(一〇)	下		一〇	有
	八大靈塔名號經	宿	八	三一	(一〇)	下		一〇	有
	賢聖集伽陀一百頌	藏	九	三一	六	下		一〇	有
	迦葉仙人說醫女人經	藏	九	三一	(九)	下		八	有
	勝軍化世百喩伽陀經	藏	九	三一	四	下		一〇	有
施	大堅固婆羅門緣起經	昃	一〇	一	一五	下		八	有
	白衣金幢二婆羅門緣起經	昃	一〇	一		下	二	八	有
	尼拘陀梵志經	昃	一〇	一	一六	下		八	有
	大集法門經	昃	一〇	一	一三	下		七	有

護

烏　塤　韲

閑生樹經	旲八	一	一一	下		八	有
輪王七寶經	旲八	一	一二	下		八	有
大生義經	旲八	一	一一	下		七	有
分別布施經	旲八	一	一一	下		四	有
息諍因緣經	旲八	一	一四	下		八	有
蟻喻經	宿八	一	一四	下		八	有
法印經	辰六	二	一一	下	四		有
月喻經	辰六	二	一四	下		八	有
給孤長者女得度因緣經	旲四	二	一三	下		七	有
頂生王因緣經	宙六	三		下	四	四	有
福力太子因緣經	宙六	三		下	(三)	四	有
灌頂王喻經	宿八	四	一六	下		八	有
醫喻經	宿八	四	一四	下		八	有
佛母出生三法藏般若波羅蜜多經	月七	八	一二	下		一	有
聖八千頌般若波羅蜜多一百八名眞實圓義陀羅尼經	成一二	八	一五	下		一	有
遍照般若波羅蜜經	成一二	八	八	下		一	有

施

了義般若波羅蜜多經	月　九	八	一二	下		一	有
五十頌聖般若波羅蜜經	月　九	八	八	下		一	有
帝釋般若波羅蜜多心經	月　九	八	八	下		一	有
聖佛母般若波羅蜜多經	月　九	八	一三	下		一	有
護國尊者所問大乘經	地　一〇	一二		下		四	有
無畏授所問大乘經	地　一一	一二		下	(三)	四	有
大方廣善巧方便經	地　一二	一二	一三	下		四	有
大迦葉問大寶積正法經	地　一二	一二	四	下		一	有
如幻三摩地無量印法門經	地　一二	一二	一五	下		四	有
大集會正法經	玄　九	一三	一二	下		二	有
大乘寶月童子問法經	黃　四	一四	(六)	下		四	有
諸佛經	辰　一〇	一四	八	下		四	有
初分說經	辰　一〇	一四	一四	下		八	有
隨勇尊者經	宿　七	一四	〃	下	四	八	
勝軍王所問經	宙　六	一四	一二	下		七	有
光明童子因緣經	宿　六	一四	一四	下		八	有

護

大自在天子因地經	宙八	一五	（六）	下		四	有
佛爲娑伽羅龍王所說大乘經	列一	一五	（六）	下		四	有
入無分別法門品經	宙一	一五	一四	下		四	有
勝義空經		一五		下	四	八	
五大施經	宿八	一六		下	四	八	有
大乘舍黎娑擔摩經	宙七	一六	八	下	四		有
十二緣生祥瑞經	宿六	一六	四	下		八（法天）	有
淨意優婆塞所問經	宿六	一七	一三	下		八	有
法集名數經	暑五	一七	四	下		一〇	有
四無所畏經	宿七	一七	八	下		四	有
佛十力經	宿七	一七		下	四	八	
清淨心經		一七		下	四	八（勿提提犀魚）	
發菩提心破諸魔經	宙二	一七	一三	下		五	有
大乘不思議神通境界經	宙二	一七	一二	下		五	有
大方廣未曾有經善巧方便品	宙八	一七	一二	下	四		有
一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經	成一・二	一八		下	二	六	有

施

祕密三昧大敎王經	成一〇	一八	一六	下	五	有
祕密相經	成三	一八	一六	下	五	有
一切如來金剛三業最上祕密大敎王經	成二・三	一八	一二	下	五	有
金剛場莊嚴般若波羅蜜多敎中一分	成三	一八	一四	下	一	有
無二平等最上瑜伽大敎王經	成四	一八	一四	下	五	有
一切祕密最上名義大敎王儀軌	成一二	一八	一四	下	六	有
帝釋巖祕密成就儀軌	成六	一九	一一	下	六	有
無能勝幡王如來莊嚴陀羅尼經	成八	一九	三	下	五	有
一切如來說佛頂輪王一百八名讚	成八	一九	八	下	六	有
守護大千國土經	成五	一九	三	下	五	有
一切如來正法祕密篋印心陀羅尼經	成七	一九	四	下	五	有
佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心陀羅尼經	成五	一九	四	下	五	有
千轉大明陀羅尼經	成一二	二〇	六	下	五	有
聖六字大明王陀羅尼經	成八	二〇	六	下		有
聖六字增壽大明陀羅尼經	成八	二〇	八	下	五	有
聖觀自在菩薩功德讚	藏九	二〇	一二	下	一〇	有

護							
聖觀自在菩薩不空王祕密心陀羅尼經	成一〇	二〇	一五	下		五	有
聖多羅菩薩梵讃	成一三	二〇	八	下		一〇	有
廣大蓮華莊嚴曼拏羅滅一切罪陀羅尼經	成一〇	二〇	(五)	下		五	有
普賢曼拏羅經	成六	二〇	七	下		五	有
佛母般若波羅蜜多大明觀想儀軌	成六	二〇	一四	下		一	有
聖持世陀羅尼經	成八	二〇	四	下		五	有
金剛香菩薩大明成就儀軌經	成一一	二〇	八	下		六	有
最勝妙吉祥根本智最上祕密一切名義三摩地分	成六	二〇	一二	下		五	有
息除中天陀羅尼經	成七	二一	四	下		六	有
聖最上燈明如來陀羅尼經	成七	二一	四	下		六	有
花積樓閣陀羅尼經	成七	二一	六	下		五	有
持明藏八大總持王經	成八	二一	七	下		五	有
聖大總持王經	成八	二一	六	下		五	有
增慧陀羅尼經	成一一	二一	八	下		五	有
施一切無畏陀羅尼經	成八	二一	一五	下		六	有
聖莊嚴陀羅尼經	成八	二一	六	下		五	有

施

寶帶陀羅尼經	成八	二二	一四	下		五	有
智光滅一切業障陀羅尼經	成七	二二	六	下		五	有
大金剛香陀羅尼經	成七	二二	(六)	下		五(法賢)	有
消除一切閃電障難隨求如意陀羅尼經	成一二	二二	四	下		五	有
如意摩尼陀羅尼經	成八	二二	(六)	下		四	有
如意寶總持王經	成八	二二	七	下		四	有
最上意陀羅尼經	成一〇	二二	七	下		五(法賢)	有
聖最勝陀羅尼經	成一〇	二二	八	下		六	有
勝幡瓔珞陀羅尼經	成一〇	二二	六	下		五	有
蓮華眼陀羅尼經	成八	二二	(六)	下		五	有
寶生陀羅尼經	成八	二二	(六)	下		五	有
尊勝大明王經	成八	二二	七	下		六	有
金身陀羅尼經	成八	二二	一四	下		五	有
大金剛妙高山樓閣陀羅尼	成一二	二二	(六)	下		六	有
一切如來安像三昧儀軌經	成六	二二	(六)	下(法護)		六	有
沙彌十戒儀則經	寒一〇	二四	四	下		八	有

護

大乘戒經	列二	二四	八	下		八	有
佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論	往一〇	二五	一六	下		九	有
佛母般若波羅蜜多圓集要義論	暑一一	二五	一六	下		九	有
大乘破有論	暑一	三〇	一三	下		九	有
六十頌如理論	暑一	三〇	一四	下		九	有
大乘二十頌論	暑一	三〇	一四	下		九	有
集大乘相論	暑三	三二	一三	下		九	有
集諸法寶最上義論	暑三	三二	一三	下		九	有
諸教決定名義論	成一四	三二	一二	下		九	有
菩提心離相論	來一〇	三二	一三	下		九	有
廣釋菩提心論	成一四	三二	一五	下		九	有
讚法界頌	藏九	三二	四	下		一〇	有
廣大發願頌	藏九	三二	一六	下		一〇	有
佛吉祥讚	藏九	三二	一四	下		一〇	有
開覺自性般若波羅蜜多經（惟淨等共譯）	月九	八			（一〇）	一	
如來不思議祕密大乘經	地七	一一			（一一）	六（惟淨等）	有

法護	迦濕彌羅	大乘菩薩藏正法經	地　九	一一				四	有
		大乘入諸佛境界智光明莊嚴經	宇　三	一二				四	有
		大乘大方廣佛冠經	黄　四	一四			(七)	四	有
		除蓋障菩薩所問經	宇　七	一四		下	六	四	有
		金色童子因緣經(惟淨共譯)	宿　七	一四			九	八	
		大悲空智金剛大教王儀軌經	成　三	一八				六	有
		出生一切如來法眼遍照大力明王經	成　五	二一		下		五(施護)	有
		八種長養功德經	列　二	二四		下	六	八	有
		聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論	暑　二	二五		下	(七)		有
		施設論(惟淨等共譯)	秋　四	二六				九	有
		大乘寶要義論(惟淨等共譯)	暑　三	三二		下	(五)	九	有
		大乘集菩薩學論(日稱等共譯)	暑　三	三二				九	有
惟淨	支那	海意菩薩所問淨印法門經	玄　六	一三		下	八	四	有
		身毛喜豎經	宿　七	一七		下	六	八	有
		大乘中觀釋論	暑　二	三〇			九	九(法天)	有

紹德	支那	菩薩本生鬘論(慧詢等共譯)	暑　五	一三				九	有
		大乘隨轉宣說諸法經	宇　二	一五				四	有
智吉祥	印度	巨力長者所問大乘經	宙　六	一四				四	有
		大乘智印經	宙　一	一五				四(金總持等)	有
慈賢	摩竭陀	如意輪蓮華心如來修行觀門儀	成　一三	二〇				六	有
		妙吉祥平等祕密最上觀門大敎王經	成　四	二〇				六	有
		妙吉祥平等瑜伽祕密觀身成佛儀軌	成　一二	二〇				六	有
		妙吉祥平等觀門大敎王經略出護摩儀	成　一二	二〇				六	有
		金剛摧碎陀羅尼	成　一二	二一				六	有
金總持	西夏	法乘義決定經	宿　七	一七				四	有
		文殊所說最勝名義經	成　一三	二〇				五	有
日稱	西夏	父子合集經	地　一〇	一一				四	
		六趣輪迴經	藏　九	一七				一〇	

世代	譯者	生國	經名 ╲ 出典	縮藏	正藏			元藏	明藏	清藏
	日稱	西夏	十不善業道經	藏八	一七				一〇	有
			諸法集要經	藏九	一七				一〇	
			尼乾子問無我義經	藏九	三二				一〇	
			福蓋正行所集經	藏九	三二				一〇	
			事師法五十頌	成一四	三二				一〇	有
元	安藏		聖救度佛母二十一種禮讚經	成一三	二〇				有	三
	沙囉巴	西域積寧	藥師琉璃光王七佛本願功德經念誦儀軌	成一二	一九			四		
			藥師琉璃光王七佛本願功德念誦儀軌供養法	成一二	一九			四		
			佛頂大白傘蓋陀羅尼經	成六	一九			四		
			文殊菩薩最勝眞實名義經	成一三	二〇			四		
			壞相金剛陀羅尼經	成一二	二一			四		
			彰所知論	藏四	三二				有	四
	指	迦毘羅	于瑟抳沙毘左野陀囉尼		一四					

空		觀世音菩薩施食		二〇					
釋智		聖妙吉祥眞實名經	成 一三	二〇					有 三
眞智		大白傘蓋總持陀羅尼經	成 六	一九					有 三
智慧	西藏	聖者文殊師利發菩提心願文	藏 九	二〇					

本表は縮刷大藏經幷に大正大藏經中に失譯となせるものを除き、譯者名あるものゝみを年代順に表示したのである。大正大藏經について檢して見ると、失譯になつてゐる經律論等が凡そ一百三十七部ある。その中、重要とおもはれるものは、阿含部に於て般泥洹經二卷、別譯雜阿含經十六卷、本緣部に於て菩薩本行經三卷、大方便佛報恩經七卷、大乘悲分陀利經八卷（おそらく北涼道龔譯）、師子月佛本生經一卷、法華部に於て薩曇分陀利經一卷、不退轉法輪經四卷、金剛三昧經一卷、寶積部に於て普明菩薩會一卷、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經一卷、大集部に於て大方廣十輪經八卷、拔陂菩薩經一卷、經集部に於て金剛三昧本性清淨不壞不滅經一卷、律部に於て薩婆多毘尼毘婆沙九卷、毘尼母經八卷、舍利弗問經一卷、目連問戒律中五百輕重事、釋經論部に於て分別功

德論五卷、毘曇部に於て阿毘曇甘露味論二卷、論集部に於て三彌底部論三卷、那先比丘經二卷等であるが、これ等は譯者名がないので本表には揭げなかつた。尙大正大藏經には上記の外に、淸工布查布の藥師七佛供養儀軌如意王經、彌勒菩薩發願王偈、造像量度經解、阿旺札什の修藥師儀軌布壇法、白救度佛母讚、嘎卜楚薩木丹達爾吉の極樂願文、釋迦佛讚の七部を收めてゐるけれど、他の諸藏になく　又重要でもないから今は表中より省いた。

又本表中、祥符錄及び景祐錄の卷數に括弧を附したのは、此の兩錄（宋藏遺珍本）の闕卷、又は殘缺の箇處にして、之を民國二十三年支那內學院刊行の祥符法寶錄略出、景祐法寶錄略出の想定に基いて記入したことをあらはすのである。

第四章　彌陀淨土經典の編纂に就て

第一節　船舟三昧經の編纂年代

多數の大乘經典中にはその敎旨が互に相聯關して一脈の系統をなすものもあり、又殆んど單獨別種のものもある。古來般若部、寶積部、大集部、華嚴部、法華部、涅槃部等の分類が行はれてゐるが、これは般若系統の諸經を般若部、乃至涅槃系統の諸經を涅槃部として類從したのである。此他に淨土部、瑜伽部、如來藏部、祕密部等の分類も亦立つべきであつて、卽ち此等の各經典は先後互に聯關して編纂されたものと見るべきである。然るに此等諸部の各經に就いて一一その成立等を論究することは之を他日に讓り、今その中、彌陀淨土の經典幷に法華涅槃關係の數經を選び、その編纂の年代等を考査することにしたのである。

彌陀淨土關係の經典は甚だ多く、湛然の止觀輔行傳弘決第二之一に諸經所讚多在彌陀と歎じてゐることは有名である。繼成の阿彌陀佛說林には、明藏に就いて彌陀及び極樂淨土の事を讚說せ

る經が凡そ二百餘部あることを指示し、一一その本文を列擧してゐるが、若し縮冊大藏經等に依つて之を檢して見ると、更に尙加ふべきものが少くない。今之を現藏所收の大小乘經通計九百四十餘部に比例すると、その四分の一弱に當り、若し小乘經中には他方淨土を說かないから之を除き單に大乘經約六百數十部に就いて比例すると、三分の一强に當るのである。斯樣に一代諸經中に多く彌陀のことが讚說されてあるのは、印度及び西域地方等に於てその信仰が古來廣く傳播したことを語るものと見るべきである。法然の選擇本願念佛集には此等多數の經典を正明傍明の二種に分ち、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部を以て正明淨土經となし、華嚴、法華、隨求、尊勝等の諸經を傍明淨土經としてゐる。本邦に於ては法然已後皆此の分類に依り、無量壽經等の三部を淨土正依の聖典とするやうになつたので、今主としてこの三部について飜傳の事實幷に譯本の異同等を硏詳し、此他に又般舟三昧經を始め、彌陀因位の本生等を記述せる幾多の經典もあるから、併せてそれ等の諸經に關しても一往編纂の時代等を考究して見やうとおもふのである。

般舟三昧經は後漢靈帝光和二年(西紀一七九)始めて支那に飜傳されたもので、漢譯大乘經中の最古のものゝ一に數へられるのである。開元釋敎錄第一には後漢支婁迦讖の條に二部の般舟三昧經を出し、一本を三卷、一本を一卷となし、又別に竺佛朔の條に般舟三昧經二卷をかゝげ、共に靈帝光

和二年の譯出としてゐる。然るに出三藏記集第二には、支讖の下に般舟三昧經一卷（宋元明三本には二卷）をかゝげ、光和二年十月八日出と註するのみで、他の二部のことは何等記述して居らぬ。就中、竺佛朔に關しては、出三藏記集第七所載の般舟三昧經記に、般舟三昧經、光和二年十月八日天竺菩薩竺佛朔於洛陽出。菩薩法護時傳言者、月支菩薩支讖授與と記し、又同第十三にも之と同樣の記事をかゝげてゐる。之に依ると竺佛朔が般舟三昧經の譯出に關係のあつたことを知るべきであるが、しかしこれは支讖と共譯したといふべきもので、支讖の外に別に又同月同日に同一經を譯出するわけもなからう。されば開元錄の記事は誤謬であり、隨つて支讖は竺佛朔と協力して唯だ一本の經を翻傳したものと見なければならぬ。然るに現藏中に般舟三昧經と題する經が二部あり、一本は三卷十六品、一本は一卷八品で、共に支婁迦讖譯となつてゐる。支婁迦讖が同一經を重譯するわけもないから、その孰れかゞ彼の譯出でないことになる。仍てその譯語を檢して見ると、三卷經にかゝぐる泥洹、恆邊沙、醫迦文、閱叉、阿惟三佛、怛薩阿竭阿羅訶三耶三佛、阿須倫、眞陀羅、摩睺勒等の諸語は、支讖譯の道行般若經と同一であり、且つ出三藏記集等二に支讖の經は舊錄に大般舟三昧經といふと註してゐるから、かたぐ此の三卷經が支婁迦讖の譯と推定されるのである。一卷般舟經は何人の譯か。出三藏記集第二已下諸錄に、西晉竺法

護も般舟三昧經二卷を譯したことを傳へてゐるので、法護譯の光讃般若經幷に正法華經等と、この一卷經との譯語を對照して見ると、正法華經等には、泥洹、江河沙、閱叉、摩休勒等の譯語を使用してゐるのに、一卷經には、涅槃、恆河沙、夜叉、摩睺羅等の語を用ひ、且つ卷數も合はないのであるから、此本は法護譯でもないとせなければならぬ。出三藏記集第四失譯雜經錄に般舟三昧念佛章一卷といふのがあるが、或はそれに當るかも知れぬ。

又現藏中に拔陂菩薩經幷に大方等大集經賢護分といふのがあるが、これも般舟三昧經の異譯である。拔陂菩薩經は一卷で、章品を分たず、譯者の名も傳つて居らぬ。出三藏記集第三安公古異經錄にかゝぐる颰披陀菩薩經が卽ちそれであつて、苻秦已前の古典たることは明かである。大集經賢護分は五卷十七品の經で、隋闍那崛多の譯したものである。されば般舟三昧經はすべて四本現在するわけであるが、その中、大集經賢護分は翻譯の年代からいつても、內容及び章品の加增からいつても、最も新いものであることは疑を容れぬ。他の三本中、普通の例を以てすれば、拔陂菩薩經が最も古く、一卷經が之に次ぎ、三卷經は更に其後に至つて增廣されたと見るべきである。三卷經を一卷經已前の成立とする說もあるが、然し普通の例を破るほどの有力な論證もないやうである。就中、拔陂菩薩經には章品が分つてないけれど、その內容を一卷經の八品に對照し

て見ると、初の問事、行、四事及び譬喩の四品に合するやうである。されば般舟三昧經は最初は唯だ問事等の四品の內容を有し、それが次いで八品經となり、更に亦三卷十六品經となつたと見なければならぬ。而してその三卷十六品經が西紀一七九年に支讖に依つて支那に飜傳されたとすれば、彼の四品の拔陂菩薩經はそれより少くとも一百年已前に編纂されたとすべきである。のみならず道行般若經は今の三卷經と同年に支讖に依つて譯出されたのであるが、彼の經第九薩陀波倫菩薩品に薩陀波倫 Sadāprarudita 菩薩が化佛の敎を聞いて歡喜踊躍し、見十方諸佛三昧を得て十方諸佛の讚言を蒙つたことを記し、又その連文に佛の從來する所なく、亦到り去る所なきを說いてゐるのは、疑ひもなく般舟三昧經の說を指したのであるから、此經は亦卽ち道行般若經の已前に存したものといはなければならぬ。但し道行般若三十品中、初の二十五品、卽ち累敎品に至るまでは其成立が古く、第二十六品已下、卽ち薩陀波倫品の如きは比較的後代の附加と見るべきものではあるが、それにしても支讖の譯本中に既に薩陀波倫品が置かれてある已上、般舟三昧經が彼經已前に世に行はれてゐたことは明かとすべきである。

又三卷般舟三昧經卷中授決品には佛の懸記として、我れ般泥洹の後、この三昧は當に現在すること四十歲なるべく、その後復現ぜざるべし。却後亂世、佛經まさに斷せんとする時、諸の比丘

は佛教を承用せず。然る後亂世の時、國國相伐つ。この時に於てこの三昧は當に復閻浮利の內に現ずべしといふの說をかゝげ、大集經賢護分にも、我が滅度の後、この三昧經は閻浮提に於て四十年中廣く世に行はれ、而して後五百年末一百歲中、正法滅せんとする時、比丘の惡を行ずる時、誹謗正法の時、正法破壞の時、持戒損減の時、破戒熾盛の時、諸國相伐つ時、この際に當りて衆生の熾然たる善根ある者この經を得ん。故に此の三昧典は復當に閻浮提に於て流行すべしと豫言されたとしてゐる。これは般舟三昧經は佛滅四十年間世に行はれ、その後は隱沒して現はれないが、五百年末一百歲中に至り、諸國相伐ち正法滅せんとする時、再び世に出現するといふ意味で、卽ち此經の編纂年代を暗示したものと見るべきである。五百年末一百歲中といふのは、恐らく佛滅第五百年の意味で、卽ち四百一年より五百年に至るまでをいふのであらう。又亂世の時、諸國相伐つといふのは、孔雀王朝 Maurya dynasty 衰亡の後、希臘の植民地たるバクトリア Bactria は次第に南方に擴がり、特にデメトリヲス Demetrios 王は小亞細亞のユークラテデス Eucratides 王の爲に逐はれて、漸次印度內地に侵入し、ついで又塞迦族及び大月氏族の侵入によりて諸國互に攻伐を事とし、西曆紀元前一世紀頃より西北印度はさながら亂麻の如き形勢に在つたことを指すのであらうかとおもふ。若し然りとすれば其の年代は佛滅第五百年中に相當し、彼の五百年末

一百歲中の語にも合するやうである。而して此時に於て此三昧典が世に出現したとすれば、卽ち般舟三昧經は西曆紀元前一世紀頃に始めて編纂されたものと見ることができる。

蓋し此經は般舟三昧見佛の法を說いたもので、恐らく大乘經典中、最も早く成立したものゝ一であらうとおもふ。般舟 Pratyutpanna とは、對して近く立つといふ意味で、卽ち此の三昧を得れば十方の諸佛が悉くその前に在りて近く立つのを見ることが出來るといふのである。三卷經の行品に依ると、比丘比丘尼優婆塞優婆夷があり、戒を完全に持ち、閑處に獨居して一心に西方阿彌陀佛を念じ、若しは一晝夜、乃至若しは七日七夜すれば阿彌陀佛を見ることが出來る。若し覺時に於て見ることが出來ないにしても夢中に於ては見ることが出來る。但し見るといつても天眼を以て徹視するのでなく、聞くといつても天耳を以て徹聽するのでなく、又神足を以てその佛刹に到るのでもなく、此に命終して彼の佛刹に生れるのでもなく、卽ち此處に坐して阿彌陀佛を見、その所說の經を聞くのである。譬へば維閦祇國の人が墮舍利國に某某と名づける婬女のあることを聞いて之を思念し、遂に夢中に婬女の所に到つて共に棲宿するが如く、今阿彌陀佛が西方須摩提國に在まし、多くの菩薩衆の中に於て現に說法されつゝあると聞き、たゞ一心に之を念ずれば卽ち彼佛を見ることが出來るのであると說いてゐる。これは般舟三昧の法に依れば、定中に於て

阿彌陀佛を見ることが出來るといふのであるが、然し此法に依れば單に阿彌陀佛のみでなく、十方いづれの佛でも皆悉く見ることが出來るのである。その事は經中に現に說かれてあり、亦般舟三昧を十方現在佛悉在前立定と譯してゐるのに見ても明かである。されば阿彌陀佛は單なる一例として擧げられたに過ぎぬといはなければならぬが、他の阿閦等を擧げず、西方阿彌陀佛を擧げて來たのは、此經の作者が彌陀崇拜者であつた爲か、或は此經が彌陀信仰の行はれた地方に於て編纂された爲かであらう。兎に角、此經に於て阿彌陀佛がたとひ簡單にもせよ、敍述されてあるのは頗る注目を要すべきことで、恐らくこれは現存彌陀關係の文獻中、最古のものであらうと思はれる。阿彌陀經に一日乃至七日執持名號一心不亂の說を揭げ、大阿彌陀經等に齋戒淸淨常念至心の說をなし、觀無量壽經に觀佛三昧を說いてゐるのは皆此經に基いたものと見なければならぬ。

第二節　阿彌陀經

阿彌陀經は正明淨土の經典であり、特に淨土三部の一として、無量壽經及び觀無量壽經と並べ稱せられるのである。始めて此經を傳譯したのは姚秦鳩摩羅什であつて、無量壽經又は阿彌陀經

と稱し、たゞ一卷の經である。ついで劉宋求那跋陀羅も無量壽經一卷を譯出したが、それは傳つて居らぬ。降つて唐永徽元年(西紀六五〇)玄奘は亦此經を飜傳して稱讚淨土佛攝受經と名けた。又此經には梵本もあり、西藏譯本もある。

此經は初に彌陀淨土の莊嚴を敍し、次に阿彌陀の名義、幷に彼佛の十劫成佛を明かし、次に七日持名臨終見佛の說を擧げ、次に諸佛の證讚等を說いてゐる。文段起盡は各本同一であり、章句も亦殆んど異なつて居らぬ。就中、七日持名臨終見佛の說は、恐らく般舟三昧見佛の旨を承けたのであらうとおもふ。即ち此經に若有善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、若一日乃至若七日、一心不亂、其人臨命終時、阿彌陀佛與諸聖衆現在其前等と說いてゐるが、これは三卷般舟三昧經行品に、若沙門白衣所聞西方阿彌陀佛刹、當念彼方佛。不得缺戒、一心念若一晝夜、若七日七夜、過七日以後見阿彌陀佛といふのに善く合するからである。たゞし般舟經には見佛を以て平生に約し、阿彌陀經には之を臨終に約してゐるので、その點は聊か相違するやうであるけれど、既に平生見佛が可能であるとすれば、臨終見佛も亦可能でなくてはならぬのであるから、阿彌陀經は彼の般舟三昧見佛の趣旨を臨終にまで押及ぼしたものとすべきである。また阿彌陀經に阿彌陀の名義幷にその國の莊嚴を說いてゐるのは、彼の行品の所聞西方の語を受けて

之を委説したといふべきであり、又六方若しくは十方諸佛の證讃を述べてゐるのは、彼の十方現在佛悉在前立の說から轉じたものと見ることが出來る。兎に角、此經は般舟三昧行品の說に基いて之を增廣布衍したものと認められるのである。

又此經の說述は大阿彌陀經等に類してゐるから、此經を以て大阿彌陀經等の抄略と考へるものもあるやうであるけれど、それは決して妥當ではないやうである。何となれば此經の思想は大阿彌陀經に比して尙甚だ純朴であるからである。又此經の淨土莊嚴の記事中より試みに願文を拾つて見ても、唯だ十願內外を見出し得るのみで、二十四願の半數にも足りない。いづれの點からしても此經の思想は大阿彌陀經よりも原始的であり、尙その抄略と見るべき何等の證徵も認めることが出來ぬ。之に反し大阿彌陀經等に於て淨土の莊嚴を詳細敍說してゐるのは、此經の記事に就いて增廣布衍を試みたものと見られ、又三輩往生及び來迎引接の本願の如きも此經の七日持名の說を擴張したものと見られる。されば此經は大阿彌陀經等の抄略でなく、その翻譯は比較的後代に在るにしても、その成立は彼の大阿彌陀經已前に置くべきものといはなければならぬ。或は又此二經は成立の歷史を異にし、その間に何等の關係もなく、各別の地方に於て編纂されたもので、必ずしも其の先後を論定すべきでないといふことも出來やう。

此經の諸本は互に近似し、文段章句までも殆んど皆一致してゐるけれど、たゞ諸佛證讃の一段のみは其の記事に多少の異同がある。卽ち羅什の經には諸佛證讃の下に六方三十八佛の名を擧げ、梵本には六方四十佛、西藏本には六方四十二佛、玄奘の經には十方四十二佛を列ねてゐる。就中、十方の說は六方の增廣と見るべきであり、又諸佛の數も時を逐うて漸次增加せられたとすれば、羅什の本は最も早く成立し、玄奘の本は最後に至つて修補されたものとせなければならぬ。又各本に出すところの諸佛の名稱は必ずしも一樣でないが、然し東方に阿閦、西方に無量壽を置くことはいづれも異なつて居らぬ。然るに阿閦等の諸佛が此經を證讃するのは別に妨げないにしても、彌陀が自ら自分の事を說いた經を證讃するのは聊か異とすべきである。之に關し彼の無量壽佛は彌陀と別佛だとする說もあるが、それはいふまでもなく妥當でない。これは或は此經が最初七日持名の項で終つてゐたのを、後に至つて六方證讃の一段が附け加つた爲ではないか。卽ち彼の一段の文が附け加へられた時に、東方阿閦等に對し一般の信仰上西方無量壽を省略し得なかつたのではなからうかとおもふ。更に他日の硏究に待つべきである。

又藏中に拔一切業障根本得生淨土神呪といふ一首の呪があり、題下に出小無量壽經と注し、且つ劉宋天竺三藏求那跋陀羅奉詔重譯と署名してある。これは此の神呪が求那跋陀羅譯の小無量壽

經中より出でたとするのであるが、然るに出三藏記集第二には彼の小無量壽經を闕本とし、その他、法經録等にすべて此の神呪傳譯のことを錄して居らぬ。阿彌陀不思議神力傳に依ると、龍樹菩薩は安養に生ぜんと願じて夢に此の神呪を感ず。耶舍三藏此呪を誦す。天平寺銹法師あり、耶舍三藏より口づから此呪を受く。其人云く、經は本と外國より來らず云云と記してゐる。こゝに耶舍三藏といふのは北齊那連提黎耶舍のことで、天平寺はその譯場であつた鄴都の天平寺を指すのである。されば此の神呪は那連提黎耶舍の傳へたものといふべく、隨つて求那跋陀羅の小無量壽經より出づといふの傳説は誤謬とせなければならぬ。

第三節　大阿彌陀經幷に平等覺經

大阿彌陀經幷に平等覺經は無量壽經の異本であつて、彌陀の因願果成を詳述した正明淨土の有力なる經典である。大阿彌陀經は吳黃武元年（西紀二二二）より建興年中（二五三）に至る三十餘年間に他の諸經と共に支謙によりて譯出されたもので二卷ある。上卷には阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經と題し、下卷には單に阿彌陀經と標してある。羅什の小阿彌陀經に區別せんが爲に普通には大

阿彌陀經と呼ばれてゐる。平等覺經は具さに無量清淨平等覺經といふので、四卷ある。歷代三寶紀第四、開元釋敎錄第一等には吳錄に依りて此經を後漢支婁迦讖の譯としてゐるけれど　吳錄なるものは頗る無價値のものであり、且つ出三藏記集等の信憑すべき諸錄に之を傳へないのみならず、試みにその譯語を檢して見ると、支讖譯の道行般若經には恆邊沙、兜術天、怛薩阿竭阿羅呵三耶三佛等の語を擧げてゐるのに、平等覺經には恆水邊流沙、恆沙、兜率天、多陀竭佛、三藐三佛陀等の語を用ひて居つて、二者一致しない。されば此經は支讖の譯ではないとせなければならぬ。
又梁高僧傳第一に依ると、魏甘露年中（二五六―二五九）沙門帛延は無量清淨平等覺經を出すといひ、法經錄第一、仁壽錄第二、歷代三寶紀第五等にも皆此說を用ひ、又憬興の無量壽經連義述文贊には、屢此經の文を引いて之を帛延本と稱してゐる。これ等は現存平等覺經を以て曹魏帛延の譯とする說である。又出三藏記集第二に依ると、西晉竺法護は無量壽經、一名無量清淨平等覺經二卷を譯したことを傳へ、又同新集異出錄にも支謙の阿彌陀經に次で、法護の平等覺經二卷を列ねてゐる。これは現存平等覺經を法護の譯とする說と見るべきである。仍て亦此經の譯語を法護の正法華經、光讚般若經等に對照して見ると、錠光如來、釋迦文、阿逸を始め、那術、泥洹、焰天、兜率、賢者、婬怒癡、狐疑、無上正眞道、授決等の語が互に一致するのみでなく、知本際、上時迦葉、牛

呵、大迦葉、離越等の諸弟子名も亦大體同一である。但だ平等覺經に恆水邊流沙、又は恆沙の語を擧げてゐるのに、正法華經等には江河沙、又は江沙の字を使用し、又平等覺經には多く釋迦文、阿彌陀、廬樓亘、摩訶那鉢、須摩提等の原語を擧げてゐるのに、正法華經等には能仁、無量壽、光世音、大勢至（又は得大勢）、安養等の譯語を用ひてゐる。此等は二者の間の相違であるが、法護の如き多數の經を譯出した者には、前後の譯例に多少の相違の生ずることもあり得べきことゝせなければならぬ。帛延說も全然棄つべきではないが、然しそれよりも法護說が有力でないかとおもはれるのである。要するに、平等覺經の譯者に關しては三說あり、一に僧祐は之を竺法護とし、二に梁傳等は帛延とし、三に三寶紀幷に開元錄等は支婁迦讖とするのである。就中、支婁迦讖說は最も薄弱にして、帛延說は之に次ぎ、法護說は最も有力のやうである。いづれにしても此經が西曆三世紀中に支那に翻傳されたことは明かである。

大阿彌陀經、平等覺經の二經は大體に於て文段起盡が同一であつて、初に彌陀因位の發心出家を說き、次に二十四願を擧げ、次に彼佛の光明の最尊第一なることを說き、次に阿闍世王太子の授記を說き、次に淨土の功德莊嚴を敍し、次に三輩往生、次に五惡五痛、次に他方佛國の菩薩の往生を說いてゐるのである。のみならず、二經同一文句も甚だ多いのであるが、然し總體に就い

ていへば、平等覺經は大阿彌陀經よりも餘程增廣されてゐることは事實である。卽ち序說に於て、平等覺經の文は大阿彌陀經よりも長く、又大阿彌陀經にはすべて偈を有しないのに、平等覺經には五言二十行幷に六言三十二行の二偈を載し、又過去佛の數も二三增加せられてゐる。此等の事實は平等覺經が大阿彌陀經の本文を修補したものであることを證據立てるべく十分である。更に又願文を比較すると、二經同じく二十四願になつてゐるけれど、その配列等が大に異なつて居つて、平等覺經が大阿彌陀經の願文に就いて整理若しくは修飾を加へた痕跡が歷歷指點されるやうである。されば大阿彌陀經は平等覺經に先立つて編纂されたものと認めなければならぬ。蓋し彌陀因位の發願の數は經に依りて異同があるが、その中、二十四願が四十八願說已前に成立つたことは、種種の理由によりて明かなことであり、今亦二十四願經中に於て大阿彌陀經が最初に成立つたとすれば、此經は正明淨土の經典中、最も根本的なものとすべきである。阿彌陀經との先後に關しては、上にも述べた如く論定することは難いが、然しその思想からいへば、今の大阿彌陀經が著しき進展を示してゐることは明かである。又之を阿閦佛國經に對照して見ると、體裁といひ、內容といひ、彼經よりも餘程整頓發達してゐるやうであるから、此經の編纂は阿閦佛國經よりも後に在りといふべく、又放光般若經の願文に比較すると、此經の說が尙單純なやうであるから、

此經は即ち放光經の已前に編述されたと見ることが出來る。西暦三世紀中に翻傳された平等覺經が既に彼の本文を修補したとすれば、大阿彌陀經はそれより少くとも一百年已前の成立と見なければなるまい。又十住毘婆沙論易行品にかゝぐる三十二行の彌陀讃は、平等覺經に依つたものと認められるのであるが、果して然りとすれば、平等覺經は龍樹時代に既に世に行はれてゐたことになり、隨つて亦その本經たる大阿彌陀經の成立は龍樹已前少くとも一百年を溯るべきものと推定されるのである。

又此の二經には阿彌陀佛は住世長久なるも、後遂に涅槃せられ、その後觀音勢至相次で補處成佛することを說いてゐる。これは遠く釋迦入滅彌勒補處說を承け、近く亦阿閦佛國經の所謂阿閦入滅金華補處說を承けたのであらうとおもはれる。無量壽經已下四十八願經には此說がないのでこれは二十四願時代の特徴と見るべきである。觀世音菩薩受記經は觀音勢至補處成佛のことを詳說した經で、即ち大阿彌陀經の說を增廣布衍したものと認められる。出三藏記集第二に依ると、西晉竺法護は光世音大勢至受決經一卷を譯したといつてゐるが、これは此經の初譯で、その年代から見ても、大阿彌陀經に續いて編修されたものであることが想像される。ついで劉宋武帝の時（四五五—四六四）黃龍國沙門曇無竭は觀世音菩薩受記經一卷を出し、降つて宋太宗の世（九八二頃）施護は如幻

三摩地無量印法門經三卷を傳譯した。如幻三摩地經は如幻三昧を說いたものであるけれど、その中にかゝぐる觀音勢至補處成佛の記事は觀世音受記經と大體同一であるから。これも彼の一種の異本とすべきである。彌勒下生成佛經は釋尊の補處として彌勒が當來下生成佛すべきことを說いたのであるが、今觀世音受記經は正しくそれと同一趣旨に出でたのであり、而してその觀世音受記經が彌勒成佛經と共に法護によりて飜傳されたことは、彌陀信仰が西曆三世紀已前に既に最高潮に達してゐたことを證するのである。又藏中に太子刷護經といふのがあるが、これは阿闍世王太子幷に長者の子等の授記成佛を說いたのであつて、大阿彌陀經中の阿闍世王子授記說を詳悉したのであらう。

又出三藏記集第四失譯雜經錄中には阿彌陀佛偈一卷、後出阿彌陀佛偈一卷の二部を列ねてゐるが、この中、後出阿彌陀佛偈は五言十四行の偈で、大阿彌陀經若しくは平等覺經の大意を取つて之を偈頌にしたのである。二十四願經に依つたことは、彼の偈中に誓二十四章の語があることから知られる。阿彌陀佛偈は傳つて居らぬが、既に後出があるとすれば、それは卽ち前出であつたことを知るのである。共に失譯であるが、相當古い時代の傳譯であることは疑を容れぬ。

第四節　大乘無量壽莊嚴經

大乘無量壽莊嚴經は無量壽經の異譯で三卷あり、西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿明敎大師法賢の譯したものである。法賢に關しては、佛祖統紀第四十三宋太宗雍熙二年（九八五）の條に、法天改名法賢と記し、法天と同人としてゐるけれど、近時諸學者の研究に依つてその過誤なることが惜められるゝに至つた。卽ち成尋の參天台五臺山記第七に、法賢、法天の二人を並べ擧げ、京都南禪寺所藏の尊勝大明王經、護國尊者所問大乘經等に掲ぐる譯場列位にも、法天、法賢の二人の名を列記し、又法天は傳敎大師、法賢は明敎大師と稱し、その徽號が異なつてゐるので、此二人は卽ち別人たることを知るのである。大中祥符法寶錄第六には法賢は天息災の改名であるとなし、卽ち雍熙四年太宗は天息災に詔して名を法賢と改めしめたと記してゐる。但し參天台五臺山記第六に天息災、法天、法賢の名を列記してゐるけれど、天息災が明敎大師と號せられたことは、彼が譯した大乘善見變化文殊師利問法經等の署名に依つて明かであるから、大中祥符錄の所傳を以て正鵠を得たものとすべきである。

法賢即ち天息災は迦濕彌羅國の人で、幼にして中印度惹爛馱邏國密林寺に入りて聲明等を學し、ついで宋太宗太平興國五年（九八〇）支那汴京に來り、同七年六月譯經院成るに及び、勅によつて法天、施護等と共に譯經に從事し、雍熙二年朝散大夫試光祿卿に除せられ、眞宗咸平三年（一〇〇〇）八月を以て寂し、慧辯法師と諡せられた。譯經は文殊師利根本儀軌經二十卷、衆許摩訶帝經十三卷を始め、大部のものも七八部あるが、其他は多く短篇もので、凡そ九十部ある。

大乘無量壽莊嚴經は大中祥符法寶錄略出に依ると、太宗の淳化二年（九九一）十月に譯したもので、漢譯無量壽經五存の一として現に入藏されてゐるのである。然るにその翻譯年代が遲く、特に願文の內容及び其の書方が他の諸本に異なつてゐるので、古來多く之を原本の不正に歸し、深く顧みるものもなかつたのであるが、近時予は少しく此經の願文につき研究を試み、その敍說が頗る重要性を帶ぶるものなるを知り、亦彼の成立も決して後代に在るものでなく、恐らく無量壽經の已前に編纂され、彼の四十八願說の基となつたものであらうと思惟するに至つたのである。

此經は現存の梵文無量壽經、及び西藏譯本に同じく初めに序說がなく、終りに五惡段もない。現存の諸本を比較するに、大阿彌陀經、平等覺經の二經には五惡段はあるも、初めに序說がなく、大寶積經無量壽如來會には序說はあるも、五惡段がなく、無量壽經には序說もあり五惡段もあり、

今此莊嚴經には二者共に無い。此點からいへば此經は今の梵本と其の系統を同じくするものと見るべきである。過去出現の諸佛の數は、世自在王如來を合せて三十八佛になつてゐるが、之を大阿彌陀經の三十四佛、平等覺經の三十七佛、無量壽會の四十三佛、無量壽經の五十三佛に比較して見ると、平等覺經と無量壽會との中間に當つてゐる。又此經には彌陀因位の本願を三十六願としてゐるのであるが、之を大阿彌陀經及び平等覺經の二十四願、無量壽會及び無量壽經の四十八願に比較して見ると、これ亦二十四願と四十八願との中間に當るのである。過去佛の數の如きは必ずしも問題とすべきではないやうであるが、しかしそれが願文の多少に合致することは興味ある事實とせなければならぬ。

　この經の願文の書方は他の諸本と全く異なつてゐる。即ち他の諸本では各願の終りに、若し此願を得ざれば正覺を取らじ等と書いてゐるのに、此經では各願共に「悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得しめん」といふの語で結んである。今平等覺經の書方と對照して見やう。

莊嚴經（第一願）	平等覺經（第一願）
願如世尊證得阿耨多羅三藐三菩提、所居佛刹具足無量無邊不可思議功德莊嚴。所有一切衆生及焰摩羅界、三惡道中	我作佛時、令我國中無有地獄禽獸餓鬼蜎飛蠕動之類。得是

地獄餓鬼畜生、皆生我刹受我法化、不久悉成阿耨多羅三藐　願乃作佛、不得是願終不作
三菩提。　佛。

即ち平等覺經では彼の淨土の中に地獄禽獸等の類のなからんことを願じ、而して此願を得ずんば作佛せじと記してゐるのに對し、今此經では有らゆる衆生乃至三惡道の者も皆我が國に生じ、久しからずして悉く無上菩提を成せしめんといふ意味になつてゐるのである。原文が不正であるといふ批難も此邊から起るのであるが、しかし此經の狙ひ所は却て此點に在るので、三十六願悉く皆衆生成佛の本願になつてゐるのである。斯樣に願文の趣旨も、又その書方も異なつてゐるので、隨つて其の意味も亦大に違つてはゐるが、今無量壽經等に准じてその願名を附して見ると、第一は惡趣來生幷に悉皆金色、第二は人天無別、第三は得神足通、第四は得宿命通、第五は得天眼通、第六は得他心通、第七は離顚倒想、第八は必至滅度、第九は二乘佛事、第十は國人光明、第十一は國人長壽、第十二は無諸不善、第十三は來迎引接、第十四は隨願往生、第十五は具大人相幷に一生補處、第十六は修普賢行、第十七は往他供佛、第十八は說一切智、第十九は神力供佛、第二十は諸佛受供、第二十一は供具自至、第二十二は菩薩大力、第二十三は得辯才智、第二十四は香氣普薰、第二十五は國土光耀、第二十六は恆受快樂、第二十七は轉女成男、第二十八は二乘作佛、

第二十九は人天致敬、第三十は衣服隨身、第三十一は聞名得忍、第三十二は得見佛定、第三十三は具足善根、第三十四は得普等定、第三十五は隨意聞法、第三十六は得三法忍である。一願に二義を含むものが二願あるから、すべて三十八願になるのである。

これを大別して見ると、前段の二十六願の中、第十三第十四の二願は衆生の來生を願じ、其他の二十四願及び第三十五願は衆生が彼國に往生して後得るところの功德利益を願じ、第二十七願已下九願（第三十五を除く）は、他方世界の衆生が彼佛の名號を聞くによつて獲得すべき功德利益を願じたのである。この中、第一惡趣來生及び悉皆金色は、平等覺經の第一無三惡趣、第二不更惡趣、第三悉皆金色の三願の意を合せ取つたものと見るべく、第二人天無別は彼經の第四に、第三得神足通、第四得宿命通、第五得天眼通、第六得他心通は彼經の第八、第五、第六、第七願に各相當し、第七離顛倒想は彼の第十無有愛欲に、第八必至滅度は彼の第十一願に當るやうであり、第十一國人長壽は彼の第十五願に、第十二無諸不善は彼の第十六願に、第十三來迎引接は彼の第十八願に、第十四隨願往生は彼の第十七願の後半（聞名往生）に、第十五具大人相は彼の第二十一願に、又同一生補處及び第十六修普賢行は彼の第二十願に、第十七往他供佛は彼の第二十二願に、第十八說一切智は彼の第二十四願に相當する。されば此經前段中の十六願は大體平等覺

經の各願に合致するものなるを知るべきである。又平等覺經の二十四願中、此經に於て削除したものは、得天耳通、聲聞無數、光明無量、壽命無量、諸佛稱揚、飮食自然の六願であるが、此中、光明無量、壽命無量及び諸佛稱揚の三願を擧げないのは、此經の願文はすべて皆衆生の成佛を願じたもので、所謂利他の本願のみを掲げるといふ建前から、佛自身の功德利益に關する所謂自利の願を除いたのである。得天耳通及び飮食自然を除いたのは恐らく誤脱か。聲聞無數が闕けてゐるのは、一切皆成佛の立場から、その意味を轉じて之を二乘佛事の願に改めたのであらう。されば三十六願の中、十七願は主として平等覺經の願文に依つたものといふべきである。又第十國人光明は大阿彌陀經の第二十三願に合し、第二十七轉女成男は同第二願に當るのであるから、兼ねて亦大阿彌陀經を參照したことも明かとすべきである。

第十九願已下の十七願（第二十七を除く）は卽ち此經に至つて新たに加つたもので、その中、第二十六までの八願及び第三十五の計九願は、彼の國中に於ける菩薩所得の功德利益幷に國土の莊嚴を願じ、第二十七已下の九願（第三十五を除く）は專ら他方世界に於ける衆生の聞名の得益を願じたのである。就中、彼の國中の菩薩所得の功德利益に關するものは、平等覺經等の願意の足らざる點を補つたものと見るべく、又他方世界に於ける衆生の聞名の得益に關するものは、平

等覺經の第十七願に

我作佛時、令下我名聞二八方上下無數佛國一、諸佛各於二弟子衆中一歎中我功德國土之善上、諸天人民蠕動之類聞二我名字一、皆悉踊躍來中生我國上。不レ爾者我不二作佛一。

といふの意を受け　之を擴大布衍して新たに願文を增加したものと認められる。卽ち平等覺經等に於ては、唯だ專ら彼の淨土に於ける菩薩等の所得すべき功德利益のみを列擧してゐるのに對し、今此經にては彼佛の恩澤は獨り彼の國中の者にのみ被るべきでなく、廣く亦十方の世界、特に此娑婆世界の衆生の上にも均霑するものなることを鼓吹したのである。これが亦此經の願文の特長と見らるべきもので、平等覺經の二十四願に就き增補を企てた主旨も卽ち此點に在るのであらうと思はれる。

無量壽經の四十八願說は此經の三十六願に對して檢討を加へ、願文の書方を匡して平等覺經の舊に復し、且つ又彼の佛自身の光明無量等の三願を始め、聞名の得益等に關するものも更に之を增補し、二十四願の倍數を目標として願文を集成したものと認められるのである。今左に平等覺經、莊嚴經及び無量壽經の願名を表示し、之を對當して見やう。

平等覺經(二十四願)	莊嚴經(三十六願)	無量壽經(四十八願)
一、無三惡趣	一、惡趣來生	一、
二、不更惡趣	一、	二、
三、悉皆金色	一、	三、
四、人天無別	二、	四、
五、得宿命通	四、	五、
六、得天眼通	五、	六、
七、得他心通	六、	八、
八、得神足通	三、	九、
九、得天耳通	—	七、
一〇、不起貪著	七、離顚倒想?	一〇、
一一、必至滅度	八、	一一、
一二、聲聞無數	九、二乘佛事?	一四、
一三、光明無量	—	一二、
一四、壽命無量	—	一三、
一五、國人長壽	一一、	一五、

一六、無諸不善	一二、	一六、
一七、諸佛稱揚	—	一七、
聞名往生	一四、隨願往生	一八、念佛往生
一八、來迎引接	一三、	一九、
一九、惡人往生	—	二〇、植諸德本
二〇、必至補處	一五、	二二、
修普賢行	一六、	二三、
二一、得大人相	一五、	二一、
二二、往他供佛	一七、	二三、
供具如意	一九、神力供佛?	二四、
二三、飲食自然	—	—
二四、說一切智	一八、	二五、
	一〇、國人光明	—
	二〇、諸佛受供	—
	二一、供具自至	—
	二二、菩薩大力	二六、

二三、得辯才智　　二九、
二四、香氣普薰　　三二、
二五、國土光耀　　三一、
二六、恆受快樂　　三九、
二七、轉女成男　　三五、
二八、二乘作佛　　三六、常修梵行？
二九、人天致敬　　三七、
三〇、衣服隨身　　三八、
三一、聞名得忍　　三四、
三二、得見佛定　　四二、
三三、具足善根　　四四、
三四、得普等定　　四五、
三五、隨意聞法　　四六、
三六、得三法忍　　四八、
　　　　　　　　　二七、莊嚴無數
　　　　　　　　　二八、見道場樹

三〇、智辯無窮
三三、觸光柔軟
四〇、樹中見土
四一、諸根無闕
四三、生尊貴家
四七、聞名不退

此表に依つて見ると、無量壽經の四十八願の中、前段の二十五願は大體に於て平等覺經の二十四願に一致し、又後段二十六願已下の十五願は、莊嚴經に於て增加せられた各願にほゞ合致するものなるを知るべきである。但し前段の二十五願中に於て、無量壽經には平等覺經の諸佛稱揚を開いて諸佛稱揚、念佛往生の二願、又往他供佛を開いて往他供佛、供具如意の二願となし、且つ飲食自然の一願を除いてゐる。飲食自然を除いたのは莊嚴經に既に此願を削つたからであり、供具如意を獨立させたのは、莊嚴經に往他供佛の外に神力供佛等の三願を列擧したことに緣由するものと思はれる。又後段の二十六願已下十五願はほゞ莊嚴經の各願に一致するのであるが、唯だその中に於て二乘作佛の一願がないのは、恐らく亦彼の意味を轉じて之を常修梵行願としたからであらう。今此經の二乘作佛願と無量壽如來會の常修梵行願とを比較して見ると、

莊嚴經（二乘作佛）

所有十方無量無邊無數佛刹聲聞緣覺聞我名號、修持淨戒堅固不退、速坐道場成就阿耨多羅三藐三菩提

無量壽會（常修梵行）

無量無數不可思議無等佛刹菩薩之衆、聞我名已得離生法、若不修行殊勝梵行、乃至到於大菩提者不取正覺

莊嚴經には聲聞緣覺とし、無量壽會には菩薩之衆といひ、對機は異なつてゐるけれど、その行果たる殊勝梵行到於大菩提の語は修持淨戒堅固不退速坐道場と同義と見られる。莊嚴經は前にも述べた如く一切皆成佛の建前から、平等覺經の聲聞無數の意味を轉じて二乘佛事願となし、頻りに二乘作佛の可能を鼓吹してゐるのであるが、之に對し無量壽經に於ては二乘作佛を不當とし、彼の願を改めて本の聲聞無數に復したのと同一趣旨で、今亦二乘作佛の義を轉じて常修梵行即ち菩薩作佛の義に改めたのであらう。（但し西藏本には唯だ他方世界の衆生とのみ記して、二乘とも菩薩とも限定して居らぬ。）

蓋し四十八願系の諸本にも亦願數の異同があり、無量壽經及び大寶積經無量壽如來會には共に四十八願を列ねてゐるけれど、現存の梵本には四十六願、西藏譯本には四十九願、悲華經には五十二願にしてゐる。梵本の四十六願とは、無量壽經の四十八願中、第二十植諸德本、第二十一得

大人相、第三十智辯無窮、第三十六常修梵行の四願を闕き、別に諸佛受供、華雨樂雲の二願が加つたものである。學者の中には此四十六願を無量壽經等の願文に比較して脫落となし、西藏本を以て之が增補を企てたものもあるが、然し今仔細に之を莊嚴經の願文に對照して見ると、四十六願說は四十八願系の諸本の中に於て最も古いものであることが知られる。卽ち梵本に得大人相が闕けてゐるのは恐らく脫落であらうが、植諸德本、智辯無窮の二願がないのは、本と莊嚴經に之を揭げてゐないからであり、又諸佛受供願が加つたのは莊嚴經に其願があるからである。又華雨樂雲は恐らく莊嚴經の供具自至願から轉じたのであり、常修梵行が無いのは、此願は莊嚴經の二乘作佛願の轉化であるから、之を不當として削除したものと見られる。されば梵本の四十六願は決して脫落ではなく、却て無量壽經の四十八願が彼の本を增減したものであることを知るべきである。西藏本の四十九願は梵本の四十六願の外に得大人相、智辯無窮、常修梵行の三願を增補したもので、之を無量壽經に比すると、尙ほ諸佛受供、華雨樂雲の二願が多く、植諸德本の一願が闕けてゐるのである。悲華經の五十二願は最後の成立と思はれるのであるが、これにも植諸德本願がないのは莊嚴經の影響と見なければならぬ。之に依ると四十八願の說は本と莊嚴經の三十六願說に就いて檢討を加へ、其書方を匡し、その遺を拾ひ、且つ聞名の得益に關する數願を追補し

たに外ならぬものと認められるのである。

又無量壽經の諸本の中、最古の出と思はれる大阿彌陀經には一の偈頌もないが、平等覺經には法藏比丘發心段の初に五言二十行、十方聖衆來到供養段の次に六言三十二行の長偈を擧げ、二種の偈頌を出し、莊嚴經には發心段の初に七言九行、別に願文段の後に五言十三行、聖衆供養段の次に七言十行、最後の流通段に七言六行、凡べて四種の偈頌を掲げてゐる、莊嚴經の後の二頌は平等覺經の聖衆供養段の長偈を二分して二個處に分置したのであるが、願文段の一頌は新たに此經に至つて加つたのである。無量壽會、梵本及び西藏本には共に莊嚴經に同じく四種の偈頌をかかげ、無量壽經には最後の流通段の偈を引上げて之を聖衆供養段の後に續け、唯だ三種としてゐる。無量壽經が流通段の偈を引上げたのは、平等覺經に依つて莊嚴經を改訂したものと見られるのであるが、兎に角、四十八願系の諸本に皆願文段の次に一頌（我建超世願等）が加つてゐるのは、即ち莊嚴經から來たものと推斷されるのである。

第五節　無量壽經幷にその異本

無量壽經は所謂四十八願經であつて、前の二十四願經及び三十六願經に基いて増廣したものであることは疑を容れぬ。此經の譯者に關しては、歴代三寶紀第五に曹魏嘉平年中（二四九―二五四）康僧鎧が洛陽白馬寺に於て譯したといひ、開元錄第一等にも亦同説をかゝげてゐる。然るに出三藏記集幷に法經錄にはすべて此事を記せず。又梁高僧傳第一には、康僧鎧は魏嘉平の末を以て洛陽に來至し、郁伽長者等の四部の經を出すといつてゐるけれど、無量壽經の名を擧げて居らぬ。今無量壽經と郁伽長者經（大寶積經第八十二郁伽長者會）との譯語を對照して見ると、郁伽經には得大勢、涅槃、三十二丈夫相、貪瞋癡等の語を用ひてゐるのに、無量壽經には大勢至、泥洹、三十二大人相、貪恚愚癡等としてゐる。斯樣に譯語の異なるのは、即ち譯人の同一でないことを證するものとせなければならぬ。三寶紀には竺道祖の晉世雜錄幷に寶唱錄にその説があるのだと言つてゐるけれど、此等の諸錄は今日傳つて居らず、又それが他に引用されてゐるのを見ても信憑すべき價値のあるものとも覺えぬ。さすれば康僧鎧無量壽經傳譯の説は確實性に乏しいとせなければならぬ。天台の觀經疏、幷に憬興の無量壽經連義述文贊には、今の無量壽經を以て竺法護の譯としてゐる。出三藏記集第二、法經錄第一等に皆竺法護が無量壽經二卷を譯出したことを傳へ、且つその本の見在を記してゐるから、憬興等の説は根據のないものとはいへぬ。さりながら法護の無

量壽經は一名無量淸淨平等覺經といはれたに拘はらず、今の經中に無量淸淨平等覺の名稱が一度もあらはれてない。のみならず法護譯の正法華經等とその譯語を對照して見ると、一致しないものが甚だ多い。卽ち正法華經には賢者知本際、賢者大迦葉、上時迦葉、象迦葉、江迦葉等の譯語をあげてゐるのに、此經には尊者了本際、尊者摩訶迦葉、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉等の語を用ひ、又彼の經に光世音、得大勢、江河沙、那術等の語を用ひてゐるのに、此經には觀世音、大勢至、恆沙、那由他等の字を使用してゐる如き皆その例である。されば此經は亦法護の譯本でもないとせなければならぬ。出三藏記集第二に依ると、佛駄跋陀羅は劉宋永初二年（四二一）揚都道場寺に於て新無量壽經二卷を出し、又寶雲は同年に同寺（一說に六合山寺）に於て同名の經二卷を譯したことを傳へてゐる。蓋し此二本は諸錄に皆闕本となつてゐるけれど、出三藏記集には各その下に闕の注なく、且つ同新集異出經錄には、支謙出阿彌陀經二卷、竺法護出無量壽二卷、（一名無量淸淨平等覺經）、鳩摩羅什出無量壽一卷、釋寶雲出新無量壽二卷、求那跋陀羅出無量壽一卷を列ね、之を一經五人異出としてゐる。こゝに佛駄跋陀羅の譯本がかゝげてないのは、彼の本は寶雲と共譯したもので、寶雲本の外に別に佛駄本がなかつた爲か、或は佛駄本は別にあつたけれと、それは僧祐時代に既に失はれた爲かであらう。又この中に帛延譯幷に康僧鎧譯が擧げてない

のは、僧祐は此の二人の譯本を認めず、卽ち平等覺經を竺法護、無量壽經を寶雲の譯と見たからであらう。蓋し寶雲の本を新無量壽經と稱した理由は、支謙等の舊經に對し、新譯たることをあらはすは勿論であるが、同時に亦その內容が新なる四十八願を有することも意味されてゐると見るべきである。現藏中には寶雲の譯として佛本行經七卷(馬鳴の佛所行讚の異譯)があるが、今その中の譯語譯例を現存無量壽經に對照して見ると、甚だ善く一致するやうである。卽ち王舍城、定光如來、羅云、泥洹、塵勞、分衞、翼從、安詳、三塗、炎天、兜術、優曇鉢華等の諸語が二經同一であるのみならず、亦彼の佛本行經にかゝぐる從右脇生、故行七步、吉祥持草奉迎而進、奮大光明、入城分衞、植衆善本、愍傷衆生、擊大法鼓、建立正法幢、華香及伎樂、太淸和順、風雨順時、海淵無涯底、曇佛今未去等の諸句は、無量壽經の從右脇生、現行七步、吉祥感徵表章功祚、奮大光明、入國分衞、植衆德本、愍傷衆生、扣法鼓、建法幢、華香伎樂、天下和順、風雨以時、深廣無涯底、曇佛在世等の用例に一致又は酷似してゐる。特に大阿、平等の二經、幷に梵文無量壽經等には別に文前に序說がないのに、獨り此經には釋尊歎德の序文があつて、比較的長く八相の化儀を敍述してゐる。これは恐らく譯者寶雲が馬鳴の作なる佛本行讚を傳譯したついでに附け加へたもので、梵本には元と無かつたものであらうと思ふ。二者の譯語幷にその用例が甚だ善く

一致するのは、即ち此事實を立證するものと見られる。のみならず亦其序說中に、得佛華嚴三昧とあるのは、明かに佛駄跋陀羅の華嚴大經を豫想したものといふべきであり、又皆遵普賢大士之德といひ、現前修習普賢之德といふのも、皆華嚴思想を受けたと見るべきである。されば現存無量壽經は佛駄跋陀羅の譯場に參じ、且つ佛本行經の譯者なる寶雲の飜傳に係るものと認定せなければならぬやうである。又此經の下卷に五惡段と稱する一段の說述があるが、これは大阿、平等の兩經にも揭げてあるので、多分それに依りて複述したのであらうとおもはれるが、然しその中の五善五戒福德度世長壽の思想は、劉宋智嚴が寶雲と共に譯した四天王經の說に頗る類似してゐる。この事は別章に述べた通りであるが、若しもその所論の如く彼の福德度世上天の說が果して四天王經に同じく道敎の增壽益算思想の影響を受けたものとすれば、かの所謂五惡段は却て寶雲の無量壽經に於て始めて記述され、やがて亦大阿、平等の二經にもそれが追補されたものとすべきである。

無量壽經は大阿彌陀經等と文段起盡が大體同一であるけれど、上述の如く文前に別に序說があり、又願文が增加されてすべて四十八願となり、彌陀入滅觀音補處等の說が削除され、且つ中悔往生の一段が移されて經の末尾に置かれた如き、その大なる異點である。のみならず平等覺經に

は、上にも述べた如く法藏發心幷に三輩段の後に各偈頌を揭げてゐるが、無量壽經には此他に亦願文の次に新たに五言十一行の偈が加つてゐる。これ等は皆此經が平等覺經の後に成立したことを證するのである。彌陀入滅觀音補處の說がないのは、此經に至つて無量壽思想が强調され、その結果彌陀の入滅を容認せないやうになつたからであらう。詳細の比較は別に述べるが、兎に角二十四願經よりもその內容が發達してゐることは明かであつて、之を劉宋代の傳譯とすることは、蓋し最も當を得たものであらうとおもはれるのである。

その後、唐開元元年(西紀七一三)無量壽經は菩提流志に依りて重譯され、無量壽如來會と題して大寶積經第十七、第十八の兩卷に收められた。此經は願文の數及び其の順位が無量壽經と同一であり、且つ序說も揭載され、彌陀入滅の說も亦闕略されてゐるが、然し五惡の一段は全くなく、又三輩段の後の偈が二分されて、その後分が最後の流通段に移されてある。此等は此經が主として彼の無量壽經に就き改修を加へたことを證するのであらう。又無量壽經には梵本があり、西藏譯本もある。此二本には共に序說及び五惡段がなく、別に三輩段の前に五行二十句の偈があり、又梵本は四十六願、西藏本は四十九願を有し、その他、過去佛幷に十二光佛等の數も增加してゐる。就中、西藏本は漢譯無量壽經を參照したとおもはれるので、當然その後出とすべきであるが、梵本

は恐らく彼の無量壽經已前の編纂に係るのであらう。

第六節　觀無量壽經

觀無量壽經は一卷の經であつて、無量壽經、阿彌陀經と共に淨土三部の一に數へられるのである。出三藏記集第四には之を失譯雜經錄に編してゐるけれど、梁高僧傳第三には劉宋畺良耶舍の出とし、法經錄第一以下諸錄に皆此說を取つてゐる。されば此經は劉宋元嘉年中(四二四—四四二)畺良耶舍によりて支那に飜傳されたとすべきである。歷代三寶紀には畺良耶舍譯の外に、別に又後漢失譯錄幷に東晉失譯錄の中に此經を列ねてゐる。これは此經が後漢幷に東晉代にも相次で傳譯されたとする意味であるが、一體三寶紀が斯樣の說をなすのは、元と出三藏記集の失譯說に依つたのであつて、此他に何等根據のないことは明かである。然るに彼集に此經を失譯錄に編したのは　それが畺良耶舍の譯たることを知らなかつた(若しくは認めなかつた)爲で、若しもその譯人が判然すれば、僧祐は當然彼の記事を訂正すべきである。今三寶紀は梁傳に依りてそれを畺良耶舍の譯と定めるのであるから、此の他に別に失譯を擧ぐべきでない。それにも拘はらず、後漢東晉の

兩代に各此經の失譯があつたとする如き、いつもながら杜撰の甚しきものといはなければならぬ。開元錄には其の中の東晉失譯を認めず、別に又寶唱錄に依りて劉宋曇摩蜜多に觀無量壽佛經一卷の翻譯があるとしてゐる。良忠の觀經玄義分傳通記第三に、觀經に後漢失譯、畺良耶舍譯、曇摩蜜多譯の三譯があると云つてゐるのは、即ち此說に基いたものであるが、中に於て後漢失譯の說は三寶紀の謬をうけたのであつて、固より事實でない。曇摩蜜多重譯の說も出三藏記集等に之を傳へず。且つ法經錄第一に此經を單譯錄に編してゐるから、それも亦事實でないとせなければならぬ。要するに此經は單なる一譯であつて、出三藏記集にはそれを失譯とし、梁高僧傳已下諸錄には畺良耶舍譯としたことを知るべきである。

觀無量壽經は觀經の一種であつて、觀佛三昧經、觀普賢菩薩行法經、觀虛空藏菩薩經、觀彌勒菩薩上生兜率天經、觀世音觀經、觀藥王藥上二菩薩經等とその類を同くし、彌陀及び觀勢二菩薩、幷に極樂淨土の莊嚴を觀察するの法を說き明かした經である。すべて十六觀として組織されてあるが、就中、第九阿彌陀佛觀は最も主要なる觀行であつて、それは疑ひもなく、般舟三昧經から導かれたのである。彼の第九觀の文に「見此事者即見十方一切諸佛。以見諸佛故名念佛三昧」とあるのは、明かに般舟三昧の說を指したものと見られる。又此經の九品往生の說は、大阿彌陀經

已來の三輩の文を增廣したと見るべきであり、特に中品下生の文に法藏比丘四十八願の語をかゝげてゐるのは、此經が無量壽經の後に至つて編纂されたことを證するのである。經の體裁からいへば觀佛三昧經に酷似し、文字章句の同一なるものも少くない。更に內容に就いていへば、此經の序分にかゝぐる施戒行の三福は長阿含等の三類福業事の說に類し、上品上生に列ねる至誠深心廻向發願の三心は、維摩經佛國品の直心深心廻向心の說に類し、又上品下生に出せる得百法明門住歡喜地の語は、華嚴十地品の說から來たやうである。觀佛三昧經を始め、諸種の觀經が一齊に劉宋代に翻譯されたことによりて、當時觀行が盛に流行したことを知ると同時に、その編纂も亦餘り遠からざる時代に共に行はれたことを察し得るのである。

第七節　彌陀の過去本生を記述する諸經

無量壽經、阿彌陀經、觀無量壽經等は正明淨土の經典であつて、專ら彌陀淨土に關する記事を以て充たされてゐる。此他に傍明淨土の諸經の少くないことは上に述べた通りであるが、その中に彌陀因位の本生說話を記述したものが凡そ四十餘經ある。即ち慧印三昧經、無量門微密持經

德光太子經、決定總持經、賢劫經、濟諸方等學經、悲華經等がそれである。これ等は彌陀研究の資料として趣味あるものであるから、今その主なる經に就いて略して翻譯の事實幷にその物語を述べて見やう。

大阿彌陀經已下、異譯の諸經には皆彌陀因位の發心修行に關する說話が揭げてある。今無量壽經に依つてそれを述べて見ると、過去久遠無量不可思議無央數劫に定光 Dipaṃkara 如來が出世し、かの佛滅度の後、光遠如來乃至處世如來等の數十佛が次第に出興し、次に世自在王 Lokeśvararāja と名ける如來が世に出現した。時に國王があり、彼の如來の所に詣でゝ法を聞き、歡喜開解して無上菩提心を發し、仍て國を棄てゝ沙門となり、法藏 Dharmākara と號した。高才勇哲にして世に雙ぶものがなく、速に正覺を成じて諸の生死勤苦の本を拔かんことを志望し、世自在王如來に對して淨佛國土の修行の法を尋ねた。時に彼の如來は大海の水を一人で升量してその底を窮めんとするが如く、至心に精進して道を求めて止まなければ如何なる願も得られないものはないと激勵し、廣く二百一十億の諸佛國土の麤妙を說き示されたので、法藏比丘はその所說を聞き、又悉く諸佛の淨土を見てそれを選擇し取捨し、遂に自ら菩薩の大願を發起し、やがて佛前に詣でてその大願を述べ、然る後勤苦修行して曾て倦むことなく、無央數劫に功を積み德を累ね、遂に

十劫已前に成佛して阿彌陀佛と號せられることになつたと說いてゐるのがそれである。但し諸譯を比較すると過去佛及び本願の數等は種種異なつてゐるけれど、大體の骨子は固より之を出でぬのである。

慧印三昧經は吳支謙の譯で、大阿彌陀經と同代に翻傳されたものである。これには失譯の如來智印經及び宋智吉祥譯の大乘智印經の異本がある。龍樹の大智度論にも處處に引用されてあるから、龍樹已前に此經が行はれたことを知るのである。今慧印三昧經に依つて見ると、定光佛の後、八十億劫を過ぎて光明と名ける佛があり、三會に說法して衆生を度された。その時、慧上と名くる轉輪聖王があり、六十億の采女、一千の王子を有したが、光明佛が出世されたと聞いて、六十億の衆と共に佛の所に詣でゝ慧印三昧の說を聽き、卽ち國を擧げて佛に奉じ、諸國に講堂を立て、經行すべき所の地に金を布き、斯くて八萬四千歲の間佛を供養し、專精にして怠ることがなかつた。尋いで王は此の三昧を成せんが爲に國を棄て、鬚髮を剃去し、深山に入りて正戒を受行し、三千歲中この三昧を行じて休息なく、嘗て睡臥もしなかつた。彼の佛般泥曰の後、王は國縣に六十四億の塔を起し、塔每に各五百の蓋を設け、又八千の燈を燃やした。乃至その時の慧上王は卽ち阿彌陀佛で、王の千子は卽ち賢劫の千佛であつたと云ふのである。此の說話は彌陀が因位に轉

輪聖王であつた時、光明佛の出世に値うて之を供養し、尋いで出家して深山に入り、慧印三昧の法を修行したといふので、細目には多少の異があり、且つ發願のことは全く闕けてゐるけれど、大體の筋書は上の無量壽經の說と同一であるといへる。

無量門微密持經は一卷の經で、亦吳支謙の譯である。これには東晉佛陀跋陀羅の出生無量門持經　劉宋求那跋陀羅(?)の阿難陀目佉尼訶離陀經、劉宋功德直の無量門破魔陀羅尼經、北魏佛陀扇多の阿離陀目佉尼訶離陀鄰尼經、梁僧伽婆羅の舍利弗陀羅尼經、隋闍那崛多の一向出生菩薩經、唐智嚴の出生無邊門陀羅尼經等の異譯がある。支謙の無量門微密持經に依ると、過去無央數劫に寶首䣜王と名ける如來があつたが、その佛滅度の時に轉輪聖王あり、其の太子を無念德首と名けた。無念德首は千八百歲の間、佛に從つて無量門微密持の法を聞き　即ち奉行して七千歲未だ曾て𦣱臥せず。乃至後沙門となり、九萬歲の間人の爲に此の法を解說して八十億人を成就し、出家して不退轉地に立たしめた。彼の時その衆中に月行と名ける長者の子あり、此法を聞いて隨喜し、後成佛して錠光如來と號した。その時の太子無念德首は卽ち西方無量壽佛であつたと說いてゐる。これは彌陀の前身を轉輪聖王の太子とし、且つ定光如來を彼の太子の所化とするので、頗る注意を要すべき說話である。彌陀の本生は多く定光如來と關係附けられてゐるが、中にも大阿彌陀經

には定光を以て世自在王より數十佛已前の出現となし、又慧印三昧經にも定光如來已後八十億劫を過ぎて光明佛ありといひ　共に定光を彌陀發心已前の古佛としてゐる。然るに今此經に彼の如來を彌陀因位の所化としたのは、大寶積經無量壽如來會等の過去古佛逆次出現の說と同一趣旨と見るべきもので、卽ち之に依りて或る時代には彌陀の發心修行を定光已前に置かんとしたことが察せられるのである。

德光太子經は西晉太始六年（二七〇）竺法護によつて譯出された一卷の經で、或は賴吒和羅所問德光太子經ともいふのである。此經は隋闍那崛多、幷に北宋施護によりても重譯され、前者は護國菩薩會と名けて大寶積經第八十、第八十一の兩卷に收められ、後者は護國尊者所問大乘經と題して四卷に分たれてある。此等の經中には彌陀因位の前身が釋迦及び阿閦と關係のあつた說話を委しくかゝげてゐる。今德光太子經に依つてそれを述べて見ると、過去阿僧祇劫に吉義と名ける如來が出現したが、その時の國王を頞眞無といひ、その太子を德光と名ける。時に太子は淨居天の勸めに依りて深く無常を感じ、竊に宮を出でゝ吉義如來の許に至り、その法を聞いて陀羅尼を得た。時に父王は太子の不在を聞き、啼哭懊惱して之を索めると、護城神があつて、太子は吉義如來の許に在りて承事供養しつゝあることを告げたので、仍て王は直に佛所に至るに、佛は王の深

信心なることを知り、爲に法を說いて不退轉地に住せしめる。時に太子は所住の城を以て佛及び比丘衆に奉施し、三億歲の間之を供養した。彼の時の王は卽ち無量壽如來、德光太子は釋迦佛、護城神は卽ち阿閦如來だといふのである。この說話は彌陀を王とし、釋迦を太子とし、阿閦を護城神とし、而して彌陀はその太子なる釋迦の誘導に因りて發心したとするので、悲華經の無諍念王本生と似通つた點がある。

決定總持經は一卷の經で、西晉竺法護の譯である。後北魏菩提流支は更に之を重譯して謗佛經と名けた。今法護の經に依ると、過去久遠劫に光世音と名ける如來があつたが、時に辨積と稱する法師あり、總持を逮得して一切の人を敎化した。國王月施は彼の法師を供養し、中宮貴人婇女五百人と共に大に伎樂を作し、寶を以てその上に散じ、栴檀香に和してその體に塗り、五百の蓋を以て上を覆ひ、又五百の細妙の衣服を施し、乃至甚だ法師を敬重したが、時に長者の子あり、彼の法師を誹謗し、その罪によりて遂に地獄に墮ちた。その時の月施王は今の阿彌陀佛、法師辨積は阿閦如來だといふ說話をかゝげてゐる。又竺法護譯の賢劫經第三法供養品には、過去無央數劫に金龍決光と名くる如來があり、國を無量淨と號し、其壽は長久にして限量することが出來ぬ。時に無限量寶音と名くる法師があつたが、諸比丘は皆之を擯したけれど、彼法師は勤精してこの

三昧を講じた。その時轉輪聖王たる使衆無憂悅音は、法師の所に詣でゝ此三昧を聽き、仍てその千子及び三萬の衆を遣して之を護衞せしめ、又常に甘饍を以て彼の法師を供養する。是に於て法師は威神をまし、半劫の中に於てこの三昧を演說した。乃至彼の時の法師は今の阿彌陀佛、國王は阿閦佛　王の千子は賢劫の千佛であつたといつてゐる。この說話は決定總持經と同一構想で、共に法師を中心とするのであるが、然し彼經では法師を阿閦とし、供養者たる國王を彌陀とするのに反し、今此經では法師を彌陀とし、國王を阿閦としてゐる。これは前者は阿閦の崇拜者により、後者は彌陀の信奉者に依りて記述された爲ではないかと思はれる。

又法華經は西晉竺法護及び姚秦鳩摩羅什等に依りて飜傳された經で、その中の化城喩品には所謂十六王子の話が揭げてある。今羅什の經に依ると、過去無量無邊阿僧祇劫に大通智勝と名くる如來があり、その佛の未だ出家せざる時に十六人の子があつて、その第一を智積と名けた。諸子には各種種珍異の玩好の具があつたが、父が成道したと聞いて、皆其の所珍を捨てゝ佛の所に往詣し、ついで皆出家して沙彌となり、佛の妙法蓮華經を說くのを聞き、悉く信受して共にその經を受持し諷誦した。乃至彼の佛の弟子十六沙彌は今皆成道して十方の國土に於て現在說法し、無量の菩薩聲聞を以てその眷屬としてゐる。卽ちその二沙彌は東方に於て作佛し、一を阿閦と名け、

現に歡喜國に在り。二を須彌頂と名ける。東南方に二佛あり、一を師子音、二を師子相と名け、南方に二佛あり、一を虛空住　二を常滅と名け、西南方に二佛あり、一を帝相、二を梵相と名け、西方に二佛あり、一を阿彌陀、二を度一切世間苦惱と名け、西北方に二佛あり、一を多摩羅跋旃檀香神通、二を須彌相と名け、北方に二佛あり、一を雲自在、二を雲自在王と名け、東北方の佛を壞一切世間怖畏と名け、第十六は卽ち我れ釋迦牟尼佛にして、娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずと說いてゐる。これは阿閦、彌陀及び釋尊等を以て過去の兄弟となし、共に法華經を信奉したことに由りて成道を得たとする說話である。

濟諸方等學經は一卷の經で、亦西晉竺法護の譯である。これには隋毘尼多流支の異譯があり、大乘方廣總持經と名ける。その中には彌陀釋迦二佛を共に比丘となし、釋迦は彌陀を誹謗し墮獄したとしてゐる。今法護の譯に依つて述べて見ると、過去久遠に離垢焰成就功德と名くる如來があり、時に淨命と稱する比丘があつて、言辭柔和、辯才至眞にして無數の人を勸助し、後彼の如來が滅度を取らんとする時、正法の付屬を受けたので、卽ち彼の比丘は八萬の城邑を往返して衆生を觀察し、法施に飽滿せしめた。時に仁賢と名くる大國城あり、八十億の民があつたが、彼の比丘は乃ちその城中に入りて敎化し、一億の家をして菩薩の意を發し、七十九億をして聲聞の心

を發さしめた。その時爲法と名くる比丘があり、毒心を懷いて彼の淨命比丘を誹謗し、之に由つて壽終の後地獄に墮し、乃至人間に生じても尙ほ常瘂たることを免れなかつた。彼の比丘淨命は阿彌陀佛、爲法は卽ち我れ釋迦牟尼であつて、我れはこの業因緣を以て五濁の世に處して等正覺を成ずるのだと說いてゐる。同じ竺法護譯の生經第五譬喩經にも亦之と同種の說話をかゝげ、釋迦の前身を首達、彌陀の前身を惟先と名け、首達は長老なるも唯だ五十人のみを敎化し、惟先は年少なれども其の智深遠にして諸國を遊行し、六萬人を敎化し、後遂に輾轉して首達と相會した。時に首達の弟子等は惟先の智慧勇猛なるを見て、悉く往いて敬意を表せんとしたが、首達は惟先の年少なるを見て智慧淺短なりとし、之を許さなかつた。時に惟先は彼の弟子等が首達を見捨てんことを恐れて、その夜默然としてその地を去つた。首達は惟先を誹謗した罪に由りて六十劫大地獄に墮し、出でゝ人となつても亦六十劫の間舌がなかつた。後その罪が盡きて前の功德を逮得し、遂に成佛して釋迦文と號するやうになつたといつてゐる。この中、所化の人數等は濟諸方等學經に異なつてゐるけれど、二經の說話が大體同種のものであることは多言を俟たぬ。これは恐らく小乘敎徒が淨佛國土の敎義を信ぜず、釋尊の穢土成佛を楯として彌陀の淨土出現を攻擊したから、之に對して釋迦は元と彌陀を誹謗した罪に由つて墮獄し、亦穢土成佛を餘儀なくされたの

だとし、以て彼の敎徒を威嚇したものであらうと思はれる。

その他、賢劫經第一法師品、同第八歎古品、觀佛三昧海經第九、大法炬陀羅尼經第十七諸菩薩證相品、大乘寳要義論第六所引學智方廣經等にも、亦彌陀の過去本生に關する物語を載せてゐる。それ等は「淨土敎之硏究」に曾て揭げて置いたから今は略する。上述の諸經中、大阿彌陀經、慧印三昧經、無量門微密持經は共に吳支謙の譯であり、德光太子經、決定總持經、賢劫經、正法華經　濟諸方等學經及び生經は共に西晉竺法護の翻ずる所であるのを見ると、彌陀の本生に關する主なる說話は、西曆三世紀已前に旣に悉く唱道されたことを知ると同時に、亦その信仰が當時印度及び西域地方に爛熟しつゝあつたことを察することが出來るのである。

第八節　悲華經の無諍念王本生

悲華經は北涼玄始八年（四一九）曇無讖が西涼州に於て譯したもので、十卷十四品ある。出三藏記集第二には別錄に此經が龔上出となつてゐることを傳へてゐるが、龔上とは卽ち道龔(上は和上の意か）のことで、彼れは東晉安帝の時、涼州に於て寳梁經を譯した人であるから、曇無讖とは正

しく同時代である。又此經に大乘悲分陀利經(又は大悲分陀利經)と名ける異譯があり、その經は八卷三十品に分れてある。諸錄に之を失譯としてゐるけれど、或はそれが道龔の譯したものかも知れぬ。此經には梵本 Karuṇā-puṇḍarika もあり、又西藏本もあるが、大體に於て漢譯と一致してゐるといふことである。彌陀對釋迦の大本生物語を書いたもので、淨土成佛と穢土成佛思想とを對蹠的に説き顯はした經である。今悲華經に依りて略してその梗概を述べて見ると、往昔恆河沙阿僧祇劫に無諍念と名くる轉輪聖王があつて四天下を統御し、千子を儲けた。又王に寶海 Ratnasamudra と名ける一の大臣があり、それに八十人の子があつたが、其中の一人は夙に出家して成道し、寶藏 Ratnagarbha 如來と號した。時に彼の如來は法輪を轉じて衆生を度し、次第に城邑聚落に遊行して遂に無諍念王の首都たる安周羅城に來り、城外の閻浮林に止まつた。時に王は自ら大衆を率ゐて閻浮林に至りて佛の説法を聞き、如來及び聖衆に對して三月の間此林中に止まりて供養を受けんことを請ひ、ついで彼の林中に七寶の樓を造り、七寶の行樹を植ゑ、種種奇妙の莊嚴、繒幡天蓋、香華牀榻を設けて之を供養し、又毎日淸旦に自ら佛の所に往詣して食を捧げ、手に寶扇を執りて如來及び一一の聲聞を扇ぎ、夜に入りては百千無量億那由他の燈を燃し、別に又自らその頭上に一燈を頂き、肩に二燈を荷ひ、左右の手に四燈を持し、その兩膝及び兩足の趺上

にも各一燈を置き、終夜供養を怠らなかつた。斯くて三月を過ぐる時、王は如來に八萬四千等の種種の珍寶を奉施し、且つ我が國多事にして諸の及ばざるものあり、我れ今悔過に堪へぬ。唯だ願はくは如來久しく此間に住し給へと述べてその場を引き下つた。次に王の千子の第一太子不眴も亦三月の間父王の如く如來及び聖衆を供養し、次に第二の王子尼摩も亦三月の間如來及び聖衆を供養し、斯くて第三巳下王の千子は順次に各三月の間如來及び聖衆を供養し、皆第一太子の如く一切所須の衣服飮食臥具醫藥を悉く奉施した。然るに此等の千子は悉くその功德に由つて或は忉利天王たらんことを願ひ、或は梵王、或は魔王、或は轉輪聖王たらんことを求め、一人も未だ大乘の佛果を志求する者がなく、王も亦その施すところの功德を以て來世に復び轉輪聖王たらんことを望み、更に無上菩提を求めなかつた。時に彼の大臣寶海は夢想を感じて人天有漏の果の深く愛するに足らざることを覺悟し、因て王に說いて無上菩提心を發し、菩薩道を行じて淸淨の佛土に成佛せんことを期待せしめた。その時寶藏如來は神通力を以て大光明を放ち、十方微塵數の諸佛世界を現じて王をして悉く之を見せしめた。その現じた世界の中には五濁弊惡のものもあり、淸淨微妙のものもあり、或は壽命無量のものもあり、壽命短促のものもあつたが、王は既に此等の諸土を見　如來に對して何の業を以て淸淨の世界を取り　不淸淨の世界を取るか。又何の業を

以て壽命無量を得、壽命短促を得るのかを問うた。時に佛は因位の願力を以て清淨の土を取り、又五濁の惡を取るのだと告げる。是に於て王は城に歸りて閑靜の處に端坐し、專心に思惟を始めた。次に又寶海は太子不眴に勸めて無上菩提心を起さしめ、ついで第二王子已下、次第に餘の千子を勸めて悉く無上菩提心を起さしめたので、此等の諸子も亦各皆宮殿に歸り、屏處に在りて一心にその所願を思惟した。かくて七歲の後、王及び千子は倶に閻浮林に至り、王は先づ佛所に於て合掌長跪し、我れ今眞實の菩提を得んと欲す、我れ先きに三月の間佛及び比丘僧を供養したが、今彼の善根を以て阿耨菩提に廻向し、清淨の佛土を取らんことを願ふといひ、次第に四十八の大願を說き、我が願ふ所の佛土は是の如く、我が願ふ所の衆生は是の如くである。若し此願が成就せば我れは卽ち阿耨菩提を成ぜんと誓つた。時に寶藏如來は王を讚歎して善哉善哉と唱へ、大王今は所願甚深にして已に淨土を取り、その中の衆生も亦その心が淨い。これより西方百千萬億の佛土を過ぎて尊善無垢と名くる世界があり、その佛を尊音王と號するが、彼佛の世界の有らゆる功德淸淨莊嚴は悉く大王の今の所願と等しい。故に今汝の名を改めて無量淸淨と號すべしといひ、更に又彼の尊音王如來が般涅槃せられた後、無量の諸佛が次第に出現し、而して彼の世界が轉じて安樂と名けられる時、汝はその中に於て作佛を得て無量壽如來と號するであらうと告げたので、

王はそれを聞いて大歡喜の心を生じた。次に王の第一太子は佛前に進みて亦その所願を述べる。そこで如來は彼の太子の名を觀世音と改め、當來無量壽佛が般涅槃せられた後、西方安樂世界に於て成佛して遍出一切光明功德山王如來と號するであらうことを告げる。次に又第二王子の名を得大勢と改め、當來遍出光明佛般涅槃の後、亦彼の世界に成佛して善住珍寶山王如來と號すべしと告げ、次に第三王子を文殊師利と名け、南方清淨無垢寶寘世界に於て成佛して普現如來と號し、第四王子を金剛智慧光明功德と名け、東方不眴世界に於て成佛して普賢如來と號し、乃至又第八王子を普賢と名け、北方知水善淨功德世界に於て成佛して智剛吼自在相王如來と號し、第九王子を阿閦と名け、東方妙樂世界に於て成佛して阿閦如來と號し、第十五王子を香手と名け、當來阿閦如來般涅槃の後、東方妙樂世界に於て成佛して金華如來と號すべしと告げ、乃至此の如く一千の王子に各皆記別を授け、當來成佛して悉く淨土を取るべきことを告げる。次に又大臣寶海の子八十人も父の勸めに依りて各無上菩提心を起し、寶藏如來の所に於て悉く成佛の記を受けたが、然るに彼の最長子たる海地尊は清淨の佛刹を取ることを求めず、衆生の障垢を調伏せんが爲に不清淨の世界に出現せんことを願じたので、如來はそれに對して穢國成佛の記を授ける。第二巳下七十餘子も亦皆穢國成佛を願じ、各所願の如くその記を受けた。寶海の弟子三億人も亦寶海の勸

に由りて無上道心を起し、各亦穢國成佛を願じ　その中、一千人を除き、他は皆過去劫の中に出現せんことを望んだ。毘婆尸、尸棄　毘沙婆の三如來はその中の最後成佛の人である。他の一千人の中、婆由比紐一人を除き、餘の九百九十餘人は當來賢劫の中に成佛せんことを望み、各亦その記を受けた。拘留孫、伽那迦牟尼、迦葉、彌勒等はその最初成佛の人である。最後に寶海は無諍念王を始め、その千子等は皆淨妙の世界を願じて不淨の土を取らず、又我が子及び諸弟子等は不淨の世界を取らんことを願じたけれど、尙は貪瞋癡の薄い時代を選んで出世せんとし、五濁惡世の煩惱厚重の衆生を顧みないのを歎じ、因つて自ら五百の誓願を發し、人壽一百二十歲の惡世に出現して成佛せんことを願じたので、時に寶藏如來はその大悲の極めて深いことを讚じ、爲に記を授けて、當來娑婆世界に成佛して釋迦牟尼如來と號すべきことを告げられたといふのがその要旨である。

凡そ諸佛の授記本生を載する經も少くないが、此經ほど規模雄大で、且つその記事の詳密なるものはない。この說話中には彌陀を始めとし、觀音、勢至　文殊、普賢、阿閦、金華等の諸佛菩薩、幷に過去七佛、賢劫千佛等の授記本生を包含し、西曆紀元三四世紀頃迄に既に一般崇拜の對象となつた諸佛菩薩を悉く網羅したかの觀がある。さりながら此經の主題とする所は彌陀對釋迦

の關係であつて、卽ち一方彌陀を以て淨土成佛の代表となし、觀音、勢至、文殊、阿閦等の淨土志願の諸佛菩薩をその千子として之に配屬し、他方釋迦を以て穢國成佛の代表となし、之に過去七佛　賢劫千佛等の穢土出現の諸佛を隷屬せしめ、斯くてあらゆる諸佛菩薩を淨土成佛、穢土成佛の二大部類に分類し、その中、穢土成佛の志願は五濁の惡世を怖れず、煩惱厚重の衆生を悲憐するの意に出でたのであるから、最も善く諸佛大悲の本旨に契ふものであることを主張せんとしたのである。これは卽ち淨佛國土の敎義に對する反動的思潮と見るべきもので、すべての菩薩が淨土成佛を志願することは、五濁惡世の衆生を顧みない結果を招致すべきことを指摘したのである。蓋しこの說話中、彌陀の前身を以て轉輪聖王となし、寶藏如來の所に詣でゝ法を聽き、ついで無上菩提心を發し、自ら十方諸佛の世界を見てその所願を選擇し、四十八の大願を發起したとするのは、大阿彌陀經の說話と大體同一である。されど彼の師佛の寶藏如來を王の大臣たる寶海の子となし、王及びその千子等は皆寶海の勸めによりて無上道心を起したとするのは大阿彌陀經に異なる點で、卽ち此經の新案と見るべきものである。惟ふに此の構想は恐らく地主王本生から導かれたのであらう。地主王本生は增一阿含經第十三、四分律第三十一、佛本行集經第三等に記載されてゐるが、今增一阿含に依つて之を述べて見ると、過去久遠に地主と名ける王があり、闍

浮提の地を總領し、善明と名くる大臣を重用し　閻浮の半分を與へて之を統治せしめた。善明に一子あり、出家成道して燈光如來と號したが、時に善明は四十億の男女に圍繞せられて如來の所に至りて法を聽き、その衆は悉く出家して阿羅漢となつた。ついで彼の如來は四十億衆と共に地主王の國界に遊行したが、王も亦四十億の男女に圍繞せられて如來の所に詣でゝ法を聽き、その衆は亦悉く出家して阿羅漢となつた。是に於て王は七萬歲の間、四事を以て如來及び八十億衆を供養し、彼の如來般涅槃後、亦七萬歲の間その舍利を供養した。その時の地主王は卽ち釋尊の前身であつたといふのである。この說話中、地主王は悲華經の所謂無諍念王に當り、大臣善明は彼の寶海に當り、又善明の子に燈光如來があつたとするのは、寶海の子に寶藏如來があつたとするのと全く同一構想である。されば悲華經の說話は大阿彌陀經の所謂法藏本生に基き、兼ねて亦彼の地主王本生を參照して以て組立てたものと認めなければならぬ。

又此中に出せる寶藏如來の名稱は、增一阿含第三十八の說より取つたのではないかとおもふ。彼經に過去に寶岳と名くる王があり、閻浮提を統領してゐた時、寶藏と名くる如來が世に出現して三會に說法し、多くの衆生を度した。その中に一人の長老比丘あり、已に老衰して坐禪を修することが出來ぬ。仍て城中に入りて油を求め、日日如來に燈明を捧げた。寶岳王に牟尼と名ける

一女があり、比丘の油を求めるのを見て大に隨喜し、自ら施主となりて日日彼に油を施與した。寶藏如來は後遂に比丘に記別を授けて當來定光佛と號すべきことを告げ、牟尼は又定光佛の世に至つて當に成佛の記を受け、釋迦牟尼と號するであらうといふ物語をかゝげてゐる。これは釋尊授記の師佛を定光如來となし、更に定光授記の師佛を立てゝ之を寶藏如來としたのである。此の說話は六度集經第三、幷に賢愚經第三等にも亦載せてあるが、王及び如來の名稱等は同一でない。卽ち賢愚經には王の名を波塞奇、如來の名を勒那識祇卽ち寶髻、比丘の名を阿梨蜜羅卽ち聖友、王女の名は同じく之を牟尼となし、六度集經には如來の名を嚏とし、又釋尊の前身を王女となさずして梵志となし、定光をその弟子としてゐる。斯樣に王名等は異なつてゐるけれど、說話の仕組は全く同一である。されば增一阿含の所謂寶藏 Ratnagarbha は賢愚經の勒那識祇 Ratnaśikhi 卽ち寶髻の轉訛であつて、隨つて彼の如來は大毘婆沙論第七十一、第百七十八、幷に大智度論第四等に記載する寶髻佛を指したものと認めなければならぬ。蓋し此等の諸論には過去の釋迦牟尼を以て釋尊が第一阿僧祇劫の初に逢事した佛となし、寶髻を以て第二阿僧祇劫の初に、定光を以て第三阿僧祇劫の初に逢事した佛とし、而して釋尊は定光佛に就いて成佛の記を受けたとしてゐる。これは婆沙時代の傳承的說話と見るべきものであるが、それを今增一阿含等に於て寶髻卽ち

寶藏佛を以て定光に授記した師佛として來たのは、既にその說話の一轉化であり、今亦悲華經に於て彼の寶藏如來を釋迦及び彌陀等の授記の師佛としたのは、更にその說話の再轉したものといふべきである。

之を要するに阿彌陀佛の過去本生に關しては諸經中に種種の說話をかゝげ、卽ち大阿彌陀經系の諸經では定光佛已後數十佛にして世自在王如來があり、彌陀は彼の如來に就いて出家發願したとし、無量門微密持經には定光佛の前身なる長者の子月行が彌陀の前身なる無念德首の敎化を受けたといひ、悲華經には定光授記の師佛たる寶藏如來に就いて彌陀も亦成佛の記を受けたとし、又賴吒和羅所問德光經には、彌陀を國王、釋迦を太子、阿閦を護城神とし、決定總持經には彌陀を國王、阿閦を法師とし、悲華經には彌陀を國王、阿閦等をその子、釋迦を大臣とし　賢劫經には阿閦を國王、彌陀を說法者とし、法華經には彌陀を阿閦、釋迦等と共に大通智勝佛の王子となし　觀佛三昧經には彌陀は阿閦　寶相　釋迦と共に空王佛の所に於て同く出家學道したといひ、濟諸方等學經及び生經には彌陀釋迦二佛を共に比丘とし、而も釋迦を以て彌陀の誹謗者としてゐる。又大阿彌陀經、悲華經、如幻三摩地無量印法門經等には、觀世音を以て彌陀の子或は彌陀の補處としてゐるけれど、決定總持經には之を彌陀の師佛とし、又慧印三昧經には賢劫千佛を以て

彌陀の前身なる慧上王の千子とするに對し、賢劫經には之を阿閦の前身たる使衆無憂悅音王の千子となし、悲華經には又之を釋迦の前身なる寶海梵志の弟子としてゐる。彌陀及び諸佛は各自に過去無數劫の本生を有すべきであるから、その間或は師弟となり、或は主從となり、或は父子となり、或は同學等となつたこともあり得べきであり、諸經の異說は皆その一端を傳へたものと見られぬでもないが、しかし一面からいへば、此等の諸經は種種の地方に於て、同時又は異時に各異なる著作者に依りて敍述せられたものであるから、自ら此の如き多種多樣の說話が傳へられるやうになつたものと認められるのである。

第五章　大般涅槃經等の編纂に就て

第一節　大般涅槃經の編纂と其年代

大般涅槃經は主として小乘涅槃の所謂灰身滅智説に對して如來常住無有變易の旨を唱道し、又一切衆生悉有佛性の義を宣明し、以て一性皆成を主張した著名な大乘經典である。印度に於ては兎に角、支那にては如來最後の遺敎、無上醍醐の法味として尊信され、諸家爭うて之を講學し、遂に涅槃の一學派を形成するに至つたのである。蓋し長阿含遊行經、三卷大般涅槃經等の所謂小乘涅槃經に於ては、却後三月般涅槃の豫告、拘尸那城への出立、須跋陀羅の度脫、諸弟子に對する遺誡、佛陀の入滅、乃至八國分舍利等の事を記述し、その卷數も兩三卷に過ぎないのであるが、然るに法顯譯の大般泥洹經、曇無讖譯の大般涅槃經は廣汎なる組織を有し、如來身の常住不滅、一切衆生悉有佛性幷に闡提成佛の事を說くのみならず、更に菩薩等に對して直接涅槃と關係なき種種の義門を演述し、その卷帙も三四十卷の多きに上り、全く彼の小乘涅槃と面目體裁を異にし

てゐる。これは大乘勃興と共に如來の涅槃に對する考察が一變したことに原由するのであつて、これ等經典の編纂が比較的後代に在ることを想はしめるのである。

大般涅槃經はすべて四十卷あり、曇無讖が北涼玄始十年（四二一）河西王沮渠蒙遜の請に依り、姑臧に於て譯出したもので、十三品に分たれてゐる。即ち壽命品、金剛身品、名字功德品、如來性品、一切大衆所問品、現病品、聖行品、梵行品、嬰兒行品、光明遍照高貴德王菩薩品、師子吼菩薩品、迦葉菩薩品、憍陳如品がそれである。此經の梵本に關しては、出三藏記集第八所載の作者未詳の大涅槃經記に

此大涅槃經、初十卷有五品。其胡本是東方道人智猛從天竺將來、暫憩高昌。有天竺沙門曇無讖、廣學博見、道俗兼綜。遊方觀化、先在燉煌。河西王宿植洪業、素心冥契。契應王公、躬統士衆、西定燉煌、會遇其人。神解悟識、請迎詣州、安止內苑。遣使高昌取此胡本、命讖譯出。此經初分唯有五品、次六品已後、其本久在燉煌。讖因出經下際、知部黨不足、尋訪慕餘殘。有胡道人、應期送到此經。胡本都二萬五千偈、後來梵本、想亦近具足。但頃來國家慇猥、未暇更譯、遂少停滯。諸可流布者、經中大意、宗塗悉舉、無所少也。今現已有十三品、作四十卷。爲經文句、執筆者一承經師口所譯、不加華飾。其經初後所演、佛

性廣略之間耳。無相違也。

と記してゐる。これは此經十三品四十卷の中、初の五品十卷は智猛が既に印度より高昌郡に將來し、次の六品(現病品)已下三十卷は久しく燉煌に在つたものを、今曇無讖が共に姑臧に取り寄せて翻譯したとするのである。然るに出三藏記集第十四曇無讖傳には、讖は中印度の人で、初め白頭禪師に遇うて樹皮の涅槃經本を受け、ついで國王の怒りに觸れて捕へられ、仍て涅槃經前分十二卷并に菩薩戒經等を賚して龜玆に奔り、更に姑臧に來至して大集、大雲等の諸經を譯出したが、涅槃經の品數が足らない所から、自ら國に還つてその本を尋求し、偶ま母の喪に値うたので遂に留まること歲餘、後于闐に於て更に經本を得、再び姑臧に返つて之を譯し、續いて三十六卷(南本に依る)としたのだといひ、又章安灌頂の涅槃經玄義卷下には

三藏乃至二姑臧一、被三河西王沮渠蒙遜慇懃告一留請レ住、翻二譯大般涅槃梵本一。卽從二初十卷一至二大衆品一、覺レ知經少一、因屈二三藏一至二于闐國一、求レ得中分十卷一。譯至二嬰兒行品一、又覺二經少一、更遣レ使往二于闐國一、求レ得餘缺一、譯レ之乃足。名二大般涅槃經一、四十卷成レ部。

といつてゐる。この中、前分五品十卷、或は十二卷が印度より將來されたとするのは諸傳の一致する所であるから、その事實たることは明かとすべきであるけれど、後の八品三十卷が燉煌若し

くは于闐に在つたといふのは頗る疑はしきことゝせなければならぬ。

蓋し大乘涅槃經は曇無讖のみでなく、法顯及び智猛等も亦相前後して傳譯したのである。その中、東晉法顯の譯出したものは大般泥洹經と名け、六卷十八品ある。卽ち序品、大身菩薩品、長者純陀品、哀歎品、長壽品、金剛身品、受持品、四法品、四依品、分別邪正品、四諦品、四倒品、如來性品、文字品、鳥喩品、月喩品、問菩薩品、隨喜品がそれである。これは曇無讖本の前分五品十卷に相當するものであつて、卽ち第一序品より第五長壽品に至る五品は彼の曇無讖本の第一壽命品に相當し、第六金剛身品は彼の第二金剛身品に、第七受持品は彼の第三名字功德品に、第八四法品より第十七問菩薩品に至る十品は彼の第四如來性品に、第十八隨喜品は彼の第五一切大衆所問品に相當するのである。此泥洹經の原本に關しては、出三藏記集第八所載六卷泥洹記に

摩竭提國巴連弗邑阿育王塔天王精舍優婆塞伽羅、先見晉土道人釋法顯遠遊此土、爲求法故深感其人、卽爲寫此大般泥洹經如來祕藏。願令此經流布晉土、一切衆生悉成平等如來法身。義熙十三年十月一日、於謝司空石所立道場寺、出此方等大般泥洹經、至十四年正月二日校定盡訖。禪師佛大跋陀手執胡本、寶雲傳譯。于時座有二百五十人。

といひ、又同第十五智猛傳に

後至華氏城、是阿育王舊都。有大智婆羅門、名羅閲宗。擧族弘法、王所欽重。造純銀塔高三丈。沙門法顯先於其家已得六卷泥洹。

と記してゐる。之に依ると此經の梵本は摩揭陀國華氏城の大智婆羅門の家から得たものなることを知るべきである。但し泥洹記の天王精舍優婆塞伽羅と智猛傳の大智婆羅門羅閲宗と、その名稱が異なつてゐるやうであるけれど、優婆塞伽羅の優婆塞伽を Upāsaka の對音となし、羅を羅閲宗の略とすれば同一人たることが證し得られる。又此の羅閲宗は法顯傳に巴連弗城裏の石室に住してゐたといふ大乘婆羅門子羅汰私婆迷 Rajasvarma を指したことも明かであるから、即ち法顯も智猛も共に此の婆羅門の家に於て大乘涅槃の原本を得たことを知るべきであり、又曇無讖は上に述べた如く中印度に於て白頭禪師に遇ひ、樹皮の涅槃經前分十二卷を受けたといふが、彼の所謂白頭禪師なるものも、今の大智婆羅門羅汰私婆迷であつたと推定されるのである。

又劉宋智猛が別に涅槃經の梵本を將來し、之を譯して二十卷としたことは、出三藏記集第八所載の二十卷泥洹記（出智猛遊外國傳）に記する所に依つて知ることが出來る。即ち

智猛傳云、毗耶離國有大小乘學不同。帝利城次華氏邑有婆羅門、氏族甚多。其稟性敏悟、歸心大乘、博覽衆典、無不通達。家有銀塔、縱廣八尺、高三丈。四龕銀像高三尺餘。多有大

乘經一、種種供養。婆羅門問レ猛言、從レ何來。答言秦地來。又問、秦地有二大乘學一不。卽答皆大乘學。其乃驚愕雅歎云希有、將非二菩薩往化一耶。智猛卽就二其家一得二泥洹胡本一、還二於涼州一出、得二二十卷一

といつてゐるのがそれである。これは智猛も亦華氏城大智婆羅門の家に於て涅槃の梵本を得たことを傳へるのである。此の二十卷經は今傳はらないので、果してその中に幾品あつたか知ることを得ないが、しかし譯本が二十卷あつたとすれば、唯だ前分五品のみでなく、すべて七八品、乃至十品もあつたものと想定される。然るに前引大涅槃經記に、初の十卷五品は智猛天竺より將來すといひ、又章安の涅槃經玄義卷下に

昔道猛亡二身天竺一、唯齎二五品一還。謂壽命、金剛身、名字功德、如來性、大衆問等品。到二西涼州一、値二沮渠蒙遜割二據隴右一自號二玄始一、其號三季、請二曇無羅讖一、共レ猛譯二五品一得二二十卷

と記し、智猛將來の原本は唯だ五品にして、而もその本を曇無讖が譯したものとしてゐる。されど出三藏記集第十五智猛傳に依ると、猛は甲子の歲卽ち劉宋元嘉元年（四二四）曇纂と倶に天竺を發し、涼州に還つて二十卷泥洹を譯したといつてゐる。曇無讖の四十卷經が北涼玄始十年（四二一）の譯出に係るものであることは、道朗の經序等に明記する所で、卽ち智猛歸朝の三年已前に當るの

であるから、讖が智猛將來の梵本を譯すべき筈もなく、ましてそれより已前の玄始三年に此の二人がその本を共譯するが如きは有り得べきことでない。されば大涅槃經記等の記事は謬傳とせなければならぬ。

斯樣に涅槃經は東晉頃より前後三回支那に翻傳されたものであるが、その中、法顯の六卷泥洹、智猛の二十卷泥洹が共に華氏城大智婆羅門の家から得たものであることは智猛傳等に依つて明かであり、曇無讖傳の白頭禪師もおそらく同一人であらうと思はれるのであるから、涅槃經の梵本はすべて彼の大智婆羅門羅閱宗の銀塔內に藏されてゐたものとすべきである。曇無讖傳等には曇無讖本の後の八品は于闐若しくは燉煌に在つたといつてゐるけれど、その傳來が明かでなく、且つ後分經のみがそれ等の地方に傳つてゐたといふことも甚だ疑はしき所であり、これは曇無讖が再び印度に歸つた時、更に白頭禪師から得たものと想定さるべきである。法顯が彼の婆羅門の家を訪問したのは西紀四〇六年(東晉義熙二年)頃であり、又曇無讖が白頭禪師から前分五品を受けたのは、彼が二十歲(劉宋元嘉十年四十九歲寂)頃の時であるから、法顯の往訪と殆んど同時である。若し當時彼の銀塔內に四十卷本があつたとすれば、當然それを法顯等に授くべきであるのに、唯だ前分五品のみを與へたのは何の事由に基くのであらうか。此等の事情を綜合して考へて見ると、涅

槃經はかの大智婆羅門羅閲宗の編纂に係り、法顯往訪の時には唯だ最初の五品だけが出來上つてゐたので、卽ちそれを法顯に授け、ついで智猛が往訪した時、二十卷本が出來上つたので、更にそれを彼れに授けたのではないかとおもはれる。智猛往訪の年時は明かならぬけれど、彼れが入竺の途に上つたのは姚秦弘始六年(四〇四)で、歸朝の途に就いたのは劉宋元嘉元年(四二四)であり、又曇無讖が再び印度に還つたのは北涼玄始三年(四一四)已後八九年までの間であつて、いづれが先きにその經本を受けたかは定め難いが、しかし卷數の多少からいへば、曇無讖の四十卷本は智猛の後に於て之を得たもので、卽ち最後に出來上つたものとすべきである。而して又その四十卷本が尙ほ未完成であるのは、彼の白頭禪師が遂に逝去した爲であらうかと想像される。卽ち此の如く解釋することに依つて、法顯が最初に六卷本を得、智猛が次に二十卷本を得、曇無讖が前後通じて四十卷本を得た事由も明かになり、又四十卷本が未完成に終つてゐる所以も亦首肯されるのである。出三藏記集第十四曇無讖傳に、彼れは四十卷經が尙ほ未だ盡きて居らぬので、更にその後分を求めんことを誓ひ、又慧觀が道普をしてその本を訪得せしめんとしたことを傳へてゐるが、此等は共に白頭の死を知らなかつたからであらうと思はれる。蓋し此の中、前分五品は夙に法顯等に依つて支那に齎傳されたのみでなく、印度に於ても後世に至るまでその本が行はれたことは

事實である。それは唐義淨の大唐西域求法高僧傳卷上會寧の傳に

大乘涅槃、西國淨親見目云、其大數有二十五千頌一、翻譯可成二六十餘卷一。檢二其全部一覓而不獲、但得二初大衆問品一帙一、有二四千餘頌一。

と記してゐるので知ることが出來る。又西藏藏經中にも唯だ此の前分五品經のみを藏し、その終りに三千九百首盧迦ありと記してゐるが、この數は大約義淨の所傳に合するのである。これは前分五品は最初の編纂にして、當時別行轉寫せられたのに反し、後の八品等ばその後數次の編纂に係り、未だ廣く之を發表し、宣布するに至らなかつた爲ではないかと想像される。兎に角此經は西曆五世紀の初頃に編纂され、直に支那に齎されたものと推定すべきである。

次に經の內容に就いて少しく檢討して見ると、此經は釋尊の八十入滅を以て方便示現に過ぎないとし、如來身は卽ち法身にして常住不變なることを强調し、又一切衆生はすべて如來と同一性を有し、隨つて衆生は悉く皆成佛し得べきものなることを主唱したのである。卽ち大乘佛敎特有の理趣を發揮したものであつて、自ら甚深祕藏の經典として、その受持讀誦を勸奬してゐるのである。蓋し八十入滅方便示現の說は、首楞嚴三昧經、法華經、維摩經等に夙に宣說する所であり、又一切衆生悉有佛性の說も如來藏經等に既に明示する所であるから、此經の作者は卽ち此等の經

に基いてその趣旨を强調し、布衍したものと認められる。大般涅槃經第四に首楞嚴三昧經の名を擧げ、同第九に法華經の名を出し、法顯の大般泥洹經第四に如來藏經の説を援引してゐるのは、卽ち之を裏附けるものと見なければならぬ。又此の涅槃經には更に諸經の名を出し、卽ちその第四に異部の經、第六に瞿師羅經、第八に摩訶般若波羅蜜經、第十五に城經、第十八、第二十、第二十一に雜華經、第二十九、第三十一に法句經を引き、又殆んど各卷に通じて經中說、餘經中說、或は佛昔說等と標して偈頌等を援引し、その他、經論名を擧げざるも、維摩經、成實論、幷に阿毘曇諸論に依つたと思はれるものが甚だ多い。斯樣な事は他の經典に多くその類例を見ない所で、卽ち此經の編纂が全く特異のものなることを知るのである。

就中、如來常住の說は主として壽命品、金剛身品、如來性品等に反覆說示してゐる。卽ち卷第二壽命品に

如來是常住法、不變易法。如來此身是變化身非₂雜食身₁。爲ㇾ度₂衆生₁示₂同毒樹₁。是故現ㇾ捨入₂於涅槃₁

といひ、又卷第三金剛身品に

如來身者是常住身、不可壞身、金剛之身非₂雜食身₁。卽是法身。………如來之身無量億劫堅牢

難壞。非人天身、非恐怖身、非雜食身。如來之身非身是身、不生不滅不習不修、無量無邊無有足跡。云云

といつてゐる如きそれである。蓋し此の如き說は既に首楞嚴三昧經等にも說く所であつて、即ち彼經卷上に

是諸如來本自不生、是故爲實。是諸如來今亦無滅、是故爲實。是諸如來非四大攝、是故爲實。諸陰入界皆所不攝、是故爲實。

といひ、又同卷下に

示現入胎、初生出家、詣菩提樹坐於道場、轉妙法輪、入般涅槃、分布舍利。而亦不捨菩薩之法、於般涅槃不畢竟滅。

といひ、又法華經第五如來壽量品の偈に

爲度衆生故、方便現涅槃、而實不滅度、常住此說法。

といひ、維摩詰所說經卷上弟子品に

如來身者金剛之體。……諸如來身即是法身、非思欲身。佛爲世尊過於三界、佛身無漏、諸漏已盡。佛身無爲、不墮諸數。如此之身當有何疾。

と說いてゐる如き、皆亦今の主張の所依となつたものと認められる。特に此經第十一現病品に

常作是願、願令衆生永斷諸病、得成如來金剛之身。……諸佛世尊亦復如是、猶如虛空。云何當有諸病苦耶。

といつてゐるのは、正しく彼の維摩經弟子品の說を承けたのであらう。斯くて小乘涅槃の永滅說に對して如來法身の常住不滅を强調し、以て人をして大宇宙に於ける永遠の生命を會得せしめんとしたのである。次に一切衆生悉有佛性の說は如來性品を始め、諸品に散說する所で、卽ち此經第七如來性品に

一切衆生悉有佛性。煩惱覆故不知不見。

といひ、又第二十七師子吼菩薩品に

有者凡有三種、一未來有、二現在有、三過去有。一切衆生未來之世、當有阿耨多羅三藐三菩提、是名佛性。一切衆生現在悉有煩惱諸結、是故現在無有三十二相八十種好。一切衆生過去之世有斷煩惱、是故現在得見佛性。以是義故我常宣說、一切衆生悉有佛性。乃至一闡提等亦有佛性。一闡提等無有善法、佛性亦善以未來有故、一闡提等悉有佛性。何以故、一闡提等定當得成阿耨多羅三藐三菩提故。

と說いてゐる如きがそれである。この說は疑ひもなく如來藏の教旨に依つたのであつて、その事は六卷泥洹經に如來藏經を援引し、又此經第七に

> 善男子、我者卽是如來藏義。一切衆生悉有佛性、卽是我義。如是我義、從本已來常爲無量煩惱所覆。是故衆生不能得見。善男子、如貧女人舍內多有眞金之藏。云云

といひ、彼經の說を覆述してゐるので知ることが出來る。蓋し初期大乘の經典たる般若等に於て菩薩の成佛を主張したのは、菩薩には成佛の可能性があるとするからであつて、それは卽ち佛性の說を認めたものといはなければならぬ。法華經に於て聲聞成佛の可能が更に唱道されたのは佛性論の一大轉進であり、今涅槃經に至つて更に又一闡提の人までも悉く佛性があるとしたのは、衆生の一如平等に目醒めたものであつて、卽ち佛性論が當然到達すべき點にまで到達したものに外ならぬのである。されば悉有佛性の說は大乘佛教の根本思想を發揮したものと見るべきであるが、然るに今佛性を以て我の義となし、その常住を主唱したのは頗る數論等の外道に濫ずる嫌ひがある。前引第七卷に我者卽是如來藏義といひ、又その前文に

> 世間之人亦說有我、佛法之中亦說有我。世間之人雖說有我、無有佛性。是則名爲於無我中而生我想。是名顚倒。佛法有我、卽是佛性。世間之人說、佛法無我。是名我中生無我

想一。若言下佛法必定無レ我、是故如來敎二諸弟子一修二習無我上、名爲二顚倒一。

といつてゐる如き皆卽ちそれである。四卷楞伽經第二には恰も此說を會通するが如く、

佛告二大慧一、我說二如來藏一不レ同二外道所說之我一

と言つてゐるが、如何なる點が不同であるのか明かでない。出三藏記集第五所載の小乘迷學竺法度造異儀記に、彭城の僧淵は如來眞我の義に就いて此經を誹議したことを記述してゐる。されどその詳細なことは今傳つて居らぬ。蓋し有我無我の義は早い時代から小乘諸部の間に論諍されたもので、此經の迦葉菩薩品にも亦その論議が揭げてある。中論第二、大智度論第一、幷に異部宗輪論等に依ると、犢子部に於ては非卽非離蘊の我があることを說くといひ、成實論第三有我無我品にも犢子部に於て五法藏を立て、我を第五の不可說法藏に攝したといつてゐる。この說は諸論の所破となつたものであるけれど、大般若經第四百九十幷に十住毘婆沙論第十等に、此の五法藏を以て三乘聖衆の所知の法としてゐるのを見ると、夙に大乘中に取り入れられたことを知るべきである。のみならず如來藏の敎義は心性本淨說から起つたのであり、而してその本淨說は亦犢子部の所傳といはれる舍利弗阿毘曇論に記述する所であるから、そこに如來藏と我とが結び付くべきゆかりがある。如來藏を卽ち我とする時、我は一切衆生及び闡提の人も共有する所であるから、

悉有佛性の義が完全に成立つて來るわけである。今此經に於て佛性を我の義となし、而して一性皆成を主唱してゐるのは、卽ち此の經緯に基くものと認めなければならぬ。

又此經には、各品に亙つて如來常住及び悉有佛性の旨を鼓吹し、之を以て祕密甚深の奧藏となし、隨處に此經が最極無上の經典たることを宣揚してゐる。就中、卷第十四聖行品には有名なる五味相生の譬喩を出し、此經を以て無上醍醐味に比說してゐる。卽ち彼の文に

譬如下從レ牛出レ乳、從レ乳出レ酪、從レ酪出二生蘇一、從二生酥一出二熟酥一、從二熟酥一出中醍醐上。醍醐最上。若有二服者一衆病皆除、所有諸藥悉入二其中一。善男子、佛亦如レ是。從レ佛出二十二部經一、從二十二部經一出二修多羅一、從二修多羅一出二方等經一、從二方等經一出二般若波羅蜜一、從二般若波羅蜜一出二大涅槃一。猶如二醍醐一。言二醍醐一者喩二於佛性一。佛性者卽是如來。

と言つてゐるのがそれである。これは佛が契經等の十二部經を說かれたのを、牛より乳を出すに喩へ、十二部經中に於ては修多羅卽ち契經が最も精なるものであるのを、乳より酪を出すに喩へ、修多羅中には大小乘の別があるも、方等大乘經はその中の精なるものであるのを、酪より生蘇を出すに喩へ、方等大乘經中に亦多種の異あるも、般若波羅蜜經はその中の精なるものであるのを、生蘇より熟酥を出すに喩へ、般若にも淺深共不共があり、その中の甚深般若卽ち大涅槃經は最も

精、最も醇なるもので、之に過ぐるものがないのを、熟酥より醍醐を出すに喩へたのである。此經の作者が般若經を參酌したことは、卷第八如來性品に摩訶般若波羅蜜經を引用してゐるので明かであり、又法身般若解脱を如來の三德祕藏としたことは、卷第二壽命品に

解脱之法亦非涅槃、如來之身亦非涅槃、摩訶般若亦非涅槃、三法各異亦非涅槃。我今安住如是三法、爲衆生故名入涅槃。如世伊字。

と言つてゐるので知ることが出來る。又般若に共不共の別があることは大智度論第一百等に記する所であるが、此經には下に述ぶる如く彼の智論を參照したと認むべき個所が少くないのであるから、今般若より大涅槃を出すといふのは、此の大涅槃經を以て彼の不共般若の精粹を發揮したものとなすの意と思はれるのである。道場寺慧觀を始め、天台智顗等はこの五味相生の文を以て佛一代說敎の次第を示唆したものとなし、十二部經を華嚴、修多羅を阿含等に配してゐるけれど、そは固より牽强附會の說にして信用するに足らぬ。

又此經第十一聖行品には、菩薩は此の大涅槃經に於て專心に五種の行を思惟すべしといひ、聖行、梵行　天行、嬰兒行、病行の名を列ね、その中、戒定慧三學を以て聖行となし、七善知及び四無量心を以て梵行となし、嬰兒の起住來去し語言すること能はざるが如く、如來にも起住來去

語言なきを嬰兒行と名くとし、廣く前後十卷に亙つてその行相を記述してゐる。但し天行病行は之を說かず、特に天行に關しては第二十梵行品の終りに

天行品者如雜花說

といひ、全然その解說を雜花經に讓つてゐる。のみならず卷第十八梵行品の下に、修習布施爲涅槃因。廣說如雜花中といひ、又第二十一高貴德王菩薩品には

菩薩摩訶薩、修大涅槃行於布施亦復如是。善男子　大涅槃中如是之事、從無量劫來不聞而聞。尸羅尸羅波羅蜜、乃至般若般若波羅蜜。如佛雜華經中廣說。

と記してゐる。之に依ると此經は亦雜華經を參照したことを知るべきである。雜華とは梵語gaṇḍa-vyūhaの譯で、古くは華嚴經入法界品を指し、大智度論第一百等に不思議解脫經と呼んでゐるものが卽ちそれであるが、然るに彼の經中には今の天行等に相當する說が見當らぬやうである。唐行滿の涅槃經疏私記第三本には、華嚴大經の十住品を指すのだといつてゐるけれど、彼品にも天行と見るべき說がない。彌勒菩薩所問經論第七に依ると、

復有餘修多羅中說、有三種行、梵行天行聖行。梵行者謂四無量、天行者所謂四禪、聖行者謂

三十七菩提分法

といひ、五行中の前三行を有餘經中の所說となし、又大乘義章第十二の五行義には、

此前三行猶二地持中三住所攝一。初聖行者是彼聖住、第二梵行是彼梵住、第三天行是彼天住

といひ、菩薩地持經にも此の三行が擧げてあることを指摘してゐる。之に依ると聖行等の三行は旣に他經中にも說示されたものなることを知るのである。華嚴大經の中に梵行品があり、成實論に聖行品があり、又維摩經に如來法身無病の說が揭げてあるから、これ等の諸說を綜合して今の五行說を唱道したのではないかと想像されるのである。

又此經中には經名を出さゞるも、維摩經に依つたとおもはれるものが少くない。就中、卷第六如來性品にかゝぐる四依の說の如きはその較著なものである。彼の文に

如二佛所說一、是諸比丘當レ依二四法一。何等爲レ四、依レ法不レ依レ人、依レ義不レ依レ語、依レ智不レ依レ識、依二了義經一不レ依二不了義經一。……依レ法者卽是如來大般涅槃。一切佛法卽是法性、是法性者卽是如來、是故如來常住不變。若復有レ言二如來無常一、是人不レ知不レ見二法性一。若不レ知二見是法性一者不レ應二依止一。……又聲聞乘名二不了義一、無上大乘乃名二了義一。若言二如來無常變易一名二不了義一、若言二如來常住不變一是名二了義一。云云

とあるのが卽ちそれである。四依の說は元と維摩經卷下法供養品に出す所で、彼經には唯だ四句

を分別するに過ぎぬのであるが、今此經に於てそれを如來常住の說に約して詳細なる解釋を加へたのは、その主張の貫徹を圖らんことを期した爲である。又此經第九に衆生雜類言音各異、皆謂如來悉同己語といひ、同第十に

佛以一音而爲說法、彼彼異類各自得解。各各歎言、如來今日爲我說法

といつてゐるのは、疑ひもなく維摩經佛國品の偈に取つたのである。その他、如來身無病、如來身無爲說の如きも皆維摩の說に依つたものといふべく、又金剛身品に阿閦佛國の往生を說き、且つその生因を擧げてゐるのも、亦維摩經見阿閦佛品等の意を承けたものと認められる。

又此經の迦葉菩薩品には如來入涅槃不入涅槃已下、總じて二十一種の論諍を出し、之に對して一一解釋會通を企てゝゐるが、これは當時大小二乘幷に小乘諸部の間に行はれた主なる諍議を列擧したものに外ならぬのである。卽ち彼の第三十三卷に

迦葉菩薩白佛言、世尊、如來具足是知根力。是故能知一切衆生上中下根利鈍差別、知現在世衆生諸根、亦知未來衆生諸根。如是衆生於佛滅後作如是說、如來畢竟入於涅槃、或不畢竟入於涅槃。是一或說有我或說無我。是二或有中陰或無中陰。是三或說有退或說無退。是四或言如來身是有爲、或言如來身是無爲。是五或有說言十二因緣是有爲法、或說因緣是無爲法。

是六 或說心是有常、或說心是無常。是七 或有說言受五欲樂能障聖道、或說不遮。是八 或說世第一法唯是欲界、或說三界。是九 或說布施唯是意業、或有說言即是五陰。是十 或有說言有三無爲、或有說言無三無爲。是十一 復有說言或有造色、復有說言或無造色。是十二 或有說言有無作色、或有說言無無作色。是十三 或有說言有心數法、或有說言無心數法。是十四 或有說言有五種有、或有說言有六種有。是十五 或有說言八戒齋法、優婆塞戒具足受得、或有說言不具受得。是十六 或說比丘犯四重已比丘戒在、或說不在。是十七 或有說言須陀洹人斯陀含人阿那含人阿羅漢人皆得佛道、或言不得。是十八 或說佛性卽衆生有、或說佛性離衆生有。是十九 或有說言犯四重禁作五逆罪一闡提等皆有佛性、或說言無。是二十 或有說言有十方佛、或有說言無十方佛。是二十一 如其如來具足成就知根力者、何故今日不決定說

と記してゐるのがそれである。この中、第二の有我無我、第三の有中陰無中陰、第四の阿羅漢有退無退論は現に成實論十論品に掲ぐる所であり、又心常無常、布施意業三業、色四大造非四大造、無作色非色、有心數無心數、五八具得不具得等の諸問題も亦同論に於て詳細に論議されてゐるのである。されば此の二十一種の論諍は元と成實論の記事からヒントを得たのではないかと疑はれるのである。今略して此等の論諍を檢討して見ると、第一の如來入涅槃不入涅槃は大小二乘の間

に起つた論諍であつて、自ら本經の中心問題として取扱はれたものである。第二の有我無我論は、犢子部に於て有我論を主張するに對し、餘部及び成實論等に於て之を否認するのをいふのである。成實論十論品に犢子道人說ℷ有ℷ我、餘者說ℷ無といつてゐるのがそれである。第三の有中陰無中陰論は、說一切有部に於て欲色界の受生に中陰ありと說くに對し大衆部及び成實論等に於て之を否認するのをいふのである。成實論第三、大毘婆沙論第六十九、異部宗輪論等に記述する所に依つて知るべきである。第四の阿羅漢有退無退論は、說一切有部に於て阿羅漢に退ありと說くに對し、大衆部及び成實論等に於て退なしと主唱するのをいふのである。この事は成實論第三、大毘婆沙論第六十一、異部宗輪論等に記載するのである。第五の佛身有爲無爲論は、說一切有部に於て佛身は有漏有爲にして、寒熱老病等の諸苦ありとするに對し、分別論者及び大衆部に於て佛身を無漏無爲とし、佛は世法の爲に動せられるものでないと說くのをいふので、この事は大毘婆沙論第百七十三、異部宗輪論等に旣に論述する所である。第六の十二因緣有爲無爲論は、亦異部宗輪論等に傳ふる如く、說一切有部に於て緣起支性を有爲とするのに對し、大衆部及び化地部に於て緣起の理を性相常住となし、之を九無爲の一に數へるのをいふのである。第七心常無常論は心の斷常に關する論議を指すのであるが、章安の涅槃經會疏第三十一には

薩婆多云心無相續、即是無常。僧祇云心有相續、即是常義。成論用薩婆提義

といひ、之を亦有部と大衆部との論諍としてゐるけれど、その意は明かでない。これは成實論第五識暫住品に、有人が心は少時住す、若し心念念に滅せば去來等の業は皆用なかるべし、少時住するを以ての故に能く用あらしむと說くのに對し、次の識無住品に心念念滅を主張し、心暫住說を破責してゐるのを指したものとおもはれる。第八の五欲障道不障道論は、香華金銀等の八不淨物を受くることが正道の障となるや否やに關する論諍であつて、即ち毘舍離の跋闍子比丘等が金銀等を受け、又閣樓羅酒を飲むも非法に非ずと主張したのに對し、上座の諸比丘は之を非法として擯斥したのを指すのである。四分律第五十四の七百集法毘尼に

沙門釋子不應受取金銀。除捨珠寶、不著飾好。其有受取金銀者則受五欲。若受五欲則非沙門釋子法

と記してゐるのがそれである。然るに章安の涅槃經會疏第三十一に

薩婆多云障道、僧祇云不障、成論有障不障。皆有其義

といひ、之を煩惱即菩提の義の如くに解釋したのは甚だ未了とせなければならぬ。第九世第一法界繫論は、世第一法の界繫に關し小乘諸部間に行はれた異論を擧げたのである。即ち大毘婆沙論

第三に、大衆部に於ては世第一法を以て欲色界繫に通ずとなし、犢子部に於ては色無色界繫に通じ、化地部は三界繫に通じ、法密部は三界及び非繫に通じ、說一切有部は唯だ色界繫に限るとなすといつてゐるのに基き、今略してその中の三界別の說のみを出したのである。第十の布施論は布施は唯だ意を以て體とするか、三業を體とするかの論諍であつて、これは成實論第九の三業輕重品に

問曰、有人言、身口業重非意業也。所以者何、……若無身口、但意業者則無果報。如人發心我當布施而實不與則無施福。又非但隨願專得成辦、如人發願爲大施會而實不與則無會福。……答曰、汝言身口業重非意業者、是事不然。所以者何。經中佛說、心爲法本。心尊心導、心念善惡即言即行。故知意業爲重。又意差別故、身口業有差別。如上中下等。離心無身口業。

といつてゐるのを指したものと認められる。第十一の三無爲有無論は、說一切有部に於て虛空等の三無爲を立て、之を實有とするに對し、經量部等に於て假有とするのを指すのであらう。第十二有造色無造色論は、說一切有部等に於て色は皆地等の四大種所造とするに對し、成實論に於て眼等の諸根は四大に異ならずとし、四大の外に別に所造の諸根なしと說くのをいふのである。即

ち今の經文に有二四大一則有二造色一、或有二四大一無レ有二造色一と說いてゐるのは、前者は有部の義に當り、後者は成實論第四根假名品に

從二業因緣一四大成二眼等根一、是故不レ異二四大一。又佛分二別眼一作二如レ是言一、眼肉形中所有堅、依レ堅名爲二地種一。故知二諸根卽是四大一。所以者何、但分二別堅等一更無レ有レ眼。佛欲レ令三人知二眼空一故作二如レ是說一

といふのに相當するからである。第十三無作色有無論は、有部等に於て實の無作色(卽ち無表色)ありとするに對し、經量部等に於てはその實有を認めず、之を思の心所の上に假立するのをいふのである。第十四有心數無心數論は、有部等に於て多數の心數法(卽ち心所)を立て、之を實有とするに對し、成實論師等が心の外に別の心數なしと主張するのをいふのである。この事は成實論第五立無數品、立有數品等に詳論する所である。第十五の五種有六種有論は卽ち五道六道論にして、大智度論第十に佛亦分明に五道と說かず、五道と說くは說一切有部僧の所說なり。婆蹉弗妬路部の僧は六道ありと說くといつてゐる。これに依ると五道六道に關し夙に諸部の間に異說があつたことを知るべきである。第十六の八戒五戒具受得不具受得論は、有部に於て五戒及び八戒は必ず具受することに依つて律儀を得すとなすに對し、優婆塞戒經第三、大智度論第十三等に分受

を認めるのをいふのである。成實論第八の五戒品幷に八戒齋品等にも此事を論じ、論主は自ら分受說に贊してゐる。第十七犯重失戒不失戒論は、殺等の四重罪を犯ずれば戒を失すとなすに對し、不失を主唱するのをいふのである。涅槃經會疏第三十一に四卷毗曇有犯重捨即是失故といつてゐるが、これは法勝の阿毘曇心論第一に、捨戒に罷道と犯戒と死時と邪見增と法沒盡の五時ありといひ、犯戒の時即ち捨戒すと說いてゐるのを今の失戒となし、法救の雜阿毘曇心論第三に捨戒と命終と斷善根と二根生との四時に於て捨戒すとなし、犯戒捨を認めないのを今の不失戒に配したのである。然るに經に失戒を說き、四重を犯ずれば比丘と名けず、多羅樹の頭若し斷壞すれば果を生ぜざる如しといひ、又不失戒を說き、四種沙門中の汙道沙門は四重を犯ずるも、尙ほ沙門と名けられることを引例してゐるのを見ると、阿毘曇心論等に言ふが如き捨戒不捨戒の問題でなく、犯重者を比丘若しくは沙門と名くべきや否やの異論たることを知るべきである。即ち大毘婆沙論第六十六に

准陀經中亦作是說、沙門有四、無有第五。四沙門者、一勝道沙門、二示道沙門、三命道沙門、四汙道沙門。……汙道沙門者、謂莫喝落迦苾芻憙盜他財物等是。……汙道沙門亦得成就有漏正見、故彼亦是初沙門攝。

といつてゐるのが正しく今の所論となつたのであつて、經の不失戒の文に、我於㆓經中㆒爲㆓純陀㆒說㆔四種比丘㆒云云と記してゐるのが此四沙門の說に全く一致するのを見るべきである。第十八聲聞成佛不成佛論は、小乘諸部と大乘法華等との間に於ける論諍であつて、そは學者の周知する所である。第十九佛性卽有離有論は、佛性は衆生の身を離れてあり、或は衆生に卽してあると說くのをいふので、恰も我に離蘊卽蘊の別があるとするのと同論である。離有論の下に

我又說言、衆生佛性猶如㆓虛空㆒。虛空者非㆓過去㆒非㆓未來㆒非㆓現在㆒、非㆑內非㆑外、非㆓是色聲香味觸攝㆒。佛性亦爾。我諸弟子聞㆓是說㆒已不㆑解㆓我意㆒、唱言、佛說㆘衆生佛性離㆓衆生㆒有㆖

といつてゐるのは分別部の說を擧げたものといふべく、そは此說が世親の佛性論第一破小乘執品に、分別部に於ては一切凡聖の衆生は並に空を以てその本となす、故に空は是れ佛性、佛性は卽ち大涅槃なりと說くといつてゐるのに合致するからである。第二十の一闡提有佛性無佛性論は、前の佛性卽離論に關聯した論諍であつて、卽ち闡提有佛性は離有論者の主張に係り、無佛性は卽有論者の主張に係るやうである。離有論の下に

我又復說、犯㆓四重禁㆒一闡提人謗㆓方等經㆒、作㆓五逆罪㆒皆有㆓佛性㆒。如㆑是衆生都無㆓善法㆒、佛性是善。我諸弟子聞㆓是說㆒已不㆑解㆓我意㆒、唱言、佛說㆘衆生佛性離㆓衆生㆒有㆖。

と言つてゐるが、これは一闡提は斷善根の人であるから、その身中に善の性たる佛性があるべきでない。然るにそれが實に有るのは、佛性は衆生を離れた存在であるからだとするので、即ち闡提有佛性説の理由を擧げたものと見るべく、又闡提無佛性説は、斷善根の人は現にその身に善性がないから、隨つて佛性がないとするのであつて、即有論から來たものと認められるからである。第二十一の十方佛有無論は大小二乘の間に於ける論諍であつて、その事は大智度論第四、同第九等に論説してゐるのである。之に依ると、この二十一種の論諍は小乘諸部幷に大小二乘の間に行はれた主なる諍議を列擧したものなることを知るべく、同時に此の中に大毘婆沙を始め、成實論、大智度論等に依つたと思はれる個所が少くないのは、此經の編纂が頗る後代に在ることを證するものとせなければならぬ。華氏城大智婆羅門羅閦宗の事蹟は明かでないが、若し此經がその手に成つたとすれば、彼れは獨り大乘學に徹底したのみならず、亦小乘阿毘曇諸論にも精通し、彌勒等に比肩すべき大論師であつたとすべきである。

第二節　大般涅槃經後分

大般涅槃經後分は上下二卷の經で、大般涅槃經荼毘分、或は闍維分とも題し、憍陳如品之餘、遺敎品、應盡還源品、機感荼毘品、聖軀廓潤品の五品に分たれてゐる。これは曇無讖譯の大般涅槃經憍陳如品の後に續くものとせられるのであつて、後分の名もそれに依つて起つたのである。

此經の翻譯に關しては、武周刊定衆經目錄第二に

大般涅槃經荼毘分二卷。一名闍維分。右唐麟德年中、南天竺僧若那跋陀共唐國僧會寧、於日南波陵國譯。儀鳳年初、交州都督梁難敵附經入京。三年大慈恩寺僧靈會、於東宮三司受啓所陳、聞請乞施行。三司牒報、遂利益行用。長安西太原寺僧慧立作序、至天策萬歲元年十月二十四日奉勅編行。

といひ、開元釋敎錄第九、貞元釋敎目錄第十二等にも亦同樣の記事をかゝげ、又義淨の大唐西域求法高僧傳卷上會寧の傳に譯者會寧の事蹟を敍し、

會寧律師益州成都人也、禀志操行、意存弘益。少而聰慧、投跡法場、敬勝理若髻珠、棄榮華如脫屣。薄善經論、尤精律典、志存演法、結念西方。爰以麟德年中仗錫南海、汎舶至訶陵洲、停住三載、遂共訶陵國多聞僧若那跋陀羅、於阿笈摩經內譯出如來涅槃焚身之事。斯與大乘涅槃頗不相涉。（中略）會寧既譯得阿笈摩本、遂令小僧運期奉表齎經還至交府、馳

驛京兆奏上闕庭。冀使未聞流布東夏。運期從京還達交阯、告諸道俗蒙贈小絹數百疋、重詣訶陵報德、智賢（若那跋陀羅也）與會寧相見、於是會寧方適西國。比於所任毎察風聞、尋聽五天、絕無蹤緖。准斯理也、卽其人已亡。……春秋可三十四五矣。

と記してゐる。之に依ると此經は唐麟德年中（六六四―六六五）成都の沙門會寧が波陵國（卽ち爪哇島）に於て、南天竺僧若那跋陀羅と共に之を譯出し、小僧運期をして經を齎して交州に至らしめ、ついで交州都督梁難敵は儀鳳の初め使を遣はして之を長安に送り、同三年（六七八）大慈恩寺僧靈會は東宮三司に啓請して施行し、後天策萬歲元年（六九五）勅を奉じて之を入藏したことを知るのである。

蓋し曇無讖譯の四十卷經が尙ほ未だ盡きて居らぬことは、經の本文を見ても明かな所であり、曇無讖が之を嘆じて更にその經本を求めんことを誓ひ、又慧觀が道普をしてそれを訪得せしめんとしたことも有名な事實である。卽ち出三藏記集第十四曇無讖傳に

初讖譯出涅槃、卷數已定。而外國沙門曇無發云、此經品未盡。讖常慨然誓必重尋。蒙遜因其行志、乃僞資發遣厚贈寶貨。未發數日、乃流涕告衆曰、讖業對將至。衆聖不能救矣。以本有心誓義不容停。行四十里、遜密遣刺客害之。時年四十九。衆咸慟惜焉。後道場寺慧觀志欲重求後品、以高昌沙門道普常遊外國善能胡書解六國語、宋元嘉中啓文帝資遣道

普一、將二書吏十人一西行尋レ經。至二長廣郡一舶破傷レ足、因レ疾遂卒。普臨レ終歎曰、涅槃後分與二宋地一無レ緣矣

と記してゐるのがそれである。後涅槃經の後分には燒身、起塔、囑累の三品があるといふの說が傳へられたもの〻如く、章安灌頂の大般涅槃經疏第三十三に

居士請僧經云、涅槃後分更有二燒身品、起塔品、囑累品一。此文三品不レ來。

といつてゐる。又淨影慧遠の大般涅槃經義記第一にも經の本文を大別して五分となし、その第五分を如來滅度闍維供養分と名け、而してこの後の一分は外國より來らずと記してゐるが、これ亦居士請僧經の說を承けたのであらう。蓋し居士請僧經は具さに居士請僧福田經といひ、出三藏記集第五には之を疑經僞撰雜錄中に編し、その下に

此經前題云二曇無讖出一。案二識所一レ出無二此經一、故入二疑錄一。

と註してゐる。されば此經は梁代已前既に世に行はれてゐたことを知るべく、隨つて涅槃後分三品の說は早い時代から傳へられたことを見るのである。荊溪湛然の止觀輔行第六之三に

如二涅槃後分一本在二僞目一。至二大唐一刊定始入二正經一

といひ、元と涅槃後分經があり、それが僞經に編せられてゐたのを、武周刊定衆經目錄に至つて

始めて正經に編入したやうに書いてゐるけれど、これは居士請僧經を錯つて涅槃後分となし、且つ彼經と今の會寧譯の後分涅槃とを混同したのであつて、全然謬解とせなければならぬ。

蓋し居士請僧經の所謂後分と今の後分涅槃經とは、その內容に於て全く異なつたものと見るべきである。何となれば請僧經の後分には燒身、起塔、囑累の三品があるとするのに反し、今の後分經には憍陳如品之餘、乃至聖軀廓潤の四品半を有し、啻に品數が異なるのみでなく、品名から見てもその內容の同一でないことが察せられるからである。之に關し宋智圓の涅槃經疏三德指歸第二十に會合を試み、

據彼經(居士請僧經)所談知此猶闕三品。然今後分乃有四品。遺敎、還源二品則當囑累、茶毘、廓潤二品則當燒身。起塔之文尙未至此。抑又今後分四品、與此所指三品數既不等、前却亦殊。將非譯人隨情安置故有不同。或恐、天竺梵文由來自異。例如仲尼之敎出自此方尙有齊論魯論開章各別。況彼佛滅時賒、結集兩異。傳來梵文豈得皆同。凡諸經翻譯前後不同者皆如此例也。

と言つてゐる。これは今の遺敎、還源の二品を彼の囑累に、茶毘、廓潤の二品を彼の燒身に配し、而して起塔の一品は尙未だ此土に至らずとするのであるが、此の中、茶毘　廓潤の二品を燒身に

配當するのは先づ不可なしとするも、遺敎、還源の二品を囑累に合することは妥當でなく、且つ品の順序も一致しない。又起塔の文は此に至らずといふも、廓潤品に八の金壜を造り、各佛舍利一斛を容れ、寶塔を起して供養すといひ、又八國王が各兵を率ゐて來集したと記してゐるのは卽ち起塔の事實を傳へるのであるから、起塔の文がないとすべきでない。されば智圓の會釋は强辯に過ぎざるものといふべく、要するに居士請僧經所傳の涅槃後分と今の後分經とは決して同一經でないとせなければならぬ。

經の內容は佛入滅の相及び荼毘等の事を記述したものであつて、卽ち憍陳如品之餘には須跋陀羅の得果及びその入滅を敍し、遺敎品には阿難等に大涅槃法の護持を命じ、更に阿難の諸問に對して、六群比丘　惡性車匿等は十二因緣の正觀を以て敎示すべく、又尸波羅蜜戒を滅後の大師となし、四念處に依つて嚴心に住すべきことを說き、且つ法藏結集の時、一切經の初に如是我聞等の語を置くべく、又滅後に於ける佛の造像及び舍利供養の功德、荼毘の方法、舍利の分配、造塔の種別等を示し、應盡還源品には、佛次第に四禪に入りて般涅槃せらるゝに大地震動し、阿難等は昏迷悶絕せしことを記し、機感荼毘品には、拘尸城の人民が法に從つて佛の遺身を金棺に納め、城を遶ること七帀して荼毘所に至り、ついで佛の胸中より火を發して焚身七日に及びしことを敍

し、聖軀廓潤品には舍利を八個の金壜に收めて城中に安じ、大呪術師等之を譲り、迦毘羅國王等兵を率ゐて來つて舍利を請ふも、之を分與せずして去らしめたことを記述してゐるのである。蓋し此等の記事は長阿含遊行經、三卷大般涅槃經、幷に大智度論第二等に出す所と殆んど同一であるが、たゞ遊行經等には迦毘羅等の八國王が各舍利を得、還つて塔を起して供養したと記してゐるのに、今の經に舍利の分配に預らなかつたとしてゐる點が即ち異なるのである。

惟ふに本經は大般涅槃經後分と題し、その初めに憍陳如品之餘を設け、曇無讖譯涅槃經の後に接續するものなることを明かにしてゐるのにかゝはらず、その說相は義淨の言ふが如く與₂大乘涅槃₁頗不₂相涉₁であつて、即ち殆んど小乘涅槃の覆述に過ぎぬ。但し遺敎品に此大涅槃乃是十方三世一切諸佛金剛寶藏、常樂我淨周圓無₂缺といひ、又三解脫門十八大空、一切諸佛壽命、一切淨佛國土、一切成就衆生、一切難行苦行、一切攝善法戒、一切攝衆生戒、一切攝律儀戒等と說いてゐるのは大乘の敎義と涉入する所であり、特に三聚淨戒の名を擧げて來たのは、菩薩地持經の說を承けたと認められる所ではあるが、しかし大體の記述が所謂小乘阿笈摩に基いたものであることは極めて明白である。又遺敎品に起塔に四種の別があることを說き、

佛告₂阿難₁、佛般涅槃荼毗旣訖、一切四衆收₂取舍利₁置₂七寶瓶₁、當於₂拘尸那伽城內四衢道中₁起₂

七寶塔。高十三層、上有相輪。……阿難、其辟支佛塔應十一層、亦以衆寶而嚴飾之。阿難、其阿羅漢塔成以四層、亦以衆寶而嚴飾之。阿難　其轉輪王塔亦七寶成　無復層級。何以故、未脱三界諸有苦故。

といつてゐるのは、即ち長阿含第三遊行經、大般涅槃經卷中等の說に依つたのであるけれど、此等の經には十三層等の事を說いて居らぬ。然るに義淨譯の根本說一切有部毘奈耶雜事第十八に造塔の法を明かし、

佛言、應可用甎兩重作基、次安塔身、上安覆鉢、隨意高下。上置平頭、高一二尺、方二三尺。準量大小中竪輪竿、次著相輪。其相輪重數、或一二三四乃至十三。次安寶瓶。長者自念　唯舍利子得作如此窣覩波耶、爲餘亦得。卽往白佛。佛告長者、若爲如來造窣覩波者、應可如前具足而作。若爲獨覺勿安寶瓶。若阿羅漢相輪四重、不還至三、一來應二　預流應一。凡夫善人但可平頭、無有輪蓋。

と記してゐるが、此の中、相輪乃至十三といふのは今の佛塔十三層、阿羅漢相輪四重といふのは今の阿羅漢塔四層、凡夫輪蓋なしといふのは今の轉輪王無層級の說に當るやうである。北魏楊衒之の洛陽伽藍記第五に、迦膩色迦王の所造にかゝる乾陀羅國雀離浮圖は十三級あつたと傳へてゐ

るから、佛塔十三層等の說は古くから印度に行はれたものといふべく、今の遺敎品の記事は多分それ等の說を承けたのであらう。

之を要するに、此經が大般涅槃經後分と名けられ、且つその初めに憍陳如品之餘を置いてゐるのは、卽ち曇無讖譯の四十卷涅槃經に接續するの意を顯はしたものである。然るに此經の敍述は曇無讖本の雄大なる敎說に似ず、殆んど木に竹を接いだものゝ如くである。これはその編纂が後代に在ることを意味するもので、卽ち此經の作者が彼の四十卷經の作者と同一でないことを證するのである。のみならず四十卷に後分三品經があるといふの說は、梁代已前既に居士請僧經に依つて傳へられた所で、若しその三品經が實に印度にあつたとすれば、その作者と今の四品半經の作者とは亦同一でないとすべきである。既に今經の作者は曇無讖本が憍陳如品第十三之二を以て終つてゐることを知つてゐるのであり、且つ恐らく居士請僧經の後分說をも知つてゐたと推定されるのであるから、その人は純粹な印度の三藏ではなかつたとせなければならぬ。此等の事由によつて此經は四川の會寧と訶陵國の多聞僧若那跋陀羅との合作に係るものでないかと想像されるのである。且つ夫れ此經の題目が區區であることも疑點の一に數ふべきである。武周錄に大般涅槃經荼毗分、一名闍維分といひ、開元錄に大般涅槃經後譯荼毗分、亦闍維分、亦後分と云ふといつ

てゐるが、一經に斯樣に多數の題名があることは他に其の類例を見ない。特に荼毗と闍維とは同一音を寫したもので、涅槃と泥洹、般若と波若との如く、別に異なつた意味があるのではないから、荼毗分なら荼毗分、闍維分なら闍維分、孰れにしても一題目にて宜いわけである。それを一名闍維分とし、兩名を存したのは、前引淨影慧遠の涅槃經義記に第五分を如來滅度闍維分と名けてゐるのに取つたのであらう。若し然りとすれば此經は主として會寧の手に成つたものとすべきである。兎に角、多くの經が西域地方に於て追補又は修正せられたのに對し、南方訶陵國に於て此經が譯出されたことは頗る興味のあることゝいふべきである。

第三節　觀普賢菩薩行法經の編纂

觀普賢菩薩行法經は一卷の經であつて、觀普賢經、又は普賢觀經とも略稱され、古來法華の結經として著名である。この經は劉宋元嘉年中（四二五—四五二）罽賓沙門曇摩蜜多が揚州祇洹寺に於て譯したもので、その事は出三藏記集已下諸錄に悉く記する所である。歷代三寶紀には東晉祇多蜜、及び姚秦鳩摩羅什も亦此經を譯したとし、前後三譯あると言つてゐるけれど、この說は信ずるに足

らぬ。又此經の原本と見るべき梵夾も發見せられず、西藏譯にも藏されて居らぬ。至元法寶勘同總錄第三には「此經蕃本闕」と記してゐる。されば此經は西曆五世紀の初に唯だ曇摩蜜多に依つて一譯され、それが今存してゐるに過ぎないことを知るべきである。

此經が法華經に基いて編纂されたものであることは、經中に屢次法華經の名を出し、且つ多寶塔の出現等を說くことに依つて明かであり、特にその中の普賢菩薩勸發品とは緊密な關係を有するものであることが確認される。普賢菩薩勸發品には、普賢菩薩が東方寶成德上王佛國から娑婆世界の耆闍崛山に來到し、釋迦牟尼佛に面して如來の滅後に此の法華經を得るの法を聞き、菩薩自ら此經を受持し讀誦する者を守護せんが爲に、白象に乘じて其人の前に現ぜんことを誓ひ、且法華經を受持し、乃至如說修行する者は卽ち普賢の行を行ずる者であるとして、其人の獲得すべき種種の功德利益を說き明かしてゐるのである。卽ち此經に未來世の衆生の大乘無上法を行じ、普賢の行を學せんと欲するものゝ爲に憶念の法を說くべしといひ、大乘經典（卽法華經）の受持讀誦を勸め、普賢菩薩の來現を敍說してゐるのは、正しく彼の勸發品に基き、その趣旨を廣說したものと見られるからである。明智旭の閱藏知津第二十四に、此經は法華の普賢勸發品と表裏をなすといつてゐるのは、正に妥當の見解とすべきである。

又鳩摩羅什譯の思惟略要法には、四無量觀法、不淨觀法已下、觀無量壽佛法等の種種の觀法を說き明かしてゐるが、その最後に次の如き法華三昧觀法といふのを揭げてゐる。今その全文を擧げて見ると、

法華三昧觀法

三七日一心精進如說修行、正憶念法華經者、當念釋迦牟尼佛於耆闍崛山與多寶佛在七寶塔共坐、十方分身化佛遍滿所移衆生國土之中、一切諸佛各有一生補處菩薩一人爲侍。如釋迦牟尼佛以彌勒爲侍。一切諸佛現神通力光明遍照無量國土、欲證實法出其舌相、音聲滿於十方世界。所說法華經者、所謂十方三世衆生、若大若小乃至一稱南無佛者皆當作佛。惟一大乘無二無三、一切諸法一相一門、所謂無生無滅畢竟空相、唯有此大乘無有二也。習如是觀者、五欲自斷、五蓋自除、五根增長卽得禪定、住此定中深愛於佛。又當入是甚深微妙一相一門淸淨之法、當恭敬普賢・藥王・大樂說・觀世音　得大勢・文殊・彌勒等大菩薩衆。是名一心精進如說修行正憶念法華經也。此謂與禪定和合令心堅固。如是三七日中、則普賢菩薩乘六牙白象來至其所。如經中說。

これは正念法華三昧の法を明かしたもので、今の觀普賢經の說と關係のあるものではないかと

思はれる。又觀普賢經には屢〻東方善德佛等の十方佛を遍禮すべきことを說いてゐるが、この十方佛は寶月童子所問經に說く所で、龍樹の十住毘婆沙論第五易行品に之を引用し、又觀佛三昧海經第十の念十方佛品にも之を掲げてゐる。されば此の經は亦觀佛三昧海經とも聯絡があつたものといふべく、且つ觀藥王藥上經には觀佛三昧海經の名を出し、「廣說如二觀佛三昧海一」と記してゐるのであるから、此等の三經の間には一脈相通ずるものがあることを認めなければならぬ。又此經には

歸二依三寶一已次當下自誓受中六重法上。受二六重法一已、次當下勤二修無礙梵行一發中廣濟法上受中八重法上。

と言つてゐるが、この六重八重の說は觀虛空藏菩薩經にも之を掲げ、

出家比丘比丘尼沙彌沙彌尼式叉摩尼犯二四重禁一、在家菩薩毀二六重法一、出家菩薩犯二八重禁一。

と記してゐる。これは在家の菩薩は六重法、出家の菩薩は八重法を受持すべきことを說いたのである。蓋し六重法は北涼曇無讖譯の優婆塞戒經第三受戒品に出す所で、即ち殺生・偸盜・虛說・邪婬・說四衆過・酤酒の六波羅夷をいひ、八重法は一卷菩薩善戒經に出す所で、即ち殺・盜・婬・妄語・自讚毀他・慳惜財法・瞋不受悔・謗亂正法の八波羅夷をいふのである。梵網經等の十波羅夷の說は、此の八波羅夷に優婆塞戒經の說四衆過及び酤酒の二を加へたものであるから、その編纂

は卽ち此等諸經の後に在るものと認められる。そは兎に角、今この觀普賢經幷に觀虛空藏菩薩經に六重八重の法を擧げてゐるのは、優婆塞戒經及び菩薩善戒經の說を承けたものといはなければならぬ。

又經錄を檢するに觀經と題する經が少くない。卽ち

觀佛三昧海經十卷　　東晉佛陀跋陀羅譯
觀彌勒菩薩上生兜率天經一卷　　北涼沮渠京聲譯
觀世音觀經一卷闕　　同譯
觀普賢菩薩行法經一卷　　劉宋曇摩蜜多譯
觀虛空藏菩薩經一卷　　同譯
觀無量壽佛經一卷　　劉宋畺良耶舍譯
觀藥王藥上二菩薩經一卷　　同譯

之に依ると觀經と題する一群の經が東晉末より劉宋の初にかけて相次で譯出されたことを知るべく、而してそれ等は皆單譯であつて、梵本も西藏譯もないのみならず、重譯された事實もなく、又上述の如く此等觀經の間に互に聯絡關係のあつたことが明かであるとすれば、此等の諸經は西曆

四世紀の末頃に殆んど同時に或地方に於て、觀行者に依つて編纂されたものではないかと想像されるのである。又此經の初に普賢の國土を明かし、

普賢菩薩乃生₂東方淨妙國土₁。其國土相、雜華經中已廣分別。

と記してある。これは普賢の國土は雜華經の中に已に廣く分別してあるから、今は之を略するといふのである。但し宋元明三本には今の如く雜華經とあるが、高麗本には之を法華經に作つてゐる。然るに法華經勸發品には普賢菩薩が東方寶威德上王佛國より此の世界に來至したことを說いてゐるけれど、廣く其の國土の相を陳べて居らぬ。雜華經は華嚴經入法界品を指すので、此經は觀佛三昧海經第九、涅槃經第十八、第二十等にも亦之を引用し、且つ舊華嚴經第六十等に普賢淨土の相が敍說してあるから、今の觀普賢經の文も雜華經に作るを正しとすべきである。その他、此の經中に華嚴經に依つたとおもはれる箇處も少くない。それは下に指摘する通りである。又出三藏記集第二には觀普賢經の下に「下注云、出₂深功德經中₁」といふ挾註がある。この深功德經なるものは如何なる經を指したか明かでない。或は法華經を指すのかも知れぬが、兎に角これは或種の經中より抄出したことを言ひあらはすのである。後漢康孟詳譯の興起行經にも、其の題下に「一名₂嚴誡宿緣經₁。出₂雜藏₁」といひ、又占察善惡業報經の題下には「出₂六根聚經中₁」と記し、

大佛頂首楞嚴經の題下にも「一名中印度那蘭陀大道場經」。於灌頂部錄出別行」と註してゐる。この中、占察經及び大佛頂首楞嚴經は共に支那撰述と認められる經であつて、斯かる脚註が附してある經は、兎角其の成立に云々のある場合が多いのである。

之を要するに觀普賢經は觀經の一種であつて、觀佛三昧海經・觀藥王藥上經・觀虛空藏菩薩經等と姉妹關係を有する經であることを知るべきである。諸種の觀經が劉宋時代に至つて一時に譯出され、而してその前後に重譯された事實がなく、(歷代三寶紀等の記載は信ずるに足らぬ)且つ共に梵本等も傳はらないのは經典成立の價値を重からしむる所以でなく、同時に又その編纂年代が古きにあるものとすることも出來ぬ。既に法華經　維華經が引用してあり、又優婆塞戒經及び菩薩善戒經の六重八重の說を揭げ、寶月童子問法經の十方十佛說を出してゐるのを見ると、此經は恐らく西曆四世紀末、若しくは五世紀の初頭に、或地方に於ける法華信仰者に依つて編纂されたものであらうと推定されるのである。

次に經の本文に就き少しく檢討を加へて見ると、經は先づ初に佛が毘舍離國大林精舍重閣講堂に在つて却後三月涅槃に入るべきことを宣し、仍て阿難、摩訶迦葉及び彌勒菩薩の三大士は、未來世の衆生をして菩薩の心を起し、諸罪を滅除し、諸の障外の事を見ることを得しむべきかを問

ふたのに發端し、次に普賢行相の說述に移るのであるが、今その說相を大別して、一に普賢國土の相、二に得行の遲速、三に普賢身相の觀見、四に行者安慰得陀羅尼、五に釋迦多寶及び分身諸佛の觀見、六に六根懺悔の六項に分ち、その概要を述べて見やう。一に普賢國土の相とは、經に普賢菩薩は東方淨妙の國土に生ず、その國土の相は雜華經の中に已に廣く分別すとあるのを指すのである。高麗藏本には雜華經を法華經に作つてゐるけれど、それは上に述べた如く正しくない。二に得行の遲速とは、業障の輕重によりて普賢の色身を見るに遲速のあることを說き、障輕き者は一日乃至三七日、重障の者は一生乃至三生を要すといふのを指すのである。この中、三七日の說は法華經普賢勸發品に

欲修習是法華經、於三七日中應一心精進。滿三七日已、我當乘六牙白象與無量菩薩而自圍繞、以一切衆生所喜見身現其人前、而爲說法示敎利喜

と說くのに合致するのである。

三に普賢身相の觀見とは普賢菩薩の身相を說くのを指すので、卽ち經に彼の菩薩は身量音聲色像共に無邊なるも、神通により身を促めて小となし白象に乘ず。この象に六牙七支あり、各その下端に亦各七蓮華六浴池があり、浴池の蓮華上の玉女は箜篌を持する。行者更に懺悔し、至心に

諦觀して大乘を思惟すれば、象鼻の蓮華敷いて華中に化佛及び菩薩が現れ、象頭にはまた三化人あり、各金輪・摩尼珠・金剛杵を持し、象若し行歩すれば地に千輻轂輞を印し、一々の輞間に亦蓮華と化象が現ずる。又象の鼻上の化佛が發する眉間の光明は化して金鞍となり、鞍上の蓮華寶臺に普賢菩薩が結跏趺坐し、白玉色の五十種の頂光、及び金色の身光を放ち、身光の端に亦無量の化佛菩薩がある。大象徐歩して六寶華を雨らし、行者の前に至れば、牙端の玉女は鼓樂絃歌して大乘一實の道を讃歎する。行者更に又大乘經典を讀誦し、十方諸佛・多寶佛塔及び釋迦牟尼佛を遍禮し、懺悔の法を行じて大乘を思念し、廣大の慈悲を行ずれば、菩薩は眉間の光明を放つて端嚴の身相を現じ、又十方無量の世界を照すに、各世界に亦普賢と等しき菩薩があつて異口同音に清淨大乘の法を說き、且つ行者を讃歎することを見るであらうと說いてゐる。これは法華經勸發品の六牙白象說に基き、亦恐らく左の舊華嚴經第三盧舍那佛品の偈を參酌したものであらうと思はれる。

普賢悉在　一切佛刹　坐寶蓮華　獅子座上　如是示現　遍一切界　普入無量
無邊諸行　悉能示現　無量種身　變化充滿　十方世界　妙音和雅　說法無礙
一切三昧　方便自在　一切佛土　諸如來所　一切三昧　皆得自在　悉能了知

最勝境界　示現普賢　無量自在　如一切土　諸如來前　一切刹塵　諸世界中
普賢自在　亦復如是　盡盧舍那　本願底故　普賢身相　猶如虛空　依於如如
不依佛國　現身無量　普應衆生　隨群萠類　爲現化故　一切世界　無量佛土
悉能示現　入諸法門

四に行者安慰得陀羅尼とは、行者更に日夜大乘を念ずれば、睡眠中に普賢菩薩が說法してその心を安慰し、若し經典の句偈を忘失すれば爲に義趣を深解憶持せしめ、ついで又十方一切の諸佛を遍見せしむべく、行者又復た懺悔して閉目開目にも諸佛を見んと願せば、菩薩はその側を離れず、三七日にして旋陀羅尼を得しめ、その行更に進まば菩薩は爲に宿世の業緣を說いて一切の罪事を發露せしめ、仍て諸佛現前三昧を得て東方阿閦佛及び妙喜國を始め、十方諸佛及びその上妙の國土を分明に見ることが出來ると說いてゐるのをいふので、これは法華經勸發品の連文に

供養守護安慰其心、亦爲供養法華經故、是人若坐思惟此經、爾時我復乘白象王現其人前。其人若於法華經有所忘失一句一偈、我當敎之與共讀誦還令通利。爾時受持讀誦法華經者、得見我身、甚大歡喜轉復精進。以見我故即得三昧及陀羅尼、名爲旋陀羅尼、百千萬億旋陀羅尼　法音方便陀羅尼。得如是等陀羅尼。

といふのに對當さるべきものである。

五に釋迦多寶及び分身諸佛の觀見とは、普賢菩薩が行者の爲に六根清淨懺悔の法を說き、諸根清淨を得れば、身心歡喜して諸の惡相なく、心と法と相應して百千萬億旋陀羅尼を得、更に廣く百千萬億の無量の諸佛を見て摩頂を蒙り、如來眞實の法子なりと稱讃され、時に應じて十方一切の諸佛の世界を見、更に又空中の聲を聞いて大乘經典を誦習すれば、夢中に釋迦牟尼佛が大衆と共に靈鷲山の七寶莊嚴、幷に現身の釋迦牟尼佛及び十方分身の諸佛を觀見することが出來る等と說いてゐるのを指すのである。この中、諸佛摩頂讃歎の一段は、勸發品に

若有受持讀誦正憶念修習書寫是法華經者、當知是人則見釋迦牟尼佛、如從佛口聞此經典。當知是人供養釋迦牟尼佛。當知是人佛讃善哉。當知是人爲釋迦牟尼佛手摩其頭。當知是人爲釋迦牟尼佛衣之所覆。

といふのに該當し、又釋迦多寶分身諸佛觀見の一段は、見寶塔品の偈に

告諸大衆　我滅度後　誰能護持　讀說斯經　今於佛前　自說誓言　其多寶佛
雖久滅度　以大誓願　而師子吼　多寶如來　及與我身　所集化佛　當知此意
諸佛子等　誰能護法　當發大願　令得久住　其有能護　此經法者　則爲供養

我及多寶　此多寶佛　處於寶塔　常遊十方　爲是經故　亦復供養　諸來化佛
莊嚴光飾　諸世界者　若說此經　則爲見我　多寶如來　及諸化佛　……
若有能持　則持佛身　……　能於來世　讀持此經　是眞佛子　住淳善地

と說くのを承けたものと見るべきである。

六に六根懺悔とは普賢分身の諸菩薩が異口同音に行者に六根清淨の法を敎へ、佛法僧戒施天の六法を念ずべしとなし、更に諸佛の前に於て先罪を發露し、至誠に懺悔すべしと告げ、具に眼等の六根懺悔の法を說くのを指すのである。即ち無量世以來眼根によつて諸色に貪著せしことを知り、十方諸佛の色身不滅を信じて之を遍禮し、又大乘經典及び普賢菩薩に向つて慈愍を請ひ、五體投地して大乘を正念し、諸佛の名を稱して燒香散華し、眼の過患を說いて悔過すれば、現世に釋迦及び分身の諸佛を見ることを得べく、更に大乘經典を讀誦し、晝夜六時に胡跪懺悔し、多寶佛塔を見んと願ずれば、七日を過ぎて多寶佛塔は地より涌出し、釋迦牟尼佛右手を以てその戶を開くに、多寶佛は大音聲を出して、行者が普賢の眼根懺悔を修することを讚ずといひ、次に普賢菩薩等の指示によつて耳鼻舌身意根の過惡を懺悔する過程を縷說してゐる。この中、耳根及鼻根懺悔の下に行者は多寶佛の光明によつて東方善德佛及び其の分身諸佛を觀見すといひ、舌根懺悔

の下に南方栴檀德佛及び其の分身諸佛を觀見すとし、身意懺悔の下に十方佛各右手を伸べて行者の頭を摩し、讚言を加へることを敍し、且つ其の中に

釋迦牟尼名㆓毘盧遮那遍一切處㆒、其佛住處名㆓常寂光㆒。常波羅蜜所㆓攝成㆒處、我波羅蜜所㆓安立㆒處、淨波羅蜜滅㆓有相㆒處、樂波羅蜜不㆑住㆓身心相㆒處、不㆑見㆓有無諸法相㆒處。如㆓寂解脫乃至般若波羅蜜㆒、是色常住法故。如㆑是應㆓當觀㆒十方佛㆒

と說いてゐる。これは釋迦牟尼卽ち毘盧舍那の住處を常寂光土と名けたのであつて、頗る著名な說である。就中、釋迦牟尼を毘盧遮那と名けたのは華嚴の說に依つたものといふべく、卽ち舊華嚴經第四如來名號品に

此四天下佛號不㆑同。或稱㆓悉達㆒、或稱㆓滿月㆒、或稱㆓師子吼㆒、或稱㆓釋迦牟尼㆒、或稱㆓神仙㆒、或稱㆓盧舍那㆒

といひ、釋迦遮那一體說を唱へてゐる。常寂光は光明を意味し、毘盧遮那卽ち光明遍照佛の住處にふさはしきものとしてその名稱を立てたのであらうが、華嚴經には之を蓮華藏世界と名けてゐる。蓮華藏世界はその世界が蓮華より構成されてゐるといふ點で、其の名稱を附したのであつて、共に毘盧遮那の住處を指すのである。若し然りとすれば、これ亦華嚴の說を承けたものとすべきで

ある。

經は最後に普賢行法の付屬及び菩薩受戒の法を記述してゐるのであるが、その中、普賢行法の付屬とは佛が阿難に對して、普賢の行は十方諸佛諸大菩薩の懺悔法であり、又滅後の弟子が惡不善の業を懺悔せんとするには、諸佛の五眼三種身の根元たる大乘經典を讀誦すべきことを告げ、若し大乘經典を受持し讀誦し解說し、その義を思惟すれば、釋迦多寶分身の諸佛及び普賢文殊藥王藥上の諸菩薩を見ることが出來ると說いてゐるのをいふのである。次に菩薩の受戒に就いては專ら自誓受戒の法を說き、菩薩戒を具足せんと欲せば、先づ空閑處に在つて遍く十方佛を禮して己が過を說き、釋迦牟尼佛を和上、文殊を羯磨、彌勒を敎授、十方諸佛を證明、諸大菩薩を伴侶となし、方等經典の受持を誓ひ、經の甚深の妙義によつて三寶に歸依し、自誓して六重の法を受け已つて又無礙の梵行を勤修し、廣濟の心を發して更に八重の法を受け、閑處に於て燒香懺悔し、諸佛菩薩及び大乘經典を供養し、一日乃至三七日を經れば、若しは出家、若しは在家も和上諸師及び羯磨を須ゐず、大乘經典受持讀誦の力の故に、普賢菩薩勸發行の故に自然に五分法身を成就し、大乘經に於て記別を受くべきことを記述してゐる。この一段の說は宋求那跋摩譯の一卷菩薩善戒經と同趣旨にして、彼の經にも在家六重、出家八重の說を擧げ又自誓受戒の法を說き、

爾時受者、自觀己身如觀智者。爾時於寂靜處禮十方佛、東向像前右膝著地合掌而言、大德十方佛菩薩僧聽、今我某甲求菩薩戒、我已具優婆塞戒乃至具智者事。是故我從十方佛菩薩僧求菩薩戒。……至心默然住、專念已而作是言、今已施我菩薩戒。我已得菩薩戒……

……今我無師、十方佛菩薩爲師。第二第三亦爾。爾時十方佛菩薩卽作相示。當知得戒

といつてゐる。蓋し自誓受戒の說は梵網及び瓔珞經等にも記する所であつて、卽ち菩薩瓔珞本業經卷下大衆受學品に、佛滅度の後、千里の內に法師なき時は、應に諸佛菩薩の形像の前に在りて胡跪合掌して自誓受戒すべしといひ、梵網經卷下にも若し佛子、佛滅度の後に好心を以て菩薩戒を受けんと欲する時、佛菩薩の形像の前に於て自誓受戒せよ。七日を以て佛前に懺悔して好相を見ることを得ば、便ち受戒することを得んと說いてゐるのがそれである。之に依ると此等の經は皆同一系統のものたることを知るのであるが、たゞ此の觀普賢經に、釋迦和上、文殊羯磨、彌勒敎授等の細說を加へてゐる點が他經に異なるのである。又此の中、梵網及び瓔珞經に於ては六重八重を合して新たに十重說を唱へて來たのに對し、今この觀普賢經が在家六重出家八重の說を取つてゐるのは、直接菩薩善戒經の說を承けたものといふべく、同時に亦此の事實は本經の編纂が梵網及び瓔珞經の已前に在ることを證するものとすべきである。

按ずるに法華經に基く普賢菩薩の信仰は古くから印度に行はれたもので、大智度論第九には一比丘が法華經を讀誦して普賢を感見したことを記してゐる。又觀普賢經が支那に傳譯されると、江南佛徒の間には漸次之を講習したものゝ如く、出三藏記集第五抄經錄には南齊竟陵文宣王の所抄に係る抄普賢觀懺悔法一卷を掲げ、同第十二法苑雜緣原始集目錄には、普賢六根悔法(出普賢觀經)の目を列ねてゐる。又天台智顗は夙に大賢山に潛んで此經及び法華經等を誦し、彼の著法華三大部中に此經に關說すること凡そ二十八回に及び、又彼の維摩經略疏第四等に此經の常寂光土を以て四土中の第四に置き、之を究極の淨土となし、閱藏知津第二十四には智顗の法華懺儀は全く此經を宗とするものだといつてゐる。又唐湛然の授菩薩戒儀に、釋迦如來を和上、文殊を羯磨阿闍梨、彌勒を敎授阿闍梨等として菩薩戒を受くべきことを規定してゐるのは、疑ひもなく此經の受戒法に依つたのである。又支那四川省峨嵋山が普賢信仰の中心地として有名であつたことは、峨嵋志、佛祖統紀第四十三等に記する所であり、又太平廣記第百十五には紀聞を引き、

開元初、同州(陝西省大荔縣)界有數百家、爲東西普賢邑社、造普賢菩薩像而每日設齋。東社邑家青衣以齋日生子、於其齋次名之曰普賢。年至十八、任爲愚竪厮役之事、蓋所備嘗。後因設齋之日、此竪忽推普賢之像而坐其處。邑老觀者咸用怒焉。既加詬罵、又苦鞭韃。普賢笑曰、吾

以汝志心故生此中、汝見眞普賢不能加敬、而求此土像何益。於是忽變其質爲普賢菩薩身、身黃金色、乘六牙象空中飛去、放大光明、天花綵雲五色相映、於是遂滅。邑老方悟賢聖大用、驚嘶其西社爲普賢邑

と記してゐる。之に依ると早い時代より普賢信仰は支那各地に行はれたことを知るのである。又本邦圓珍は觀普賢文句(現存)、同經記、同料簡未由各一卷を撰し、宋神照本如は又義疏二卷を著し、其科一卷も亦傳つてゐる。此外に本邦に於て疏釋を製したものも若干ある。

日蓮が文永、建治頃に圖示した大曼陀羅には、釋迦多寶二佛の外に善德諸佛及び十方分身諸佛等を勸請してゐるが、之に關し、日朝の本尊相傳事に

釋迦多寶外善德分身ヲアソバシタルハ三世了箇門心也。此釋迦外餘佛アリ、餘佛又分身アリト云ヘル釋心也。而神力品疏一切者他方來者及從分身佛來者也釋スルモ此意也。サテ普賢觀經南無東方善德佛及分身諸佛云ヘリ

と記してゐる。之に依ると日蓮も此經を重んじ、これを以て本尊大曼荼羅建立の一個の典據としたことを知るべきである。

後編　異經及び疑僞經論の研究

第六章　總　　說

一

大乘經典が佛滅後、印度又は西域地方等に於て幾多の歳月の間に漸次編纂されたものであることは、前編にほゞ論じた通りである。ついでそれ等の諸經が支那に飜傳されるに及んで、之を講學するものが續出し、又その思想信仰は深く民心に浸透し、異常なる發達を遂げたのであるが、その間亦少からざる經典及び論書が假托され、自ら一種の支那地方的佛敎を開展するに至つたので、この事は識者の大に注目を要すべき所である。蓋し支那には元と道儒二敎があり、その思想は自ら佛敎と異なつてゐる所から、古くより衝突を惹起し、屢法難を蒙ることもあつたが、亦一面には調和的傾向を生じ、相互にその思想を取り入れるやうにもなり、その結果、種種の經典が假作されたことは事實である。又經論の講學が盛んなると共に自己の所宗を强調し、或は王者等の措置に平ならず、之に抗爭せんが爲に僞經僞論を製作し、或は佛敎の要旨を闡明せんが爲に經

文を抄略し、或は敎法宣布の一助として俗間信仰を混入し、その他單なる迷信、又は一時の好奇心から經典を妄作し、佛說に假托するものが頻出するに至つた。此の如きは固より佛敎の純正を亂り、眞典を汙瀆するものではあるけれど、その中には高遠なる理念を發揮したものもあり、或は一時人心の指導に貢獻したものもあつて、必ずしも一概に之を排擊すべきでない。そは兎に角疑僞經の製作は支那佛敎史上に於ける一種の大なる出來事であつて、上下數百年を通じてその事が行はれ、唐貞元頃までにその數實に一千五百卷の多きに達した。而して彼國の名匠大家といへども深く省察を加へず、概ねそれ等の疑僞を信用して以てその敎學を構成したのであるから、支那佛敎の眞相を究明せんとするには、是非とも此の暗黑面を照破すべき要があるのである。

蓋し支那に於ける疑僞經の製作は頗る早い時代から起り、而も亦それが後世まで繼續されたのである。苻秦道安（三一四―三八五）の撰した譯經目錄は現存諸目錄中の最古のもので、たとひその全卷は傳はらぬにしても、極めて貴重な史料とすべきであるが、その中には譯者不明の所謂失譯經が凡そ一百三十四部、別に又異經と稱するものが一百七十五部もあり、異經の中にも亦古典と認むべき古異經が九十二部、涼土から出た涼土異經が五十九部、關中から出た關中異經が二十四部あつたことを記し、この外に又疑經として寶如來經、毗羅三昧經、善王皇帝經、惟無三昧經等、すべ

て二十六部三十卷の經名を列ねてゐる。出三藏記集第五に掲ぐる安公疑經錄の序に、

外國僧法、學皆跪而口受。同師所受、若十二十轉以授後學。若有一字異者共相推校、得便擯之。僧法無縱也。經至晉土其年未遠、而憙事者以沙標金、斌斌如也。而無括正何以別眞僞乎。農者禾草倶在、后稷爲之歎息。金匠玉石同緘、卞和爲之懷耻。安敢預學次、見涇渭雜流龍蛇並進、豈不恥之。今列意謂非佛經者如左。以示將來學士共知鄙倍焉

と記してゐるが、之に依ると支那譯經開始已後未だ二百年に滿たざる間に、既に多數の異經幷に疑僞經が世に行はれたことを知るべきである。梁僧祐の出三藏記集第五新集疑經僞撰雜錄には、更にこの外に疑經として比丘應供法行經、居士請僧福田經、灌頂度星招魂斷絕復連經、安墓呪經、藥師琉璃光經、提謂波利經等、合二十部二十六卷を列ね、又南齊江泌處女僧法尼の閉目誦出せる寶頂經以下二十一部三十五卷等を僞撰としてかゝげてゐる。又歷代三寶紀第十五に依ると、宋世衆經別錄(作者未詳)には疑經十七部二十卷、李廓の魏世衆經錄(五三二—五三四間作)には非眞經六十二部、非眞論四部、全非經愚人妄作十一部、法上の齊世衆經目錄(五七〇—五七五間作)には、人作として五十一部一百六卷、寶唱の梁世衆經目錄(五一八作)には、疑經六十二部六十七卷を列ねてゐたことを記載してゐる。又法經等の撰した隋衆經目錄には、疑惑として仁王經、梵網經、占察善惡業報經、大乘起信論等、す

べて五十五部六十七卷、僞妄として寶如來經、老子化胡經、須彌四域經、梵天神策經、灌頂經、五凡夫論等、計一百四十一部三百三十五卷を出し、隋彥琮等諸學士の撰した衆經目錄第四には、疑僞合して二百九部四百九十一卷を列ね、唐道宣の撰した大唐內典錄第十歷代所出疑僞經論錄には、安公疑經錄已下總じて一百七十餘部三百二十餘卷を擧げ、唐明佺等の撰した武周刊定衆經目錄第十五僞經目錄には、二百二十八部四百十九卷の經名を列ね、唐智昇の撰した開元釋敎錄第十八疑惑再詳錄には十四部十九卷、同僞妄亂眞錄には三百九十二部一千五十五卷を出し、唐圓照の撰した貞元新定釋敎目錄第二十八疑惑再詳錄には十四部十九卷、同僞妄亂眞錄には三百九十三部一千四百九十一卷の經目を揭げてゐる。實にその大數に驚かざるを得ないのである。

又疑僞經の外、譯者不明の所謂失譯經も亦甚だ多い。道安の時、既に失譯及び古異經を合して三百餘部を算し、その後出三藏記集第四新集續撰失譯雜經錄には、更に失譯として大方廣佛報恩經、菩薩瓔珞本業經、觀無量壽經、仁王護國般若波羅蜜經、灌頂經等、すべて一千三百六部一千五百七十卷（內八百四十六部八百九十五卷當時現在、四百六十部六百七十五卷闕本）を列ね、又抄經として抄華嚴經已下四十六部三百五十二卷（內三十八部一百五十一卷當時現在、八部二百一卷闕本）の經名をかゝげ、法經錄には失譯として出要經已下計四百三十一部六百三十一卷、別生

として華嚴經十種生法經已下、計六百五十五部七百五十七卷を擧げ、歷代三寶紀には失譯計五百九十七部九百九十九卷を出し、開元釋敎錄には失譯計七百四十一部九百五十二卷を列ねてゐる。蓋し失譯とは譯者の明かならぬものを稱するので、その中には眞に譯人の名の失はれたものもあらうが、又梵本の翻譯でない爲に初から譯者のないものも含まれてゐるのである。抄經は大部の經論に就いて抄略を試みたもので、その動機は必ずしも不純とすべきではないが、しかし任意に本文を取捨割斷し、殆んど改作に近いものもあるから、古來之を亂眞として區別したのである。南齊文宣王が盛んに抄經を製作したことは有名な事實であり、彼の四十二章經の如きも恐らく抄經の一種であらうと思はれる。

論部は經に比較すると僞作が少いやうであるが、これは論の製作は容易でないからであらう。今諸錄を檢して見ると、法經錄第五には大乘論疑惑として大乘起信論一卷、同僞妄として五凡夫論一卷、小乘論疑惑として遺敎論一卷、同僞妄として成實論九卷(蕭子良)、阿毘曇五法一卷(同上)を擧げ、大唐內典錄第十疑僞經論幷に開元錄第十八僞妄亂眞錄には、獨覺論、毘尼決正論、優波離論、普決論、阿難請戒律論、迦葉問論、大威儀請問論、寶髻論、遺敎論、沙彌論、文殊請問要行論等の名を列ねてゐる。この中、大乘起信論及び遺敎論の二部は現に入藏されてゐるが、

他の諸論は皆傳つて居らぬ。成實論九卷及び阿毘曇五法一卷は、共に齊竟陵文宣王の製作した所謂抄經であつて、その中、成實論に關しては、出三藏記集第五新集抄經錄に、抄成實論九卷、齊武帝永明七年十二月竟陵文宣王請定林上寺釋僧柔、小莊嚴寺釋惠次等、於普弘寺共抄出と記し、又阿毘曇五法は安世高譯の阿毘曇五法行經を抄略したもので、彼の抄經錄に抄阿毘曇五法行經一卷と題するものがそれである。蓋し當時は抄經が流行した結果、論部の抄略も行はれ、廬山慧遠は大智度論を抄略して二十卷となし、之を般若經問論集と名づけた。これは大部の經論は通讀が容易でなく、且つその譯文が概ね難澁であつて、意味の通じ難いものもあるから、之を撮略してその論旨を明かならしめんとしたので、必ずしも惡意の改作と見るべきではない。さりながら既に改竄を經たので、眞典そのまゝでないから、今亦之を僞妄として簡別したのである。五凡夫論は吉藏の法華經玄論第九等に引用されてゐるが、果して何人の作と傳へられたものか詳かでない。その中には佛に法身、報身、舍那身、釋迦身の四種の別のあることが記述されてあつたといはれる。これは應身に舍那、釋迦の二身があるとするので、法華論の三身と金光明の三身說とを合糅したものと見られる。さすれば此論も亦起信論に同じく南北兩地に於ける佛身論の折中調和を企てたものかも知れぬ。大乘起信論は歷代三寶紀已下諸錄に馬鳴菩薩造、眞諦三藏譯とし、又遺教

論は天親菩薩、或は馬鳴菩薩造と傳へ、眞諦三藏譯とせられてゐるけれど、共に支那撰述の僞論である。又現藏中に收めてある大宗地玄文本論、釋摩訶衍論、金剛頂發阿耨多羅三藐三菩提心論、龍樹五明論等も龍樹又は馬鳴造と傳へてゐるけれど、並に皆眞論と認むべきものではない。此の如く馬鳴及び龍樹に假托せられた僞論が多いのは、此の二師が印度已來最も有名であつたからである。そのことは僧叡の大智度論序に

天竺傳云、像正之末微二馬鳴龍樹一、道學之門、其淪胥溺喪矣。其故何耶、寔由二二未一レ契レ微、邪法用盛。虛言與二實教一並興、嶮徑與二夷路一爭レ轍。始進者化レ之而流離、向レ道者惑レ之而播越。非二二匠一其孰與正レ之。

といつてゐるのに依つても明かである。

又馬鳴龍樹等の名を借りて論書を僞作することは、印度にも行はれたやうである。現藏中には馬鳴の作として佛所行讚の外、大莊嚴論經十五卷、尼乾子問無我義經、六趣輪廻經、十不善業道經、事師法五十頌各一卷を擧げてゐる。この中、大莊嚴論經はすべて九十種の因緣譬喩等を纂輯したものであるが、近時支那新疆省庫車地方に於て本書の古寫と認められる梵夾の斷片が發見され、それには經部の本師なる鳩摩邏羅多の名が記載されてあるといふので、此論はおそらく鳩摩

邏羅多の喩鬘論であらうと想定さるゝに至つた。且つ此論は姚秦鳩摩羅什譯と傳へられてゐるけれど、出三藏記集には之を掲げず、その譯文も亦法華等に比して遜色があるから、多分他の傳譯に係るのであらう。これは假托といふのではなく、誤傳したのである。尼乾子問無我義經已下四部は共に北宋日稱の譯であるが、その中、尼乾子問は宋法天譯の外道問聖大乘法無我義經と同本であつて、日稱譯には馬鳴菩薩集と題してあるけれど、法天譯には如是我聞等と記し、佛說の經にしてゐる。六趣輪迴經は法天譯の六道伽陀經と同本であつて、彼經には佛說六道伽陀經と題し、亦之を佛說にしてゐる。これ等は後人の作を或は佛說に歸し、或は馬鳴の集に歸したものと認めなければならぬ。事師法五十頌は灌頂阿闍黎に承事すべきことを說いたもので、その中に合掌以持レ花、散二彼曼拏羅一といひ、善達二眞言相、曼拏羅事業一ともいつてゐるから、眞言師の作であることは明かである。又龍樹の撰述と傳へられるものに菩提行經四卷、福蓋正行所集經十二卷、方便心論、菩提心離相論、讃法界頌、廣大發願頌各一卷があるが、この中、菩提行經は西藏藏經中に之を寂天の集としてゐる。福蓋正行所集經もおそらく他師の編集に係るものなるべく、その中には別に中觀的主張もなく、閻羅王の事などを記し、特にその第十二卷に、馬鳴智者堅二持淨戒一善說二法要一等といひ、馬鳴を讃じてゐる。方便心論は因明論理の法を說いたもので、その記述が龍樹

の眞撰と認められる迴諍論に多く合致しないのであるから、他師の作に係るものと想定され、又菩提心離相論中には阿賴耶識の事を說き、讃法界頌には三身四智の說が揭げてあるから、これは無著世親已後の撰述と見るべく、廣大發願頌には金剛手、除蓋障等の密敎の諸尊を擧げてゐるから、これ亦密敎已後の作たることは言を俟たぬ。燉煌出土中には別に又龍樹の作として因緣心論頌、因緣心論釋等があり、大正藏經中に編入されてゐるが無論その眞撰でない。此他に又世親等に假托したものもある。之に依ると印度に於ても後人の作を馬鳴及び龍樹等に歸したものゝ少くないことを知るべく、さすれば支那に於て此等諸師の假托が行はれたのを深く異とするにも足らぬのである。

二

現今の大藏經は宋藏、高麗藏等を覆刻したものであつて、これ等の諸藏は亦開元入藏錄、貞元入藏錄、續貞元錄、大中祥符錄、景祐錄等に依つて經典を編次し、雕板したのである。故に開元、貞元等の諸錄に於て眞典と認めて入藏したものは、今の大藏經中にすべて之を存し、疑僞若しくは別生等と認めて入藏しなかつたものは之を傳へて居らぬ。卽ち智昇、圓照、恆安等を信用し、專ら之を規準として大藏經が編成されてゐるのであるが、然るにその中には少からざる誤傳を含

み、又少からざる疑僞も混入されてゐるのである。蓋し經論の眞僞を鑑別することは實に容易の業でない。既に眞典に模倣して假托の痕を掩はんとし　又概ね譯人の名を附してその傳來の妄ならざることを證せんとし、細心の注意が拂はれてゐるのであるから、明眼の士でない限り、その妄を看破することは難い。多數の譯經目錄中に於て僧祐の出三藏記集は年代も古く、且つその記事も正確であつて頗る信憑するに足るのである。法經錄は主として出三藏記集を準とし、兼ねて亦自ら細心の研究を遂げたやうであるから、眞僞の鑑別も概して謬りがない。費長房の歷代三寶紀、明佺の武周刊定衆經目錄に至つては共に杜撰極まるもので、玉石を混同し、眞僞を紛亂して毫もその鑑識の見るべきものがない。智昇の開元釋敎錄は從前の諸錄を研詳し、力めて精確を期したやうであるけれど、尙ほ費長房及び明佺等の訛謬を承けたものが少くない。卽ち安公疑經錄に寶如來三昧經を以て南海胡作、僧祐の疑經僞撰雜錄に藥師琉璃光經を以て宋鹿野寺慧簡の抄撰としてゐるに拘はらず、智昇は前者を東晉祇多蜜、後者を東晉帛尸梨蜜多羅の譯となし、又法經錄に仁王般若經、隨願往生經、占察善惡業報經、梵網經、大乘起信論、遺敎經論等を疑惑となし、梵天神策經、安宅神呪經等を僞妄に編してゐるに拘はらず、智昇は皆之を翻譯有源として眞典と認めた如き、又大佛頂首楞嚴經及び圓覺經等を信用し、新たに之を入藏した如き、卽ちその鑑識の精

ならざることを告白するものといはなければならぬ。貞元入藏錄は大體開元錄を踏襲し、唯だ彼の錄に開元已後、貞元十五年（七九九）に至るまでの譯經（主として密部の經軌）を追補したものに過ぎぬ。然るにその後、南唐保大四年（九四六）恆安が續貞元錄を製して、更に貞元十五年已後の譯出に係る本生心地觀經、守護國界主陀羅尼經を始め、その他多數の密部の儀軌、幷に千臂千鉢曼殊室利經等の疑僞を續入し、且つ之を亦貞元錄中に加筆したので、彼の錄は頗る混雜を生ずるに至つた。（第十二章菩提心論の項參照）後又宋眞宗の大中祥符六年（一〇一三）惟淨等は大中祥符法寶錄二十一卷を撰し、ついで仁宗の景祐三年（一〇三六）呂夷簡は景祐新修法寶錄百六十一卷を製し、亦各爾後の譯經を入藏した。宋藏、高麗藏は卽ち此等の諸錄に基いて編成したのであるが、就中、高麗藏には宋藏所收の外、別に四十華嚴經を始め、三十卷佛名經、千臂千鉢曼殊室利經、菩提心論、大宗地玄文本論、釋摩訶衍論等の疑僞、幷に密部の經軌等凡そ一百二十餘部を增編してゐる。これは主として續貞元錄及び景祐錄に依つたのである。景祐錄に依つたことは、緣山三大藏目錄卷下に、大宗地及び釋摩訶衍の二論を景祐入藏と記してゐるので知ることが出來る。

又密部の經及び儀軌は隋代已來漸次支那に齎され、特に唐開元中、善無畏、金剛智、不空等が來朝し、盛んに之を翻傳するに及んで頓に多大の數に上るに至つた。貞元及び續貞元錄等に列名

されてゐるものが卽ちその大部分であるが、この他に亦本邦空海等が入唐して別に請來したものも少くない。大日本縮刷大藏經には祕密部を錄內錄外及び閱藏知津方等部所出の三類に分ち、合計五百七十部九百三十一卷を收めてゐるが、この中、一百四十二部一百八十四卷は始めて縮藏に至つて編入したのであつて、卽ち古來我國に於てのみ寫傳されたものを入藏したのである。これ等も殆んど皆梵本傳譯となつてゐるけれど、支那及び本邦に於て撰述されたものゝ少くないことは疑ひを容れぬ。

三

斯樣に支那に於ては早い時代から疑僞經論の製作が流行したので、苻秦道安を始め、僧祐、法經等は皆その眞僞を鑑別して之を淘汰し、智昇等も亦力めて研詳を期したのであるけれど、その中に尙ほ幾多の非眞が混入されてあることは前に述べた通りである。大藏經は佛教の聖典として尊重頂戴さるべきものであるから、非眞は當然その中より排除すべきであるが、しかし亦それは支那の各時代に起つた大なる出來事であるから、彼の佛教史研究の資料としてはなるべく之を搜訪し、その保存を計るの要があるのである。この意味に於て現藏中に存する幾多の疑僞經論は甚だ珍重さるべきものといはなければならぬ。近時石田茂作氏は「寫經より見たる奈良朝佛教の研

究」を著し、その中に奈良朝現在一切經疏目錄と題し、大日本古文書に基き、天平時代に寫經所に於て書寫した一切經及び註疏の筆寫の年月等を精査し、之を縮刷大藏經と對照してその存缺を表示してゐる。それに依ると縮刷大藏經等に收めざる大小乘古異經が凡そ一百八十餘部もある。天平時代は唐開元、天寶の間に當るのであるから、此等多數の疑僞經は卽ち智昇時代に支那に存したものなることを知ると同時に、それが亦當時本邦に於て傳寫されたことは、入唐留學僧等が彼地に於て經典の採訪に多大の努力を拂つた爲なることを察せなければならぬ。昭和法寶總目錄第一卷に收むる久安元年(一一四五)書寫の東寺一切經目錄卷下に、救護身命濟人病苦厄經已下、四十八部の疑僞を列名してゐるが、これは奈良朝現在目錄にも記載されてあるので、卽ち久安の頃尙ほ奈良朝書寫の異經が世に存したことを證するのである。又昭和法寶總目錄に收むる燉煌本古逸經論章疏幷古寫經目錄は、輓近支那燉煌千佛洞より發見せられた古逸經等を編錄したもので、十方千五百佛名經已下多數の異經を擧げてゐるが、その中、護身命經等の五十三部は新たに大正藏經疑似部中に編入され、此他に又大日本續藏經中にも無量壽佛名號大事因緣經已下十數部の經が續入してある。而して此等諸經の大部分が既に奈良朝目錄に記載されてあるのを見ると、天平時代に殆んどすべての疑僞が本邦に傳へられたことを知るべきである。

蓋し上述の燉煌出土等の諸經は各皆經の體裁を備へ、一經として存してゐるのであるが、然るに此等の外に全經は既に失はれたけれど、その一文一章が他書に摘錄せられて今日に傳つてゐるものが尙ほ少くない。即ち梁僧旻及び寶唱等の撰集に係る經律異相五十卷、唐道世の諸經要集二十卷、幷に法苑珠林一百卷中に援引せる多數の異經を始め、弘明集第十三所收の郗嘉賓の奉法要、出三藏記集第十二法苑雜緣原始集目錄、後周道安の二敎論、唐道綽の安樂集、善導の觀念法門、往生禮讚、法琳の破邪論、辯正論、法藏の梵網菩薩戒本疏等に引用せる幾多の藏外の經文がそれである。この事は先年刊行した拙著「佛敎史の諸研究」中に古佚經の遺文と題して表示して置いたのであるが、その數は異經抄經及び疑僞等總じて二百四十餘部の多きに上るのである。此の中には上記燉煌出土等にも傳へないものがあり、その遺文は貴重するに足るのである。今開元錄所載の疑惑及び僞妄を始めとし、奈良朝現在一切經疏目錄已下に揭ぐる異經及び疑僞經を更に左に表示して見やう。

異經及疑僞經表

經名	作者	三藏記	法經錄	開元錄	奈良錄	所收	引文
寶如來三昧經	南海胡	安疑經	僞妄	入藏	年不詳	大正一五	
定行三昧經(摩訶目連所問經)		安疑經	疑惑	僞妄			
眞諦比丘慧明經(淸淨眞諦經)		安疑經	疑惑	僞妄			
尼吒黃羅國王經(黃羅王經)		安疑經	僞妄	僞妄			
胸有萬字經(胸現萬字經)		安疑經	疑惑	僞妄			經律五
國王薩和菩薩經(國一切度經)		安疑經	僞妄	僞妄			
善信女經(善信菩薩二十四戒經)		安疑經	疑惑	僞妄	天平二〇		經律三、三八
護身十二妙經(度世護世經)		安疑經	疑惑	僞妄			
度護法經		安疑經	僞妄	僞妄			
毘羅三昧經		安疑經	疑惑	疑惑	天平二〇		要集五、珠林四二
善王皇帝功德尊經		安疑經	疑惑	僞妄			安樂集下
惟務三昧經(惟無三昧經)		安疑經	疑惑	僞妄			要集一九、安樂集下
相國阿羅呵公經		安疑經	疑惑	僞妄			
懸定普遍國土神通菩薩經		安疑經	疑惑	疑惑	天平二〇		
陰馬藏光明經		安疑經	疑惑	僞妄			

大阿育王經	安疑經	疑惑	僞妄			要集三
四事解脫度人經	安疑經	疑惑	僞妄			
大阿那律經	安疑經	疑惑	僞妄			
貧女難陀經(貧女人經)	安疑經	疑惑	僞妄			
鑄金像經	安疑經	疑惑	僞妄			
四身經	安疑經	疑惑	僞妄			
普慧三昧經	安疑經		僞妄			
阿秋那三昧經	安疑經	疑惑	僞妄	天平五		
兩部獨證經	安疑經	疑惑	僞妄			
法本齋經	安疑經		僞妄			
比丘應供法行經	疑經	疑惑	僞妄			梵網疏三
居士請僧福田經	疑經	疑惑	僞妄			要集五、一〇、珠林八一、涅槃經疏三三、
灌頂度星招魂斷絕復連經	疑經	僞妄	僞妄	天平五		
決定罪福經	疑經	疑惑	疑惑	天平一二	中村不折藏敦煌本	
無爲道經	疑經	僞妄	僞妄			
情離有罪經	疑經	僞妄	僞妄			經律四四

燒香呪願經		疑經	僞妄	僞妄			
安墓呪經		疑經	僞妄	僞妄			
佛鉢經		疑經		僞妄			
藥師瑠璃光經(灌頂經)	慧簡	僞撰	僞妄	入藏		大正二一	
提謂波利經	曇靖	僞撰	僞妄	僞妄	勝寶五		要集三、出三藏記集一二、珠林二三、三七、八八、仁王經疏上、義林章一本
妙好寶車菩薩經	曇辯	僞撰	僞妄	僞妄	天平五	大正八五(敦)	
菩提福藏法化三昧經	道備	僞撰	僞妄	僞妄			
佛所制名數經	王宗	僞撰		僞妄			
仁王經		失譯	疑惑	入藏	天平五	大正八	
阿那含經		失譯	疑惑				
像法決疑經			疑惑	僞妄		續藏乙二三 大正八五(正倉院)	要集二、三、五、一〇、珠林一九、三八、四一、四四、八一、九〇、止觀下、法華玄論八
隨願往生經		失譯	疑惑	入藏	天平二一	大正二一	要集一九
淸淨法行經		失譯	疑惑	疑惑	天平二〇		道安二教論、維摩經玄疏一、破邪論上
龍種尊國變化經			疑惑	僞妄			
大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經			疑惑	僞妄	天平一〇	大正八五(敦)	
觀世音十大願經			疑惑	僞妄			

觀世音三昧經			疑惑	疑惑	天平一三	
大乘蓮華馬頭羅刹經			疑惑	僞妄		
空淨大感應三昧經			疑惑	僞妄		
般若得經			疑惑	僞妄	天平一二	
初波羅耀經			疑惑	僞妄		
占察善惡業報經			疑惑	入藏	天平　九	大正一七
大法尊王經			僞妄	僞妄		
十方佛決狐疑經			僞妄	僞妄		
八方根原八十六佛名經			僞妄	僞妄		
普賢菩薩說此證明經			僞妄	僞妄		大正八五(燉)
彌勒成佛本起經			僞妄	僞妄		
彌勒下生觀世音施珠寶經			僞妄	僞妄		
彌勒成佛伏魔經			僞妄	僞妄		
彌勒下敎經		疑經	僞妄	僞妄		
妙法蓮華經度量天地品			僞妄	僞妄	神護　三	大正八五(燉)
觀世音詠託生經			僞妄	僞妄		

滅七部莊嚴成佛經			偽妄	偽妄			
空寂菩薩所問經（法滅盡經）			偽妄	偽妄			辯正論五
照明菩薩經			偽妄	偽妄			
照明菩薩方便譬喩治病經			偽妄	偽妄	年不詳		
首羅比丘見月光童子經			偽妄	偽妄		大正八五（敦）	
觀月光菩薩記經		疑經	偽妄				
阿難現變經			偽妄	偽妄			經律一五、四四
般若玄記經			偽妄	偽妄			
幽深玄記經			偽妄	偽妄			
玄記經			偽妄	偽妄			
彌勒下生結大善契經（大契經）			偽妄	偽妄			
發菩提心經			偽妄	偽妄			
菩薩求五眼經			偽妄	偽妄			
般泥洹後諸比丘經		失譯	偽妄	偽妄			
小般泥洹經（大法滅盡經）		失譯	偽妄	偽妄			
法滅盡經		失譯	偽妄		天平八		

鉢記經(佛鉢經?)		疑經	僞妄				
五濁惡世經			僞妄	僞妄			
妙法蓮華天地變異經			僞妄	僞妄			
華嚴十惡經			僞妄	僞妄	勝寶六	大正八五(敦)	
觀世樓炭經		失譯	僞妄	僞妄			
小樓炭經			僞妄	僞妄			
正化內外經(老子化胡經)	王浮		僞妄	僞妄			笑道論(廣弘明集九)破邪論上
須彌四域經			僞妄	僞妄			道安二教論、安樂集下
魔化比丘經		失譯	疑惑	僞妄			辯正論一
善信神呪經(善信磨祝經)			疑惑	僞妄	天平二〇		經律三八
五苦章句經			疑惑	入藏	天平一五	大正一七	
五濁經			疑惑	僞妄			
法滅盡經(小乘)		失譯	疑惑				
華鮮經中說罪福經			疑惑	僞妄			
五龍悔過護法經(空慧悔過經)			疑惑	僞妄			
戒具三昧道門經			疑惑	僞妄			

最妙勝定經		疑惑	疑惑		燉煌本(大迹)
天竺沙門經		疑惑	僞妄		
救護身命濟人病苦厄經(護身命經)	失譯	疑惑	疑惑	天平　五	大正八五(燉)
大那羅經		疑惑	僞妄		
惠明正行經		疑惑	僞妄		
梵天神策經	失譯	僞妄	入藏	天平二〇	大正二一
天皇梵摩經		僞妄	僞妄		
安墓經		僞妄	僞妄		
安塚經		僞妄	僞妄		
安宅經		僞妄	僞妄		
危脆經		僞妄	僞妄		
安宅神呪經(安宅呪)	失譯	僞妄	入藏	天平一一	
天公經		僞妄	僞妄		大正八五(燉)
度生死海神船經		僞妄	僞妄		
救蟻沙彌經		僞妄	僞妄		
北方禮佛呪願經		僞妄	僞妄		

如來在金棺囑累清淨莊嚴敬福經			僞妄	僞妄		大正八五(燉)　要集二　八
阿羅呵條國王經			僞妄	僞妄		
五百梵志經(亦有亦無經)			僞妄	疑惑		
修行方便經			僞妄	僞妄		
僞令經			僞妄	僞妄		
度世不死經			僞妄	僞妄		
齋法清淨經			僞妄	僞妄	天平一三	大正八五(燉)
無爲法道經			僞妄	僞妄		
正齋經			僞妄	僞妄	天平一九	
呪媚經			僞妄	僞妄	天平一〇	
屍陀林經			僞妄	僞妄		
照魄經			僞妄	僞妄		
法社經			僞妄	疑惑	天平　五	
太子讚經			僞妄	僞妄		
比丘法藏見地獄變經			僞妄	僞妄		
人民求願經			僞妄	僞妄		

閻羅王東太山經			偽妄	偽妄		
七寶經		失譯	偽妄	偽妄	天平五	
字論經			偽妄	偽妄		
救護衆生惡疾經（救疾經）			偽妄	偽妄		大正八五（敦）
五菓譬喩經			偽妄	偽妄		
孤兒孤女經			偽妄	偽妄	天平五	
度人王并庶民受五戒正信除邪經			偽妄	偽妄		
九十五種道經			偽妄	偽妄		
法句譬經	蕭子良	抄經	偽妄			
義足經	蕭子良	抄經	偽妄			
安般守意經	蕭子良	抄經	偽妄			
四諦要數經	蕭子良	抄經	偽妄			
分別經	蕭子良	抄經	偽妄			
魔化比丘經	蕭子良	抄經	偽妄			
貧女爲王女人經	蕭子良	抄經	偽妄			
梵網經			疑惑	入藏	天平五	

浄行優婆塞經	蕭子良		僞妄				
遺教法律三昧經		失譯	疑惑	僞妄	天平二〇		經律一六、珠林七七、九一
二百五十戒經		失譯	疑惑				
淨度三昧經		失譯		疑惑	天平一二	續藏八七	經律四九、出三藏一二、甄正論一、安樂集下、觀念法門、要集一八、一九、珠林七、六二、九七
益意經		失譯		疑惑	天平一〇		
淨土盂蘭盆經				疑惑	天平五		
三廚經				疑惑		大正八五(燉)	
佛名經(三十卷本)				僞妄	神護三	大正一四	
要行捨身經				僞妄		大正八五(燉)	
瑜伽法鏡經	師利			僞妄		大正八五(燉)	
彌勒下生遣觀世音大勢至勸化衆生捨惡作善壽樂經				僞妄			
光愍菩薩問如來出世當用何時普告經				僞妄			
隨身本宮彌勒成佛經				僞妄			
金剛密要論經(方明王緣起經)				僞妄			
佛升忉利天後阿難爲諸四部衆說禮佛持齋儀式經				僞妄			

彌勒摩尼佛說開悟佛性經（人身因緣開悟佛性經）			偽妄			
淨行優婆塞戒經			偽妄			
甲申年洪災大水經			偽妄			
蝦蟇經靑呱品			偽妄			
自省經			偽妄			
父母恩重經			偽妄	天平一九	大正八五(敦)	
如來正教祕要藏經			偽妄			
毘尼藏經			偽妄			
頂蓋經			偽妄			
禪門經			偽妄			
嫉妬新婦經			偽妄			
央崛摩羅經	蕭子良		偽妄			
重樓戒經			偽妄			梵網疏二
淸淨居士子度人經			偽妄			
摩登耆經			偽妄			
譬喩經		失譯	偽妄			

目連問經				僞妄			
小法滅盡經				僞妄	天平一二	大正八五(敦)	經律六、要集三
鳴錍經				僞妄			
持戒法經				僞妄			
金錍決口經				僞妄			
地獄經		失譯		僞妄			珠林四九
優鉢祇王經				僞妄			珠林九四、要集二〇
九傷經		失譯		僞妄			
七佛各說偈經		失譯		僞妄			
深自知身偈經				僞妄			
金剛藏經				僞妄			
隨葉佛說須菩提經				僞妄			
造天地經(造立天地經)				僞妄			破邪論上、甄正論一、五、八、梵網疏三
猤黎閣經				僞妄	天平一〇		
墮落優婆塞經				僞妄			
銀蹄金角犢子經（孝順子應變破惡業修行經）				僞妄			

後母經	僞妄			
諸佛下生大法王經	僞妄			
法句經	僞妄		大正八五(燉)	
罪福決疑經	僞妄			要集八、一四
大乘般若五辛經	僞妄			
最妙初教經	僞妄	天平二〇		珠林八六
罪報經	僞妄			
日輪供養經	僞妄			
乳光經	僞妄			
福田報應經	僞妄			
寶印經	僞妄	天平五		要集一四
究竟大悲經	僞妄		大正八五(燉)	
諸佛下生經	僞妄			
善惡因果經	僞妄		大正八五(燉)	
內三十七品經	僞妄			
戒正信邪經	僞妄			

達空道士分別善惡度苦經				僞妄			
老子敎人服藥修常住經				僞妄			
佛道定行經				僞妄			
決定要慧經				僞妄			
須彌像圖山經				僞妄			辯正論五
滿子經				僞妄			
法王經（涅槃般若波羅蜜經）				僞妄		大正八五（燉）	
決疑經				僞妄			
不死經				僞妄			
大辯邪正法門經				僞妄		大正八五（燉）	
佛性海藏智慧解脫破心相經				僞妄		大正八五（燉）	
心王菩薩說頭陀經				僞妄		大正八五（燉）	
新像法決疑經				僞妄			
護身經				僞妄			
勝德長者所問菩薩觀行經				僞妄	天平一二		
內天兄弟五人得天品經				僞妄			

反流盡源經				偽妄		
師子鳩摩羅所問經				偽妄		
大方廣不謗佛經				偽妄		
本事經				偽妄		
無量門淨除三障陀羅尼經				偽妄		
三昧經童子菩薩四重問品				偽妄		
天地鬪像經				偽妄		
大乘無盡藏經				偽妄		
梵天王經				偽妄	天平一〇	
側土經				偽妄	天平 五	
彌勒下山經				偽妄		
聖水經				偽妄		
彌勒下生救度苦厄經				偽妄		
菩薩決定經				偽妄		
新觀世音經				偽妄		
延年益壽經(延壽經)				偽妄		大正八五(燉)

閻羅王經				僞妄	天平一三	
續命經				僞妄		大正八五(燉)
益算經(七千佛神符經・益算神符經)				僞妄	天平二〇	大正八五(燉)
四讃偈及七佛名字禮懺經				僞妄		
閻羅王說免地獄經				僞妄		
花火經				僞妄		
三塗果劫不竟經				僞妄		
慈敎經(無量大慈敎經?)				僞妄		大正八五(燉)
去惡除病經				僞妄		
慈力王經				僞妄		
寶登王太子經				僞妄	天平二〇	
勇意菩薩將僧忍見彌勒幷示地獄經				僞妄		
天宮經				僞妄	天平一三	
折刀經				僞妄		
五戒本行經				僞妄		
修善行經				僞妄		

大通菩薩普利廣度經				偽妄		大正八五(燉)	
佛慧海中勇出一如無二行經				偽妄			
流炭經				偽妄			
如來成道經				偽妄		大正八五(燉)	
阿彌陀佛覺諸大衆觀身經（山海慧菩薩經）				偽妄		大正八五(燉)	
十往生阿彌陀佛國經				偽妄		續藏八七	安樂集、往生禮讚
律藏經				偽妄			
日藏觀世音經				偽妄			
救度大劫燒三災起經				偽妄			
一乘不假羊鹿經				偽妄			
聞善生信迴惡經				偽妄			
彌勒下生強別罪福經				偽妄			
大薩若經				偽妄			
摩訶薩埵經				偽妄			
祕要經				偽妄			
五無經				偽妄			

清淨精進無上眞諦大比丘慧法經			僞妄			
佛初置塔經			僞妄			
太子成道經			僞妄	天平一〇		
恒伽達緣經			僞妄			
寶圖經卷下			僞妄			
譬喩折羅漢經			僞妄			
降棄魔菩薩經			僞妄			
蜜多三昧經			僞妄			
發問罪福應報經			僞妄			
五戒經			僞妄			
現報當受經			僞妄		大正八五(燉)	
高王觀世音經			僞妄	天平一〇	大正八五	辯正論七
戒果莊嚴經	唐頌		僞妄			
天地八陽經				寶字八	大正八五(燉)	
稱揚百七十佛名經		失譯	失譯	天平九		
滅罪得福佛名經		失譯	失譯	年不詳		

南方佛名經	失譯	別生	失譯	年不詳	
十方佛名經	失譯	別生	失譯	年不詳	
諸佛名經				年不詳	
樹提長者因緣經				天平五	
菩薩請問經				天平一一	
菩薩等入法嚴經	失譯			天平二〇	
阿難見水光瑞經	失譯	失譯	別生	天平一二	
薩陀波崙菩薩求深般若圖像經	失譯		失譯	年不詳	
摩訶衍經(摩訶乘經)	失譯(十四卷)	失譯(同上)	失譯(同上)	天平一八(二卷)	中村不折氏藏燉煌本摩訶衍經第二十九
慈仁問八十種好經	失譯	失譯	法護	天平一〇	大正八五(石山)
觀世音所說行法經	失譯	失譯	失譯	年不詳	
自在王菩薩問如來境界經		失譯		天平一二	
普賢菩薩答難二千經		失譯	失譯	年不詳	
初度三昧經(淨度三昧經?)				勝寳二	
諸佛不可思議功德經				天平一八	
本無經		失譯	失譯	天平一四	

月佛菩薩經（月光菩薩經？）					天平　九	
四闕觀世音經					天平一一	
大光明百四十八願經		失譯	失譯	別生	天平一〇	
如來了義經					天平一四	
大乘蓮華經					天平二〇	
佛華嚴菩薩經					年不詳	
藥王藏藥經					天平一三	
法華光瑞菩薩現壽經		失譯	失譯	失譯	年不詳	
壽命涅槃經					天平一五	
度梵志經		失譯	失譯	別生	天平　五	
優塡王經					天平一八	
阿[illegible]經					天平一一	聖語藏三
不思議功德經（功德經）		失譯	失譯	失譯	天平　八	
後緣經					勝寶　四	
五生經					年不詳	
禪經假相觀經					天平　五	

大慈經					天平一一
辟支佛經					天平一三
佛在金棺上囑累造像經					天平一〇
佛自說本起慈心像經					天平一五
密疏經					天平一四
妙眼經					天平一八
聞持經					天平一二
在家菩薩戒經		失譯	失譯	別生	年不詳
在家人布薩法經					年不詳
受菩薩戒次第十法經		失譯		失譯	年不詳
初發意菩薩常晝夜六時行五事經		失譯		失譯	年不詳
菩薩受戒法經		失譯		失譯	年不詳
出家人受菩薩戒經					年不詳
優婆塞二十五戒文經					天平一〇
受菩薩三十聚戒法					天平一九
十無盡戒經					天平一〇

賢者五戒經		失譯	失譯	失譯	天平五		珠林三三七、要集三
三障懺悔經					天平一二		
懺悔經					天平一五		
菩薩譬喩經					天平一四		
菩薩度人譬喩如巧乳母經					天平一四		
毘奈耶經					天平二〇		
比神經					天平一八		
法勤經					天平一四		
分界經					天平九		
雜釋虛空藏經					年不詳		
十方五王經					年不詳		
鐃梨經					神護三		
玄怖經					年不詳		
壽延經(延壽經?)					年不詳		
觀世音祕密無障礙如意輪陀羅尼藏義經					年不詳	八家祕錄上	
集法悅捨苦陀羅尼經			別生		天平一五	知恩院	

八菩薩四弘誓經			失譯	天平一〇	八家秘録 六
大明仁孝皇后夢感佛說第一希有大功德經					續藏 一
無量壽佛名號利益大事因緣經					續藏 一
觀世音菩薩往生淨土本緣經					續藏 八七
念佛超脫輪迴捷徑經					續藏 八七
斷温經					續藏乙 二三
地藏菩薩發心因緣十王經	藏川				續藏乙 二三
預修十王生七經	藏川				續藏乙 二三
大藏正教血盆經					續藏 八七
壽生經					續藏 八七
化珠保命眞經					續藏 八七
大梵天王問佛決疑經					續藏 八七
觀世音菩薩救苦經					續藏 八七
妙法蓮華三昧祕密三摩耶經					續藏 三
阿彌陀佛根本祕密神呪經					續藏 三
十方千五百佛名經					大正一四(敦)

呪魅經						大正八五(燉)
妙法蓮華經馬明菩薩品第三十						大正八五(燉)
法句經(一卷本)						大正八五(燉)
地藏菩薩經						大正八五(燉)
金有陀羅尼經						大正八五(燉)
讃僧功德經						大正八五(燉)
七女觀經						大正八五(燉)
救諸衆生一切苦難經						大正八五(燉)
勸善經						大正八五(燉)
新菩薩經						大正八五(燉)
釋家觀化還愚經						大正八五(燉)
佛母經						大正八五(燉)
僧伽和尚欲入涅槃說六度經						大正八五(燉)
四諦法門經						燉煌本(北京)
解百生怨家陀羅尼經						燉煌本(北京)
閻羅王受記經						燉煌本(中村不折)

一切功德積聚經	燉煌本（中村不折）
讃禮地藏王菩薩懺悔願經	燉煌本（北京）
比丘十變經	燉煌本（倫敦）

四

支那に於ける疑僞經が種種の動機の下に製作されたことは上に一言した所であるが、その中、道儒二致、特に道敎關係のものが甚だ多い。淸淨法行經は出三藏記集第四失譯雜經錄中に列ねてあるのであるが、その中には佛は摩訶迦葉を震旦に遣して老子となし、光淨菩薩（或は儒童菩薩）を遣して孔子となし、月光菩薩（或は光淨菩薩）を遣して顏回としたのだといふ說を揭げてゐる。これは一般に西晉祭酒王浮が妄作した老子化胡經に對する佛敎側の應酬と見られて來たのであるが、然るに北周甄鸞の笑道論（廣弘明集第九所收）に引用せる老子化胡經に、「迦葉菩薩云、如來滅後五百歲、吾來東遊以道授韓平子、白日升天。又二百年以道授張陵」と記してゐるのに依ると、老子を迦葉の再誕とするの說は化胡經已前より行はれたことを知るべきである。又老子化胡の說も王浮が始めて唱へたものではなく、後漢書第三十下襄楷列傳に載する後漢桓帝延熹九年（一六六）の楷の上表文中に「或言、老子入夷狄爲浮屠」といひ、又三國志魏書第三十の註に引ける魏略にも、「浮

屠所ㇾ載與₂中國老子經₁相出入。蓋以爲、老子西出ㇾ關、過₂西域₁之₂天竺₁教ㇾ胡。浮屠屬₂弟子₁といつてゐる。此の中、襄楷上表の記事は聊か尙早と思はれるけれど、兎に角之に依つて早い時代から斯かる妄說が唱道されたことを知るのである。蓋し摩訶迦葉を老子としたのは、彼は佛弟子中の長老で、その年歯が最も長じてゐたからであり、儒童菩薩(釋尊の前身)を孔子としたのは、儒童の名が儒教と通ずるからであり、又月光菩薩を顏回としたのは、月光は童子と稱せられ、古くより支那出現の說が傳へられたからであらう。月光出現の事は出三藏記集第五疑經僞撰雜錄に、觀月光菩薩記一卷幷に佛鉢經一卷を出し、佛鉢經の下に甲申年大水及月光菩薩出事と註し、又燉煌出土の首羅比丘見月光童子經には、月光童子は三千の徒衆と倶に君子國を去る七千餘里の蓬萊山中に在り。當來必ず水災あり、時に月光出現し、申酉の年衆生の爲に說法すべし等と記してゐる。首羅比丘經は法經錄第三僞妄錄等に列ねてある經で、多分彼の觀月光菩薩記を更に詳述したのであらうと思はれる。又西晉竺法護譯と傳ふる申日經に、我れ般涅槃千歲已後、經法且さに斷絕せんとするとき月光菩薩あり、當に秦國に出でゝ聖君となり、我が經法を受けて道化を興隆すべしといひ、隋那連提黎耶舍の德護長者經卷下には、月光童子は我が涅槃の後、未來世に於て我法を護持し、當來の世、佛法末の時に於て閻浮提の脂那國內に於て大國王となり、名けて大行と曰ひ、

能く脂那國内の一切衆生をして佛法を信じ、諸の善根を種ゑしむと記してゐる。之に依ると月光菩薩出現の說は古くより傳へられたことを知るべく、たとひそれが顏回再誕說と關係がないにしても、亦一種の菩薩派遣說と見らるべきものである。又須彌四域經は後周道安の二敎論、唐道綽の安樂集等に引用されてゐるが、その中には阿彌陀佛は寶應聲菩薩を支那に遣して伏犧となし、寶吉祥菩薩を遣して女媧となし、而して此の二菩薩は相議して第七梵天の上より七寶を取り來つて、此の世界の日月星辰二十八宿を造り、又春夏秋冬の四時を定めた。日月等が皆西に向つて行くのは、一切の諸天人民をして盡く阿彌陀佛に稽首せしめんが爲であると說いてゐる。須彌像圖山經及び造立天地經にもこの事が記載されてあるといはれるのであるが、或はこの三經は一經の異名かも知れぬ。兎に角これは前の三聖派遣說の餘波を受けたものであることは疑を容れぬ。

又提謂經は提謂波利經ともいひ、出三藏記集疑經僞撰雜錄に、宋孝武の時(四五四―四六四)北國比丘曇靖の妄作に係るものなることを明記してゐる。此經に佛敎の五戒を儒敎の五常に配當し、不殺を仁、不邪婬を義、不飮酒を禮、不盜を智、不妄語を信としたことは有名な話柄である。此經は一時盛んに行はれ、蕭齊劉虬を始め、梁僧旻、唐宗密等は各その判敎に於て之を人天敎と名け、佛最初の說法として信用したのである。又孝道は佛敎に於ても重んずる所であるが、しかし支那南北朝

時代に特にそれが强調されたのは、主として僧の出家剃頭が孝道に反すとの批難に酬い、兼ねて亦世道に調和せんとするの意に出でたものと認められる。當時僧に對して反孝の批難があつたことは事實で、牟子の理惑論に孝經の謂ゆる身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなりといふの語を引き、沙門の剃頭は聖人の語に違し、孝子の道に合せずとの問難を擧げ、且つ禍は繼嗣に踰ゆるものなく、不孝は後なきに過ぐるものなしといひ、又孫綽の喩道論に周孔の敎は孝を以て首となす、孝は德の至り、百行の本なり。子の親に事ふるの道は、生前には則ちその養を致し、歿後には則ちその祀を奉ず。三千の責は無後より大なるはなしといひ、作者不詳の正誣論にも佛は婚姻を斷つて子孫なからしむといひ、南齊明徵の正二敎論には下妻孥を棄て、上宗祀を廢すといひ、同張融の三破論に、佛は國に入つては國を破り、家に入つては家を破り、身に入つては身を破るといつてゐる如き皆卽ちそれである。斯樣な批難が續出したので、佛敎側に於ても之が應酬に努めたもの〻如く、四十二章經に凡そ人は天地鬼神に事ふるよりも其の二親に孝なるに如かず、二親は最も神なりといひ、四天王經に內以て淸淨に、外當に孝を盡くすべしといひ、又民佛敎に違して孝子なければ伺命算を減ずと說き、梵網經に父母師僧三寶に孝順せよ。孝順は至道の法なり、孝を名けて戒となすといひ、又佛子は常に一切の願を發して父母師僧三寶に孝順

すべしといひ、孝子經に子の親を養ふに、甘露百味以てその口を恣にせしむるも未だ孝となさず、能く親をして惡を去つて善をなし、五戒を奉持して三自歸を執らしむべしといひ、又父母恩重經に父母の恩の深重なることを說き、丁蘭、董黯、郭巨等の事蹟を引いて孝養を勸めた如き皆その對說と見ることが出來る。この中、四十二章經、四天王經、梵網經は別章に論ずる如く皆疑僞に涉る經であり、又孝子經は失譯、父母恩重經は開元錄等に僞妄に編してゐるのであるから、これ等は南北朝時代に支那に於て相次いで製作されたものと認めなければならぬ。

又道敎思想の影響を被つたものも多く、就中、抱朴子の謂ゆる司命奪算說は深く佛敎内に浸漸し、爲に亦幾多の疑僞を產出するに至つた。彼の劉宋元嘉四年（四二七）に智嚴、寶雲の共譯したと傳へられる四天王經に、四天神王は六齋日に天下を案行して帝王臣民等の心念口言身行の善惡を伺察し、之を帝釋に具申すると、德を修めるものが多ければ帝釋は諸臣と共に喜び、司命に勅してその人の壽を增し算を益し、諸の善神を遣して之を營護せしめ、又佛敎に違し、孝を盡さなければ司命をして算を減じ壽を減せしめると說いてゐるのは、疑ひもなく抱朴子の說を取り入れたのである。與支謙譯と傳ふる三品弟子經幷に大阿彌陀經五惡段の中に、五戒を犯するものは年壽未だ盡きざるも、頓にその餘命を奪つて惡道に入らしめると言つてゐるのも亦同說である。又法

苑珠林第八十八所引の提謂經には更に三覆八校一月六奏の説を出し、大日本續藏經所收の淨度三昧經、及び藥師瑠璃光經には閻羅王監察の説を掲げてゐる。これ等の諸經は互に關聯を有し、劉宋代に相次いで製作されたものと認められる。就中、藥師瑠璃光經には別に續命の法を說き明かしてゐるが、續命の法とは、男女その身が尫羸で常に病牀に惱むものは、衆僧を請して七日七夜齋戒し、四十九遍此經を讀み、七層四十九燈を燃し、四十九尺の五色續命幡を懸け、四十九種の雜類の衆生を放たば、卽ち病苦が癒え、その命を續けることが出來るといふのである。これは五戒等に依つて增壽が得られるとする四天王經等の說に對し、更に幡燈續命の法を唱へたものであつて、益算說の極めて深刻なる發展と認めなければならぬ。武周刊定衆經目錄第十五僞經錄等に列ぬる延壽經、續命經、益算神符經、救護身命經、壽生經、化珠保命眞經等の諸經は、皆此の藥師經に基いて更に編述されたものであらうと思はれる。

又疑僞經中には護國又は菩薩戒の標榜の下に窃に時の王者等の措置に反對し、その非法を鳴らしたものも數部ある。仁王般若波羅蜜經、梵網經等がそれである。この中、仁王般若經には五陰空十二入十八界空等を說き、五忍五十一位の菩薩の階位を說き、又二諦三諦等の說を擧げてゐるけれど、その主旨は謂ゆる護國の法を明かさんとするに在るやうである　卽ち仁王を以て經の題

目となし、別に護國の一品を立て、その中に怨賊來襲することあるも、若しその國王が百講座を敷き、百法師を請して般若波羅蜜を講せしむれば、怨敵は退散して破國を免るゝことが出來るといつてゐるので知ることが出來る。又此經の囑累品には佛の言として、未來世中の一切の國王太子王子四部の弟子は、横に佛弟子の爲に制戒を書記して白衣の法の如く、兵奴の法の如くするであらう。若し我が弟子たる比丘比丘尼が籍を立てゝ官の爲に使はるゝことあらば、すべて我が弟子に非ず、これ兵奴の法なり。統官を立て、僧を攝して僧籍を典主せしめ、大小の僧統共に相攝縛して獄囚の法、兵奴の法の如くならば、その時に當つて佛法久しからず。諸の小國王四部の弟子は自ら此罪を作り、破國の因緣身自ら之を受けんといひ、又國王大臣太子王子は自ら高貴を恃みて吾法を滅破し、明かに制法を作りて我が弟子比丘比丘尼を制して出家行道を許さず、亦復た佛像形佛塔形を造作することを聽さず。統官を立てゝ衆を制し、籍を安じて僧を記す。すべて吾法に非ず等といひ、梵網經四十八輕中の第四十七戒にも亦同一の事を記してゐるが、これ等は主として北魏の僧統制に反對したものと認められる。卽ち統官の職を設け、僧籍の制を立てゝ比丘比丘尼を束縛し、獄囚の法の如くに僧侶を取扱ふことを批難し、斯かる非法を敢てする國家は遂に破滅を免れることが出來ないとし、仁王たるものは常に般若を信奉し、如法に法師を恭敬し供

養すべく、かくすればその國家は永く安泰なることを得べしといふのであつて、正法治國の要を唱道すると同時に、その反面には當時の王者等の措置に反抗したものとおもはれるのである。蓋し東晉已後、支那に於て僧侶の數が漸次增加し、その中には種種の奸僞を事とするものもあり、又課役を免れんが爲に一時僧となるものも續出した所から、僧籍を設け僧統を置いて之を取締ることにしたのである。卽ち魏書第百十四釋老志に、北魏皇始二年(三九七)太祖は詔して趙州の法果を道人統に任じ、以て僧徒を綰攝せしめ、ついで興安元年(四五二)高宗は罽賓僧師賢を道人統となし、和平元年(四六〇)師賢卒するに及んで曇曜をして代つて沙門統たらしめたことを記し、又同延興二年(四七二)浮浪の僧を檢し、無籍の者は隱括を加へ、有籍の者は州鎭に送附せしむる等といつてゐる如き皆それである。後南朝に於ても僧主の官を設け、嚴に僧尼を管理したので、遂に此種の經を作つて之を批議したものと認められる。

又東晉已後屢詔を下して僧侶をして王者を拜せしめんとしたので、之に對しても亦その非法を鳴らした。卽ち東晉成帝の咸康六年(三四〇)庾冰は政を輔け、詔を出して僧をして帝を拜せしめんとしたが、時に尙書令何充等がその不可を論じたので議は遂に止んだ。安帝の元興二年(四〇三)太尉桓玄は震主の威を以て書を下し、僧をして王者及び親を拜せしめんとしたが、時に尙書令桓謙等は

抗議して之を諫め、廬山慧遠は沙門不敬王者論を著してその非を痛論した。又恭帝の元熙年中(四二〇)大夏の赫連勃勃は二秦の地を略し、我は人中の佛であるから僧の禮を受くるに堪へたりとし、自ら佛の畫像をその背に負ひ、沙門をして彼を拜せしめたことが傳へられ、その後宋武帝の大明六年(四六二)詔を下し、僧をして王者を拜せしめたが、幾くもなく行はれないやうになつた。蓋し當時の僧は己れを持すること高く、自ら人天の導師を以て任じ、王者は須らく來つて僧を敬すべきであるとなし、且つ僧は世外の人であるから、世間の父母等を拜すべきでないとしたのである。梵網經の第四十二戒に出家の人は國王に向つて禮拜せざれ、父母に向つて禮拜せざれと言つてゐるのは即ちその主張を記述したのである。今日より之を見れば固より容認すべからざる所なるも、支那南北朝時代の如き國情に在りては必ずしも深く咎むべきではないやうである。又當時僧侶が王者等の爲に說法する時、多く下座に立たせられたので、之に對してもその非を鳴らした。仁王般若經護國品に、百法師を請じて百高座を敷くべしといひ、同囑累品に比丘は地に立ち、白衣は高座す。すべて吾が法に非ずといひ、又梵網經第四十七戒に、比丘は地に立ち白衣は高座し、廣く非法を行ひ、兵奴の主に事ふるが如くせば輕垢罪を犯すといひ、第四十六戒に檀越貴人の家に入り、一切衆の中に立つて白衣の爲に說法することを得ざれ。應に白衣衆の前に高座の上に坐

すべし。法師の比丘は地に立つて四衆の爲に説法することを得ざれ。若し説法の時は法師は高座し、四衆の聽衆は下座して、父母に孝順し師敎に敬順するが如くすべしといつてゐるのは、皆その待遇に對して不滿を表明したのであつて、王者不拜論の餘波たることは明かである。

又當時は王者貴人を始め、一般に別請と稱して特に一二の僧侶を指名し、之を請待して供物金品等を施與するの風が行はれたので、これ亦僧衆の間に物議を惹起し、爲に僞經が製作されたやうである。梵網經第二十七戒に、一切別請を受けて利養を己れに入ることを得ざれ。この利養は十方僧に屬す。而るを別に請けば即ち是れ十方僧物を取つて己れに入るなりといひ　同第二十八戒に次第に請せば即ち十方の賢聖僧を得べし。而るを世人は五百羅漢菩薩僧を別請するも僧次の一凡夫僧に如かず。若し僧を別請せば是れ外道の法なり。七佛に別請の法なしといひ、別請の習風を排擊してゐるのがそれである。又出三藏記集第五疑經僞撰雜錄中に比丘應供法行經、居士請僧福田經の二部を擧げてゐるが、共に今傳つて居らぬけれど、唐法藏の菩薩戒本疏第三に引用する所に依れば、この二經は主として別請の法を批難したものであることを知るのであり、おそらく今の梵網の戒は此經に依つたのであらう。又像法決疑經は梵網經の説を承けたと認められるものので、その中には未來世の一切の俗官等は佛法を輕賤し、競うて塔寺を造るも頽落毀壞せるもの

を修治せず、僧を請して寺に在らしむるも飲食衣服等を與へず。僧物を稅奪し、三寶の奴婢を驅使し、又專ら敬田に施すも悲田に施さず等といひ、頗る道俗の非法を鳴らしてゐる。これ亦南北朝時代に於ける一般の時弊を匡正せんとするの意に出でたのであらうが、歷代三寶紀已下諸錄に皆之を僞妄に編してゐる。

又南北朝時代には僧俗の戒儀に關する異經が相次いで續出し、梵網經を始め、善信菩薩二十四戒經、遺敎法律三昧經、優婆塞優婆夷離欲具行二十二戒、淨行優婆塞戒經、重樓戒經、五戒本行經、五戒經、在家菩薩戒經、在家人布薩法經、受菩薩戒次第十法經、菩薩受戒法經、出家人受菩薩戒經、優婆塞二十五戒文經、受菩薩三十聚戒法、十無盡戒經、賢者五戒經、阿難請問戒律論等の十數部がある。この中、善信菩薩二十四戒經は出三藏記集第五安公疑經錄中に之を揭げ、開元錄には僞妄に編してゐる。今燉煌出土中に此經を存し、又經律異相第三十八には善信摩祇經の名に於てその文を援引してゐる。卽ち「有長者女名曰善信。年始十五、……卽授二十四戒。佛言、是爲我優婆夷高行三八二十四戒」と記してゐるのがそれである。之に依ると此經は善信女の爲に二十四戒を說いたものなることを知るのである。藥師瑠璃光經にも善信菩薩二十四戒の語を擧げてゐるけれど、何が二十四戒であるか明かでない。法經錄第五衆律失譯錄中に揭ぐる優婆塞優婆

夷離欲具行二十二戒、奈良朝目錄に揭ぐる優婆塞二十五戒文經は或はこれと關聯のあるものなるかも知れぬ。又遺敎法律三昧經は法經錄に疑惑、開元錄には僞妄に編してゐるが、經律異相第十六に引用する所に依ると、その中に五部律僧の被著する衣色が各異なることを記述してゐる。これは舍利弗問經幷に大比丘三千威儀から抄出したのであらう。重樓戒經は開元僞妄錄に揭げてあるのであるが、法藏の菩薩戒本疏第二に自讚毀他戒を釋する中、「一單自讚亦重、如善戒經說。彼云、菩薩若爲貪利養故自讚身得、犯菩薩戒住地。是名菩薩第五重法。樓戒經亦同此說。」と記してゐるのに依ると、此經は梵網の十波羅夷等を複說したものなることを知るべきである。十無盡戒經は奈良朝目錄に列名してゐる。これは瓔珞經の十無盡戒の語を取り、梵網の十波羅夷を解說したものと認められる。その他、優婆塞戒に關する異經が續出したのは、支那の民情にふさはしき在家の戒儀を規定せんとするの意に出でたのであらう。

五

翻譯經論の研究が漸次盛んなると同時に、學者の間には新奇の說を按出し、之を權威づけんが爲に大膽にも名を佛說に借り、又學派が對立して互に抗爭を事とするに及んで、自家の所見を骨張せんが爲に經論を僞撰し、或は自己の所信を鼓吹せんが爲に佛經を妄作したものも少くない。

彼の仁王般若經及び梵網經の如きは、時の王者等の措置を匡正せんが爲に僞撰したものではあるが、しかし此の二經に掲ぐる菩薩修道の階位、幷に梵網所説の十重四十八輕戒の如きは、支那佛教成立の重要なる素因をなし、特に菩薩瓔珞經に出す所の五十二位の説は、諸家悉く之を信用して菩薩階位の規準となし、のみならずその中の三觀一心の説は天台の依憑する所となり、授菩薩戒の作法の如きも支那に於ける一般授戒の通規として行はるゝに至つたのである。此等の中には西來三藏の指示に係るものがあつたかも知れぬが、その大部分は當時支那學者の考案に成つたものと認められる。又此の三經の間には一種の聯絡があつたものゝ如く、仁王、梵網の兩經は唯だその趣旨が合致するのみでなく、文句までも同一のものが少くない。又梵網と瓔珞經とも姉妹關係を有するが如く、瓔珞經大衆受學品に「佛子當先爲諸大衆受菩薩戒、然後爲説瓔珞經、同見同行。」といひ 梵網菩薩戒の後に此經を説いたことを明かにし、此の二經の同見同行を勸めてゐるのである。此等の事は別章に詳論した通りである。

又大乘起信論は馬鳴菩薩造、梁眞諦譯と署名され、古來その講學が盛んに行はれたものである。然るに法經錄には此論を疑惑部に編し、又夙に北地の地論師製作説も傳へられ、支那撰述たることは明かである。此論は如來藏の教旨に基き、眞妄和合の阿梨耶識を立てゝ之を生滅現象の根本

原因としたのであるが、その後此論の影響を受けて如來藏の敎義は大に流行し、更に又幾多の經論が假作された。彼の隋菩提燈譯と傳ふる占察善惡業報經下卷に掲ぐる大衆の實義なるものは、その論旨殆んど起信論と同一である。多分此論の後を承けて撰述されたのであらう。又大佛頂首楞嚴經は古來僞經として論議されたもので、その中には謂ゆる金剛大道場神呪を說き、菩薩の階位として五十七位を列ね、その他、衆生十二類、七趣及び十仙等の種種の奇說を擧げ、又如來藏常住眞心性淨の理を唱道してゐる。圓覺修多羅了義經も支那撰述と認められるのであるが、その主張たる圓覺妙心の說は大佛頂首楞嚴經の本如來藏妙眞如性を複說したものであつて、宗密の指摘する如く、その中の敍述は專ら起信論の本末五重の次第に依つて構成したのである。又起信論の注疏たる釋摩訶衍論は龍樹造と傳へられてゐるが、これ亦支那撰述たることは明かであつて、共に後章に詳論する通りである。之に依ると支那に於ける如來藏敎義の流行は主として起信論に淵源するものとすべきである。

又彌陀、觀音、彌勒、地藏等に關する疑僞經も少くない。その中、彌陀關係の經としては善王皇帝功德尊經、藥師瑠璃光經、隨願十方淨土往生經、須彌四域經、十往生阿彌陀佛國經、阿彌陀佛覺諸大衆觀身經、九品往生阿彌陀三摩地集陀羅尼經、阿彌陀佛根本祕密神呪經、念佛超脫輪廻

捷徑經等がある。善王皇帝功德尊經は出三藏記集第五安公疑經錄中に列名してあるので、苻秦已前の作に係ることを知るのであるが、唐道綽の安樂集下卷にその經文を引き、若し人あつて道を學して西方阿彌陀佛國に往生せんと欲し、晝夜一日乃至七日憶念し、若し復た中悔せんとするものも、善王の功德を說くを聞かば、命終の時八菩薩あり、飛び來つて此人を迎へ取り、西方阿彌陀佛國の中に到らしめんと言つてゐる。これは大阿彌陀經の疑惑中悔の說を承けたものなるべく、又八菩薩來迎の說は多分般舟三昧經の列衆なる颰陀和等の八人を指すのであらう。八吉祥神呪經、八陽神呪經、幷に灌頂經第四百の結神王護身呪經に、颰陀和等の八菩薩が臨終に人の精神を迎へて西方に往生せしめることを說いてゐるのは、即ち皆彼經に依つたものと認められる。又灌頂經第十二藥師瑠璃光經には、若し四輩の弟子ありて常に月六齋、年三長齋を修し、或は晝夜精勤苦行し、西方阿彌陀佛國に往生せんと願じて一日乃至七日憶念し、或は中悔せんものも、藥師佛の本願功德を聞かば、命終の時、文殊師利等の八菩薩が飛往してその精神を迎へ、蓮華の中に生せしめんと記してゐるが、これは善王皇帝經の文旨と全く同一であつて、唯だ善王を藥師如來となし、颰陀和等を文殊等の八菩薩に改めたまでに過ぎぬ。須彌四域經には上に述べた如く、阿彌陀佛は寶應聲菩薩を支那に遣して伏犧となし、寶吉祥菩薩を遣して女媧となし、以て日月星辰を造

らしめたといひ、十往生阿彌陀佛國經幷に阿彌陀佛覺諸大衆觀身經（山海慧菩薩經）には、阿彌陀佛は常に觀世音等の二十五菩薩を此土に遣して淨土の行者を影護し、惡鬼惡神をして惱亂せしめないことを說いてゐる。後密敎の流行と共に亦種種の經軌等が製作され、就中、不空譯と署名せる九品往生阿彌陀三摩地集陀羅尼經には九品往生を說き、上品上生を眞色地、乃至下品下生を樂門地と名け、之を九品淨識眞如の境となし、又十二光佛を十二大曼陀羅大圓鏡智の寶像なりとし、此の三摩地に住して阿彌陀の小眞言を誦すべきことを明かし、北魏菩提流支譯と署名せる阿彌陀佛根本祕密神呪經には、羅什譯阿彌陀經の全文を載し、之に阿彌陀の大呪等を添加してゐる。皆後世の人作なることは言を俟たぬ。

觀音關係の經としては、開元僞妄錄、奈良朝現在一切經疏目錄、幷に大日本續藏經等に觀世音十大願經、觀世音三昧經、觀世音詠託生經、新觀世音經、日藏觀世音經、高王觀世音經、觀世音所說行法經、四閧觀世音經、觀世音祕密無障礙如意輪陀羅尼藏義經、觀世音菩薩救苦經、觀世音菩薩往生淨土本緣經等を列名し、彌勒關係の經としては、彌勒成佛本起經、彌勒下生觀世音施珠寶經、彌勒成佛伏魔經、彌勒下致經、彌勒下生結大善契經、彌勒下生遣觀世音大勢至勸化衆生捨惡作善壽樂經、隨身本宮彌勒成佛經、彌勒摩尼佛說開悟佛性經、彌勒下山經、彌勒下生救度苦厄

經、彌勒下生甄別罪福經等を擧げ、地藏關係の經としては、地藏菩薩本願經、地藏菩薩儀軌、地藏菩薩陀羅尼經、地藏菩薩經、讚禮地藏王菩薩懺悔願經等がある。これ等は皆多く俗信に迎合したものであつて、後世の撰述に係るものなることは疑を容れぬ。就中、地藏本願經は唐實叉難陀、地藏菩薩儀軌は唐輸婆迦羅の譯と署名し、縮刷大藏經等に編入されてゐるけれど、開元錄已下の諸錄には之を記載して居らぬ。又此他に閻羅王關係の僞經として淨度三昧經を始め、閻羅王東太山經、閻羅王經、閻羅王說免地獄經、閻羅王受記經等があり、又閻羅王思想と地藏信仰との結合したものに、地藏菩薩發心因緣十王經、預修十王生七經等がある。この中、十王經及び十王生七經は唐成都沙門藏川述と署名してあるけれど、その用語を檢して見ると、本邦人の撰述にかゝるやうである。

又佛名經と名けられる經も少くなく、現藏中には西晉竺法護譯の賢劫經千佛名號品を始め、羅什譯の稱揚諸佛功德經三卷、及び同譯と傳ふる千佛因緣經一卷、北魏菩提流支の佛名經十二卷、隋闍那崛多の五千五百佛名神呪除障滅罪經八卷、那連提黎耶舍の百佛名經、失譯の不思議功德諸佛所護念經二卷、過去莊嚴劫千佛名經、現在賢劫千佛名經、未來星宿劫千佛名經、宋施護譯の諸佛經各一卷を收め、又出三藏記集第四失譯雜經錄に諸經佛名二卷、諸經菩薩名二卷、有稱十方佛

名得多福經、三千佛名經、五十三佛名經、三十五佛名經、八部佛名經、十方佛名經、稱揚百七十佛名經、南方佛名經、滅罪得福佛名經、賢劫五百佛名經、現在十方佛名經、過去諸佛名經、千五百佛名經、五千七百佛名經各一卷を列名し、此他に開元僞妄錄等に佛名經三十卷（又十六卷）、大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經三卷、八方根原八十六佛名經等を擧げてゐる。之に依つて諸佛稱名の法が古來盛んに行はれたことを知るのであるが、しかしその多くは失譯經であるから、これも支那撰述が少くないのであらう。就中、三十卷佛名經に關しては、開元僞妄錄に此經は時俗號して馬頭羅刹佛名となす、近代の所集に似たり。乃ち留支所譯の十二卷なるものを取つて錯綜して成す。中に於て諸經の名目を取り、辟支佛の名及び菩薩の名、諸經の阿羅漢の名を取つて以て三寶の次第となす。總じて三十二件あり、三寶を禮して後皆懺悔あり、懺悔の下に仍ほ馬頭羅刹僞經を引いて之を後に置く。その所集の者を尋ぬるに全く是れ庸愚なりと記し、法寶の中に南無法顯傳經（卽ち東晉法顯の旅行記）、僧寶の中に南無富樓那、南無彌多羅尼子（一人の名を二人とす）、南無阿難羅睺羅（二人の名を合して一人とす）を擧げてゐるのを指摘し、その謬妄を論斷してゐる。此の如く明白なる僞經にもかゝはらず、續貞元錄中に之を入藏し、ついで高麗藏に之を上梓し、縮刷及び大正藏經中にも依然として編入してゐるのである　察せざるも甚しいといはなければならぬ。

又此他に善惡因果關係の經として、決定罪福經、華嚴十惡品經、善惡因果經、發問罪福報應經、三障懺悔經、地獄經等があり、世界成立關係のものとして、妙法蓮華經馬明菩薩品、度量天地品、小樓炭經、造立天地經、須彌四域經、須彌像圖山經、天地圖像經等があり、未來記關係のものとして、仁王經、像法決疑經、法滅盡經等があり、卜占關係のものとして、梵天神策經、占察善惡業報經等があり、又攘災延命等の呪術關係のものとして、穢跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門、穢跡金剛禁百變法經、北斗七星護摩祕要儀軌、北斗七星延命經、天地八陽神呪經、七佛所說神呪經、却溫黃神呪經等の數十部がある。これ等の中には譯人の名を記してゐるものもあるけれど、固より皆假托に過ぎぬことは明かである。

蓋し上記の疑僞經は大部分支那撰述に係るのであるが、中には我國に於て製作されたと思はれるものもあり、此の他に又別に本邦撰述の僞經もある。諦忍の空華談叢第二に延命地藏經、虛空藏經、三身壽量無邊經、血盆經、因果經、隨求經、不動經、大梵天王問佛決疑經等は大藏目錄に載せず、請來せる祖師もなく、皆是れ中古日本人の所造なりといひ、又遲飡の寂照堂谷響續集第五に、最勝護國宇賀耶頓得如意寶珠陀羅尼經等の辯才天經は本邦中古杜撰者の造る所なりとし、宇賀は我國の神號なりといつてゐる。又圓珍(?)の入眞言門住如實見講演法華略儀卷上、源信の

作と傳ふる眞如觀等に引用する歸命本覺心法身、乃至還我頂禮心諸佛の偈は、蓮華三昧經の所出とせられてゐる。此經は大日本續藏經中に編入され、具さに妙法蓮華三昧祕密三麼耶經と題し、又無障礙經ともいひ、不空譯と記してあるが、然るにその經旨は日本天台の所謂本覺思想を唱道したものであつて、法華二十八品を八葉諸尊に配し、又前十四品は文殊、後の十四品は普賢を本尊となす等といひ、その所說怪奇にして、中古本邦に於ける好事者の妄作に係るものと認められる。寂照堂谷響集第十には、此經は「智證大師拔二十卷中至要請來云」といひ、智證の請來としてゐるけれど、固より信ずべくもないのである。又無量壽佛名號利益大事因緣經、阿彌陀佛根本祕密神呪經等も亦本邦撰述なるが如く、名號利益經には阿彌陀佛を以て久遠實成本有常住の法身となし、釋迦卽ち彌陀なることを主唱してゐる。これは叡山覺運等の說を承けたのであらうとおもはれる。根本祕密神呪經は前後の文は羅什譯の阿彌陀經と同一であるけれど、執持名號段の前に阿彌陀の大呪及び阿字十方三世佛云云の一偈を加へ、且つ至心に阿彌陀佛を稱念すれば富貴長壽子孫繁榮等を得べきことを說いてゐる。この中、阿字十方三世佛云云の一偈は、阿彌陀の三字を佛法僧の三寶に配當したので、これ亦叡山等に起つた說であるから、此經も日本撰述たることは明かとせなければならぬ。

之を要するに疑僞經論は各時代に、又各地方に於て種種の動機の下に製作されたのであつて、その多くは迷信に渉り、俗信を混入したものであるけれど、亦幽玄なる理致を發揮し、嚴正なる律儀を規定し、支那佛教成立の要素となつてゐるものも少くない。兎に角支那佛教史上に起つた一種の大なる出來事であるから、彼國佛教の成立を究明し、その佛教史を完成せんとするには、是非とも此の暗黑面を照破すべき要があることを改めて提唱するのである。

第七章　支那佛敎の渡來と四十二章經

第一節　支那佛敎初渡の年時に就て

支那佛敎は古來一般に後漢孝明帝の永平年中(五八—七五)に始めて傳へられ、當時攝摩騰等の三藏が來朝して四十二章經を譯出したとなし、之を譯經の嚆矢とするのである。然るに此說は後世に至つて唱へられたもので、確たる文獻の徵すべきものがなく、むしろ佛敎は明帝已前より支那に流傳したものなることが認められるやうである。今先づ佛敎渡來に關する古來の諸說を検討して見やう。

歷代三寶紀第一には秦始皇の時、既に早く西域沙門が經を齎らして來朝したことを傳へ、左の如く記述してゐる。

又始皇時、有諸沙門釋利防等十八賢者、齎經來化。始皇弗從、遂禁防等。夜有金剛丈六人、來破獄出之。始皇驚怖稽首謝焉。

唐法琳の破邪論巻下にもこれと同文を出し、且つ之を釋道安、朱士行等の經錄目に載する所だと言つてゐる。蓋し苻秦釋道安が經錄を撰したことは出三藏記集等に記する所に依つて明かであり、又歷代三寶紀第十五には、古經錄として曹魏朱士行の漢錄一卷を列ね、又同第四等にも之を引用してゐる。共に隋代已前に佚亡した經錄であるが、この中、朱士行の漢錄なるものは後人の僞作と認められるものであるから、その中に如何なることが記載されてあつても信憑するに足らぬ。されど道安の經錄は齊梁代に行はれ、貴重の史料として信用されてゐるのであるから、果してその錄中に如上の記事があつたとすれば頗る注目に値ひするのである。藤田豐八氏の「東西交涉史の研究」には、史記第六秦始皇本紀三十三年の條に「禁不得祠」の語があることを指摘し、不得は佛陀の音寫で、禁不得祠は卽ち佛の祭祀を禁じたことを意味するものであるとし、始皇は神仙の法を信じ、不老不死を求めた人であるから、佛敎の無常觀を嫌ひ、之を禁止したのであらうといひ、又始皇が郡縣を巡狩し、頻りに碑石を立てゝ秦德を頌する銘文を刻せしめたのは、印度阿育王の石柱建立を模倣したものであらうともいつてゐる。佛陀の語は古くは浮屠、浮圖、又は復豆等を以て音寫されたのであるから、不得を佛陀の古音寫と見ることもその理があるといはなければならぬ。又始皇の三十三年卽ち西紀前二一四年は、阿育王が健駄羅及び大夏等に傳道師を派

遣したといはれる西紀前二五〇年より三十七年の後に當るのであるから、如何なる行路を取つたかわからぬにしても、當時大夏等の地方より更に進んで支那本土にまで傳道したものがなかつたとはいへぬ。若し之に依つて秦代に佛敎が傳はり、始皇はその祭祀を禁じたとすれば、上述の記事は卽ち此事を傳へたことになり、頗る重要な意義を生ずるのである。但し法琳等は破邪の立場から往々虛說を構へることがあるので、道安錄所出の說も深くは信用することが出來ぬ。僧祐は專ら彼錄を依用したに拘はらず、此事に關しては一言も觸れて居らぬのであり、また釋利防等の十八人が來朝したといひ、金剛丈六の人があつて獄を破つたといふが如きは、無論後世の浮說と見るべきである。さりながら若しも道安錄、或は朱士行錄に秦始皇云々の記事が一言でもあつたとすれば、それは史記の所謂禁不得祠の語から來たものとせなければならぬ。されば此說も一概に排斥すべきではないが、しかし年代が餘りに古く、殆んど想定に止まり、未だ之を確證すべき史料を見出し得ないのである。

　又史記第一百十匈奴列傳に、前漢武帝元狩二年(西紀前一二一)驃騎將軍霍去病は萬騎を將ゐて隴西より出で、焉支山を過ぐる千餘里にして匈奴を擊ち、胡首虜騎萬八千餘級を得、又休屠王の祭天金人を得たといふ記事がある。魏書第一百十四釋老志等には此の所謂金人を以て佛像となし、佛敎は

前漢武帝代に既に支那に傳へられたものとしてゐる。即ち釋老志に、

案漢武元狩中、遣霍去病討匈奴。至皐蘭、過居延、斬首大獲。昆邪王殺休屠王、將其衆五萬來降。獲其金人、帝以爲大神、列於甘泉宮。金人率長丈餘、不祭祀、但燒香禮拜而已。此則佛道流通之漸也。及開西域遣張騫使大夏。還傳、其旁有身毒國、一名天竺。始聞有浮屠之敎。

といつてゐるのがそれである。蓋し彼の金人を以て佛像となすことは早い時代から起つたことで、後漢明帝が金人を夢みたといふ傳說も、實は此の金人佛像說から來たものと認められるのである。然るに休屠王の地は現今の甘肅省武威縣地方に當り、前漢武帝の世に此等の地方に佛敎が傳播してゐたやうな事實はない。白鳥庫吉氏の「西域史研究」上に收むる「佛敎東漸の傳說」中に此の金人の事を論じてゐるが、それに依ると、氏は先づ前漢成帝(西紀前三二―七)は自分に子がなかつたので、長安の北郊甘泉山の甘泉宮に往つて天を祭り、子を授からんことを祈つた時、楊雄は帝に扈從して甘泉山に至り、勅を受けて甘泉賦一篇を作つたことを說き、而してその賦中に彼の休屠王の金人を詠じて、

金人仡仡、其承鐘虡兮。嵌巖巖其龍鱗。揚光曜之燎燭兮、垂景炎之炘炘。配帝宮之縣圃兮、

象二太一之威神一。

といつたことを擧示し、この金人には龍鱗があり、又太一の威神に象るとあるから、これは北極星を神として祀つたもので、決して佛像などではないと斷言して居られる。洵に先人未發の説で、深く敬意を表すべき所であり、これで休屠王の金人は佛像でないことが判明し、古來の傳説は覆へさるゝことになつたわけである。

但し此の如く休屠王の金人の佛像でないことが判明したにしても、武帝の時既に西域との交通が開け、ついで東西文物の交流が漸く頻繁となつたのであるから、その間佛敎の消息等も亦漸次支那に傳へられたことを認めなければならぬ。卽ち張騫が前漢建元二年(西紀前一三九)武帝の命を受けて長安を發し、大月氏に使せんとして、途次匈奴に抑留せらるゝこと十餘年、後遂に大宛、康居、大月氏に至り、元朔三年(西紀前一二六)を以て歸朝し、ついで元狩四年(西紀前一一九)再び西域に使し、同時に亦その副使をして大宛、康居、大月氏、大夏、安息、印度等の諸國に赴かしめたことは、史記第一百二十三大宛列傳、幷に前漢書第六十一張騫列傳等に記する所である。史記等には佛敎に關して何等記述して居らぬけれど、當時張騫等が多少ともその消息を齎らしたことは想察に難くないのである。弘明集第十二所收の習鑿齒與釋道安書に、

自大敎東流四百餘年、雖藩王居士時有奉者。

と記してゐるが、此の習鑿齒の書は東晉興寧三年（三六五）の日付を有するので、それより四百餘年を溯るとすれば、前漢武帝、若しくは宣帝（西紀前七三―四九）代となるのである。又同所收の桓玄與王令書論道人應敬王事（王令答桓書）にも、「尋大法宣流爲日諒久。年踰四百、歷代有三」といつてゐる。これ等は或は前の金人佛像說に基き、漢武の時を以て佛敎の渡來となしたのかも知れぬが、しかし前漢書第九十六西域列傳には、宣帝の元康元年（西紀前六五）龜茲國王絳賓が支那に入朝し、同五鳳元年（西紀前五七）漢使關都尉文忠が罽賓の使を送つてその國に至り、後元帝、成帝の時にも罽賓と往復があつたことを記錄してゐる。罽賓には早くから佛敎が流傳してゐたのであるから、その文獻等が彼此來往の間に曾て輸入されなかつたとは斷言し得ない。但し弘明集第二所收の晉宗炳の明佛論に、

東方朔對漢武劫燒之說。劉向列仙敍七十四人在佛經。學者之管窺於斯。又非漢明而始也。

といひ、又同第十四所載釋僧祐の弘明論後序にも、

案漢元之世、劉向序仙云、七十四人出在佛經。故知、經流中夏其來已久。

といつてゐるが、これは東方朔は武帝に對して佛敎の所謂劫燒の說を陳べ、又劉向の列仙傳に佛

敎關係の神仙を七十四人も記傳してゐるから、佛敎は漢武の世に旣に傳へられたことを知るべきだとするのである。されど東方朔劫燒の說はその根據明かでなく、又劉向は前漢宣帝元帝等に仕へ、新序、說苑、列女傳等を著はし、哀帝の建平元年(西紀前六)を以て歿した人で、古來列仙傳をその作と傳へてゐるけれど、實は眞撰ではなく、多分魏晉の間に彼の列女傳に模して好事者が假托したものであらうといはれる。されば此等の事を憑據として佛敎の渡來が漢武代に在ることを論定せんとするのは不可といはなければならぬ。又三國志魏書第三十烏丸鮮卑東夷傳の註に引用せる魚豢の魏略には、

昔漢哀帝元壽元年、博士弟子景盧受₂大月氏王使伊存口授₁浮屠經₁。

と記してゐる。これは前漢哀帝の元壽元年(西紀前二)博士弟子景盧(魏書釋老志等には秦景憲)が大月氏に使した時、彼王は王子伊存をして景盧に佛經を口授せしめたことを傳へるのである。魏略は曹魏明帝(二二六—二三九)代頃に編纂された魏史で、佛敎關係の文獻としては最も古いものである。白鳥庫吉氏は「佛敎東漸の傳說」中に此の魏略の記事にも論及し、前漢哀帝代の大月氏國はアフガニスタン Afghanistan の北部、ヒンヅークシユ Hindu-Kush 山脈の北、今のバルク卽ち古への大夏 Bactria の地に都し、後漢光武帝の頃までは尙ヒンヅークシユ山脈の北に居たのである。卽ち紀元

前には印度の地に這入つてゐないのであるから、宗教といへば無論波斯のゾロアスターZoroaster教を奉じ、決して佛教を採り入れて居らぬ。故に元壽元年に大月氏に使した景盧が、彼國の王子から佛經の口授を受けるといふ如き事實は有り得べきでないと斷言してゐる。さりながら大夏は阿育王が傳道師を派遣した與那世界であるから、古くより佛教が流傳したことは否定すべくもなく、隨つて月氏族が西遷してその地に據つた時、當然佛教と接觸し、その影響を受けたことが想像される。たとひ多くの者はゾロアスター教を奉じたとしても、佛教を信ずるものが全く無かつたとは考へられぬ。且つ白鳥氏は特に口授の事を云云し、當時王子が佛教の經典を諳んじてゐる筈もないといはれてゐるけれど、東晉法顯の入竺した時ですら、尙ほ師師口傳して本の寫すべきものがなかつた位で、大乘經は別として、阿含等の經典が久しく唯だ口授口傳されたことは事實である。されば今魏略に口授といふのは却て謬りなき當時の事實を傳へたものといふべく、予は此等の事由に依つて元壽元年景盧受經の說を肯定せんとするのである。

ついで王莽の建國元年(西紀九)に至つて、一時西域との交通を絕つたが、後漢光武帝は再び之を開いたので、爾後亦佛教は支那に流通することになつたのである。後漢書第八十八西域傳に、楚王英は始めて其術(佛教)を信ず　中國これに因つて頗るその道を奉ずるものありといひ、又同第四

十二光武十王列傳に、楚王英は少時游俠を好みて賓客と交通し、晩節更に黃老を喜び、學んで浮屠となりて齋戒祭祀すといひ　且つ永平八年(西紀六五)明帝が詔して天下の死罪に當るものをして、皆縑を納れてその罪を贖はしめた時、英も亦郞中を遣はして黃縑白紈三十匹を奉じ、罪を贖はんことを請うたが、時に帝は楚王は黃老の微言を誦し、浮屠の仁祠を尙び、潔齋三月、神と誓をなす。何の嫌、何の疑かあらん。宜しく贖を還して以て伊蒲塞桑門の盛饌を助くべしと言つたことを傳へてゐる。之に依ると楚王英(永平十四年薨ず)は永平八年已前に既に早く佛敎に歸して優婆塞となり、齋戒祭祀を事としたことを知るべきである。蓋し楚王が如何なる經典を奉じ、又何人に就いて齋戒祭祀の法を受けたか明かならぬけれど、當時何等かの經、何等かの師授が必ずあつたものと見なければならぬ。景盧が大月氏から受けて來たといふ經が果して何であつたかは知る由もないが、しかしその經も亦楚王の見る所となつたのであらう。それにしても單にその一經のみであつたとは思へぬ。後漢書西域傳に楚王英は明帝求法の後、歸佛したやうに記してゐるけれど、明帝の求法は次に論ずるが如く事實でなく、若し又假りに事實としても、楚王の歸佛はそれ已前に起つたものと認められるからである。兎に角佛敎の傳來なくして楚王が突如として歸佛する筈もないのであるから、前漢已來漸次佛敎の消息が傳はつた上に、更に又後漢光武帝頃に何等かの形式に於

て佛教の經典等が支那に齎されたものであらうと推定されるのである。

第二節　攝摩騰譯と傳へられる四十二章經

後漢孝明帝の永平年中、帝が金人を夢み、仍て使を西域に遣して佛教を求め、當時四十二章經が翻傳されたとすることは、四十二章經序、牟子の理惑論、出三藏記集第二、魏書釋老志等の諸書に皆記傳する所であるが、今此說に就いて少しく檢討して見やう。先づ四十二章經序（出三藏記集第六にも收む）の文を擧げて見ると、

昔漢孝明皇帝、夜夢見神人。身體有金色、項有日光。飛在殿前。意中欣然甚悅之。明日問群臣、此爲何神也。有通人傅毅曰、臣聞天竺有得道者、號曰佛。輕擧能飛、殆將其神也。於是上悟、即遣使者張騫、羽林中郎將秦景、博士弟子王遵等十二人至大月氏國寫取佛經四十二章、在第十四石函中。登起立塔寺。於是道法流布、處處修立佛寺。遠人伏化、願爲臣妾者不可稱數。國內淸寧、含識之類蒙恩受賴、于今不絕也。

といつてゐる。此序は何人の撰したものか不明であるが、「昔漢孝明皇帝」と書き出してゐるのを

見ると、後漢當時の作でないことを知るべきである。即ちこれは明帝が神人を夢み、傅毅の言に依つてその佛たることを悟り、仍て使者張騫、羽林中郎將秦景、博士弟子王遵等十二人を大月氏に遣して佛敎を求めしめ、此の四十二章經を寫取して持ち歸つたといふのである。然るに張騫は上に述べた通り前漢武帝の時、西域に使した人であり、羽林中郎將秦景は前記哀帝元壽元年の遣使景盧と關係がある如く、博士弟子王遵も亦博士弟子景盧と相通ずるやうである。すべて此の記事は事實を載錄したものでなく、前漢代に於ける西域の交通幷に佛敎關係の文獻を取り合せたものに過ぎぬと認められる。又牟子の理惑論（弘明集第一所收）にも此の經序の前半と殆んど同文を揭げ、後半の佛經四十二章の次に、

　藏在蘭臺石室第十四間。時於洛陽城西雍門外起佛寺、於其壁畫千乘萬騎繞塔三匝。又於南宮淸涼臺及開陽城門上作佛像。明帝存時、預修造壽陵曰顯節、亦於其上作佛圖像。時國豐民寧、遠夷慕義、學者由此而滋。

と附け加へてゐる。これは當時洛陽城西雍門外に白馬寺を建て、その寺壁に千乘萬騎繞塔三匝の圖を畫き、又南宮淸涼臺及び開陽城門の上に佛像を作り、且つ顯節陵上にも亦佛の圖像を作つたといふので、即ち佛像の造立が當時に於て盛んに起つたとするのである。されど此の記事も他に

之を立證すべき文獻がなく、後世に至つて虛構されたものと認められる。

斯様に經序及び理惑論には張騫等が大月氏に至つて佛經四十二章を寫取したとのみ記し、その翻譯及び三藏の來朝等は述べて居らぬのであるが、然るに南齊王琰の冥祥記（集神州三寶感通錄卷中所引）には、摩騰等の來朝を傳へてゐる。卽ち、

初案南齊王琰冥祥記云、漢明帝夢見神人、形垂二丈、身黃金色、項佩日光。以問群臣。或對曰、西方有神、其號曰佛。形如陛下所夢。得無是乎。於是發使天竺、寫致經像表之中夏。自天子王侯咸敬事之、聞人死精神不滅、莫不懼然自失。初使者蔡愔將西域沙門迦葉摩騰等、齎優塡王畫釋迦倚像。帝重之、如夢所見也。乃遣畫工圖之數本、於南宮清涼臺及高陽門、顯節壽陵上供養。又於白馬寺壁畫千乘萬騎繞塔三匝之像。如諸傳備載。

この記事は前掲の經序及び理惑論に依つたと思はれるのであるが、唯だ使者を蔡愔に改め（王琰が改めたのか、道宣か明かでない）、且つ摩騰等を伴ひ、優塡王の釋迦倚像を齎らしたといふのが新たに加はつたのである。又梁僧祐の出三藏記集第二新集經論錄には、

四十二章經一卷（舊錄云孝明皇帝四十二章。安法師所撰錄闕此經）。

右一部凡一卷。漢孝明帝夢見金人、詔遣使者張騫、羽林中郞將秦景到西域。始於月支國遇

沙門竺摩騰、譯寫此經還洛陽。藏在蘭臺石室第十四間中。其經今傳於世。

と記してゐる。これは月支に至つて竺摩騰に遇ひ、此經を譯寫して洛陽に還つたといふのであつて、卽ち此經を摩騰譯としたのであるが、然しその來朝は之を認めて居らぬやうである。梁慧皎の高僧傳第一には、攝摩騰、竺法蘭の二人が當時使者に伴はれて洛陽に來至したとなし、各その傳を掲げてゐる。卽ち攝摩騰の傳に、

漢永平中、明皇帝夜夢金人飛空而至。……卽遣郎中蔡愔、博士弟子秦景等、使往天竺尋訪佛法。愔等於彼遇見摩騰、乃要還漢地。騰誓志弘通不憚疲苦、冒涉流沙至乎雒邑。明帝甚加賞接、於城西門外立精舍以處之。漢地有沙門之始也。但大法初傳未有歸信、故蘊其深解無所宣述。後少時卒於雒陽。有記云、騰譯四十二章經一卷、初緘在蘭臺石室第十四間中。騰所住處今雒陽城西雍門外白馬寺是也。

といひ、又竺法蘭の傳に、

時蔡愔既至彼國、蘭與摩騰共契遊化、遂相隨而來。會彼學徒留礙、蘭乃間行而至。既達雒陽與騰同止、少時便善漢言。愔於西域獲經卽爲翻譯。所謂十地斷結、佛本生、法海藏、佛本行、四十二章等五部。移都寇亂、四部失本不傳。江左唯四十二章經今見在。可二千餘言。

漢地見存諸經、唯此爲始也。僧又於西域得畫釋迦倚像、是優田王栴檀像師第四作也。既至雒陽、明帝卽令畫工圖寫、置清涼臺中及顯節陵上。舊像今不復存焉。

といつてゐるのがそれである。これは理惑論弁に冥祥記等に依つたものと思はれるが、しかし摩騰の外に竺法蘭も來朝し、且つ法蘭が十地斷結等の五部の經を譯したといふのは、如何なる典據に基いたものか明かでない。歷代三寶紀第四には摩騰は四十二章經、法蘭は佛本行經五卷、十地斷結經四卷、法海藏經三卷、佛本生經二卷、二百六十戒合異二卷を譯したとし、その中、十地斷結經は朱士行漢錄、佛本生經は名僧傳、二百六十戒合異は別錄に見ゆといつてゐる。迦葉摩騰の名は始めて冥祥記に現はれるのであるが、竺法蘭の名はおそらく高僧傳が初見なるべく、これは東晉竺曇無蘭あたりから起つた附會の說であらうと思はれる。就中、二百六十戒合異は、出三藏記集第十一に揭ぐる竺曇無蘭撰の大比丘二百六十戒三部合異を指したものであることは明かであるから、之を今竺法蘭の譯出としたのは二者の混同なることを知るべく、また十地斷結經は東晉竺佛念の譯に係るのであるから、亦竺佛念との混濫もあるものと見られる。斯くて傳說に傳說を產み、遂に明帝の永平十年(西紀六七)を以て支那佛敎初渡の年時となし、當時摩騰法蘭の二人が來朝して四十二章經等を飜傳し、又優塡王所造の釋迦倚像までも齎らしたとし、これを漢地に於ける佛

法僧三寶の始めとして吹聽するに至つたのである。

佛蘭西の東洋學者にして、久しく佛印河內に滯在せし馬思伯樂 H. Maspero 氏は、西紀一九一〇年に漢明帝感夢求經事考證 Le songe l'ambassade de l'empereur Ming, Etude critique des sources（馮承鈞の漢譯あり）一篇を著はし、明帝の遣使求經に關說せる隋代已前の文獻凡そ十三種を採錄し、それに對して一一起盡を明かにし、批判を加へ、且つその所見を發表してゐる。十三種とは一に四十二章經序、二に牟子理惑論、三に吳書（集古今佛道論衡第一所出）、四に化胡經（廣弘明集第九所引）、五に後漢紀卷九、六に後漢書卷一百十八、七に冥祥記（集神州三寶感通錄卷中所出）、八に出三藏記集卷二、九に高僧傳卷一、十に水經注卷十六、十一に洛陽伽藍記卷四、十二に漢法內傳（廣弘明集第一、續古今佛道論衡等所引）、十三に魏書卷一百十四を擧げてゐるのである。この中、吳書は元と吳主孫權の命に依つて韋曜等の撰したものであるが、その後佚亡し、今佛道論衡等に引く所の文は漢法內傳とその記事相類し、決して本書の佚文ではなく、後人が僞造したものである。又劉宋范曄（西紀四四五歿）の後漢書は專ら後漢紀の文に依り、北齊魏收の魏書は高僧傳を抄錄したもので、共に價値なく、史文方面に於ては唯だ東晉袁宏（三二八―三七六）の後漢紀を以て第一史料となすべきだといひ、又牟子の理惑論の記事は、主として四十二章經序に依り、唯だ後段に造寺圖像等の事を新たに加增したまでのものであり、僧祐の出

三藏記集は經序の節抄に過ぎず、西晉王浮の化胡經も亦經序に依つたもので、彼の理惑論の事は知らなかつたやうである。南齊王琰の冥祥記は後漢紀及び理惑論に依り、別に又若干の新事を加へ、酈道元の水經注、東魏楊衒之の洛陽伽藍記は共に冥祥記を抄し、慧皎の高僧傳はその來源廣く、採錄する所一種に止まらず、兼ねて亦冥祥記、牟子の二文を取り、漢法内傳は釋道二敎競爭最烈時代に於ける筆戰の書にして、感夢遣使等の事は皆高僧傳に依り、又若干の異事を增加したもので、全く史料の價値なきものとなし、斯くて十三種の文獻中、唯だ四十二章經序と後漢紀の二文のみが原初的のもので、中にも經序最も古く、後漢紀の文は卽ち彼序より出でたるものであらうと推論してゐる。蓋し馬思伯樂氏は四十二章經を以て後漢代に於ける一種極古の經となし、經の眞なることは必ずしも其序の古きを證明するものにあらずといひ、かの序を二世紀より五世紀に至るの間に作られたものであらうとし、而してこの中に現はれた人物の時代錯誤弁に當時に於ける西域の情勢を論じ、遣使求經の事の到底信ずるに足らざるを痛言してゐる。卽ち、

其於明帝外牽涉之人物、核以他證皆足以見其僞。張騫之死、相距幾有二百年之久。傅毅晚至章帝時始見徵召。秦景之名、或者本於別一時代錯誤。僅有蔡愔、王遵二名不生難題。然前一名應出後來改正、第二名則其人完全不爲人所識。如此種種時代錯誤、皆表露其僞民衆

之傳說。明帝以其西域之勝利而著名、是爲西域自絕六十五年後而復通西域之東漢第一帝。此事已足與初通西域之第一漢使張騫相接近。西域既通、當然承認佛法於明帝時東被中國。（質言之遺忘從前之交際）而視其齎還佛經者、卽爲第一漢使張騫。所以化胡經以漢使在外之年爲十二年。蓋張騫在外十二年也。至若、傅毅得因其曾爲大破匈奴之竇憲之記室而加入。總之皇帝一人、使臣一人、文士一人、皆與西域具有關係者也。人名既不確實、今姑置人名不論。應承認實有遣使之事歟。吾不信有此事也。蓋當是時西域莎車、于闐、匈奴互相攻伐、而在漢兵北征匈奴取伊吾盧地。及班超平定西域（七三年）以前、漢使通過西域、似爲意中必無之事。又況西域平定未久卽叛。七五年時、焉耆、龜茲攻沒都護、悉覆其衆。匈奴、車師亦圍戊己校尉。祇須一讀後漢書卷一一八西域總敍、卽可見其困難。設遣使之事出於一種翔實史料、尚猶有說。乃一種百年後所採之民衆傳說無此性質也。余以爲、此種傳說與秦始皇時西域沙門室利防等齎經來化一說、皆屬故事民話之範圍。或者因魏略所載漢使景憲受大月氏王使伊存口受浮屠經一事、而由民衆之想像、改屬於較哀帝爲著名之明帝。其根據殆在此也。

といつてゐるのがそれである。これは明帝の使者張騫は年代が二百年も前であり、通人傅毅は章

帝の時（一七六一八八）に及んで始めて徵召された人で、年代が後であり、秦景は多分哀帝の遣使景憲との混同であらう。蔡愔、王遵の二人は無難なるも、蔡愔は冥祥記に至つて張騫の代りに登場した人で、最初からの關係者でない。此の如く序中に現はれた者は皆時代錯誤の人物であるのみならず、明帝の代には西域地方騷擾して互に攻伐を事とし、遣使全く不可能の情況に在つたのである。然るに如上の說の起つたのは、明帝は西域の勝利者にして而も著名である所から、卽ち帝を以て、西域と交通を絕つた王莽の建國元年（西紀九）より六十五年後に再び彼れと交通を開いた東漢の第一帝となさんとし、之を彼の交通の第一漢使たる張騫に結び付け、遂に感夢求經の事を附會するに至つたのであつて、すべて皆民間の俗話に過ぎぬ。或は哀帝の元壽元年景憲が大月氏王の王子から浮屠經を受けた事實を改易し、之を哀帝よりも著名なる明帝に擬したものとも見るべきだといふのである。

その所論は精細を極め、大に傾聽に値ひするものがあるが、しかし四十二章經を以て極古の眞經となし、別に彼の經序を後代の作に歸しながら、而も之を明帝求經の最初の文獻として扱つて來たのは果して妥當であらうか。四十二章經は下に論ずるが如く梵莢の譯出ではなく、東晉代に支那に於て撰集されたと認められるもので、若し此の立場よりすれば、彼の經序は經と同時に製

作され、又理惑論は更にその後に於て撰述されたものとならなければならぬ。隨つて經序等は本件の第一史料となるべきでなく、むしろ明帝感夢の事が早くから傳へられてゐたので、それに托して本經譯寫の説を附會したものと見るべきである。年代の判明したものからいへば化胡經が最も古いので、今左に北周甄鸞の笑道論（廣弘明集第九所收）に掲ぐる記文を擧げて見やう。

化胡經曰、迦葉菩薩云、如來滅後五百歳、吾來東遊、以レ道授二韓平子一、白日昇レ天。又二百年以レ道授二張陵一、又二百年以レ道授二建平子一、又二百年以レ道授二千室一。爾後漢末陵遲不レ奉二吾道一。至二漢明永平七年甲子歳一星晝現二西方一。夜明帝夢二神人一、長丈六尺、項有二日光一。旦問二群臣一、傅毅曰、西方胡王太子成道佛號。明帝卽遣二張騫等一、窮二河源一、經二三十六國一至二舍衞一。佛已涅槃。寫レ經六十萬五千言、至二永平十八年一乃還。

この文旨は如來滅後五百年、迦葉菩薩は支那に來つて老子となり、道敎を韓平子等に授けた。後漢末に至つて遂にその道を奉ずるものがなかつたが、時適ま明帝は夢を感じ、張騫等を遣して舍衞國に至らしめ、六十萬五千言の經を寫取し、永平十八年に支那に還つたといふのであつて、卽ち道佛二敎その歸一なることを顯さんとしたものと認められる。化胡經は西晉王浮が法祖と道佛二敎の邪正を爭つた結果、佛を誣謗せんが爲に妄作したのであつて、固より史實に基いたもので

ないことは言を俟たぬ。永平七年張騫を遣はし、十八年に至つて還つたといつてゐるのは、馬思伯樂氏の指摘した如く、張騫が在外十二年にして歸朝したことから考へ付けたのであつて、即ち武帝代の張騫を明帝代に引下げ、種種の虛誕を附加したに過ぎぬ。牟子の理惑論に佛の著はす所の經は凡べて十二部、合して八億四千萬卷あり。その大卷は萬言已下、小卷は千言已上なりといつてゐるのは、今の六百萬五千言を更に擴大したのであらう。斯くて明帝の時に感夢求法の事が起つたとし、且つ當時多大の經が齎されたといふ傳說が早くから流布してゐたので、それに附會すべく遂に四十二章經の撰集を企てたのではないかとおもはれる。後漢紀等に明帝の遣使幷に佛像圖寫の事を記してゐるけれど、譯經の事をいはないのは、此經の撰集が後に至りて起つた爲めと見るべく、兎に角此經を以て最古の眞經となし、又その序を明帝求法の第一史料とするのは甚だ不可とせなければならぬ。

四十二章經は、その經序に張騫等が大月氏國に至つて之を寫取したとのみ記して、何人が譯したともいつて居らぬ。出三藏記集第二新集經論錄には、その劈頭に四十二章經一卷を掲げ、その下に、

舊錄云、孝明皇帝四十二章。安法師所﹅撰錄闕﹂此經﹂。

と註してゐる。之に依ると舊錄には單に孝明皇帝四十二章と題してあつたことを見るべく、又安法師卽ち釋道安の經錄には此經が列ねてなかつたことを知るのである。道安は苻秦建元二十一年(三八五)を以て寂した人で、その經錄中には古異經、失譯經、涼土異經、關中異經、疑經、注經等の別を立て、廣くその當時に現在せし諸經を捜訪檢討して之を分類してゐるのである。然るにその錄中に今の四十二章經が揭げてなかつたといふのは、苻秦建元已前に此經が世に存しなかつたことを證するものと見なければならぬ。

蓋し此經は高麗藏及び宋元明三藏中に收めてあるが、字句は互に出沒あり、特に明藏本には數百字の增加がある。卽ち先づ卷首に、

爾時、世尊既成道已作是思惟、離欲寂靜是最爲勝。住大禪定降諸魔道、今轉法輪度衆生。於鹿野苑中、爲憍陳如等五人、轉四諦法輪而證道果。時復有比丘、所說諸疑求佛進止。世尊敎詔一一開悟、合掌敬諾而順尊勅。爾時世尊爲眞經四十二章。

といひ、最後に又「諸大比丘聞佛所說歡喜奉行」の語を置き、中間の本文にも亦數個所に各數十字が添加せられてゐる。これは此經を一般經典の體裁に准せしめ、且つ經の意味を補足せんと企てたのである。北宋眞宗皇帝の四十二章經御註に如上の文句が既に存するのであるから、その添

加は眞宗已前に行はれたことを知るべく、又宋守遂の四十二章經註、明智旭の四十二章經解に載する本文もこれと亦異同がある。之に依ると此經は宋代已後屢改訂されたことを見るべきである。今高麗藏の本文について之を檢してみると、此經は後漢代の最古の翻譯といはれるにもかゝはらず、その文章は全然譯文と認められず、又その用語もすべて晉代已後の新語に係るやうである。出三藏記集第一前後出經異記に、舊經と新經との用語の相違を對照し、その中に舊經溝港道、新經須陀洹、舊經頻來果、新經斯陀含、舊經不還果、新經阿那含、舊經無著果、新經阿羅漢等と記し、現に安世高の陰持入經、支謙の孛經抄、康僧會の六度集經等に溝港、四溝港、見諦溝港等の語を使用してゐる。然るに今四十二章經には新經の須陀洹乃至阿羅漢の語を用ひて、舊經の溝港道等の譯を擧げて居らぬ。又前引後漢書光武十王列傳には、優婆塞を伊蒲塞、沙門を桑門となし、古譯の體を傳へてゐるのに、此經には優婆塞幷に沙門の新語を專用してゐる。此等は此經が後漢代などの譯出でないことを證するものとすべきである。

此經には四十二章を立て、各章に佛言の語を置き、いづれも簡單に佛敎の要を述べてゐるのであるが、中にも愛欲を斷ずべきことを强調し、之に關する個條が最も多い。一種の金言集と稱すべきもので、諸種の經から拔抄したものなることが先づ感ぜられるのである。卽ち彼の第一章に

親を辭し出家して道を爲すを沙門と名く。常に二百五十戒を行じて四眞道を爲し、行進み志清淨なれば阿羅漢を成ずといひ、又第二章に鬚髪を除きて沙門となり、道法を受けて世の資財を去り、乞求して足るを取り、日中一食、樹下一宿、愼んで再びせずといつてゐるのは、出家沙門の法を説いたもので、呉支謙譯の太子瑞應本起經等に出せる釋尊の出家修行の記事を拔抄したのであらうとおもはれる。第九章に飯食供養の功徳の多少を比較してゐるが、この一段は呉康僧會譯の六度集經第三維藍梵志本生經から抄出したものと認められる。今兩經の文を對照して見やう。

四十二章經	六度集經
佛言、飯凡人百不如飯一善人。飯善人千不如飯持五戒者一人。飯持五戒者萬人不如飯一須陀洹。飯須陀洹百萬不如飯一斯陀含。飯斯陀含千萬不如飯一阿那含。飯阿那含一億不如飯一阿羅漢。飯阿羅漢十億不如飯辟支佛一人。飯辟支佛百億不如以三尊之	如維藍惠以濟凡庶、畢其壽命無日疲懈。不如一日飯一清信具戒之女。……清信女百不如清信具戒男一飯。具戒男百不如具戒女除饉一飯。女除饉百不如飯高行沙彌一人。飯沙彌百不如沙門一人具戒行者。……又如維藍布施之多、逮于具戒衆多之施、不如飯溝港一。溝港百不如頻來一。頻來百不如不還一。不還百不如飯應眞一

敎度其一世二親。敎親千億不如飯一佛學願求佛欲濟衆生也。飯善人福最深重。凡人事天地鬼神不如孝其親矣。二親最神也。	人。又如維藍前施及飯諸賢聖、不如孝事其親。孝者盡其心無外私。百世孝親不如飯一辟支佛。辟支佛百不如飯一佛。佛百不如立一刹守三自歸。……

此の對照に依つて四十二章經の文は六度集經の說を巧みに節略したものなることを見るべく、又孝を最後に置き、凡人は天地鬼神に事ふるよりも其の親に孝なるに如かずといひ、孝を殊更ら重んじたのは、支那の道德思想に逗合せんとするの意なるを察すべきである。又第二十二章に刀蜜の譬喩が揭げてあるが、これは支謙譯の孛經抄の記事から來たのであらう。卽ち

四十二章經	孛經抄
佛言、財色之於人、譬小兒貪刀刃之蜜甜。不足一食之美、然有截舌之患也	譬如有人以蜜塗刀、狗得舐之以傷其舌。坐貪小甜不知瘡痛

第二十三章に揭ぐる妻子牢獄の說は、西晉法炬譯の法句譬喩經第三愛欲品の文を抄略したものと認められる。兩經の文を對照して見やう。

四十二章經	法句譬喩經

佛言、人繋於妻子寶宅之患、甚於牢獄桎梏狼鐺。牢獄有原赦、妻子情欲雖有虎口之禍、已猶甘心投焉。其罪無赦。

卿本以二事故來入此山中。何等爲二、一以妻婦舍宅爲牢獄故。二以兒子眷屬爲桎梏故。卿以是故來索求道、斷生死苦。方欲歸家還著桎梏入牢獄中、恩愛戀慕徑趣地獄。

又第二十六章に魔女降伏の説を擧げてゐるが、これは太子瑞應本起經上卷に掲ぐる降魔の記事を拔抄したものと見られる。即ち

四十二章經

天神獻玉女於佛、欲以試佛意觀佛道。佛言、革嚢衆穢、爾來何爲。以可誑俗、難動六通。去吾不用爾。天神踰敬佛、因問道意。佛爲解釋、即得須陀洹。

瑞應本起經

於是第六化應聲天、天上魔王。……召三玉女、一名欲妃、二名悅彼、三名快觀。使壞菩薩意。……菩薩答曰、……汝輩亂人正意、非清淨種。革嚢盛屎、而來何爲。去吾不用汝。其三玉女化成老母、不能自復。……魔王自前、與佛相難詰。云云

之に關し馬思伯樂氏は後漢書第三十下襄楷傳に載する桓帝延熹九年（一六六）の上表文に、

天神遣以好女。浮屠曰、此但革嚢盛血。遂不眄之

と記し、その註に今の四十二章經の革囊衆穢の文を引いて之を典據としてゐるので、即ち此の語を以て四十二章經から取つたものとなし、之を此經が極古の眞經たる證左として取扱つてゐる。瑞應本起經は吳黃武年間（二二二—二二八）に譯されたものであるから、延熹の頃襄楷の見る所とならず。康孟詳の修行本起經も獻帝建安中（一九六—二一九）の譯であるから、これ亦彼れの知る所でなく、さし當り四十二章經がそれに當てはまるわけではあるが、しかし此の一事を以て此經を桓帝代にまで溯らしめんとするのは甚だ危險の事といはなければならぬ。彼の上表には「或言、老子入夷狄爲浮屠」といひ、又「浮屠不三宿桑下」とも書いてあるのであるが、上にも一言した如く般若空經の未だ傳はらざる已前に、果して道佛二致の調和を意味する老子化胡の說が起つてゐたか否か甚だ疑はしく、また四十二章經には前記の如く樹下一宿とあるのに、いま三宿せずといふのは如何なる典據に依つたものか。桓帝代には安世高の修行道地等の譯經があつたのみで、佛傳關係のものは無い筈であるから、或はこの二三の記事は後人の加筆にかゝるものか。それとも前漢已來齎されたものに此種の經があつた爲か。必ずその孰れかであらう。

第二十九章に女人を視ば姉妹と觀ずべしとの說があるが、これは西晉竺法護の生經第一分衞比丘經、幷に康孟詳の修行本起經卷下等に依つたものと思はれる。即ち

四十二章經

佛告諸沙門、愼無視女人。‥老者以爲母、長者以爲姊、少者爲妹、幼者如子、敬之以禮。意殊當諦惟觀自頭至足自視內彼身何有、唯盛惡露諸不淨種。

生經

佛經曰、目見好色婬意爲動。又世尊曰、雖視女人長者如母、中者如姊、少者如妹如子如女。當內觀身念皆惡露無可愛者、外如畫瓶中滿不淨。

又第三十一章に掲ぐる斷陰の記事は、これまた法句譬喩經第一教學品の説に基いたものであることは明かである。即ち

四十二章經

佛言、人有患婬情不止、踞斧刃上以自除其陰。佛謂之曰、若斷陰不如斷心。心爲功曹、若止功曹從者都息。邪心不止斷陰何益。斯須卽死。

法句譬喩經

時有一年少比丘、爲人頑愚、質直疎野未解道要。情意輿盛思想於欲、陽氣隆盛不能自制。‥‥即至檀越家從之借斧、還房閉戸脫去衣服、坐木板上欲自斫陰正坐。‥‥佛告比丘、卿何愚癡不解道理。欲求道者先斷其癡、然後制心。

第三十六章に離三惡道等の九難を擧げてゐるのは、雜譬喩經の十八難説を拔抄したものと認め

られる。即ち

四十二章經

佛言、夫人離三惡道得為人難、既得為人去女即男難、既得為男六情完具難、六情已具生中國難、既處中國值奉佛道難、既奉佛道值有道之君難、生菩薩家難、既生菩薩家以心信三尊值佛世難。

雜譬喩經

有十八事、人於世間甚大難。一者值佛世難、二者正使值佛成得為人難、三者正使得成為人在中國生難、四者正使在中國生種姓家難、五者正使在種姓家四支六情完具難、六者四支六情完具財產難、七者正使得財產善知識難、八者正使得善知識智慧難、九者正使得智慧善心難、十者正使得善心能布施難、十一者正使能布施欲得賢善有德人難、十二者正使得賢善有德人往至其所難、十三者正使至其所得宜適難、十四者正使得宜適受聽問訊說中正難、十六者正使得中正解智慧難、十七者正使得解智慧能受深經種種難。是為十八事。（第十八闕）

又第三十七章に死想の說を擧げてゐるが、これは恐らく姚秦羅什譯の大智度論第二十二の記事に依つたのであらう。即ち

四十二章經

大智度論

佛問諸沙門、人命在幾間。對曰在數日間。佛言、子未能爲道。復問一沙門、人命在幾間。對曰在飯食間。佛言、子未能爲道。復問一沙門、人命在幾間。對曰呼吸之間。佛言、善哉、子可謂爲道者矣。

如佛爲比丘說死想義、有一比丘偏袒白佛、我能修是死想。佛言、汝云何修。比丘言、我不望過七歲活。佛言、汝爲放逸修死想。有比丘言、我不望過七月活、有比丘言七日、有言六五四三二一日活。佛言、汝等皆是放逸修死想。有言從旦至食時。有言一食頃。佛言、汝等亦是放逸修死想。一比丘偏袒白佛、我於出氣不望入、於入氣不望出。佛言、是眞修死想、爲不放逸。

此他の諸章も皆經論から拔抄したものであらうが、今一一その典據を搜査するに遑がない。兎に角如上の對照に依つて此經の記載は三國時代已後に譯出された諸經中より、主として實踐修道に關する金言的訓條を拔抄したものなることを知ることが出來やう。既に此の如く拔抄された典據までが概ね明了になつたとすれば、最早や此經は摩騰等に依つて傳譯されたものでなく、支那撰述たることは極めて明かとせなければならぬ。その作者は勿論、製作年代も不明であるが、道安錄に列名して居らぬのを見ると、その年代は大體苻秦已後に在るといふべく、又死想の說が果して大智度論に依つたとすれば、更に同論の譯時たる姚秦弘始七年（四〇五）已後にまで下らなければ

ならぬ。但し此經はその序に唯だ大月氏國に至つて佛經四十二章を寫取すとのみ記して翻譯の事をいはず、又僧祐已前の舊錄には孝明皇帝四十二章とのみ題してあつたのであるから、元と梵莢の翻譯として發表された所謂疑僞經ではなく、佛語を撰集して修道の料に資せんと企てた一種の抄經と名くべきものと思はれる、攝摩騰の名は南齊王琰の冥祥記に始めて現はれるのであるから、摩騰譯出の說はおそらく宋齊代に至つて唱へ出されたのであらう。出三藏記集第四失譯雜經錄中には、別に五十二章經一卷を揭げてゐるが、これ亦今の佛經四十二章に倣つて更に佛語を抄錄したのであらう。

因みに牟子の理惑論(弘明集第一所收)に就いて略して述べて見ると、此書は儒佛道三敎の異同優劣を論衡し、且つ僧儀に關して辯難したものであつて、すべて三十七章を分ち、問答體に記述してゐる。その第二十一章に四十二章經序と殆んど同文を載し、且つ之に造寺圖像の記事を附加してゐることは前に擧げた通りである。牟子は彼書の初にその經歷を敍し、後漢靈帝の崩後天下擾亂し、仍て母と共に世を交趾に避け、年二十六にして蒼梧に歸りて妻を娶り、屢官に就かんことを勸められたが之を辭し、後母の喪に會ひ、志を佛道に專にし、兼ねて老子五千文を研き、遂に理惑論を著したといつてゐる。これは此書を後漢代の作とするのであるから、隨つてその中に關說せる四

十二章經も亦後漢代に存したことになつて來るのであるが、然るに三敎の論衡の如きは、佛敎の敎理が可なり識者の注意に上つた後始めて起るべき問題であつて、桓帝靈帝の時は安世高、支讖等の二三の三藏が多少の經を譯出したに過ぎず、それに對する研究も未だ始まつて居らぬぐらゐであるから、道儒一致との論衡が起つたとするのは餘りに尙早であり、且つ來朝の僧も甚だ少く、その剃頭出家棄妻無後等が問題となり、乃至夷夏論までも唱道されたとは到底考へられぬ所である。のみならず此書中にも亦三國時代已後の譯出に係る經文を引用した個所が少くないのであるから、その製作年代は遙か後世に降るものと認めなければならぬ。

卽ち彼の第一章に記載せる佛傳の中に、白淨王の夫人が六牙の白象を夢み、佛は四月八日誕生、十九出家すとし、その乘馬を犍陟、奴を車匿と名けるといつてゐる如きは、吳支謙譯の太子瑞應本起經に依つたのであり、佛の泥洹を二月十五日としたのは、疑ひもなく東晉法顯譯の大般泥洹經の說を受けたのである。又第十六章に須大拏太子の本生に就いて論說してゐるが、これ亦吳支謙譯の六度集經第二須大拏經の記事から來たのであり、その他、八十種好、十二部經、二百五十戒、三十七品等の說は、皆晉代已後の諸經律から取つたものと認められる。又彼の第十七章に

今沙門耽好酒漿、或畜妻子、取賤賣貴、專行詐紿。此乃世之大僞。

と歎じてゐるが、これは東晉已後一部僧侶の間に行はれた墮落相について記したのであつて、後漢代に斯から飲酒畜妻の沙門があつたとは思へぬ。出三藏記集第十四に羅什が姚興に逼られて妓女に接したことを傳へ、北史第九十三北涼列傳に、曇無讖が鄯善王の妹曼頭陀林に通じ、又婦女子に男女交接の術を敎授したといひ、又魏書釋老志には北魏太武帝が長安に至り、適ま僧徒の非行を見て大に怒り、遂に破佛を斷行するに至つたことを叙し、左の如く記してゐる。

會蓋吳反杏城、關中騷動。帝乃西伐至於長安。先是長安沙門種麥寺內、御騶牧馬於麥中。帝入觀馬、沙門飲從官酒。從官入其便室、見大有弓矢矛楯、出以奏聞。帝怒曰、此非沙門所用、當與蓋吳通謀規害人耳。命有司案誅一寺、閱其財產大得釀酒具。及州郡牧守富人所寄藏物蓋以萬計。又爲屈室與貴室女私行婬亂。

これに依ると東晉代には一部の間に僧風の頽敗してゐたことを知るのである。今の理惑論の記事はおそらく此の時代に起りつゝあつた事實を見聞して、之を指彈したのであらう。

その製作年代は不明であるが、四十二章經と關聯のあるものなることは言ふまでもなく、若し彼經を大智度論の譯時たる姚秦弘始七年(四〇五)已後の撰集とすれば、此論は更にその後の撰述となり、又此論に揭ぐる佛二月十五日涅槃說が法顯の大般泥洹經に依つたとすれば、更に亦その年代

は同經の譯時たる東晉義熙十四年（四一八）已後に降らなければならぬ。但し出三藏記集第十二所載の宋明帝勅中書侍郎陸澄撰法論目錄に、牟子（一云蒼梧太守牟子博傳）の名が列ねてあるのであるから、劉宋明帝（四六六―四七二）已前に既にその書が世に行はれてゐたことは明かである。常盤大定氏の「支那に於ける佛教と儒教道教」には、明帝泰始三年（四六九）道士顧歡が夷夏論を撰して佛教を斥破したのに對し、治城寺慧通が之を反駁した駁夷夏論の中に、理惑論と殆んど同一語句が　個所もあることを指摘し、彼論は慧通の作ではないかといふ說を提唱してゐる。惟かに一種の發見ではあるが、しかし陸澄と時代が餘りに接近し、たとひ慧通が牟子の名を借りたとしても、陸澄が何の勘査も加へずに、直にそれを勅撰の法論目錄中に編入したとは考へられぬ。矢張りこれは當時行はれて居つた理惑論を慧通が引用したと見るべきものであらう。兎に角此論は四十二章經と共に後漢代の作などに歸すべきものでなく、劉宋の初頃に好事者に依つて假托されたものとすべきである。

第八章　道教并に俗信關係の疑僞經

第一節　四天王經及び三品弟子經

佛教が支那に傳來するに及んで道儒二教と衝突し、ついで又一面に於て調和の傾向を生じ、爲に幾多の疑僞經が製作されたことは前に述べた通りである。中にも道教は廣く民間に流行してゐたので、弘教の方便としてその思想を取り入れ、爲に佛教中に少からざる道教的迷信を混入するに至つた。

四天王經は單なる一卷の經で、諸目錄に皆劉宋元嘉四年(四二七)智嚴、寶雲の共譯したものとしてゐる。然るに此經に元と失譯の異本があつたことは、出三藏記集第四失譯雜經錄有本錄中に四天王經一卷、四天王案行世間經一卷の二部を揭げ、又同闕本錄に四天王經四卷の經名を出し、その下に疑一部四本と註してゐる。若し此註に依つて四卷經は別の異經でなく、唯だ彼の一卷經を四本合綴したまでのものとすれば、智嚴譯以外に失譯經が二部あつたことになり、若し又四卷經が

別の異本であつたものとすれば、凡べて四部あつたことにもなるのである。又有本錄の四天王經の註に、後有レ呪似二後人所附一と記してゐるのに依ると、後人が經の後に呪を附加した本もあつたことを知るのである。蓋し四天王經は元と長阿含忉利天品の抄出であつて、大智度論第十三に既に引用されてゐる。隨つてその中に道敎思想が含まれてゐるわけもないのであるが、それが今現存の經に含まれてゐるのは、智嚴等が翻譯の際に加筆したか、若しくは現存のものは智嚴等の譯でなく、他の失譯經が傳つたかでなくてはならぬ。兎に角龍樹時代の經とは異なつたものとすべきである。

此經には道敎の根本思想たる現在一世の善惡の行爲に由つて人の年壽の長短が定まるといふ說を記述してゐる。卽ち

佛告二諸弟子一。愼二汝心念一、無レ受二六欲一。漱レ情去レ垢、無レ求爲レ首。内以淸淨、外當レ盡レ孝。……壽命猶レ電、恍惚卽滅。齋日責レ心、愼レ身守レ口。諸天齋日伺二人善惡一。須彌山上卽第二忉利天。天帝名因、福德巍巍典二主四天一。四天神王卽因四鎭王也。各理二一方一。常以二月八日一遣二使者一下、案二行天下一、伺二察帝王臣民龍鬼蜎蜚蚑行蠕動之類心念口言身行善惡一。十四日遣二太子一下、十五日四天王自下、二十三日使者復下、二十九日太子復下、三十日四王復自下。四王下者、日月五星二十

八宿、其中諸天僉然俱下。四王命曰、勤伺衆生施行吉凶。若於斯日歸佛歸法歸比丘僧、淸心守齋、布施貧乏、持戒忍辱精進禪定、翫經散說開化盲冥、孝順二親、奉事三尊、稽首受法、行四等心、慈育衆生者、具分別之以啓帝釋。若多修德精進不怠、釋及輔臣三十三人僉然俱喜。釋勅伺命增壽益算。遣諸善神營護其身。隨戒多少、若持一戒令五神護之、五戒具者令二十五神營衞門戶。殃疫衆邪陰謀消滅、夜無惡夢、縣官盜賊水火災變終而不害、禳禍滅怪。唯斯四等五戒六齋、猶如大水而滅小火。豈有不滅者乎。臨其壽終迎其魂神、上生天上七寶宮殿。無願不得。

と說いてゐるのがそれである。これは天帝釋卽ち因陀羅の四鎭王たる四天神王、幷にその太子及び使者等は六齋日に天下を案行して人の善惡を伺察し、忉利天に上りて之を天帝釋に啓す。帝釋は卽ちその日に於て三寶に歸し、心を淸め齋を守つた者には、伺命をして壽を增し算を益さしめ、且つ善神を遣してその身を營護せしめるといふのである。斯樣に目前の行爲によつて人の壽算が增減するとするのは、卽ち道敎の思想であつて、抱朴子等の夙に唱へた所である。抱朴子內篇第六に依ると、

按、易內戒及赤松子經、及河圖記命符皆云、天地有司過之神、隨人所犯輕重以奪其算。算

減則貧耗疾病、屢逢二憂患一。算盡則人死。諸應レ奪レ算者有二數百事一、不レ可二具論一。又言、身中有二三尸一、三尸之爲レ物、雖レ無レ形而實魄靈鬼神之屬也。欲レ使二人早死一。此尸當レ得レ作レ鬼。自放縱遊行饗二人祭酹一。是以每レ到二庚申之日一、輒上レ天白二司命道人所爲過失一。又月晦之夜、竈神亦上レ天白二人罪一。大者奪レ紀、紀者三百日也。小者奪レ算、算者三日也。

といつてゐるが、この中、天地に司過の神あり、人の犯す所の輕重に隨つて其の算を奪ふといふのは、人の年壽の長短を以て罪過の輕重に歸する說で、彼の四天王經の益算說は唯だ之を肯定的にいひ顯したに過ぎぬ。又三尸及び竈神が天に上つて人の罪狀を白すといふのは、四天神王が天下を案行し、還つて之を帝釋に啓すといふのと同趣旨であり、特に二者共に伺命の名を用ひ、又益算等の語が一致することも、慥にその間に聯絡のあつたことを語るものと見るべきである。但し四天王案行の說は、本と長阿含經第二十に揭げてあるので、今の四天王經の記事が大體彼說から來たものであることは明かであるが、然し彼經には四天王等が三齋日に天下萬民の孝不孝、齋不齋等を觀察して、不孝等の者多ければ諸天衆の減損、阿修羅衆の增益として愁ひ、孝順等の者多ければ阿修羅衆の減損、諸天衆の增益として喜ぶことを述べてゐるだけで、益算奪算のことには一言も及んでゐない。大智度論第十三に引用せる四天王經の文も亦之と同說であるのを見ると、

伺命減算等の說は支那に於て新に附加したものと認めなければならぬ。然るに此經の作者は此等の思想が佛敎にも存することを指摘し、左の如き說を揭げてゐる。

拘留秦佛時、人壽六萬歲。民性無爲、護ㇾ彼猶養ㇾ己、平等無ㇾ二。彼佛去ㇾ世正法衰薄、民無㆓正行㆒、以ㇾ漸爲ㇾ惡其壽日減至㆓于百歲㆒。吾善逝後、民違㆓佛敎㆒無㆓復孝子㆒、伺命減ㇾ算。壽日有ㇾ減。天神不ㇾ祐。凶疫惡鬼、日來侵害。

これは人民に正行なく漸次惡を作つたからして、彼の拘留秦佛時代の人壽六萬歲が次第に減じて遂に百歲になつたのだといふので、卽ち減算の說が元と佛敎にも存することを明かにし、以てその道敎から導かれたことを掩はんとしたものと認められる。

又三品弟子經は一卷の經で、歷代三寶紀第五、開元錄第二等には之を吳支謙の譯となし、出三藏記集には失譯雜經錄に編してゐる。此經は優婆塞優婆夷に上中下三輩の別があることを說いたもので、卽ち五戒を受持して毛髮ばかりも犯せず、且つ菩薩の心を發するものを上輩となし、五戒を受持して犯せざるも、般若大乘の法を聞かざるを中輩とし、五戒を受くるも悉く之を毀犯するものを下輩となし、而して下輩の下に、

是優婆塞優婆夷雖ㇾ爲㆓度人㆒、不ㇾ見㆓般若波羅蜜㆒、不ㇾ解㆓漚恕拘舍羅㆒。是爲㆓盲冥專行㆒小道㆒、或敎

人作ㇾ福、無㆓四等心㆒施不㆓普及㆒、請ㇾ彼置ㇾ此道法不ㇾ使。爾時四天王太子使者護佛道神、一一記ㇾ之、稍稍去離ㇾ之。勅㆓伺命㆒計㆓集積㆓累其罪條㆒、疏㆓名錄㆒白㆓上帝㆒。年壽未ㇾ盡、頓遣㆓惡神㆒、因㆓其犯戒㆒之間奪㆓其餘命㆒、自然墮㆓落泥犁中㆒。

といつてゐる。これは五戒を犯ずる下輩の人は、明師賢者を憎謗し、たとひ人を度するも般若と方便とを解せず、四等心なきが故に施福も普及せざれば、四天王等は案行して一一その罪條を記し、伺命をして之を計集せしめて上帝に申告し、その餘命を奪つて地獄に墮落せしめるといふのであつて、前の四天王經の說と同一趣旨なるを見るべく、特に二者共に四等心及び五戒を擧げてゐるのは、その間に聯繫のあつたことを證するものとすべきである。

又大阿彌陀經、平等覺經及び無量壽經の五惡段にも之と同一思想が現はれてゐる。此の一段には殺生、偸盜、邪婬、兩舌惡口妄言綺語及び飮酒等の五惡を捨てゝ五善を行ずべきことを說いてゐるのであるが、その中、大阿彌陀經五惡段の總說の下に、

降㆓化其心㆒令ㇾ持㆓五善㆒、得㆓其福德度世長壽泥洹之道㆒。

といひ、又五惡の一一の下にも、

一心制ㇾ意端ㇾ身正ㇾ行、獨作㆓諸善㆒不ㇾ爲㆓衆惡㆒者、身獨度脫得㆓其福德㆒、可ㇾ得㆓長壽度世上天泥洹之

道。

と言つてゐる。之に依ると五惡を捨てゝ五善を持せしめるのは、福德長壽度世上天泥洹の道を得しめんが爲なることを知るべく、而して此說は彼の四天王經に、

華色奕奕、壽命益長。生不更牢獄、死得上生天上。福德所願自然飛行、存亡自在。……逢佛値法、賢聖相連。力行不與罪會、必得泥洹。斯皆五戒十善歛情攝欲、六齋使然。

と記してゐるのに善く合致することを見るのである。されば此の五惡の一段は四天王經と同一思想を說示したものといはなければならぬ。のみならず亦その中に「今世爲惡天神別籍」といひ、「神明記識犯之不貰」といひ、「神明記取、諸神攝錄」といひ、「有其名籍在神明所」といつてゐるが、これは彼の四天王等が六齋日に天下を案行して一一人の罪條を記取し、その名籍を造るといふの義に解すべきであり、又、

惡逆天地不從人心、道德非惡先隨與之、恣聽所爲、其壽未至、便頓奪之下入惡道。

といふのは、三品弟子經の奪命說と同一であつて、共に抱朴子の奪算說を受けたものであることは明かである。又無量壽經の五惡段には、

今世爲惡福德盡滅、諸善鬼神各去離之。身獨空立無所復依。

と說いてゐるが、これは五善を持するものには善神の擁護があることを意味するもので、前引四天王經の二十五善神衞護の說と同一なるを見るべきである。之に依ると五惡段の說は四天王經及び三品弟子經と同一趣旨であつて、多分に道敎思想が取り入れられたものなることを認めなければならぬ。蓋し此の五惡の一段は無量壽經の異譯なる大寶積經無量壽如來會、大乘無量壽莊嚴經、幷に現存の梵本及び西藏譯本には共にその文なく、唯だ上記大阿彌陀經等の三部にのみ存するのである。この中、大阿彌陀經は吳支謙の譯、平等覺經は曹魏帛延、若しくは西晉竺法護の譯で、若し此の二經に最初から彼の五惡段があつたとすれば、その文は旣に三國時代に添加されたものといふべく、又無量壽經は劉宋寶雲の譯と認定されるのであるが、その中の五惡の文も大體この二經と同一であるから、卽ち寶雲は彼經に依遵してその文を複載したものと見るべきである。但し三品弟子經も三寶紀等に吳支謙譯と傳へてゐるのであるから、或は支謙が彼の五惡の文を作つたのかも知れぬが、それにしては時代が聊か早過ぎる觀がある。出三藏記集には三品弟子經を失譯としてゐる。されば今の五惡段も東晉代頃に或る好事者が製作し、之を前二經に追補したのではないかともおもはれる。

第二節　提謂經、淨度三昧經、十往生經

提謂經は現藏には入藏されて居らぬが、提謂波利經と稱し、北魏曇靖の撰述に係るのである。卽ち出三藏記集第五疑經僞撰雜錄に、

提謂波利經二卷。（舊別有提謂經一卷）右一部、宋孝武時北國比丘曇靖撰、

と記してゐるのがそれである。但し今の註に舊別に提謂經一卷ありといひ、又同第四失譯雜經錄闕本錄に提謂經一卷を擧げてゐるのを見ると、古くは別に一卷經があつたことを知るのである。此經は今傳つて居らぬけれど、天台の仁王護國般若經疏を始め、道世の法苑珠林、諸經要集等の諸書に引用されてあるので、大體その說を知ることができる。卽ち五戒を以て天地の根、衆靈の源となし、之を五行五常等に配してその受持を勸め、又月六齋の外に年三長齋の說を唱へ、齋戒を嚴守すべきことを說いたもので、前の四天王經及び三品弟子經の思想を更に强調したものと認められる。その中、五戒に關しては、仁王護國般若經疏第二所引の文に、

提謂波利等問佛、何不爲我說四六戒。佛答、五者天下之大數。在天爲五星、在地爲五嶽、

在人爲五臓、在陰陽爲五行、在王爲五帝、在世爲五德、在色爲五色、在法爲五戒。以不殺配東方。東方是木、木主於仁、仁以養生爲義。不盜配北方。北方是水、水主於智、智者不盜爲義。不邪淫配西方。西方是金、金主於義、有義者不邪淫。不飮酒南方。南方是火、火主於禮、禮防於失也。以不妄語配中央。中央是土、土主於信。妄語之人、乖角兩頭不契中正。中正以不偏乖爲義也。

といつてゐるが、これは五戒を以て仁義禮智信の五常に配し、又之を五行等の說に合したので、卽ち儒佛二敎を調和し、以て庶民信仰を打建てんことを企てたものといふべきである。次に三長齋に關しては、法苑珠林第八十八所引の文に、

佛言、四時交代、陰陽易位、歲終三覆八校、一月六奏。三界皓皓、五處錄籍。衆生行異、五官典領、校定罪福、行之高下、品格萬途。諸天帝釋、太子使者、日月鬼神、地獄閻羅、百萬神衆等、倶用正月一日五月一日九月一日四布案行、帝王臣民、八夷飛鳥、走獸鬼龍行之善惡知。與四天王月八日十五日盡三十日所奏同無不均、天下使無枉錯。覆校三界衆生罪福多少、所屬福多者卽生天上。卽勅四鎭五羅大王司命增壽益算。下閻羅王、攝五官除罪名定福祿故、使持是三長齋。是故三覆。八校者八王日是也。亦是天帝釋、輔鎭五羅四王、地獄王、阿

須輪諸天、案行比校、定生注死增減。罪福多少、有道意無道意、大意小意、閒解不閒解、出家不出家、案比口數皆用八王日。何等八王日、謂立春春分、立夏夏至、立秋秋分、立冬冬至、是爲八王日。天地諸神陰陽交代故、名八王日。月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日皆是天地用事之日。上下弦、望朔晦、皆錄命上計之日。故使於此日自守持齋、以還自校使不犯禁。自致生善處。

といつてゐる。これは四天王等は月の六齋日に天下を案行して人の善惡を伺察し、その都度之を帝釋に奏上するのみでなく、正月一日五月一日九月一日にも亦天下を案行して三界のあらゆる衆生の行爲を檢分し、又立春春分、立夏夏至、立秋秋分、立冬冬至の八王日に於て更にその罪福の多少を覆校し、謂ゆる一月六奏、三覆八校してすべて冤罪なからしめ、福多きものは司命等をして增壽益算せしめ、又閻羅王をしてその罪名を除き福祿を定めしめるのであるから、六齋日の外に別に亦正月五月九月の三ヶ月は各三十日を通じて八齋戒を持し、その身を愼むべきだといふのである。即ち四天王經の一月六奏に更に三覆八校を加へ、之を三長齋の所由としたのである。蓋し三長齋の說は梵網經卷下、灌頂經第一、藥師經等にも之を擧げ、又出三藏記集第十二法苑雜緣原始集目錄には、「歲三長齋緣記、出正齋經」と記してゐる。之に依ると三長齋の行事は宋齊代

に廣く行はれたことを知るべく、今の提謂經の三種の説も之に基いたのであらうが、兎も角支那思想なることは疑ひを容れぬ。續高僧傳第一曇曜傳の下に、

又有二沙門曇靖者一、以レ創二開佛日一、舊譯諸經並從二焚蕩一、人間誘導憑准無レ因、乃出二提謂波利經二卷一。意在二通悟一、而言多二妄習一。故其文云、東方泰山漢言二代岳一、陰陽交代故謂二代岳一。出二於魏世一乃曰二漢言一、不レ辯二時代一。斯一妄也。太山即此方言、乃以二代岳一譯レ之。兩語相翻不レ識二梵魏一。斯二妄也。其例甚衆具在二經文一。尋レ之可レ領。

と記してゐるが、魏武の破佛に依つて諸經が焚蕩したので、庶民誘導の爲に曇靖が此經を作つたことはその意諒とすべきも、幾多の迷信を混入し、後世の大家までも惑はしめたことは、その過輕からずといはなければならぬ。

又淨度三昧經も入藏されて居らぬが、出三藏記集第四失譯雜經錄にその名を掲げて二卷となし、又同第五抄經錄には抄淨度三昧經四卷、淨度三昧抄一卷の二部を列ねてゐる。此經は北魏曇曜の製作したものであつて、歷代三寶紀第三北魏文成帝和平三年(四六二)の條に、

昭玄沙門曇曜欣二三寶再興一、遂於二北臺石窟寺一躬譯二淨度三昧經一卷、付法藏傳四卷一。流二通像法一也。

と記し、又續高僧傳第一曇曜の傳にも「於北臺石窟集諸德僧、對天竺沙門、譯付法藏傳幷淨土（土は度の寫誤）經」と記してゐるのである。大日本續藏經第八十七套にその第一卷を收め、又經律異相、諸經要集、法苑珠林、幷に安樂集、觀念法門等にその佚文を擧げてゐるので、ほゞその所說を知ることが出來る。卽ち法苑珠林第六十二所引の文に、

淨度三昧經云、八王日、諸天帝釋鎭臣三十二人、四鎭大王、司命司錄、伍羅大王、八王使者、盡出四布覆行。復値四王十五日三十日所奏、案校人民立行善惡。地獄王亦遣輔臣小王、同時俱出、有罪卽記。前齋八王日犯過、福强有救。安隱無他、用福原赦。到後齋日重犯罪數多者減壽、條名剋死歲月日時、關下地獄。地獄承文書、卽遣獄鬼持名錄名。獄鬼無慈、死日未到、强催作惡令命促盡。福多者增壽益算。天遣善神營護其身、移下地獄拔除罪名、除死定生後生天上。

といつてゐるが、これは八王日に諸天帝釋四天王、乃至八王使者等が總出で、天下を案行して人の善惡の行爲を伺察し、兼ねて六齋日の奏上及び地獄王の奏する疏記に就いて覆校を加へ、前齋八王日に赦されたものも、後齋の日に至つて犯罪多ければその壽を減じ、死日を定めて之を地獄に通告すると、無慈の獄鬼は死日未だ到らざるに、その命を奪つて地獄に投ずるといふので、死

に對する感想の深刻化が見られるのである。又續藏經所載の第一卷には、閻羅王は總じて一百三十四地獄を典主し、又平湖等の三十王は阿鼻已下の三十地獄を分治す等といひ、その下に、

凡人無戒、復無七事行者、死屬地獄、爲五官所司。錄命屬地獄天子、天子名閻羅、典主佛界。諸天人民、鬼神龍、飛鳥走狩、皆盡屬天子。小王有八王、復有扶容王三十國。扶容王各復有小統九十六國。各各所主不同。復有外監五官都督、司察司錄、八王司者司簿等。與伏夜大將軍都官閻騎承天帝符、與五道大王共於八王日風行覆司。案行諸天人民夷狄雜類鳥狩、以知善惡、分別種類。若干億萬里數分部疆界所屬、司徴君王臣民、疏善記惡以奏上扶容。扶容王轉奏八王、八王復轉奏大王、大王奏天子。人民所犯凡二十事、最重者失身、死不復生。遂墮三塗永以不廻。……犯是二十事者、今現世不利。當爲諸天地獄所司。神明聽察疏記罪福、不分尊卑。一月六奏、一歲四覆。四覆之日皆用□□一日。八王日者、天王案比諸天人民雜類之屬、考校功最、有福增壽、有罪減壽奪算

といつてゐる。大體上の提謂經と同一趣旨であるが、但だ此經には三長齋の說を出さず、八王日案校のみを說くが故に、從つて三覆八校の說なく、たゞ一月六奏一歲四覆とした點が異なるのである。二經殆んど同代の作であつて、その先後を詳かにするを得ないが、一歲四覆よりも三覆八

校の方が整頓し、且つ法苑雜緣原始集目錄に「八王日齋緣記、出淨度三昧經」と記してゐるのに依ると、淨度三昧經が前出かも知れぬとおもはれるのである。

又淨度三昧經には齋戒を受持するものは善神の營護を蒙ることを說いてゐる。卽ち前引法苑珠林第六十二の文に「福多者增壽益算、天遣善神營護其身」といひ、又善導の觀念法門所引の文に、

又如淨度三昧經說云、佛告瓶沙大王、若有男子女人、於月月六齋日及八王日、向天曹地府一切業道數數首過、受持齋戒者、佛勅六欲天王、各差二十五善神、常來隨逐守護持戒之人。亦不令有諸惡鬼神橫來惱害、亦無橫病死亡災障、常得安隱。

と言つてゐるのがそれである。これは四天王經に、

釋勅伺命增壽益算、遣諸善神營護其身。隨戒多少、若持一戒令五神護之、五戒具者令二十五善神營衞門戶。

とあるのを受けたのである。又灌頂經第三の三歸五戒帶佩護身呪經に、若し三歸を受くれば佛は天帝釋に勅して三十六善神を遣し、五戒を持すれば二十五善神を遣してその人を衞護せしめるといひ、法苑珠林第八十八所引の七佛經にも、五戒を受持すれば二十五善神の侍衞を感得するとい

つてゐるが、皆同一思想で、即ち此等諸經の間に一脈の聯繫があつたことは言を俟たぬ。

又十往生阿彌陀佛國經といふ一卷の經があり、入藏されて居らぬが、道綽、善導の著書中に屢引用され、近時大日本續藏經第八十七套にその本文が收められた。此の經中には二十五菩薩が淨土の行者を擁護するの說を揭げてゐる。即ち

若有㆓如㆑是等人㆒、我從㆓今日㆒當㆘使㆓二十五菩薩護㆒持是人㆒、常令㆘是人無病無惱㆖。若人若非人不㆑得㆓其便㆒、行住坐臥無㆓問㆒晝夜㆒常得㆓安穩㆒。若有㆓衆生㆒深信㆓是經㆒、念㆓阿彌陀佛㆒願㆓往生㆒者、彼極樂世界阿彌陀佛、即遣㆓觀世音菩薩、大勢至菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、普賢菩薩、法自在菩薩、獅子吼菩薩、陀羅尼菩薩、虛空藏菩薩、德藏菩薩、寶藏菩薩、金藏菩薩、金剛菩薩、山海慧菩薩、光明王菩薩、華嚴王菩薩、衆寶王菩薩、月光王菩薩、日照王菩薩、三昧王菩薩、自在王菩薩、大自在王菩薩、白象王菩薩、大威德王菩薩、無邊身菩薩㆒。是二十五菩薩擁㆓護行者㆒、若行若住若坐若臥、若晝夜、一切時一切處、不㆑令㆓惡鬼惡神得㆒其便㆒也。

といつてゐるのがそれである。これは淨土の行者をして常に無病無惱ならしめ、惡鬼惡神の障害を免れしめんが爲に、二十五菩薩を派遣してその身を擁護せしめるといふので、四天王經の善神營護の思想と異なつたものでない。但し觀無量壽經に無量壽佛は化身無數にして、觀世音及び大

勢至と常に此の行人の所に來至すといひ、又觀世音菩薩、大勢至菩薩はその勝友となるとも說いてあるから、十往生經の說も全く由來のないわけではないが、その數を二十五としたのは、何といつても二十五菩神說に導かれたことを表するものと認めなければならぬ。此經は武周刊定衆經目錄第十四に僞經に編し、又開元錄第十八僞妄亂眞錄には、阿彌陀佛覺諸大衆觀身經一卷と此經とを並べ擧げ、その下に「此上二經余親見」本、但前廣後略。餘並無」異」と註してゐる。これは覺諸大衆觀身經と此經とは唯だ廣略の差に過ぎぬといふのである。燉煌出土の中に覺諸大衆觀身經があるが、それには二十五菩薩を會座の大衆とし、菩薩名も多少異なつて居り、文も二品に分れて說述が廣く、開元錄の記事と合するやうである。多分十往生經の後に至つて更に妄作されたのであらう。

第三節　藥師瑠璃光經

藥師瑠璃光經は、現藏中には灌頂經の第十二卷になつてゐるが、元とは別經であつて單に灌頂經と稱し、又灌頂拔除過罪生死得度經とも名けられたのである。此經は出三藏記集第五疑經僞撰

雜錄に

灌頂經一卷。一名藥師瑠璃光經、或名灌頂拔除過罪生死得度經。右一部宋孝武帝大明元年、秣陵鹿野寺比丘慧簡依經抄撰。此經後有續命法、所以遍行於世

と記してゐるのに依ると、劉宋大明元年(四五七)秣陵鹿野寺の比丘慧簡が抄撰したものなることを知るべきである。隋法經の衆經目錄第一には藥師瑠璃光經一卷を失譯に編し、別に又同第四僞妄錄に灌頂經一卷を擧げ、その下に「舊錄稱、宋孝武時秣陵鹿野寺沙門惠簡撰。非藥師經」と註してゐる。これは惠簡抄撰の灌頂經と藥師瑠璃光經とを別經としたのである。歷代三寶紀第十には慧簡の譯經目中に藥師瑠璃光經一卷を擧げ、その下に「大明元年出。一名拔除過罪生死得度經、一名灌頂經。出大灌頂經。祐錄注爲疑。房勘、婆羅門合有梵本。神言小異耳」と註してゐる。これは今の藥師經が當時存在した梵本にほゞ合するので、長房は慧簡の經を梵本から飜譯したものとなし、僧祐が之を疑僞に編するのを不可としたのである。蓋し此經は隋代に至つて達摩笈多が再び之を出し、後玄奘及び義淨も亦之を譯してゐる。達摩笈多譯の藥師如來本願經に隋行矩の撰した序文があるから、今その一節を擧げて見る。

昔宋孝武之世、鹿野寺沙門慧簡已曾譯出、在世流行。但以梵本不融文辭雜糅、致令轉讀之輩

多生疑惑。矩早學梵書、恆披葉典、思過此經驗其紕繆。開皇十七年初獲一本、猶恐脫誤未敢即翻。至大業十一年復得二本、更相讐比、方爲楷定。遂與三藏法師達磨笈多、幷大隋翻經沙門法行、明則、長順、海馭等、於東都洛水南上林園翻經館會譯此本。深鑑前非、方懲後失故、一言出口必三覆乃書。傳度幽旨差無大過。其年十二月八日翻勘方了、仍爲一卷。

これは行矩が隋開皇巳後此經の原本三種を得、仍てさらに相讐比し、一言三覆して以て彼の隋譯を完了したことを傳へるのであつて、三寶紀に「婆羅門合有梵本」といふのは、恐らく此中の開皇十七年本を指すのであらう。大唐内典錄第十疑僞經論錄にも、「灌頂藥師經。宋孝武世惠簡出之。今勘、隋唐二錄具重翻、正非疑」と記し、達磨笈多幷に玄奘等が再三これを重譯した事實から、惠簡の經も僞經でなく、即ち梵本翻譯と認めなければならぬとしてゐる。一往尤な議論であるが、然し梵本漢譯が行はれたと同時に、亦漢本梵譯も行はれたであらうと思はれるから、重譯されたからといつて、必ずしも支那撰述でないと斷言することは出來ぬ。仁王經の如き、起信論の如きが即ちそれである。慧簡の大明元年(四五七)より行矩の開皇十七年(五九七)までには百四十年の歲月があるから、其の間に此經が于闐、龜茲等の邊疆の胡語に翻譯されぬとも限らぬ。僧祐は大明已後三四十年に既に彼れが如き説をなしてゐるのであるから、單に重譯の起つた理由を以てその

所傳を排棄せんとするのは甚だ不可である。開元錄第五には藥師琉璃光經を以て大灌頂經の別生となし、慧簡の譯經目中より削除し、之を東晉帛尸梨蜜多羅の出としてゐるのであるが、此の如きは獨斷の最も甚しきものといはなければならぬ。但し出三藏記集に依經抄撰と記してゐるので、何にか別に本經があつて、それから抄出したやうにも解せられるけれど、實は唯だ單に一經に依つたのではなく、次に述ぶる如く八吉祥神呪經、觀藥王藥上經、幷に提謂經等の諸經から種種の說を抄出して、之を撰集したことを意味するものと見られるのである。

　此經は初めに藥師の十二願を說き、次に廣くその本願の功德利益を明かし、次に續命法を說き、次に十二神王結願神呪を擧げてゐるのである。此の中、藥師東方出現の說は、八吉祥神呪經幷に觀藥王藥上二菩薩經等に基き新に立案したものであらうと思はれる。卽ち此經に東方この佛刹を去る十恒河沙の世界に佛あり、藥師琉璃光如來と名けると說いてゐるのは、彼の八吉祥神呪經に東方一恒沙より八恒沙を過ぐる間に八佛出現することを說き、その中、五恒沙の佛を藥師具足王如來と號し、その世界を滿一切珍寶と名けるといふのに大體合するやうであり、又觀藥王藥上經に過去阿僧祇劫に佛あり、瑠璃光照如來と號し、國を懸勝幡と名けると說いてゐるのにも類する所がある。又彼の十二願中に若し苦惱ありて救護するものなければ、我れ此等の爲に大法藥を攝

し、諸の疾病をして皆除癒を得、復た苦患なく、佛道を得るに至らしめんといひ、又若し衆生ありて王法の加はる所となり、當に刑戮せらるべきに臨みて無量の怖畏愁憂苦惱あり、若し復た其の體を鞕撻杻鎖せられて、種種の恐懼その身に逼切せんに、是の如き諸の苦惱等は悉く解脱して衆難あることなからしめんと說いてゐるのは、八吉祥神呪經にその八佛及國土の名を聞き、受持し奉行すれば太山地獄餓鬼畜生の中に墮せず、第一四天王は常に之を擁護し、縣官の爲に拘錄せられず、盜賊の爲に中傷せられず、天龍鬼神の爲に觸嬈せられず、閱叉鬼神、蠱道鬼神、若しは人若しは非人も皆害する能はず。若し疾病水火烏鳴惡夢諸魔に嬈せらるゝことあらば、常にこの八吉祥神呪經を讀んで之を呪すべし、卽ち除愈することを得んと云ひ、又觀藥王藥上經に長者星宿光(卽ち藥王菩薩)は、比丘日藏に訶梨勒果及諸の雜藥を奉り、仍て弘誓の願を發し、我れ菩提清淨力を得ん時、未だ成佛せざるも、若し衆生ありて我が名を聞かば、三種の病苦を除滅せしむることを得んと願じたのに善く合するからである。蓋し藥王菩薩の事は元と法華經第六藥王菩薩本事品に說いてあるので、その中には彼の法華經を以て閻浮提の人の病の良藥となし、之を聞くことを得ば、病は卽ち消滅して不老不死なりともいつてゐる。觀藥王藥上經の說は恐らく此の藥王品から轉じたのであり、今の藥師經は更に又彼の觀藥王經から轉じたのであらうと思はれる。

又此の藥師經には、

佛言、若四輩弟子、比丘比丘尼淸信士淸信女、常修月六齋年三長齋、或晝夜精勤一心苦行、願欲往生西方阿彌陀佛國者、憶念晝夜、若一日二日三日四日五日六日七日、或復中悔、聞我說是藥師瑠璃光佛本願功德、盡其壽命欲終之日、有八菩薩、其名曰文殊師利菩薩、觀世音菩薩、得大勢菩薩、無盡意菩薩、寶檀華菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、彌勒菩薩。是八菩薩皆當飛往迎其精神、不經八難生蓮華中、自然音樂而相娛樂。

と說いてゐるが、此の中、阿彌陀佛國の往生を擧げて來たのは、元と法華經藥王品に西方安樂世界の往生が說いてあるからであり、又八菩薩の中に藥王藥上二菩薩が加つてゐるのは、觀藥王藥上經と關係のあることを語るのである。のみならず八菩薩來迎の說は、八吉祥神呪經に、若し急疾あらば颰陀和等の八菩薩の名字を呼ぶべし、即ち解脫を得。命終の時この八菩薩飛往してその人を迎ふべしといふの說から來たのであり、又月六齋年三長齋の說は上に述べた如く提謂經若しくは正齋經から取つたのであらう。又此經に、

閻羅王者主領世間名籍之記。若人爲惡作諸非法、無孝順心、乃至不持五戒、不信正法。設有受者多所毀犯。於是地下鬼神及伺候者奏上五官。五官料簡除死定生、或注錄精神未

判是非。若已定者奏上閻羅。閻羅監察隨罪輕重考而治之。世間痿黄之病、困篤不死、一絕一生、由其罪福未得料簡、錄其精神在彼王所。或七日二三七日乃至七七日、名籍定者放其精神還其身中。

といつてゐるのは、淨度三昧經等の說と同一趣旨である。されば依經抄撰といふのは、此等の諸經から種種の說を抄集し、以て一經を編成したことを意味するものと認めなければならぬ。

又此經には所謂續命法なるものを說いてゐるが、今その說を擧げて見ると、若し男女がその身尫羸であつて病牀に惱み、賴る所のないものは、當に衆僧を請じ、七日七夜齋戒して一心に八禁を受持し、六時に行道し、四十九徧この經典を讀み、七層四十九燈を然やし、亦四十九尺の五色續命の神幡を懸け、四十九種の雜類の衆生を放たば、危厄の難を免れ、諸橫惡鬼の爲に害せられることがない。若し國王大臣輔相王子中宮婇女が病苦に惱まされる時にも、亦五色の繒幡を造立し、燈を然やして明を續け、諸の生命を救ひ、雜色の華を散じ、衆の名香を燒かば、病苦を除き、その命を續けることが出來る。昔し沙彌があつて蟻を救うた因緣によりて、その壽命の盡きるまで苦患を受けず、身體安寧であつた。それ故に幡蓋を造り、福を修すれば九橫の難を解脫することが出來るといふのである。これは五戒五善等に由りて增壽益算が得られるとする四天王經等の

說に對し、更に幡燈續命の法を唱へたもので、即ち益算說の極めて深刻なる發展と認むべきものである。隨願往生十方淨土經にも亦幡燈の功德を說き、逆修の時、若しは臨終、又は亡日に於て幡蓋を懸くれば、福德を獲て八難の苦を離るべしといひ、又法苑珠林第三十六に引載する迦葉詰阿難經にも、阿育王が重病を得た時、金幡金華を取つて彼れが造立せる千二百の塔に懸けたので、王は二十五年の壽を延ばすことを得た。故に續命神幡と名けるといつてゐるが、此等は皆同一思想で、共に藥師經と前後して支那に於て妄作されたものと認められる。又出三藏記集第五疑經僞撰雜錄に灌頂度星招魂斷絕復逃經一卷を擧げ、武周刊定衆經目錄第十五僞經錄に、延壽經、續命經、益算經、益算神符經、度世不死經、不死經等の名を列ね、燉煌出土中にも延壽命經、壽生經、救護身命經、保命眞經等の諸經があるが、此等も皆恐らく今の續命法と同種のもので、道教の所謂長生思想の影響を受けたものであらうと思はれる。

第四節　東晉帛尸梨蜜多羅譯と傳へられる大灌頂經

灌頂經は一に大灌頂經と稱し、十二部の小經を集めたもので、凡べて十二卷ある。即ち灌頂三

歸五戒帶佩護身呪經第一（正藏には第三）、灌頂七萬二千神王護比丘呪經第一、灌頂十二萬神王護比丘尼呪經第三（正藏には第一）、灌頂百結神王護身呪經第四、灌頂宮宅神王守鎭左右呪經第五、灌頂塚墓因緣四方神呪經第六、灌頂伏魔封印大神呪經第七、灌頂摩尼羅亶大神呪經第八、灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經第九、灌頂梵天神策經第十、灌頂隨願往生十方淨土經第十一、灌頂拔除過罪生死得度經（卽ち藥師瑠璃光經）第十二がそれである。各卷の初に皆東晉天竺三藏帛尸梨蜜多羅譯と題してあるが、然るに出三藏記集第二所出の尸梨蜜譯經目には、唯だ大孔雀王神呪、孔雀王雜神呪の二部二卷を揭げるのみであり、又同集第十三幷に梁高僧傳第一の尸梨蜜傳中にも、共に此經譯出のことを傳へて居らぬ。のみならず出三藏記集第四失譯雜經錄に此中の灌頂七萬二千神王護比丘呪經、灌頂十二萬神王護比丘尼呪經、灌頂三歸五戒帶佩護身呪經、灌頂百結神王護㆑身呪經、灌頂宮宅神王守鎭左右呪經、灌頂塚墓因緣四方神呪經、灌頂伏魔封印大神呪經、灌頂摩尼羅亶大神呪經、灌頂召五方龍王廣攝疫毒神呪經、灌頂梵天神策經、灌頂普廣經（卽ち隨願往生十方淨土經）各一卷を列ね、その下に「凡十一經。從㆓七萬二千神王呪㆒至㆓召五方龍王呪㆒凡九經、是九集灌頂、總名㆓大灌頂經㆒。從㆓梵天神策㆒及㆓普廣經、拔除過罪經㆒凡三卷、是後人所㆑集。足㆓大灌頂㆒爲㆓十二卷㆒。其拔除過罪經一卷摘㆓入疑經錄中㆒。故不㆓兩載㆒」と註してゐる。これは此經十二卷の中、

初の十一經を以て失譯となし、後の一卷卽ち拔除過罪經（藥師瑠璃光經）を以て疑經としたのである。又この註に依ると、七萬二千神王呪已下、召五方龍王呪に至る九經は最初の集成に係り、梵天神策已下三經は後人の集めたもので、卽ち十二卷灌頂經となつたのは可なり後世の事たることを知るのである。法經錄第一に大灌頂經九卷を失譯に編したのは、卽ち僧祐の說を承けたのであるが、然るに歷代三寶紀第七東晉帛尸梨蜜多羅譯經の條には新に灌頂經九卷を加へ、之を雜錄に見ゆと註した。これが此經を以て帛尸梨蜜多羅譯とする最初のものである。但し費長房は斯樣に一方に於て九卷灌頂經を帛尸梨蜜多羅の譯と認めながら、他方同錄第七に於ては出三藏記集に依つて七萬二千神王呪已下普廣經に至る十一經を失譯としてゐる。杜撰も亦甚しいといはなければならぬ。道宣の大唐內典錄には費長房に依つて九卷經帛尸梨蜜多羅譯の說を揭げ、開元錄第三には更に三寶紀の說を布衍し、凡て十二經を以て帛尸梨蜜多羅の譯となし、且つ九卷といふを未詳となし、僧祐已來の失譯錄を訂正してゐる。蓋し費長房等が此經を帛尸梨蜜多羅の譯としたのは、晉世雜錄に依つたといはれるのであるが、此書は既に失はれてしまつて今日その內容を知ることが出來ぬ。然し三寶紀中に屢引用する所に就いて檢して見ると頗る怪むべき點が多く、仁王般若經を西晉竺法護の譯となし、淨度三昧經を劉宋寶雲の出としてゐる如き卽ちその例である。

されば斯かる如何はしき經錄を依憑とし、却て出三藏記集等の有力なる古傳を排せんとするのは、甚だ輕卒の至りといはなければならぬ。又開元錄が十二卷經をすべて帛尸梨蜜多羅譯となし、梵天神策等の三經までも悉く同譯としたのは、別に根據があつたわけでなく、全く獨斷に出でたやうである。智昇は諸錄を博渉し、力めて精研を期しだやうであるけれど、尙ほ長房等の謬を受けたものが少くない。惜まざるを得ぬのである。

今先づ初の九卷經に就いて少しくその內容を檢して見やう。第一三歸五戒帶佩護身呪經には優婆塞優婆夷の三歸を受けたものは三十六神、五戒を受けたものは二十五善神の隨逐衞護を蒙るべきことを說き、且つ此等諸神の名を書し之を帶佩すれば、魔鬼も近づくことが出來ず、蠱道も害することが出來ず、軍陣に入つても傷くことがないと說いてゐる。これは上に述べた四天王經等の二十五神營護の說に基き、之を布衍したものであることは疑を容れぬ。又此中に年三長齋の說を揭げてゐるが、これは提謂經に依つたのであらう。第二七萬二千神王護比丘呪巳下八經は、比丘比丘尼が魔の燒害を蒙り、或は人民が宮宅及び塚墓等に於て鬼神の怪に遭ひ、幷に疾疫等に際し、その障難を除く法として、種種の神名及び符呪等の誦持を說いたもので、その中の思想が怪誕極まるものであることは、之を一讀するものゝ齊しく感ずる所である。のみならず此等の經中に、

或は身中有鬼神、在其身中不去者、四天王當遣使者持金剛杵碎頭作七分といひ、或は當在入定之時露出中庭讀此神呪、以青銅之鏡照耀五方使諸魔魅不得隱藏其形といひ、或は精魂在塚塔中未有去處といひ、或は凡夫塚塔有精靈者、皆是五穀之精、妖魅幻化。或橫死之鬼無所附著依以爲靈。或是樹木山林之精。既無飲食往來人間、作諸變怪恐動於人。凡夫衆生聞見之者、卽便請福謂之爲神といひ、或は此五氣之神、吐五種正氣入病人身中、諸邪惡氣一時消散。從臍中而出悖悖如烟といひ、又七萬二千神王呪經に異道師の言として、上五官に通じ、下地祇に言ふといひ、或は七世殃咎の引く所、五官の爲に錄せられて諸の罰謫を受くと云ひ、或は汝七祖は九幽の爲に羅せられ、魂は太山に在り等といつてゐる如き、皆道教の迷信を書き列ねたものと認められる。又第六塚墓因緣四方神呪經には三聖派遣の說をかゝげ、

閻浮界內有震旦國、我遣三聖在中化導。人民慈哀、禮義具足、上下相率、無逆忤者。震旦國中人民葬法、莊嚴之具、金銀珍寶刻鏤車乘、飛天仙人以爲莊嚴。衆妓鼓樂鐘鈴之音、歌詠讚歎因爲哀樂。終亡者身衣服具足、棺槨微妙香烟芬芬、百千萬衆送于山野。莊嚴山林樹木鬱鬱、行行相對無虧盈者。墳栢茂盛、碑闕儼然、人民見者莫不歡欣。佛告阿難、震旦國中又有小國。不識眞正無有禮法、但知殺害無有慈心。三聖敎化遺言不著、至我法沒千歲之

後、三聖又過、法言衰薄。設聞道法不肯信受。但相侵陵諍于國土。欲滅三寶使法言不行、破塔滅僧眞言無用。

といつてゐる。この中、三聖を震旦に遣して化導せしめるといふのは、疑ひもなく淸淨法行經の說を承けたのである。淸淨法行經は劉宋慧通の駁顧道士夷夏論（弘明集第七所收）を始め、智顗の維摩經玄疏第一、摩訶止觀第六下、幷に法琳の破邪論卷上等に引用されてゐるが、その中に佛は三弟子を遣して震旦を敎化せしむ。儒童菩薩は彼に孔丘と稱し、光淨菩薩は彼に顏囘といひ、摩訶迦葉は彼に老子と稱すと記してあつたことは有名な話柄である。これは西晉の時祭酒王浮なるものが化胡經を作り、老子化胡の說を唱へたところから、その應酬として佛敎側で考案したもので、素より一時の戲作たることは言ふまでもない。それを今此經に於て眞面目に引用してゐるのは甚だ笑ふべきであると同時に、亦此經が支那撰述たることを明かに證據立てるものといはなければならぬ。又この中、震旦國中に小國あり、但だ相侵陵して國土を爭ひ、三寶を滅して法言をして行はざらしめんと欲し、塔を破し僧を滅すといふのは、多分北魏太武帝太平眞君七年（四四六）の破佛を指したのであらう。若し然りとすれば、此經は武帝破佛の後、南方に於て僞作されたものと認められる。又第二七萬二千神王護比丘呪經に、此十二部灌頂章句微密の經典は如來滅後三

百歳中隱沒して現せず、末世九百歳中に到り魔道興盛し、諸外道の輩は佛の妙經を採つて以て己が有となし、萬姓を訓導してそれをして受持せしむ。時に比丘あり、名山巖室の中に於て寶函を得、開いて之を看るに紫金を以て書し、栴檀の簡上に刻鏤してあつたと記してゐるが、これは此經が巖室中に於て發見されたとするので、卽ち西藏等に於て盛んに行はれた如く、經典妄作の後之を寶函に容れて巖室中に藏し、ついで之を世に公にするといふ故智を襲つたものといふべく、又諸外道の輩が佛の妙經を採つて己が有となすといふのは、道敎者流が頻りに佛敎の敎理及び儀式を採用して種種の說を唱へたことを言ひ顯すと同時に、亦此經の所說が道敎に類するものゝあるのは、元と彼等が竊取した佛敎の說を取戾したに過ぎぬとし、以て此經が道敎に導かれたことを掩はんとするの意に出でたものと見られる。要するに初の九卷經は上の四天王經等の說を承け、且つ道敎の庶物有神の思想を採取し、四天王及び諸善神の影護によりて諸魔惡鬼の嬈害を免るべきことを說いたもので、當時の民間信仰に迎合した一種の俗經といはなければならぬ。

後の三經は出三藏記集に後人の所集となし、九卷灌頂經に足して十二卷としたといつてゐるから、これは九卷經に稍遲れて續集されたものと見るべきである。その中、第十梵天神策經は法經錄第四、彥琮錄第四、大唐內典錄第十等に悉く僞妄としてゐる。卽ち策によりて吉凶を判斷する

ことを說いたもので、その經の初に今我梵王承佛威神、演說卜經一百偈頌以示萬姓、決了狐疑知人吉凶。今以偈頌而說卦と云ひ、又末尾に四輩弟子欲爲人行此神策法時、當以竹帛書此上偈以五色綵作囊盛之。若欲卜時、探取三策至于七策審定無疑。澡漱口齒、莫食酒肉及噉五辛。出策之法不得過七人。後設探者衆事不中、不護人也と記してゐる。卜筮が佛教の法でないことは言を俟たぬ所であり、既に諸錄に僞經に編してゐるのであるから、改めて今その非眞を呶呶するまでもないのである。第十一隨願往生十方淨土經は略して普廣經と稱し、又那舍罪福因緣經とも名ける。法經錄第二幷に彥琮錄第四には之を疑惑に編し、歷代三寶紀第十三には失譯錄に列ねてゐる。然るに開元錄第十六支派別行錄には、藥師經と共に之を大灌頂經の別生となし、眞典と認めてゐる。經の內容は初に東方香林剎等の十方十佛の淨土（吳支謙譯の菩薩本業經に出す所と全同）を擧げ、次に他の經中に廣く阿彌陀佛のことが讚歎してあるけれど、これは唯だ衆生をして專心ならしめんがための方便に過ぎぬ。十方の淨土は實に差別のあるべきものでないから、願に隨つて何れの淨土にも皆往生することが出來ると說き、次に幡燈の功德を明かし、次に那舍罪福の因緣を述べ、終りに灌頂章句を說いてゐる。その口吻は九卷灌頂經幷に藥師瑠璃光經と大體同一であるので、此等諸經の間に互に聯絡のあつたことが察せられるのである。

又この隨願往生の說は占察善惡業報經及び起信論等にも記載されてあるが、これは彌陀信仰の流行に對する一種の反動と見るべきものであつて、すなはち齊梁代に起つた特殊の思潮と認められるのである。

第九章　護國并に大乘戒及び菩薩修道の階位關係の疑僞經

第一節　姚秦羅什譯と傳へられる仁王般若經

仁王般若經が護國の標榜の下に時の僧統僧籍制度に反對し、又梵網經が大乘菩薩戒の名の下に更にその趣旨を强調し、且つ僧衆にも反省を促したものであることは前にほゞ述べた通りである。菩薩瓔珞本業經には斯かる意圖は現はれて居らぬけれど、その中に出す所の大乘戒儀并に菩薩修道の階位說は、彼の二經の後を受けて之を修正し整成したものと認められる。即ち戒に就いていへば、仁王般若經には唯だ六重二十八輕の語を出し、梵網經には具さに十重四十八輕を說き、菩薩瓔珞經には十重及び八萬威儀輕戒を擧げてゐる。此の如く戒數が次第に增加してゐるのは、この三經の間に一種の聯繫のあつたことを物語るものと見るべきである。又菩薩修道の階位についていへば、仁王經には五忍四十一位を說き、梵網經には十發趣十長養十金剛十地の四十位、瓔珞

經には信想乃至等覺妙覺の五十二位を列ねてゐる。各階位の名稱等は互に異なつてゐるけれど、構成の主旨は大體同一であつて、卽ち三經共に十地を基本とし、その前に三十位を立てたのである。但だ瓔珞經に於て地前三十心の前に更に信想の十心、及び十地の後に等妙二覺を別立した點は大に異なる所であつて、古來瓔珞の五十二位は名義整足すといはれてゐるのである。これは此經が前二經の後を承けて菩薩の位次を集成したことを意味するものとすべきである。兎に角この三經は姉妹關係を有するものと認められるのであるから、今之を一具として順次にその翻譯の傳說及び內容を論じてみよう。

仁王般若經は現藏中に二本あり、一本は仁王般若波羅蜜經と題し、姚秦鳩摩羅什譯の署名があり、一本は仁王護國般若波羅蜜多經と題し、唐不空奉詔譯の署名がある。共に上下二卷にして、序品、觀空品（不空本には觀如來品）、菩薩敎化品（菩薩行品）、二諦品、護國品、散華品（不思議品）、受持品（奉持品）、囑累品の八品を有してゐる。此の中、所謂羅什本なるものは出三藏記集第四に之を失譯雜經錄中に編し、羅什譯經の條には列ねて居らぬ。されば梁代にその本は行はれてゐたけれど、譯者が明かでなかつたものとすべきである。隋法經の衆經目錄第二には此經を疑惑錄に編し、その理由を擧げて左の如く言つてゐる。

仁王經二卷。別錄稱此經是竺法護譯。經首又題云是羅什撰集佛語。今案、此經始末義理文詞似非二賢所譯。故入疑錄。

之に依ると別錄には此經を西晉竺法護譯と記し、又當時行はれてゐた經にはその卷首に羅什撰集佛語と書いてあつたことが知られる。處が歴代三寶紀には竺法護及び羅什の二師が各別に此經を譯出し、後又眞諦も亦之を翻譯したとしてゐる。即ち三寶紀第六竺法護譯經の條に仁王般若波羅蜜經一卷を擧げ、その下に晉世雜錄に見ゆと注してある。この晉世雜錄は恐らく法經錄の所謂別錄であらうと思はれるが、此錄は今日傳はつて居らぬのであるから、その内容を詳にすることは出來ぬけれど、三寶紀中に屢引用してゐるところを見ると、訛謬の頗る多い記錄である。兎も角法經は此錄を信じなかつたのに反し、費長房は之に依憑して竺法護の仁王傳譯を認めたのである。又三寶紀第八鳩摩羅什譯經の條にも仁王護國般若波羅蜜經一卷を擧げ、其注に「見別錄。第二出。與晉世竺法護出者文少異」と書いてゐる。之に依ると當時別本があつたやうにも見えるが、然し事實果してどうであつたか。且つ又その別錄といふのは何の書を指すのか明かでない。費長房の鑑査が麤漏極まるものであることは定評があるのであるから、これは羅什撰集佛語の題辭に依つて直に之を羅什譯と定めたものと認めなければならぬ。又同第十一眞諦譯經の條にも仁王般若

經一卷を列ね、その注に「第二出。與晉世法護出者少異。同三年在寶田寺翻。見眞諦傳」と記し、又別に仁王般若疏六卷を擧げ、太淸三年出と注してゐる。之に依ると眞諦も亦此經を譯し、且つ其注疏まで造つたやうであるが、然しそれが果して事實であるか頗る疑はしい。何となれば今この文中に「同三年在寶田寺翻」といふのは、彌勒下生經翻譯の記事を承けたのであつて、即ち梁承聖三年(五五四)寶田寺に於て此經を譯したとするのである。それゆゑ開元錄第六には明かに之を承聖三年出と書き直してゐるが、然るに仁王般若疏は太淸三年(五四九)の出となつてゐるから、此注疏は本經の翻譯に先だつ六年已前に既に出來上つたことになる。本經が未だ譯出されないのに、注疏が既に造られるといふやうなことはあるべきでないから、この一事を以てしても三寶紀の信ずるに足らないことがわかる。大唐内典錄第四に仁王經を大同三年(五三七)出に書き改めてゐるのは、即ちこの矛盾に氣附いたからであらうが、同じ道宣の作なる續高僧傳第一所載の眞諦傳には、眞諦は大同十二年(五四六)八月十五日を以て始めて南海に達したといつてゐるから、それ以前に豫章などに於て譯經のあり得ないことは固より言を俟たぬ。而して又此等の事が果して曹毘の眞諦傳に掲載してあつたとすれば、彼の傳も亦甚だ不確實のものと謂はなければならぬ。且つ又今の三寶紀の文に眞諦譯を第二出とし、法護の出すものと少し異なると記してゐるのは羅什譯の注と全く

同文である。これは第三出の寫誤とも見られるけれど、若し然りとすれば單に法護譯のみでなく、羅什譯とも對照して其の異同を注するのが當然である。然るに今羅什譯と同一の注を加へてゐるのは、羅什の譯經と眞諦の譯經とを混淆したのではないかと思ふ。試みに三寶紀所載の眞諦錄と羅什錄とを比較すると、彌勒下生經、十二因緣經、中論等が同じく雙方の譯目中に列ねてあり、のみならず亦羅什法師集の署名がある十八部論を眞諦の譯となし、又古今譯經圖紀第三、開元釋敎錄第四等には、眞諦譯の婆藪槃豆傳を羅什譯目中にも列ねてゐる。此等は皆明かに二者の混淆を證するものである。今仁王經傳譯の記事もおそらく亦その一例であつて、卽ち羅什撰集佛語の題辭に基いて先づ之を羅什譯とし、而して羅什と眞諦との混淆錯簡に依りて更に之を眞諦譯中にも加へたものと認められる。若し然りとすれば羅什譯の外に別に眞諦譯なく、又羅什撰集佛語の外に別に竺法護譯なく、唯だ出三藏記集所載の失譯經が一本だけあつたものと見なければならぬ。然るに大唐内典錄已下諸錄に、此經は皆法護、羅什及び眞諦の三家によりて相次いで飜譯されたものとなし、又灌頂の仁王護國般若經疏第一にも、

問古人云、仁王經非㆓正傳譯㆒。是事云何。答、寡識小智深可㆓憐愍㆒。豈有㆘不㆑見㆓目錄㆒卽云㆖非㆓是正飜㆒。海庸不㆑信㆘山木似㆖㆑魚。夏革亦云、古初無㆑物。嗚呼盲目詺㆓玻瓈珠㆒。且準㆓下經㆒自有㆓兩本㆒。

一廣說、如二散華品云一、爾時十六大國王聞二佛所說十萬億偈般若波羅蜜散花供養。二者略本、卽今經文。譯者不レ同、前後三本。一者晉時永嘉年月支三藏曇摩羅察、晉云二法護一、翻二出一卷一名二仁王般若一。二是僞秦弘始三年鳩摩羅什於二長安逍遙園別館一翻二一卷一、名二佛說仁王護國般若波羅蜜一。三者梁時眞諦大同年於二豫章寶田寺一翻二出一卷一、名二仁王般若經一。疏有二六卷一。雖レ有二三本一秦爲二周悉一。依二費長房入藏目錄一云耳。

と云ひ、その他、圓測の仁王經疏卷上本、貞元釋敎目錄第十五、良賁の仁王護國般若經疏第一上等にも亦之と同說を揭げてゐる。此等は皆何等調査を加へず、迂濶に三寶紀の紕謬を承けたに過ぎぬのである。

本文に就いて少しく研究を加へて見ると怪むべき點が甚だ多い。その中、先づ第一に此經には他の經名を少からず擧げてゐることを指摘しなければならぬ。卽ち其の序品に「大覺世尊前已爲二我等大衆一二十九年說二摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讚般若波羅蜜一。今日如來放二大光明一斯作二何事一」と云ひ、又觀空品には「如二光讚般若波羅蜜中說一」ともいつてゐる。蓋し經中に他經を引用するの例はないことでもないが、然し摩訶般若卽ち大品と光讚般若とは但だ廣略の差に過ぎないのにかゝはらず、それを今並べ擧げて來たのは頗る怪むべきことで、多分

支那に於ける譯本が異なつてゐるからであらう。若し然りとすれば此の一事だけでも此經の梵莢翻譯は疑はれる次第である。出三藏記集第八に揭げてゐる大梁皇帝製の注解大品序に「講般若者多說五時。一往聽受似有條理。重更硏求多不相符。唯仁王般若具書名部。世既以爲疑經。今則置而不論」と云ふ一節がある。これは今の文に摩訶般若已下四種を列ね、之に仁王般若を加へると、すべて般若に五時の別が立つやうになるが、重ねて硏究するとその順序が符合せぬのみならず、仁王般若は世に疑經と目されてゐるから、今はそれを用ひないのだといふのである。之に依ると此經は梁代に於て既に疑經として定評のあつたことがわかるのである。

護國品には怨敵が來襲した時、若しその國王が百高座を設け、百法師を請じて此經を講ぜしむれば、彼の敵は退散すべきことを說き、その實例として昔時頂生王が忉利天に上つて其の國を滅さんとした時、帝釋は過去七佛の法の如く、百高座を敷き百法師を請じて般若波羅蜜を講ぜしめたら、彼の王は遂に卽ち退したといふ話を擧げ、その下に如滅罪經中說と記してゐる。蓋し頂生王卽ち文陀竭王 Mūrdhagata が忉利天に上つたといふ說話は、頂生王故事經、文陀竭王經、六度集經第四等に記する所であるが、その中、今の記事は恐らく六度集經の文から導かれたのであらう。彼の經には元より百高座等の說はないけれど、その中に、

吾有四國寶錢無數、斯榮難云。令天帝殞吾處其位不亦上願乎。惡念興而神足滅。釋還之故宮、即獲重病。輔臣問曰、天王疾篤、若在不諱將有遺命乎。王曰、如有問王何以喪身答如所覩。以貪獲病、遂致喪身。夫貪殘命之刃、亡國之基也。

といふ記事がある。この終りの亡國之甚なる文字が恐らく仁王護國思想を產んだものと思はれるからである。滅罪經中に說くが如しなどといふのは、無論いゝ加減な經名を拵へたのである。

又彼の護國品の迹文に、往昔天羅國王の太子班足が外道羅陀師の敎を受け、千王の頭を取つて家神を祭り、自ら王位に登らんとし、已に九百九十九王を得たが、尙ほ一王だけ足らぬので、北行萬里、普明王の處にまで往つた。時に普明王は一日の猶豫を乞ひ、その間に百法師を請じ、百講座を敷きて般若波羅蜜を講じ、且つその第一法師から劫燒終訖等の四言八行の偈を聞きて虛空等定を證した。それから王は捕へられて天羅國に行き、九百九十九王に敎へて過去七佛の仁王問般若波羅蜜經中の偈句を唱へしめたが、班足は之を聞いて諸王と共に同じく皆空三昧を得た。仍て諸王を各國に放還し、班足自身も國を弟に讓つて出家したと云ふ話を出し、その下に如十王地中說と記してゐる。此の說話は渡邊海旭氏の說に依ると、元と摩訶婆羅多 Mahābhārata に出てゐる有名な話で、佛典中には巴梨本大蘇多蘇摩王本生經 Mahāsutasoma-jātaka を始め、舊雜譬喩經卷

下、六度集經第四、雜譬喩經卷上、僧伽羅刹所集經卷上、菩薩本行經卷下、大智度論第四、楞伽阿跋多羅寶經第四、賢愚經第十一等の多くの經中に記載され、而してその物語の筋書が幾多の變遷を經たことに關して委しく考證されてゐるが、その中、今の記事は恐らく六度集經と賢愚經を合糅したのであらうと想像される。素より此等諸經論の說は全然同一でなく、班足の生立、諸王を捕へる動機、及び諸王の數なども悉く異なつてゐるが、今の護國品に千王の頭を取つて家神を祭り、自ら其の位に登らんとすと言つてゐるのは、六度集經に王奔入山覩見神樹、稽首辭曰、令余反國貢神百王といふの文から轉じたものと見られる。又百法師を請じ百講座を敷きて般若波羅蜜を講じ、且つその法師から偈を受けたといふのは、六度集經の連文に、還覩道士躬敷高座、道士昇座卽說偈とあるのに一致するやうであり、又班足が般若中の偈を聞いて空三昧を得、仍て諸王を本國に放還したといふのは、六度集經に王卽以四偈授之、驚喜歎曰、巍巍世尊陳四非常。夫不聞覩、所謂悖狂。卽解百王各令還國とあるのに吻合し、のみならず法師の說いた四言八行の偈は六度集經に揭げる道士の偈と殆んど全く同一である。特にその偈中に三界皆幻の理を說き、又班足に四非常の偈を授けたといふの記事は、今の仁王般若の說に好個のヒントを與へたのである。されば此の一段の文は六度集經から換骨脫胎したものと認めなければならぬ。但

し六度集經には諸王の數を百王としてゐるのに、今それを千王としたのは賢愚經の說に依つたものと見られる。且つ彼の四言八行の偈も賢愚經に對照すると、唯だ一兩字を除く外、他は皆全同であり、又班足の譯語も唯だ賢愚經にのみ使はれてゐるのであるから、今の說話は六度集經を骨子とし、傍ら賢愚經を參照したものと推定される。十王地中に說くが如しといつてゐるのは、或は六度は十地中に於て修行すべき法であるから、六度集經の異名として新たに附けた名稱かも知れぬ。

又囑累品には未來世の國王大臣は高貴を恃んで佛法を滅破し、切りに僧制を設けて僧尼を壓迫し、且つ自身は高座に坐し、反て比丘をして地に立たしめることあらんも、それは大なる非法であるのみならず、その王の國も此罪によつて遂に亡ぶるであらうと說いてゐる。これは支那南北朝時代に於ける王者等の措置に憤慨したものと認められる。今試みにその文を擧げて見やう。

國王大臣太子王子、自恃高貴滅破吾法、明作制法制我弟子比丘比丘尼、不聽出家行道。亦復不聽造作佛像形佛塔形。立統官制衆、安籍記僧、比丘地立、白衣高坐。……如外道法、都非我法。……國王太子王子四部弟子、橫與佛弟子書記制戒、如白衣法、如兵奴法。若我弟子比丘比丘尼、立籍爲官所使、都非我弟子、是兵奴法。立統官攝僧、典主僧籍、大

小僧統共相攝縛、如二獄囚法、兵奴之法一。當二爾之時一佛法不レ久。大王　未來世中諸小國王四部弟子　自作二此罪一、破國因緣身自受レ之。

この中、統官を立てゝ衆を制し、籍を安じ僧を記すといふのは、北魏等に於て沙門統などの僧官を設け、衆僧を統攝せしめたことを指すのであらう。魏書第一百十四釋老志に依ると、北魏皇始年中(三九六―三九七)太祖は趙郡の沙門法果を徴して道人統となし、僧徒を綰攝せしめ、ついで高宗は興安元年(四五二)罽賓國沙門師賢を道人統となし、後和平の初(四六〇)師賢卒するに及んで、曇曜をして之に代つて沙門統たらしめたといひ、梁高僧傳第六には、後秦姚興が僧䂮を以て僧主、僧遷を悅衆(維那)となし、法欽、慧斌の二人をして共に僧錄を掌らしめたことを記し、又釋老志に北魏延興二年(四七二)四月浮浪の僧を檢し、無籍の者は精しく隱括を加へ、有籍の者は州鎭に送付せしめたといひ、又同太和十年(四八六)には愚民が入道と假稱して輸課を避くるを以て、無籍の僧尼は罷めて還俗せしめ、又道行精勤なる者は道に在るを聽すも、凡麤なるものは有籍無籍悉く罷めて齊民に歸せしめたといつてゐる。これで見ると北地に於ては夙に統官を立て、又僧籍を設けて嚴に僧尼を取締つたことを知るのである。又制法を作り、我が弟子比丘比丘尼を制して出家行道を聽さずといふのは、北魏に於て延興已來屢僧尼を淘汰し、又太和十六年(四九二)詔して大州には一百

人を度して僧尼となし、中州には五十人、下州には二十人を常準となさしめ、同十七年又詔して僧制四十七條を立てたこと等を指し、佛像形佛塔形を造作することを聽さずといふのは、釋老志に延興二年の詔を載し、

內外之人興建福業、造立圖寺、高敞顯博、亦足以輝隆至敎矣。然無知之徒各相高、貧富相競費竭財產、務存高廣、傷殺昆蟲含生之類。苟能精致、累土聚沙福鍾不朽。欲建爲福之因、未知傷生之業。朕爲民父母慈養是務。自今一切斷之。

と記してゐるのを指すのであらう。又比丘は地に立ち白衣は高坐すといふのは、當時の習風として一般に國王大臣は自ら高座に坐し、比丘をして地に立ちて說法させたので、之を非難したのであらう。彼の桓玄が盧山慧遠を强要して山を下らしめんとし、又沙門をして王者を拜せしめんとしたことは著名な事實で、その後も王者の態度は改まらなかつたものと見られる。兎も角、この囑累品の記事は主として北魏に於ける統官の設置、幷に僧制の確立を以て僧尼の自由を壓迫し、世外の生活を拘束する非法非律のものとなし、之を悛めなければ、その國家は遂に亡滅を免れないとして排難を加へたものと認められるのである。

又菩薩敎化品には菩薩修道の階位を說き、先づ伏忍、信忍、柔順忍、無生忍、寂滅忍の五忍を

立て、而して前の四忍に各上中下の三忍、寂滅忍に上下の二忍があるとし、更に之に信忍止忍乃至圓覺等の十四忍の名を附し、又之を銅輪銀輪等の十四王、僧伽陀等の十三法師位に配當してゐる。これは疑ひもなく菩薩地持經第九、菩薩善戒經第八等に說く所の十三住の說を敷衍したのである。蓋し此の中、僧伽陀等の梵名(?)及び十四忍等の名稱の由來は詳かでないが、十四王配當の說は恐らゝ、華嚴十地品に基き、兼ねて又入大乘論の智福二果の說から考へ附けたのであらう。卽ち入大乘論卷下に、

菩薩諸地悉具二二種智果福果一。……初地福果爲二閻浮提王一、第二地福果爲二轉輪聖王主二四天下一、第三地福果爲二天帝釋一、第四地福果爲二焰魔天王一、第五地福果爲二兜率陀天王一、第六地福果爲二化樂天王一、第七地福果爲二他化自在天王一、第八地福果爲二千世界梵一、第九地福果爲二二千世界梵一、第十地福果爲二三千大千世界淨居天王一。

といつてゐるのがそれである。その他、二諦品に世諦第一義諦の不二を說き、また空諦色諦心諦の三諦を分別し、及び二諦四諦八諦の語を擧げてゐるのは、齊梁の間に流行した二諦諍議の餘波を受けたものと謂ふべく、又受持品に般若波羅蜜を亦神符と名け、亦辟鬼珠と名け、亦如意珠と名け、亦護國珠と名け、亦天地鏡と名けるといつてゐるのは、恐らく道敎思想の影響を被つたの

であらう。何年代に製作されたものか詳かならぬけれど、既に出三藏記集にその經名を掲げ、又大梁皇帝製の注解大品序にその疑經たることを記載し、又民國許國霖の敦煌石室寫經題記に、北魏永安三年（五三〇）の題記ある仁王經の古寫本を掲げてゐるから、梁代已前にその本が世に行はれてゐたことは明かである。彼の序品中に天王問般若を擧げてゐるが、これは多分勝天王般若經を指したのであらう。然るに此經は梁太清二年（五四八）于闐國沙門求那跋陀が始めて建業に齎したもので、それ已前には傳つて居らぬ。隨つて此の經名が今の序品に列ねてあるのは、仁王の作者が豫ねて于闐地方に彼の梵本の存することを聞き込んでゐたからであらうと思はれる。

斯樣に此經は種種の點から支那撰述と疑はれるのであるが、しかるに貞元釋教錄第十五幷に大唐新飜護國仁王般若經序には、唐代宗永泰元年（七六五）四月不空が詔を奉じて、梵本から此經二卷を譯出し、ついで同九月資聖、西明の兩寺に於て百講座を置き、百法師を請じて新經を講じたことを錄してゐる。これに依ると不空の時、實に梵本があつたやうであるから、隨つて舊本の支那撰述說も動いて來るやうに見えるけれど、不空の梵本傳譯なるものは、宜しく眉に唾して見るべきものであらうと思ふ。窺基の瑜伽論略纂第十に依ると、西方尋訪彼經（即ち仁王經）未聞有本といつてゐる。これは疑ひもなく玄奘の直話を傳へたのである。また唯識論同學抄第九之二には

仁王梵本と題する一章を設け、その中に三藏大師久遊西天、普訪諸經梵本、而未聞有仁王梵本。知五天竺無其本云事と記してゐる。これ等は玄奘西遊の時、此經の梵本が印度及び西域地方になかつたことを證するのである。且つ又彼の不空の新經なるものを見るに、殆んど舊本と異がない。唯だ奉持品の中に、五言十二行の重頌と一首の陀羅尼とを加へた點が主なる相違で、その他は舊本中の如何はしき個處を三五改竄したに過ぎぬ。即ち舊本の序品に、前已爲我等大衆二十九年說摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讃般若波羅蜜とあるのを、新經序品では二十九年の語を削り、且つ光讃般若波羅蜜を改めて大品等無量無數般若波羅蜜多と訂正し、又舊本の受持品に怪むべき僧伽陀乃至婆伽度等の十三法師位の梵名を列ねてゐるのを、新經奉持品では性種性乃至法雲地等の分明なる譯語に改め、又舊本に般若波羅蜜を亦神符と名づけ、亦辟鬼珠と名づけ、亦天地鏡等と名づけると說いてゐるのを、新經ではすべて抹殺し、又舊本に頂生王の記事の末に滅罪經中に說くが如しといひ、又普明王物語の終りに十王地中に說くが如しと記してゐるのを、新經では共に之を抹消し、又舊本に二諦四諦八諦及び空諦色諦心諦等の諸諦の名稱を擧げてゐるのを、新經では唯だ二諦四諦の二種に止め、又舊本に屢二十八宿の語を用ひてゐるのを、新經では星辰と改めた類の如きがそれである。此等は皆如何はしき點であつて、動

もすれば支那撰述の馬脚を暴露すべき個處であるから、卽ち新經に於て改竄を加へたものと見られる。特に此の中、序品に於て二十九年の語を削つたのは、五種般若の說時に兎角の異論があるからであり、又光讚般若を改めて大品等と訂正したのは、當時玄奘が大般若六百巻を翻譯し、舊本の所謂摩訶般若は當然彼の大般若を指さねばならぬ所から別に大品を擧げ、尙この外に光讚等の諸部があるから、更に等無量無數般若波羅蜜多と書き加へたのであらう。若し然りとすれば、此の一事だけでも新經は苦心を加へて舊本を修正したものであることを知るのである。

斯樣に一方に於て如何はしい點を修正すると同時に、亦他方に於て舊本中の重要なる章句は之を忠實に採用してゐる。卽ち彼の五忍の名稱を始め、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海の如き、三賢十聖住果報、唯佛一人居淨土の如き、菩薩未成佛時以菩提爲煩惱、菩薩成佛時以煩惱爲菩提の如き、如人夜書火滅字存の如き、その他、頂生王、班足王、普明王幷に怪むべき天羅國の名稱までも悉く之を保存し、のみならず亦全經に亙りて同一名、同一章句、同一語勢のものも甚だ多い。同本異譯も少くないが、此經と起信論の新舊二譯ほど符契する例も亦無いやうである。既に西方彼經を尋訪するに未だ本あるを聞かずといひ、且つ玄奘翻傳の六百巻中にも唯だ八部般若のみを收めて仁王を逸し、西藏藏經中にも亦此經が藏されてないのであるから、不空の所

謂梵本翻譯なるものも大に怪むべきものと謂はなければならぬ。永泰元年新經の譯出が終ると、西明寺幷に資聖寺に於て百高座を置き百法師を請じてその經を講じ、ついで不空は特進試鴻臚卿に敍し、大廣智三藏の號を賜つたといふことであるが、或はかゝる盛運を招致すべく舊本に就いて改訂を加へ、之を號して梵本翻譯と稱したのではないかと疑はれるのである。

第二節　姚秦羅什譯と傳へられる梵網經

梵網經は現藏の本には具さに梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十と題し、上下二卷あり。上卷に十發趣十長養十金剛十地の菩薩修道の四十位を說き、下卷には十重四十八輕戒が列ねてある。歷代三寶紀第八鳩摩羅什譯經の條に梵網經二卷を擧げ、その下に注して弘始八年於草堂寺三千學士最後出此一品。梵本有一百一十二卷六十一品。譯訖、融影等三百人一時共受菩薩十戒。見經前序。僧肇筆受と書し、大唐內典錄第三、開元釋敎錄第四等にも亦之を羅什譯經目中に列ね、三寶紀と同文の注を加へてゐる。此等は皆經の前序に依りて此經を姚秦弘始八年（四〇六）鳩摩羅什の譯したものとするのである。然るにその所謂經の前序なるものは、宋元明三本に載するものと

高麗本に記するものとが同じくない。のみならず此等の諸本に記する所と出三藏記集第十一所載の菩薩波羅提木叉後記とも亦異がある。今試みに此の三種の記文を比較して見やう。

波羅提木叉後記　未詳作者

夫窮像於玄原之無始、萬行始於戒信之玄兆。是故天竺鳩摩羅什法師、心首持誦、什言、此戒出梵網經中。而什法師少翫大方、齊異學於迦夷。淳風東扇、故弘始三年、秦王道契百王之業、奉心大法。於逍遙觀中、三千學士與什參定大小乘經五十餘部。唯菩薩十戒四十八輕、最後誦出。時

高　麗　本

夫宗本湛然、理不可易。是以妙窮於玄原之境、萬行起於深信之宅。是以天竺法師鳩摩羅什、誦持此品以爲心首。此經本有一百十二卷六十一品。什少踐於大方、齊異學於迦夷。弘始三年淳風東扇、秦主姚興道契百王、玄心大法。於草堂之中、三千學士與什參定大小二乘五十餘部。唯梵網經最後誦出。時融影三

宋元明三本　沙門僧肇作

夫梵網經者蓋是萬法之玄宗、衆經之要旨　大聖開物之眞模、行者階道之正路。是以如來權教雖復無量、所言要趣莫不以此爲指南之說。是以秦主識達圜中神凝紛表。雖威綸四海而沾想虛玄、雖風偃八荒而靜慮塵外。故弘始三年淳風東扇、於是詔天竺法師鳩摩羅什、在長安草堂寺、及義學沙門三千餘僧、手執梵

融影三百人等、一時受行修菩薩道。豈唯當時之益、乃有累劫之津也。故慧融書三千部流通於後代。持誦相授屬諸後學。好道之君子、願來劫不絕。共見千佛、龍華同坐。

百人等、一時受菩薩十戒。豈唯當時之益、乃有累劫之津。故與道融別書出此心地一品。當時有三百餘人誦此一品。故卽書是品八十一部流通於後代、持誦相授囑諸後學。好道君子、願來劫不絕、共見龍華。

文口翻解釋、五十餘部。唯梵網經一百二十卷六十一品、其中菩薩心地品第十專明菩薩行地。是時道融道影三百人等、卽受菩薩戒。人各誦此品以爲心首。師徒義合、敬寫一品八十一部流通於世。欲使仰希菩提者追蹤以悟理故。冀於後代同聞焉。

この對照に依つて此の三種の記文は兎も角同一事項を記したものであることを知るのであるが、その中、波羅提木叉後記は記事が最も簡單であり、且つ出三藏記集中に既に收められてあるのであるから、それは多分最初に製作され、而して高麗本の前序はその後彼の後記に就いて改竄を加へ、宋元明三本の前序は更に亦之を修補したのであらうと思はれる。今三寶紀に經の前序に見ゆといふのは、その文句が高麗本に一致するから、隨つて彼の前序は隋開皇十七年（五九七）已前

に改作されたものであることを知るべきである。

高麗本の前序は菩薩波羅提木叉後記の文を改竄したものに相違ないが、然るに何故に菩薩波羅提木叉と稱せられたものが梵網經と改題されたか、又菩薩波羅提木叉と梵網經とは果して同本であるか否か、それ等の問題を先づ考究して見なければならぬ。法經錄第五衆律異譯の下に、菩薩戒本一卷、後秦弘始年羅什譯と記し、又衆律失譯の下に菩薩波羅提木叉經一卷を擧げ、又衆律疑惑の下に、

梵網經二卷。諸家舊錄多入疑品。右一戒經依舊附疑。

と記してゐる。これは菩薩波羅提木叉經は一卷で失譯であり、梵網經は二卷で、諸家の舊錄が多く疑品に編入してゐるから、今も亦疑錄に附するといふのであつて、卽ち波羅提木叉と梵網經とを別本としたのであり、のみならず此二部の外に、別に羅什譯の菩薩戒本一卷があるとするのである。この中、羅什の戒本があるとしたのは、梁高僧傳第二の羅什傳に、彼れの譯として菩薩戒本を擧げ、又同第六道融の傳に、道融が羅什に請うて菩薩戒本を出さしめたと記してゐるのに依つたのであらう。さりながら出三藏記集第二に掲ぐる羅什の譯經目中には之を列ねず、且つ同第十四羅什傳にも菩薩戒本のことに言及して居らぬ。梁高僧傳所載の羅什傳は主として出三藏記集

に依つたものであるのに、彼集に記して居らぬ菩薩戒本を新たに加へて來たのは、彼の波羅提木叉後記の記事を信用した爲であると認めなければならぬ。又その本を道融の請譯としたのは、彼の後記に融影三百人等一時受行と云ひ、又慧融書二三千部とあるのに依つて考へ附けたことゝ思はれる。さすれば梁傳の所謂菩薩戒本なるものは卽ち彼の菩薩波羅提木叉經を指したものとすべきである。然るに今法經錄に之を別本としたのは、彼の梁傳の記事と波羅提木叉後記のそれとを、全く別種の事を傳へたものと見たからであり、又菩薩戒本を羅什譯とし、波羅提木叉經を失譯としたのは、專ら梁傳の記事を信じ、波羅提木叉後記を信ぜなかつた證左とすべきである。但し此後記は僧祐も亦信ぜなかつたやうであつて、その事は出三藏記集中に彼の文を載錄しながら、羅什の譯經目中に波羅提木叉經を列ねてゐないことに依つて知ることが出來る。又彥琮錄幷に靜泰錄には、梵網經の外に菩薩戒本も波羅提木叉經もかゝげて居らぬ。これは此二經と梵網經とを同本と見たからであらう。大唐內典錄第三、開元錄第四等には羅什譯經の下に、菩薩戒本と梵網經とを並べ擧げてゐるが、その中、開元錄には菩薩戒本は恐らく梵網經の下卷をいふのであらうと推してゐる。又菩薩波羅提木叉經はその後記に菩薩十戒四十八輕最後誦出と書いてあるから、その內容は恐らく今の梵網經下卷と同一であり、又その經名は梵網經下卷の初結菩薩波羅提木叉の語

から來たものと思はれる。さすれば波羅提木叉經は梵網經の下卷を指し、又菩薩戒本は波羅提木叉經の異名であるといふべく、而して今の梵網經は卽ち彼經の前に新たに上卷が加つたものと認めなければならぬ。菩薩波羅提木叉經が梵網經と改題され、又彼の後記が改竄せられて梵網經の前序となつたのも、卽ち此の上卷が加へられた時であらう。彼の上卷の菩薩階位の說が下卷の十重四十八輕と聯絡交涉のないのも、此の事由に基くものとおもはれる。果して然りとすれば法經錄に此の三本を別種のものとしたは訛謬といふべきである。何年代に改題等の事が起つたかは詳かならぬけれど、歷代三寶紀第十一に梁高僧傳の作者慧皎が梵網戒の疏を著したことを記し、又陳垣の敦煌刼餘錄に、建元年の後記ある梵網經古寫本の存することを傳へてゐるのに依ると、蕭齊高帝の頃(四七九―四八二)既にその事が行はれてゐたとすべきである。兎も角法經錄に諸家舊錄多く疑品に入るといつてゐるのであるから、隋開皇の遙か已前より既にその本が廣く世に行はれ、諸家は概ね之を疑錄に編入したものなることを知るのである。

斯樣に梵網經は菩薩波羅提木叉經に上卷を加へ、又高麗本の前序は彼の波羅提木叉後記を改竄したに過ぎぬとすれば、結局此經は菩薩波羅提木叉經が本となり、その翻譯に關する傳說も彼の後記に基いたものとせなければならぬ。然るに彼の後記を精査して見ると怪むべき點が少くない。

先づ彼の後記に天竺鳩摩羅什法師心首持誦、乃至菩薩十戒四十八輕最後誦出。時融影三百人等一時受行修菩薩道と書いてあるけれど、出三藏記集羅什傳にはすべて此等の事を記せず、のみならず彼の傳及び梁高僧傳の羅什傳、弗若多羅傳、卑摩羅叉傳等には羅什が卑摩羅叉に就いて十誦律を受け、又弗若多羅と共に十誦律を譯し、十誦を以て戒範としたことを傳へてゐる。さすれば羅什が菩薩十戒等を誦出したといふのは甚だ怪むべきこととすべきである。又出三藏記集第十四に依ると、卑摩羅叉が關中に來た時、彼は羅什に向つて、汝於漢地大有重緣、受法弟子可有幾人と問ふた處が、羅什は漢境律經未備。新經及律多是什所傳出。三千徒衆皆從什受法。但什累業障深故不受師敬(麗本に師致に作る)耳と答へたと記してゐる。これは三千の徒衆は皆受法の弟子であるけれど、自分は犯戒の身であるから、師としての敬禮を受けぬのだといふ意味であらう。蓋し犯戒の身を以て人に授戒するやうなことは近代まではないことであるから、羅什は恐らく長安に於て十誦の授戒なども行つたことはなからう。まして彼の十誦の外に更に十戒四十八輕を誦出し、之を融影等三百人に授けるといふやうなことは、蓋しあり得べきことでないとおもふ。但し梁高僧傳に羅什が菩薩戒本を譯した等と傳へてゐるのは、前にも述べた通り今の後記を所憑としたので、此外に何等文獻があつたとも覺えぬ。さすれば羅什十戒誦出の說は全く後記の新案に

係るものと認めなければならぬ。況や梵網經の文章は拙劣であつて、到底羅什の譯文などに擬すべくもない。又彼の後記に三千學士與レ什參二定大小乘經五十餘部一と書いてあるが、然るに出三藏記集第二所載の羅什譯經目には唯だ三十五部二百九十四巻を列ね、同第十四の羅什傳には三十三部（麗本は三十二部）三百餘巻と記してあつて、共に今の數より二十部も少い。又三千學士云々といふのは、恐らく出三藏記集等に三千徒衆とあるのを受けたのであらうけれど、それ等の徒衆が羅什と共に大小乘經を參定したといふが如きは何れの記傳にも記されてない。又此經の巻下に三千學士、時坐聽者、聞二佛自誦一心心頂戴、喜躍受持と記してゐるが、これは釋尊の時代に三千の學士があつて、佛の自ら十重四十八輕を誦するのを聞いて頂戴受持したといふ意味のやうであるけれど、左様なことは曾て經論には記載されず、全く羅什門下の三千徒衆との混濫であることは多言を俟たぬ。

又彼の後記に什言此戒出二梵網經中一と云ひ、又高麗本の前序には此經本有二一百十二巻六十一品一と云ひ、三本前序には梵網經一百二十巻六十一品、其中菩薩心地品第十專明二菩薩行地一といひ、又明曠の天台菩薩戒疏刪補巻上には一百五十二巻六十一品ありとし、法藏の梵網經菩薩戒本疏第一には、什公相傳云、西域有二十萬頌六十一品一、具翻應レ成二三百餘巻一と記してゐる。この中、高麗本

前序に一百十二巻六十一品ありと言つてゐるのは別に根據があつたわけでなく、此經の中に佛性本原品、如來百觀品、十天光品、千海明王品、一切衆生天華品、法品、解觀法門千三昧品、觀十二因緣品、羅漢品、光音天品、心地法門品、賢劫品、十無盡藏戒品、八萬威儀品、滅罪品、制戒品、梵壇品、無相天王品、十無盡戒法品、佛華光王品等の名を擧げてゐるから、その原本には多數の章品があつたものと推定し、而してそれを特に六十一品としたのは、恐らく彼の梵網六十二見經から思ひ付いたのであらう。又之を一百十二巻としたのは、一品をほゞ二巻の割合であるとし、以て之を彼の波羅提木叉經に上巻を加へて菩薩心地品と名づけた理由にも供したのであらう。又三本前序に一百二十巻としたのは十二巻の寫誤とも見られるけれど、或は一品二巻の割合を更に明かにしたものかも知れぬ。法藏の十萬頌三百餘巻說は、義淨の大唐西域求法高僧傳巻下に持明呪藏の梵本は十萬頌あり、唐譯すれば三百巻となるべしといふのに基いたものであらう。此經には同本異譯もなければ、又六十一品もあつたといはれる中で、他の如何なる品も飜傳された事實がない。歷代三寶紀第四には、後漢康孟詳の譯經目中に梵網經二巻を列ね、その下に初出見吳錄と注してゐるけれど、固より虛傳で、信ぜらるべくもない。又西藏藏經中に梵網經が收めてあるが、これは漢本の重譯に過ぎないのである。

次に本文に就いて少しく攻究を加へて見ると、先づ此經の標題が區區として一定しないことも、怪むべきもの丶一に數へなければならぬ。此經は出三藏記集第十一には菩薩波羅提木叉とし、歴代三寶紀第八、開元釋敎錄第四等には梵網經とし、高麗本には梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十とし、法藏の菩薩戒本疏には梵網經盧舍那佛說菩薩十重四十八輕戒とし、智顗の菩薩戒經義疏には別に又菩薩戒經と稱してゐる。斯樣に一經に種種の名稱が附せられることは、他經に多くその例を見ない所である。

又此經の上卷には十發趣、十長養、十金剛及び十地の四十位の階級を說いてゐるが、これは恐らく仁王般若經の五忍四十一位の說に基いたのであらう。仁王般若經には上に述べた如く伏忍、信忍、順忍、無生忍、寂滅忍の五忍を說き、その中、伏忍等の四忍に各上中下の三品を分ち、寂滅忍に上下二品の別を立て丶總じて十四忍となし、更に又之を信忍、止忍、乃至圓覺忍等の十四忍。銅輪、銀輪、乃至三界王等の十四王。僧伽陀、波羅陀、乃至婆伽度等の十三法師位に配當し、而して又初の伏忍三品に各十心の別があるとするから、都合四十一位となるのである。この中、今の梵網經所說の十發趣は大體彼の伏忍下品の十心と同じであり、十長養は彼の中品の十心に當り、十金剛は上品の十心に當つてゐる。又十發趣の名稱を立て丶來たのは、恐らく彼の伏忍下品

の文に初發想信恆河沙衆生修行伏忍とあるのから導かれたのであり、十長養は彼の伏忍中品の文に一切諸佛菩薩長養十心といふのを取つたのであり、十金剛は彼の伏忍上品の文に外道倒想所不能壞といひ、又此の上品の十心を十堅心若しくは堅忍と稱することから考へ付けたのであらう。又十地は仁王五忍の中の後の四忍（寂滅上品を除く）であつて、即ち華嚴等の十地を意味することは明かである。又十金剛の中、最後の不壞心を明かす下に伏忍順空八魔不壞と云ひ、十長養の中、最後の慧心を明かす下に順忍空同と云ひ、十地の中、最初の體性平等地を明かす下に無生信忍空慧常現在前と云ひ、體性爾餤地の下に順道道法化生名法樂忍住忍證忍寂滅忍といつてゐるのは、ほゞ仁王五忍の説に合すと見るべきである。されば梵網四十位の階級は大體仁王般若經の説に基き、伏忍三十心を十發趣、十長養、十金剛の地前三十位となし、信忍等の十一品中、最後の寂滅上忍を除き、餘の十品を十地として建立したものと認めることが出來る。但し仁王所説の伏忍下品の十心を今の十發趣に比較して見ると、その名稱に二三の出沒及び順位の不同があり、又彼の伏忍中品には四念處及び忍幷に四無量中の初後の二を立てゝ十心としてゐるのに反し、今の十長養は四無量及び四攝を開いて八とし、之に定慧の二を加へて十心となし、又彼の伏忍上品には無漏の五蘊及び三三昧、幷に眞俗二諦を觀ずることを以て十心としたのに反し、今の十金剛は

彼の伏忍下品中より信心念心及び廻向の三心を取り、別に維摩等より直心大乘心等を取つて、以て十心を組成してゐる。のみならず亦十地の名稱にも多少の異同がある。此等は恐らく舍那心地の法門は釋迦應身の說と同じくないといふ見地から改竄補正を試みたのであらう。今左に二經所說の菩薩の階位を對照して見やう。

仁王般若經	梵網經
信心	捨心
精進心	戒心
念心	忍心
慧心	進心
定心	定心
施心	慧心
戒心	願心
護心	護心
願心	喜心
廻向心	頂心
伏忍下品（習種性十心）―信忍、銅輪王、僧伽陀位、堅信忍	十發趣心

伏忍中品（性種性十心）
- 身
- 受
- 心
- 法
- 過去因忍
- 現在因果忍
- 未來果忍
- 慈
- 施
- 慧

止忍、銀輪王、波羅陀位、堅法忍
- 慈心
- 悲心
- 喜心
- 捨心
- 施心
- 好語心
- 益心
- 同心
- 定心
- 慧心

十長養心

伏忍上品（道種性十心）
- 戒忍
- 知見忍
- 定忍
- 慧忍
- 解脫忍

堅忍、金輪王、阿毘跋致正位、堅修忍
- 信心
- 念心
- 迴向心
- 達心
- 直心

十金剛心

- 空忍
- 無願忍
- 無想忍
- 無常忍
- 無生忍

- 不退心
- 大乘心
- 無相心
- 慧心
- 不壞心

- 信忍下品—善覺忍、四天王、鳩摩羅伽位
- 信忍中品—離達忍、忉利王、無相闍陀波羅位
- 信忍上品—明慧忍、炎天王、伽羅陀位
- 順忍下品—炎慧忍、兜率天王、須陀洹位
- 順忍中品—勝慧忍、化樂天王、斯陀含位
- 順忍上品—法現忍、自在天王、阿那含位
- 無生忍下品—遠達忍、初禪王、阿羅漢梵天位
- 無生忍中品—等覺忍、二禪王、摩訶羅伽位
- 無生忍上品—慧光忍、三禪王、婆伽梵位
- 寂滅忍下品—灌頂忍、四禪王、婆伽度位

—堅聖忍—

- 體性平等地
- 體性善慧地
- 體性光明地
- 體性爾焰地
- 體性慧照地
- 體性華光地
- 體性滿足地
- 體性佛吼地
- 體性華嚴地
- 體性入佛界地

—十地

寂滅忍上品―圓覺忍、三界王

卽ち此表に依つて二經の異同を知るべきである。彼の菩薩瓔珞本業經の五十二位の說は、此の二經の所論に別に憑據と見るべきものがなく、且つその細目も多く一致しないので、新たに華嚴經に依つて菩薩修道の階位を唱道したものと認められるのであるけれど、この二經から導かれたものも少くないやうである。又下の第十章に出す所の千臂千鉢曼殊室利經には、今の梵網の菩薩階位說について詳細なる解說を加へてゐるが、しかし此經は續貞元錄に傳ふる如く唐金剛智などの譯でなく、支那撰述たることは固より疑を容れぬのである。

次に此經の下卷には大乘菩薩の威儀として十重四十八輕戒を說き明かしてゐる。十重とは所謂十波羅夷のことで、卽ち殺、盜、婬、妄語、酤酒、說四衆過、自讚毀他、慳惜加毀、瞋不受悔、謗三寶の十戒をいふのである。蓋し菩薩の波羅夷罪に關しては、曇無讖の菩薩戒本、菩薩地持經第五方便處戒品、優婆塞五戒威儀經等には自讚毀他、慳惜財法、瞋不受悔、謗亂正法の四種を擧げ、優婆塞戒經第三受戒品には殺生、偷盜、虛說、邪婬、說四衆過、酤酒の六種を列ね、菩薩善戒經には、殺、盜、婬、妄語、自讚毀他、慳惜財法、瞋不受悔、謗亂正法の八種を說いてゐる。この中、菩薩善戒經の說は、小乘律所說の殺盜婬妄の四重禁に菩薩戒本の所謂四波羅夷を加へた

ものであつて、菩薩地持經等と大體同說と見るべきものであるが、之に反し優婆塞戒經の六波羅夷は、殺盜婬妄に說四衆過及び酤酒の二を加へたのであるから、說の系統は異なつてゐると謂はなければならぬ。仁王般若經卷下に六重二十八輕の語を擧げてゐるのは、即ち此の優婆塞戒經の說を承けたのである。之に依ると今の梵網經所說の十波羅夷は、殺盜婬妄の四重禁に菩薩戒本等の四波羅夷、及び優婆塞戒經の後の二波羅夷を加へたもので、即ち此等の諸說を綜合したものなることが明かに知られるのである。

又輕戒に關し此經には四十八戒を列ねてゐるが、然るに諸經論に說く所の輕戒の數は種種不同あり、その戒相も亦大に異なつてゐる。法藏の梵網經菩薩戒本疏第四に總じて十類を擧げ、

一若依瑜伽有四十四種輕戒。二若依地持、善戒經雖有少增減大同瑜伽。已上多分是出家戒相。三依菩薩內戒經四十二種。四依善生經除六重外別有二十八。五依方等經除二十四種戒外、別更有五五二十五種制不應作。已上多分是在家戒。六依此經大數有四十八種。七若細尋此文內或有一戒中有多種戒、總論向將百種。已上通道俗戒。八或八萬種。如下文引八萬威儀品中說。九或十萬種。如梁論引毘奈耶瞿沙羅經說、菩薩戒有十萬種差別。十或塵沙。如智論中略有八萬、廣有塵沙等數。如是等皆此類也。

といつてゐる。この他に又曇無讖の菩薩戒本には四十二戒、優婆塞五戒威儀經には三十八戒、大般涅槃經には息世譏嫌戒として多種の戒條をかゝげてゐる。此の中、曇無讖戒本、地持及び善戒經、菩薩内戒經、善生經(即ち優婆塞戒經)、涅槃經等は皆劉宋時代の譯で、當時菩薩戒關係の諸經が頻りに翻傳され、而もその戒相が互に異なつてゐる所から、即ち之を綜合集成し、且つ王者等の措置に對して反對を標榜せんとする意圖もあつたので、此經に於て新たに四十八輕戒の制定を企てたものとおもはれる。今四十八戒中、先づ曇無讖戒本から抄取したと認められるものを左に對照して見やう。

曇無讖戒本	梵網經
(一)見上座有德應敬。同法者憍慢瞋恨、不起恭敬、不讓其座、問訊請法悉不酬答。是名爲犯衆多犯。是犯染汙起。若懶惰懈怠、若無記心、若忘誤犯非染汙起。	(一)若佛子、……見上座和上阿闍梨大同學同見同行者、應起承迎禮拜問訊。而菩薩反生憍心慢心癡心、不起承迎禮拜、一一不如法供養。以自賣身國城男女七寶百物而供給之。若不爾者犯輕垢罪。(第一戒)
(二)於菩薩藏不作方便、棄捨不學。一向修習	(二)若佛子、心背大乘常住經律、言非佛說、

聲聞經法、是名爲犯衆多犯。是犯非染汙起。

㈢於佛所說棄捨不學。反習外道邪論世俗經典、是名爲犯衆多犯。是犯染汙起。……善於世典外道邪論、愛樂不捨、不作毒想。是名爲犯衆多犯。是犯染汙起。
聞菩薩法藏甚深義眞實義、諸佛菩薩無量神力、誹謗不受。言非利益非如來說。是亦不能安樂衆生。是名爲犯衆多犯。是犯染汙起。

㈣見羸病人、以瞋恨心不往瞻視。是名爲犯衆多犯。是犯染汙起。若懶惰懈怠犯、非染汙起。

而受持二乘聲聞外道惡見一切禁戒邪見經律者犯輕垢罪。（第八戒）

㈢若佛子、有佛經律大乘正法正見正性正法身、而不能勤學修習。而捨七寶反學邪見二乘外道俗典、阿毗曇雜論書記、是斷佛性。障道因緣、非行菩薩道。若故作者犯輕垢罪。

（第二十四戒）

㈣若佛子、見一切疾病人、常應供養如佛無異。八福田中、看病福田第一福田。若父母師僧弟子疾病、諸根不具、百種病苦惱、皆養令差。而菩薩以惡心瞋恨不至僧房中、城邑曠

㈤罵者報罵、瞋者報瞋、打者報打、毀者報毀。是名為犯衆多犯。是犯染汙起。

野山林道路中、見病不救者犯輕垢罪。（第九戒）

㈤佛子、不得以瞋報瞋以打報打。若殺父母兄弟六親、不得加報。若國主為他人殺者、亦不得加報。殺生報生不順孝道。尚不畜奴婢打拍罵辱。日日起三業口罪無量。況故作七逆之罪。而出家菩薩無慈報讎、乃至六親中故報者犯輕垢罪。（第二十一戒）

又此の四十八戒中、第二に飲酒戒、第三に食肉戒、第四に食五辛戒を擧げてゐるが、これは涅槃經第十一聖行品に不食肉、不飲酒、五辛能葷悉不食之と云ひ、又菩薩地持經第四方便處施品に、不葱食葱雜葱汙、如是不肉食、非酒飲酒雜酒汙といふのに一致し、又第三十二、第三十三、第三十四、及び第三十六等の諸戒も涅槃經聖行品の文に善く合するやうである。試みに左に之を對照して見やう。

涅槃經

(一)息世譏嫌戒者、不作販賣輕秤小斗欺誑於人、因他形勢取人財物、害心繫縛破壞成功、……不畜象馬車乘牛羊駝驢鷄犬獼猴孔雀鸚鵡共命及狗枳羅豺狼虎豹猫狸豬豕。

(二)終不觀看象闘馬闘車闘兵闘男闘女闘牛闘羊闘水牛鷄雉鸚鵡等闘。亦不故往觀看軍陣。不應故聽吹貝鼓角琴瑟箏笛箜篌歌叫伎樂之聲。除供養佛。樗蒲圍碁波羅塞戲師子象闘彈碁六博拍毱擲石投壺牽道八道行成一切戲笑悉不觀作。終不占相手脚面目。不以抓鏡芝草楊枝鉢盂髑髏而作卜筮。亦不仰觀虛空星宿。除欲解睡。不作王家往返使命。……

……

梵網經

(一)若佛子、不得畜刀仗弓箭、販賣輕秤小斗、因官形勢取人財物、害心繫縛破壞成功、長養猫狸豬狗。若故作者犯輕垢罪。(第三十二戒)

(二)若佛子、以惡心故觀一切男女等闘、軍陣兵將劫賊等闘。亦不得聽吹貝鼓角琴瑟箏笛箜篌歌叫伎樂之聲。不得樗蒲圍碁波羅塞戲彈碁六博拍毱擲石投壺八道行城、爪鏡蓍草楊枝鉢盂髑髏而作卜筮。不得作盜賊使命。一一不得作。若故作者犯輕垢罪。(第三十三戒)

㈢既出家已、奉持禁戒威儀不缺。進止安詳無所觸犯。乃至小罪心生怖畏、護戒之心猶如金剛。譬如有人帶持浮囊欲渡大海。……

㈣菩薩摩訶薩受持如是禁戒已、作是願言、寧以此身投於熾然猛火深坑、終不毀犯過去未來現在諸佛所制禁戒、與刹利女婆羅門女居士女而行不淨。

㈤復作是願、寧以熱鐵周匝纏身、終不敢以破戒之身受於信心檀越衣服。

㈥復作是願、寧以此口呑熱鐵丸、終不敢以毀戒之口食於信心檀越飲食。

㈢若佛子、護持禁戒、行住坐臥日夜六時、讀誦是戒猶如金剛。如帶持浮囊欲度大海、如草繫比丘。常生大乘善信、自知我是未成之佛、諸佛是已成之佛、發菩提心、念念不去心。若起一念二乘外道心者犯輕垢罪。

（第三十四戒）

㈣若佛子、發十大願已、持佛禁戒作是願言、寧以此身投熾然猛火大坑刀山、終不毀犯三世諸佛經律與一切女人作不淨行。

㈤復作是願、寧以熱鐵羅網千重周匝纏身、終不以破戒之身受於信心檀越一切衣服。

㈥復作是願、寧以此口呑熱鐵丸、及大流猛火經百千劫、終不以破戒之口食信心檀越百

(七)復作是願、寧臥此身大熱鐵上、終不敢以破戒之身受於信心檀越牀敷臥具。

(八)復作是願、我寧以身受三百鉾、終不敢以毀戒之身受於信心檀越醫藥。

(九)復作是願、寧以此身投熱鐵鑊、不以破戒之身受於信心檀越房舍屋宅。

(一〇)復作是願、寧以鐵槌打碎此身、從頭至足令如微塵、不以破戒受諸刹利婆羅門居士恭敬禮拜。

(一一)復作是願、寧以熱鐵挑其兩目、不以染心視他好色。

味飲食。

(七)復作是願、寧以此身臥大猛火羅網熱鐵地上、終不以破戒之身受信心檀越百種牀座。

(八)復作是願、寧以此身受三百鉾刺、經一劫二劫、終不以破戒之身受信心檀越百味醫藥。

(九)復作是願、寧以此身投熱鐵鑊、經百千劫、終不以破戒之身受信心檀越千種房舍屋宅園林田地。

(一〇)復作是願、寧以鐵槌打碎此身、從頭至足令如微塵、終不以破戒之身受信心檀越恭敬禮拜。

(一一)復作是願、寧以百千熱鐵刀鉾挑其兩目、終不以破戒之心視他好色。

㈡復作是願、寧以鐵錐遍身攙刺、不以染心聽好音聲。
㈢復作是願、以利刀割去其鼻、不以染心貪嗅諸香。
㈣復作是願、寧以利刀割裂其舌、不以染心貪著美味。
㈤復作是願、寧以利斧斬斫其身、不以染心貪著諸觸。

㈡復作是願、寧以百千鐵錐遍攙刺耳根、經一劫二劫、終不以破戒之心聽好音聲。
㈢復作是願、寧以百千刄刀割去其鼻、終不以破戒之心貪齅諸香。
㈣復作是願、寧以百千刄刀割斷其舌、終不以破戒之心食人百味淨食。
㈤復作是願、寧以利斧斬斫其身、終不以破戒之心貪著好觸。(已上第三十六戒)

又第二十七戒に受別請、第二十八戒に別請僧、第四十三戒に無慚受施を制してゐるが、此の三種の戒は比丘應供法行經、涅槃經、幷に仁王般若經等から取つて來たやうである。但し比丘應供法行經は今日傳つて居らぬが、その文は法藏の菩薩戒本疏第三に引用してあるから、今それに依つて兩者を比較對照して見やう。

比丘應供經、涅槃經、仁王經

㈠若我弟子、有受別請者、是人定失一果二果

梵網經

㈠若佛子、一切不得受別請利養入己。而此

三果四果。不名比丘。（比丘應供法行經）若行乞食反僧中食、常知止足不受別請。（涅槃經聖行品）

㈡兵奴爲比丘受別請法。知識比丘共爲一心親善。比丘爲作齋會求福。如外道法、都非吾法。（仁王經囑累品）

次第僧中有佛化僧、四道果僧、菩薩僧、七賢僧、凡夫僧。欲使四方檀越得如是僧。故莫受別請。（比丘應供法行經）

㈢是人不得國王地上行、不得飲國王水、有五百大鬼常遮其前。是比丘七劫不見佛、佛不授手、不得受檀越物。五千大鬼常隨其後、言佛法中大賊。諸比丘不應作。（比丘應供法行經）

利養屬十方僧。而別受請即是取十方僧物入己……犯輕垢罪。（第二十七戒）

㈡若佛子、有出家菩薩、在家菩薩及一切檀越、請僧福田求願之時……次第請者即得十方賢聖僧。而世人別請五百羅漢菩薩僧、不如僧次一凡夫僧。若別請僧者是外道法、七佛無別請法。……（第二十八戒）

㈢若佛子、信心出家受佛正戒。故起心毀犯聖戒者、不得受一切檀越供養。亦不得國王地上行、不得飲國王水。五千大鬼常遮其前、鬼言大賊。若入房舍城邑宅中、鬼復常掃其脚跡。一切世人咸皆罵言佛法中賊。……

……（第四十三戒）

この對照に依つて此の三戒が比丘應供法行經等に善く合致するのを見ることが出來やう。然るに仁王般若經は前節に論じた通り支那撰述と目すべき經であり、又比丘應供法行經は出三藏記集第五疑經僞撰雜錄中に列名せられた經で、僧祐はその題下に注して、此經前題云羅什出。祐案經卷舊無譯名、非羅什所出又無此經。故入疑錄といつてゐる。又法藏の菩薩戒本疏第三に比丘應供法行經の文を引き、その終りに又居士請僧福田經意亦同此と記してゐる。居士請僧福田經も出三藏記集疑經僞撰雜錄中に掲げてあつて、其の題下に此經前題云曇無讖出。祐案識所出無此經。故入疑錄と注してゐる。されば此等の諸經は皆怪むべき疑經であつて、決して眞典と認むべきものでない。若し今の數戒が果して此等の諸經に基いたものとすれば、梵網經は唯この一事だけでも印度傳譯でないことが立證されるわけである。

又第四十六、第四十七、第四十八の三戒は、疑ひもなく仁王般若經護國品幷に囑累品の文に依つたのである。今左に兩經を對照して見やう。

仁王般若經	梵網經
(一)比丘地立、白衣高座。依過去七佛法、請百	(一)若佛子……入檀越貴人家、一切衆中不得

法師數百高座。（護國品）

㈡國王大臣太子王子、自恃高貴滅破吾法、明作制法、制我弟子比丘比丘尼、不聽出家行道。亦復不聽造作佛像形佛塔形。立統官制衆、安籍記僧。

國王太子王子四部弟子、横與佛弟子書記制戒、如白衣法、如兵奴法。若我弟子比丘比丘尼、立籍爲官所使、都非我弟子。是兵奴法。立統官攝僧、典主僧籍、大小僧統共相攝縛、如獄囚法兵奴之法。當爾之時佛法不久。未來世中、諸小國王四部弟子自作此罪、

立爲白衣說法。應在白衣衆前高座上坐。法師比丘不得地立爲四衆說法。若說法時、法師高座、香花供養。四衆聽者下坐。（第四十六戒）

㈡若佛子、皆以信心受佛戒者、若國王太子百官四部弟子、自恃高貴破滅佛法戒律、明作制法制我四部弟子、不聽出家行道。亦復不聽造立形像佛塔經律。

立統官制衆、使安籍記僧。菩薩比丘地立、白衣高座。廣行非法、如兵奴事主。而菩薩正應受一切人供養。而反爲官走使、非法非律。若國王百官、好以受佛戒者、莫作是破三寶之罪。若故作破法者犯輕垢罪。（已上第四十七戒）

破國因緣身自受之。

㈢法末世時有諸比丘四部弟子國王大臣多作非法之行、橫與佛法衆僧作大非法、作諸罪過。非法非律繫縛比丘、如獄囚法。當爾之時法滅不久。我滅度後、未來世中四部弟子、諸小國王太子王子、乃是住持護三寶者、轉更滅破三寶。如師子身中蟲自食師子非外道也。（已上囑累品）

㈢若佛子以好心出家、而爲名聞利養於國王百官前說佛戒者、橫爲比丘比丘尼菩薩戒弟子作繫縛事如獄囚法、如兵奴之法。如師子身中蟲自食師子肉非餘外蟲。如是佛子自破佛法、非外道天魔能破。……（第四十八戒）

この中、統官を立て僧籍を安じて僧尼を攝縛することを制し、又比丘の地に立ち白衣の高座することを非法としたのは、北魏時代に於ける僧尼の制度及び王者の態度等を排難したのであつて、その事は前節仁王經の項下に既に詳述したところである。今梵網經に特に之を佛の制戒として立てゝ來たのは、更に其の非法を强調せんが爲であることは明かである。就中、第四十七戒は宋元明三本并に智顗の菩薩戒經義疏卷下等に前引の如く記載してゐるにも拘はらず、高麗本并に法藏の菩薩戒本疏第三等には、その中の立統官已下莫作是に至る六十四字を削除し、佛塔經律より直

に破三寶の句に連接してゐる。これは蓋し印度には統官安籍等の事がないから、之を戒條中に置くのを不可とする考であらうが、然し此戒は疑ひもなく仁王般若經から來たので、此の六十四字も全く彼の經文を寫したに過ぎぬのであるから、之を削除するのは卽ち原意を害するものと謂はなければならぬ。

又此四十八戒中、第十一戒に利養惡心の爲の故に國の使命を通じて軍陣を合會し、師を興して相伐ち、無量の衆生を殺すことを得ざれと云ひ、第十戒に一切の刀杖弓箭鉾斧鬪戰の具及び惡羅網殺生の器を畜ふることを得ざれと云ひ、第三十二戒に刀杖弓箭を畜ふることを得ざれと云ひ、第十七戒に國王王子大臣百官に親近して恃んで形勢をなし、乞索し打拍し牽挽して横に錢物を取る云云といつてゐるのは、恐らく亦南北朝時代に於て僧侶が國の使命を通じ、刀杖等を畜へて戰鬪に參加したことを排難したのであらう。魏書釋老志に依ると、北魏世祖は西伐して長安に至り、寺内に弓矢矛楯等を藏するのを見て大に怒り、遂に廢佛を決行したことを記してゐるが、この事實は今の第十戒等に善く合するやうである。又第四十戒に出家人の法は國王に向て禮拜せざれといつてゐるが、これは明かに廬山慧遠等の不敬王者の說を承けたのであり、十重禁の初に孝順至道之法、孝名爲戒等と說いてゐるのは、儒教の孝論に影響されたものと見るべく、又第三十戒に

六齋日、年三長齋月に於て殺生劫盜を作し、齋を破し戒を犯せば輕垢罪を犯ずといつてゐるが、三長齋の說は前に論じた如く提謂經若しくは正齋經から來たので、古經論にはその說なく、支那思想たることは疑を容れぬ。又此經の卷末に明人忍慧强等の五言五十六句の偈をかゝげ、此戒を持するものは五種の利を安獲すべきことを說いてゐるが、これは疑ひもなく菩薩地持經第五方便處戒品の末尾の文から取つたのである。今左に之を對照して見やう。

菩薩地持經	梵網經
菩薩依此戒已、滿足尸波羅蜜、得阿耨多羅三藐三菩提。乃至未成無上正覺得五種福利。一者常爲一切諸佛所念。二者終時其心歡喜。三者捨身在所生處、常與淨戒諸菩薩衆爲善知識。四者無量功德聚、戒度成就。五者今世後世性戒成就。……過去一切諸菩薩等、求大菩提已於中學、未來當學、現在今學。	明人忍慧强、能持如是法。未成佛道間、安獲五種利。一者十方佛、愍念常守護。二者命終時、正見心歡喜。三者生生處、爲諸菩薩友。四者功德聚、戒度悉成就。五者今後世、性戒福慧滿…………過去諸菩薩、已於是中學、未來者當學、現在者今學。

此等の比較對照に依ると、此經所説の十重四十八輕戒は曇無識戒本、菩薩地持經及び涅槃經を始め、仁王般若經、比丘應供法行經等を依憑とし、兼ねて亦南北朝時代に於ける王者の非法、僧尼の非行等を匡正せんとする意圖の下に制定されたものと認めなければならぬ。

又此經が盧舍那佛の所説として敍述されたことも、恐らく曇無識戒本の初の歸敬偈に、歸命盧舍那、十方金剛佛等とあるのにヒントを得たのであらう。又蓮華臺藏世界の説は華嚴の華藏莊嚴世界の説から轉じたのであり、且つ仁王般若經受持品に見釋迦牟尼佛現無量神力。亦見千華臺上寶滿佛、是一切佛化身主。復見千華葉世界上佛。其中諸佛各各説般若波羅蜜とあるのにも導かれたのであらう。又此經下卷の初に

各各從此蓮華藏世界而沒、沒已入體性虛空花光三昧、還本源世界閻浮樹菩提樹下、從體性虛空華光三昧出。出已方坐金剛千光王座、乃妙光堂説十世界海、復從座起至帝釋宮説十住、復從座起至炎天中説十行、復從座起至第四天中説十迴向、復從座起至化樂天説十禪定、復從座起至他化天説十地、復至一禪中説十金剛、復至二禪中説十忍、復至三禪中説十願、復至四禪中摩醯首羅天王宮、説我本源蓮華藏世界盧舍那佛所説心地法門品

といつてゐるのは、疑ひもなく華嚴の説會を略敍したのである。その他、此經に頻りに佛性常住

の語を擧げ、又不二法門の語を用ひ、性種性、習種性の名目を出し、及び二諦を說き八不を說いてゐるのは、涅槃、維摩、地持及び中論等から取つたものであることは言を俟たぬ。

之を要するに此經の譯出に關する傳說は到底信ずべからざるものであり、又その本文も多くは宋齊代頃までに譯された諸經の文を補綴したことが明かであり、特に支那撰述と目すべき仁王般若經に基いて菩薩の階位等を論じ、又比丘應供經等に依りて四十八輕戒中の數戒を立てた如き、到底梵本の飜譯と認めることが出來ないのである。法經錄には諸家舊錄多入疑品といつてゐるが、如何なる理由で疑品に編したかは詳かならぬけれど、火のない處に煙が立たぬ諺の如く、此經の成立には最初より疑ふべく怪むべきものゝあつたことが之によつて知られるのである。

第三節　姚秦竺佛念譯と傳へられる菩薩瓔珞本業經

菩薩瓔珞本業經は單譯の經で、二卷八品あり。上卷には卽ち集衆品、賢聖名字品、賢聖學觀品の三品、下卷には釋義品、佛母品、因果品、大衆受學品、集散品の五品が收めてある。その中、賢聖名字品已下三品には菩薩の四十二位等の階位を說き、大衆受學品には三聚戒幷に十波羅夷を

明かし、說述の體裁は大體梵網經に類するものがあるやうである。蓋し此經は出三藏記集第四に之を失譯雜經錄に編してゐるのであるが、然るに法經錄第一已下諸目錄には姚秦竺佛念の譯となし、歷代三寶紀第十には更に宋智嚴の下にも此經名を列ねてゐる。竺佛念の譯としたのは、恐らく彼が翻じた菩薩瓔珞經十二卷（或は十四卷）と其名が近似する所から混淆を生じたのであらう。試みに今彼の十二卷瓔珞經と此經との譯例を對照して見ると、十二卷經には泥洹、那術、江河沙等の古語を使つてゐるのに反し、此經には涅槃、那由陀、恆河沙等の新語を用ひてゐる。されば彼れの手に譯されたものでないことは明かとせなければならぬ。又智嚴の譯とすることも恐らく謬傳であらう。歷代三寶紀所出の智嚴の譯經目中には、現に安公疑經錄に載する毗羅三昧經二卷を收錄し、又調伏衆生業經等の別生經をも列ねてゐる。智嚴及び寶雲の譯經目には種種の訛謬があるやうであり、開元錄第五にも既に三寶紀の不正を指摘してゐる。兎に角、此經翻傳の由來は頗る明かでなく、僧祐が之を失譯錄に編したのはその當を得たものとすべきである。

賢聖名字品已下三品には所謂菩薩の階位が說いてあるが、その中には六種性の別を立て、之を六堅、六忍、六慧、六定、六觀、六寶瓔珞に配し、又初の四種性に各十人、後の二種性に各一人、合して四十二賢聖ありとし、別に又習種性の前に十信を立て、菩薩の階位に凡べて五十二位があ

るとしてゐる。今左に之を表示して見やう。

- 信想（十信）
  - 信心
  - 念心
  - 精進心
  - 定心
  - 慧心
  - 戒心
  - 迴向心
  - 護法心
  - 捨心
  - 願心
  - ―鐵輪王
- 習種性（十住）（六種性）
  - 發心住（留伽度）
  - 治地住（留諦迦度）
  - 修行住（留維伽）
  - 生貴住（留摩阿）
  - ―堅信（六堅）　信忍（六忍）　聞慧（六慧）―習相定（六定）―住觀（六觀）　銅寶瓔珞（六瓔珞）

- 方便具足住（安婆沙）
- 正心住（毘跋致）
- 不退住（阿毘跋致）
- 童眞住（必叉伽）
- 法王子住（必阿羅）
- 灌頂住（流止迦）

性種性（十行）

- 歡喜行（度伽阿）
- 饒益行（度安爾）
- 無瞋恨行（度尸羅）
- 無盡行（度和差）
- 離癡亂行（度利他）
- 善現行（度生婆諦）
- 無著行（度沙必）
- 尊重行（度阿訶）

堅法―法忍―思慧―性定―行觀―銀寶瓔珞

善法行（度佛何）
眞實行（度叉一婆）

道種性（十迴向）

救護一切衆生迴向（羅諦流沙）
不壞迴向（羅絲沙）
等一切佛迴向（必白伽）
至一切處迴向（法必他）
無盡功德藏迴向（佛度陀）
隨順平等善根迴向（羅叉必）
隨順等觀一切衆生迴向（師羅叉伽）
如相迴向（波訶諦）
無縛解脫迴向（波羅提弗陀）
法界無量迴向（達磨遮伽）

堅修―修忍―修慧―道慧定―向觀―金寶瓔珞

逆流歡喜地（鳩摩羅伽）
道流離垢地（須阿伽一波）
流照明地（須那迦）

聖種性（十地）
- 觀明炎地（須陀洹）
- 度障難勝地（斯陀含）
- 薄流現前地（阿那含）
- 過三有遠行地（阿羅漢）
- 變化生不動地（阿尼羅漢）
- 慧光妙善地（阿那訶）
- 明行足法雲地（阿訶羅弗）

—堅德—正忍—無相慧—道種慧定—地觀—瑠璃寶瓔珞

等覺性（等覺）　無相無垢地（摩訶一和沙）—堅頂—無垢忍—照寂慧—大慧定—無相觀—摩尼寶瓔珞

妙覺性（妙覺）　妙覺者無上地（婆伽婆伽婆佛陀）—堅覺—一切智忍　寂照慧　正觀定—一切種智觀—水精瓔珞

この中、十住、十行、十迴向及び十地の四十位は、正しく華嚴に依つたのであつて、別に詳說する要もないが、十信に關しては頗る論究すべきものがある。十信は此經では未だ僧祇に入らざる信想の菩薩が行ずるところの信心であるとし、卽ち之を十住以前の階位とするのである。賢聖名字品に、此心を修行して若し一劫二劫三劫を經ば、乃ち初住位の中に入ることを得と云ひ、又釋義品に住前の人を信想の菩薩と名け、亦假名の菩薩と名け、亦名字の菩薩と名く。その人は略し

て十心を行ず。所謂信心、進心、念心、慧心、定心、戒心、迴向心、護法心、捨心、願心なり。復た十心あり、所謂十善の法、五戒、八戒、六波羅蜜戒なり。この人復た十善を行じ、若し一劫二劫三劫に十信を修すれば六天の果報を受く。十善に三品あり、上品鐵輪王は一天下を化し、中品は粟散王、下品は人中の王なり。一切の煩惱を具足し、無量の善業を集め、亦退し亦出づ。若し善知識に値うて佛法を學し、若し一劫二劫すれば方に住位に入ると云つてゐる。これは住前の菩薩は信進等の十心及び十善を行ずべきことを説いたのであつて、仁王般若經の所謂十善の菩薩と伏忍下品の説を合糅したものと見られるのである。この中、住前の菩薩が十善を行ずといふのは、彼の仁王般若經卷上敎化品に、十善の菩薩は大心を發して長く三界の苦輪海に別る。中下品の善は粟散王、上品の十善は鐵輪王なりといひ、又同卷下受持品に習忍已前に十善を行ずる菩薩は退あり進あり。譬へば輕毛の風に隨つて東西するが如し。この諸菩薩も亦復是の如し、十千劫に十正道を修し、三菩提心を發するを以て乃ち當に習忍の位に入るべしといふのに合し、又信進等の十心を行ずといふのは、彼の敎化品に初發想信の恆河沙の衆生は伏忍を修行し、三寶の中に於て習種性の十心を生ず。信心、精進心、念心、慧心、定心、施心、戒心、護心、願心、迴向心なりと説いてゐるのに善く一致するやうである。但し仁王經には信進等の十心を以て習忍（伏忍下

品）の位となし、之を十善の菩薩と區別したのに對し、今此經に於ては十心も十善も共に住前の菩薩の行ずる所としたので、此點が大に異なるのである。これは此經は華嚴に依つて發心乃至灌頂の十住、歡喜乃至眞實の十行、救護衆生乃至法界無量の十廻向を地前三十位としたから、自然彼の信進等の十心は三賢より除去せられる結果となり、之を十善の菩薩が併せ行ずることゝせなければならぬやうになつたのであらう。蓋し仁王の所謂伏忍三十心も、梵網の所謂十發趣十長養十金剛の三十心も共に地前三賢を意味するのであるから、隨つてそれは今の住行向の三十位に相當するものであるけれど、その內容の行目は三者各異なつてゐる。さりながら仁王經と梵網經との間に一種の聯繫があることは前に述べた通りであり、今亦此經に於て住前の菩薩が信進等の十心と十善とを併せ行ずるとしたのは、仁王の習忍と習忍已前の十善とを併せ取つて一位としたものであることは疑ひを容れぬ。されば此二經の間にも脈絡貫通するものがあつたことは明かとせなければならぬ。又此經に於て一劫二劫三劫に十信を修すれば住位に入るといひ、仁王經に十千劫に十正道を修すれば習忍の位に入るといつてゐるのは、劫數に於て大なる差があるやうであるけれど、大衆受學品に信想の菩薩は十千劫に於て十戒の法を行じ、十住心に入るべしと說いてゐるのを見ると、此經も亦仁王に同じく十信一萬劫を認めたものとすべきである。のみならず六寶

瓔珞の説は、仁王經敎化品の上品十善鐵輪王、習種銅輪二天下、銀輪三天性種性、道種堅德轉輪王、七寶金光四天下の文から轉じたと見るべきであり、又六種性の中、習種、性種、道種の三は既に仁王經に出す所であり、又六堅六忍の中、初の四は梵網の堅信、堅法、堅修、堅聖の四忍から來たものであることも言を俟たぬ。されば此經の階位は華嚴の説を本とし、兼ねて亦仁王及び梵網の後を承け、以て之を集成したものと認めなければならぬ。

又大衆受學品には攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒の三聚戒を説き、その中、攝律儀戒は不殺生、不妄語、不婬、不盜、不酤酒、不説出家在家菩薩罪過、不慳、不瞋、不自讃毀他、不謗三寶の十無盡戒を指すとし、且つ一一その受戒の相を明かし、又賢聖名字品にも

佛子有十不可悔戒、應受應持。一不殺人乃至二十八天諸佛菩薩、二不盜乃至草葉、三不婬乃至非人、四不妄語乃至非人、五不説出家在家菩薩罪過、六不沽酒、七不自讃毀他、八不慳、九不瞋乃至非人、十不謗三寶。若破十戒不可悔過入波羅夷。

と言つてゐるが、これは梵網の所謂十重波羅提木叉と全く同説である。又大衆受學品に三種の受戒の相を明かす中、諸佛菩薩滅度後、千里內有先受戒菩薩者、請爲法師敎授我戒。我先禮足應如是語、請大尊者爲師授與我戒。其弟子得正法戒、是中品戒。佛滅度後千里內無法師之

時、應在諸佛菩薩形像前胡跪合掌自誓受戒。是下品戒と說いてゐるのは、梵網經卷下に若現前先受菩薩戒、法師前受戒時不須要見好相。何以故、以是法師師師相授故不須好相。是以法師前受戒卽得戒。以生重心故便得戒。若千里內無能授戒師、於佛菩薩形像前受戒、而要見好相とあるのに善く合するやうであり、又同品に十重有犯無悔、得使重受戒。八萬威儀戒盡名輕。有犯得使悔過對首懺滅と說いてゐるのは、梵網經卷下の所謂八萬威儀品の說から轉じたものと見られる。のみならず同品の連文に

我今在此樹下、爲十四億人說住前信想菩薩初受戒法。佛子、是信想菩薩於十千劫行十戒法、當入十住心。佛子、當先爲諸大衆受菩薩戒、然後爲說瓔珞經同見同行。

と記してゐるのは、先づ菩薩戒を說き、然る後瓔珞經を說いたとするので、卽ち梵網の後に至つて此經が編纂されたことを告白するものと認めなければならぬ。特に此文に我れ今此の樹下に於て住前信想菩薩の初受戒の法を說くといつてゐるのは、梵網經卷下に釋迦牟尼佛初めて菩提樹下に坐して無上覺を成じ、初めて菩薩の波羅提木叉を結す。乃至汝等一切發心の菩薩（卽ち住前信想の菩薩）も亦誦し、乃至十發趣十長養十金剛十地の諸菩薩も亦誦すとあるのに一致し、又同見同行すべしと記してゐるのは、此の二經が姉妹經たることを顯はしたもので、卽ち住前信想の菩

薩に對して此の二經を奉持し、菩薩の十無盡戒と百法觀門とを並べ行ずべきことを慫慂したものと見るべきである。

又此經の佛母品には有諦無諦中道第一義諦の理を說き、之を諸佛菩薩の智母と名けてゐるが、この說は仁王般若經の二諦品から導かれたものと見られる。卽ち佛母品の文に有諦無諦中道第一義諦は是れ一切諸佛菩薩の智母なり。乃至一切法も亦諸佛菩薩の智母なり。所以は何ぞ、諸佛菩薩は法より生ずるが故なりと說いてゐるのは、彼の仁王經二諦品に、如如文字修は諸佛の智母なり。一切衆生の性は根本の智母にして卽ち薩婆若の體たり。諸佛未だ成佛せざれば當佛を以て智母となす。未だ得ざるを性となし、已に得るを薩婆若となすと云ふの說から轉じたものと見るべく、又佛母品の文に、二諦とは世諦は有なるが故に不空、無諦は空なるが故に不有なり。二諦は常爾なるが故に不一、聖の空を照すが故に不二なり。乃至二諦の義とは、不一亦不二、不常亦不斷、不來亦不去、不生亦不滅なり。而も二相は卽ち是れ聖智には無二なり、無二なるが故に是れ諸佛菩薩の智母なりといつてゐるのは、彼の仁王二諦品の偈に、有無本自二、譬若牛二角。照解見無二、二諦常不卽。解心見不二、求二不可得。非謂二諦一、非二何可得。於解常自一、於諦常自二。通達此無二、眞入第一義といひ、又三諦を以て一切法を攝す、空諦、色諦、心諦

なり等といふのを布衍したものと見るべきである。蓋し二諦に關する研究は、羅什已來支那に於て盛んに行はれ、廣弘明集第二十一には昭明太子已下すべて二十三家の說を揭げてゐる。此經及び仁王經等に於て頻りに二諦の義を論述してゐるのは卽ちその餘波を受けたと認められる。

又因果品には十波羅蜜、七財、四攝等の因、及び二種法身の果を說いてゐるが、その中、十波羅蜜に各各三緣ありとするの說は菩薩地持經に基いたものと見られる。卽ち因果品に施に財法無畏の三緣ありとするのは、彼の地持經第四施品に、菩薩の一切施とは所謂法施財施無畏施なりと云ふに合し、又戒に自性戒、受善法戒、利益衆生戒の三緣ありとしたのは、彼の經第四戒品に一切戒に復た三種あり、一に律儀戒、二に攝善法戒、三に攝衆生戒なりといふに合し、忍に忍苦行、忍外惡、第一義諦忍の三緣ありとするのは、彼の第六忍品に一切忍に三種あり、一に他不饒益忍、二に安苦忍、三に法思惟解忍なりといふに合し、精進に起大誓心、方便進趣、勸化衆生の三緣ありとするのは、彼の第六精進品に一切精進に三種あり、一に弘誓精進、二に攝善法、三に利益衆生なりといふに合し、禪に定亂相不起、定生一切功德、定利衆生の三緣ありとするのは、彼の第六禪品に一切禪に三種あり、一に現法樂住禪、二に出世三昧功德禪、三に利益衆生禪なりといふに合し、慧に有諦、無諦、中道第一義諦の三緣ありとしたのは、彼の第六慧品に一切慧に三

種ありといふに基き、之を此經の所謂三諦說に合嘗せしめたのである。されば此の一段の記事は菩薩地持經の六波羅蜜の說を抄出したものと認めなければならぬ。又七財の說は未曾有因緣經卷下等に出す所で、梵網經卷上にも觀行の七財を集むといふの語がある。その他、此經中に他經より抄錄したと認められるものも少くない。就中、開卷第一の集衆品の文は、呉支謙譯の菩薩本業經序分と殆ど異がなく、特に十方佛及び菩薩の名稱を擧ぐる一段の如き二者全く同一である。因て按ずるに此經を菩薩瓔珞本業經と名けたのは、彼の支謙の菩薩本業經の題名に基き、之に竺佛念譯の菩薩瓔珞經の名稱を併せ取つたのであらう。又大衆受學品に我れ本と初得道の時、此の樹間に在りて十世界海法門を說くに、九十億の人ありて亦此の六入明門に入る。乃至復た祇洹林に至りて入法界品を說くに、十二恆沙の人ありて此の六入明門に入る。今復た第八會座に至り、十方無極の大衆敬首菩薩一切衆の爲に六入明門を說くといつてゐるのは、疑ひもなく華嚴の所謂七處八會を指したのであり、又問品に此の四住地は一切の煩惱を起すを以ての故に始起の四住地となす。その四住地の前には更に法の起るものなし。故に無始の無明住地と名けるといふのは、勝鬘經に見一處住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地の四種の住地は一切の起煩惱を生ず。起とは刹那の心にして刹那と相應す。心不相應は無始の無明住地なりと說くのに依つたのであり、又賢

聖學觀品に、一切の衆生賢聖は各自に果報の土に居り、唯だ佛のみ中道第一法性の土に居ると云ふのは、仁王般若經敎化品の三賢十聖住果報、唯佛一人居淨土の文から來たのであり、又佛母品に盤石劫の說を揭げてゐるのは、雜阿含經第三十四、大智度論第五、幷に同第三十八等の說に基いたのであらう。要するに此經は翻譯の由來が明かでなく、且つ他の諸經論から抄出したと思はれるものが甚だ多く、特にその主たる要旨の菩薩の階位幷に十無盡戒の說が、支那撰述の疑ひある仁王及び梵網の後を承けたと認められるのであるから、恐らく亦支那に於て梁代已前に假作されたものであらうと推定されるのである。

第十章　如來藏幷に密教關係の疑僞經

第一節　隋菩提燈譯と傳へられる占察善惡業報經

如來藏の敎旨は劉宋代に楞伽、勝鬘等の經が傳譯され、その後、地論學派が勃興するに及んで學者の爭うて研覈する所となり、大乘起信論の如きも卽ち此間の產物と認められるのである。占察善惡業報經はおそらく起信論と相前後して、支那に於て撰述されたものなるべく、又彼の大佛頂首楞嚴經及び圓覺經等も並に皆如來藏思想を紹述したものと見るべきであるから、今此等の經を一類としてその成立を論じて見やう。

占察善惡業報經は二卷の經で、高麗本には天竺三藏菩提燈譯とし、宋元明三本には隋外國沙門菩提登譯としてゐる。然るに歷代三寶紀第十二には此經に關して左の記事を揭げてゐる。

占察經。右一部二卷、檢群錄無目。而經首題云菩提登在外國譯。似近代出。今諸藏內並寫流傳、而廣州有一僧行塔懺法、以皮作二枚帖子、一書善字、一書惡字、令人擲之。得善

者好、得惡者不好。又行自撲法以爲滅罪、而男女合糅。青州亦有一居士同行此法。開皇十三年有人告廣州官司云其是妖。官司推問、其人引證云、塔懺法依占察經、自撲法依諸經中五體投地如太山崩。廣州司馬郭誼來京向岐州具狀奏聞。勅不信占察經道理。令內史侍郎李元操共郭誼、就寶昌寺問諸大德沙門法經等。報云、占察經目錄無名及譯處、塔懺法與衆經復異。不可依行。勅云、諸如此者不須流行。

これは隋開皇の頃、廣州幷に青州の邊に於て此の占察經に依つて塔懺の法を行ふものがあり、爲に男女が群集する所から、開皇十三年(五九三)廣州の司馬郭誼が長安に來りてその由を奏聞し、仍て法經等に經の眞僞を勘定せしめた處が、彼等は占察經は諸目錄にその經名も又譯場も載せてなく、塔懺法といふものも他の諸經に曾て見ない頗る怪むべきものであるから、依行すべきでないと答申した。そこで勅してその流行を禁ぜられたといふのである。法經等の隋衆經目錄はその翌十四年に出來たのであるが、その中に占察經を疑惑部に編入してゐるのは、即ち此の勘定の結果と認められる。尋いで彥琮の仁壽錄第四、道宣の大唐內典錄第十にも亦之を疑僞の部に列ねた。然るに武周刊定衆經目錄第十三、開元釋敎錄第七等には之を眞經と認め、特に開元錄には前記三寶紀の全文を引き、その次に左の理由を附して眞經と認めた所以を説明してゐる。

今謂不然、豈得以己管窺而不許有博見之士耶、法門八萬、理乃多途。自非金口所宣、何得顯斯奧旨、大唐天后天冊萬歳元年勅東都佛授記寺沙門明佺等、刊定一切經錄、以編入正經訖。後諸覽者無惑焉。

これは法門が八萬もあり、理は隨つて多途である。佛の金口でなければ斯樣な奧旨を顯はすことが出來ぬ。明佺が武周刊定衆經目錄を撰した時、既に之を正經に編入したから、惑ふことなくそれを信用すべきであるといふのである。但し開元錄第九には武周錄を評して、雖云刊定繁穢尤多。雖見流行實難憑准といひ、頗る不信を表して置きながら、今こゝで武周錄を楯に取つて占察經を眞典とするのは、甚だ不徹底といはなければならぬ。兎に角、開元錄等には斯樣にこの經を眞經となし、法經錄等には僞經としてゐるのであるが、その孰れが正しいかといふに、予は翻譯內容いづれの點から見ても、先づ僞經疑ひなしと思ふのである。先づ第一に、譯者と稱する菩提燈なる者はその事蹟全く不明で、天竺の三藏といつても何處の生れで、何時支那に來て、何年頃に何處で此經を譯したか、すべて明かでない。その文章を見ると、なか〳〵達者に書いてあるから、多年支那で語學も研究し、文章も稽古した者でなくてはならぬが、一向その行蹟が傳つて居らぬ。又果して天竺の三藏であるなら、他の梵本も持つて來て宜いわけであるのに、此一經

の外、何物も齎らして居らぬ。事蹟不明の三藏が唯だ此一經だけを翻譯したといふことは、如何にしても怪まざるを得ないのである。

經の內容に就いていへば、上下二卷ある中、上卷には占察善惡業報の法を說き、下卷には所謂大乘の實義が述べてある。占察の法とは、木輪を以て過去世所作の善惡の業及び現世の苦樂吉凶等を占ふ事をいふので、その占ひの結果、惡業が現はれ、苦果凶事が現はるれば、卽ち地藏菩薩を禮懺して滅罪除障せしめるといふのがその骨子である。木輪とは木片を刻して之に善惡等の字を書するのであるが、その中、過去世所作の善惡業種の差別を占ふには、十輪を用ひて之に十善十惡の名を對書し、又過去世に於ける善惡業の積集の久近、及びその强弱大小を占ふには、三輪を用ひて之に身口意の三字を書し、過去現在未來の三世受報の差別を占ふには、六輪を用ひて之に一乃至十八の數を書し、各之を擲たしめて善惡苦樂を判斷するといふのである。これは梵天神策經などゝ同樣に、一種の卜經と稱すべきもので、俗間の迷信たることは言を俟たぬ。然し地藏十輪の思想は本と大方廣十輪經から來たのであつて、全く根據が無いわけではない。大方廣十輪經は涼土失譯の經であるが、その中には新に卽位した刹利種の灌頂大王が十輪を成就する如く、如來にも亦十輪の功德が成就されてあると說き、又菩薩にも十輪を成就することが必要であると

し、その十輪は卽ち十善であるといひ、地藏菩薩を對告衆としてなが〳〵とその事が說かれてある。今の占察經の所謂十輪の法は、疑ひもなく彼の十輪經の說から案出したのである。

又此經の下卷には所謂大乘の實義なるものが說いてあるが、その說述は殆んど全く起信論と同一であつて、卽ち衆生心の體は如來藏自性淸淨にして、その中に無量無邊の無漏淸淨の功德が具足されてあることを明かしてゐる。而してこの如來藏の法門を特に地藏思想に結び付けて來たのは、地藏は地中の伏藏を人格化した菩薩であつて、如來藏敎義と密接の關係を持つてゐるからであらう。大方廣十輪經第一に、此善男子(卽ち地藏菩薩)成㆓就如㆑是不思議功德伏藏㆒といひ、又欲㆑成㆓熟衆生㆒故、能處㆓堅固大悲伏藏㆒、令㆑滿㆓一切衆生心願㆒。是故善男子善女人、應㆓當供㆒養地藏菩薩㆒といひ、又同第八にも若有㆓衆生㆒讀㆓誦此經㆒、應㆓當擁㆒護如㆑是十法㆒。是名㆓諸佛伏藏㆒といつてゐるが、此等は皆地藏は卽ち伏藏であることを暗示したものと見ることが出來る。如來藏を地中の伏藏に譬へたことは、究竟一乘寶性論第四に如來藏經を引いて、如來藏に九種の譬喩あることを說く中、譬如㆓彼地中、種種珍寶藏㆒。衆生無㆓天眼㆒、是故不㆑能㆑見。如㆑是自在智、爲㆓無明地㆒覆。衆生無㆓智眼㆒、是故不㆑能㆑見といひ、又一切衆生界、皆有㆓如來性㆒。如㆓地中伏藏㆒といつてゐるのがその的例であり、特にその連文に地中伏藏の譬喩を約言して地藏と稱してゐるのは、頗る面白いこ

とである。又十輪經と同じ涼土失譯の金剛三昧經は、如來藏の敎義と地藏との關係を證明すべき經典の一と見るべきもので、その中には如來藏の法門を說き、又地藏菩薩と如來との問答もあり、特に彼の入實際品には如來藏佛といふ佛名が擧げてある。これは如來藏そのものを人格化したのであつて、地中の伏藏を地藏菩薩に仕立てたのと全く同趣意と謂はなければならぬ。彼の信行が三階敎を唱へて普法普佛に歸すべきことを主張し、如來藏佛、佛性佛、當來佛、佛想佛等の普佛を說いてゐるのも、一佛一法に對して偏信偏行することを不可とするので、結局如來藏思想の發展と認むべきものである。信行は隋開皇十四年五十四歲を以て入寂した人で、占察經の編纂と殆んど同時代であることから考へて見ると、當時支那には如來藏の敎義が流行し、それが又業道思想と結び付いて、遂に地藏敎の成立を見るやうになつたことが推知されるのである。

又占察經の題下には出六根聚經中と記し、經の卷尾にも如是所說、六根聚修多羅中名何法門の語がある。これは此經が元と六根聚經から出でたことをいひ顯はすのであらう。蓋し六根聚經なるものは支那に傳譯されたことはないが、歷代三寶紀第十二には、天竺に現にその本があることを傳へ、又究竟一乘寶性論第三にも六根聚經を引用してゐる。卽ち彼の論に佛法不相離、及彼眞如性、法體不虛妄、自性本來淨の四句の偈を釋する下に

及彼眞如性者、依此義故、六根聚經言、世尊、六根如是從無始來、畢竟究竟諸法體故。法體不虛妄者、依此義故、經中說言、世尊、又第一義諦者謂不虛妄。涅槃是也。何以故、世尊、彼性本際來、常以法體不變故。自性本來淨者、依此義故、經中佛告文殊師利、如來應正遍知、本際以來入涅槃故。

といつてゐるのがそれである。この中、法體不虛妄及び自性本來淨の下に引いてある經も、多分六根聚經の文であらうとおもふ。さすれば此經は如來藏自性淸淨の敎義を說いたもので、印度には夙に行はれてゐたとすべきである。今占察經に出六根聚經中と書いてゐるのは、此經の作者が、六根聚經中には如來藏緣起の旨が說いてあることを聞かされた爲であるか、或は寶性論に彼の經が引いてあるから、それに依つたものであるか。いづれにするも斯樣な異經を指してゐるのは一種の欺瞞に外ならぬのである。

それから又此經の下卷には一切諸法本性自空、乃至爲に十八空等と說くといひ、その下に若廣說者如十八空と記してゐる。十八空といふのは多分十八空論を指したのであらうが、然るにこの論は梵夾の飜譯ではないやうであつて、その中には廣釋如唯識論といふ語もあり、具如三無性論中廣釋ともあり、如七入論偈所說ともあり、又如壽量義中廣明といふ文句もある。高麗本

には此論の題下に龍樹造と署し、吉藏の法華經玄論第二には世親造として引用してゐる。されどそれ等は共に信ずるに足らぬ。宇井伯壽氏は此論を中邊分別論の注書とし、眞諦の著はしたものであらうと推定されてゐるが、多分その邊のところが事實であらうと思はれる。若し然りとすれば、此一事が既に占察經の支那撰述たることを立證するに餘りあるのである。

又此經の下卷に說いてある所謂大乘の實義なるものは、大乘起信論とその思想は勿論、說述の形式幷に用語までも甚だ善く似てゐる。卽ち顯示正義あり、對治邪執あり、分別發趣道相あり、修行信心分あり、眞如無明あり、本覺不覺あり、熏習の論あり、眞如三昧及び一行三昧の說あり、信成就發心、解行發心、證發心あり、奢摩他毘婆舍那の二觀あり、淨土往生を勸める文まであつて、殆んど起信論の組織と異なる所が無い。詳細の比較對照は曾て「起信論之研究」中にかゝげて置いたから、今は省略するが、兎に角、二者の間に緊密の關係のあつたことは爭はれない事實とすべきである。就中、二書の體裁に就いて比較して見ると、起信論はその組織及び順序が頗る整頓し、且つ文章及び用語も餘程精練されてゐるのに反し、占察經は冗漫な處があり、重複した點もあつて、いづれかといへば此經が先きに出來て、それに基いて起信論が造られたのではなからうかとおもはれる。そは兎に角、翻譯といひ、內容といひ、恠むべき點が甚だ多いので、此經

は法經等の勘定の如く疑僞に編すべきものと認められる。

第二節　唐懷廸譯と傳へられる大佛頂首楞嚴經

大佛頂首楞嚴經は具さに大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と題し、十卷の經である。譯人に關しては、高麗本に大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔二十三日辛丑、中天竺沙門般剌蜜帝於廣州制止道場譯出。菩薩戒弟子前正諫大夫同中書門下平章事清河房融筆授、烏萇國沙門彌伽釋迦譯語と署し、宋元明の三本も亦ほゞ之と同一である。これは智昇の續古今譯經圖紀に、

沙門般剌蜜帝、唐云極量。中印度人也。懷道觀方、隨緣濟度。展轉遊化、達我支那。乃於廣州制旨道場居止。衆知博達、祈請亦多。利物爲心、敷斯祕賾。以神龍元年龍集乙巳五月己卯朔二十三日辛丑、遂於灌頂部中誦出一品。名大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經一部十卷。烏萇國沙門彌伽釋迦譯語、菩薩戒弟子前正諫大夫同中書門下平章事清河房融筆受、循州羅浮山南樓寺沙門懷廸證譯。其僧傳經事畢、汎舶西歸。有因南使流通於此。

と記してゐるのに依つたのである。貞元釋敎錄第十四にかゝぐるところも亦之と同一である。然

るに開元釋敎錄第九には、此經を單に唐懷廸の譯となし、左の如くいつてゐる。

沙門釋懷廸、循州人也。住本州羅浮山南樓寺。其山乃仙聖遊居之處。廸久習經論、多所該博、九流七略粗亦討尋。但以居近海隅、數有梵僧遊止。廸就學書語復皆通悉。往者三藏菩提流志譯寶積經、遠召廸來以充證義。所爲事畢、還歸故鄕。後因遊廣府、遇一梵僧(未得其名)齎梵經一夾。請共譯之、勒成十卷。卽大佛頂萬行首楞嚴經是也。廸筆受經旨、兼緝綴文理。其梵僧傳經事畢、莫知所之。有因南使流經至此。

これは此經を以て名字不詳の一梵僧の齎す所となし、沙門懷廸之を筆受して以て譯出したとするのであつて、現藏の署名とは全く異なつてゐる。蓋し開元錄には斯樣に此經を懷廸の譯としてゐるのに、同人の作つた續古今譯經圖紀に改めて之を般刺蜜帝等の出とし、加ふるに翻譯の年月及び其の譯場までも明記したのは、多分當時此經に二本あつて、一本には唐懷廸譯と題し、一本には現藏の如く般刺蜜帝譯、房融筆受等の署名があつたからであらう。而して智昇はその中、先づ懷廸本を獲たから、開元錄中に上の如き說を揭げ、後更に房融の本を得、且つ又その譯出に關する傳說を聽取したから、續譯經圖紀中に彼れが如き詳說を加へたのであらう。但し房融本には恐らく元と現藏の如く懷廸の名がなかつたものと思はれるが、それを續譯經圖紀に懷廸證譯の語を加

へたのは、此二本の譯者の相違を和會せんとするの意に出でたものと見られる。貞元釋敎錄第十一大唐譯經三藏列名の標目中に、般剌蜜帝と懷迪の二人を別出して、各その下に一部一十卷經（即ち首楞嚴經）と注し、又長水子璿の首楞嚴經義疏注經第一に

> 大唐神龍元年乙巳歲五月二十三日、中天竺沙門般剌蜜帝於廣州制止道場譯。先是三藏將梵本汎海、達廣州制止寺。遇宰相房融知南銓。聞有此經、遂請對譯。房融筆受、烏萇國沙門彌伽釋迦譯語。翻經纔竟、三藏被本國來取、奉王嚴制、先不許出。三藏潛來、邊境被責。爲解此難、遂即去迴。房融入奏。又遇中宗初嗣、未暇宣布、目錄闕書。時禪學者、因內道場得本傳寫。好而祕之、遂流此地。大通（即神秀）在內、親遇奏經。又寫隨身歸荊州度門寺。有魏北館陶沙門慧振、搜訪靈迹、常慕此經。於度門寺遂遇此本、初得科判。又據開元中沙門智昇撰釋敎目錄二十卷其第九云、大佛頂首楞嚴經十卷、大唐沙門懷迪於廣州譯。迪循州人、住羅浮山南樓寺、久習經論、備諳五梵。因遊廣府遂遇梵僧、未詳其名。對文共譯、勒成十卷。經之題目、紙數文句、與今融本並不差異。迪筆受經旨、緝綴文理等。今詳二經、譯人雖別譯本是同。或恐迪融因證義各據流行故、今目錄書寫有異。不爾豈無一處差別、譯主名字何得未詳耶。二本既同。今解融本。

といつてゐるのは、皆即ち此經に元と二本あつて、一本には懷迪譯と書し、一本には般刺蜜帝譯、房融筆受と記してあつたことを證するのである。處が斯樣に一經に二種の譯人の署名があることは他に全く其例を見ないことで、これはその飜傳の極めて怪むべきものであることを告白するものと謂はなければならぬ。

今先づ懷迪譯出說に就いて少しく攻究して見ると、前引開元錄に懷迪は遠く召されて菩提流志の寶積の譯場に參じ、事畢りて故鄕循州に還り、後廣府に遊んで一梵僧と共に此經十卷を譯出したといつてゐるが、處が菩提流志の大寶積經翻譯は、中宗神龍二年(七〇六)を以て始まり、睿宗先天二年(七一三)を以て畢つてゐる。されば懷迪が事畢つて故鄕に還つたのは、先天二年已後に在るべきであるから、隨つて此經は同年已後の譯出でなくてはならぬ。然るに續古今譯經圖紀には、神龍元年五月譯出の說を取り、而も懷迪證譯としてゐる。これは明かに開元錄に矛盾し、自家撞著である。又彼の神龍元年房融筆受の說は、唐書第一百三十九房張李列傳に、房融は武后の時、正諫大夫同鳳閣鸞臺平章事となり、神龍元年貶せられて高州に死すと云ふのに合するやうであるけれど、房融が果して貶謫の身を以て直に高州を出でゝ廣府に逗留し、悠悠譯經に從事することが出來たか否か。又果して梵學を修め、梵經の筆受に堪能であつたか否か、それ等は皆大に疑ふべ

きものである。且つ般刺蜜帝幷に彌伽釋迦の事蹟は毫も文獻の徵すべきものがない。而も事畢つて舶に泛んで西歸すといひ、又ゆく所を知ることなしといふが如きは、梵僧を借り來つて此經の西來を證せんとする意圖といはざるを得ない。又子璿の房融入奏說、幷に大通在內親過奏經といふ說の如きも、亦虛構と認めなければならぬ。故に明錢謙益の首楞嚴經疏解蒙鈔第一之一に房融入奏の事を批議し、

按神龍元年正月中宗卽位。正諫大夫房融下獄、二月流融於高州、是年五月譯經制止。圖紀云、二十三日極量誦出一品。卽是譯經下筆時也。輟簡訖功未知何日。融流高州卒以貶死。安得遇中宗初嗣奏進此經

といひ、又大通在內過經の事を批議して、

按此經初譯在神龍元年五月、大通入滅在次年二月。譯場輟簡奏進、與大通道場得本、朔月之中豈能立辨。大通自萬歲通天元年於江陵召至東都凡五年、入滅於天宮寺。那得有隨身寫本携歸度門。南使之附經入京、懿公之受請得本、皆在開元至德間。今言神龍初寫本流布、殊非事實。譯人被責、房相不歸。本無入奏之事。今云大通在內親過奏經、其誰奏之、而誰過之耶。

といつてゐるが、これ洵に確論といふべきである。既に一經に二種の譯名のあることが甚だ怪むべきことであり、ましてその譯名の由來が共に亦怪いのであるから、此經の譯出に關する傳説は先づ信ずるに足らぬとせなければならぬ。恐らく懷迪の徒が先づ之を僞作して廣州傳譯の説を流布し、後更に之を房融貶謫の事實に附會して、以て房融筆受説を宣傳したのであらう。

蓋し支那に於ては斯樣に傳譯の怪むべきものがあるにも拘らず、夙に此經を眞典となし、智昇、圓照、惟愨等を始め、延壽、智圓、子璿、懷遠、仁岳、德洪、惟則、袾宏等の徒も悉く皆之を信じ、特に禪旨に契合する所があるので、宋代已後盛に珍重されたのである。然るに本邦には普照請來の當時より既に眞僞の論諍があつた。卽ち玄叡の大乘三論大義抄第三に、

言僞造者、此經本是先入唐沙門普照法師所奉請也。經本東流、衆師競諍。則於奈樂宮御寓勝寶感神聖武皇帝御代、仲臣等請集三論法相法師等而使檢考。兩宗法師相勘云、是眞佛經。掌珍比量與經量同不可謗毀等。論定畢卽以奏聞。奉勅依奏已畢　然寶龜年中使德淸法師等遣唐檢之。德淸法師承大唐法詳居士云、大佛頂經是房融之僞造、非眞佛經也。智昇未詳、謬編正錄。然彼法詳所出僞經之由甚可笑也。恐繁不述。德淸法師效詳士妄、而泥犁語亦傳本朝。可傷之深矣。

といってゐるのがそれである。之に依ると此經は請來の初から既に僞造として諍はれ、その結果、人を支那に遣して眞僞を確めんとしたことがわかる。又宗性の日本高僧傳要文抄第三には、延暦僧錄中の戒明の傳を引いて左の如く記してゐる。

寶龜十年、城中諸僧都集大安寺、連署欲奏廢大佛頂經。云是僞經、令戒明連署收取大佛頂焚燒。戒明不敢。何以故、毀滅大乘身壞命終、一念之間遍歷十方無間地獄、劫有窮盡。此如天授誦六萬香象經書生身入無間獄。戒明不敢連署。唐大曆十三年廣平皇帝、親請僧講大佛頂經。諸大德自連署、戒明不連署。因戒法師故大乘得存、令衆多僧脫無間獄苦。

これは蓋し德淸歸朝し、房融僞造說を傳へた結果として惹起された事件であらう。普寂の首楞嚴經略疏第一には

此經傳譯已來、信疑相半。其疑之者、或言、此經是房融作。神呪是他經說。或言、神呪是佛說、長行是後人僞造。或言、金剛智三藏幼在那爛陀寺、從勝賢論師學諸經論、後至南天竺受五部密藏。若彼師採諸經要顯密糅合以成此一部乎。其信之者言、此經顯如來藏之樞要、指妙明心之徑路。了根塵之明訣、照情妄之玄鑒。是智者遙拜之寶文、般刺剖膊之祕典也。雲棲云、有見楞嚴不獨義深亦復文妙、遂疑是丞相房融所作。夫譯經館番漢僧及詞臣居士等不下

數十百人、而一部之經始成。融不過潤色其文、非專主其義也。設融自出己意創爲是經、則融固天中天、聖中聖矣。而考諸唐史融之才智尚非柳韓元白之比、何其作楞嚴也。超孔孟老莊之先耶。嗟乎千生百劫、得過如是至精至微至玄至極之典。不死心信受而生此下劣乖僻之疑。可悲也、夫可悲也。寂曰、此辨乃使信之者倍深信樂則可得也。使其不信之者翻然起信則不可得也。應思。今且究察信疑之所由起焉。其之所以疑之多端、大要有二。一則傳譯未了之疑。謂般剌犯禁來私譯于制止、譯已便歸舶。斯其之可怪一也。房相筆受於貶謫之地、而進奏之朝。斯其之可怪二也。房相非柳白之才而綴此雄文、迪公匪什奘之智而出此玄籍。斯其之可怪三也。傳譯以後凡百有餘年間、有荊溪清凉等諸德恢倡敎乘、而言不及此經者何也。斯其之可怪四也。二則其說異常之疑。謂此經之中往往有方等諸經未曾有之奇說。如十二類生、三疊流變、七大、七趣、地位差別、諸天建立等是也。其所以信之則可察。寂往昔首鼠於信疑之間、遲慮之有年矣。邇時欲製之略釋甜膽思籌、於第一疑敢自裁斷。四之所怪一時銷得。而由其旨咿涉推義有憚此哉。別錄所懷諭諸同志。可見。此經之中其有異常之說、率名相施設之事耳。其於眞實義門則全符契於方等之玄猷。不應不依憑矣、第二之疑於是乎泯然。

といつてゐる。予は未だ普寂の所謂別錄なるものを見ない。故にその中に如何なる論旨が表白されてゐるかを詳かにしないが、然し由二其旨聊渉二推義一有レ憚二此載一といつてゐるのを見ると、彼れも亦僞造說に左袒したのではないかと想像される。既に傳譯に就いて多くの恠むべき點があり、又その內容に於ても方等諸經未曾有の奇說が少くないのであるから、如何に膽を甜めて思繹しても、それ等の疑恠が銷釋さるべき筈もないからである。

又此經は其の題下に一名中印度那爛陀大道場經於二灌頂部一錄出別行と記し、又同第七に四百三十九句の大神呪を出し、その初に大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉萬行品灌頂部錄出。一名中印度那蘭陀曼荼羅灌頂金剛大道場神呪と題してある。これは此經幷にその神呪を以て中印度那爛陀金剛大道場經中より錄出別行したものだとするのであるが、恐らくそれは阿地瞿他譯の陀羅尼集經序に、此經出二金剛大道場經一。大明呪藏分之少分也と記してあることから、思ひ付いたのであらうとおもはれる。大明呪藏とは前にも述べた如く義淨の大唐西域求法高僧傳卷下所載の毗睇陀羅必得家Vidyādharapiṭaka 即ち持明呪藏を指すのであるから、隨つて金剛大道場經は持明呪藏の一名と見るべきである。當時那爛陀寺にその呪藏の斷片が存してゐたことは義淨の傳ふる所であり、又陀羅尼集經は現に其の呪藏中より抄出したものと記載されてゐる所から、今此經の作者はそれ等の

事實に基き、此の首楞嚴經を以て亦彼の金剛大道場經中より錄出別行したものとなし、以て世人を瞞過せんと企てたものと認められるのである。又此經に首楞嚴の題名を附けたのは、いふ迄もなく首楞嚴三昧經から來たのである。蓋し此經は阿難が摩登伽女の爲に纏著せられ、その母の幻術によつて將に戒體を毀らんとした時、佛は卽ち神呪を以て之を救護せられたといふのを發端とし、阿難を對告衆として次第に根塵同源縛脫無二の理を說いたのであるが、就中、摩登女阿難誘惑のことは摩鄧女經、摩登伽經、摩登女解形中六事經、雜譬喩經卷下、及び舍頭諫太子二十八宿經等に皆記載されてあつて、頗る有名な說話である。今此經に此の說話を擧げて來たのは、無論それ等の諸經に依つたのであるが、然し之に托して縛脫無二の理を顯はすべく考へ附けたのは、彼の首楞嚴三昧經からヒントを得たのであらうとおもふ。首楞嚴三昧經卷下に、時魔衆中、二百天女深著₂婬欲₁。見₂此菩薩身色端正₁起₂染愛心₁、各作₂是言₁、是人若能與₂我從₁事、我等皆當₂隨順其敎₁と書いてあるが、それは阿難が今摩登伽の爲に纏著されたといふのと同一趣旨である。しかのみならず此經に頻りに縛脫無二の理を說いてゐるのは、彼經の魔界如佛界如、不二無別の說を承けたものに外ならぬのである。されば此經が首楞嚴を以て題名としたのは、卽ち彼の首楞嚴三昧經から其の敎旨を得たことを告白するものと認めなければならぬ。

又此經の敎旨は大乘起信論に基いたものも少くないやうである。此經には衆生の生死相續を以て衆生本有の常住の眞心性淨明體を知らざるに由るとなし、五陰六入十二處十八界は皆本如來藏妙眞如性なることを力說してゐるが、これは起信論の如來藏緣起の旨を紹述したものと見るべきである。就中、此經第一に一切衆生從無始來生死相續、皆由不知常住眞心性淨體といひ、又同第二に無始來失卻本心、妄認緣塵分別影事といふのは、起信論に一切衆生不名爲覺。以從本來念念相續未曾離念故、說無始無明といひ、又依於境界心起分別愛與不愛と說いてゐるのに當るやうであり、又此經第二に生滅與不生滅といひ、又不生滅性、淸淨本心本覺常住といひ、本如來藏妙眞如性といひ、第四に菩提心生、生滅心滅といつてゐるのは、皆起信論中の名目を取つたものといふべく、又同第四に譬如迷人於一聚落惑南爲北等といふのは、起信論に猶如迷人依方故迷、若離於方則無有迷とあるのを轉用したものとすべきである。されば此經は起信論からも學ぶ所があつたと見なければならぬ。同時に圓覺經が主として起信論に基いて其の敎旨を立てゝゐるのも、此經からヒントを得たものであることが察せられる。

又此經第五には眞性有爲空、緣生故如幻。無爲無起滅、不實如空華といふ一偈が揭げてあるが、これは掌珍比量と稱するもので、淸辯の大乘掌珍論卷上に載せてあるのである。蓋し淸辯が

俗有眞空を宗とし、法相家の所謂外無內有の主張を破さんが爲に、此の比量を製したことは頗る著名な事實である。今此經に之を揭げたのは、言ふ迄もなく彼論から取つたのである。然るに三論家に於ては、その所謂掌珍比量が此經に載錄されてある所から之を以て佛說の量となし、その主張を强めんとしたのであるが、法相の諸師は之に對して過失を附し、隨つて此經を僞妄とした。普照が始めて本邦に請來した時、兩宗の法師が此經の眞僞に就いて諍論を鬪はしたといふのは、卽ちこの比量が問題になつたのである。彼の大乘三論大義抄第三に、

問、佛量何出。答、大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經第五、佛說頌曰、眞性有爲空、緣生故如幻。無爲無起滅、不實如空花。言妄顯諸眞、妄眞同二妄。猶非眞非眞、云何見所見已上。問若爾既是佛經之量。何故唐界基廓等師敢生衆過。答、彼宗二傳。一云、此是僞造、非眞佛說。一云、眞是佛經。然佛經量與淸辯量言同意異。其意異故、論量有過、經量無愆。今將二條撿求彼宗、初敍僞造失、後述妄通之過。……今案、唐大興福寺惟愨法師疏云、唐神龍元年五月廿三日、中印度沙門般刺蜜帝於廣州制止寺道場對擧梵本、烏萇國沙門彌伽釋迦譯茲梵語、房融筆受已上。又唐智昇錄云、循州沙門懷迪遊廣左、遇一梵僧齎梵經一夾、共譯之勒成十卷。卽大佛頂萬行首楞嚴經是也。廸筆受經旨、兼緝綴文理已上。兩匠稱眞、法詳單

獨那爲僞造。若許佛經、清辯之量即應無過。爲欲誹毀清辯之量強稱僞造。欲謗弟子而師所說名之僞造、是則謗佛之與菩薩。謗佛菩薩是三塗因。可不悲哉。

といつてゐるのは、法相三論兩宗の主張を述べたのである。されど斯かる問題は宗見を以て決すべきものではなく、又この種の論諍に對して謗法墮獄を以て應酬することは印度已來の慣習であるけれど、斯様な壓迫を以て史實の究明を阻止せんとするのは固より不可である。

又此經第八には菩薩修道の階次として、乾慧地、十信、十住、十行、十迴向、煖地、頂地、忍地、世第一地、十地、等覺及び妙覺の五十七位を列ねてゐる。その中、十信十住十行十迴向十地等覺妙覺の五十二位は、疑ひもなく菩薩瓔珞本業經の說に依つたのであり、又乾慧地は大品般若經所說の三乘共十地の中の初地を擧げたのであり、煖頂忍世第一法の四地は大乘阿毘達磨雜集論等所說の五位の中の第二加行位を擧げたものであることは言を俟たぬ。蓋し菩薩の階位に關しては諸經論に種種の說がある。菩薩本業經、菩薩十住行道品經、菩薩十住經、菩薩內戒經、菩薩內習六波羅蜜經等には發意等の十住を說き、放光般若經第四、同第十三、大品般若經第六、同第十七、幷に大智度論第五十、同第七十五等には乾慧等の十地を說き、漸備一切智德經、十住經、十地經、相續解脫地波羅蜜了義經、解深密經第四、合部金光明經第三、菩薩善戒經第八、大般若經第五十

四、大寶積經第一百十五等には歡喜等の十地を說き、菩薩地持經第十、菩薩善戒經第九、瑜伽師地論第四十九等には種性地等の七地を說き、菩薩地持經第九、菩薩善戒經第八、及び瑜伽師地論第四十七等には種性地等の十三住を說き、大乘阿毘達磨雜集論第八、成唯識論第九等には資糧加行等の五位を說き、又華嚴の中には發意等の十住、歡喜等の十地の外に十行十迴向を加へて、すべて四十位を立て、菩薩瓔珞本業經には更に十信及び等妙二覺を加へて五十二位としてゐる。この中、發意等の十住、乾慧等の十地、歡喜等の十地說は各皆其の系統が異なつてゐるのである。それを今此經に瓔珞經に依りて五十二位を列ね、大品般若經に依りて乾慧地を出し、雜集論等に依りて更に煖頂忍世第一法の四位を擧げて來たのは如何にも蕪雜極まるものである。凡そ大品所說の乾慧等の十地幷に雜集論所說の資糧等の五位は、共に見道已前に唯だ二地を立てる說であつて、三十心を認めてゐない。又瓔珞の五十二位は地前に住行向三十心及び十信を立てる說であつて、此の他に四善根等を認めてゐない。此經の作者は所謂毘曇の說に准じて三賢の後に更に煖等の四善根位を加へたのであらうが、煖等の四位は大品般若の所謂性地であるから、若しも彼の經旨から言へば、瓔珞の三十心は卽ち其の乾慧地に當てなければならぬ。されば十住の前に更に乾慧地を置くのは全く重複することになる。又此經には乾慧地の前に更に三種の增進修行漸次を說き、

上の五十七位に合して之を菩薩の六十聖位としてゐる。これは或は天台の觀行五品等の說から來たものかも知れぬ。兎に角、この經の階位は諸種の異なつた說を雜糅したのであつて、隨つてその敎旨の一貫せぬのは寧ろ當然とせなければならぬ。

又此經第十には定中の魔境として十種の外道惡見を列ねてゐる。十種とは一に二無因論、二に四偏常論、三に四一分常論、四に四有邊論、五に四不死矯亂論、六に十六有相論、七に八無相論、八に八俱非論、九に七斷滅論、十に五現涅槃論である。此說は瑜伽師地論第八十七に、諸外道薩迦耶見以爲根本。有六十二諸惡見趣。謂四常見論、四一分常見論、二無因論、四有邊無邊相論、四不死矯亂論。如是十八諸惡見趣、是計前際說我論者。又有十六有見想論、八無想論、八非有想非無想論、七斷見論、五現法涅槃論。此四十四諸惡見趣、是計後際說我論者といふのから取つたことは明かである。又此經第六に觀音三十二應身の說を擧げてゐる。三十二應身とは一に佛身、二に獨覺身、三に緣覺身、四に聲聞身、五に梵王身、六に帝釋身、七に自在天神、八に大自在天身、九に天大將軍身、十に四天王身、十一に四天王國太子身、十二に人王身、十三に長者身、十四に居士身、十五に宰官身、十六に婆羅門身、十七に比丘身、十八に比丘尼身、十九に優婆塞身、二十に優婆夷身、二十一に女主身、二十二に童男身、二十三に童女身、二十四に天身、二十

五に龍身、二十六に藥叉身、二十七に乾闥婆身、二十八に阿修羅身、二十九に緊那羅身、三十に摩呼羅伽身、三十一に人身、三十二に非人身であるが、これは言ふ迄もなく法華經普門品の說に依り、兼ねて亦首楞嚴三昧經卷下に、或於四天下現爲轉輪聖王、或爲釋提桓因、或爲梵王、或爲四天王、或爲夜摩天王、或爲兜率陀天王、或爲化樂天王、或爲他化自在天王、或現長者、或現居士、或復現爲小王大王、或爲刹利、或爲婆羅門、或爲菩薩と說いてゐるのを承けたのであらう。

その他、此經第三に地水火風空根識の七大を擧げ、第四に流變三疊一千百千の說を出し、第七に衆生十二類の說を掲げ、第八幷に第九に六趣及び神仙の七趣を擧げ、又その神仙に地行仙、飛行仙、遊行仙、空行仙、天行仙、通行仙、道行仙、照行仙、精行仙、絕行仙の十種を列ねた如き、皆普寂の所謂方等諸經未曾有の奇說と稱すべきものである。特に其中、六趣の外に神仙を出し、且つ之に十種の別があることを說いてゐるのは、明かに道教思想の混入と認められる。

之を要するに此經は文章が雄健で、內容の論旨も亦幽玄の理義を含み、所謂如來藏を顯すの樞要、妙明心を指すの徑路と讚しても敢て過言でない。故に古來盛に之を愛翫し、和漢の疏釋は汗牛充棟も啻ならぬのである。蓋し諸家は多くは皆眼前の文理に心醉し、或は又宗見に囚はれて漫

然之を眞典としてゐるけれど、理義の幽玄なるのは首楞嚴三昧經を始め、諸大乘經論を渉獵した爲であり、文章の雄健なのは適ま梵本の翻譯でないことを告白するものといはなければならぬ。何年頃に製作されたものかと云ふと、旣にその經名が開元釋敎錄中に記載されてあるのであるから、唐開元十八年（七三〇）已前に在ることは明かであり、又陀羅尼集經序、幷に義淨の求法高僧傳から金剛大道場經の示唆を得たとすれば、久視元年（七〇〇）義淨の歸朝後に至つて編纂されたものとせなければならぬのである。

第三節　唐佛陀多羅譯と傳へられる大方廣圓覺修多羅了義經

大方廣圓覺修多羅了義經は、一卷の經にして略して圓覺經と稱し、その題下に罽賓三藏佛陀多羅譯と署名してある。開元釋敎錄第九に

沙門佛陀多羅、唐云覺救。北印度罽賓人也。於東都白馬寺譯圓覺了義經一部。此經近出、不委何年。且弘道爲懷、務甄詐妄。但眞詮不謬、豈假具知年月耶

といひ、續古今譯經圖紀、貞元釋敎錄第十二、幷に宋高僧傳第二等にも亦之と同文の記事を掲げ

てゐる。之に依ると此經は開元錄已前餘り遠からざる時代に世に現はれたものであることを知るのである。蓋し開元等の諸錄には皆かくの如く此經を以て佛陀多羅の譯出したものとしてゐるけれど、佛陀多羅は此經一部の外、他に何等の經論をも翻傳せず。且つ彼れは罽賓の人で、東都白馬寺に於て此經を譯したといふの外、他に何等の事蹟も傳つて居らぬ。智昇は眞詮不レ謬豈假レ具知二年月一耶といひ、此經の眞典たることは疑を容れぬ所であるから、譯出年代の如きは必ずしも追窮するを要せぬと斷じてゐるけれど、他の場合は兎に角、今此經の場合に事實を究明せず、斯かる結論を下すことは甚だ輕卒の至りといはなければならぬ。又宗密の圓覺經大疏卷上之二には、別に北都(太原)藏海寺道詮所造の圓覺經疏に依りて武周長壽二年（六九三）此經譯出の說を傳へてゐる。試みに其文を見ると、

敍二昔翻傳一者、開元釋敎目錄云、沙門佛陀多羅、唐云二覺救一。北印度罽賓人也。於二東都白馬寺一譯。不レ載二年月一。續古今譯經圖紀亦同二此文一。北都藏海寺道詮法師疏又云、羯濕彌羅三藏法師佛陀多羅、長壽二年龍集癸巳持二于梵本一方至二神都一、於二白馬寺一翻譯。四月八日畢。其度語筆受證義諸德具如二別錄一。不レ知下此說本約二何文一素承上。此人學廣道高、不レ合二孟浪一。或應二國名無一レ別但梵音之殊、待二更根尋一續當二記載一。然入藏諸經或失二譯主一、或無二年代一者亦多。古來諸德皆但以二所詮

義宗定其眞僞矣。

これは開元錄等に譯出の年月を載せざるも、道詮の疏には長壽二年譯の説をかゝげてゐることを指摘し、其説は何に基いたものかは知らぬが、道詮は學も廣く道も高かつた人であるから、曖昧孟浪なことを傳へる筈もなく、且つ罽賓と羯濕彌羅の國名も別ではないと思はれるといふので、宗密は不安を懷きながらも之に依りて長壽二年説を取らうとしてゐるのである。さりながらこの經が果して長壽二年四月に譯されたものとすれば、それより後二年卽ち天冊萬歲元年（六九五）撰述の大周刊定衆經目錄中に當然編錄されなければならぬ。然るに其事がないのを見ると、此經は天冊萬歲已後、始めて世に現はれたものであると同時に、道詮の傳説は好事者の揑造に係るものなることが推定され得るのである。又宗密の圓覺經大疏釋義鈔第四之上に依ると、彼れは嘗て南山豐德寺に於て雜經中に一本の圓覺經のあるのを見た。其本は年既に久しく、蟲が食つて殆んど悉く破爛し、唯だ經末の兩三紙のみ纔に識辨し得たに過ぎぬが、其の後記に貞觀二十一年（六四七）歲次丁未七月乙酉朔十五日己亥、在潭州寶雲道場譯了。翻語沙門羅睺曇揵、執筆弟子姜道俗、證義大德智晞、註紘懋今寶證脈と記してあつた。未だ其の眞虛を詳にしないが、或は前に已に曾て譯されたけれど、聞奏することが出來なかつた爲に、南方に滯りて此中の藏に入らなかつたものか、

然らざれば即ち詐謬であると云つてゐる。これは此經を以て南方遠隔の地に於て夙に譯出し、後帝京に齎らしたものとするので、前の首楞嚴の故智を襲つたものといはなければならぬ。宗密も未だ眞虚を詳にせずといひ、又然らざれば即ち詐謬であると云つてゐる位であるから、固より斯かる傳説が今日是認さるべくもないのである。

斯様に此經の飜譯に關する傳説はすべて信用し難いものであり、のみならず亦經の内容に就いて研究して見ても、支那撰述の痕迹が充分あらはれてゐる。先づ第一に大方廣圓覺修多羅了義經といふ標題が問題となるべきである。南條目錄には Mahāvaipulya-pūrṇabuddha-sūtra-prasannārtha-sūtra の梵語が宛てゝあるが、修多羅 sūtra は經の原語であるから、即ち此經の標題には、二種の經の字があることになる。宗密は大方等修多羅王經といふ經もあるといつて、それを例にしてゐるけれど、修多羅王經の名は其經が經中の王たることをあらはさんとするので、今の場合の圓覺經了義經の如く一の經題に二種の經名が併せ擧げてあるのと同一とすることは出來ぬ。圓覺修多羅の名は恐らく華嚴の圓滿修多羅から來たのであり、又了義經の名は大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の題目から導かれたものであらうかとおもふ。蓋し圓覺經の教旨は大佛頂首楞嚴經に基き、これに起信論の要義を織り込んだものと認められる。就中、其の根本思想たる

圓覺妙心の說は彼の首楞嚴の所謂如來藏妙眞如性を複說したものと見るべきであり、且つ圓覺の語も彼經第六の偈に、覺海性澄圓、圓澄覺元妙といひ、又各非圓覺觀といひ、又同第十に圓覺泯心と說いてあるのを承けたとすべきである。されば此經の題目は華嚴の圓滿修多羅からヒントを得、之に首楞嚴の圓覺及び了義の語を組み合せたものと見なければならぬ。又此經の本文は文殊師利、普賢、普眼、金剛藏、彌勒、淸淨慧、威德自在、辯音、淨諸業障、普覺、圓覺及び賢善首の十二菩薩が、佛に對して一問一答するといふ仕組になつてゐるのであるが、其中、彌勒章に輪廻は愛を以て根本となす等と說いてゐるのは、彼の首楞嚴經第四に諸世間父母子孫相生不斷、是等則以欲貪爲本といひ、又同第六に其心不婬則不隨其生死相續といふのを承けたと見るべきであり、又威德章及び辯音章に、奢摩他、三摩鉢提及び禪那の三觀を詳敍してゐるのは、彼の首楞嚴經第一に妙奢摩他、三摩、禪那最初方便といひ、同第九已下廣く五蘊に約して、禪那の現境、幷に三摩提、奢摩他を說いてゐるのを受けたのであり、又普眼章及び淸淨慧章に菩薩の修行漸次を擧げてゐるのは、彼の首楞嚴經第八に乾慧地の前に三漸次を說いてゐるのを承けたのであり、又文殊章に六塵緣影爲自心相、譬彼病目見空中華及第二月と記してゐるのは、亦彼の首楞嚴經第二に第二月の譬を擧げ、同第四に空華の喩を出してゐるのを承けたと見るべきである。されば

此經の敎旨は大佛頂首楞嚴經に負ふ所が少くないといはなければならぬ。

又此經の敎旨中、起信論に基いたものも甚だ多いやうである。宗密の圓覺經略疏卷上之一には、此經所顯の義旨と起信論の説とが合致する個處を指摘し、左の如く述べてゐる。

四分齊幽深者、約起信論明諸染法本末五重、以顯諸宗所詮分齊深淺。論中、初唯一心爲本源。二依一心開二門。一者心眞如門、謂心性不生不滅。二者心生滅門、謂依如來藏與生滅合名阿黎耶識。三依此識明二義。一覺義、謂心體離念等。二不覺義、謂不如實知眞如法一故不覺心起等。四依後義生三細。一依不覺故心動名業相。二依動故能見名轉相。三依見故境界妄現名現相。五依最後生六麤。一智相、二相續相、三執取相、四計名字相、五起業相、六業繫苦相。言諸宗所詮分齊者、謂人天乘唯齊業報、小乘唯後四麤、法相極於三細、終頓通詮本末方窮初一心源。初一心源卽此經圓覺妙心也。經標圓覺爲宗本故。説染淨法皆從覺心所現起故。（第一重）文殊章末卽眞如門。經名如來藏差別卽生滅門。（第二重）普眼一章卽始本覺。徹釋無明卽是不覺。（第三重）淨業一章卽三細二麤。（第四重）彌勒章初輪迴因果卽後四麤。（第五重）是知圓覺極盡五重。標云幽深良在斯矣。

これは起信論の本末五重の説述が、人天乘、小乘、法相及び終敎頓敎所詮の義旨に相當すること

を說き、而してその五重の敎旨が圓覺經中にも極め盡されてゐるとするのである。如何にも宗密の指摘した如く、此經の圓覺妙心は起信論の所謂如來藏心に當り、又文殊章の末に虛空性故、常不動故、如來藏中無起滅故、無知見故、如法界性究竟圓滿徧十方故等といふのは、卽ち起信論の心眞如門に當り、經の終りに此經を如來藏自性差別と名けるといふのは、如來藏心に隨緣の性があることを說いたと見るべきもので、起信の所謂心生滅門を意味するものといふことが出來る。又普眼章の初に菩薩の修行漸次を說いたのは卽ち起信の始覺に當り、覺性の平等不動を說くのは卽ち本覺に當り、次の金剛藏章に無明に關する三難を徵し、一一之を解說してゐるのは、正しく不覺に相當するといふべきである。又淨諸業障章に無始本起無明を拈提し、衆生は無始已來妄想して我相人相衆生相壽命相ありと執するが故に妄に憎愛の心を生ず等と說いてゐるのは、起信の三細幷に智相相續の二麤に當ると見るべきであり、彌勒章に輪廻は愛を根本となすことを說き、欲境に由りて諸の違順を起し、種種の業を造作すとなせるは、起信の執取相已下、後の四麤に當るといふことが出來る。されば此經の說述は大體起信論の敎旨を骨子としたものと認めなければならぬ。のみならず淸淨慧章に凡夫隨順覺性、菩薩未入地者隨順覺性、菩薩已入地者隨順覺性、及び如來隨順覺性の四種の隨順覺性を擧げてゐるのは、疑ひもなく起信論の不覺、相似覺、

隨分覺、究竟覺の四覺を說いたのであり、特に彼章に究竟覺の語を用ひてゐるのは、自らその由來する所を告白したものとすべきである。又彌勒章に

善男子、一切衆生由二本貪欲一發二揮無明一、顯二出五性差別不一レ等、依二二種障一而現二深淺一。云何二障。一者理障礙二正知見一、二者事障續二諸生死一。云何五性。善男子、若此二障未レ得二斷滅一名二未成佛一。若諸衆生永捨二貪欲一、先除二事障一未レ斷二理障一。但能悟二入聲聞緣覺一、未レ能三顯二住菩薩境界一。善男子、若諸末世一切衆生、欲レ汎二如來大圓覺海一、先當三發願勤斷二二障一。二障已伏卽能悟二入菩薩境界一、若事理障已永斷滅、卽入二如來微妙圓覺一、滿二足菩提及大涅槃一。

と記してゐるのは、宗密も指摘する如く起信論の根本無明及び六染心の說を擧げたと見るべきである。卽ち二障の中、理障は正知見を礙へ、事障は諸の生死を續くといふのは、起信論に根本無明を名けて智礙とし、無明所起の六染心を名けて煩惱礙となすに合し、又五性差別の說の中、二障未だ斷滅を得ざるを未成佛と名けるといふのは、無性を意味するもので、卽ち六染心の中の執相應染に當り、先づ事障を除き未だ理障を斷せず云云といふのは、聲聞緣覺の二種性を意味するもので、卽ち煩惱礙たる執相應染を遠離することに由りて二乘の解脫が得られるといふに當り如來の大圓覺海に汎ばんと欲するには勤めて二障を斷せんと願じ、二障已に伏すれば卽ち能く菩

薩の境界に悟入し、若し事理障已に斷滅すれば卽ち如來微妙の圓覺に入るといふのは、菩薩定性不定性を意味するもので、卽ち六染心の中の不斷相應染を捨することに由りて淨心地を得、分別智相應染、乃至根本業不相應染を遠離することによりて如來地に入ることを得るといふのに當るやうである。されば此一段の記事は法相の所謂五性各別說を以て起信論の六染心に配し、以て一性皆成を主張したものと認めなければならぬ。又此經の流通分に、假使有人純以七寶積滿三千大千世界以用布施、不如有人聞此經名及一句義。假使有人敎百恆河沙衆生得阿羅漢果、不如有人宣說此經分別半偈と說いてゐるのは、起信論の勸修利益分に、假使有人能化三千大千世界滿中衆生令行十善、不如有人於一食頃正思此法。過前功德不可爲喩といふのを覆述したものと見られる。又文殊章に無明の無體を說き、金剛藏章に無明に關する三難を提起してゐる如き、皆起信論の說に就き攻究を加へた結果といはなければならぬ。然るに起信論は曾て論じた如く頗る疑僞に亙る論書であり、又大佛頂首楞嚴經は上に論じた如く支那撰述の僞經と斷定すべきものであるから、若し圓覺經が果して此等の經論を所據としたとすれば、當然此經も亦支那撰述の僞經と推斷せられねばならぬのである。其他、此經中に五性各別の說を擧げ、平等性智の名を出し、及び菩提涅槃の二轉の妙果を說いてゐるのは、いふまでもなく唯識家の說を承けたの

であり、又卷末に此經を名けて頓悟大乘となす、頓機の衆生は此に從つて開悟し、亦漸修の一切の羣品を攝す等といつてゐるのは、當時流行の禪旨に影響せられた語と見ることが出來る。開元錄に此經近出と云つてゐるが、恐らく開元年間に至つて始めてあらはれたものであらうかとおもふ。首楞嚴と關係のあることは明かであつて、或は同一人の手に成つたものか、然らざれば其の一味部黨の製作に係つたものと推定される。宗密の圓覺經大疏卷上之二に依つて見ると、宗密已前此經の疏を造つたものが凡そ四家あるとし、

前後造疏解者、京報國寺惟愨法師、先天寺悟實禪師、薦福寺堅志法師、幷北京詮法師、總有其四。皆曾備計各有其長。愨遐經文、簡而可覽。實迹理性、顯而有宗。詮多專於他詞、志可利於羣俗。

といつてゐるが、この中、惟愨は宋高僧傳第六に唐大曆元年（七六六）首楞嚴疏三卷を製したと傳へてゐる。惟愨は圓覺經の作者でもあるまいけれど、首楞嚴と圓覺との兩經の疏を造つたとすれば、その一門の祖が此の兩經の撰述に關係したのではないかと疑はれる。永平道元の寶慶記に道元が此の兩經の眞僞に關し、その師天童如淨との問話を記し、

拜問云、首楞嚴經、圓覺經　在家男女讀之以爲西來祖道。道元披閱兩經而推尋文之起盡、

不レ同ニ自餘之大乘諸經一。未レ審ニ其意一。雖レ有下劣ニ於諸經一之言句上、全無レ勝ニ於諸經一之義勢上。頗有レ同ニ六師等之見一。畢竟如何決定。和尙示云、楞嚴經自レ昔有ニ疑者一也。謂此經後人構歟。先代祖師未レ會ニ見經一也。近代癡暗之輩讀レ之愛レ之。圓覺經亦然、文相起盡頗似也。

と言つてゐるが、以て道元の眼識の凡ならざることを知るべきである。

第四節　唐金剛智譯と傳へられる千臂千鉢曼殊室利經

本經は具さに大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大敎王經と題し、十卷あり。高麗藏及び明藏にのみ之を收め、宋元二藏には載錄して居らぬ。此經には總じて無生、無動、平等、淨土、解脫の五門を開き、その中、第一無生門に一切如來金剛祕密根本聖敎品、諸佛出現證修金剛菩提殊勝品の二品、第二無動門に十方大菩薩出助證悟聖力品、一切賢聖入法見道顯敎修持品の二品、第三平等門に祕密歸止觀照法性決擇心地品、一切菩薩修業如來三摩地聖性潛通加被品の二品、第四淨土門に不思議法界聖道如來眞如法藏自在聖智品、三賢菩薩入法住次第修行迴向菩提品の二品、第五解脫門に十聖菩薩入地等妙二位修學進入聖道成佛菩提解脫品の一品を立て、すべて五門九品を

分つてゐる。この中、無生等の五門に關しては、此經第一卷に、

是時毘盧遮那如來流出五智菩提一切法殊勝總持一切三摩地。根本祕密總有五門、攝一切法大乘修多羅。同一切佛心三藐三菩提、玄通勝義祕密法敎。云何而行次第。依說聖旨趣求、修學觀照得入此法門。一者牟尼世尊說入阿字觀本寂無生義。是毘盧遮那如來說。爲往昔千釋迦千百億化釋迦成道時、此佛因地作菩薩時、如來爲與說此阿字觀、修入根本清淨無生門。二者牟尼世尊說入囉字觀本空離塵義。是阿閦如來說。爲往昔千百億降伏魔民、無畏超勝自在佛說。是佛成道之時、此佛因地作菩薩時、如來與說此囉字觀、修入圓成實相無動門。三者牟尼世尊說入跛字觀本眞無染著離垢義。是寶生如來說。爲往昔千百億降伏貪根、普滿常足自在佛說。是佛成道之時、此佛因地作菩薩時、如來與說此跛字觀、修入法界眞如平等門。四者牟尼世尊說入左字觀本淨妙行義。是觀自在王如來說。爲往昔千百億降伏瞋根、無量壽無忍自在佛說。是佛成道之時、此佛因地作菩薩時、如來與說此左字觀、修入妙觀理趣淨土門。五者牟尼世尊說入曩字觀本空無自性義。是不空成就如來說。爲往昔千百億降伏癡根、難勝慧明自在佛說。是佛成道之時、此佛因地作菩薩時、如來與說此曩字觀、修入成就金剛菩提解脫門。

と記し、無生門を阿字觀毘盧遮那如來說、無動門を囉字觀阿閦如來說、平等門を跛字觀寶生如來

說、淨土門を左字觀觀自在王如來說、解脫門を曩字觀不空成就如來說としてゐる。蓋し阿 a 囉 ra 跛 pa 左 ca 曩 na は文殊の五字眞言、若しくは五字心陀羅尼と稱せられるもので、金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法、金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相等に各皆此の眞言の事を說いてゐるが、その中、文殊五字眞言勝相に此の五字の義を解し、

阿者是無生義、囉者淸淨無染離塵垢義、跛者亦無第一義諦諸法平等義、左者諸法無有諸行義、曩者諸法無有性相說言文字皆不可得義。

といつてゐる。今の五門の說は卽ち此の眞言勝相に依つたものと思はれるのであるが、しかし第二の囉字門を無動門と名けたのは、阿閦の譯名たる無動から取つたものゝ如く、第四の左字門を淨土門と名けたのは、彌陀卽ち觀自在王は西方淨土を以て表示せられるからであり、第五の曩字門を解脫門と名けたのは、北方不空成就は究竟解脫を意味するものと解した爲であらう。兎に角文殊の五字心觀門を以て一切三摩地の根本となし、一切の諸佛菩薩は皆此の觀門を修證して以て成佛すべきものなることを鼓吹したのである。

此經の譯者に關しては、高麗本には大興善寺三藏沙門大廣智不空奉詔譯と題し、唐不空の譯としてゐるけれど、南唐恆安の續貞元釋敎錄には、

千臂千鉢曼殊室利經十卷、一百六十紙

右一部十卷。亦是大弘敎三藏金剛智、開元二十八年於長安薦福寺譯。其經首序記分明。

と記し、金剛智譯としてゐる。これは蓋し此經の初に揭ぐる作者不詳の序に、金剛智譯出の說を傳へてゐるのに依つたのである。今左にその序の前半を擧げて見やう。

敍曰、大唐開元二十一年歲次癸酉正月一日辰時、於薦福寺道場內、金剛三藏與僧慧超授大乘瑜伽金剛五頂五智尊千臂千手千鉢千佛釋迦曼殊室利菩薩祕密菩提三摩地法敎。遂於過後受持法已、不離三藏奉事經于八載。後至開元二十八年歲次庚辰四月十五日、聞奏開元聖上皇、於薦福寺御道場內、至五月五日奉詔譯經。卯時焚燒香火起首翻譯、三藏演梵本、慧超筆授大乘瑜伽千臂千鉢曼殊室利經法敎。後到十二月十五日翻譯將訖。至天寶一年二月十九日、金剛三藏將此經梵本及五天竺阿闍黎書、並總分付與梵僧目叉難陀婆伽、令送此經梵本并書將與五印度南天竺師子國本師寶覺阿闍黎。經今不迴。後於唐大曆九年十月、於大興善寺大師大廣智三藏和尙邊更重諮啓、決擇大敎瑜伽心地祕密法門。後則將千鉢曼殊經本、至唐建中元年四月十五日、到五臺山乾元菩提寺、遂將得舊翻譯唐言漢音經本在寺、至五月五日沙門慧超起首再錄、寫出一切如來大敎王經瑜伽祕密金剛三摩地三密聖敎法門、述經祕義。諸佛出世應

物隨形。志求者智鏡玄通、念之者無幽不入。根緣感赴必藉此經。

之に依ると此經は開元二十八年（七四〇）五月金剛智が長安薦福寺に於て飜譯を始め、慧超之を筆授し、同年十二月に至つて譯了したものとすべきである。此序は作者の名を擧げて居らぬけれど、その文勢より察するに筆受者慧超の作に擬したものゝ如くである。慧超は新羅の人で、夙に海路南海を航して印度に入り、遍く聖蹟を巡拜し、歸途葱嶺以北の諸國を通過し、開元十五年（七二七）安西に歸還したことは、その著往五天竺國傳に依つて明かであるから、金剛智の譯場に參じて此經を筆受し、その經序を製することも有り得べきことゝせなければならぬ。隨つて若し此序の作者が慧超であるとすれば、その記事は珍重するに足るものとすべきであるが、然るに貞元錄第十四等に、金剛智は開元二十九年（七四一）八月を以て遷化したと傳へてゐるのに、此序には天寶一年（七四二）二月彼が此經の梵本等を梵僧目叉難陀婆伽に付して、師子國本師寶覺阿闍梨に送致せしめたといひ、天寶まで生存したとなし、又貞元錄第十六等に不空は大曆九年（七七四）六月遷化したことを記傳してゐるのに、此序には同年十月慧超が大興善寺大師大廣智三藏卽ち不空に重ねて瑜伽心地祕密法門を諮決したといつてゐる如き、すべて史實に合致しない。されば此序の記事は尤も杜撰にして、決して慧超の作などに歸すべきものでないことは明かとせなければならぬ。且つ又此

經が果して開元二十八年金剛智に依つて譯出されたとすれば、當然續開元錄幷に貞元錄（第三十七卷に此經名を列ぬるも後代の追記）等の金剛智譯經の條に載錄さるべき筈である。然るにそれ等の經錄には記載されず、譯經後二百餘年を經、南唐保大三年（九四五）恆安の纂集に係る續貞元錄に至つて始めて前記經序に依つて此經が追加せられたことは、その翻譯が金剛智などの手に成つたものでないことを證するものといふべく、又高麗藏に改めて之を不空奉詔譯としたのも、固より何等典據があつたわけではないことを知るべきである。

蓋し此經は他の一般の經とその體裁を異にし、全く註疏風に書かれてゐる。今左に二三の例を擧げて見ると、

爾時世尊則爲師子勇猛等及一切菩薩摩訶薩、說此大乘一切諸佛瑜伽祕密金剛三摩地根本經敎。於此經宗及體都有二門。云何說此經宗體有二門。一者淸淨實相爲宗、二者眞如法界爲體。（第一卷）

二者說諸佛出現證修金剛菩提殊勝第二品。（第二卷）

爾時如來次說無動門。就此五門之中第二門。云何次第得入無動門。一者入羅字觀本空離塵義、阿閦如來說圓成實相無動門。就此門中說有二品、一者先說十方大菩薩出助證寤聖力第三

品一、二者後演二一切賢聖入法見道顯教修持第四品一。（第三卷）

爾時釋迦如來當與二大衆一切諸大菩薩摩訶薩埵一、次第則說二如來金剛聖性平等觀門一。第三云何次第得レ入二平等門一。一者入二跛字一觀二本眞無染著離垢義一、寶生如來說法界眞如平等門。就二此門中一演有二二品一。（第六卷）

爾時釋迦牟尼如來說二菩薩修行次位一。第四云何次第得レ入二淨土門一。一者入二左字一觀二本淨妙行義一、觀自在王如來說妙觀理趣淨土門。就二此門中一說有二二品一。（第七卷）

第五云何次第得レ入二解脫門一。一者入二曩字一觀二本無性自性義一、不空成就如來說成就金剛菩提解脫門。就二此門中一說有二一品一。（第九卷）

これ等の書方は全く註疏風であつて、之を經と名けたことが抑も不可解である。更にその內容に就いて檢して見ると、五門を立て九品を分つてゐるけれど、九品の敍述が五門卽ち五智五佛の解說になつて居らぬやうであり、特に淨土門の二品、解脫門の一品の如きは、全く梵網經の菩薩階位說の註釋に過ぎない。總じて此經は梵網經に基いて構想されたものゝ如く、彼經の文旨に依つたと認められるものが甚だ多い。卽ち第七卷に、

往昔因地修二入菩提道一、一時成佛號名二千釋迦及千百億化釋迦一。毘盧遮那同共住二蓮華臺藏世界海一、

其臺周徧有千葉、一葉一世界爲千世界。毘盧遮那我今化度以爲千釋迦據千世界。後就一葉世界復有百億須彌山、百億日月、百億四天下、百億南閻浮提、百億菩薩、百億釋迦座。佛坐百億菩提樹下、各各說汝所問菩薩修行菩提薩埵心地法品。其餘九百九十九釋迦、各各化度現出千百億釋迦亦復如是。爾時毘盧遮那佛言、千華上佛是吾金剛聖性法智化身、千百億釋迦卽是千釋迦化身。吾已爲本源名爲毘盧遮那佛身。

といつてゐるのは、正しく梵網經上卷の文を寫したのである。而して此經獨特の主張たる千臂千鉢曼殊室利の說は、卽ち此の梵網盧舍那千釋迦の說から構想したのであつて、その事は經の第一卷に毘盧遮那如來淸淨心、出現大聖曼殊室利千臂菩薩金色身といひ、又千釋迦化現千百億釋迦顯現聖蹤身、流出曼殊室利身といつてゐるので知ることが出來る。千臂千鉢曼殊師利の說とは經の第五卷に、

曼殊室利知世尊聖意、則於自恣衆會之中當現神通聖德之力。應時出現丈六紫磨金色之身、坐於法界金剛性海百寶蓮臺之座。其曼殊身上著於百寶種種瓔珞妙寶天衣、頂背圓光、頂有五髻。頭上有七寶佛冠、頂戴五佛如來。菩薩身上現其大印手二百二十二、有千臂千手、手中各持吠瑠璃鉢。鉢中各各有一化佛、千釋迦同時出現。爾時釋迦牟尼如來則告之言、大迦葉汝

應當觀大士曼殊室利菩薩手中吠瑠璃鉢內諦看有何等相。大迦葉則從坐而起、便於世尊前頭面作禮而去。大迦葉則於曼殊室利前頭面禮敬訖、便於鉢內觀看。及見鉢中有百億三千大千世界、百億無色界、百億色界、百億六欲界。有百億須彌山、百億四天下、百億南閻浮提、百億娑訶世界、百億釋迦如來、百億千臂千鉢曼殊室利菩薩、百億迦葉。

と記してゐるのがそれである。これは曼殊室利の身に千手あり、一一の手中に各吠瑠璃鉢を持し、而してその一一の鉢中に各一の大釋迦と及び百億の小釋迦とがあるといふのであつて、即ち梵網經の蓮華臺藏世界を曼殊室利それ自體の身となし、彼の蓮華を繞ぐる千の華葉を千臂千鉢に擬したのである。千手觀音の說からヒントを得て、之を梵網經の千葉大釋迦說に組み合せたものと認められる。

又此經第五卷に大乘十重菩薩大戒持犯の法を明かし、十種の義を擧げてゐるが、これは梵網經の十重戒を受持する時、その心が無染無著なるべきこと等を說いたのであつて、即ち彼の十重禁に關する一種の解說と見るべきものである。又第七卷已下、廣く三賢十聖等覺妙覺の四十二位の階級を解說してゐるが、これは亦梵網經上卷の十發趣心、十長養心、十金剛心及び十地の菩薩修行の位次を註釋したものに外ならぬのである。その事は第七卷に、從初發心志求堅信、從堅信

忍行修入十發趣心、入堅法忍中行十長養心といひ、又從堅法忍行中修十長養心、入堅修忍中進行十金剛心といひ、又從堅修忍行中修十金剛心、入堅聖忍中修向十聖地と說いてゐるので知ることが出來る。卽ち梵網經所說の菩薩階位の註釋として參考にはなるわけである。又此經に十發趣心の前に十信を說き、十聖地の後に等覺妙覺を置き、總じて五十二位の階級を立てゝゐるのは、當時一般に行はれた菩薩瓔珞本業經の說に依つたのである。總じて此經は梵網經の說に基き、之に密敎の五智五佛思想を組み合せたものであつて、一面からは梵網經の註釋書といふべきものである。

蓋し梵網經は前述の如く譯出の事實明かでないのみならず、その內容にも疑ふべき點が多く、支那撰述の僞經と想定されるのであるが、然るに梁慧皎、隋智顗、唐法藏、勝莊、明曠、新羅元曉、義寂、太賢等の諸師は各その疏を作つて之を鼓吹し、特に金剛智が金剛頂經を譯出するに及んで、梵網經を以て金剛頂經の一部となすの說が起り、密家の間にも此經に對する關心が高められたやうである。卽ち唐不空の撰と傳ふる金剛頂經大瑜伽心地法門義訣卷上に、

此經(卽ち金剛頂經)有百千頌廣本、非此土所聞。並是諸佛大菩薩等甚深祕密境界相。亦非聲聞緣覺及人天小智之所聞知。此地梵網經兩卷、從此經中出淺略之行相也。

といひ、梵網經を金剛頂經中より出せる淺略の行相であるとしてゐる。これは彼經の梵本が十萬頌六十一品あると傳へられるので、それを金剛頂經廣本十萬頌說に結び付け、又彼經は盧舍那佛說菩薩心地戒品と名けられる所から、之を毘盧遮那如來說の所謂金剛頂經大瑜伽心地法門と同部の經としたものと認められる。而して今の千臂千鉢曼殊室利經に於て梵網經を骨子とし、これに金剛界五佛思想を織り込んで來たのは、多分此說を承けたのであらうと思はれる。曼殊室利經中には處々に心地法門の語を擧げ、又九品の中、第五に祕密歸止觀照法性決擇心地品の一品を立て、且つ經の第六卷には此の心地品の本文を省略することを記し、

就此門中演有二品、一者說祕密歸止觀照法性決擇心地第五品。已上一品敎法、於此敎法觀照決擇心地品者合於道場內祕授心地法、不應於此經顯說。合在瑜伽聖性品中別說密授觀門。

といつてゐる。これは此の決擇心地品の所說は道場內祕授心地法たる梵網經に合するが故に、此經に於ては改めて之を顯說しないといふので、即ち梵網經を以て曼殊室利經中の一品とするの意と解せられる。支那撰述と想定される梵網經が曼殊室利經に至つて大に價値付けられたことは、梵網の作者の欣快とする所であらう。

之を要するに此經は支那撰述の一種の註疏であつて、固より經典などゝ認むべきものでなく、

隨つて之を金剛智、若しくは不空の譯に歸する如きは、謬妄の甚だしきものといはなければならぬ。經の前序に

後則將千鉢曼殊經本、至唐建中元年四月十五日、到五臺山乾元菩提寺、遂將得舊翻譯唐言漢音經本在寺。至五月五日沙門慧超起首再錄、寫出一切如來大教王經瑜伽祕密金剛三摩地三密聖教法門、述經祕義。

と記してゐるが、これは建中元年(七八〇)五臺山に到つて此の經本を得、慧超は更に之を再寫し、且つその祕義を述べたことを傳へるのである。此の記事は固より信ずるに足らぬけれど、經の第五卷にも曼殊の鉢内に百億五頂山の金色淨土ありと說いてゐるのを併せ考へて見ると、此經は文殊の淨土として仰信された五臺山あたりで、唐末頃に製作されたのではないかと想はしめるのである。近時支那燉煌千佛洞中に於て千臂千鉢曼殊室利の二種の壁畫が發見され、その一は須彌山上の大寶蓮華に文殊趺坐し、髮は五髻にして寶冠を戴き、冠中に一佛あり、百寶の瓔珞環釧天衣を以てその身を嚴飾し、左右の第一手は胸前に屈して左手に鉢を持し、右手之を支へ、鉢中に釋迦を安じ、第二手は臍前に法界定印を契し、掌中に鉢を持して中に釋迦あり。更に菩薩身を周匝して六重行に二百臂二百鉢を畫き、その中、菩薩身に近き二重行の鉢中には各皆釋迦を安ずるも、

他の外部の四重行には唯だ鉢のみを顯はしてゐる。他の一は殆んど之と同一構想なるも、頂に五佛の寶冠を戴き、約三百五十臂を描いてゐる點が異なるのである。支那五代、若しくは宋初の作と認められるもので、卽ち今の曼殊室利經に依つて圖顯したのである。

第十一章　馬鳴造と傳へらるる大乘起信論

第一節　大乘起信論支那撰述私見

一　總敍　大乘起信論は、如來藏の敎義を詮明せし單なる一卷の書なるも、其の組織及び說述の體裁整備し、理論實踐を兼ね、文章亦雄渾なるを以て古來之を愛翫するもの頗る多く、其の注書の如き實に數百部の多きに上り、佛敎經論中、講習の盛なること蓋し斯論の右に出づるものなかるべし。然るに此論は、馬鳴菩薩の造、眞諦三藏の譯と傳へて、古今の學者多く之を怪まずと雖も、如來藏阿梨耶の敎義は龍樹の時代に尙ほ存せざれば、龍樹已前に出世せし馬鳴に此種の著作ありといふは大に疑ふべし。又眞諦の飜譯と稱するも、其の譯語の眞諦に似ざるものあるのみならず、譯出の事實に關しても亦怪むべきもの多く、且つ此論の文義を精査し、內容を研究するに、支那に於て撰述せられたりと認むべきもの少からざるを以て、予は今敢て起信論支那撰述の私見を公にし、以て大方識者の批判を仰がんとす。

予は久しき已前より起信論馬鳴造の傳說に關して疑問を懷き、明治三十五年一月「起信論の作者に就て」と題する一小論文を草し、始めて之を宗粹雜誌に投せり。其の後更に亦眞諦譯の傳說に就き疑を生じ、大正六年八月佛書研究誌上に「疑似經と僞妄經」と題し、仁王、梵網、瓔珞、灌頂、藥師、占察、大佛頂首楞嚴等の諸經の疑僞に亙ることを論ずる中、起信論も亦僞論の嫌あることを述べ、續いて大正七年一月、同八年一月、同九年八月の三回に涉り、宗敎界、哲學雜誌、東亞の光、佛敎學雜誌等に、起信論は支那撰述の僞論なることを論斷せり。後又大正九年十一月、佛敎學雜誌に「起信論と占察經の類同及關係」なる一文を投じ、起信論の學說が僞妄の占察善惡業報經と殆んど全同なることを指摘し、此の二書の關係に就いて推測を試むる所あり。予の論旨に關しては、村上博士は全然贊同の意を表せられ、數回論文を發表して、大に其の主張を闡明せられたり。羽溪了諦、常盤大定の二君は印度撰述の舊說を固守し、予及び村上博士の論說に對して辯難を加ふる所あり。就中、羽溪君は起信論を以て龍樹已前の馬鳴の造となし、常盤君は世親已後の作となせり。羽溪君の說は全く舊來の所傳を取れるものにして、予の論と相距る最も遠し。常盤君の說は龍樹已前の馬鳴を取らざる點に於て、予の明治三十五年頃の所見に近似するも、眞諦譯の舊說を墨守する點において予と尙ほ鴻溝あり。凡そ經論の眞僞を定むるには內容の

文義亦固より深く研尋を加ふべきも、而も其の譯者幷に譯出の事實如何は、自ら主たる考究の題目たらざるべからず。常盤君は此論を以て世親已後の作となすも、世親已後別に馬鳴なる菩薩ありて、果して此論を造れりとするか、其の意明ならず。然るに現存の文獻中には、世親已後に馬鳴の名を有せし菩薩あることを說くものなし。若しこれあらば乞ふ之を指示せよ。若し之なしとせば卽ち起信論は馬鳴の名を借れる假托の書と斷定せざるを得ず。果して然らば君は既に作者問題に於て殆んど予に同意せしものといふべし。但だ君は眞諦譯の舊說を株守するを以て、其の假托が印度に於て起れりとし、予は眞諦譯の傳說を否定するを以て、其の假托が支那に於て行はれたりとなすを異とするに過ぎず。

常盤君は起信論は楞伽經を所依とせしものなることを力說し、楞伽は印度に存したるが故に、隨つて此論は亦印度撰述たるを妨げずといひ、而して頻りに楞伽と起信との類同を指摘し、恰も之を以て自己の創見に係るかの如く吹聽せり。されど此論が楞伽を所依とすといふが如きは、古來の學者悉く皆之を唱へ、予も亦數十年前既に知悉する所にして、必ずしも君の指示を俟つべきに非ず。且夫れ楞伽は梁代已に二譯あり。一は四卷楞伽にして　劉宋求那跋陀羅の譯する所、他は十卷楞伽にして、後魏菩提流支の翻傳に係る。楞伽は勿論印度に存したるも、支那にも亦是の

如く夙に傳譯せられたれば、印度に於て此經を所依とし得ると同時に、支那に於ても亦之を所依とするを得べし。されば起信論が單に楞伽を所依とするの故を以て、印度撰述を證せんとするは、因明の所謂異品遍無性を缺き、不定の過を犯ずるものにして、卽ち人を首肯せしむるに足らずといふべし。是に於てか問題は乃ち此論が翻譯を經たるか否かによりて解決せられざるべからず。予は既に數同に亙りて此論が眞諦の翻譯に非ざるべきを考證し、又當時支那に於ける學派の趨勢を敍して、此論製作の極めて可能なる所以を說示し、のみならず、法經、惠均等の師亦夙に此論を疑うて僞妄となしたる事實を擧げ、ほゞ支那撰述の要旨を悉くす所あり。されど之に對して後更に常盤君の辯難あり。且つ予の說述に就きて尙ほ聊か其の遺を補ふべきものあるのみならず、從來の論旨を整理し、其の要を探るに便ならしめんが爲に更に今本論を草することゝなせり。讀者幸に之を諒せよ。

二　眞諦の譯經と起信論　起信論が龍樹已前の馬鳴の作に非ざることは今や學者一般の殆んど認むる所となり、改めて論述するを要せざるが如し。然るに隋費長房の歷代三寶紀等に梁代に眞諦三藏あり、此論を齎し支那に傳譯したりといふを以て、古來之を眞諦の譯本となし、馬鳴菩薩造の署名と相俟つて久しく世に信用せられたりと雖も、眞諦の譯經に關する事實を精研するに、

起信論譯出の傳說は頗る怪むべきものあり。蓋し眞諦傳譯の說は、隋法經の衆經目錄を除き、他の諸錄に悉く之を載す。然るに譯出の年月及び其の譯處は諸錄に記する所同じからず。歷代三寶紀第十一には、梁太淸四年富春陸元哲の宅に於て出すといひ、隋彥琮の衆經目錄第一には陳世の譯となし、開元釋敎錄第六には梁承聖二年癸酉九月十日、衡州始興郡建興寺に於て出すといへり。此の中、開元錄の說は舊譯起信論序に依りしこと錄に自ら記する所の如し。然るに今其序を檢するに大梁承聖三年歲次癸酉と記し、開元錄の所傳と一年の差あり。歲曆を按ずるに承聖三年は甲戌に當り、癸酉にあらず。故に法藏の起信論義記卷上には、改めて承聖三年歲次甲戌となせり。是れ干支を捨てゝ年號を取れるものにして、開元錄に二年癸酉に作るは卽ち干支に依り、年號を改めたるものなるや明かなり。蓋し經論の譯時には不明なるものあり、判明せるものあり、固より一準ならずと雖も、而も此論の如く多說あるものは他に其の類例を見ず。惟ふに費長房が太淸四年說を擧げ、富春陸元哲の宅に於て之を出すといふは、十七地論の譯時及び譯處に取りしものなるが如し。卽ち遁倫の瑜伽論記第一に、傳聞梁武帝時、眞諦太淸四年歲次庚午十月、往富春令陸元哲宅、爲擇瑘等二十名德翻十七地論、始得五卷と記するに依れば、眞諦は太淸四年十月、始めて陸元哲の宅に往きて十七地論を翻じたるを見るべし。然るに此論は五卷あり、且つ眞

諦の梁都に達したるは太淸二年なるを以て、當時方語未だ熟せず、恐らくは其の年に於て此論の翻譯を完成し得ざりしならん。若し然らば曷ぞ同年に於て起信論を譯出するを得んや。彥琮が太淸四年說を取らずして陳世の譯となし、又論序に新に梁承聖三年說を出せるは、皆長房の傳說の信ずべからざるが爲なるや必せり。兎に角、是の如く譯時譯處に異說あるは、此論翻譯の事實に怪むべきものあるを證するものといふべし。

隋法經の衆經目錄には此論を以て疑惑部に編し、其の理由を出して、人云眞諦譯。勘眞諦錄無此論。故入疑といへり。是れ卽ち此論が眞諦の譯出に非ざることを語るものにして、同時に長房等が眞諦の譯出となすは、漫然舊說を採用せしものなるを知るべし。既に眞諦錄を勘ふるに此論なしといへば眞諦の譯出に非ざること疑ひを容るべからず。されど世に尙ほ長房を信じて法經を信ぜざるものなきに非ず。羽溪、常盤兩君の如き是なり。故に予は嚮に此の二錄に就きてほぼ點檢を加へ、法經は其の鑑別極めて正確なるに反し、長房は杜撰にして到底日を同うして語るべからざるものあるを論せり。總體に亙りて此の二錄を比較することは紙幅の許さゞる所なるを以て、今は唯だ眞諦の譯經のみに就き之を見るに、法經錄には金光明已下凡そ二十四部を擧ぐるも、長房錄には疏釋を併せて六十四部を列ぬ。長房の六十四部の中、仁王般若經、十八部

論等は嘗て論じたる如く決して眞諦の飜傳に非ず。故を以て法經錄には此等の諸部を載せず。又長房錄に遺敎論一卷を擧ぐるも、法經錄には人云眞諦譯。勘眞諦錄無此論。故入疑の理由を附して之を疑惑部に編せり。是れ起信論を疑惑に編せし理由と全く同文なり。然るに遺敎論は別に論じたるが如く、羅什譯遺敎經の本文に就き、註解を加へたるものにして、決して梵夾の飜譯にあらず。加之、遺敎論は題して馬鳴菩薩造といひ、或は天親菩薩造と稱し、編述の體裁亦起信論に酷似す。法經が起信論と同文の理由を以て之を疑錄に編したるは頗る興味ありといふべし。其の他、長房錄に彌勒下生經、中論已下多數の經論を列ねたるも法經錄には之を錄せず。若し眞諦の譯經目錄に其の名を出さば、法經は之を錄せざるの理なし。されば長房は經錄を勘へず、眞僞を究めず、唯だ漫然世說に依りて玉石並べ載したるものといふべし。

法經、長房二錄を對比せば、何人も長房を捨てゝ法經を信用せざるべからす。されど長房悉く皆誤謬と斷ずるを得ず。玉石同架するも、猶ほ玉なきに非ざるが如く、遺敎等の諸論はたとひ眞諦の譯出に非ずとするも、起信一論は彼れの飜傳に係るやも未だ知るべからず。是に於て本文そのものに就き、更に勘査を加ふべきの要あるを以て、予は曩に本文中の用語を點檢し、其の中に眞諦の譯例に反する三個の證あるを指摘し、以て此論が斷じて眞諦の手に出でたるものに非ざることを

論述せり。三個の證とは、一は三身の名稱、二は修多羅說の用例、三は煩惱礙智礙の名目これなり。この中、三身の名稱は攝大乘論、佛性論、幷に金光明三身品の如き、眞諦譯として疑ふべからざる本には悉く法身應身化身、又は法身受用身變化身の語を用ひ、決して第三身を應身と名けず。然るに起信論には法身報身應身の語を用ひ、卽ち前の第二身の名を取りて之を第三身の稱となせり。是れ北方地論家の譯語に依りしものにして、此論が適ま眞諦譯に非ざることを傍證するものと謂ふべし。常盤君は撰述と翻譯とは同じからず、翻譯は原文の如何によりて異なるべしとなし、起信の梵本には、法報應と譯すべき原語を有し、攝大乘等の梵本には法應化と譯すべき原語を有したるに由るといふも、是れ甚だしき詭辯なり。攝大乘の梵本は今存せざるが故に、三身の原語が果して如何なるものなりしか知る能はざるも、後魏佛陀扇多の譯本には眞身報身應身の譯語を用ひ、眞諦の譯本には自性身應身化身の稱を用ひ、玄奘の譯本には自性身受用身變化身の語を用ひたり。同本異譯なるが故に、三身の原語は固より同一なるべし。然るに佛陀扇多は第二身を報とし、第三身を應とし、眞諦は第二身を應とし、第三身を化とす。されば原語は同一なるも、譯者によりて其の譯語を異にしたるを見るべし。加之、十地論、法華論、佛性論、攝大乘釋論等は皆世親の作に係る。故に其の中に擧げたる三身の原語は悉く同一なるべし。然るに十地、法華

の二論には、法身報身應身の稱を用ひ、佛性、攝大乘釋の二論には、法身應身化身の語を擧げたり。是れ豈に菩提流支は法報應の譯語を用ふるを例とし、眞諦は法應化を用ふるを例とするが爲に非ずや。されば起信論に法報應の譯語を擧ぐるは、北地菩提流支一派の用語を借用したるものなること明なりと謂ふべし。之を原語の異に歸して共に同じく眞諦の譯出となすが如きは、詭辯に非ずんば則ち上述の事理に闇きものと評せざるべからず。次に修多羅説の用例とは、此論には一も所引の經名を出さず。唯だ修多羅説と書してその文を擧ぐるの例なるを稱す。蓋し修多羅は經の原語なるも、經といはずして特に修多羅の語を用ふるも、亦即ち一種の譯例なり。然るに眞諦譯の諸論を檢するに多くは經名を出し、又經名を出さゞるも而も經説と書し、修多羅説と記したるもの一も之れ無きが如し。是れ豈に起信論は眞諦の譯例に反するに非ずや。曇無讖譯の菩薩地持經には專ら修多羅説と書し、菩提流支譯の十地論には多く經曰の語を用ひたるも、時には修多羅中説と記し、勒那摩提譯の寶性論には經言の語を用ふるも、亦修多羅説と書し、且つ如來藏經を如來藏修多羅、大般涅槃經を大般涅槃修多羅と書せり。之に依るに修多羅説の用語は、即ち北地譯家の譯例を學びしものと認めざるべからず。次に煩惱礙智礙の名目とは、此論には煩惱障智障といはず、特に煩惱礙智礙の名目を用ひたるを稱す。然るに攝大乘論を始め、眞諦の諸論に

は、悉く煩惱障智障の名目を用ひ、曾て煩惱礙智礙の語を出さず。是れ豈に此論の用語が眞諦の譯例に反するものに非ずや。十地論、寶性論を始め、北地の譯本にも亦皆煩惱障智障の語を用ひ、煩惱礙智礙の稱なし。されば此の名目は起信論獨特の用語といはざるべからず。常盤君は元曉の說を引き、二礙は二障と其の意全同に非ざるを以て、眞諦は特に苦心を加へて此の名目を作れりとし、却て之を眞諦の翻譯上に於ける用字の力量を示すものとなせり。されど是れ亦大なる詭辯に過ぎず。縱ひ二障二礙其の意全同に非ずとするも、同一原語に對して一を障と翻じ、他を礙と譯するの理萬々あるべからず。礙と障と字義に於て何等殊あるに非ず。障を礙と改めたりとて別に何等の意味を詮表し來るべきに非ず。但だ漢字の上に於て礙は障より雅なるを覺ゆるに過ぎず。然るに眞諦は譯に忠にして文飾を好まず。慧愷の攝大乘論釋序に

翻譯事殊難不可存於華綺。若一字參差則理趣胡越。乃可令質而得義不可使文而失旨。

といへるは、卽ち彼の平生の用意を語るものなり。されば眞諦は同一原語に對して譯を二三にし、又俗を捨て雅を取り、人をして其の旨に惑はしむるが如きことあるべからず。且夫れ常盤君は頗りに眞諦の文字上の力量を云々し、支那に在ること滿十九年、此土の音義を精解し、逆譯を待たずして翻譯を事としたりといひ、起信の大文字は實に其の手腕に由るとなせるも是れ甚だ怪むべ

し。起信論は歷代三寶紀に依るに梁太淸四年出とあり。眞諦は太淸二年始めて建業に達し、侯景の亂に遭うて難を東西に避け、寧處するに遑なし。曷ぞ唯だ一年を隔てゝ而も彼れが如き大文字を譯述するを得んや。君は起信論は東來後六年目の翻譯といへり。是れ論序の承聖二年癸酉說を取ること明かなり。然るに君は由來長房を信ずる淺からざるに、今何を以て長房の太淸四年說を捨てゝ論序の說を取れりや。且夫れ此の論序は後人の僞作にして、信ずるに足らざることは予が屢論じたる所の如し。之に對し君は尙ほ揚州智愷作を固執するか。若し固執せば其の論據如何。若し予の說に從つて僞作とせば、何ぞ自ら信ぜざるの說を擧げて未知の人を迷惑するや。是れ畢竟論の譯時を下し、文辭練習の歲月を成るべく多く眞諦に與へんとする意圖に外ならず。其の陋寧ろ憐まざるべけんや。

之を要するに、起信論は其の譯時譯處既に一定ならず、又眞諦譯として之を傳へたる長房錄の杜撰なるに反し、之を否認せし法經錄の頗る信ずべきものあり、且つ眞諦の譯語に就きて之を見るも、此論の用語は彼の譯例に反するもの少からず。是故に予は敢て此論を以て眞諦の傳譯に非ずと斷定せんとするものなり。加之、此論の組織及び說述は僞妄の占察經に殆ど全く類同し、且つ其の中には、仁王、瓔珞等の疑經を引き、又勝鬘、楞伽等の諸經論より拔萃せしと認むべき文

字章句甚だ多きのみならず、羅什、道生、僧肇等の説を破したりと見るべきものもあるを以て、此論は元と印度撰述に非ずして、卽ち支那に於て僞造せられたるものなるべきを斷定せんとするなり。之に對して常盤君は頻りに抗辯を呀し、法經錄にも幾多の不穿鑿の點ありとし、三身の名稱は原語の不同に由るといひ、修多羅說の用例の如きは些事に拘泥するものなりといひ、煩惱礙智礙の譯語は眞諦の文字上の力量を示すものなりといひ、仁王、瓔珞の引用に關しては尙ほ幾多の證明を要すべきものありといひ、諸經論より材料を蒐集して揑ね上げたと見らるゝには、餘まりに起信論の組織は偉大なりといひ、對治邪執の所破は餘まりに普遍的にして、支那撰述說の材料とするに足らずといひ、一一會釋を試むる所あるも、其の論旨は全然獨斷的にして何等根據を有せず。予を以て之を見るに君は予の論鋒を挫くべく、未だ十分の準備を有せざるものと謂はざるべからず。君が固持する眞諦譯說の論據は甚だ曖昧なり。君は兎角に此の問題を回避し、顧みて他を言はんとするが如き傾向あるも、眞諦譯說の成否は自ら印度撰述論の死活に關す。君若し果して印度撰述を固執せんと欲せば、須らく予の論旨に就き根柢より之を粉碎するの策を講ぜざるべからず。

三　起信論の學說と僞妄の占察經

起信論の學說が主として楞伽經に基けることは、改めて論

ずるを要せず。されど是れ唯だ如來藏阿梨耶に關する教義に就いて之を言ふのみ。眞生二門を開き、體相用三大を立て、始本二覺を分ち、三種發心を明かし、四信五行を列ね、奢摩他毘婆舍那を說き、淨土往生を勸むるが如きは曾て楞伽に見ざる所。故に此論は楞伽を所依とすといふも、そは唯だ生滅門の中の一半の教義に過ぎざるを察せざるべからず。

然るに現藏中、占察善惡業報經と題する二卷の經あり。其の下卷に出す所の說述を見るに、衆生心體の不生不滅自性淸淨を說き、離言依言の眞如を說き、眞妄を說き、無明熏習を說き、眞如熏習を說き、眞如の自體相用を說き、對治邪執を說き、三種發心を說き、奢摩他毘婆舍那を說き、一行三昧を說き、專念往生を說き、殆んど全く起信論の敍述と異ならず。是を以て予は曩に此の二書を對檢して委細に其の類同を比較し、起信論は楞伽の外、亦此經を所依とせしものなるべきを推斷し、且つ其の占察經は疑ひもなく僞經なることを指摘し、僞經を所依とする論が當然僞論たらざるべからざる所以を詮明せり。彼の賢寶の寶冊鈔第八には、新羅珍嵩が起信論を以て漸刹經に依りて造る所なりとし、而して漸刹經は僞經なるが故に起信論も亦即ち僞論たるべしと論せしことを記傳せり。珍嵩の文は左の如し。

探玄記第三私記青丘釋珍嵩云、馬鳴起信論一卷、依漸刹經二卷造此論。而道宣師目錄中云此經是僞

經。故依二此經一起信論是僞論也。

賢寶は此中の漸刹經を以て起世經となし、起世經は諸師同じく引用するが故に疑經と定むべからずといひ、以て會通するに足らずと附言せり。予夙に亦寶冊鈔の文を見ると雖も、起世經は十巻にして二巻にあらず、且つ世界建立の相を說けるものなるを以て、そは起信論の所據たるべからざるを察し、珍嵩の謂ゆる漸刹經に關して久しく疑問を有したりしが、頃日豐山快道の起信論義記懸談を讀み、其の中に古曰、漸刹者恐占察經事歟。漸刹、占察音相近故誤乎とあるを見るに及んで、始めて漸刹經は卽ち占察經なるを覺り、同時に珍嵩が早く既に予と同論を主張したることを知り、以て意を強うするに至れり。珍嵩の事蹟は詳ならざるも、東大寺圓超の華嚴宗章疏錄に、華嚴孔目記六巻新羅珍嵩述と記し、凝然の華嚴法界義鏡卷下には一乘法界圖記一巻珍嵩述を擧げ今の文に亦探玄記私記を引くに依り、其の華嚴の學風を承けたるを知り、又圓超錄は延喜十四年(九一四)の撰述に係るが故に、彼れの出世は遲くも晩唐代に在るを察すべきなり。されば唐代既に珍嵩によりて此論が僞妄の占察經に依るの故を以て僞論と斷ぜられたるを見るべし。

占察善惡業報經が僞妄の經なることは曾て詳論せし所にして、今更に辯を加ふるを要せず。又此經と起信論の說述とが殆んど一致することも、既にその中に指摘せし所によりて明了なり。但

たゞ此の經が果して起信論の所據となりしものか否か、換言せば起信論と此經との前後如何は別に究明を要すべきものあり。蓋し占察經は法經、長房の二錄に之をかゝげ、且つ開皇十三年（五九三）既に廣州の官司が此經に依りて塔懺の法を行ふ者を糺問し、奏して其の流行を禁ぜしめたりといへば、開皇已前の作に係ることは疑を容るべからず。又歷代三寶紀第十二に、近代の出に似たりといへば、其の製作が隋代を溯ること餘り遠からざるを知るも、諸藏內並に寫して流傳すといふに依れば、其の間亦多少の歲月を經過せしことを察すべく、兎に角、起信論とほゞ同代の作なりと認むるを得べし。然るに今二書の內容に就きて之を檢するに、起信論は其の組織整備し、文章用語亦精練せられたるに反し、占察經は義旨前後し、組織井然たらざるのみならず、文句冗漫にして、まゝ亦重複に亙ると認むべきものあり。若し此の二書が果して同代の作にして、しかも互に離るべからざる聯繫を有したりとせば、何人も起信論は後時の作にして、卽ち占察經に就きて其の組織を整正し、其の文句を潤飾したるものなるを首肯する所あるべし。且つ夫れ起信論には阿梨耶識を說き、又廣く心識を明かして、流轉還滅の相狀を敍述したるに、占察經には全く阿梨耶識に關する義旨を擧げず。是れ卽ち占察經は起信論に先ちて製作せられたることを證明するものと見るべし。若し之に反し、占察經は後出にして、彼の起信論に基き製作せられたるものとせ

ば、此經は卽ち如來藏緣起の敎旨中より其の骨子たる阿梨耶識を除外し、又一心二門三大の整備せる組織を改めて理路不整の敎義を唱道し、精練せる用語章句に代ゆるに冗漫の文辭を以てしたるものと謂はざるを得ず。是れ豈に有り得べきことならんや。故に予は起信論は後出にして、卽ち占察經を所依とし、以て其の大半の義旨を構成せしものなるべきを推斷せんとす。識者若し反證あらば乞ふ之を指示せよ。

四　起信論と地攝兩論の三身說　起信論所說の體相用三大は、一面より之を見れば卽ち佛身論なり。用大が報應二身なることは論に自ら之を說示し、體相二大が法身なることも眞如自體相の章下に明記する所なり。中に於て應身とは凡夫二乘の所見の佛身をいひ、報身とは初發意已上の菩薩所見の佛身を指し、共に眞如法身の用にして、卽ち佛の利他爲物の迹身なり。法身は卽ち如來の眞身にして、眞如の自體に名けたるなり。蓋し眞如の自體は平等一相にして、虛空の如く一切に周徧し、凡夫二乘菩薩諸佛に增減あることなく、又變異あることなし。卽ち絕對普遍の實性なるが故に之を體大と名く。眞如の相とは、彼の體の上の無量の功德相を稱したるものにして、所謂其の自體に大智慧光明、徧照法界、眞實識知、自性淸淨、常樂我淨、淸涼不變自在等の諸義を具足し、闕少する所なきが故に之を相大と名く。但し此等の諸義は體の上の屬性なるが故に、

在纏の眞如たる吾等衆生の如來藏心にも亦其の性を具有すと雖も、而も之を實現することは成佛出纏已後に在り。今起信論に於ては、總じてこれ等の體相二大を名けて如來の法身となすなり。然るに是の如く眞如の體相二大を總じて如來の法身となし、又菩薩の所見を報身、凡夫二乘の所見を應身となすことは、眞諦の攝大乘論幷に金光明三身品の所説に一致し、北方地論師の説に合せず。即ち攝大乘論釋第十三に依るに、

以何自性爲法身。一切障滅故、一切白法圓滿故、唯有眞如及眞智獨存。說名法身。……云。

何知此法依止法身。不離清淨及圓智。即如如、如如智故。

といひ、又合部金光明經第一三身品にも、爲欲滅除一切諸煩惱等障、爲欲具足一切諸善法故、唯有如如、如如智。是名法身と云へり。此の中、如如は起信の所謂眞如の自體にして、如如智は即ち大智慧光明等の相に當れり。又起信論に諸佛如來唯是法身智相之身、第一義諦無有世諦境界といひ、又

即此法身是色體、故能現於色。所謂從本已來色心不二。以色性即智故色體無形、說名智身以智性即色故、說名法身徧一切處。

といふは、即ち法身智身を總じて如來の眞身となせるものにして、如如及び如如智を法身と名くと

いふに正しく善く吻合するを見るべし。又攝大乘論釋の連文に

菩薩備受用此二法樂。若無應身則無此二受用法樂。故應身爲此二受用法樂因。

といひ、合部金光明經三身品に、諸佛如來爲諸菩薩得通達故說於眞諦。……是名應身といへるは、卽ち起信論に菩薩所見の身を報身（攝大乘の應身）と名くるに合し、又攝大乘論釋に

以此等事顯於化身。佛何故先住兜率陀天、後生人中。欲顯自身是天人類。以天人是聖道器故、欲示爲天人師攝利同類故。

といふは、卽ち起信論に凡夫等の所見を應身（攝大乘の化身）となすに合致す。加之、起信論に六道所見不同の種種異類の身を亦應身と名けたるは、金光明の唯化非應の句に當ると見るべく、されば起信の三身說は攝大乘及び金光明に基けるものと認定せざるべからず。

地論一派の三身說は之と大に異あり。卽ち攝大乘等には法身を以て佛の眞身となし、後の二身を利他爲物の迹身となすも、地論一派に於ては法報二身を眞身とし、唯だ應身を迹身となせり。菩提流支の金剛仙論第八に、

明佛有二種。一法身佛、古今湛然　體性圓滿、非修得法。此卽性淨涅槃。二者報佛、藉十地方便修行因緣、本有之性顯用之時名爲報佛。卽方便涅槃。

といひ、又同巻に以㆓修行因縁㆒顯㆓本有法身㆒以爲㆓報佛㆒といひ、同第四に既有㆓報佛㆒、必有㆓應佛影像之用㆒といひ、又同第三に言㆑佛者是應化佛。非㆓眞佛㆒者非㆓是法報二種眞佛㆒也といひ、同第九に法報二佛無㆓去來㆒、應佛有㆓去來㆒といへり。是れ皆法身を以て本有の體となし、報佛を以て修行所顯の身となし、應佛を以て衆生攝化の影像の用となせるものにして、卽ち法報二佛を眞とし、應佛を非眞となすの説なり。又慧遠の大乘義章第十九(三佛義)に、地論及び金剛般若論に依りて廣く三佛の義を明かし、其の中に、

三佛皆用㆓眞識㆒爲㆑體。眞識之心本隱今顯説爲㆓法身㆒。卽此眞心爲㆑緣熏發、諸功德生説爲㆓報佛㆒。地經宣㆓説莊嚴具譬㆒正顯㆓此義㆒。如來藏中眞實緣起法門之力、起㆓種種化㆒説爲㆓應佛㆒。

といへり。是れ卽ち本有の如來藏眞識が成佛の時に至て顯はるゝを法身とし、有作の緣に熏發せられて、眞識の體の上に諸の功德の相生ずるを報佛とし、緣起法門の力に由りて種種の化を起すを應佛となすの意にして、金剛仙論に同じく法報二佛を如來の眞身となし、應佛を利他爲物の迹身となせるものなり。故に慧遠は北地の三身を以て開眞合應となし、前の攝論の三身を以て開應合眞となせり。又吉藏の法華玄論第九に、

若法華論明㆓三身㆒者、以㆓佛性㆒爲㆓法身㆒、修行顯㆓佛性㆒爲㆓報身㆒、化㆓衆生㆒義爲㆓化身㆒。若攝大乘論所

㆑明、隱名㆓如來藏㆒、顯名爲㆓法身㆒。則此二皆名㆓法身㆒。就㆓應身中㆒自開爲㆓二㆒。化㆓菩薩㆒名㆓報身㆒、化㆓二乘㆒名㆓化身㆒。或云、化㆓地上㆒名㆓報身㆒、化㆓地前㆒名㆓化身㆒。地論、法華論是菩提留支所㆑出。攝大乘是眞諦三藏所㆑飜。此三部皆天親之所㆓述作㆒、而明㆑義有㆑異者、或當㆘譯人不㆑體㆓其意㆒㆖。今欲㆓融會㆒者、衆經及論或二身、或三身、或四身。今總束爲㆓四句㆒。一合㆑本合㆑迹。如㆓金光明但辨㆓一本一迹㆒也。故云、佛眞法身猶如㆓虛空㆒、應㆑物現㆑形如㆓水中月㆒。二開㆑本開㆑迹。如㆓五凡夫論明㆑有㆓四佛㆒。開㆑本爲㆓二身㆒、一法身、二報身。法身卽佛性、報身謂修因滿顯㆓出佛性㆒。開㆑迹爲㆓二身㆒、化㆓菩薩㆒名㆓舍那㆒、化㆓二乘㆒名㆓釋迦㆒也。三開㆑本合㆑迹。如㆓地論、法華論所㆑明。開㆑本謂二身。謂佛性是法身、佛性顯爲㆓報身㆒。四開㆑迹合㆑本。如㆓攝大乘所㆑明、合㆓佛性及佛性顯㆒皆名㆓法身㆒。開㆑迹爲㆑二、化㆓菩薩㆒名㆓舍那㆒、化㆓二乘㆒名㆓釋迦㆒。此皆經論隨㆑義說㆑之。悉不㆓相違㆒。衆師不㆑體㆓其意㆒、故起㆓諍論㆒耳。

といへり。是れ地論、法華論の三身を以て開本合迹となし、攝大乘の三身を以て開迹合本となせるものにして、慧遠の眞應開合と其の意相同じといふべし。蓋し地攝兩論の三身說は其の分類同じからずと雖も、內容は則ち殊ならず。攝論に於ては如如及び如如智を合して一の法身とし、地論は如如を法身、如如智を報身とす。又攝論は菩薩を化するを應身、二乘凡夫を化するを化身と

し、地論は卽ち此の二を合して一の應身となす。故に此の兩說を綜合せば自ら四身論を生ぜざるべからず。五凡夫論に法報舍那釋迦の四佛を明せるは卽ち其の綜合論なるや疑を容れず。然るに五凡夫論は法經の衆經目錄第五に人造僞妄となし、已下諸錄悉く之を僞論となせり。之に依るに親光の佛地論已前、既に早く支那に於て兩說調和の四身論の唱道せられたるを見るべし。

起信の三身說は卽ち上に述ぶる如く攝論一派の開應合眞說と相同じ。然るに彼の體相用三大の說を吟味するに、その論旨は地論の開眞合應說を取れること明かなり。何となれば體大は眞如の體性なるが故に正しく其の法身に當り、相大は體の上の大智慧光明等の諸義を指すが故に其の報身に當り、用大は諸佛自然の不思議の業用なるが故に正しく其の應身に當るを以てなり。されば起信論は地論の三身說によりて體相用三大の義旨を建立し、攝論の三身說によりて法報應三身の意義を規定したるものと謂ふべし。加之、眞如法身を以て衆生の心體となし、又摩訶に體大の義ありといふが如きは、菩提流支の金剛仙論に既に唱ふる所なれば、起信の三大說はヒントを菩提流支に得たるものと認めざるべからず。金剛仙論第二に

解知我之所有眞如佛性無爲法身、衆生所有眞如佛性無爲法身、亦復如是一體平等無二無差別。於此理中不自見我是菩薩修行之人有眞如法身、彼是衆生不修行者無眞如法身。

といひ、又一法身上有二三種名一。或覆二法身一全不淨者名爲二衆生一、修行斷レ惑半淨半不淨名爲二菩薩一、十地行滿斷二惑障一盡、具足淸淨者名レ之爲レ佛。若據二眞如等有一レ法身彼此無レ二。故曰二一體常心一也といへるは、卽ち衆生と如來法身の一體平等無二無別を說けるものにして、起信の體大の義に當るといふべし。又その連文に

大乘之義乃有二無量一、且略辨二四種一。一者體大。明下大乘之體苞二含萬德一出中生五乘因果上。故名二體大一也。

とあるは、恐らく彼の體大說の由て起りし基因なるべし。又如來藏に摩訶衍の稱を立つることは、南岳慧思も亦唱ふる所にして、彼の法華經安樂行義に甚深如來藏、畢竟無二衰老一、是名二摩訶衍一といひ、又云何復名二如來藏一、云何名爲二摩訶衍一、云何復名二大摩訶衍一とあり。慧思が起信論を見ざることは蓋し疑を要せざれば、當時如來藏を稱して摩訶衍と名くるの說も流行せしことを知るべく、されば起信三大の敎義は北地の說を承けたること明かなりといふべし。

常盤君は予が嚮に草せる佛身論に對し、楞伽にも亦報身の思想あることを指摘し、複雜なる理路を辿りて煩しく南北調和の材料を提供するに及ばずとなし、且つ佛身論の如きは論の一題目に過ぎずして、中心の組織に觸れずと辯疏する所あるも、是れ一には本論に對し尙ほ硏討の足らざ

るを告白するものと許せざるべからず。此論の體相用三大の說が、北地の佛身論に淵源することは先回の論文にも縷々として辯せし所。君若し此の說を否認せば、宜しく反證を擧げて予が蒙を啓くべし。若し之を首肯せば、何故に起信一論の根本綱格たる三大の說を以て論の中心組織に觸れずといふや。且夫れ君は楞伽にも報身思想ありといへり。是れ良に言ふ所の如し。されど其の所謂報身は果して如何なる意義の報身なりや。起信の報身と同異如何。按ずるに四卷楞伽第一の偈に、云何爲㆓化佛㆒、云何報生佛、云何如如佛、云何智慧佛の句あり。慧遠の大乘義章第十九には、判じて之を開眞合應の四佛となせり。即ち其の文に依るに、

開㆑眞合㆑應以說㆓四者、如㆓楞伽說㆒、一應化佛、二功德佛、三智慧佛、四如如佛。故彼經言、云何應化佛、云何功德佛、云何智慧佛、云何如如佛。四中初一是佛應身、後三眞身。以㆑應爲㆑一、眞分爲㆑三。是故名爲㆓開眞合應㆒。就㆓眞三中㆒功德智慧是佛報身。報德雖㆑多要唯福智。福名㆓功德㆒、智名㆓智慧㆒。如如一種是佛法身。

といひ、又金剛仙論第八にも法身上有㆓功德智慧二種莊嚴㆒。眞如解脫色、萬德圓滿無㆑所㆓缺少㆒。以㆓修行因緣㆒顯㆓本有法身㆒、以爲㆓報佛㆒と云へり。之に依るに楞伽の報身なるものは、福智圓滿の眞身にして、起信の所謂菩薩能化の報身に同じからざるを見るべし　又十卷楞伽第一には何等爲㆓化

佛㆒、何等爲㆓報佛㆒、何等如如佛といひ、又同第二に三佛說法の義を出せり。慧遠は亦之を釋して、應佛如來は眞を隱して物に隨ふ、故に名けて應となす。法報は說くと雖も、眞德を顯班して他をして趣入せしむ。眞德を隱して曲げて物に隨ふに非ず。故に應と名けずといへり。是れ亦法報を眞とし、應を迹となせるものにして、起信の報應共に之を迹となすに同じからず。既に楞伽に報身思想あるも起信の說に合せざる斯の如し。曷ぞその所據たることを得んや。

五　起信論と楞伽經の心識說　起信論生滅門の下には阿梨耶識、五意、及び意識を擧げ、廣く流轉還滅の相狀を明せり。阿梨耶識は楞伽、地論、幷に攝大乘等の諸經論に盛に宣說する所にして、瑜伽一派の根本思想なり。五意は所謂枝末不覺にして、梨耶本識を所依として轉ずる心の諸相をいひ、意識は卽ち分別事識にして、六塵の境界を攀緣し、之を分別する六識心をいふなり。此の中、意識は婆沙等の所謂六識なるを以て、之に關し別に細論を要せず。五意は所謂業識、轉識、現識、智識、相續識にして、又無明業相、能見相、境界相、智相、相續相と名く。然るに是の如き五意の次第は諸經論に之を出さず。全く起信一論特有の說といふべく、但し其の名稱は宋魏二譯の楞伽の中に之を見出すを得べし。卽ち四卷楞伽第一に諸識を說く中、

諸識有㆓二種生住滅㆒。非㆓思量所㆒㆑知。諸識有㆓二種生㆒、謂流注生、及相生。有㆓二種住㆒、謂流注住、

及相住。有二種滅、謂流注滅、及相滅。諸識有三種相、謂轉相 業相、眞相。大慧、略說有三種識、廣說有八相。何等爲三、謂眞識、現識、及分別事識。大慧、譬如明鏡持諸色像、現識處現亦復如是。大慧、現識及分別事識、此二壞不壞相展轉因。大慧、不思議熏、及不思議變是現識因。大慧、取種種塵、及無始妄想熏是分別事識因。大慧、若覆彼眞識種種不實諸虛妄滅、則一切根識滅。大慧、是名相滅。大慧 相續滅者、相續所因滅則相續滅、所從滅及所緣滅則相續滅。大慧、所以者何。是其所依故。依者謂無始妄想熏、緣者謂自心見等識境妄想。大慧、譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是。大慧、若泥團微塵異者非彼所成。而實彼成。是故不異。若不異者、則泥團微塵應無分別。如是大慧、轉識、藏識、眞相若異者藏識非因。若不異者轉識滅、藏識亦應滅。而自眞相實不滅。是故大慧、非自眞相識滅、但業相滅。若自眞相滅者藏識則滅。大慧、藏識滅者不異外道斷見論議。

とあり。此の中、轉相、業相、及び現識、轉識の語は、起信論の作者によりて五意又は五相の一として採用せられたるを見るべし。又十卷楞伽第二の譯文は左の如し。

諸識生住滅、非思量者之所能知。大慧、諸識各有二種生住滅。大慧、諸識二種滅者、一者相滅、二者相續滅。大慧、諸識又二種住。一者相住、二者相續住。大慧、諸識有二種生。一者相

生、二者相續生。大慧、識有三種。何等三種、一者轉相識、二者業相識、三者智相識。大慧有八種識、略說有二種。何等爲二、一者了別識、二者分別事識。大慧、如明鏡中見諸色像。大慧、了別識亦如是見種種鏡像。大慧、了別識、分別事識、彼二種識無差別、相迭共爲因。大慧、了別識、不可思議熏變因。大慧、分別事識、分別取境界、因無始來戲論熏習。大慧、阿梨耶識虛妄分別種種熏滅、諸根亦滅。大慧、是名相滅。大慧、相續滅者、相續因滅則相續滅。因滅緣滅則相續滅。大慧、所謂依法依緣、言依法者謂無始戲論妄想熏習。言依緣者謂自心識見境界分別。大慧、譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是、非異非不異。大慧、若泥團異者非彼所成。而實彼成、是故不異。若不異者泥團微塵應無差別。大慧、如是轉識、阿梨耶識、若異相者不從阿梨耶識生。若不異者轉識滅、阿梨耶識亦應滅。而自相阿梨耶識不滅。是故大慧、諸識自相滅、自相滅者業相滅。若自相滅者阿梨耶識應滅。大慧、若阿梨耶識滅者此不異外道斷見戲論。大慧、彼諸外道作如是說、所謂離諸境界相續識滅、相續識滅已卽滅諸識。大慧、若相續識滅者、無始世來諸識應滅。

此の中、轉相識、業相識、智相識及び相續識の語は、今の五意又は五相の名稱に相同じ。されば起信論五意の說は、楞伽宋魏二譯の心識說を合糅して、以て新義を構成せしものと認めざるべか

ず。五意の名稱は是の如く楞伽に取ると雖も、其の意義は頗る經と乖角あるが如し。蓋し四卷楞伽には諸識の相に三種の別あることを說き、轉相、業相、眞相の名目を擧げ、十卷楞伽には轉相識、業相識、智相識の語を擧ぐ。今此の起信論の五意の中、業識、轉識及び智識の名稱は、卽ち十卷楞伽に取れること疑ひを容れず。然るに此の三相は元と諸識の相を分別したるものにして、識そのもの丶分類に非ず。就中、轉相は梨耶藏識が境界の爲に動ぜられて、轉じて七識となるの相を稱したるものにして、隨つて轉識は卽ち七識を意味す。前引楞伽の文に微塵泥團の譬喩を擧げて、梨耶と轉識との不一不異を示し、又四卷楞伽第一の偈に、藏識海常住、境界風所ㇾ動、種種諸識浪、騰躍而轉生といふは皆其の意を明かにせるなり。されば今起信論に之を五意の第二となし、業識に次いで起る特種の能見相となせるは則ち經意に當らずといふべし。又業相は心が業を集むるの相を說けるものにして、卽ち心は集起を義となすの意に取りしものなるが如し。四卷楞伽第一の偈に心名₂採集業₁といひ、十卷楞伽に心能集₂諸業₁といひ、七卷楞伽に心能積₂集業₁といへるは、皆其の意を示したるものと見るべく、又前引の文に非₂自眞相識滅₁、但業相滅といへるは、卽ち異熟の果を招くべき業種の滅を意味するものと見るべきを以てなり。されば今起信論に之を五意の第一とし、不覺に依るが故に心動ずるを名けて業となすといふは、則ち經の元意に當らずと謂ふ

べし。又智相は四卷楞伽の所謂眞相にして、卽ち識の智性を意味す。彼の文に自眞相實不レ滅といひ、又若自眞相滅者藏識則滅。藏識滅者不レ異二外道斷見論議一といふに依りて、眞相は卽ち識の自體を指せるものなるを知るべく、されば今起信論に之を五意の第四とし、境界に對して愛非愛を分別する心となせるは、全く經意に乖角するものとせざるべからず。

又四卷楞伽に識の分類を明かし、廣說すれば八種あり。略說すれば眞識、現識、分別事識の三種ありといひ、十卷楞伽には略說すれば了別識、分別事識の二種ありといへり。此の中、分別事識は卽ち意識にして、六識を總稱す。起信論に屢〻分別事識の名を擧ぐるは卽ち此の經說に取れること言を俟たず。現識は十卷楞伽の所謂了別識にして、境界の相を影現するの識なり。四卷楞伽に、譬如三明鏡中持二諸色像一。現識處現亦復如レ是といひ、十卷楞伽に如三明鏡中見二諸色像一。了別識亦如レ是見二種種鏡像一といへる是なり。是れ蓋し成唯識論の所謂賴耶相分に當るが如きも、其の識體は恐らく第七識なるべし。何となれば既に廣說八種略說三種といへば、略說の三識は卽ち廣說の八識を略攝したるものと見ざるべからず。然るに略說の中、分別事識は前六識にして、眞識は卽ち第八藏識なること疑を容るべからされば、現識は當然第七識ならざるべからざるを以てなり。曇延、并に慧遠が起信の三細を以て第七識に配當したるは、適ま其の傍證に供するを得べし。元

曉及び法藏等が三細を以て梨耶の三分に配し、之を本識に屬せしめたるは、本末不覺を混同し、又心と意との別を藐視したるものにして、論意に疎しと許せざるべからず。そは兎に角、起信論の所謂現識は、全く四卷楞伽に依りしものなるを以て、其の義旨は經と異なることなしと雖も、而も之を五意の第三とし、能見相に依りて起る境界相となせるは、卽ち經意に合せざる所なりといふべし。

之を要するに、起信の心識說は大旨楞伽の略說三識說に依り、兼ねて又その諸識三相說を取り、以て彼れが如き組織を立案したるものと推斷せざるべからず。卽ち此論に八識の名を列ねず、唯だ阿梨耶識、五意、及び分別事識の三類を擧げたるは、明かに四卷楞伽の略說三識說に基けるや疑を容れず。所謂彼の眞識は阿梨耶識に當り、分別事識は二者其の名同じきのみならず、起信論に六識を分たず、唯だ一意識となせるは卽ち略說に從へる證と見るべし。現識は卽ち五意の基本にして、之に諸識三相說を附加し、宋魏二譯を合糅して新に彼れが如き次第を立てたるものなるを知ることを得べし。

六　起信論と楞伽及び地攝兩論の阿梨耶識說　起信論には阿梨耶識を以て生滅迷界の根本識となし、不生不滅と生滅と和合して、一に非ず異に非ざるを名けて阿梨耶識となすといへり。是れ

卽ち眞妄和合を梨耶の自體となすの說なり。中に於て不生不滅とは如來藏自性淸淨を指し、生滅とは無明七識の相を指す。論に水波の譬喩を擧げて自ら其の關係を示せり。卽ち

以一切心識之相皆是無明、無明之相不離覺性。非可壞、非不可壞。如大海水因風波動、水相風相不相捨離、而水非動性、若風止滅、動相則滅、濕性不壞故。如是衆生自性淸淨心、因無明風動。心與無明俱無形相、不相捨離。而心非動性、若無明滅、相續則滅、智性不壞故。

此の中、衆生の自性淸淨心を水に喩へ、無明を風に喩へ、七識相續の相を波に喩ふ。卽ち大海の水が風によりて波動するが如く、衆生の自性淸淨心は無明の爲に動ぜられて七識相續の相を生ずるをいふなり。今阿梨耶を以て不生不滅と生滅との和合となすは、一見唯だ水波和合の轉識の相を形容したるに過ぎざるが如きも、論意は然らず、卽ち之を以て眞妄二元の實體的本識となすに在り。眞妄二元とは、眞は卽ち本覺にして眞如平等の法身を指す。所謂不生不滅なり。妄は卽ち根本無明にして、七識生滅の相を起す主因をいふ。此の二元が渾然として一識を成し、非一非異にして互に相離れざるを卽ち阿梨耶となすの意なり。

蓋し阿梨耶の眞妄及び如來藏との同異に關しては、楞伽を始め地攝兩論の間に頗る異說あり。

就中、四卷楞伽には阿梨耶識を以て如來藏と同視し、之を眞識とす。彼の經第四に如來藏名㆓識藏㆒といひ、又甚深如來藏、而與㆓七識㆒倶といひ、又略說三識の中に眞識を擧げ、且つ藏識を不滅となせる如き皆卽ち其の意なり。加之、彼の經第一の偈に、

藏識海常住、境界風所㆑動、種種諸識浪、騰躍而轉生。青赤種種色、珂乳及石蜜、淡味衆華果、日月與㆓光明㆒。非㆑異非㆑不㆑異、海水起㆓波浪㆒、七識亦如㆑是、心倶和合生。譬如㆓海水變、種種波浪轉㆒。七識亦如㆑是、心倶和合生。謂彼藏識處、種種諸識轉。

こゝに藏識海常住といふは、卽ち波浪たる七識の生滅に對して、阿梨耶識を以て不生不滅の常識となすの意なるを見るべし。又此の偈中に水波和合の譬喩を擧ぐるは起信論に同じき所なるも、其の意義は二者大に異あり。卽ち此經の譬喩は、梨耶藏識が境界の風に動ぜられて七識の波浪を生じ、梨耶と七識と和合して一に非ず異に非ざる相を喩說するの意なるも、起信論には自性清淨心が無明の風に動ぜられて七識の波浪を生ずといひ、自性清淨心と無明の和合せるものを以て梨耶藏識となすなり。されば楞伽の梨耶は起信の自性清淨心に當り、隨つて起信の和合は梨耶の自體を指すものなるに對し、楞伽の和合は梨耶と七轉識の非一非異なる相狀を形容せしものなるを知らざるべからず。又楞伽には境界を風に喩へたるも、起信論に無明を風となし、境界は唯だ妄

心に熏習し、それをして念著して種種の業を造らしむるに過ぎずとなしたるは、蓋し此論の作者は心外の境を認めず、隨つて境界が元初に自性清淨心を擊動するの義あるべからずと思考せしに由るなり。之に關し慧遠の大乘義章第三末(八識義)に、

楞伽之中境界爲風、起信論中無明爲風。何故如是。此等皆有飄動義故。若復論動、無明妄心及與妄境皆得爲風。故起信論宣說無明妄心妄境皆爲熏習。熏動眞心卽是風義。但彼論中就其根本說無明風、楞伽據末說境界風。皆得無傷。

といへり。是れ卽ち起信論は其の本に就くが故に無明を風となし、楞伽は末に就くが故に境界を風となすといふの意なり。されば起信論は楞伽に基きて梨耶の敎義を組成したるも、而も大に其の說を更新せしものなるを知るべし。

十卷楞伽の說は四卷楞伽と大旨異なる所なく、水波の譬喩も其の文殆んど相同じ。但だ其の中、藏識海常住の語を改めて梨耶識亦爾といひ、又諸識の略說を擧ぐる中に、唯だ了別識及び分別事識の二種を列ねて眞識を出さず。加之、其の第七卷に如來藏識不在阿梨耶識中。是故七種識有生有滅。如來藏識不生不滅といひ、又離阿梨耶識無生無滅。一切凡夫及諸聖人、依彼阿梨耶識故有生有滅といひ、又屢〻如來藏識、阿梨耶識の二名を列擧して阿梨耶識と如來藏識とを區別

し、阿梨耶を生滅の妄識となすが如きも、是れ必ずしも然らず。何となれば此經の中にも阿梨耶識者名如來藏。而與無明七識共俱の文を擧げ、又甚深如來藏與七識俱生の句を出し、又若阿梨耶識滅者此不異外道斷見戲論といひ、大旨彼の四卷楞伽に異なる所なきを以てなり。但し如來藏は阿梨耶の中に在らずといふは、姑く七識生滅の中に隨緣する邊を阿梨耶となし、之に對して如來藏の不生不滅を比顯せんとするの意に外ならざるが如し。若し永く阿梨耶を以て如來藏と別視し、之を生滅の妄識となさば、八種識有生有滅と說くべし、如何ぞ七種識といはんや。されば十卷楞伽も亦阿梨耶の眞常淨識を認めたるものといはざるべからず。蓋し如來藏の敎義は嘗て論じたる如く、阿梨耶の學說と其の系統を殊にす。楞伽は此の二種の學系を調和せんと企てたるものなるが故に、時に龜裂の痕跡なきに非ず。特に之を四卷楞伽に比するに、十卷經は其の痕跡稍著しきものあるが如し。是れ他日地論南北兩道の異說、幷に起信の和合識說を生ずる由漸をなしたるや明かなりといふべし。

地論一派に於ては阿梨耶を眞常淨識とし、之を如來藏と同視せり。慧遠の大乘義章第三末に阿梨耶を眞識となし、之に藏識、聖識、第一義識、淨識、眞識、眞如識、家識、本識の八名ありといひ、又十地論義記第三下に、阿梨耶は此に翻じて名けて無沒識となす。此れは是れ第八如來藏

心は緣に隨つて流轉するも、體失滅せざるが故に無沒と曰ふといひ、吉藏の中論疏第七本に、舊の地論師は七識を以て虛妄となし、八識を眞實となすといへるは皆卽ち其の意なり。是れ主として楞伽の梨耶眞識說に依れること疑を容れず。又地論家に於ては阿梨耶を以て佛性となし、之を名けて佛性識と呼べり。菩提流支の金剛仙論第五に第八佛性識の語を出し、慧遠の大乘義章第一(佛性義)の中に、佛因の自體を名けて佛性となす。謂はく眞識の心なりといひ、吉藏の法華玄論第二に、先代地論師は第八識を以て佛性となす。自性淸淨なるが故に亦性淨涅槃と名くといひ、加之、慧影の大智度論疏第十四に、佛性の義は能照に依る。卽ち是れ阿梨耶識なり。聲聞は但だ轉識を得て此の識を得ず。故に佛性を見ずと言ふなりといひ、慧思の隨自意三昧にも、藏識は湛然として變せず。西國には阿梨耶識と云ひ、此の土には名けて佛性となす。亦自性淸淨藏と名け、亦如來藏と名くといへる皆卽ち其の說なり。されば梨耶佛性の說は當時廣く北地に行はれたるを見るべし。是れ蓋し十地論第八の十二因緣分皆依二一心一といふの文を以て、涅槃の所謂十二因緣名爲二佛性一の文に合し、一心を梨耶眞識と解して、之に佛性の名を立てたるものなるが如し。大乘義章第四(十二因緣義)に、十二因緣皆一心作とは謂はく眞心の作なりといひ、同第一佛性義の中に、十二因緣は皆眞心の作なりといふは、卽ち其の義を說けるものと見るべきを以てなり。

地論に南北二道の兩派あることは嘗て記述せし所の如し。その中、北道は菩提流支、道寵を祖とし、南道は勒那摩提、慧光を祖とす。北道の一派は阿梨耶を以て一切法の依持となすに對し、南道の一派は眞如を以て依持となすと說き、互に水火の諍をなせり。蓋し此の諍論は梨耶と眞如の同異に關し、其の所見を殊にせしに原由するが如し。即ち北道が梨耶を以て一切法の依持となせるは、梨耶を如來藏と同視し、梨耶の外に一切法の根本實體を認めざる爲なるが如く、南道が眞如を以て依持となせるは、梨耶と如來藏とを區別し、如來藏を梨耶の上に置きて、之を一切法の根本實在となすに基くものなるが如し。若し然らば主として是れ楞伽の說の分明ならざるに起因すと認めざるべからず。兩派諍論の委曲は今之を詳にするを得ざるも、大乘義章第三末（八識義）に眞妄依持の一章を立て、眞妄相對して依持を辯ずるの說あり。即ち、

眞妄相對依持如何。前七妄識、情有體無。起必託眞、名之爲依。故勝鬘云、生死二法依如來藏。地經亦云、十二因緣皆依一心。第八眞心、相隱性實、能爲妄本、住持於妄。故說爲持。故勝鬘云、若無藏識七法不住。不得厭苦樂求涅槃。此是眞妄依持義也。妄之依眞、如波依水、眞之持妄、如水持波。故楞伽云、譬如巨海浪、斯由猛風起、洪波鼓冥壑、無有斷絕時。藏識海常住、境界風所動、種種諸識浪、騰躍而轉生。無明大海雖爲風飄、水性不移。性不移

故名爲常住。性雖常住而彼水相隨風波轉。喩彼眞識雖爲妄想境界風動眞性不變、性雖不變而彼眞相隨妄境界起於七識如海波浪。

これ卽ち七識生滅の法は、第八眞識を以て依持となすといふの意にして、南道派の說に當るといふべし。又彼の連文に有人の說を出し、

有人、一向說彼海水喩第七識、不喩眞識。此言大偏。如彼經中、說如來藏以爲藏識、第七妄心名業相識。經自說言、藏識如巨海、業相猶波浪。云何乃言水喩七識。彼文復云、如來之藏爲彼無始惡習所熏、名爲藏識生。無明住地與七識俱、如海波浪。云何海水不喩眞識。良以世人迷覆眞心、妄取空義以爲眞識。故爲此論。

有人とは果して何人を指すや明かならざるも、其の說は第八眞識を空となし、空なるが故に諸法の依持たるべからずとし、第七識を以て海水に喩へ、之を一切法の依持となすに在るが如し。兎に角、之に依りて當時種種の說の行はれたるを見るべし。

攝論の諸師は全く地論に反し、梨耶を以て無記無明隨眠の識となし、別に第九阿摩羅識を立てて之を眞常淨識となせり。決定藏論卷上に阿羅耶識を斷ずれば卽ち凡夫性を轉ず、凡夫法を捨すれば阿羅耶識滅す。此の識滅するが故に一切煩惱滅す。阿羅耶識對治せらるゝが故に阿摩羅識を

證す。阿羅耶識は是れ無常、是れ有漏法なり。阿摩羅識は是れ常、是れ無漏法なりといひ、又轉識論に此境識俱泯卽是實性。實性卽是阿摩羅識といへるは正しく其の說に當れり。又吉藏の中論疏第七本に依るに、

攝大乘師以八識爲妄、九識爲眞實。又八識有二義、一妄、二眞。有解性義是眞、有果報義是妄用。

といひ、圓測の解深密經疏第三にも、

眞諦三藏依決定藏論立九識義。如九識品說。言九識者、眼等六識大同唯識論。第七阿陀那此云執持。執持第八爲我我所。唯煩惱障而無法執。定不成佛。第八阿梨耶識自有三種。一解性梨耶。有成佛義。二果報梨耶。緣十八界。……三染汙阿梨耶、緣眞如境起四種謗。卽是法執而非人執。依安慧宗作如是說。第九阿摩羅識此云無垢識。眞如爲體。於一眞如有其二義。一所緣境、名爲眞如及實際等。二能緣義、名無垢識、亦名本覺。具如九識章引決定藏論九識品中說。

といへり。之に依るに攝論一派に於ては九識を立て、而して阿梨耶識を滅して阿摩羅識を證すべしとなし、又梨耶に解性染汙等の三義ありとなしたるを見るべし。

是の如く地攝兩論の說全く相反したるを以て、當時兩家の間に是非の論を生じ互に紛諍せり。智顗の法華玄義第五下にその消息を傳へ、「若地人明、阿梨耶是眞常淨識。攝大乘人云、是無記無明隨眠之識。亦名無沒識。九識乃名淨識。互諍云云」といひ、又吉藏の法華玄論第二にも、「尋此師學舊出北方。謂第八識自性清淨、亦名性淨涅槃。……又攝大乘論阿僧伽菩薩所造、及十八空論婆藪所造。皆云八識是妄識、謂是生死之根。先代地論師用爲佛性、謂是眞極。昔般若未度遠師已悟眞空、涅槃不盡生公照知佛性。諸地論師有慙先見之明矣。」といへり。加之、湛然の法華玄義釋籤第九上には、「陳梁已前弘地論師二處不同。相州北道計阿梨耶以爲依持。相州南道計於眞如以爲依持。此二論師俱稟天親、而所計各異同於水火」といひ、地論南北兩道の間にも一切法依持の問題に關し、水火の諍を惹起せしことを傳ふ。凡そ兩者軋轢する所に調停生ず。梨耶眞妄の論囂くして、而も眞妄和合の說を生ずるは數の然らしむる所なりといふべく、今起信論の梨耶眞妄和合說は、此の葛藤に對する調停的產物と推斷せざるべからず。即ち此の論中に楞伽の水波和合の譬喩を改め、境界に代ふるに無明の風を以てし、無明と自性清淨心と和合して一に非ず異に非ざるを阿梨耶識となし、而して此の識に覺不覺の二義ありとなせるは、正しく地論の眞識と攝論の妄識說とを折衷調和したるものと認むるを得べく、識者

は亦其の道理あるを容認すべし。常盤君は楞伽の一經だにあらば優に起信論は製作し得べしとなすも、楞伽の水波和合は梨耶と七識との和合にして、梨耶それ自體の和合に非ず。又其の所謂梨耶は自性淸淨の眞心にして、不覺無明の妄識に非ず。且つ其の擊動の緣も境界と無明と同じからず。如何ぞ唯だ楞伽一經のみの思想に依りて卽ち此論の學說を組織するを得んや。須らく楞伽の思想が一轉再轉して然る後彼れが如き學說の生じたる所以を究明するを要す。且つ夫れ此論に眞生二門を開き、眞如を以て一法界大總相法門の體となせるは、南道地論の說によりて眞如を一切法の依持となすものと見るべく、同時に又眞生二門皆各一切法を總攝すといひ、又阿梨耶識は能く一切法を攝し一切法を生ずといへるは、卽ち北道地論の梨耶依持說を倂せ取れるものと見るべし。されば起信論は梁陳の閒支那に於て繁興せし諸學派の說を承け、之を折衷調和する目的を以て著作せられたるものと斷定せざるべからず。

然るに常盤君は攝論の北地傳來を以て隋開皇の初に在りとなすが故に、隨つて地攝兩論の紛諍は早くも開皇十年已後ならざるべからずとし、複雜なる調和說の成立する已前に先づ複雜なる葛藤なかるべからずといひ、隋末唐初の交に至らば、或は言ふが如き調和說の成立したるやも知るべからざるも、隋初に之を期待するは頗る早きに失し、思想發展の徑路を無視するものなりとして

予の調和說を反撃する所あり。是れ蓋し曇遷を以て攝論を北地に傳へたる最初の人となし、又攝論の研究は開皇七年に至つて始めて起れりとなすが故なるも、攝論は下に論ずるが如く、曇遷の歸北已前、既に北地に傳へられたること疑を容るべからず。又縱ひ曇遷已前北地に攝論なしとするも、南方建業には陳大建已來此論の講習行はれたれば、北方地論師が南方に往復するを妨げざる限り、南方に往いて攝論を學び得ざるの理あるべからず。又地攝兩論の間に梨耶眞妄の諍論ありしことは、法華玄義の傳ふる所なり。然るに此書は智顗が陳光大の初（五六七）瓦官寺に住して始めて開演し、後開皇十三年玉泉寺に於て再び講說せし所に係る。若し其の諍論が果して攝論研究勃興已後に起れりとせば、開皇十三年も亦早きに失すといはざるを得ず。加之、前に引ける吉藏の法華玄論第九には三身說に關して地攝兩論互に諍ひしことを敍せり。吉藏は智顗とほゞ同代に在れば、其の紛諍も亦早きに失すといはざるべからず。況や吉藏が引用せる五凡夫論の中には、上に述ぶる如く四身說を唱へて、南北兩地の佛身論を折衷調和する所あり。然るに此論は開皇十四年の撰述に係る法經錄に既に編して僞妄となせり。若し調和の成立する已前に先づ葛藤なかるべからずとせば、開皇十年より兩三年の間に先づ葛藤起り、次いで調和成立し、後僞妄の判を蒙らざるべからず。斯の如き活動寫眞的現象が豈に一時に起るべきものならんや。之に依るに地攝

兩論の葛藤は既に早く陳代に在らざるべからざるを知るべし。君は又起信の梨耶說に就きて慧遠、元曉、法藏等の師が各異說せるを指摘し、此論は調和の爲に述作せられたりとせんより、寧ろ諍論を惹起すべき基をなしたりと見るべしといひ、之を思想發展の徑路に合致すとなせり。されど是れ果して何の言ぞや。慧遠が梨耶眞識說を主張したるは地論の傳統的敎義を承襲せしものにして、本と起信と關係あるに非ず。元曉、法藏が眞妄和合說を唱へたるは起信の論旨を紹述したるものに係り、慧遠と其の說を異にするも、是れ決して此論によりて惹起されたる諍論に非ざるは明かなり。君の所謂思想發展の徑路なるものは、果して斯の如きものか。寧ろ一笑に附して可なり。

七　結論、作者論幷に餘論　起信論には題して馬鳴菩薩造といふも、龍樹已前の馬鳴既に之を造らず、已後に亦馬鳴ありて此論を造れることを聞かず。されば馬鳴造の題名は如何にして置かれたるか。是れ學者の深く留意すべき點なり。曇延の起信論疏、慧遠の大乘義章、曇遷の大乘止觀法門等に悉く皆馬鳴造と記すれば、此論は當初より馬鳴造の題名を有したるを知るべし。而も馬鳴之を作らず。是れ明かに此論が擬托の意志を以て著作せられたることを證明するものに非ずや。又題して眞諦三藏譯といふも、法經錄には眞諦錄を勘ふるに此論なしといひ、且つその翻譯

の事實頗る疑ふべきものあるのみならず、論の用語を檢するに眞諦の譯例に反するもの多し。若し予が前來の擧證を見ば誰か亦其の眞諦譯を怪まざるものあらんや。加之、論の組織を詳にする、に殆んど占察善惡業報經と相同じ。然るに此經は僞妄にして斷じて梵夾の譯出にあらず。新羅珍嵩は夙に此論が占察經に依ることを指摘し、僞經を所依とする論は即ち僞論なりと斷定せり。是れ亦學者の精研を加ふべき問題なり。且つ夫れ地攝兩論の三身と起信の三身說を比較するに、三身の名稱は北地に取れるも、意義は南方攝論の說を用ひ枘鑿相納れず。同時に又北地三身の說を取りて摩訶衍三大の敎義を唱道し、折衷を企てたるの意を露顯せり。阿梨耶識、五意及び意識の次第を立てゝ流轉還滅の相狀を說明せるは、即ち四卷楞伽の略說三識說に依れるものにして、業轉現智相相續及び分別事識の名稱は、四卷十卷の二本を合糅せしものなるや明かなり。梨耶を以て眞妄和合となし、之に覺不覺の二義ありとなせるは、楞伽水波の譬喩を本とし、地攝兩論の眞妄說を折衷したるものといふべく、眞如を大總相法門の體とし、一切法を攝すといふは、南道地論の眞如依持說に取りしこと疑を容るべからず。のみならず予が嘗て指摘したる如く、此論の中には仁王、瓔珞等の疑經を引き、又羅什、道生等の說を破せりと認むべきものあるを以て、予は敢て此論の印度撰述を否認し、支那に於ける擬托の書なることを推斷せんと欲するなり。予は上

にも述ぶる如く二十年前、既に此論に對して疑端を挿み、爾後益其の感を深うして以て今日に至れるものにして、決して一朝の考案に非ず。學者亦幸に之を研詳して其の眞僞を決するを得ば學界を裨補する蓋し鮮少ならざるべきを信ず。

此論の作者に關しては之を推測すること良に難し。既に題して眞諦譯といひ、又眞諦の譯出にかゝる金光明幷に攝大乘に依りて三身の意義を定め、加之、梨耶和合の説は、或は攝大乘の淨分不淨分説に基けるものと見るも不可なく、且つ攝論系の決定藏論、轉識論、顯識論等と其の論旨類同するのみならず、占察經が廣州の地に行はれし事實に徵するも、此論は南方攝論の徒により て假作せられたりと想定すべき理なきにあらず。されど亦三身の名稱を北地に取り、且つ北地の三身説に依りて三大の敎義を立て、楞伽、十地、金剛仙等の北地系の經論に依りて其の論旨を組織し、南道地論の眞如依持説を會取せしのみならず、江南の諸家は殆んど此論を用ひざるに反し、江北の諸師が展轉尊重して之を敷講せし事實あるに考ふるに、北方地論師の製作に係ると推定するも固より不可あるを見ず。本と南北調和の論なるが故に、地攝兩論の要素は具さに其の中に在り。故を以て南地の假托と想像し得べきものあると同時に、亦北地の假作と推定すべき料あり。

予が曩に之を北方地論師の假托と推定したるは、珍海の三論玄疏文義要第二に、惠均（吉藏の門人）の四論

玄義第十の文を引き、北地の諸論師は此論を以て昔日地論師の造る所となすといひ、又同卷に四論玄義第五を引き、起信是虜魯人作。借馬鳴菩薩名一の文を出せるを以て、北地製作說の頗る早き時代に存せしを知り、其の傳說の信ずべきものあるを認めたるが故なり。

北地の諸論師中、果して何人に其の作者を擬すべきかは固より至難の問題たり。予は嚮に諸種の考證を試み、之を曇遵の口授、曇遷の筆錄と推したるに、之に對し常盤君は頻りに年代を云云し、攝論を北地に傳へたるは曇遷にして、其の年代は隋開皇已後に在りとし、特に攝論研究の勃興は開皇七年曇遷入京の後に在るを以て、曇遵は攝論を見るに及ばずして歿したりとし、又起信論を以て果して地攝兩論を折衷したりとせば、其の製作は早くも曇遷歸北の開皇元年を溯るべからず。且つ開皇八年を以て寂したる曇延に起信の注疏あれば、本論製作の年代は、開皇元年より八年に至る七年間に限られざるべからずといひ、而して斯かる短時日に本論が製作せられ、注疏が亦製作せられたりとは到底考ふべからずとなし、更に多言を弄する所あり。されど是れ一に北地製作說に對する批難に過ぎず。若し北地說に果して缺點あらば、予は南方製作說を取るも可なり。一千數百年前に於ける匿れたる作者を搜索せんとするには、自ら多樣の觀察あるべし。たとひ又其の搜索當らずとするも、僞論たることに於て何等影響あるべきに非ず。作者論の如きは畢

竟本論の餘沫に過ぎず。枝葉を捉へて蟠屈せる根幹を覆さんと圖るも、そは決して及ぶ所にあらざるを知悉するを要す。況や攝論は北魏普泰元年(五三一)、佛陀扇多旣に洛陽に在りて之を出す。是れ實に眞諦の譯に先だつ三十餘年に在り。而も其の論中には三身を說き、梨耶妄識を說き、又他相性染分淨分の說を擧げ、毫も眞諦の論に殊ならず。されば起信論の作者は眞諦を待たずして、而も北地に於て佛陀扇多の譯本を見、地攝兩論を折衷するを得べし。攝論は當時北地に於て行はれざりしが如きも、旣に其本の彼地に存したることが明かなる已上、誰か亦其の繙讀を禁じ、其の硏究を制するを得んや。且つ夫れ續高僧傳第一法泰の傳に依るに、法泰は陳大建三年(五七一)、攝大乘、倶舍等の新飜經論を賫して建業に還り、當時の學界を驚異せしめたることを記し、又靖嵩は建業に在りて攝大乘を翫味し、法泰に就いて疑義を諮決せりといひ、曹毗は大建二年衡州建興寺明勇を請じて攝大乘を講ぜしめ、時に名僧五十餘人其の席に預り、尋いで建業に歸りて此論を開演し、僧榮、法侃等皆其の學に資せりといひ、道尼は九江に還りて攝論を講じ、譽を京師に騰げたりといひ、又續高僧傳第十一慧海の傳に、慧海は周武の滅法に遭ひ、難を避けて陳に入り、攝論を硏窮し、大隋御宇の後、方に長安に還るといへり。されば陳大建已來、建業又は九江の地に於て盛んに攝論講習の流行せしことを見るべく、當時南北の交通頻繁なるものあれば、久しく其

の本を江都に抑留して北地に傳へず、空しく曇遷の歸北を待つの理あるべけんや。道基の攝大乘論釋序の末尾に、豫章郡守王欽、開皇元年五月奏二此論一。與二遷持論一不レ殊とあり。之に依るに曇遷の入京に先だつ七年、既に豫章の郡守によりて此論が隋廷に奏せられたるを見るべし。加之、曇延は開皇の初め長安に入り、同八年を以て歿す。然るに其の著起信論疏に、攝大乘論釋第七の説に依りて三種の信を出せり。若し果して曇延は曇遷入京已後、始めて此論を披閲したりとせば、彼れは君の言へる如く、入寂の日に臨んで起信疏を製せざるべからず。是れ有り得べきことに非ず。又慧遠は開皇十二年を以て寂す。然るに其の畢生の作なる大乘義章中に頻りに攝大乘を引用し、而も又其の著十地論義記、維摩經義記、涅槃經義記等には廣釋を大乘義章に讓るの文少からず。されば先づ義章を製し、後十地等の義記を作るといふべく、若し慧遠は開皇七年始めて曇遷に就いて攝論を稟けたりとせば、僅々五年の間に此等數十卷の書を述作せざるべからず。是れ豈に能ふべき所ならんや。又慧影の大智度論疏第十五卷にも攝大乘の文を引用せり。此書は歷代三寶紀第十二に依るに、後周道安の述釋する所に係り、安亦自らその序を制す。されば後周の時、攝論は既に北地に傳へられたるものなりといふべし。常盤君は曇遷傳に、攝論北土創開自レ此爲レ始とあるを楯とし、攝論を以て始めて曇遷の北地に齎す所となすも、此の記事は北地攝論宗の創開

を語るものにして、論の初渡を意味するに非ず。隨つて之に依りて曇遷已前、北地に攝論なしといふは妄斷と評せざるべからず。又君は曇遷傳に、彼れが桂州刺史蔣君の宅に於て攝大乘を獲たりといふを以て、攝大乘は當時唯だ蔣君の宅にのみ其の一本を藏したりとなすが如きも、前引道基の攝大乘論釋序に、豫章郡守此論を奏したりといひ、又遷の持論と殊ならずといへば、曇遷の齎したるものと同本の書が別に豫章にも存したることを知るべく、又後周道安等が其の著作中に此論を援引するを以て見るに、豫章郡守が隋廷に奏したる已前、早く既に北地に其の本の存したることを察すべし。若し然らば曇遵は必ずしも曇遷の歸北を待たずして攝大乘を披閱するを得べく、同時に亦開皇已前、北地に於て地攝兩論の折衷說を生ずるも妨げなきを得べし。今因みに君に問ふべし、君は起信論眞諦譯の說を固執す。されば其の本を北地に傳へたるは、果して何人にして、又何年代に在りや。君は起信論も亦攝論に同じく、曇遷が始めて北地に齎したる所となし、曇延、幷に慧遠は曇遷より此論を承けたりとなせり。若し然らば君が先に予の上に加へたる批難は、却て君自ら之を蒙らざるべからざるに非ずや。即ち曇延が起信論を承けたるは開皇七年曇遷入京已後に在るを以て、其の翌年に歿したる彼れに二卷の註書あるは甚だ早きに失するに非ずや。又大乘義章を始め、慧遠の諸書に盛に起信を引用せり。若し曇遷に就いて始めて此論を承けたり

とせば、開皇七年已後、十二年に至るの間に慧遠は數十卷の書を述作せざるべからず。且つ又續高僧傳第十八曇遷の傳には、彼れが周武滅法已前、北地に在りて起信を研精せしことを記せり。是れ豈に後周已前、起信の論本が既に北地に存せしことを立證するものにあらずや。されば君の曇遷傳來說は明かに妄推なるを知ると同時に、起信の北地製作說の益有力なるを察するを得べし。君其れ之に對して果して如何の解答かある。

君は又予が曇遵を以て曇遷歸北の日尙ほ康存したるべしと推測せしに對し、曇遷の歸北は開皇の初なるを以て、曇遵は當時既に死歿したりとし、喋々駁論を試むる所あり。蓋し君が曇遵を以て北齊代に歿し、隋初に生存せずとなせるは、彼の曇遵傳に鄴下に卒すと記するを唯一の論據となすが如し。然るに鄴下又は鄴城の語は、北齊の滅亡已後、隋代に至るも尙ほ道宣は頻りに之を使用せり。卽ち彼の續高僧傳第二十二慧藏の傳に、開皇初遊學鄴城博綜經律といひ、又同第十三道傑の傳に、開皇十九年自衞適鄴といひ、同第九靈裕の傳に、於時鄴下昌言、裕師將過世矣（靈裕の死は隋大業元年に在り）といひ、其の他、此の例少からず。されば單に鄴下に卒すといふの故を以て、曇遵の死を北齊代に限定せんとするは卽ち不可といはざるを得ず。或は又傳の標目に齊曇遵と題するを以て、彼れの死は齊世に在らざるべからずと說くやも知るべからず。されど續高僧傳第八に

の死は開皇十九年に在れば、標目を以て死歿の年時を規定せんとするは卽ち的確に非ずといはざるべからず。要するに曇遵死歿の歲月は之を詳にするを得ず。故に曇遷歸北の日尚ほ康存したりといふも敢て不可あることなく、況や予は其の歲月不明なるを以て、同時に曇遷加筆の一案を出し、必ずしも曇遵康存說を固執せざるの意を明かにする所ありしに於てをや。君夫れ宜しく敵者の論を精讀して可なり。

君は復次に予が嘗て起信論を以て梁陳代の製作となし、尋いで亦曇遵口授說を唱へ、曇遷歸北の後、彼れ尚ほ康存せりと論じたるに對し、これは旣に陳代を越えて隋代に下れりといひ、自語相違の過誤ありと評せり。然るに君の所謂自語相違とは果して何を意味するや明かならず。梁陳代といふは、梁武帝天監の初より陳後主禎明三年に至る閒を稱す。而して禎明三年（五八九）は隋文帝開皇九年に當り、其の閒尚ほ南北兩朝對立せしことは君も恐らく知る所ならん。若し今起信論製作の年時を開皇十年已後とせば卽ち自語相違あるべし。而も予は曾て開皇十年已後に在りと言はず。何を以て自語相違の過失となすや。君は又曇遵は北地の人なるを以て隋の支配を受くべく、隨つて隋代と稱せざるべからずといふも、南北兩朝對立し、隋北方に興るも陳尚ほ南方に君臨す

る已上、之を陳代と稱するに何の不可かあるべき。梁高僧傳に依るに、鳩摩羅什、僧肇等の諸師を皆晉代となせり。然るに此等の諸師は姚秦の治下に屬し、東晉の支配を受けず。而も古來之に對して自語相違の過失を附したるものあるを聞かず。又前に引ける法華玄義釋籤の文に、陳梁已前弘二地論師一處不レ同云云とあり。是れ相州南北地論師の異說を敍したるものにして、全く北地の出來事に係る。而も尙ほ卽ち陳梁と言つて北朝の世代を用ひず。是の如きの例は實に枚擧に遑あらず。君亦悉く之を自語相違として先哲を批議せんと欲するや否や。蓋し北朝は古來率ね之を閏とし、其の正統を認めざるのみならず、元魏已後、王朝の興廢錯綜して世代を呼ぶに便ならざるものあり。故に史家多く南朝の歷世に仍りて年代を紀するを常とす。予が先に梁陳の語を擧げ、論の製作年代を概指せるは卽ち此の例を踏襲せしものにして、敢て政治的區分を意味するに非ず。予は君の指摘する如く、終始一貫して梁陳代といへり。されば縱ひ論の製作が下りて開皇九年に至るも、予の所論は前後矛盾する所なし。曷ぞ自語相違あらんや。

君は又予の數回の論文に就き、論旨の變更凡そ三條ありとし、頻りに問詰を加ふる所あり。三條とは、攝論中心說より地論說に移りたるを一とし、南方の成立より北方の撰述に變じたるを二とし、梁陳代より隋代に下れるを三とす。然るに其の問詰を見るに事皆作者論に關し、主題たる

論の眞僞と何等交渉を有せず。故に君の言ふが如く果して予の論旨に數條の變更ありとするも、支那撰述論が變じて印度撰述説に滲らざる限り、識者は予の主論の終始一貫する所あるを認むべし。且つ夫れ作者論の如き、其の推定極めて難く、若し之を究明せんと欲せば、須らく多方面の觀察を下すを要す。加之、學者日を逐うて研鑽を累ね、顧みて其の所論に變遷發達の跡を認むるは寧ろ大に快とすべき所に非ずや。予は此の意味に於て、君が予の論旨變更を云云するの意を恠まざるを得ず。中に於て其の所謂變更の第三條は上に既に之を陳辯するが如し。第二條は南方の成立より北方の撰述に變じたりといふに在るも、次にも論ずる如く、予は最初より單に南方成立を唱へたるに非ず。又縱ひ先に南方を唱へ、後に北方に變じたりとて固より他の攻難等に由るに非ず。全く予の自由研究の結果に出でたるものなるを以て、特に君の指斥を被るべき所由なし。第一條は攝論中心説より地論説に移りたりといふに在るも、起信論は既に屢〻論じたる如く本と地攝兩論を折衷調和せしものなるが故に、若し其の中、主として攝論の要素に就かば攝論系と見るべく、地論の要素に就かば卽ち地論系と認むるを得べし。況んや予は初より單なる攝論中心説を取らず。大正七年一月の所論に、惠均の所謂昔日地論師を相州南道の地論師と解し、南道の地論師は、自己の所立を有力ならしめんが爲に、此論を僞造せし事實なしと云ふべからずと記せし

は、此論を以て北方地論家の製作にも擬し得べきことを表白せしものなり。予は惠均が唐初に地論師僞造說を傳へたるを見、之によりて法經の疑僞說の頗る根據あるを確認し、敢て支那撰述說を唱道せしものなるが故に、地論と起信の關係に就きては初より甚深の注意を怠らざるものあり。そは予の論文を讀む者の必ず看取する所なるべし。今常盤君が予の論旨に變更ありとなすは、或は其の文を精讀せざるに由るか。然らずんば則ち故意に自ら難を構へたるものと謂はざるべからず。且つ君は予が先きに起信論は決定藏論、顯識論等に準據すといひ、後更に此等の諸論を顧みず、却て之を以て眞諦の譯出に非ずとなし、起信の學說は主として楞伽に依ると論じたるに對し、前說を取消すの意なるや否やを急追する所あり。されど是の如きは君自ら思うて之を知るべし、既に起信論は地攝兩論の調和說なるが故に、隨つて其の中に此の兩派の論書に準據したりと認むべきものあるは當然なり。決定藏論、又は顯識論等に準據すとして予が先に擧示せし諸文は、即ち此等諸論に準據したりと認むべき點なり。同時に楞伽に依るとして指摘せし敎義は、即ち亦楞伽に依れりと認むべき點なるを知るべし。君は又予が楞伽所依說を述べたるに對し、そは君の指敎に由るが如くいふも、予は君の指敎を俟つて、始めて楞伽の所依を知るほど起信の研究に疎なるに非ず。但し之を最初に的指せずして單に決定藏論を擧げたるは、楞伽所依說の餘りに陳腐なる

が爲なり。後に至て復び決定藏論等を言はざるは、此等諸論に就き再說を要せざるを以てなり。君は楞伽の一經だにあらば起信は優に造り得べしとなすが如きも、上に擧示せし如く、楞伽には境界の風に依りて七識の波浪生ずと說き、無明を風となさゞるに反し、決定藏論には梨耶を以て一切煩惱の根本となし、梨耶滅すれば則ち一切煩惱滅すと說けり。是れ蓋し根本無明を風となすの意にして、彼の起信に楞伽の譬喩を改めたるは卽ち此の說に準據せしものと見るも可なり。されば經論相倚りて起信の梨耶說を成立せしめたるものといふべく、如何ぞ其の一を取消して可なるべけんや。

君は又決定藏論は五卷ありとし、而して之を以て所謂十七地論を指せるものなりと推定し、十七地論は眞諦已外に其の譯者を求むべからざるが故に、決定藏論は卽ち眞諦の翻傳ならざるべからずと主張せり。是れ蓋し決定藏論は瑜伽の異譯なりといふを以て、之を十七地論が瑜伽の異本なりと稱せらるゝに聯想し、又十七地論は五卷の本なるを以て之を決定藏論の卷數に等しとし、以て兩者を同本と認めたるに由るべしと雖も、是れ大なる妄斷にして、其の謬見寧ろ憐むべきものあり。現藏を檢するに決定藏論は三卷にして五卷に非ず。君果して此論を一見せしや否や。兎に角、此論と十七地論と其の卷數既に異あり。又決定藏論は瑜伽の異譯なりといふも、現藏の本

は唯だ彼の中の五識身相應地意地の別譯に過ぎず。予が曩に決定藏論は瑜伽の大論を指すといへるは、攝大乘釋論中に引用せし決定藏論を稱したるものにして、現藏の三卷本を指すに非ず。此の二論は其の名同じと雖も、其の本は全く別なり。又十七地論は歷代三寶紀已下諸錄に其の目を揭げ、眞諦の譯論として頗る著名なるも、古來其の本を傳へず。遁倫の瑜伽論記第一に依るに、自佛法東流年載悠遠。雖聞十七地論之名而不知十七地者何也といへり。以て其の逸亡の久しきを見るべし。然るに大日本續藏經第七十四套に編せる大乘四論玄義第二には所謂十七地の名稱を出せり。

問十七地何者。答、眞諦三藏師如牽十七地經證有九識義。彼論云、九品心故有第九識。而此閒不出此經故難信。而其名目者、一名善心地、謂布施持戒等善心地。二者聞慧地、三者思慧地、四者修慧地。此四種是欲界善心地。此三慧於三界分之段與論釋不同。段明欲界有聞思兩慧、色界有思修二慧、無色界但修慧也。論意、欲色二界具有三慧、無色界唯有修慧。故彼論三慧品云、欲界色界一切也。無色界中唯有修慧也。五者有心定地、謂四禪四無色定。六者無相定心地、謂無想定心。除滅盡定。此地是凡夫定善心地故。七者聲聞地、八者緣覺地、九者十信地、十者十住地、十一者十行地、十二者捨小乘迴向大乘地、十三者大乘十迴向地、十

四者十地、十五者佛地、如來相應功德。十六者有餘涅槃地、十七者無餘涅槃地。二涅槃是斷德也。

是れ彼の十七地論の所謂十七地の名稱なるが如し。現藏の決定藏論には是の如き十七地等の說を出さず。曷ぞ十七地論と同本なるべけんや。隨つて之を以て眞諦譯の證となすべからざること更に言を要せず。

瑣末の論難は今一一之を辯ずるに遑あらず。作者論の如き亦固より本論の主要に非ざれば、予は其の問題が如何に決せらるゝも、必ずしも意に介する所なし。但だ支那撰述の主論に就き、識者若し予の所見に反して理證文證を擧示せらるゝに於ては、予は更に研精を試むる所なかるべからず。單なる一卷の書なるも、其の眞僞は佛敎敎理發達の上に重大の關係を有す。故に佛敎史を學ぶ者は、本問題に對し之を等閑に視ることを得ず。蓋し齊梁已來、支那に於て抄經僞經相次いで起り、開元、貞元に至りて疑僞實に一千數百卷の多きに上る。經典成立の問題は、印度佛敎史に於ける重大なる研究問題なると同時に、僞經編纂の史實は亦支那佛敎史家によりて討究せられざるべからざる一新題目たり。彼の仁王、瓔珞、梵網を始め、大佛頂首楞嚴、大方便佛報恩等の諸經、遺敎經論、大宗地玄文本論、釋摩訶衍等の諸論の如き皆大に疑ひを容るべし。而も古來諸

家悉く之を用ひて多く怪むものなく、慧遠、智顗の如きは盛に仁王、瓔珞等を引用し、特に智顗は仁王、梵網の疏を製し、吉藏は亦像法決疑、五凡夫等の經論を用ひ、其の眞僞に關して毫も意を留めず。曇延、慧遠等が起信を信用せしも亦此の一例に過ぎず。今若し此等の經論が果して梵夾の譯出に非ずと決せらるゝに於ては、支那の佛教は頗る特殊的發達を遂げたるものなるを證するを得べし。起信論の眞僞を論ずる如き、予は之を第一歩として進んで支那に於ける僞經僞論編纂の史實を攷へ、其の由來を明かにして、以て支那佛教發達の眞相を究めんことを期するに在り。蓋し將來の佛教史は必ず此の暗黑の一面を照破せざるべからざることを確信するが故なり。

（大正十一年執筆）

第二節　南北兩道の地論學派の主張と起信論

一

地論學派とは、北魏菩提流支及び勒那摩提等の譯した世親の十地經論を講學する一派をいふので、後世には之を地論宗と呼ぶのである。此宗に南道北道の兩派があつて、その主唱する所が互

に異なつてゐたことは諸書に傳ふる所である。續高僧傳第七道寵傳の末に

一說云、初勒那三藏敎二示三人一。房定二士授二其心法一、慧光一人偏敎二法律一。菩提三藏惟敎二於寵一。寵在二道北一敎二牢宜四人一、光在二道南一敎二憑範十人一。故使三洛下有二南北二途一。當現兩說自レ斯始也。四宗五宗亦仍レ此起。

といふ記事がある。これは道寵は菩提流支より其の法を受け、相州北道即ち鄴都の北（鄴都は今の河南省臨漳縣西四十支里）に在りて牢宜等の四人に敎へたので、之を北道派と呼び、慧光は勒那摩提より其の法を傳へ、相州南道に在りて道憑、僧範等の十人に敎へたので、之を南道派と稱したことを傳へるのである。此の中、「當現兩說自レ斯始也」といふのは、多分依持論の相違を意味するのであらうが、未だ的確なる義旨を詳にするを得ない。「四宗五宗亦仍レ此起」といふのは、即ち南北兩道に於て其の敎判を異にしたことを傳へるのであらう。法華經玄義第十上に依ると、南道派の祖慧光は因緣・假名、誑相、常住の四宗の判敎を立て、因緣宗は毘曇の六因四緣を指し、假名宗は成實論の三假を指し、誑相宗は大品、三論を指し、常住宗は涅槃、華嚴等の常住佛性本有湛然を指すといひ、隋淨影寺慧遠の大乘義章第一所載の二諦義にも亦この四宗を擧げ、特に第四を顯實宗、又は眞宗と名づけ、之を解說して左の如く記してゐる。

顯實宗者大乘中深。宣說諸法妄想故有、妄想無體起必託眞。眞者所謂如來藏性。恆沙佛法同體緣集、不離不脫不斷不異。此之眞性緣起集成生死涅槃。眞所集故無不眞實。辨此實性故曰眞宗。

之に依ると四宗は卽ち南道派の敎判たることを知るのである。又前引法華經玄義の連文に、護身寺自軌は五宗敎を開く。四宗は前に異ならず、更に華嚴を指して法界宗となすといつてゐる。若し此の五宗を北道派の敎判とすれば、自軌は卽ち北道の師とすべきであるが、然し法界宗を別立することが、北道派の主張に如何なる關係があるかは明かでない。大乘義章二諦義に慧遠は四宗の中、誑相、顯實の二宗は經同論同であつて、別に部帙を分つべきでないとし、而して有人が大品、法華等の經を誑相宗に、華嚴、涅槃等の經を顯實宗に配するの不可を論じてゐるが、これは北道派に於て經別を主張し、經の上に宗の別を認め、直に經を取つて之を宗に配當したので、それを不可として破したのではないかと思はれる。兎に角、敎判の異同の如きは恐らく其の主なる問題でなく、最も重要なる論諍が依持論に在つたことは明かである。

二

依持とは一切法の爲に所依となり、同時に亦その法を住持し相續せしむる根本原理となるもの

をいふのである。依持論に關し南北兩道に於てその主張を異にしたことは唐湛然等の傳ふる所で、即ち彼の法華文句記第七中に、

古弘㆓地論㆒、相州自分㆓南北二道㆒所計不㆑同。南計㆓法性生㆓一切法㆒、北計㆓黎耶生㆓一切法㆒。宗黨既別、釋㆑義不㆑同。

といひ、又同法華經玄義釋籤第十八に、

陳梁已前弘㆓地論㆒師二處不㆑同。相州北道計㆓阿黎耶㆒以爲㆓依持㆒、相州南道計㆓於眞如㆒以爲㆓依持㆒。此二論師倶稟㆓天親㆒、而所㆑計各異同㆓於水火㆒。

と記してゐるのがそれである。之に依ると南道派に於ては眞如依持説を唱へ、北道派に於ては黎耶依持説を主張し、互に水火の論戰を交へたことを知るのである。

この中、南道派の眞如依持説は、同派に屬する慧遠の大乘義章第三末八識義の中に、依持の一章を立てゝ其の義を論じてゐるので、詳細の主張を知ることが出來る。今左にその文を擧げて見よう。

第五明㆓其依持之義㆒。於㆑中有㆑二。一眞妄相對以說㆓依持㆒、二就㆓眞妄共相識中㆒本末相對以說㆓依持㆒。前中有㆑三。一眞妄相對以辨㆓依持㆒、二唯就㆑妄、三唯就㆑眞。眞妄相對依持如何。前七妄識

情有體無、起必託眞。名之爲依。故勝鬘經云、生死二法依如來藏。地經亦云、十二因緣皆依一心。第八眞心相隱性實、能爲妄本住持於妄。故說爲持。故勝鬘云、若無藏識七法不住。不得厭苦樂求涅槃。此是眞妄依持義也。妄之依眞如波依水、眞之持妄如水持波。故楞伽云、譬如巨海浪、斯由猛風起、洪波鼓冥壑、無有斷絕時。藏識海常住、境界風所動、種種諸識浪、騰躍而轉生。無明大海雖爲風飄水性不移。性不移故名爲常住。性雖常住而彼水相隨風波轉。喩彼眞識雖爲妄想境界風動眞性不變、性雖不變而彼眞相隨妄境界起於七識如海波浪。……問曰、眞妄一故相依、異故相依。是義不定。若全一體則無依持、若全別體亦無依持。不一不異故說依持。故楞伽云、非異非不異、心俱和合生。此說妄識與彼眞心和合生矣。

次就妄中以辨依持。第七妄識、諸虛僞本說爲能持。前六事識、依妄而起說爲能依。能持如水、能依如波。水在波生、水盡波滅。所況如是。故楞伽云、如水大流盡波浪則不生。如是意識滅種種識不生。彼名妄識以爲意識、六種事識爲種種識。良以妄識爲六本、故妄想意滅令彼種種六識不生。妄中本末依持如是。

次唯就眞以辨依持。眞有體用。本淨眞心說之爲體、隨緣隱顯說以爲用。用必依體名之爲依、

體能持用說以爲持。能持如水、能依如波。繩蛇等喩類亦用爾。眞妄相對依持如是。次就眞妄共相識中本末相對以辨依持。眞與癡合共爲本識。依本共起阿陀那識、依本共起六種生識。於此分中、本識爲本餘二爲末。末生依本名之爲依。本能持末流注不斷、說之爲持。能持如水、能依如波。

此の文を略解すれば、依持の義を論ずるに大別兩義あり、初義は眞妄相對して之を論じ、後義は眞妄共相識の中に就いて本末相對して之を論ず。初義の中に更に又眞妄相對と、唯妄中本末相對と、唯眞中體用相對との三義があり、すべて依持の義を論ずるに四種の別があるとするのである。先づ初義の中、初に眞妄相對して依持の義を論ずといふのは、八識の中に於て前七識を妄、第八識を眞とし、前七妄識は情有體無のものであるから、その起るには必ず第八眞識に托さなければならぬ。勝鬘經に生死の二法は如來藏に依るといひ、十地經に十二因緣は皆一心に依るといふのは、卽ち眞が妄の所依となるの義を說いたのである。又第八は眞識であるけれど、相が其の性實を隱す時、能く妄の本となり、能く妄を住持するのを持と名ける。勝鬘經に若し藏識なくば七法住せじといふのは卽ち此の意味を說いたのである。又楞伽經に水波の譬を擧げ、藏識海は常住なるも、境界の風に動ぜられて諸識の波浪を生ずと說いてゐるが、これは波が水に依るのを妄

が眞に依るに比し、水が波を持するのを眞が妄を持するに喩へたので、亦即ち眞妄相對依持の義を明かしたものだといふのである。次に唯妄中に就いて依持の義を辨ずとは、前七妄識の中に於て更に又本末相對して依持の義を論ずるのをいふので、即ち第七阿陀那識は虚僞の本であるから之を所依能持とし、前六事識は妄に依つて起されたものであるから、之を能依所持とするのであある。三に唯眞中に就いて依持の義を辨ずとは、第八眞識の中に於て更に體用相對して依持の義を論ずるをいふので、即ち自性淨心は體であるから之を所依能持とし、隨緣隱顯の用は必ず體に依つて起るものであるから、之を能依所持とするのである。已上は初義の中の三義で、即ち眞妄相對して依持の義を論じたのである。次に後義の眞妄共相識の中に就いて本末相對して依持の義を論ずといふのは、水波和合の共相識の中に就いて更に本末を分ち、眞と無明と和合せるものを本識とし、此の本識に依つて起された第七阿陀那識及び前六識を末とし、本を所依能持、末を能依所持とするのである。即ち四種の義の中、第一は第八眞識と前七妄識とを相對し、眞を所依能持、妄を能依所持とし、第二は更に前七妄識の中に就いて本末を分ち、第七を本、前六を末とし、之と相對して所依能依を論じ、第三は第八眞識の中に就いて體用を分別し、性淨の義を體、隨緣の義を用とし、之を相對して所依能依を論じ、第四は眞妄共相識の中に就いて亦本末を分別し、無

明と和合せる阿梨耶識を本、前七識を末とし、之を相對して依持の義を論ずるのである。是の如く依持に關し慧遠が多說を列擧したのは、依持は觀點の不同によつて種種に論ぜらるべきものなることを示し、同時に亦傳統の異說を和會せんとするの意に出でたものと認められる。

三

慧遠の心識說は八識建立であつて、彼は第八識を阿梨耶、第七識を阿陀那と名づけ、阿梨耶を無沒の義に解して如來藏心と同視し、阿陀那を根本無明識としたのである。大乘義章第三末八識義の初に

阿陀那者、此方正翻名爲無解。體是無明癡闇心故。隨義傍翻差別有八。一無明識、體是根本無明地故。……阿梨耶者、此方正翻名爲無沒。雖在生死不失沒故。隨義傍翻名別有八。一名藏識、如來之藏爲此識故。是以經言如來之藏名爲藏識。以此識中涵含法界恆沙佛法故名爲藏。又爲空義所覆藏故亦名爲藏。二名聖識、出生大聖之所用故。三名第一義識、以殊勝故。故楞伽經說之以爲第一義心。四名淨識、亦名無垢識。體不染故。故經說爲自性淨心。五名眞識、體非妄故。六名眞如識。論自釋言、心之體性無所破故名之爲眞、無所立故說以爲如。七名家識、亦名宅識。是虛妄法所依處故。八名本識、與虛妄心爲根本故。

名別如レ是。

といふのが即ちそれである。これは阿梨耶識を以て如來藏そのものとなし、之に藏識・聖識・第一義識・淨識・眞識・眞如識等の異名があるとするので、法華經玄義第五下等に、地論師は阿梨耶を以て眞常淨識となすといつてゐるのに相當するのである。蓋し慧遠等の地論師が阿梨耶を如來藏と同視し、之を眞常淨識としたのは、恐らく楞伽の說に基いたのであらう。即ち北魏菩提流支譯の入楞伽經第七佛性品に「阿梨耶識者名二如來藏一。而與二無明七識一共俱」といひ、又「甚深如來藏與二七識一俱生」といひ、又同經第二集一切佛法品に「若阿梨耶識滅者此不レ異二外道所見戲論一」といひ、同第九總品の偈に「阿梨耶識常、依二風境界一起」といひ、勝鬘經にも若し如來藏なくば、六識及び心法智、此の七法は刹那も住せずと說き、阿梨耶識を以て如來藏となし、之を無明七識に對望させたのみでなく、亦彼の識の不滅を認めてゐるから、それに依つて阿梨耶を眞識として建立したものと認められる。

然るに阿梨耶は生死の中に在るも、その體失沒せざるが故に無沒と名づけるのであつて、既に隨緣して生死の中に在るものをいふのであるから、嚴密の意味に於て無垢清淨の眞如と區別されなければならぬ。故に前引大乘義章の連文に、若し眞識を開いて二種となさば、本淨の義を阿摩

羅無垢識、隨緣の義を阿梨耶無沒識と名づくべきだといひ、又九識建立に依らば阿摩羅を第九、阿梨耶を第八と名づくべきだといつてゐるのである。此の中、第九阿摩羅識の說はいふまでもなく攝論師に依つたのであるが、しかし入楞伽經第九總品の偈に「八九種種識、依㆓風境界㆒起」といひ、又勝鬘經に在纒の如來藏と出纒の如來藏とを區別してゐるから、それに基いて地論師も亦八九の別を立てたのであらう。

又入楞伽經第七佛性品に「如來藏識不㆑在㆓阿梨耶識中㆒。是故七種識有㆑生有㆑滅、如來藏識不生不滅」といひ、又「離㆓阿梨耶識㆒無㆑生無㆑滅。一切凡夫及諸聖人依㆓彼阿梨耶識㆒故有㆑生有㆑滅」と說き、如來藏を不生不滅、阿梨耶を生滅の識とし、且つ同經に屢如來藏識(梵本には單に如來藏 tathāgata-garbha)と阿梨耶識との二名を竝べ擧げ、之を別物として說き明かしてゐる。蓋し阿梨耶を隨緣の識とすれば、其の自體は無垢清淨であるにしても、既に隨緣して生死の中に在るのであるから、その相は卽ち眞妄和合でなくてはならぬ。大乘義章八識義の中に

眞妄離合以說㆓九種㆒。獨眞爲㆑一、所謂本淨阿摩羅識。眞妄和合共爲㆓八識㆒。

といひ、又「眞與㆓無明㆒共爲㆓本識㆒、依㆑本共起㆓阿陀那識㆒、依㆑本共起㆓六種生識㆒」といひ、阿梨耶を眞妄和合の共相識とし、之を眞識と區別したのは、卽ち今の楞伽の經說に依つたものと見るべき

である。

斯樣に慧遠の心識に對する考察が多岐に亙る所から、今依持を論ずるにも亦四義の不同を立てて來たのである。卽ち四義の中、第一眞妄相對義は阿梨耶と如來藏とを同視し、之を總じて第八眞識となし、前七妄識に相對して依持の義を論じたのであり、第二唯妄中本末相對義は、彼の前七妄識の中に就いて本末を分ち、之を相對して依持を論じ、第三唯眞中體用相對義は、眞識の中に就いて八九二識の別を立て、阿摩羅性淨の義を體、阿梨耶隨緣の義を用とし、之を相對して依持を論じ、第四共相識中本末相對義は、水波和合の共相識の中に就いて、阿梨耶を本、前七識を末とし、之を相對して依持の義を論じたのである。されば慧遠の依持論は各皆その所由のあることを知らなければならぬ。

四

慧遠の師なる法上の十地論義疏(正八五之三)には、阿梨耶を第七識、眞如を第八識として八識を建立してゐる。卽ち彼疏第一に

三種同相智者、一緣起、二妄想、三眞如。緣起者、第七阿梨耶識是生死本也。妄想者、六識心妄生分別、邪著六塵。眞如者、佛性眞諦第一義空也。

といふのがそれである。これは第七阿梨耶識を緣起生死の本となし、前六識を所起の妄想とし、而して眞如を第八佛性識として八識を建立したのである。阿梨耶を第七、眞如を第八とし、此の二者を判然區別したのは、入楞伽經第七佛性品に「如來藏識不レ在二阿梨耶識中一」といふの說に基いたものと認められる。これは慧遠の梨耶眞識說に異なるところであり、又是の如く阿梨耶識を緣起生死の本とすることは、北道地論師の所謂梨耶依持說に似てゐる所から、學者の中には之を以て北道派の主張とするものもあるが、しかし法上は南道派の祖慧光の門人であるから、北道の說に贊同する筈もなく、且つ阿梨耶を緣起識とし、之を阿摩羅無垢識と區別することは、上に述べた如く慧遠も明かに唱へた所であり、又眞妄相對依持義の下に「第八眞心、相隱二性實一能爲二妄本一、住二持於妄一」といひ、又慧遠の十地義記第三末に

阿梨耶者此翻名爲二無沒識一也。此是第八如來藏心隨レ緣流轉、體不二失滅一故曰二無沒一。乃生死之本性也。

といつてゐるのは、阿梨耶識を以て生死の本としたのであつて、正しく法上と同說である。されば慧遠は大體に於て法上の說を承襲したものといはなければならぬ。

又法上は眞如依持說を主張し、梨耶依持說を唱道したものでないことは、彼の十地論疏第三の

記述に依つて明かに知られるのである。即ち

問曰、十二因緣、論主何故分兩番而明者。答曰、初番明妄想紛競生死彌淪、特由無明爲本生、後一番明諸惑妄想無依不立、妄依眞有。是故辨阿梨耶識共生以爲萬惑之本。故經云、以如來藏故說生死。是故如來藏是一切法本。以有二種本故二處而明也。……八識位中、七識無體、依眞而用別。即用爲體、更無別體、正以用爲體。即體用同時以辨十二。

といふのがそれである。この文意は、世親の十地經論第三に十二因緣の義を明かすに兩番の釋がある中、初番は妄想の紛競するのは無明を本となすに由ることを明かし、後番は諸惑妄想は皆如來藏を所依の本となすことを明かしたもので、即ち諸法の本に無明と如來藏の二種があるから、それを示さんが爲に兩番の釋を設けたのだといふのである。此中、「諸惑妄想無依不立、妄依眞有」といひ、又「如來藏是一切法本」といふのは、妄が眞を依持とすることを說き、又「七識無體、依眞而用別。即用爲體、更無別體」といふのは、阿梨耶已下七識の無體なることを明かにしたので、彼の南道派の眞如依持說を主張したものであることを知るべきである。何となれば依持は一切法の根本となるものであるから、それ自ら有體でなくてはならぬ。今七識無體といふのは、阿梨耶は無體で、即ち依持の資格がないことを示し、妄は眞に依つて有りといふのは、正し

く如來藏眞識が諸惑妄想の依たることを明かにしたものと見られるからである。

又この中、如來藏を一切法の本となすのは、上に擧げた依持の四義の中、第一の眞妄相對義に當り、無明を妄想紛競の本となすのは、妄識の中に就いて本末相對して依持を論ずるの意で、彼の第二唯妄中本末相對義、幷に第四共相識中本末相對義に當るといふべく、又「八識位中、七識無體。依眞而用別。即用爲體」云云といふのは、緣起に約して體用を分別し、第八如來藏心を體となし、七識生滅をその用としたので、彼の第三唯眞中體用相對義は即ち此の說に導かれたものと見ることが出來る。大乘義章第一の二諦義に

若就依持二諦相望不即不離。依眞起妄、即妄辨眞、得說不離。眞妄性別、得云不即。……

……若就緣起二諦相望得言相即。即體起用、用即體故。

といつてゐるが、これは依持論からいへば、眞妄の性別を認めるのであるから、即ち二諦不即と說くべく、緣起論からいへば、體に即して用を起すのであるから、二諦相即と說くべきだといふので、今の法上の說意を明かにしたものとすべきである。

蓋し法上はその時代が早く、攝大乘論の傳譯も見なかつたのであるから、隨つて心識論に關する考察も單純であり、たゞ阿梨耶を緣起識　前六識を所起の妄想となし、而して眞如をそれ等諸

識の依持としたに過ぎなかつたのであるが、然るに慧遠は頗る博識であり、又攝論師の說も受け、且つ當時起信論が世に行はれて彼れの信用する所となつたのであるから、その說に少からざる變化を生じ、遂に地論傳統の說を改易し、若しくはそれに加上するに至つたものと推定される。慧遠の心識論は實は九識說であつて、法上の阿梨耶識と前六識との間に阿陀那識を加へたものといふべきである。即ち彼の眞如を第九無垢識、阿梨耶を第八、阿陀那を第七として九識を建立したのである。阿陀那を加へたのは十地經論に屢〻その名を出すからであるが、かくて此識を加へて之を根本無明の識とする時、阿梨耶識は第九眞如識と第七無明識の中間に立ち、當然眞妄兩性を有せなければならぬことになるのである。起信論に阿梨耶識に覺不覺の二義があるとしたのは、正しく此の點を狙つたのであり、慧遠が起信論を信用したのも、亦彼の眞妄和合說が自己の所見に合するからである。但し慧遠は地論傳統の說を重んじ、表面八識建立の建前を取り、眞如識と阿梨耶識とを同一とした所から、そこに幾多の會釋を要することになり、又依持を論ずるに當りても傳統の說を參酌し、上述の如き四義の別を立つるに至つたのであらう。

五

北道派が梨耶依持說を唱道したことは、前引法華文句記等に記載する所であるが、然るに此派

に關する文獻は今多く傳はらないので、その詳細の主張を知ることが出來ぬ。大乘義章依持章の第一眞妄相對義の下に

有人、一向說彼海水喩第七識不喩眞識。此言大偏。如彼經中說如來藏以爲識藏、第七妄心名業相識。經自說言、藏識如巨海、業相猶波浪。云何乃言水喩七識。彼文復言、如來之藏爲彼無始惡習所熏名爲藏識。無明住地與七識俱如海波浪。云何海水不喩眞識。良以世人迷覆眞心、妄取空義以爲眞識。故爲此論。

といふ破文を揭げてゐるが、これは南道派に於て楞伽の所謂藏識海を第八眞識に喩へ、眞識を依持として七識の波浪が轉ずと說くに對し、有人が之を眞識に喩へず、第七識に喩へたものとするのを破したのである。有人とは何人を指すか明かならぬけれど、此義は北道派の梨耶依持說を擧げたものと認められる。何となれば楞伽の所謂藏識海を眞識に喩へず、之を第七識に喩へたとするのは、第七識を依持として前六識の波浪が轉ずることを意味するのであつて、正しくそれは梨耶依持の主張に外ならぬからである。何故に藏識海を眞識に喩へないのかといふと、眞識は單なる空識であつて、法の依持となることが出來ないからである。今の文に「世人迷覆眞心、妄取空義以爲眞識。故爲此論」といつてゐるのは、卽ちその所由を明かにしたのである。又大乘義

章第十九三佛義の中に「有人宣說、法佛之體唯一空理。都非色心」といひ、又「人說、法身體是第一義空。空非心智」といつてゐるのも、恐らく亦北道派の說を擧げたのであらう。蓋し法身無色論は古くより支那に行はれたもので、注維摩經第二に、僧肇は法身は虛空身にして無形無象なりと說くといひ、道生は法身無色論を著はし、色形は累であるから、佛の法身に累たる色形はあるべきでないとし、又元興寺智光の淨名玄論略述第二末に、江南の成論師等は法身佛を立てず、如如の空理は頑境なるが故に立てゝ佛となさずといつてゐるのが皆それである。法身は勝鬘經等に之を如來藏と同視してゐるのであるから、今北道派に於ても成論師等の說を承けて法身體空を主張すると共に、亦如來藏空識論を唱道したものと認められる。

斯樣に北道派に於ては、眞識は空理であるから物の依持となることができぬとし、第七識卽ち阿梨耶識を以て一切法の依持としたのであらうが、この說方は上に擧げた法上の十地論疏に第七を阿梨耶識、第八を眞如識とし、且つ阿梨耶識を緣起生死の本となすのに善く似てゐる。さりながら法上の說は前に述べた如く第七識を無體とし、又明かに妄は眞に依ることを說いてゐるのであるから、眞如依持說たることは疑ひを容るべきでない。之に反し梨耶依持說は當然第七阿梨耶識の有體を認めなければならぬのであつて、彼の大乘義章八識義中の對治邪執の下に

有人聞說有第七識、便謂七識別有體性。對此邪執明妄無體。當知如來就心法中分取虛妄分別之義爲第七識。何得於中別立體性。……又經中說、若無眞識七法不住。若自有體云何不住。又若妄識自有體性便是實有、何得言妄。

といつてゐるのは、北道地論師の第七梨耶有體說を擧げ、之を破したものと見られる。されば北道派の心識說は法上の所謂八識論に類同するけれども、その趣旨は大に異なつたものであると同時に、亦早い時代には南北兩道共に第七識を阿梨耶、第八識を眞如如來藏と名けたことを知るべきである。

又湛然の法華玄義釋籤第十八に南北兩道の依持說の不同を敍し、その下に

加復攝大乘興、亦計黎耶以助北道。又攝大乘前後二譯亦如地論二計不同。舊譯卽立菴摩羅識、唐三藏譯但立第八。

と記してゐる。この文意は北道派に於て眞如依持を認めず、阿黎耶を以て一切法の依持となすことが、攝論師の黎耶緣起說と同趣旨であるので、おのづから彼の說が北道の主張に聲援を與へたことを傳へ、又北道派に於て阿梨耶の外に第八眞如空識を立てることが、舊譯の攝論に於て阿梨耶の外に別に第九菴摩羅無垢識を立てるのに似同し、又南道派に於て阿梨耶を直に眞識とし、別

に此外に眞如識を立てないことが、新譯の攝論に於て菴摩羅識を立てず、但だ第八阿梨耶識のみを立てるに類同することを指摘したのである。又摩訶止觀第五上に地攝兩論の異說を敍し、

地人云、一切解惑眞妄依持法性。法性持眞妄、眞妄依法性也。攝大乘云。法性不爲惑所染、不爲眞所淨、故法性非依持。言依持者阿黎耶是也。無沒無明盛持一切種子。

といつてゐるが、これは南道地論師の法性依持卽ち眞如依持說に對し、攝論師は法性は惑の爲に染せられざれば妄法とならず、眞の爲に淨せられざれば淨法とならず。所謂凝然常住なるが故に法性は依持に非ず。阿梨耶は之に反し無沒無明隨眠の識にして、能く一切の種子を盛持するものであるから、卽ち一切法の依持となるのだといふので、その論調が北道派の梨耶依持說と同一なることを見ることが出來る。されば彼の攝大乘與つて以て北道を助けたといふのは、兩者共に阿梨耶を以て依持となし、阿梨耶の外に別に眞識を立つるも之を依持としないことが共通し、爲に北道派の主張が一種の聲援を得たことを語るものといふべきである。

然るに學者の中には今の釋籤の文に「攝大乘前後二譯亦如地論二計不同」云云とあるのを、南北兩道の地論師が新舊二譯の攝大乘論と同一心識說を唱へたことを意味するものと解し、卽ち南道派は新譯攝論に同じく唯だ八識を立て、而してその中の第八阿梨耶を眞識となし、北道派は舊

譯攝論に同じく九識を立て、而してその中の第八阿梨耶を妄識、第九阿摩羅を眞識としたことを意味するものだとし、且つ前記續高僧傳の當現兩說の語を解し、當說とは北道派が八識斷滅九識顯現と說くのをいひ、現說とは南道派が八識卽眞と說くのをいふのだとしてゐる。されど此等の解釋は恐らく皆妥當でなく、特に北道派が九識を立てたといふが如きは臆斷の甚しきものとせなければならぬ。思ふに今の釋籤及び前引法華文句記の記事は、一切法の依持を論ずるに就いて、南北兩道が其の所見を異にしたことを傳へるのであつて、阿梨耶の眞妄、若しくは識數の問題に關するものではない。若し識數に就いていはゞ、南北兩道共に八識建立である。慧遠が眞識を分つて二種となし、阿梨耶を第八、阿摩羅を第九としたのは、しばらく攝論師の說に從つたまでのもので、彼が八識論者であることは、大乘義章の章目に自ら八識義と題してゐるのでもわかる。若し又總じて八識の眞妄に就いていはゞ、亦南北兩道共に前七識を妄、第八識を眞とするのである。吉藏の中觀論疏第七本に「舊地論師以₂七識₁爲₂虛妄₁、八識爲₂眞實₁。攝大乘師以₂八識₁爲₂妄、九識爲₂眞實₁」といつてゐるのがそれである。若し梨耶の眞妄に就いていはゞ、北道は妄識とし、南道は眞識、若しくは眞妄和合識とするものゝ如く、そは上に述べた通りである。されば釋籤の記事を以て阿梨耶の眞妄、并に心識の建立に關する南北の論諍を意味するものとするのは卽ち謬解

といはなければならぬ。

六

大乘起信論が支那撰述の僞書であらうといふことは、予の先年已來屢〻唱道した所である。當時予は此論を以て主として地論、攝論兩學派の間に於ける梨耶眞妄の異說、并に法報應三身に關する解說の相違を折衷調和せんと企てたものとなし、專らその趣旨に依りて支那撰述の所由を强調したのであるが、然るに近時少しく地論學派の所謂依持說を硏究し、その結果起信論は南道派の眞如依持說を主唱したものなることを覺り、且つ從前の如く此論を以て北地の作となし、その論旨を舊譯攝論との調和とする時、その著作年代が餘まりに限定される嫌ひがあり、又梨耶を眞妄和合とすることは、必ずしも攝論の影響とのみ見るべきでないから、今玆に地攝兩論調和說を捨て、新たに南道地論師假作說を提唱せんとするのである。

起信論は如來藏緣起の義旨を說いたもので、先づ如來藏心に眞如、生滅の二面があり、眞如は如來藏心の體で、即ち不生不滅であり、生滅は如來藏心を所依として起るもので、その關係は水波の如きものであるとし、次に彼の不生不滅と生滅と和合して非一非異なるものを阿梨耶識と名け、此識に覺と不覺の二義があり、不覺無明より五意及び分別事識を生じ、これによりて流轉生

滅の諸相が相續し、又眞如本覺の熏習が起り、發心修行すれば始覺を生じ、遂に和合識の相を破し、相續心の相を滅して法身を顯現することが出來るとするのである。卽ち生滅の諸法は如來藏心を所依とし、それより緣起すと說くのであるから、此論の論旨が大體に於て眞如依持說に准據したものなることを知るのである。又此の論中に「心眞如者卽是一法界大總相法門體」といひ、「依二如來藏一故有二生滅心一」といひ、「依二本覺一故而有二不覺一」といひ、又「無明之相不レ離二覺性一、非レ可レ壞非レ不レ可レ壞」といつてゐるが、此等は皆不覺妄法が如來藏心に依存することを說いたのであつて、疑ひもなく南道派の眞如依持說を紹述したものといふべきである。又此論に阿梨耶識を以て眞妄和合となし、之を不生不滅の心眞如と區別したのは、法上が第八を眞如、第七を阿梨耶としたのと同一考である。但し起信論には七八等の名を擧げて居らぬので、果して阿梨耶を第七とするか、第八とするかは明かでない。然し旣に心眞如と阿梨耶とを區別したのであるから、若し心眞如を第八に配すとすれば、阿梨耶は第七となり、又五意を第七識、分別事識を前六識に配すとすれば、阿梨耶は第八、心眞如は第九となるわけである。入楞伽經總品の偈に「八九種種識」の語があるから、此論は九識建立と見ても必ずしも妨げはない。慧遠の作と傳ふる（實は僞作）起信論疏に、心眞如を第九識、心生滅卽ち阿梨耶を第八識、無明及び五意を第七識に配當してゐるの

は卽ち此の見方である。兎に角、是の如く眞如と阿梨耶識とを區別するのは、恐らく南道派傳統の說であらうとおもはれる。

又阿梨耶識を眞妄和合とすることは、一面からいへば、地論の梨耶眞常淨識說と攝論の妄識說とを折衷したとも見られるけれど、眞如依持を主張して眞妄を分別相對すると同時に、その緣起を論ぜんとする時、そこに亦眞妄和合の媒介識を必要とすべき理があり、又旣に四卷楞伽第一に「藏識海常住、境界風所ㇾ動、種種諸識浪、騰躍而轉生。……海水起㆓波浪㆒、七識亦如ㇾ是、心俱和合生。譬如㆓海水變、種種波浪轉㆒。七識亦如ㇾ是、心俱和合生。」といひ、七識の波浪が常住の藏識海と俱生し、水波和合して非一非異なることを說いてゐるのであるから、それ等の理證に依つて眞妄和合說を唱道したとすることがむしろ適切であらう。蓋し阿梨耶を眞妄和合とすることは緣起論の立場から必要とせられるのである。若し依持論からいへば眞妄各別で、二者相卽しないのであるが、緣起論は體用相卽の建前を取るのであるから、眞妄和合が可能になり、且つそこには直接緣起生死の本を建立する要があるので、阿梨耶を眞妄和合の本識として說き明かして來たのである。法上が阿梨耶を緣起識となし、又體用相卽を論じ、慧遠が梨耶眞識を唱へながら、今の眞妄和合說をそのまゝ取り入れてゐるのも、皆この消息に基く

のである。

又起信論中には北道派の說を破したとおもはるゝ個所が少くない。卽ち此論の立義分に如來藏は無量の性功德を具足すといひ、又眞如門の下に眞如に如實空、如實不空の二義ありとし、眞心は常恆不變にして淨法滿足す、故に不空と名くと云つてゐるが、これは北道の眞如空識說を否認したものと見るべく、又對治邪執の一章は、主として彼の法身空寂說に對して評破を加へたものと認められる。卽ち對治邪執の下に

人我見者、依諸凡夫說有五種。云何爲五。一者聞修多羅說如來法身畢竟寂寞、猶如虛空、以不知爲破著故、卽謂虛空是如來性。云何對治。....所謂一切境界、唯心妄起故有。若心離於妄動則一切境界滅、唯一眞心無所不徧。此謂如來廣大性智究竟之義。非如虛空相故。二者聞修多羅說世間諸法畢竟體空、乃至涅槃眞如之法亦畢竟空、從本已來自空離一切相、以不知爲破著故、卽謂眞如涅槃之性唯是其空。云何對治。明眞如法身自體不空具足無量性功德故。

と記してゐるが、これは如來の法身を以て畢竟寂寞、虛空の如きものなりとし、又眞如涅槃の性も畢竟空にして一切の相を離ると說くのを邪執としたのであつて、正しく北道派の法身空寂、眞

如空識説を破したものと見られる。又次の文に

三者聞修多羅説如來之藏無有增減體備一切功德之法、以不解故、即謂如來之藏有色心法自相差別。四者聞修多羅説一切世間生死染法皆依如來藏而有、一切諸法不離眞如、以不解故、謂如來藏自體具有一切世間生死等法。

五者聞修多羅説依如來藏故有生死、依如來藏故得涅槃、以不解故、謂衆生有始、以見始故、復謂如來所得涅槃有其終盡還作衆生。

といつてゐるが、これは南道派に於て如來藏の自體に一切功德の法を具足すとし、又如來藏に依つて世間生死の染法あり、及び涅槃を得る等と説く所から、北道派は之に對し、若し如來藏に一切の功德法が具足すとすれば、その中に色心諸法の自相差別がなければならぬ。又如來藏に依つて世間生死の法があるとすれば、その自體に生死の染法までもあるべく、又如來藏に依つて生死あり、如來藏に依つて涅槃が得られるとすれば、衆生に始めがあり、涅槃に終りがあることになつて、一たび成佛した如來も却つて復た凡夫になる恐れがあるべきだといひ、種種批難を加へて來るので、それ等をすべて曲解邪執として反破を試みたものと認められるのである。

七

又彼の天竺菩提燈譯と傳ふる占察善惡業報經の如きも、恐らく亦南道地論師の手に僞作されたものであらうとおもふ。彼經は上下二卷に分たれ、上卷には占察善惡業報の法を說き、下卷には大乘の實義を說いてゐるのであるが、その所謂大乘の實義なるものは卽ち如來藏緣起論であつて、其の論旨は全く起信論に一致するのである。この事は「大乘起信論之研究」に嘗て詳述した所であるから今は之を略し、たゞ此經も亦南道派の眞如依持說を祖述したものであることを述べて見やう。卽ち彼經下卷に

寂靜一味名爲㆓眞如第一義諦自性清淨心㆒。彼自性清淨心、湛然圓滿以㆑無㆓分別相㆒故。無㆓分別相㆒者於㆓一切處㆒無㆓所㆑不㆑在。無㆓所㆑不㆑在者以㆓能依㆓持建㆓立一切法㆒故。復次彼心名㆓如來藏㆒。所謂具㆓足無量無邊不可思議無漏清淨功德之業㆒。

といひ、又

心體本相如如不㆑異、清淨圓滿無障無礙微密難㆑見。以㆘遍㆓一切處㆒常恆不㆑壞建㆓立生㆓長一切法㆒故。

といふのは、卽ち如來藏心を以て遍一切處常恆不壞のものとなし、能く一切法を依持し建立し生長せしめるものとするので、眞如依持說を述べたものなることは明了である。又

如㆑是等說、鈍根衆生不㆑能㆑解者、謂㆘無上道如來法身但唯空法、一向畢竟而無㆓所有㆒。……我卽爲

說如來法身自性不空有眞實體具足無量淸淨功業。

復次、卽彼空義中以離分別妄想心念故、則盡畢竟無有一相而可空者。以唯有眞實故卽爲不空。

といふのは、起信論の對治邪執と同一論調であつて、卽ち北道派の法身空寂說を破したものと認められる。又彼經に

所說心義者有二種相。何等爲二。一者心內相、二者心外相。心內相者復有二種。云何爲二。一者眞、二者妄。所言眞者、謂心體本相如如不異、淸淨圓滿無障無礙微密難見。以遍一切處常恆不壞建立生長一切法故。所言妄者、謂起念分別覺知緣慮憶想等事。雖復相續能生一切種種境界、而內虛僞無有眞實。不可見故。

といふのは、卽ち眞妄和合の阿梨耶識を說いたのであつて、亦全く起信論の說と同一である。新羅珍嵩の探玄記私記には、起信論は僞妄の占察經に依つて造つたものであるから卽ち僞論だと推定してゐるが、いかにも其の論旨が一致し、亦その用語までも類同が少くないのであるから、この兩者の間に關聯のあつたことは疑ふべくもない。且つ起信論は其の組織が井然として具さに心識生起の次第を說き、流轉還滅の相狀を明かし、文章用語も亦精練されてゐるのに反し、占察經

には心識等を委說せず、又義旨前後し、文句も冗漫に亙るものがあるから、卽ち經が先づ製作され、論は後に彼の經に就き大に改組を加へたものかも知れぬ。若し然りとすれば珍嵩の說は正鵠を得たものといふべきである。兎に角、當時佛說として占察經が僞作されたことは注目を要すべき事實で、之に依つて南道地論師が如何に其の主張の貫徹に努力したかを知り、又既に此の如く名を佛說に借りて自己の義立を主張したとすれば、馬鳴に假托して起信論を製作する如きは、寧ろ犯罪の輕きものといはなければならぬ。

八

惟ふに如來藏の敎義は印度已來唱道せられ、既に北魏時代までに如來藏經を始め、涅槃、勝鬘、四卷十卷楞伽等の諸經、究竟一乘寶性論等が支那に傳譯され、地論の諸師は之を三界一心作の說に結び付け、妄法の緣起及び依持を論議するに至つたのであるが、然るに彼等諸師は未だ如來藏の本質、阿梨耶の性格、心識緣起の次第、乃至流轉還滅の法則等につき組織的學說を有しなかつたのである。そこで今起信論の作者は此等の諸問題に對して大に考察を加へ、當時行はれつゝあつた諸經論を博渉し、又南北諸家の長短を檢討し、自ら眞如依持說を取り、且つ彼の如き如來藏緣起論を大成したものと認められる。果して然りとすれば、如來藏緣起の敎旨は支那に至つて始

めて組織されたものといふべく、隨つて起信論の作者は卓越せる大論師であつたとすべきである。馬鳴に假托した所から、眞の作者の名の傳らぬのは甚だ遺憾であるが、北地の地論師であつたことは、珍海の三論玄疏文義要第二に唐惠均の四論玄義を引き、

均師四論玄第十云、起信、有云是北土論師造也。而未レ知二是非一（取意）正文云、北地諸論師云、非二馬鳴造論一。昔日地論師造レ論、借二菩薩名一目レ之。故尋二覓翻經論目錄一無レ有也。未レ知二定是不一。

といふに依りて察することが出來る。その製作年代は固より不明であるけれど、隋曇延（五一六―五八八）の起信論疏（殘闕）が現に傳つて居り、慧遠（五二三―五九二）の大乘義章及び十地論義記、曇遷（五四二―六〇七）の大乘止觀法門等に此論が引用され、又續高僧傳第十八に、曇遷が北周建德三年（五七四）武帝の破佛已前に河南の林慮山に隱れ、華嚴、十地、起信等の經論を研精したことを傳へ、且つ彼も起信論疏を著したといはれてゐるのであるから、北齊若しくは北周の初頃に撰述されたものと推定されるのである。

第三節　起信論の專念阿彌陀佛說に就て

大乘起信論が支那南北朝時代に匿れたる論師によりて製作された僞書であらうといふことは、予が先年已來數次に亙りて論述した所であるが、近頃又その論旨が地論南道派の主張に合するものなるを知り、此論は卽ち南道地論師の手になつたものであらうと推定するに至つた。この事は旣に前節に述べた通りであり、その他の問題も亦ほゞ論及したが、唯だ修行信心分の終りに揭げてある專念阿彌陀佛說には多く觸れないので、今之に就いて檢討を加へ、地論學派の間に特に彌陀信仰が流行した由來を明かにして見やうと思ふ。專念阿彌陀佛の說とは、

依不定聚衆生、有熏習善根力故、信業果報能起十善、厭生死苦欲求無上菩提、得値諸佛親承供養修行信心、經一萬劫信心成就故、……………能自發心。如是信心成就得發心者、入正定聚畢竟不退。名住如來種中正因相應。……復次衆生初學是法、欲求正信其心怯弱、以住此娑婆世界、自畏不能常値諸佛親承供養、懼謂信心難可成就意欲退者、當知如來有勝方便攝護信心。謂以專意念佛因緣、隨願得生他方佛土、常見於佛永離惡道。如修多羅說、若人專念西方極樂世界阿彌陀佛、所修善根廻向、願求生彼世界卽得往生。常見佛故終無有退。若觀彼佛眞如法身、常勤修習畢竟得生、住正定故。

この文意は、佛道修行には信心を成就して發心することが最も肝要であり、信心が成就すれば正

定聚に入り、畢竟じて退することがなく、卽ち如來種の中に住して正因と相應することが出來る。然るに信心を成就するには一萬劫の長年月を要し、その間諸佛に値うて親承供養せなければならぬが、初學の凡夫は其の心が怯弱なるが爲に、此の娑婆世界に於ては諸佛に値うて親承供養することが出來ず、隨つて信心の成就し難いことを思ひ、退墮を懼れるものが多い。此等の凡夫の爲に如來は別に勝方便を以て彼の信心を攝護するの法を說かれた。卽ち專心念佛の法を修すれば、願に隨つて他方の淨土に生るゝことを得、常に佛を見る所から永く惡道を離るゝことが出來る。經中に若し人ありて專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根を廻向して彼の世界に生せんと願はゞ、卽ち往生することが出來ると說いてゐるのがそれである。卽ち淨土に往生すれば常に佛を見ることが出來るから、終に不退が得られる。若し又阿彌陀佛の眞如法身を觀じて常に修習すれば、畢竟じて彼の佛の淨土に生れて正定聚に住することが出來るといふのである。

この中、前段の文に一萬劫を經て信心成就し、正定聚不退に入るといふのは、仁王般若經巻下幷に菩薩瓔珞本業經巻上の說に依つたのであり、又後段の文に其の心怯弱にして、娑婆世界に住するが故に常に諸佛に値ふことを得ず、退墮を懼るゝものは、專意念佛の法によりて他方佛土に往生すべしといふのは、おそらく龍樹の十住毘婆沙論第五易行品の說意を承けたのであらう。卽ち

易行品に

汝言阿惟越致地是法甚難、久乃可得。若有易行疾得至阿惟越致地者、是乃怯弱下劣之言、非是大人志幹之説。汝若必欲聞此方便今當説之。佛法有無量門、如世間道有難有易、陸道歩行則苦、水道乘船則樂。菩薩道亦如是。或有勤行精進、或以信方便易行疾至阿惟越致者。

といひ、次に易行の法として東方善德等の十方十佛の名號、幷に阿彌陀佛の名號を稱すれば卽ち必定に入り、阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得んと說いてゐるのである。但し易行品には此身に於て阿惟越致地に至るといひ、卽ち娑婆世界に居ながら、稱名の法に依つて不退が得られるとするので、此點は起信論の往生不退說と聊か異つてゐるやうであるが、しかし易行品の彌陀章には淨土不退の意味が充分顯はれてゐるから、曇鸞は之を淨土不退に約して解釋してゐる。彼の往生論註卷上に

難行道者、謂於五濁之世、於無佛之時、求阿毘跋致爲難。此難乃有多途、……易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土、乘佛願力便得往生彼淸淨土。佛力住持卽入大乘正定之聚。正定卽是阿毘跋致。

といつてゐるのがそれである。これは五濁惡世の無佛の世界に於て不退を求むるのを難行道とし、

淨土に往生して正定聚に入るのを易行道と名けたので、今の起信論の說に一致するのである。特に起信論に一萬劫を經て信心成就すといふのは、易行品に「是法甚難、久乃可ㇾ得」といふに合し、又起信論に其の心怯弱にして退墮を懼るといふのは、易行品に「是乃怯弱下劣之言。非㆓是大人志幹之說㆒」といふのを受けたのであり、又起信論に此の娑婆世界に住するを以て、常に諸佛に値うて親承供養する能はずといふのは、往生論註に「於㆓五濁之世㆒、於㆓無佛之時㆒求㆓阿毘跋致㆒爲ㇾ難」といふに合する。若し起信論が地論師の作であるとすれば、その專念往生の說は曇鸞の淨土不退說の影響を受けたのでないかと疑はれるのである。

地論學派は相州(卽ち鄴都)の南北二道に於て其の主張が對立し、南道派北道派と呼ばれたのであるが、南道派は勒那摩提を祖とし、其の門人惠光、光の門人道憑及び法上、上の門人慧遠等が相次で承習して眞如依持說を鼓揚し、北道派は菩提流支を祖とし、その門人道寵等之に屬し、梨耶依持說を主張したといはれてゐる。この中、惠光及び道憑が彌陀淨土の往生を願つたことは續高僧傳等に記する所であり、菩提流支は天親の往生論を翻譯し、且つ曇鸞に觀經を授けたと傳へられ、又道綽の安樂集卷下には、菩提流支已下六大德が共に皆聖敎を詳審し、歎じて淨土に歸したと云つてゐる。今左に安樂集の文を擧げて見やう。

第一依㆓中國及以此土大德所行㆒者、余五翳面牆、豈寧自輒。但以㆓遊歷披勘㆒敬㆑有㆓師承㆒。何者、謂中國大乘法師流支三藏。次有㆓大德㆒呵㆓避名利㆒、則有㆓慧寵法師㆒。次有㆓大德㆒、尋常敷演每感㆓聖僧來聽㆒、則有㆓道場法師㆒。次有㆓大德㆒、和光孤栖、二國慕仰、則有㆓曇鸞法師㆒。次有㆓大德禪觀獨秀、則有㆓大海禪師㆒。次有㆓大德㆒、聰慧守㆑戒、則有㆓齊朝上統㆒。然前六大德並是二諦神鏡、斯乃佛法綱維、志行殊㆑倫古今實希。皆共詳㆓審大乘㆒、歎㆓歸淨土乃是無上要門㆒也。

之に依ると此の六師は次第に付法相承したやうであり、又菩提流支は北道派の祖であるから、慧寵已下の五師は彼派の傳承を擧げたやうにも見えるが、事實は必ずしもさうでない。この中、慧寵は多分道寵のことをいふのであらうが、諸傳には彼れが淨土に歸したことを傳へて居らぬ。道場は慧影の大智度論疏第二十四に依ると、本と惠光の弟子で、次で菩提流支の講說を聽き、後嵩山に入りて十年大智度論を讀んだといひ、又集神州三寶感通錄卷中幷に法苑珠林第十五には、隋文帝の時、沙門明憲は高齊の道長法師の所に於て、天竺鷄頭摩寺五通菩薩の圖寫した阿彌陀佛五十菩薩像を得て、之を圖寫流布したと記してゐる。高齊の道長法師といふのは卽ち道場法師のことであるから、彼れは生平阿彌陀佛を信奉し、五通曼陀羅を安置したことを知るべきである。大海はおそらく慧海の尊稱であらうと思はれるが、續高僧傳第十二に、慧海は齊州の僧道詮より

阿彌陀五十菩薩像を得て之を模寫し、切に淨土往生を願つたと傳へてゐる。齊朝の上統といふのは法上のことで、彼れは南道派に屬し、且つ兜率往生を求め、西方の願生者ではなかつた。又曇鸞が往生論註を著し、彌陀本願の敎旨を鼓吹したことは有名な事實で、改めて絮說するまでもない。されば安樂集の所謂六大德の中、道場、曇鸞、大海の三師は、確かに彌陀淨土の信仰者であつたことを知るのである。總じて菩提流支及び勒那摩提の門葉の間に願生淨土の信仰の流行したことは事實であるから、今起信論に專念阿彌陀佛の說を揭げてゐるのも卽ち其の影響を受けたものと見られるのである。

又天竺三藏菩提燈の署名を有する占察善惡業報經も支那撰述の僞經で、その下卷に記載する大乘の實義なるものは、大體に於て起信論の論旨に一致し、共に眞如依持說を取つてゐるのであるから、これ亦南道地論師の僞作したものと認められる。此經にも亦淨土往生の法を鼓吹し、而して其の說き方が起信論と同一趣旨なることも頗る興味を感ずる所である。今左にその文を擧げて見ると

若人雖學如是信解、而善根業薄未能進趣、諸惡煩惱不得漸伏。其心疑怯畏墮三惡道八難處、畏不常値佛菩薩等不得供養聽受正法、畏菩提信難可成就。有如此疑怖及種種障礙

等者、應於一切時一切處常勤誦念我之名字。若得一心善根增長、其意猛利、當觀我法身及一切諸佛法身與己自身體性平等無二無別、不生不滅常樂我淨功德圓滿是可歸依。（中略）此人捨身終不墮惡道八難之處。還聞正法習信修行、亦能隨願往生他方淨佛國土。復次若人欲生他方現在淨國者、應當隨彼世界佛之名字專意誦念、一心不亂如上觀察者、決定得生彼佛淨國、善根增長速獲不退。

これは鈍根の者は善根微薄で、諸惡煩惱を伏することが出來ず、隨つて止觀の法を學しても容易に進趣せず、其の心疑怯して三途八難に墮せんことを畏れ、且つ常に諸佛菩薩に値うて親承供養し、正法を聽受することが出來ないので、菩提の信の成就し難いことを畏れるであらう。斯かる人は一切の時、一切の處に於て常に佛の名字を誦念し、若し又一心不亂なることを得て、その意が猛利である者は、諸佛の法身と自己の身と體性平等無二無別なることを觀せよ。かくの如くする者は來世に惡道八難に墮せず、其の願に隨つて佛の淨土に生れ、速に不退を獲得することが出來るといふのであつて、その趣旨は勿論、文字章句までも起信論と殆んど同一であることを見るべきである。但し此經には彌陀の名を擧げず、たゞ隨願往生とのみ云つてゐるけれど、これは隨願往生十方淨土經の說に依つたからであつて、他方淨佛國土といふのが彌陀の淨土を意味する

ことは疑ひを容れぬ、東寺賢寶の寶冊鈔第八に新羅珍嵩の説を引き、

探玄記第三私記青丘釋珍嵩撰云、馬鳴起信論一卷、依漸刹經二卷造此論。而道宣師目錄中云此經是僞經。故依此經造起信論是僞論也。

と記してゐるが、こゝに漸刹經といふのは今の占察經を指すので、即ち起信論は僞經の占察經に依つて造つたものであるから僞論だと推論したのである。いかにも起信論の論旨は此經の所謂大乘の實義に一致し、且つその論旨が井然たる組織を有し、その文章用語が精練されてゐるのに反し、此經には心識生起等の説を闕き、章句も亦冗漫にして、まゝ重複に亙り、概して不整頓であるのであるから、起信論は即ち此經に就いて改組整正を企て、更に又潤文修飾を加へたものと見るべきである。兎に角、此經には眞如依持説を主張してゐるので、南道地論師の手に成つたことは明かといふべく、隨つて亦此の事實に依つて南道派の間に彌陀信仰が行はれてゐたことを察知し得るのである。

蓋し地論師が彌陀信仰を有するに至つたのは、南道派の祖たる勒那摩提が翻傳した究竟一乘寶性論の偈に「依此諸功德、願於命終時、見無量壽佛、無邊功德身。我及餘信者、既見彼佛已、願得離垢眼、成無上菩提」といひ、又北道派の菩提流支が天親の往生論を譯出し、地論の作者

なる天親も彌陀の信奉者なることを傳へ、のみならずおなじ菩提流支譯の入楞伽經第九總品に龍樹安樂國往生の懸記をかゝげ、

如來滅度後、未來當ㇾ有ㇾ人。大慧汝諦聽、有ㇾ人持二我法一。於二南大國中一、有二大德比丘一、名二龍樹菩薩一。能破二有無見一、爲ㇾ人說二我法、大乘無上法一。證二得歡喜地一、往二生安樂國一。

と記してゐるのにも由來することゝ想察される。彼の曇鸞の讃阿彌陀佛偈に龍樹を讃じて、

大師龍樹摩訶薩、誕二形像始理二頹網一、關二開邪扉一開二正轍一、是閻浮提一切眼。伏承尊悟二歡喜地一、歸二阿彌陀一生二安樂一。譬如龍動雲必隨一、閻淨提放二百卉一舒。南無慈悲龍樹尊、至心歸命頭面禮。

と云つてゐるのは、明かに曇鸞が入楞伽經の記事に依つて、龍樹も彌陀信仰者たることを見出したことを證するのであり、彼の往生論註に十住毘婆沙論を引き、易行不退の說を鼓吹したのは、その影響とも見られるのである。今占察經弁に起信論に於て、鈍根の者の速に不退を得べき法として、專念往生を擧げて來たのも、亦確かに龍樹の難易二道說を承けたのであつて、即ち彼の匿れたる作者が楞伽經に准據して如來藏緣起の敎旨を組織する時、龍樹懸記の文を見て、深甚の衝動を受けたことに起因するものであらうと認められるのである。

第四節　實叉難陀起信論重譯說の檢討

大乘起信論は歷代三寶紀已下諸目錄に悉く眞諦三藏譯とし、又その著者を馬鳴菩薩としてゐる。然るに眞諦譯出の說は疑訝すべき點が甚だ多く、且つ之を龍樹已前の馬鳴の著作とすることは、論の本文より見て到底容認さるべくもない。のみならず亦その中には南北朝時代に於ける梨耶眞妄等の諍議を折中調和したと見るべきものがあるから、此論は印度撰述でなく、卽ち南北朝の末頃に或る好事者が馬鳴に假托して僞撰したものであらうと推定されるのである。そのことは予が嘗て「大乘起信論之研究」中に委しく論述した所であるから、今は之を省略する。然るに彼書發行の後、支那の新會梁啓超氏は大乘起信論考證一卷（民國十五年六月印行）を公にして、全然予の說に同意を表し、且つその序中に左の如く記してゐる。

此問題以㆓望月氏㆒爲㆓中心㆒、而松本氏導㆓之於前㆒、村上氏以㆓斯界老宿㆒翼㆓之於後㆒。當㆓大正八九兩年中㆒（卽民國八九年）日本論壇爲㆓此問題㆒起㆓一激戰㆒。其持㆓反對論㆒者爲㆓常盤大定及羽溪了諦㆒亦彼都著名學者。吾儕以㆓史家之眼㆒忠實評㆓騭之㆒、則望月派所㆑持蓋信讞也。望月所㆑著大乘起信論之研究、

爲五十萬言之一巨帙。此外松本村上二氏所論述又不下十萬言。吾既搜而徧讀之、輙擷其精要、且間附己見助彼張目、以成斯論。

隣邦の學者から兎も角共鳴を得たことは、予の聊か意を強うするところである。其後又松本文三郎氏は「宗教研究」誌上に「起信論の支那撰述説に就いて」と題し、起信論が唐實叉難陀により重譯せられたことを指摘し、實叉難陀は梵本から譯出したに相違ないから、玄奘梵譯の事實が充分證明せられない限り、此論は印度撰述でなくてはならぬと云ひ、予の所論を綱渡りの危きに譬へられた。此の問題は既に屢觸れたことではあるが、更に來意に酬うべく予も亦彼の誌上に一文を投じた。尋いで又同誌に林屋友次郎といふ人があつて、「起信論の成立問題に就いて」といふ一篇をかゝげ、予の所論に對してあらゆる譏誣の言を哢し、或は獨斷的所見なりと云ひ、或は自說を强辯せんが爲に虛僞の論證をなすといひ、或は眞面目なる學的態度を失つたもので、厘毫の學的價値を認むることの出來ない詐略的論文であるといひ、或は學的良心の痲痺を疑はしむるといひ、全篇殆んど此種の文字を以て塡めてゐる。顏も知らぬ名も知らぬ人から斯かる惡罵を浴びやうとは、全く以て思ひ懸けもないことで、實に恐れ入つてしまつたのである。何か前生で恨を買つた報いかも知れぬが、此世では何の恩怨もない人から、狂犬のやうに嚙み突かれては挨拶の仕

様もないのである。これには何か子細があるのであらう。知る人ぞ知るで、淺ましく〳〵といふもおろかなことである。而して其論旨はといへば、印度撰述でもなく、支那撰述でもなく、同人が自ら告白した通り「厘毫の學的價値を認むることの出來ない詐略的論文」そのものである。斯様なものに對しては捨置記答といつて、狂犬の哮へるまゝに捨てゝ置くのが寧ろ賢明であらう。其後又「宗敎研究」誌上に鈴木宗忠氏が本問題に關し、從來兩者が取扱つた材料等に就いて種種批判を下されてゐるが、一二遺憾な點はあるけれど、先づ大體に於て公平が保たれてゐるやうである。斯様に其後も尙ほ本問題は學者の注意に上つてゐるので、いづれは歸着すべき處に歸着するであらうと期待してゐるのである。今左に予が松本博士の駁論に對して述べたところの答辯を揭げて見やう。

松本文三郎博士は「宗敎研究」紙上に於て、予が先年來唱道せし起信論支那撰述説に對して可なり深刻な批評を試み、實叉難陀重譯説を楯として印度撰述説に共鳴せられた。この問題は實は大正七年已後數年にわたりて種種に論議されたもので、議すべき題目は當時既に殆んど議了されてゐるのである。松本博士が今回提起せられた題目の如きも亦既に論議せられたことで、決して新しい提案ではない。隨つて予はそれを一讀して別に答辯を試みねばならぬとまでは感じなかつ

たけれど、實叉難陀譯に就いては更に多少の研究を加ふべき必要もあるから、こゝに此の一文を草することにしたのである。

松本氏は予の論説を以て餘りに迂餘曲折にして、殆んど全く根本事實の釋明を缺いてゐると評し、綱渡りの譬を擔ぎ出してゐるが、斯樣な問題は本來簡明直截に取扱つてゆける性質のものでない。種種の方面からいろ〳〵と檢討して始めて眞相が闡明せらるゝのであり、特に教義の方面について精研を加へる如きは最も緊要のことゝせねばならぬ。然るに氏はこれ等のことを迂餘曲折とし、本問題に關する根本事實として左の二項を指摘してゐる。

一、起信論は誰人の作、又何人の譯かは暫く措き、兎に角隋以前に既に支那に存したこと。

二、その原本は果して西域より將來したか、將た支那に得たかを問はず、唐代實叉難陀が之を翻譯したこと。

氏は此二種の事項は何人も秋毫疑ふべからざる事實であるとし、而して更に實叉難陀の原本に就いて穿索を試み、玄奘梵譯の傳説が極めて疑はしいものであることを縷々詳述し、この傳説を否認すれば新舊二本は全く無關係のものとなり、而も難陀の新譯が爭ふべからざる事實とすれば、宛も綱渡りの綱の切れた如く、舊本の支那撰述説も自ら消滅しなければならぬと論じてゐる。然

し氏の論法は大體に於て甚だ杜撰である。先づ第一に氏が根本事實として指摘した二種の事項の中、第一項は何人も認める所であるが、第二項は疑を容るべき餘地があつて、氏の所謂何人も秋毫疑ふべからざる事實とすることができぬ。たとひ又第二項の新譯の事實が爭ふべからざるものであるとしても、その原本に關する十分の證明が立たなければ、それに由りて舊本の支那撰述說を否定することもできまい。抑も氏は起信論は馬鳴の作でもなく、眞諦の譯でもないと考へて居られるやうであるが、然らば誰人の作で、何人がそれを譯したものとするのであるか。予は先づこれに對する意見が聞きたい。氏は恐らく此問題は解けないからして、難陀新譯の事實より逆推して、それを印度撰述に追込まうとするのであらう。若し然りとすれば問題の本質には觸れずに、他の事柄から高飛車的にそれを解決せんとするのであつて、それが出來たら、それこそ綱渡りの藝當である。氏は「敎義や措辭の相似不相似は云はゞ枝葉の問題であり、根本問題が解決せられてこそ是等は何れも傍證となるべきものではあるが、根本事實が寧ろ之を否定せんとするに於ては、此等枝葉の類似は畢竟何等の證明の力を有しない」と聲言して、問題の本質たる本文研究を等閑に附するのであるが、予を以て見れば、それでは到底本問題の終極の解決をなすことは不可能である。兎も角今氏の指摘した事項について已下少しく論評して見やう。

松本博士は實叉難陀の起信論翻譯の事實は秋毫疑を容るべきものでないといひ、その論據として開元錄の記事を拈提してゐるが、彼の記事は果して秋毫疑を容るべきものでないか否か、一往吟味せねばならぬ。先づ氏の言ふ所を見ると左の如くである。

實叉難陀の起信論翻譯に就いては、開元錄(卷九)に大乘起信論二卷(第二出與眞諦出者同本)といひ、貞元錄(卷十三)にも同一の記述がある。開元錄の實叉難陀傳にはいふ、彼は天后證聖元年に華嚴經を譯し、

又至久視元年庚子於三陽宮內譯大乘入楞伽經。及於西京清禪寺東都授記寺譯文殊授記經等。前後總譯一十九部。(此內大乘起信論二卷がある)沙門波崙、玄軌等筆授、沙門復禮等綴文、沙門法寶、弘景等證義、太子中舍賈膺福監護。

而して彼は長安四年には上表して故國于闐に老母を覲省する爲め還つた。開元錄には華嚴、楞伽以外の經典に就いては其翻譯の年月を一一記してはないが、此等の經典の久視元年から長安四年に至る四五年の間に成れることは明かである。而して開元錄は開元庚午歳(卽ち十八年)に成れるのであるから、長安四年を去ること僅かに二十六七年であり、殆んど同時代の記錄といつても差支ない位である。而して難陀の譯場に於ける筆授者乃至證義者までも悉く之を擧ぐるを以て見

ても、彼が起信論飜譯の事實は秋毫疑を容るべき餘地を有しない。

氏は斯樣に開元錄の記事を唯一絕對の根據として難陀の起信論飜譯を認めてゐるが、然し彼の錄にかゝげてゐる實叉難陀の傳なるものは智昇の造つたものでも何でもなく、その全文は一句一字も違はず法藏の華嚴經傳記第一にのせてある。法藏は先天元年(七一二)の入寂で、開元錄の製作に先だつ十八年前であるから、彼の難陀傳は華嚴經傳記を寫したものであることは疑を容れぬ。蓋し華嚴經傳記には難陀の譯經部數を一十九部としてゐるけれど、その總卷數も擧げず、又經名も悉くは列ねて居らぬ。處が開元錄には具さに一十九部の經名を列ね、總じて一百七卷ありとし、內十四部一百二卷は見在、五部五卷は闕本としてゐる。今試みに其の經名を擧げて見ると、大方廣佛華嚴經八十卷、文殊師利授記經三卷、大方廣入如來智德不思議經一卷、大方廣如來不思議境界經一卷、大方廣普賢菩薩所說經一卷、大乘入楞伽經七卷、觀世音菩薩祕密藏神呪經一卷、妙臂印幢陀羅尼經一卷、百千印陀羅尼經一卷、救面燃餓鬼陀羅尼神呪經一卷、右繞佛塔功德經一卷、大乘四法經一卷、十善業道經一卷、大乘起信論二卷(已上十四部見在)、摩訶般若隨心經一卷、大方廣不生不滅經一卷、大方廣如來難思議境界經一卷、離垢淨光陀羅尼經一卷、菩薩出生四法經一卷(已上五部闕本)がそれである。この中、華嚴經、入楞伽經及び文殊授記經の三部は、彼の難陀傳

中に其の名を出し、又普賢菩薩所說經は華嚴傳記第一の支流の下にも之を記し、大方廣如來不思議境界經は亦同支流の下に大方廣佛境界經として揭げてゐるから、此五部は先づ難陀の譯として無難である。但し此の中、最後の大方廣如來不思議境界經は、開元錄に闕本としてゐる大方廣如來難思議境界經と卷數も同く、題號も唯だ一字の差に過ぎぬのであるから、果して別經であつたか否か疑なきを得ない。又大方廣入如來智德不思議經一卷（第四出與二度諸佛境界智光嚴經等一同本）は、彼の支流の下に大方廣入如來不思議境界經二卷とあるのを指すのであらうが、經名も卷數も異なつてゐるのは不審とせねばならぬ。又闕本中に菩薩出生四法經一卷といふのがあり、見在有本の中にも別に又大乘四法經一卷を列ね、その下に與二前日照三藏出者一名字雖レ同經體全異と註してゐる。なるほど現藏を調べて見ると、同じ大乘四法經の題號ではあるが、難陀譯の四法經と日照卽ち地婆訶羅譯の四法經とは全く內容が異なつてゐる。さり乍ら現藏中には別に地婆訶羅譯として菩薩修行四法經といふのが一卷ある。この經は前の地婆訶羅譯の大乘四法經と同本であるけれど、譯語は非常に異なつてゐる。卽ち大乘四法經では一時薄伽梵在室羅筏住誓多林給孤獨園與大苾芻衆云云とあるところを、修行四法經では一時佛在舍衞國祇樹給孤獨園與大比丘衆とあつて、その譯體が全然同一でない。元來斯樣な經を同一人が二度も譯することが既に不可解であ

り、又修行四法經の譯語が難陀の大乘四法經と同一であるのを見ると、かの修行四法經は地婆訶羅の譯ではなく、卽ち難陀の翻出したもので、しかもそれが開元錄に闕本としてゐる菩薩出生四法經のことであらうと想像される。兎に角、開元錄所載の難陀の譯經目中には少からざる錯簡のあることを認めなければならぬ。又高麗藏には開元錄所載の十九部一百七卷の外に、別に實叉難陀譯として甘露經陀羅尼呪、甘露陀羅尼呪の二首を出し、明藏には又地藏菩薩本願經二卷を收め、空海の御請來錄には華嚴經心陀羅尼一卷、圓珍の開元寺求得經記等目錄には佛頂尊勝陀羅尼一卷を列ねてゐる。此の中、地藏菩薩本願經は難陀の譯ではないやうであるけれど、他の三部の如きは彼の譯として固より妨げがない。されば開元錄の難陀譯經目中には他の譯經を混入し、又脫落もあつて、到底そのまゝ信用の出來ないものであることを知るべきであり、隨つて彼錄に起信論の名が揭げてあるにしても、それを直ちに疑ふべからざる事實とするのは甚だ危險の事といはなければならぬ。

予は難陀の起信論新譯說に關し、何か之を肯定すべき資料があるかと取調べて見たが、何物も見出し得ないのみならず、却てそれを否定すべき幾多の反證を得たのである。卽ち難陀の譯場に列した法藏及び法寶の著書について檢して見たが、一言も新譯の事に觸れて居らぬのみならず、

却てその中には頻りに舊譯の文を援引し、新論を擧げてゐない。就中、法藏は起信論に對して特に研鑽を重ね、義記幷に別記を作つてその文義を精解したのであるが、然るにその所釋の本文は舊釋の起信論であつて、新論ではない。但し義記等は撰述年代が不明であるから、强ひてそれを新論譯出已前（新論は新譯起信論序に大周聖曆三年歲次癸亥の譯とす。これは聖曆二年歲次己亥の誤）の作とするかも知れぬが、然し法藏には實叉難陀がその翌久視元年（七〇〇）に譯した大乘入楞伽經を略解せる入楞伽心玄義の著がある。その中にも唯だ舊譯起信論を援引して、新譯の文は擧げて居らぬ。その他、華嚴經傳記を始め、彼れの豊富なる著書中に一言も新論の事に觸れてゐるものがないのを見ると、法藏は全く新論の譯出を聞知しなかつたとせなければならぬ。又法寶も證義者として難陀の譯場に參じた一人であるが、然るに彼の著一乘佛性究竟論の中に屢〻舊譯起信論を引用し、一所も新論の文を擧げて居らぬ。これ等は彼の新論なるものが難陀の譯出などに係るものでないことを反證するものといふべきである。

又松本博士は玄奘が印度に於て起信論を梵譯したといふ續高僧傳の傳說を極力否認し、以て難陀が別種の梵本から新論を譯出したことを證明せんと努めてゐる。蓋し此の傳說は玄奘同代の道宣に依つて傳へられ、開元錄の作者智昇も之を信じ、又古來の學者も多く認めた所である。唯識

論同學鈔第二之四に眞如受熏の事を論じ、起信論に眞如受熏の義が說いてあるのは卽ち譯者の誤であるとし、その下に

但至實叉難陀譯者、遍學三藏(卽ち玄奘)遊西天之時、印度諸論師請承起信論本。故譯唐言以爲梵本。實叉難陀既三藏後人也、故得彼本再譯之歟。三藏未見正梵本間、只任家依(卽ち眞諦)所譯、改唐言成梵本許也。眞如受熏之文設雖不正、不見正本忽不可改文言。故三藏所誦强非相違歟。

といつてゐるが、これは難陀の齎した梵文を以て玄奘梵譯の本だとするのである。但し予も玄奘梵譯の傳說を信ずるものではない。されど斯かる說が當時唱へられたのには、何か別に仔細がなくてはならぬと思ふのである。その仔細といふのは、玄奘は貞觀十九年(六四五)を以て歸朝し、七十餘部一千三百數十卷といふ多數の經論を譯出し、旭日昇天の勢を以て新譯の業を大成したのであるが、その宗とする所は性相不融の唯識の敎旨であつて、起信の所謂眞妄互熏性相倶融の理義を認めなかつたのであるから、彼の濟濟たる門下は皆師の主張を承けて、盛んに起信卽ち地論一派の學說を攻擊したことが察せられる。惠均の四論玄義も此頃の作で、その中には前に屢述べた如く、起信を以て昔日地論師の僞造したものだといつてゐるのである。斯樣に敎界の大勢が起信一

派に頗る不利なので、彼等は苦肉の策を案じ、唯識主張の總帥たる玄奘を生捕にし、彼れも亦起信の共鳴者であるとして、此論梵譯の説を提唱したものに相違なく、ついで又進んで實叉難陀を擔ぎ出して新論譯出の事を新たに吹聽し、以て起信一派の陣營を强化せんと企てたものと推定されるのである。その事は新譯起信論序に

> 此本卽于闐國三藏法師實叉難陀齎梵文至此。又於西京慈恩塔內獲舊梵本。……然與舊本時有出沒。蓋譯者之意、又梵文非一也。夫理幽則信難、道尊則魔盛。況當劫濁尤更倍增。故使偏見之流執成唯識誹毀此論。眞妄互熏、既形於言遂彰時聽、方等甘露翻爲毒藥。故經云、唯佛與佛乃能究盡諸法實相。豈可輒以凡心貶量聖旨。……又云、雖處五道受別異身、而此佛性常恆不變。若言眞不熏妄妄不熏眞、眞妄兩殊、豈會中道。故梁攝論云、智慧極盲暗、謂眞俗別執。今則眞爲妄體、妄假眞成。性相俱融、一異雙遣。

といつてゐるのを一讀すれば、思ひ半に過ぎるものがあるであらう。卽ち偏見の流をして成唯識を執して此論を誹毀せしむといふのが、正しく當時の實情であつたのである。方等甘露翻つて毒藥となるといひ、眞妄兩殊豈に中道に會せんやといひ、智慧極めて盲暗なるものは眞俗別執すといつてゐるのは、皆唯識法相の徒に對する起信一派の反擊であることを知るべきである。又西京

慈恩塔內に於て舊梵本を獲たといふのは、長安の玄奘塔內に舊譯起信論の梵本があつたといふので、卽ち玄奘梵譯說を裏書したのであり、難陀梵文を齎して此に至るといひ、又梵文非〻一也といふのは、惠均等の支那撰述說に對して一矢を酬いたものであることも明かである。斯く想定することに於て、始めて玄奘の起信梵譯說はその正體が明かになり、難陀の新論譯出說も亦その由來が判然するのである。すべては起信一派の苦肉策であつて、玄奘梵譯說も、難陀新譯說も共に事實でなく、一種のデマ宣傳に過ぎないのである。

松本氏は難陀の新論譯出は秋毫疑ふべからざる事實で、その原本は最初より西域地方に存したものであるとし、且つ新舊兩本の異同出沒が多多あることを指摘し、兩本は別種の原本から譯したものに相違ないといひ、而して此の兩本の變異に對し、支那撰述論者は如何に解釋せんとするかと詰難してゐるが、印度撰述の建前からすれば梵本がなくてはならぬ。否な幾本でも有つてほしいわけであるが、しかし西藏藏經中に此論がないことも宜しく一考さるべきである。又新舊兩本を對照して見ると、なるほど出沒異同はあるが、然しその異同は餘まり重要ならぬ個所に限られてゐる。先づ用語について言つて見れば、舊本の因緣分を新本では作因とし、修行信心分を修信分とし、勸修利益分を利益分とし、顯示正義を顯示實義とし、分別發趣道相を分別修行正道相と

し、智淨相を淨智相とし、不思議業相を不思議用相とし、執取相を執著相とし、計名字相を執名等相とし、眞如熏習を眞如熏とし、無明熏習を無明熏とするの類で、重要ならぬものは多少異なつてゐる。されど眞如生滅、始覺本覺を始め、三細六麤等の如き主なる名目は二本殆んど皆同一であり、特に六波羅蜜の名稱の如き、二本共に解行發心の下では梵名を擧げ、修行信心分の下では施門戒門等の譯語を用ひてゐる。これ等は新本が唯だ舊本そのまゝを取入れたことを證するものとすべきである。又文義の出沒も少くない。松本氏の指定した二三の個所の如きは即ちそれであり、又顯示正義の末段の顯示從生滅門即入眞如門の一章の如き、及び報應二身論の一段の如きも亦その例として擧げることができる。されど此等は舊本の意味が充分盡きて居らぬので、新本の作者が補足したまでのものに過ぎぬ。新譯として打つて出る已上には、多少の出沒異同を設けるのが當然ではないか。それを梵本の不同に歸する如きは餘りにも正直である。要するに曇遷、慧遠、法藏等は既に早く馬鳴造眞諦譯の宣傳に乘つたのであり、道宣は更に玄奘梵譯の宣傳に乘つたのであり、智昇は更に又難陀新譯のデマに乘つたのであり、今の印度撰述論者は更に智昇の尻馬に乘つたのである。妄言多罪。

附記

昭和十七年九月東京の國際佛敎協會から發行した Studies on Buddhism in Japan 第四卷に、在本邦獨逸人ブルーノー・ペッツオールド Bruno Petzold 氏の「大乘起信論とその覺醒の敎義」Das 'Dai Jō Kishin Ron' und Seine Lehre von der Erleuchtung と題する長論文が掲載されてあるので、金山正好君にその對譯をたのみ、之を一讀した。主として起信論の作者問題に關し、明治時代已來の諸學者の論議の經過を詳敍したもので、又自己の所見も述べてゐるが、それに依ると、本問題に關し多少共も發言してゐる學者として、藤井玄珠、前田慧雲、舟橋水哉、境野哲、荻原雲來、松本文三郎、羽溪了諦、村上專精、常盤大定、島地大等、林屋友次郎、今津洪嶽、深浦正文、鈴木宗忠、鈴木貞太郎、并に予及び支那梁啓超の名を擧げ、一一その所見を紹介し、往復關係を明かにしてゐる。不充分と思はるゝ點もあり、又多少の誤解もあるやうであるけれど、兎に角本件に關する殆んどすべての論説を蒐集網羅したことに於て、その勞を多とせなければならぬ。と同時に亦之に依つて本問題が大正昭和年間にかけて日本佛敎學者を總動員した大論議であつたことを知ることが出來るのである。

ペッツオールド氏は上記諸學者の所見がすべて八種に分類されるとなし、左の如く記述してゐる。

一、起信論は印度に於て龍樹已後に生存した後馬鳴に依つて作られ、支那に於て眞諦によつて翻譯せられた。――最も初期の望月の學説であり、前田の學説と一致し、村上が明治三十四五年の講義で採用した立脚地である。

二、起信論は印度に於て立證し難き有る著者に依つて作られ、支那に於て眞諦によつて翻譯せられた。——常盤の最初の學說で、境野の學說と一致する。

三、起信論は印度に於て立證し難き有る著者に依つて作られ、支那に於て菩提留支 Bodhiruci によつて翻譯された——常盤の第二學說で、鈴木宗忠が讓受けたやうに見える。

四、起信論は印度に於て立證し難い有る著者に依つて作られ、同じく立證し難い支那の有る著述家によつて翻譯された。——松本の學說である。

五、起信論は支那に於て攝論宗の有る學者に依つて作られた。——望月の第二の學說であり、村上の第三の學說である。

六、起信論は支那に於て北方地論の有る學者に依つて作られた。——望月の第三の學說である。

七、起信論は支那に於て地論の北道派に屬するか、或は南道派に屬するか確言し難き有る未知の學者に依つて作られた。——村上の第四及び第五の決定である。

八、起信論は支那に於て未知の學者に依つて作られた。——望月の第四の學說である。

斯樣にペッツオールド氏は八種の學說があるやうにも言つてゐるが、しかし第三の菩提留支翻譯の說といふのは何を意味するのか明かでない。菩提留支は多分眞諦の錯誤であらうと思はれるが、若しさうすると第二と第三との別が立たぬことになる。又予の說にしても四說もあるわけでない。予は最初起信論の三身論及び梨耶眞妄和合論は、地論攝論の兩學說を折衷調和したものとなし、攝論師若しくは地論師の孰れかゞ此論を作つたもので

あらうと考へたのであるが、然るにその後地論學派の學說を硏究し、今は南道地論師製作說を固持してゐるのである。それは別項「南北兩道の地論學派の主張と起信論」の論文中に記述した通りである。起信論支那撰述の問題が起つてより二十餘年、論議は既に盡きたわけで、今日に至つて最早や此論を龍樹已前の所謂付法藏第十二祖たる馬鳴の作などといふものはないやうになつた。印度撰述と考へてゐる學者は尙ほ有るやうであるが、しかし如何なる時代に如何なる系統の論師が、如何なる地方に於て此論を製作したかに關しては何等見るべき意見を發表したものがない。果して印度撰述であるとすれば、的確とまではゆかぬにしても、或る程度の見當ぐらゐは立つて來なければならぬ。それが出來ぬとすれば、印度撰述說も遠からず全くその影を沒するであらう。

昭和十八年七月

第十二章　馬鳴龍樹等に假托せられたる諸論

第一節　天親造等と傳へられる遺敎經論

支那撰述の僞論が多く馬鳴龍樹又は天親に假托せられたものなることは第六章の下で述べた所である。卽ち馬鳴の大乘起信論を始め、大宗地玄文本論、馬鳴又は天親の遺敎經論、龍樹の釋摩訶衍論、金剛頂菩提心論、五明論、幷に天親又は龍樹に歸せられた十八空論の如きがそれである。この中には謬つて龍樹造等と傳へられたもののあるけれど、その多くは最初より假托の意思を以て撰述されたのである。

遺敎經論は現藏の本に天親菩薩造、眞諦三藏譯と署名してある。歷代三寶紀第九、開元釋敎錄第七には、之を眞諦譯經の中に列ねてゐるが、法經の衆經目錄第五及び大唐內典錄第十には之を疑惑部に編し、仁壽、靜泰の二錄には之を揭げて居らぬ。就中、法經錄に疑惑部編入の理由として「人云眞諦譯、勘眞諦錄無此論。故入疑」といつてゐるが、これは起信論疑惑部編入の理

由と全く同一であつて、即ち世には此論を眞諦譯と傳へてゐるけれど、眞諦の譯經錄を勘査して見ても此論がないから、疑惑部に編入するのだといふのである。之に依ると歷代三寶紀等に眞諦譯としたのは、單に從來の傳說に從つたもので、確たる論據のなかつたことがわかるのである。

本文に就いて少しく研究を加へて見ると、此論は遺敎經（一名佛垂般涅槃略說敎誡經）を註解したものであつて、卽ち逐次に經文を擧げ、その下に文旨の註釋が加へてあるのである。然るに遺敎經は元と鳩摩羅什の譯であるが、今此論に揭げてゐる本文と彼の羅什の本とを對照して見ると、終始全く同一であつて、實に一字の差もない。同本異譯の經論も少くないが、是の如く前後兩本の全く一致するものは絕無のやうである。これは恰も姚秦筏提摩多の譯したといふ釋摩訶衍論の中に、眞諦譯の起信論の本文がその儘載せてあるのと同一筆法であつて、僞論には往往斯かる失態が演ぜられるのである。歷代三寶紀第十一に依ると、齊蕭子良は遺敎子註經一卷を著はしたと云ひ、又齊山陰惠基も同名の註經を書いたことを傳へてゐる。されば遺敎經の註解は早い時代から行はれたもので、今の遺敎經論も恐らくその一種であつたのであらう。

蓋し此論は宋王古の大藏聖敎法寶標目第五、幷に麗本已下各本に皆天親菩薩造と題し、宋元照の遺敎經論住法記、幷に觀復の遺敎經論記等には馬鳴菩薩造としてゐる。古い時代には何と署名し

てあつたか詳かならぬが、或は馬鳴菩薩造となつてゐたのかも知れぬ。此論の體裁及びその章句等が起信論に酷だ善く似た所があるから、此論は即ち起信論と同一作者の手に成り、而して二論同じく馬鳴造、同じく眞諦譯として公表せられたものではないかとも疑はれる。起信論との類似點は、先づ其の歸敬偈が二者同じく五言から成り、且つ著想も亦一致することを第一に指摘せなければならぬ。即ち

起信論

歸命盡十方、最勝業徧知、
色無礙自在、救世大悲者。
及彼身體相、法性眞如海、
無量功德藏、如實修行等。
爲欲令衆生、除疑捨邪執、
起大乘正信、佛種不斷故。

遺教經論

頂禮三世尊、無上功德海、哀愍度衆生、
是故我歸命。清淨深法藏、增長修行者、
世及出世間、我等皆南無。我所建立論、
解釋佛經義、爲彼諸菩薩、令知方便道、
以知彼道故、佛法得久住、滅除凡聖過、
成就自他利。

この中、此論の無上功德海、淸淨深法藏は、起信論の法性眞如海、無量功德藏に近似し、又哀愍度衆生は救世大悲者に、增長修行者は如實修行等に、佛法得久住は佛種不斷故に各似同してゐる。

又此論の本文中に於て復示摩訶衍方便道とあるのは、彼の起信論の能起摩訶衍信根に當り、又分別總相、及び大總相成就功德とあるのは、起信論の因緣總相又は大總相法門體に當り、又顯示甚深功德、對治功德とあるのは、起信論の顯示正義、對治邪執に當り、又自性淸淨無我、平等法身、眞如觀、根本直心、及び勸修戒利益とあるのは、起信論の自性淸淨心、平等法身、眞如三昧、直心、及び勸修利益に當つてゐると見るべきである。されば此二論は縱ひ同一人の作でないとしても、其間に何等かの關係聯絡のあつたことは、事實として認めなければならぬ。要するに此論も亦馬鳴造、眞諦譯などと云ふ論書でなく、隋代已前或る好事者に依りて假托されたものであることは疑を容れぬ。蓋し遺敎經そのものは馬鳴の佛所行讚第五大般涅槃品の偈を散文に書き直したものではないかの疑ひがある。今それに對して馬鳴が註疏を造つたとするのは、宿緣に絡まる一種の滑稽談ともいはなければならぬのである。

第二節　馬鳴に假托せられたる大宗地玄文本論

大宗地玄文本論は起信論に同じく馬鳴菩薩造、眞諦三藏譯の署名を有する論書である。此論は

高麗藏及び明藏中に入藏されてゐるが、宋元二藏には之を闕き、又釋摩訶衍論と同樣に諸目錄にその名を掲げて居らぬ。麗本は二十卷、明本は八卷になつてゐるが、麗本の方が古い形であらう。すべて四十品を立て、皆何何大決擇分といふ名稱を附し、又事每に八門十門等の諸門分別をなし、盛に奇怪極まる異經を引用してゐる。その體裁といひ、又書き振りといひ、一見して彼の釋摩訶衍論と同型であることが感ぜられる。既に諸目錄中にその名が記載されてないのであり、且つその譯語も異なつてゐるから、無論眞諦の傳譯ではない。まして馬鳴などの作でないことは、改めて辯ずるまでもないのである。

然るに此論第二十には、馬鳴は自ら此論を作つたものであるとし、且つ彼れの本地を示すべく次の樣な偈を掲げてゐる。

我於往昔無量劫、隨世尊修菩薩行。一時世尊王家奴、國名金水其王名
寶金輪藏。此大王、有三十億奴婢類、有六十億大白馬。彼時六十億白馬、
今時六十億馬鳴。最第一馬雜色見、今時中我身而已。我若成覺道圓滿、
宣說百億修多羅、普利益廣略衆生。我則作如是誓願、造作一百釋明論。
我亦漸漸修因行、證入第八不動地。

これは馬鳴が過去に於て白馬であつたことを說き、後菩薩行を修して百部の釋明論を造り、現に今第八不動地に住する菩薩であるといふのである。釋摩訶衍論の中にも亦これと同一の記事がある。卽ち彼論第一に過去輪陀王の世に白馬あり等と云ひ、又馬鳴菩薩の作る所の諸論は總じて一百部ありと云ひ、又馬鳴菩薩は若し其本を尅すれば大光明佛、若し其因を論ずれば第八地內の住位の菩薩なりと云つてゐるのがそれである。のみならず亦彼論第五には、馬鳴尊者大宗地玄文本論中作₂如₁是說₁と云つて、二個處も此論を引用してゐる。これはこの兩論が互に表裏となつて馬鳴の功德を稱讚し、且つ又今の玄文本論が馬鳴の作であることを裏書すべく企てたものと見るべきである。

又此論第二には菩薩五十一位の名稱を列ねてゐるが、その梵名(?)なるものは、疑ひもなく菩薩瓔珞本業經卷上賢聖名字品から取つたのである。今試みにその梵名を擧げて見ると(括弧內の對譯は瓔珞經所出)

云何名爲₂十愛樂心₁。一者必叉多、二者阿摩呵尸、三者諦度毗梨耶、四者和羅只度、五者奢摩陀提尸、六者摩訶阿毗跋致多、七者阿羅婆訶尼、八者婆嚩多阿梨羅訶諦、九者尸羅倶尸阿尸羅、十者摩訶毗呵阿僧那。是名爲₂十。

云何名爲二十識知心一。一者留伽度（發心住）、二者留諦迦度（治地住）、三者留羅迦（修行住）、四者留摩訶（生貴住）、五者安婆娑（方便具足住）、六者毗跋致（正心住）、七者阿毗跋致（不退住）、八者必叉伽（童眞住）、九者必阿羅（法王子住）、十者留止迦（灌頂住）。是名爲レ十。

云何名爲二十修道心一。一者度伽呵（歡喜行）、二者度安爾（饒益行）、三者度只羅（無瞋恨行）、四者度和差（無癡亂行）、五者度利他（離癡亂行）、六者度生婆諦（善現行）、七者度沙必（無著行）、八者度阿訶（尊重行）、九者度佛阿（善法行）、十者度叉一婆（眞實行）。是名爲レ十。

云何名爲二十不退心一。一者羅諦流沙（救護一切衆生廻向）、二者羅曇沙（不壞廻向）、三者必自伽（等一切佛廻向）、四者法必他（至一切處廻向）、五者佛度陀（無盡功德藏廻向）、六者羅叉必（隨順平等善根廻向）、七者師羅叉伽（隨順等觀一切衆生廻向）、八者婆訶諦（如相廻向）、九者婆羅提弗陀（無縛解脫廻向）、十者達摩邊伽（法界無量廻向）。是名爲レ十。

云何爲二十眞金剛心一。一者鳩摩羅伽（逆流、歡喜地）、二者須何伽一婆（道流、離垢地）、三者須那迦（流照、明地）、四者須陀洹（觀明、炎地）、五者斯陀含（度障、難勝地）、六者阿那含（薄流、現前地）、七者阿羅漢（過三有、遠行地）、八者阿尼羅漢（變化生、不動地）、九者阿那訶訶（慧光、妙善地）、十者阿訶羅弗（明行足、法雲地）

是名爲レ十。

此五十中、更復加婆伽婆佛陀。應審觀察。是名五十一種名字。

この中、十識知心已下の四十一位の名稱は全く瓔珞經と同一であり、又初の十愛樂心も恐らく彼經の所謂住前の十心を指したものと見られる。住前の十心とは、信心、念心、精進心、慧心、定心、不退心、廻向心、護心、戒心、願心をいふのであるが、然し彼經には斯樣に譯語を擧げてゐるのに、今此論に於て改めて之を梵名としたのは、彼の五十一位の階位說が元と梵經に基くことをあらはさんとするの意に出でたのであらう。就中、諦度毗梨耶といふのは、毗梨耶 vīrya は精進であるから、これは多分彼の精進心に當り、奢摩陀提尸といふのは、奢摩他 śamatha は止、又は定と譯する語であるから、これは多分彼の定心に當り、摩訶阿毗跋致多といふのは、阿毗跋致 avivartya は卽ち不退であるから、これは多分彼の不退心に當り、尸羅倶尸阿尸羅といふのは、尸羅 śīla は戒であるから、卽ち彼の戒心に當てる考であらう。同時に亦其の他の梵名もこの筆法に依りて彼の譯名を梵譯すべく企てたものと見られる。されば此論の五十一位はすべて瓔珞經の說に依つたと認められるのであるが、然るに彼の瓔珞經は上に論じた如く疑僞に亙る經である。それを今わざ〳〵引用したのみでなく、亦彼の譯名までも梵譯せんと企てた如き、寧ろ滑稽の甚しきものと謂はなければならぬ。

又此論には如來藏佛の名稱を擧げ、深里出興地藏大龍王なるものを說き、又隨體佛、變體佛、法體佛、莫測佛、應轉佛等の名稱を列ねてゐる。これは下の釋摩訶衍論の中にも述べた如く、恐らく三階敎の敎旨に依つたのであらう。又此論には次の樣な異字を遣つてゐる。

瓓　回　覶

これは釋摩訶衍論の項で述べる如く、恐らく則天文字の變形であらう。その他、此論の各品に皆何何大決擇分と題してゐるのは、玄奘譯の瑜伽論から來た考であり、主件具足、十門建立等を說いてゐるのは華嚴の影響を受けたのである。

要するに此論は支那唐代の撰述であつて、決して馬鳴の造、眞諦の譯などに擬すべきでない。釋摩訶衍論とすべての體裁が酷似するのみならず、彼論中に亦此論を引用してゐるのを見ると、此二論は多分同一人の手に成つたものであらう。若し然らずとするも、その一味の徒の妄作に係つたものであることは疑を容れぬ。又此論に大宗地玄文本論の標題を附けたのは、おそらく舊譯起信論序の末尾に玄文二十卷とあるのに依つたのであらう。起信論が抑も怪むべき論書であり、之を註釋した釋摩訶衍論が明白なる僞論であり、舊譯起信論序が假托の作であり、今亦この玄文本論が僞妄の書であるとすれば、起信論系の論書は虛構を以て終始一貫されたものといはなけれ

ばならぬ。源清からざれば流れ澄まずといふ諺があるが、蓋し此等の事を指すのであらう。

第三節　龍樹に假托せられたる釋摩訶衍論

——起信論の註釋書として

釋摩訶衍論は起信論を註釋した論書で、その題下に龍樹菩薩造、姚秦三藏筏提摩多奉詔譯と署名してある。卷頭に又天回鳳威姚興皇帝製と題する一篇の序文があつて、此論傳譯の事を記述してゐる。その一節に

朕聞、其梵本先在二于中天竺一。遣レ騠奉迎、近至二東界一。以二弘始三年歳次星紀九月上日一、於二大莊嚴寺親受筆削、敬譯二斯論一。直翻譯人筏提摩多三藏、傳二俗語一人劉連陀等、執筆人謝賢金等。首尾二年方繕寫畢レ功。

これは此論を以て中印度より將來し、姚秦弘始三年(四〇一)九月長安の大莊嚴寺に於て、筏提摩多三藏が劉連陀、謝賢金等と共に首尾二年を費して翻譯したとするのである。然るに筏提摩多なる三藏は姚秦はおろか、その前後にも支那に來たといふ文獻は全くない。又現存の諸目錄中、一本

として此論傳譯のことを記載したものもないのであるから、此序の記事は全然信憑するに足らぬのである。

按ずるに支那に於てこの論を引用したのは、唐圭峯宗密が最初のもののやうである。即ち彼の著の圓覺經略疏鈔第十に、準₂龍樹菩薩摩訶衍論中說₁、馬鳴菩薩約₂一百本了義大乘經₁造₂此起信論₁。卽知₂此論通₃釋一百本經中義₁也と云つてゐるが、これは疑ひもなく此論第一に、摩訶衍論別所依經總有₂一百₁といふのに依つたものと見られるからである。又唐法敏作の釋摩訶衍論疏三卷といふのが現に傳つてゐる。法敏の年代事蹟は詳かならぬけれど、其の疏は承和六年（八三九）常曉により て本邦に將來せられてゐるから、唐開成已前に既にそれが作られたものであることは明かである。又唐聖法は釋摩訶衍論記一卷、遼法悟は贊玄疏五卷、遼志福は通玄鈔四卷、守臻は通贊疏十卷、宋普觀は記六卷を撰して各此論を釋し、のみならず宋延壽の宗鏡錄第四十五、知禮の四明敎行錄第二、子璿の起信論疏筆削記、法雲の翻譯名義集、師會の五敎章復古記、元照の遺敎經論住法記、義天の諸宗敎藏總錄第三等にも亦皆此論を引用してゐるから、晩唐已後には盛に支那に行はれたものであることが知られる。又賴瑜の釋論開解抄第一には、淨影、嘉祥等の師も亦夙に此論を引用したとし、次のやうなことを書いてゐる。

又淨影起信疏上云、言馬鳴菩薩造者是爲顯其論主名也、釋幡者如龍樹論釋也。是非指今論造人釋乎。又嘉祥法花義疏第一云、而瓔珞經云六住退者、龍樹釋此語云、欲怖地前菩薩令速入初地故云退耳。其實不退。既披龍樹中觀十二門智論十住論等無此釋。故本宗以爲難義。又起信論雖有此文非龍樹論。故知、義疏指釋論。不可異求矣。

この中、淨影の起信論疏に釋幡者如龍樹論釋とあるのはその意味が明かでない。或は賴瑜の言の如く、龍樹論といふのは釋摩訶衍論を指したのかも知れぬ。さりながらこの疏は後人の作で、決して慧遠の眞撰ではない。亦後世の竄入がないとも限らぬのであるから、縦ひその中に引用されてゐても、之によりて此論が早い時代に存在したことを立證するには足らぬ。又嘉祥の法華義疏に龍樹釋云云とあるのは、金剛仙論第一に

寶髻論中、有人問龍樹菩薩云、地持經中道、性地菩薩退墮阿鼻地獄。此義云何。龍樹菩薩答言、地持經雖云性地菩薩墮於地獄、我不敢作如是說。何以故、不增不減經中明、性地菩薩畢竟不墮地獄。……若爾者二經相違云何會通。解云、地持經中道言入者、僅怖地前菩薩令其生懼速證初地。非謂實入阿鼻地獄。

といふのを指したのであつて、今の釋摩訶衍論に依つたのではない。何故とならば若しも此釋論に

依つたとすれば、未だ初住の正位に入らざる者を恐怖せしむと書かねばならぬが、それを今の文には地前の菩薩を怖れしめ、速に初地に入らしめんと欲するが故なりといつてゐる。これは正しく金剛仙論の說に一致するのであるから、嘉祥の所謂龍樹釋は卽ち彼論に依つたものと斷定し得るからである。さすれば釋摩訶衍論は隋代などには曾て引用されたことなく、中唐已後に至つて始めて其名が顯れて來たものとせなければならぬ。

始めて此論を本邦に傳へたのは大安寺戒明であつて、その事は實に寶龜年中(七七〇―七八〇)に在るのである。當時淡海の眞人三船(童年に出家し天平年中、道璿律師に伏膺し、勝寶年中勅ありて還俗せしめ姓を眞人と賜ふ。日本高僧傳要文抄第三所出)といふ人があつて、一書を大安寺戒明に送つて此論の四失を數へ、之を僞論と斷定した。その書は唯識論同學鈔第二之四に出てゐる。

古人淡海居士送二于戒明闍梨一消息

一昨日使至垂二示從レ唐將來釋摩訶衍論一。聞レ名之初喜レ披二龍樹妙釋一、開レ卷之後恨レ穢二馬鳴眞宗一。今檢二此論一實非二龍樹之旨一。是愚人假二菩薩之名一而所レ作耳。但其本論者實馬鳴菩薩之起信論也。梁承聖三年(甲戌癸酉)眞諦三藏之所レ譯也。今此僞釋序云、天回鳳威姚興皇帝製、弘始三年歲次星紀(庚子)於二大莊嚴寺一、筏提摩多三藏譯也。晉書云、後秦姚興、生稱二大秦皇帝一、死稱二文恆皇帝一。始終無二

天回鳳威之號。又姚者姓也、興者名也。取皇帝姓名爲號、未有之也。又自弘始三年至承聖三年相去一百五十五年。取後譯之本論合前譯之釋論、同爲一人譯。是大虛妄也。又檢本論文雅義圓、今此僞釋文鄙義昏。同卷異筆、必非同譯。理卽明矣。今大德當代智者、何勞遠路持此僞文來。昔膳大丘從唐持來金剛藏菩薩註金剛般若經者、同此論並僞妄作也。願早藏匿、不可流傳取笑於萬代。眞人三船白。寶龜十年閏五月二十四日狀。戒明阿闍梨座下。

堂堂たる論旨、鋭利なる批判、良に此論の假面を剝奪して餘あるものと謂ふべきである。蓋し寶龜十年（七七九）は唐代宗大曆十四年であつて、彼の宗密誕生の前年に當つてゐる。されば此論は支那に於て宗密等によりて輕々に眞論として引用せられた已前、既に早く本邦に於て攷證を加へて僞論と斷定されたのであつて、この事實は當時日本に於ける敎學の頗る進歩してゐたことを證するのである。この中、四失といふのは、一に論序の作者と稱する姚興には元と天回鳳威などの號がない。二に姚と興との姓名を取つて皇帝の號となすやうなことは未だその例がない。三に此論に擧げてゐる所の起信の論文は、梁承聖三年眞諦の譯した本文そのまゝである。姚秦弘始三年に譯した釋論の中に、それより一百五十五年も後の眞諦の譯論を載し、それを筏提摩多の譯とするのは大虛妄である。四に起信の本論は文雅にして義圓であるのに、この釋論は文は鄙にして義

も曖昧であるから、斷じて同一人の譯ではない。それゆゑ此論は愚人が菩薩の名を假つて妄作したものに相違ないといふので、實に急所を衝いた痛快な議論である。

然るに當時筑波德一が尙ほ此論を龍樹の眞論となし、其の著中邊義鏡の中に論の文旨を引いて天台所立の敎義を破した所からして、これに對し最澄は其の著守護國界章卷上之中に、更に五失を數へて再びその僞論たることを明かにした。卽ち

彈曰、汝引釋摩訶衍論不足爲誠證。何者翻譯不分明故。隋唐諸目錄不載見錄故。其眞言字不相似梵字故。其義理相違本論故。姚興在秦眞諦在梁、秦代筏提譯已同梁家論。若正義論者、從秦以降至唐開元目錄不載、疏師不引、是以不足歸信。此論者大安寺戒明法師、去天應年中自唐將來。尾張大僧都爲傳檢勘日已勘成僞論。汝何以疑論輒遮華嚴住。

この中、翻譯の事實の分明ならざるを一失とし、隋唐の諸目錄に載せず、又諸師が引用せざるを二失とし、擧ぐる所の眞言文字が梵字に似ざるを三失とし、所說の義理が本論に相違するを四失とし、秦代翻譯の釋論中に梁代譯出の起信の全文が擧げてあるのを五失とするのである。(賢寶の寶冊鈔第八には疏師引かざるを六失、大僧都僞論となせるを七失となし、總じて七失として數へてゐる)但し此の文中に此論を天應年中の將來としてゐるけれど、前記三船居士の消息に明か

に寶龜十年の日附があるのみならず、日本高僧傳要文抄第三に抄出せる延暦僧錄にも、亦戒明が歸朝して寶龜十年既に大安寺に住してゐたことを傳へてゐるから、天應年中將來の說は不可とせなければならぬ。又此の中、尾張大僧都已に檢勘して僞論となすと云つてゐるのは、多分賢憬を指して尾張大僧都と稱したのであらう。僧綱補任第一に依ると、賢憬は延暦三年九月九日大僧都に任ずとあり。元亨釋書第十二、本朝高僧傳第六十六等には、彼れは尾張の人にして、南都に學び大藏を書寫し、又平安遷都の鴻基を計畫したと云つてゐるから、多分時人が崇敬して尾張大僧都と呼んだのであらう。安然の悉曇藏第一には南京釋衆所ㇾ出七失といひ、又眞言敎時問答第一にも舊人の四失七失を會すと云つてゐるが、南京の釋衆とは南都に屬する學者を指すのであるから、これは賢憬が此論に對して七種の失を加へたことを傳ふるものと見られる。但し其の所謂七失といふのは、如何なるものであつたか今之を詳にすることが出來ぬ。斯様に南北兩京の學者は概ね皆此論を以て僞論と斷じたのにかゝはらず、空海は之に反して之を龍樹の眞造となし、その著辨顯密二敎論、祕藏寶鑰等に盛に之を引用したのみでなく、亦自ら眞言宗所學經律論目錄を製して經律論合四百二十四卷を列ね、その中に菩提心論一卷と共に此論十卷を編入して、弘仁十四年十月十日之を上進し、奏して天下に流行せしめんことを請うた。仍て同年官符を下され、五十

僧をして東寺に住し、以て其の經律論を學ばしめるやうになつた。類聚三代格第二に當時の官符が載せてある。

太政官符

眞言宗僧五十人

右被右大臣宣偁。奉勅。件宗僧等自今以後令住東寺。其宗學者一依大毘盧遮那、金剛頂等二百餘卷經、蘇悉地、蘇婆呼、根本部等一百七十三卷律、金剛頂菩提心、釋摩訶衍等十一卷論等。（經論目錄在別）若僧有闕者、以受學一尊法有次第功業僧補之。若無僧者、令傳法阿闍梨臨時度補之。道是密敎莫令他宗僧雜住。弘仁十四年十月十日（十月恐十一月歟）

是の如く官符を以て此論を眞言宗三藏中に編入し、その宗の僧をして學ばしめた已來、彼の東密に於ては之を龍樹の眞論となし、珍重相傳へて以て今日に及んでゐるのであるが、然し空海が如何なる事由によりて此論を眞論と定めたかは審かでない。其の後、承和六年小栗栖常曉は新に法敏の疏三卷を齎して歸朝した。常曉請來目錄に

釋摩訶衍論疏一部三卷　　法敏法師造

已上一部依眞言宗傳法阿闍梨等申 求來。

右釋摩訶衍論者、橫釋二顯教一竪括二祕藏一。大論雖二先來一左右未レ定。今以二此疏一證二彼大乘一。と記してゐる。この記事で當時眞僞の論が八釜しかつた爲に、眞言の阿闍梨等は常曉渡唐の時、釋論關係の章疏を將來せんことを賴んだことがわかり、同時に亦常曉が法敏の疏を持つて來たので、支那でも之を眞論とするから注疏までも出來てゐるのであるとし、以て此論の價値を認定せんとした事情がわかるのである。尋いで又福貴の道詮（大和福基寺の開山にして三論を宗とし、兼ねて眞言を學す。貞觀八年十月二日寂す）は箴誨迷方記を著はし、その中に具さに三船の四失、賢憬の七失を會通したといふことであるが、此の書は今傳はらぬので、それが果して如何なる會通であつたか知ることが出來ぬ。然し次に掲ぐる眞言教時問答に、論の題下に龍樹菩薩造と云ふが故に引いて證據となすといつてゐるのに依ると、其の論旨も價値あるものでなかつたことが察せられる。

台密家に於ては最澄の說を承け、概ね皆此論を僞論として用ひぬのであるが、但だ圓珍の四土通達義、安然の眞言教時問答には屢之を引用してゐる。特に教時問答第一には、此論の眞僞に關して次のやうに論じてゐる。

問、摩訶衍論者、昔戒明和上將來之時有二諸道俗一、論二定僞論一。又南大寺新羅國僧珍聰傳云、是

論新羅國大空山沙門月忠撰也。而何引爲龍樹論證耶。答、昔有居士、論付四失。後有僧衆、更加五失。次有眞言僧都、上奏入眞言宗三藏之中流行天下。其官符文載貞觀格。後有福基和上、箴誨迷方記中、具會舊人四失七失、論定眞論。論題下云龍樹菩薩造故引爲證據。可謂顯晦隨時行藏在運也。

之に依ると安然は此論を信用したやうにも見えるが、然し其著の悉曇藏第一には、明かに最澄、圓仁兩大師の判によりて僞論と定めると云つてゐる。されば彼れも初から此論を信ずるの意がなかつたと見なければならぬ。悉曇藏の文は左の如し。

釋摩訶衍論說、佛法行人修止觀法入佛位時、服此字、及說、邪魔化作佛形惱行人時、說作佛形六根。眞言其字非梵非漢、佉婁未傳　豈肯此哉云云。評曰、有四種字。一僞作字、二妄計字、三臆推字、四眞實字。一僞作字、叡山本師守護國界章云、釋摩訶衍論翻譯不分明故、隋唐諸目錄不載見錄故、其眞言字不相似梵字故、其義理相違本論故。姚興在秦、眞諦在梁。秦代筏提譯已同梁家論。若正義者、從秦以降至大唐開元目錄不載、疏師不引。是以不足歸信。此論若大安寺誠明法師、去天應年中自唐將來。尾張大僧都爲傳檢勘日已勘成僞論文次依空海僧都上表、大日、金剛頂等修多羅藏、蘇悉地、蘇摩呼等毘奈耶藏、釋摩訶衍、菩提心

論阿毘達摩藏、可以流通官符施行。　次我和上據大安寺新羅國僧珍聰口說、是新羅國中朝山僧月忠僞作。於延暦寺目錄注云月忠。其後道詮法師箴誨中、廣破誠明將送御船居士之日、居士所出四失、于後南京釋衆所出七失、決爲眞論。今據叡山兩大師判以爲僞論。其中眞言文字亦爲月忠僞字。

この文中、我和上といふのは卽ち慈覺大師圓仁を指すのである。されば之に依りて圓仁は大安寺珍聰の口說によりて、此論を新維僧月忠の僞作としたことを知るべきである。但し月忠の事蹟及び年代は明かならぬけれど、此論が開元、貞元の諸錄にも載せられず、又宋元二藏にも收められず、始めて高麗藏に於て入藏された事を考へて見ると、珍聰の口說なるものは或は眞を語るものかも知れぬと思はれる。永超の東域傳燈錄卷下にも此論の名を列ね、其の下に註して新羅大空山中沙門月忠撰云云。龍樹造者僞也といひ、又證眞の法華玄義私記第五末には、

問、若但立七八九識、何故釋摩訶衍論中立十識也。八識如常。九謂一切一心識、十謂一心一心識。答、山家斷彼以爲僞論。不可信用。然高野及五大院等竝用彼論、未詳其意。山王院四士通達義云、圓宗等第九淨識。一切一心識雙照二諦、一切種智、一心一心識直緣中道一切智。是名心王。云云。私云、會俗歸眞名一切一心、眞性本一名一心一心識、亦有其義。但彼論

文應レ非ニ眞論一。諸目錄中、入藏疑僞竝不レ載レ之。既是舊譯、何故不レ入。又是眞者諸師何故不レ引レ之耶。又彼論所レ載眞言文字非レ梵非レ漢。或云、彼論是新羅國大空山月忠撰。云云。

と記し、阿娑縛抄第二、唯識論同學鈔第二之四等にも亦悉く此の傳説を載し、近代に至りては鳳潭、湛慧、普寂、慧澄、潮音等の師も皆亦僞造説に加盟してゐる。之に對し東密の諸家は、古來此論を信じて盛に註疏を造り、特に賢寶の寶冊鈔、賴瑜の釋論開解抄の如き、又顯慧の幻虎錄辨僞、因靜の起信論義成の如きは、前來の諸難を會通して頗る辯護に努めてゐるが、然し其の論旨は殆んど見るに足るべきものがないのである。

今按ずるに此論は疑ひもなく僞論であつて、固より龍樹の作などでなく、又梵本から翻譯したものでもない。そのことは三船の四失、最澄の五失等が既に明かに證してゐる。のみならず起信の本論が抑も支那撰述の疑があるのである。ましてその註疏たる釋論が中印の將來などであるべき筈がない。若しも又舊説の通り起信の本論を馬鳴の造としても、龍樹が之に就いて釋論を書くやうなことは到底あり得べきことでない。そは少しく佛敎史を研究するものゝ直に首肯し得る所である。且又論の内容を檢して見ても、文辭拙劣、義旨膚淺で、誤謬もまた少くない。中庸の學者でも恐らく斯樣な愚論は造らぬ、況や大論師龍樹に於てをやである。試みに此論を繙くならば、

其の中に多數の異經異論が引用してあるのに氣附かぬものはなからう。先づ其の第一卷には、起信論別所依の經として光明大覺經已下、凡そ一百部の經名が列ねてゐるが、その中、金剛三昧經、諸法無行經、大乘同性經、維摩詰經、楞伽經、華嚴經、本業經、修行道地經等は經錄にも之を擧げ、又現藏の中にも收められてあるけれど、他の九十餘部は諸錄にも錄せず、現藏にもない經名である。作者は之を未渡の經とする考であらうが、然し其の經名を一見すれば、そは唯だ愚人を眩惑せんがために作者が手製したものに外ならぬことを知ることが出來やう。又同第一卷に馬鳴所造の論に總じて一百部ありとし、その中、九十部は九種花文論の攝、餘の十部は攝義論の攝なりといひ、而してその攝義論として一心遍滿論、乃至大乘起信論の十部の名を列ねてゐる。これは蓋し大宗地玄文本論第二十に、馬鳴は百部の論を造作して衆生を利益したといつてゐるのを承けたのであらう。然るに此の玄文本論は上に述べた如く僞論であり、且つ馬鳴に百部の論があつたといふやうなことは、他に全く文獻のないことであるから、此等は皆大虛妄の說といはなければならぬ。

又此論第一には馬鳴六時出現の說を出し、馬鳴はすべて六人あつて、それが各皆如來の懸記に應じて出世したものだとしてゐる。六時出現といふのは、一には大乘本法契經に、無上大覺尊が

入涅槃の緣を說かるゝ時、馬鳴菩薩が偈を唱へて徐に自ら命終したといふのがそれである。二に變化功德契經に世尊が馬鳴菩薩に對して、我れ滅度の後三百餘歲、汝當に我が加力を承け、種種の方便を以て衆生を利益すべしと說かれたといふのがそれである。三に摩訶摩耶契經に、如來の滅後六百歲已りて馬鳴比丘あり、善く法要を說いて外道を降伏すべしとあるのがそれである。四に常德三昧契經に、佛滅度の後八百歲中に馬鳴あり、諸の外道を破して佛法を建立すべしといふのがそれである。五に摩尼淸淨契經に、佛泥洹の後一百餘歲に馬鳴大士あり、正法を守護し佛幢を安立すべしと說かれたといふのがそれである。六に勝頂王契經に、如來成道第十七日に迦羅諸鳩尸摩と名ける外道があり、其の身を變じて大龍王となり、如來と問答したことを記し、而してその時の外道は卽ち馬鳴であると說いてあるといふのがそれである。蓋し此の所引の六經の中に於て、摩訶摩耶經だけは現藏中に收めてあつて、その下卷には今のやうな文が載せてあるけれど、その他の五經は例の作者虛構の假文であるから、諸經錄には素より揭げてをらぬ。そこで今試みに馬鳴六時出現の說に就いて少しく其の由來を研究して見ると、これは當時行はれてゐた諸書の中に、馬鳴出現の年代に關して種種の異說があるのを和會すべく企てたものであらうと思はれる。就中、第三の六百年出世說が摩訶摩耶經に依つたことは改めて言ふまでもない。第二の三百餘歲說

は、歴代三寶紀第一に薩婆多記を引いて、馬鳴菩薩佛滅後三百餘年生東天竺婆羅門種と云ひ、法苑珠林第五十三に馬鳴菩薩傳（現行の傳には無し）を引いて、佛去世後三百餘年出自東天竺桑岐多國。婆羅門種也と云ひ、又嘉祥の中論疏第一末、及び百論疏卷上之上に引いてある僧叡の成實論序に、羅什の語を出して馬鳴三百五十年出といひ、慧影の大智度論疏第一（幻虎錄第二所引）に亦羅什の言を擧げて、如來般泥洹後三百七十年、有馬鳴菩薩出興於世、敷演無上大乘之化と云つてゐるから、多分それ等に依つたものと見られる。第五の一百餘歲說は、成唯識論述記第二本に、佛去世後一百餘年中、北天竺怛叉翅羅國有鳩摩邏多、此云童首。造九百論。時五天竺有五大論師、喩如日出明導世間と云ひ、同演祕第二本に之を釋して、疏五天有五論師者、按西域傳、東天馬鳴、南天提婆、西天室利羅多、北天鳩摩羅多、中天龍樹。具如彼辯と云ふのに基き、馬鳴は五大論師の一であるから、鳩摩邏多と同じく佛滅一百餘年に出世したものとしたのであらう。第四の八百歲中說は、三論玄義に引いてある僧叡の成實論序に、成實論者佛滅度後八百九十年、罽賓小乘學者之匠鳩摩羅陀上足弟子訶梨跋摩之所造也と云ひ、又佛滅度後九百年內有訶梨跋摩。其人本是薩婆多部鳩摩羅陀弟子とある所から、之を前の五大論師同時出現の說に照合して、訶梨跋摩の師なる鳩摩羅陀と經部の鳩摩邏多とを同一とし、而して馬鳴の出世を彼の鳩摩羅陀に同じ

く佛滅八百歳中と推定したものと見られる。第六の佛成道第十七日出現の説は、馬鳴菩薩大神力無比驗法念誦儀軌に、發日釋迦如來菩提樹下坐二大乘集會中一時、馬鳴菩薩前白二佛言一云云とある所から、恐らくその記事に依りて考へ附けたのであらう。蓋し此の儀軌は唐金剛智の譯と傳へるのであるが、金剛智は貞元釋教錄第十四に依ると、唐開元八年（七二〇）支那洛陽に來り、二十九年八月を以て寂した人であるから、今の第六説が果して彼の儀軌に依つたものとすれば、即ち此の釋摩訶衍論は唐開元八年已後の作でなくてはならぬ。而して寶龜十年即ち唐大曆十四年（七七九）には既に本邦に渡つてゐるのであるから、此論は開元八年より大曆十四年に至る五十餘年間に僞作せられたものとなるわけである。兎に角斯樣に六時出現説の由來を尋ねて見ると、それは唯だ諸書に出てゐる馬鳴出世年代の異説を列擧したに過ぎぬことがわかる。而して之を皆經中の懸記としたのは、いふまでもなく摩訶摩耶經から暗示を得たのである。異説を和會するといふにも程があつて、六人の馬鳴が宜に隨つて出現するなどといふのは、寧ろ滑稽の甚しきものといはなければならぬ。

又此論中には處々に原語を擧げてゐるが、これ等は殆んど皆作者の妄製したもので、中には實に噴飯に堪へないものもある。今眞如生滅十種の通名幷に別名の梵漢對譯を掲げて見やう。

眞如生滅十種通名

毗摩訶健那——廣大神王
摩尸陀那羅——出生龍王
必薩伊尼羅——方等
必達摩邊那——一法界
婆伽叉羅婆——中實

眞如十種別名

婆伽婆俱舍——如來藏
必菩提波梨——一道淸淨
阿陀阿只尼——無斷無轉
度羅諾補帝——出世間
摩訶標陀羅——大總相

生滅十種別名

阿梨耶鍵摩——藏識

摩訶鳩尸帝——大虛空王
摩迦羅俱舍——如意珠藏
婆伽婆俱舍——如來藏
摩訶衍——大乘
必阿素摩利——一心

健遮阿哆那——不二平等
健訶健婆那——不起不動
阿伽阿始那——無去無來
漢呼健那地——寂滅寂靜
婆阿叉尼羅——眞如

婆伽婆俱舍——如來藏

阿伊婆那羅——起動　健訶健只尼——有斷有縛
健伽健始那——有去有來　又刃伇那羅——多相分異
羅諾補帝戸——世間　闍縛多涅槃——流轉還滅
阿只伽那尸——相待俱成　多跋多鍵舍——生滅

この中、摩訶衍大乘の一語を除くの外は、悉く皆作者手製の原語のやうである。就中、方等の梵名を必薩伊尼羅とし、如來藏を婆伽婆俱舍とし、法界を達摩邊那とし、眞如を婆阿久尼羅とし、世間を羅諾補帝尸とし、出世間を度羅諾補帝としてゐる如き、如何に此の作者が梵語に無識であつたかを證する。方等の梵語が毘浮略 vaipulya であるぐらゐのことは驅烏の沙彌でも知つてゐる。又如來藏の梵語は tathāgata-garbha であつて、婆伽婆俱舍ではない。婆伽婆 bhagavat は佛の敬稱として用ひられるけれど、有德の義で、如來と譯すべき原語ではない。俱舍 kosa には藏の譯があるけれど、それは刀室を意味するので、隱覆の義とは同じくない。又世間の梵語は loka, 出世間の梵語は lokottara であつて、羅諾補帝、度羅諾補帝ではない。此論の作者は羅諾補帝を世間の原語とし、之を度脱した意味で、度羅諾補帝を出世間としたのであらうが、如何にも滑稽である。又一道淸淨を必菩提波梨の對譯としてゐるが、これは必を一とし、菩提を道とし、波梨は七寶の

一で、透徹明淨のものであるから淸淨の義としたのであらう。實に抱腹絶倒の至りである。

又此論第九卷には種種奇怪なる異字を出し、之を九字十五字乃至二十九字等連記して一の呪となし、その呪を誦すれば種種の功徳が得られると說いてゐる。左に異字の重なるものを擧げて見やう。

㊈(於呼反)　𡇱(那闍反)　𢀳(伊因反)　凷(毘入反)　㔹(阻立反)　(丙)(蹶天反)　𠀑(於可反)　𡵉　㕥(弗八反)　𣆀(玄言反)　𡿺(伊入反)　𦗟(阿含反)　𦈆(只因反)　𡇫(伊凡反)　圔　𠷅　䋯　㖒　訶　𡅅　𢀓　𧩵　𡈘

これは卽ち最澄の守護國界章に其の眞言字は梵字に似ずと云ひ、又安然の悉曇藏にその字は梵に非ず漢に非ず、佉婁未だ傳へずと云つてゐる怪字である。按ずるに武周則天代にはいろ〱の異字が造られて、後世それを則天文字と稱してゐる。卽ち日を(乙)とし、月を(卍)とするの類であるが、今こゝに擧げた㊈の字、(丙)の字などは、その字形も善くかの則天文字に似てゐるやうであり、又此論序に天回鳳威の天の字を而にしてゐる如き、それは明かに則天文字であるから、こゝに列ねた諸字も恐らく皆則天文字か、若しくはそれに基いた變造であらうと想像される。

又此論第二卷に我謂卽是眞如本覺如來藏佛故といひ、第五卷に衆生心中若無㆓本覺佛㆒終不㆑得㆑佛といひ、第十卷に根本無明所㆓覆藏㆒故、棄㆓背自本覺淸淨佛㆒、歸㆑原無㆑日といひ、又亦名㆑斷㆓絶自如

來藏本覺佛」と云つてゐるが、これ等は皆彼の三階敎に普法普佛を說き、如來藏佛、佛性佛等の信を勸めるのと、その義が一致するやうである。三階敎は隋信行の唱へた一派であつて、彼れは地藏十輪經に依つて一乘三乘が互に是非するのを不可とし、第三階の機根は普く一切の佛法に歸せなければならぬと說き、又一佛一菩薩を偏信するのは他の諸佛菩薩を排斥することになり、のみならず、一切の衆生は悉く如來藏佛、佛性佛、當來佛であるから、凡聖を簡ばず、唯だ盲目的に普く皆歸敬せなければならぬと說いたのである。蓋し如來藏佛の語は、現藏の中では金剛三昧經に出てゐるだけで、その他の諸經には未だ之を見ないやうである。さすれば三階獨特の敎義と認むべきもので、隨つてその敎義がこの中に含まれてゐるとすれば、此論は或は彼の三階一派の手に成つたものではないかとも疑はれるのである。三階敎が隋開皇已後、屢禁斷せられたに拘らず、その敎徒は尙ほ本習を改めず。唐景龍元年には彼徒の師利が菩提流志及び寶思惟三藏等の名を借りて、瑜伽法鏡經を僞作した事實もあるから、彼等は宗義宣傳の一方法として、如來藏緣起を主張した起信論を妄釋し、之を龍樹に假托して以てその如來藏佛思想を權威あらしめんと企てたものとも見られ得るのである。兎に角、此論はいづれの點から見ても奇怪極まる妄論であつて、到底それが正統派の手に成つたものとは思へぬのである。

第四節　龍樹造と傳へられる金剛頂菩提心論

菩提心論は一卷の書で、具さに金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論と題し、又一名を瑜伽總持敎門說菩提心觀行修持義と稱するのである。古來龍樹造、不空譯と傳へ、本邦空海は釋摩訶衍論と共に之を眞言宗三藏中に編入し、同宗の僧をして必ず學ばしめたものである。此論は現行の貞元新定釋敎目錄第十五、幷に續貞元釋敎錄等に大興善寺三藏沙門大廣智不空譯となし、又貞元錄第二十七に之を唐代宗朝の譯出と記してゐるが、然るに此の事については疑ひを容るべきものが多々あり、まして龍樹造の說の如きはその出據の見るべきなく、一種の浮傳たることは極めて明かとせなければならぬ。高麗藏及び明藏には釋摩訶衍論、大宗地玄文本論等と共に此論を入藏してゐるけれど、宋元二藏には收めて居らぬ。これは此論が古くは支那に於て眞論と認められなかつたことを證するものといふべきである。

此論には冒頭に大阿闍梨云と題し、阿耨多羅三藐三菩提を志求するものは餘果を求めず、菩提心を發し、菩提の行を修すべしといひ、而して既に菩提心を發せるものは卽ち菩提心の行相を知

らなければならぬとし、行願と勝義と三摩地の三種の行相を說き明かしてゐるのである。その中に華嚴經、大毘盧遮那經、無量壽觀經、涅槃經、摩訶般若經、毘盧遮那經疏、金剛頂瑜伽經、大毘盧遮那經供養次第法等の文を引用してゐるが、華嚴經、無量壽觀經、涅槃經及び摩訶般若經は共に古い時代の翻譯であるから、別に問題とすべきでないにしても、金剛頂瑜伽經即ち略出念誦經は唐開元十一年(七二三)金剛智の譯、大毘盧遮那成佛經幷に供養法次第は開元十三年善無畏の譯であり、又毘盧遮那經疏即ち大日經疏は、大日經を筆受した唐一行の作に係るのであるから、これ等の經及び疏を引用してゐる此の菩提心論が印度より傳へらるべき筈もないのである。されば貞元錄等の不空譯出の說は甚だ怪むべきものとせなければならぬ。又龍樹造の說はおそらく本邦空海等が始めて唱道したものなるべく、空海の辨顯密二敎論卷上に、此論者龍樹大聖所造千部論中密藏肝心論也と記し、明かに龍樹の作としてゐる。又唐遍滿の撰と傳ふる金剛頂菩提心論略記にも龍樹造の說を載し

論云龍猛菩薩造者明二造者之名目一。眞言敎祖第三之人也。……

と言つてゐる。遍滿は安然の諸阿闍梨眞言密敎部類總錄卷上に、建立曼荼羅壇法一卷遍滿。行二錄外一と記してゐるのに依ると、唐僧たることは明かであり、随つて此書が彼の眞撰であるとすれば、

龍樹造の說は支那已來傳へられたものといふべく、又今の文に論云㆓龍猛菩薩造㆒と記してゐるのを見ると、元と此論に龍猛造の署名があつたとすべきやうである。されど此の書中に早度㆓支那及與㆒日本㆒といひ、又龍樹及び不空に關する記事は空海の付法傳等に依つたと見られるのであるから、おそらく遍滿の眞作ではなく、本邦人の假托であらうと思はれる。金剛峯寺眞源の後記に

右此記釋㆓妄心若起知而勿㆑隨乃至妙用無窮之文㆒、總以爲㆓五相成身義㆒。……大師及遍滿大同小異者、大師依㆓遍滿㆒歟、遍滿依㆓大師㆒歟。將偶爾乎。八家錄云、建立曼荼羅壇法、遍滿。行㆓錄外㆒云云。又三摩地法遍滿記、世流行。由㆑之觀㆑之意爲㆓唐人㆒。又記中不㆑擧㆓本朝人師解㆒也。然記首云㆘其後卽度㆓支那及與㆓日本㆒、三密之敎師師相承拔㆗濟群生㆖。若爾本朝人師歟。更考。

といひ、遍滿と空海との釋義の大同小異なることを指摘し、且つ彼れが唐人なるか否かを疑つてゐる。但し此書は仁和寺濟暹の金剛頂發菩提心論私抄第一に援引してゐるから、延喜已前の作に係ることを知るべきである。

斯樣に空海等は此論を以て龍樹造不空譯となしたのに對し、圓珍は之を不空の撰集せるものとした。卽ち圓珍の青龍寺求法目錄に、

金剛頂三藐三菩提心論一卷　三藏不空集。

と記し、又彼の著些些疑文卷上に、

菩提心論或云龍樹造、或云與善三藏集。此未決解。私謂後說爲正

といひ、又賢寶の寶冊鈔第七に圓珍の雜抄等（今逸失不傳）を引き、

雜抄第七智證云、不空三藏菩提心論文。義釋裏書同云、與善三藏菩提心論文。雜問雜記同云、菩提心論懸按、貞元拾遺錄云不空三藏集。此言甚好。大阿闍梨之言不合指佛菩薩文

と言つてゐるのがそれである。斯樣に圓珍は此論を以て不空の撰集としたので、隨つて論の初に大阿闍梨云とあるのを不空の師金剛智の口決を指したものとなし、金剛薩埵等の佛菩薩を指すのを不可とした。光宗の溪嵐拾葉集第九十四菩提心論抄の下に

三井義云、凡西天大阿闍梨者皆是得瑜伽聖者。故直持佛語、不依色經卷也。內鑒冷然高德也。故不依書籍等也。而不空三藏受口決於金剛智、今論譯出給也。故云金剛智造也。智證大師御義。云云

と記してゐるのがそれである。之に依ると三井一派に於ては不空集の說から轉じて、更に金剛智造の說を唱道したことを知るのである。

然るに遍滿の金剛頂菩提心論略記には、龍樹造の建前から、論の所謂大阿闍梨を以て金剛薩埵を指すとし、

論云自㆓大阿遮梨㆒至㆓不求餘果㆒者、宣㆓暢金剛薩埵之說㆒。所㆑言大阿遮梨者第二祖師也。・・・・遂則釋迦善逝掩化之後、八百年中灌㆓頂龍猛㆒傳㆓授祕法㆒。

といひ、又濟暹の金剛頂發菩提心論私抄第一にも、

論大阿闍梨云者、是擧㆓第二祖金剛薩埵㆒也。此菩薩親對㆓大日如來㆒受㆓灌頂職位㆒、兼傳㆓受金剛頂十萬頌經等㆒。亦此菩薩轉授㆓龍猛㆒大阿闍梨也。龍猛菩薩受㆓金剛薩埵敎㆒造㆓此論㆒也。

といつてゐる。龍樹造とすれば此の如き解釋も下さなければならぬことになるのである。安然も亦龍樹造不空譯の說を取り、圓珍の不空集說を破したが、しかし大阿闍梨の語は金剛薩埵ではなく、妙吉祥即ち文殊を指すのだとした。即ち彼の著眞言宗敎時義第三に、

或目錄云、菩提心論不空集也。有人因判㆓不空撰㆒也。論初先云㆓大阿闍梨云㆒、是龍樹指㆓我所承㆒。我所承即妙吉祥、今文殊是也。故不空譯㆓梵文㆒、非㆓自所㆒撰也。

といひ、又彼の著胎藏金剛菩提心義略問答抄第一に、

問、古德有㆑云、有目錄云、菩提心論不空集也。故非㆓龍樹說㆒。此語用否。答、論云㆓龍猛菩薩造、不空奉詔譯㆒。而言㆓不空集㆒者無㆑憑叵㆑用。問、論題下云㆓大興善寺三藏沙門大廣智不空阿闍梨奉詔譯㆒、次文初云㆓大阿闍梨云㆒。有本此文連㆓書題下㆒、故有人爲㆓不空集㆒。何云㆑無㆑憑。答、初云㆓大阿

闍梨者是妙吉祥也。龍樹承妙吉祥而造此論、不空譯之。故有正本以大阿闍梨云以爲論初文也。而連書題下寫生誤矣。

と言つてゐるのがその説である。この中、論云龍猛菩薩造といひ、又前記遍滿の略記にも同様の事を記してゐるのを見ると、一本には龍樹造の署名があつたものといふべく、又大阿闍梨云の語を不空奉詔譯の下に連書した本もあつたことを知るべきである。蓋し安然が大阿闍梨を妙吉祥卽ち文殊としたことに關し、前引菩提心義略問答抄の連文に

海雲阿闍梨金剛界相承云、大日如來付金剛手、金剛手付妙吉祥、妙吉祥付龍樹、龍樹付龍智、龍智付金剛智、金剛智付不空、不空付善無畏也。(取意)依此誠文知龍樹承妙吉祥。

といつてゐる。之に依ると彼は海雲血脈に基いてその説を唱へたことを知るべく、これは東密の金剛薩埵説と異なる點である。又賢寶の寶冊鈔第七にも、不空譯を固守して圓珍の不空集の説を破し、左の如く論述してゐる。

問、智證大師以貞元拾遺錄爲證據。彼錄云不空三藏集故也。又阿闍梨言不指佛菩薩。若龍猛造者、或大日、或金薩指之可云阿闍梨。已不指佛菩薩豈安此言乎。爾者如何。答、大師(卽ち空海)親受靑龍口訣、以定龍樹所造。智證縱雖受法全口授、比高祖猶非對論。何

況於此一篇者或云愚按、或云私謂。恐可謂不足言。抑貞元拾遺錄者指何文處乎。相尋彼門葉古來未勘。云云。今私按之、智證請來目錄云、貞元釋敎目錄一卷文。貞元錄第二十云、就別錄中更分爲七。有譯有本錄第一、有譯無本錄第二、支流別行錄第三、删略別行錄第四、補闕拾遺錄第五、疑惑再詳錄第六、僞妄亂眞錄第七文。指此中補闕拾遺錄云貞元拾遺錄歟。同錄第二十七云、別錄中補闕拾遺錄第五、金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論一卷、代宗朝三藏沙門大廣智不空譯。新編入貞元目錄文。此中已云不空譯、更不云不空集。智證釋已違本文。謬失之至、智者察之。依之菩提心義云、言不空集者無憑叵用云云。凡以當論爲不空譯、諸家目錄一同。……何猥以譯者爲造者乎。非可求違文於他家。智證些些疑問云、理趣釋何誰造之、三藏奉詔譯。明知非造者文。已於理趣釋者、云三藏奉詔譯故釋非造者。當論又云奉詔譯。何彼云非造者、此云造者乎。是一。智證進官錄云、金剛頂三藐三菩提心論一卷不空。云云。又大日經指歸智證云、龍猛菩提心論云、於諸經中闕而不書。已上文 以不空集爲正義者、何云龍猛菩提心論乎。量知於智證意此事未決定歟。何輒判傍正乎。是二。次大阿闍梨言不指佛菩薩者是又不爾。金剛頂經云、當得大金剛阿闍梨位法性大日之身文。又大日經疏第三云、如金剛薩埵是名阿闍梨、復次毘盧遮那是名阿闍梨文。如此文不遑毛擧。智證釋依憑有何處乎。

これは圓珍の青龍寺求法目錄に載㆓貞元拾遺目錄中㆒として、菩提心論不空三藏集の說を擧げてゐるのに對し、現藏の貞元錄補闕拾遺錄には不空譯となつてゐることを指摘し、以て彼の說の信用するに足らざることを論證せんとしたのである。然るに現藏の貞元錄は後代の加筆が多く、編纂當初そのまゝのものでないから、その中に不空譯となつてゐるからと言つて、直ちにそれを信用せんとするのは甚だ危險の事とせなければならぬ。貞元錄が後代に至つて多く加筆されたものであることは、彼の有譯有本の部數卷數が區區として一定せざるのみならず、亦彼の古寫本に比してその數が頗る增加されてゐることによつて知られるのである。即ち現藏貞元錄第十九有譯有本錄には、大小乘三藏等の有譯有本の總數として一千二百五十六部五千三百七十八卷を擧げてゐるけれど、同第二十九入藏錄には一千二百五十八部五千三百九十卷と記し、又古寫聖護藏本には一千二百五十七部五千三百五十一卷とし、續貞元錄には一千二百十三部五千三百九十卷としてゐる。又大乘經の數に關しても、同第十九有譯有本錄には菩薩契經藏として、六百八十一部二千四百三卷（第二十の菩薩契經藏には六百八十二部二千四百卷）の數を掲げ、第二十九入藏錄には六百八十二部二千四百十三卷と記し、黑板勝美氏所藏古寫本には六百三十七部二千三百八十三卷となし、その數が區區として全く一定して居らぬ。これは後代に至つて經論を追補したから　その總數に異同を生ずるやうになつたので

ある。この中、今大乘經の入藏數に關し之を研討して見ると、黑板古寫本の數字が原形のまゝであつたものと認められる。そは聖護藏の第二十卷にかゝぐる菩薩契經藏の卷數が二千三百八十三卷になつて居り、又法然の選擇本願念佛集に、

貞元入藏錄中、始自大般若經六百卷、終于法常住經、顯密大乘經總六百三十七部二千八（三の誤）百八十三卷也。

と記してゐるのに依つて確められるからである。若し然りとすれば現藏の貞元錄は、部數に於て四十五部、卷數に於て三十卷增加されたことになるのである。四十五部の經目は一一之を詳かにすることを得ないが、補闕拾遺錄に列ぬる金剛瑜伽千臂千鉢曼殊室利經十卷、本生心地觀經八卷、守護國界主陀羅尼經十卷等は疑ひもなく後人の追補に係るのである。就中、千臂千鉢曼殊室利經に關しては、南唐恆安の續貞元錄に、

又闕下昇元寺西藏院、先收得千鉢曼殊室利經一部十卷。亦是貞元錄內三藏金剛智所譯。貞元目錄中遺漏不載。尋具事由、請寄於本部中收。

と明記してゐる。これに依ると此經は元と貞元錄中には載錄されず、南唐保大四年（九四六）に至つて始めて入藏されたことを知るべく、隨つて黑板本入藏錄には之を列ねて居らぬ。又此經は唐金剛

智譯と傳へられてゐるけれど、おそらく支那撰述なるべく、その事は既に第九章に詳論した所であるから今は略する。本生心地觀經は唐憲宗の元和六年(八一一)に般若等が譯したもので、貞元錄表進の貞元十六年(八〇〇)より十一年の後に當るのである。卷頭の御製序に、時我唐御天下一百九十有四年也と記してあるが、唐高祖の武德元年(六一八)より一百九十四年目が元和六年に當り、また近江石山寺所藏の同經古寫本には、現に元和六年三月譯出の後記があるのであるから、此經が元和六年の飜譯たることは明かであり、黑板本入藏錄にもその名を揭げて居らぬ。然るに現藏貞元錄第十七般若譯經の條に之を貞元六年庚午(七九〇)の譯となし、又續貞元錄にも同說を出し、且つ今の序を德宗の御製としてゐる。貞元六年の譯出とすれば德宗代でなくてはならぬが、しかし德宗代では一百九十四年に合つて來ない。これは間違つたのか、或は故意に元和六年を貞元六年となし、以て貞元錄中に追補したのであつて、此等はおそらく皆恆安の加筆に係るものであらうと思はれる。又守護國界主陀羅尼經も現藏貞元錄第十七般若譯經の條に之を列ね、其の下に貞元六年庚午譯と註し、又同錄第一總敍の下にも守護國界主陀羅尼經十卷、本生心地觀經八卷已下六部七十卷を列ね、並般若三藏奉詔譯と記してゐるけれど、聖護藏本には二處共に守護經を擧げず、且つ總敍の下には已上四部五十二卷と記し、守護經及び心地觀經の二部十八卷を除いてゐる。之に依る

と此の守護經も亦心地觀經に同じく後代の追加なることを知るべきである。斯樣に現藏の貞元錄中には恆安等の加筆したものが少くないのであるから、今その中に菩提心論を不空譯と記してゐるからと言つて、それを論據として不空譯を主張するのは甚だ輕率とせなければならぬ。既に四十五部も後世の追補があるのを見ると、此論がその中の一部でないことを保證し得べくもない。圓珍の靑龍寺求法目錄は唐大中九年(八五五)長安靑龍寺に於て筆錄したもので、貞元十六年より五十五年後に當り、南唐恆安に先だつ九十餘年前であるから、その記文は貴重するに足るべく、隨つて若し此論が貞元拾遺錄に載錄されてゐたとすれば、それは不空三藏集となつてゐたことを肯定せなければならぬ。

蓋し此論には前にも一言した如く大毘盧遮那經供養次第法の文を擧げ、又一行の毘盧遮那經疏を引用してゐるのであるから、梵本譯出でないことは極めて明白であり、又不空の撰集したものでもないことは疑ひを容れぬ所である。供養次第法は卽ち大日經の第七卷を指すので、開元十三年(七二五)善無畏の譯出に係るのであるが、その終りに

右阿闍梨所㆑集。大毘盧遮那成佛神變加持經中、供養儀式具足竟。

と記し、又一行の大日經義釋第八世間成就品の釋にも、阿闍梨於㆓烏仗曩國㆒撰㆓出毘盧遮那供養次

第法」といつてゐる。之に依るとこの供養法は善無畏三藏の撰集せしものなることを知るべきである。又新羅不可思議の撰した供養次第法疏卷上には、之を善無畏が北天竺金粟王の塔下に於て感得したものとなし、

乃至經㆓歷五十餘國㆒乃至㆓北天竺㆒。乃有㆓一城㆒名㆓乾陀羅㆒。其國之王仰㆓憑和上㆒（卽ち善無畏）受㆑法念誦。其經文廣義深、不㆑能㆔尋㆓逐供養次第㆒。求㆓請和尚供養方法㆒。和上受㆑請、於㆓金粟王所造塔邊㆒求㆓聖加被㆒、此供養法忽現㆓空中㆒、金字炳然。和上一遍略讀、分明記著。仰㆑空云、誰所造也。云我所造也。云誰我也。云我是文殊師利也。卽喚㆓書人㆒遂便寫取、卽與㆓其王一本㆒、自寫㆓一本㆒隨行。將㆔行㆓流通四方㆒也。

と言つてゐる。これは此の供養法を神祕化せんが爲に文殊の所造としたのであるが、しかし之を寫取して四方に流通せしめたのは卽ち善無畏であるから、今の菩提心論に於て善無畏所傳の譯本を引用したことには變りがないのである。然るに安然等は龍樹造の建前を固執する所から、善無畏譯本引用の說を否認し、左の如き苦しい辯解を試みてゐる。卽ち安然の菩提心義略問答抄第一に前記供養法疏の文を引き、その下に

故知、無畏在㆓烏仗曩國㆒出㆓彼所承㆒。時人不㆑了、云㆓三藏撰出㆒。此義釋本〔下〕三藏說、一行記、智儼

治、溫古再治。故本記外多加ニ人言一。故知、菩提心論所引供養次第法者天竺本。見ニ彼文一非レ引ニ三藏在ニ烏仗曩一所レ造文上也。

といひ、又賢寶の寶冊鈔第七に、

引ニ供養法文一者此有ニ數料簡一。一義云、龍猛菩薩入ニ鐵塔內一所レ傳十萬偈大經也。浩廣難レ持故、傳法聖者略成ニ七軸經卷都部要目一。大本十萬偈、略本七卷者即此意也。大本經已龍樹誦傳也、自ニ大本一所レ出略經定可レ爲ニ塔內相承一。但就ニ傳法聖者有ニ二傳一、一龍猛、二龍智。若依ニ初傳一者龍猛自引ニ第七卷文一、若依ニ後傳一者引レ說ニ大本供養次第法一文上。雖レ與ニ第七卷一同文上、必不レ可レ云レ引ニ第七卷文一。成ニ七卷一者龍智所作故也。次善無畏感得者、此有ニ許不許兩傳一。如ニ上注一。所詮今論所引非ニ彼無畏感得經一、是鐵塔誦傳經文也。（此義傳法院上人胎藏界沙汰意也）已上一義畢。又一義云、龍猛菩薩於ニ鐵塔外一所ニ相傳ニ念誦法要者第七卷也。今論所レ引此經文也。云云

と言つてゐるのがそれである。これは菩提心論所引の供養法の文は、龍樹が塔內若しくは塔外相傳の梵經から直接引用したのであつて、善無畏所傳の譯文に依つたものではないとするのである。龍樹造とすれば斯かる辯解も試みなければならぬわけであるけれど、それが單なる强辯に過ぎないことは何人も認め得る所であらう。就中、大日經を以て最初から七卷經であつたとするが如き

は、前引供養法後記の文に反するのみならず、現に西藏藏經中の大日經に此の供養法がなく、之を別經としてゐるのに見ても、その根據なき妄斷たることを知るべきである。

又此論に一行の大日經疏を援引してゐることに關しても安然等は會釋を企てゝゐるが、今先づ彼の所引の文を擧げて見やう。

准毘盧遮那經疏、釋阿字具有五義。一者阿字短聲是菩提心、二阿字引聲是菩提行、三暗字長聲是證菩提義、四惡字短聲是般涅槃義、五惡字引聲是具足方便智義。又將阿字配解法華經中開示悟入四字也。開佛知見、雙開菩提涅槃。如初阿字。是菩提心義也。……總而言之具足成就第五惡字、是方便善巧圓滿義也。

これは大日經義釋第十一字輪品及び第八悉地出現品の文を擧げたのであるが、之に對し安然の菩提心義略問答抄第一には、

問　若爾菩提心論亦云准毘盧遮那經疏釋阿字具有五義文。豈非不空引一行記乎。答、彼是後人引彼疏文注入論中。而有論本書長行者寫生誤矣。

といひ、彼の文を後人の加註となし、之を長行卽ち本文として書き續けたのは寫生の誤りだとした。縮刷大藏經所收の菩提心論に、彼の疏文を分註にしてゐるのは卽ち此説に依つたのであるが、

然るに原本的價値を有する空海請寫の三十帖策子本、幷に高麗本に之を本文として書き續けてゐるのであるから、安然の說は根據なき宛て推量とせなければならぬ。又今の所引の開示悟入の文が空海請來の大日經疏中に見當らないのに關し、略問答抄の連文に、

問　抑大日經疏無㆓所引文㆒、何言㆑准㆑疏耶。答、高野十四卷二十卷疏脫㆓此文㆒也。慈覺大師、遍明和上、圓成和上、圓覺僧正等本竝有㆓其文㆒。故知㆓高野抄本脫去㆒。

といひ、東密所傳本の不備を指斥してゐる。又中河實範の大經要義鈔第三には之を不空の加註したものとなし、

私撿㆓二師碑文貞元錄等㆒、一行開元十五年長逝、春秋四十有五。不空神龍元年誕跡。明知當㆓禪師行年二十三㆒三藏誕生也。法弟三藏譯㆓此論㆒曰、注㆓入先哲禪師疏文㆒寧可㆑怪乎。

といつてゐるが、いづれにしても苦しまぎれの辯疏に過ぎぬ。

蓋し此論には上根上智の人は外道二乘の法を樂はず、菩提心を發し、菩提の行を修して以て佛果を志求すべしとなし、その發菩提心に行願と勝義と三摩地の三種の行相があることを說いてゐるのであるが、その中、行願とは十方衆生を觀ること己身の如く、一切有情は皆如來藏性を含ずるが故に、彼等を勸發して悉く無上菩提に安住せしめんと要期するのをいひ、勝義とは一切法無

自性を觀じ、諸法本不生の理に達し、而も大悲心を以て無餘の有情界を利益し安樂ならしめんと期するのをいひ、三摩地とは行者自ら內心の中に於て月輪を觀じて本心を照見し、三密相應して以て卽身に本尊身を成ずるのをいふのである。卽ち密敎瑜伽の理趣に依つて發菩提心の行相を說き明かしたもので、論に、

唯眞言法中卽身成佛故、是故說三摩地。於諸敎中闕而不書。

といひ、卽身成佛は唯だ此の三摩地の法のみによつて成ぜらるべきことを强調したのである。又此の三種の行相なるものは、亦一面に於て菩提心戒を意味するもの〻如く、論の初に

既發如是心已、須知菩提心之行相。其行相者三門分別。諸佛菩薩昔在因地發是心已、勝義、行願、三摩地爲戒、乃至成佛無時暫忘。

といひ、又勝義門の下に

所以、十方諸佛以勝義行願爲戒。

と言つてゐるので知られるのである。蓋し菩提心及び菩提心戒に關しては當時諸家の著書が續出し、貞元錄第二十七補闕拾遺錄には、不空譯として受菩提心戒儀（內題最上乘敎受戒懺悔文）一卷を擧げ、貞元續開元釋敎錄卷中には、大興善寺潛眞が發菩提心義一卷、發菩提心戒一卷等を撰したことを記し、又

西明寺慧警の撰集に係る無畏三藏禪要にも菩提心戒の受法を詳述してゐる。斯樣に貞元前後に於て菩提心及び菩提心戒が盛んに唱道されたのは、密敎の傳來幷に四分律宗流行等の影響を受けたものと見られるのであるが、兎に角、今の菩提心論も此の時代の製作たることは大體に於て想定される所であり、ましてその論說中に潛眞の發菩提心義幷に無畏三藏禪要等と相通ずるものがあるのは、卽ち此等の諸書と關聯のあることを證するものとすべきである。この中、潛眞の發菩提心義は、貞元錄等には載錄されて居らぬが、空海の御請來目錄幷に惠運禪師將來敎法目錄にその名を列ね、特に御請來目錄には菩提心論等と共に之を不空譯としてゐる。又彼の安然の胎藏金剛菩提心略問答抄五卷は、卽ち此書と菩提心論とを併せ詳釋したものであるが、彼は此書が何人の作なるかを知らず、之を閉目信用の書だなどと濁ごしてゐる。卽ち問答抄第一に、

菩提心義無㆓造主名㆒。而古德皆云㆓不空造㆒者有㆑疑也。問、疑何。答、文中唯引㆓華嚴㆒、維摩、虛空藏、菩提心經、本業、仁王經等、起信、顯揚論等㆒明㆓顯敎菩提心㆒。非㆓眞言菩提心㆒。又引㆓長耳三藏說㆒。亦非㆓眞言三藏說㆒。唯一處引㆓大日經疏㆒故有㆑疑也。問、既引㆓毘盧遮那經疏㆒、何言㆑非㆓眞言義㆒耶。答、大日經義釋（亦名義記）是一行記。何以不空三藏引爲㆑證乎。……問、菩提心義末、有㆓古德注云、高野大僧正進官入唐學法目錄中云㆓不空譯㆒也。今謂、恐是彼不空集耳文。此語用否。答、縱

令不空集可レ集二祕藏文一。何故唯集二顯教經論一。故難レ用也。問、若終有レ疑不レ用二彼五門一耶。答、

眞言古德閉レ目信用云云

といつてゐるのがそれである。然るに發菩提心義は大興善寺潛眞の作で、彼は不空の譯場に參じ、別に又大集大虛空藏菩薩所問經疏四卷、大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴經疏三卷等を撰し、貞元四年（七八八）年七十一を以て歿したのである。即ち貞元續開元釋教錄卷中に、

發菩提心義一卷

發菩提心戒一卷（并三聚淨戒及十善法戒）共十三紙。

右並翻經大德潛眞、親奉二三藏和上一。示以二祕教一、入二曼荼羅一、登二灌頂壇一、受二成佛印一。仰二諮密要一爰集二斯文一。庶永流行、傳通不レ絕。

と記してゐるのに依ると、此の二書は潛眞が不空に諮禀して撰集したものなることを知るべきである。此の如く作者の判然たる發菩提心義を、空海が不空譯としたのは杜撰の甚だしきものといふべく、今の菩提心論も多分この筆法で不空譯に歸せられたのであらう。又安然が此の發菩提心義中に維摩等の顯教の諸經を引き、且つ大日經疏の文を引用してゐるので、之を不空の集に歸すべからずと論じたのは大に可とすべき點であるけれど、同じ條件を有する菩提心論に對して不空譯

を固執し、一行の疏文を後人の加註などと辯解したのは、全く得手勝手の判斷と評せねばならぬ。

發菩提心義には名義、體性、一異、相狀、行願の五門を立て、菩提心の義を辯じてゐるのであるが、この中、第五門の行願の語は今の菩提心論にも用ふる所であり、又行願を解說する下に顯揚聖敎論、大日經疏等の文を引き、無上菩提心を發して一切有情を饒益せんことを要誓すべし云云といつてゐるのは、菩提心論の行願の說述と同一である。又第四門の相狀の下に發菩提心の行位の相を明かし、起信論の信成就發心、解行發心、證發心等の說を引き、一萬劫を經て信心成就し、乃至三阿僧祇劫を經て成佛すといひ、所謂三劫成佛の說を述べてゐるのは、正しく今の菩提心論の所破となつたものと認められる。即ち論の勝義菩提心の下に、

眞言行者當觀二乘之人、雖破人執猶有法執……乃蒙諸佛菩薩加持力、而以方便遂發大心。乃從初十信下徧歷諸位、經三無數劫難行苦行、然後得成佛。既知聲聞緣覺智慧狹劣亦不可樂。又有衆生、發大乘心行菩薩行、於諸法門無不徧修、復經三阿僧祇劫修六度萬行、皆悉具足、然證佛果久遠而成。斯由所習法敎致有次第。今眞言行人如前觀已、復發利益安樂無餘衆生界一切衆生心、以大悲決定永超外道二乘境界。復修瑜伽勝上法人、能從凡入佛位者、亦超十地菩薩境界。云云

といひ、二乘及び顯敎大乘に於ける歷劫修行に對し、眞言の行人は始めより勝義無自性の理を觀ずるが故に、頓に十地を超えて卽身に成佛し得べきことを强調してゐるのは、主として彼の發菩提心義を對手としたものと見られるからである。若し然りとすれば今の菩提心論は潛眞の發菩提心義から示唆を得て、之を撰述したものと想定せなければならぬ。

又潛眞の發菩提心戒は發菩提心義と共に空海の三十帖策子中に收めてあるが、具さに授發菩提心戒文と題し、初めに無上菩提心を發し四弘誓を立つべきことを說き、已下順次に啓請一切諸佛、供養、懺悔、授戒、說相、發願廻向を列ね、說相の下に菩薩戒中說相有四、所謂四波羅夷といひ、不應捨正法戒、不應捨離菩提心戒、於一切法不應慳恡戒、不得於一切衆生作不饒益行戒の四戒を擧げてゐる。これは正法を捨てず、菩提心を捨離せず、一切のものを慳まず、衆生を饒益すべきことを名けて菩提心戒としたので、今の菩提心論に勝義行願を戒となすといつてゐるのは、卽ち此の意味をいひあらはしたものと見ることが出來る。又無畏三藏禪要は尾題に無畏三藏受戒懺悔文及禪門要法と題し、初めに授菩薩戒法を擧げ、後に禪門要法を明かしたものである。授菩薩戒法には發心已下十一門が立てゝあるが、その中、發菩提心門には四弘誓願、羯磨門には三聚淨戒、十重戒門には不應退菩提心等の十戒を列ね、總じて亦菩提心を發して衆生を利樂すべきことを說

いたのである。即ち潛眞の發菩提心戒文と同一趣旨で、但だ彼の戒文には單に四重戒を擧げ、今之を十重戒とした點が異なるのである。又此の無畏禪要の後段には修禪の法を說いてゐるが、その中に揭ぐる三摩地の法は今の菩提心論の說と異なつて居らぬ。今兩者の文を對照して見やう。

無畏禪要	菩提心論
次應修三摩地。所言三摩地者更無別法、直是一切衆生自性清淨心。名爲大圓鏡智。上自諸佛下至蠢動、悉皆同等無有增減。但爲無明妄想客塵所覆、是故流轉生死不得作佛。行者應當安心靜住、莫緣一切諸境。假想一圓明猶如淨月。……如是倍增、乃至滿三千大千世界極令分明。	第三言三摩地者、眞言行人如是觀已、云何能證無上菩提。當知法爾應住普賢大菩提心。一切衆生本有薩埵、爲貪瞋癡煩惱之所縛故、諸佛大悲以善巧智說此甚深祕密瑜伽、令修行者於內心中觀日月輪。由作是觀照見本心、湛然清淨、猶如滿月光徧虛空無所分別。

即ち一切衆生は本有の薩埵にして、その心自性清淨なるも、客塵煩惱に覆はるゝが故に生死に流轉するものなることを覺知し、內心中に於て滿月輪を觀じ、以て本心を照見すべしといふのであつて、語句は少しく異なつてゐるも、趣旨は二書全く同一なることを知るべきである。無畏禪要

と菩提心論との前後は定め難いけれど、論の說義が頗る詳密であつて、進んで阿字觀を說き、又五相成身の義を闡明してゐるのを見ると、論は卽ち禪要の說を承けて更にその趣旨を布衍したものであらうと思はれるのである。

斯くて此の菩提心論は貞元前後の思潮を受け、特に潛眞の發菩提心義幷に慧警の無畏三藏禪要等に刺戟され、密敎の菩提心義を主唱せんが爲に支那に於て撰述されたものと認められる。既に大日經供養法の文を引き、又一行の大日經疏を引用してゐるのであるから、印度撰述でないことは極めて明白であり、又潛眞等の說を參酌したとすれば、不空の撰集などにも歸すべきでない。金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論といふ如きいかめしい題號がつけてある所から、龍樹造不空譯の說も起つたのであらうが、一名を瑜伽總持敎門說菩提心觀行修持義（おそらく本書の原名）といふので、この表題なら斯かる說が持ち上らなかつたかも知れぬ。作者は不明であるけれど、不空の門葉たることは疑ひを容れぬ。法寶標目第九には大廣智の說となし、又高麗本には卷首の大阿闍梨云を「大廣智阿闍梨云」と記してゐる。これ等は如何なる所據があつたものか明かならぬけれど、事實はおそらくその通りで、卽ち不空門下の或る學者がその師大廣智に諮稟して此書を撰述したのであらう。

第五節　龍樹造と傳へられる十八空論幷に五明論

十八空論は一卷の書で、隋彦琮の衆經目錄第一、開元釋敎錄第七等に陳眞諦譯として揭げてゐる。吉藏の法華玄論第一には、此書を婆藪卽ち天親の作として援引し、高麗藏本には龍樹菩薩造と署名してある。此書は初めに內空外空等の十七空の義を解し、又十八空は十六空及び十四空に攝せらるべきものなることを說き、次に生眞如等の七種眞如の義を明かし、終りに十勝智眞實の義を解し、十種の勝智は十種の我見を除かんが爲なることを詳說してゐる。卽ち天親の中邊分別論中の相品及び眞實品の一部を解釋したものであつて、その文中には「廣釋如唯識論」といひ、又「具如三無性論中廣釋」といひ、「如壽量義中廣明七種是處非處義」といひ、天親の唯識論等を援引してゐる。宇井伯壽氏の印度哲學研究第六等には、此書の敍說が圓測の解深密經疏、窺基の成唯識論述記等に引用せる眞諦の中邊分別論疏に合致する所あるを指摘し、多分眞諦の撰述したものであらうと推定してゐる。いかにもそれが正當の見解であらう。高麗藏本に龍樹造としたのは、十八空論の題名から卒爾に考へ出したことで、別に憑據があつたわけでなく、又吉藏が

之を天親の作としたのも深き省察を加へなかつた爲と見られる。此論は前の菩提心論に同じく假托の意思を以て撰述されたものでなく、後人が謬つて龍樹等に歸したに過ぎぬのである。

五明論は龍樹五明論と題し、二卷の書で、古く本邦近江石山寺に藏し、近時始めて大正藏經中に編入されたのである。主として長生治病の術を記述したもので、種種の奇怪なる神符及び神呪を出してその用法を說示し、中に「龍樹菩薩馬鳴菩薩作五明論出萬餘卷」といひ、頻りにその論文を引用してゐる。蓋し歷代三寶紀第十一北周錄に五明論合一卷を掲げ、北周明帝二年（五五九）波頭摩國三藏攘那跋陀羅之を譯すといひ、開元錄第七等にも亦同文を載し、而して之を闕本としてゐる。されば五明論は曾て北周代に傳譯されたことを知るも、その卷數が一卷であり、龍樹造の署名もなく、又既に闕本であるから、今の本がそれでないことは明かである。此書は唐阿質達霰譯と傳ふる穢跡金剛禁百變法經、穢跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門等と關聯があるやうであつて、道教思想を混入した支那撰述の僞書であることは言ふまでもない。

佛教經典成立史論　終

索引

【ア】

【イ】

【オ、ヲ】

【カ】

【キ】

【ク】

【ケ】

【コ】

【チ】

【ナ】

【ニ】

【ヒ】

【フ】

【ミ】

【ム】

昭和21年３月20日　第１刷 ©
昭和53年８月10日　第２刷

著　者　望（もち）月（づき）信（しん）亨（こう）

発行者　西村七兵衛

(600) 京都市下京区正面烏丸東
発行所　株式会社 法蔵館
電話(343)0458・振替京都2743

内外印刷・新日本製本